

京都府遺跡調査報告集

第201冊

小樋尻遺跡・水主神社東遺跡発掘調査報告

2 0 2 6

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する小樋尻遺跡は、縄文時代から中世の島畑までの複合遺跡として知られてきた遺跡ですが、本調査では、縄文時代の谷地形から縄文時代晩期の土器や石器類が出土しました。木津川右岸の低地部において、縄文人が浅い谷に挟まれた微高地を選んで生活を営んでいたことがわかりました。

また、水主神社東遺跡では、中世の島畑が遺跡の東西に広がることを確認し、西に接する下水主遺跡の島畑を含めて、一帯の地割が条里地割に沿って配置されていることがわかりました。中世の土地開発を考えるうえで貴重な成果を得ることができました。

以上の調査成果は、今後、それぞれの遺跡が立地する地域の歴史や日本史研究を進めるうえで重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました西日本高速道路株式会社関西支社をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和8年7月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 原 眞 人

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

小樋尻遺跡・水主神社東遺跡発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
小 樋 尻 遺 跡 第3・5・6・ 8・11次	城陽市富野久保田・ 小樋尻、寺田島垣内・ 新池	2017.5.2～7.26 2017.12.25～2018.2.28 2018.4.23～2019.2.27 2019.4.22～12.13 2020.4.20～2012.3.2	西日本高速道路 株式会社関西支社	岩松 保 岡村美智子 面 将道 加藤雅士 加藤雄太 小泉裕司 竹原一彦 竹村亮仁 三好博喜
水主神社東遺跡 第8・11・13・ 18次	城陽市寺田大畔・金 尾	2017.11.16～2018.2.27 2018.4.19～2018.11.29 2019.11.18～2020.2.14 2025.5.12.～2025.7.15		

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。
4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。
5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。
6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本文目次

小樋尻遺跡・水主神社東遺跡発掘調査報告

1. はじめに-----	1
2. 位置と環境-----	4
3. 調査の方法-----	7
4. 小樋尻遺跡・水主神社東遺跡の調査履歴	
1)小樋尻遺跡の調査履歴-----	10
2)水主神社東遺跡の調査履歴-----	13
5. 各年度の調査概要	
1)平成29年度-----	15
2)平成30年度-----	18
3)令和元(平成31)年度-----	18
4)令和2年度-----	19
5)令和3～6年度-----	19
6)令和7年度-----	19
6. 小樋尻遺跡B地区の調査	
1)調査の経過-----	20
2)B1区の調査-----	21
3)B2区の調査-----	28
4)B3区の調査-----	31
5)B4区の調査-----	33
6)B5区の調査-----	35
7)B6区の調査-----	40
8)B7区の調査-----	42
9)B8区の調査-----	44
10)B9区の調査-----	45
11)B10区の調査-----	48
12)出土遺物-----	53
13)B地区のまとめ-----	58
7. 小樋尻遺跡C地区の調査	
1)調査の経過-----	60
2)C1区の調査-----	61
3)C2区の調査-----	66

4) C 3 区の調査	69
5) C 4 区の調査	71
6) C 10 区の調査	74
7) C 12 区の調査	76
8) C 13 区の調査	79
9) 出土遺物	83
10) C 地区のまとめ	97
8. 小樋尻遺跡D地区の調査	
1) 調査の経過	99
2) D 1 区の調査	100
3) D 2 区の調査	103
4) D 3 区の調査	104
5) D 4 区の調査	108
6) D 5 区の調査	114
7) D 6 区の調査	119
8) D 7 区の調査	121
9) D 13 区の調査	125
10) D 15 区の調査	130
11) 出土遺物	132
12) D 地区のまとめ	137
9. 水主神社東遺跡E地区の調査	
1) 調査の経過	138
2) E 1 区の調査	139
3) E 2 区の調査	143
4) E 3 区の調査	144
5) E 4 区の調査	146
6) E 5 区の調査	150
7) E 6 区の調査	155
8) 出土遺物	162
9) E 地区のまとめ	164
10. 水主神社東遺跡F地区の調査	
1) 調査の経過	165
2) F 1 区の調査	166
3) F 2 区の調査	169
4) F 3 区の調査	172

5) F 4 区の調査	174
6) 出土遺物	178
7) F 地区のまとめ	179
11. 水主神社東遺跡 G 地区の調査	
1) 調査の経過	180
2) G 1 区の調査	180
3) G 2 区の調査	184
4) G 3 区の調査	185
5) G 4 区の調査	188
6) G 5 区の調査	190
7) G 6 区の調査	192
8) G 7 区の調査	196
9) G 8 区の調査	199
10) G 9 区の調査	201
11) G 10 区の調査	204
12) G 18 区の調査	207
13) 出土遺物	212
14) G 地区のまとめ	214
12. 調査のまとめ	
1) 島畑の分布から見た地割の復原	217
2) 島畑の造営と土地利用	221

挿 図 目 次

第 1 図 調査地及び周辺遺跡分布図	5
第 2 図 小樋尻遺跡・水主神社東遺跡の地区割	7
第 3 図 調査地区割図	9
第 4 図 新名神高速道路整備事業に関わる調査区配置図	12
第 5 図 小樋尻遺跡 B 地区の調査	20
第 6 図 B 1 区断ち割りグリッド位置図・土層図	22
第 7 図 B 1 区検出遺構平面図 第 1 面	23
第 8 図 B 1 区南壁土層図	24
第 9 図 B 1 区土坑群平・断面図	26
第 10 図 B 1 区検出遺構平面図 第 2・3 面	27
第 11 図 B 2 区検出遺構平面図	29

第12図	B 2 区北壁土層図	30
第13図	B 3 区検出遺構平面図	31
第14図	B 3 区東壁土層図	32
第15図	B 4 区検出遺構平面図 第 2 面	34
第16図	B 4 区北壁土層図	35
第17図	B 4 区北壁断ち割り土層図	35
第18図	B 4 区 溝 S D03平・断面図	36
第19図	B 4 区溝 S D03内遺物出土状況図	37
第20図	B 5 区 検出遺構平面図 第 1 面	38
第21図	B 5 区北壁土層図	38
第22図	B 5 区検出遺構平面図 第 2 面	39
第23図	B 5 区北壁断ち割り土層図	40
第24図	B 6 区検出遺構平面図	41
第25図	B 6 区南壁土層図	42
第26図	B 7 区検出遺構平面図	43
第27図	B 7 区北壁土層図	43
第28図	B 8 区検出遺構平面図	44
第29図	B 8 区北壁土層図	45
第30図	B 9 区検出遺構平面図	46
第31図	B 9 区北壁土層図	47
第32図	B 9 区溝 S D01・03土層図	47
第33図	B 9 区溝 S D03内甕出土状況図	48
第34図	B10区検出遺構平面図	49
第35図	D10区北壁・南壁土層図	50
第36図	B10区断ち割り内土層図	51
第37図	B10区掘立柱建物 S B10・柵列 S A15平・断面図	52
第38図	B 1 ～ 4 区出土土器	54
第39図	B 5 ・ 6 区出土土器	55
第40図	B 7 ～10区出土土器	56
第41図	B地区出土石製品・金属製品	57
第42図	小樋尻遺跡B地区の調査 東	59
第43図	小樋尻遺跡B地区の調査 西	59
第44図	小樋尻遺跡C地区の調査	60
第45図	C 1 区検出遺構平面図 第 1 面	61
第46図	C 1 区検出遺構平面図 第 2 面	62

第47図	C 1 区北壁土層図	63
第48図	C 1 区柵列 S A01・02平・断面図	63
第49図	C 1 区掘立柱建物 S B41実測図	64
第50図	C 1 区土坑 S X126平・断面図	65
第51図	C 1 区土坑 S X33平・断面図	65
第52図	C 1 区 S D127・128平・断面図 第3面	65
第53図	C 2 n・C2 s 区調査区配置図	66
第54図	C 2 n 区検出遺構平面図	67
第55図	C 2 s 区検出遺構平面図	67
第56図	C 2 n 区北壁土層図	68
第57図	C 2 s 区南壁土層図	68
第58図	C 3 区検出遺構平面図	69
第59図	C 3 区北壁土層図	70
第60図	C 3 区溝 S D02・03土層図	70
第61図	C 3 区土坑 S K01遺物出土状況図	71
第62図	C 4 区検出遺構平面図	72
第63図	C 4 区西壁・南壁土層図	73
第64図	C 10区検出遺構平面図	74
第65図	C 10区西・北・北東壁土層図	75
第66図	C 12区 検出遺構平面図	77
第67図	C 12区西壁・南壁土層図	78
第68図	C 13区検出遺構平面図	80
第69図	C 13区東壁・南壁土層図	81
第70図	C 13区溝 S D10内遺物出土状況平面図	82
第71図	C 1 区出土土器 1	84
第72図	C 1 区出土土器 2	85
第73図	C 2～4 区出土土器	86
第74図	C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 1	88
第75図	C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 2	89
第76図	C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 3	90
第77図	C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 4	91
第78図	C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 5	92
第79図	C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 6・弥生土器	93
第80図	C 4 区出土石器	95
第81図	C 10・12・13区出土土器	96

第82図	C地区出土石器	97
第83図	小樋尻遺跡C地区の調査 東	97
第84図	小樋尻遺跡C地区の調査 西	98
第85図	小樋尻遺跡D地区の調査	99
第86図	D1区検出遺構平面図 第1面	100
第87図	D1区検出遺構平面図 第2面	101
第88図	D1区北壁土層図	102
第89図	D1区断ち割り内北壁土層図	102
第90図	D2区検出遺構平面図	103
第91図	D2区北壁土層図	104
第92図	D2区断ち割り内北壁土層図	104
第93図	D2区各遺構断面土層図	104
第94図	D3区検出遺構平面図	105
第95図	D1～3区調査区配置図	105
第96図	D3区北壁土層図	106
第97図	D3区溝SD09断面土層図	107
第98図	D4区検出遺構平面図	109
第99図	D4区北壁土層図	110
第100図	D4区斜行溝SD01・自然流路NR02・03平面図	111
第101図	D4区自然流路NR03畔1～4土層図	112
第102図	D4区自然流路NR02・03内遺物出土状況平面図	113
第103図	D4区自然流路NR03内遺物出土状況平面図	114
第104図	D5区検出遺構平面図1	115
第105図	D5区検出遺構平面図2	115
第106図	D5区南壁・東壁土層図	116
第107図	D5区島畑190上検出溝群平・断面図	117
第108図	D5区植物痕跡実測図	118
第109図	D6区検出遺構平面図	119
第110図	D6区南壁土層図	120
第111図	D6区溝SD03平面図	121
第112図	D7区検出遺構平面図	122
第113図	D7区北壁土層図	123
第114図	D7区溝SD01・02実測図	124
第115図	D7区断ち割り内土層図	125
第116図	D13区検出遺構平面図 第1面	126

第117図	D13区西壁・南壁土層図	127
第118図	D13区 S D04・05実測図	129
第119図	D13区検出遺構平面図 第2面	130
第120図	D15区検出遺構平面図	130
第121図	D15区南壁土層図	131
第122図	D 1・2区出土遺物	132
第123図	D 4区出土土器 1	133
第124図	D 4区出土土器 2	134
第125図	D 4～6区出土遺物	135
第126図	D 7・13・15区出土土器	136
第127図	小樋尻遺跡D地区の調査 東	137
第128図	小樋尻遺跡D地区の調査 西	138
第129図	水主神社東遺跡E地区の調査	139
第130図	E 1区検出遺構平面図	140
第131図	E 1区南壁土層図	141
第132図	E 1区東壁断面図	141
第133図	E 1区溝 S D06・07土層図	142
第134図	E 2区検出遺構平面図	142
第135図	E 2区北壁土層図	143
第136図	E 3区検出遺構平面図	144
第137図	E 3区北壁土層図	145
第138図	E 4区検出遺構平面図	147
第139図	E 4区東壁土層図	148
第140図	E 4区溝 S D06・07平・断面図	149
第141図	E 5区検出遺構平面図	150
第142図	E 5区北壁土層図 1	151
第143図	E 5区北壁土層図 2	152
第144図	E 5区 S X04、N R05・06内遺物出土状位置図	153
第145図	E 5区落ち込み S X04土層、自然流路 N R05・06内遺物出土状況図	154
第146図	E 6 a区検出遺構平面図	155
第147図	E 6 a区北壁土層図	155
第148図	E 6 b区検出遺構平面図 1	156
第149図	E 6 b区北壁土層図	156
第150図	E 6 b区南壁土層図	157
第151図	E 6 b区溝 S D40～42土層図	158

第152図	E 6 b 区検出遺構平面図 2	158
第153図	E 6 b 区検出遺構平面図 3、各遺構断面図 1	160
第154図	E 6 b 区各遺構断面図 2	161
第155図	E 6 b 区検出遺構平面図 4	162
第156図	E 1 ～ 6 区出土土器	163
第157図	水主神社東遺跡 E 地区の調査	165
第158図	水主神社東遺跡 F 地区の調査	166
第159図	F 1 ・ F 3 区配置図	167
第160図	F 1 区検出遺構平面図 第 1 ・ 2 面	167
第161図	F 1 区西壁土層図	168
第162図	F 2 区検出遺構平面図 第 1 面	169
第163図	F 2 区検出遺構平面図 第 2 ・ 3 面	170
第164図	F 2 区北壁土層図	171
第165図	F 3 区検出遺構平面図	173
第166図	F 3 区東壁土層図	173
第167図	F 4 a ・ b 区配置図	174
第168図	F 4 a 区検出遺構平面図	174
第169図	F 4 a 区北壁土層図	175
第170図	F 4 a 区断ち割り内北壁土層図	176
第171図	F 4 b 区検出遺構平面図	176
第172図	F 4 b 区東壁土層図	177
第173図	F 4 a 区流路内土層図	178
第174図	F 地区出土遺物	179
第175図	水主神社東遺跡 F 地区の調査	180
第176図	水主神社東遺跡 G 地区の調査	181
第177図	G 1 区検出遺構平面図 第 1 面	182
第178図	G 1 区北壁土層図	182
第179図	G 1 区検出遺構平面図 第 2 面	183
第180図	G 1 区断ち割り内流路土層図	183
第181図	G 2 区検出遺構平面図 第 1 面	184
第182図	G 2 区検出遺構平面図 第 2 面	185
第183図	G 2 区北壁土層図	186
第184図	G 3 区検出遺構平面図	186
第185図	G 3 区南壁土層図	187
第186図	G 4 区検出遺構平面図	188

第187図	G 4 区西壁土層図	189
第188図	G 4 区断ち割り内土層図	190
第189図	G 5 区検出遺構平面図	190
第190図	G 5 区西壁土層図	191
第191図	G 6 区検出遺構平面図	193
第192図	G 6 区南壁土層図	194
第193図	G 6 区流路N R 01平・断面図	195
第194図	G 6 区流路N R 02平面図	195
第195図	G 6 区流路N R 02土層図	195
第196図	G 7 区検出遺構平面図	196
第197図	G 7 区南壁土層図	197
第198図	G 7 区断ち割り内北壁土層図	198
第199図	G 8 区検出遺構平面図	199
第200図	G 8 区南壁土層図	200
第201図	G 9 区検出遺構平面図	202
第202図	G 9 区南壁土層図	203
第203図	G 9 区断ち割り内柱状土層図	203
第204図	G 10区検出遺構平面図	204
第205図	G 10区北壁土層図	205
第206図	G 10区流路NR10・11平面図	206
第207図	G 10区断ち割り 1 内北壁土層図	207
第208図	G 10・18区検出遺構平面図	207
第209図	G 18区検出遺構配置図	208
第210図	G 18区北壁土層図	210
第211図	G 18区東壁土層図	211
第212図	G 1 ～ 5 区出土土器	213
第213図	G 6 ・ 7 ・ 10 ・ 18区出土土器	215
第214図	G 地区出土遺物	215
第215図	水主神社東遺跡G 地区の調査 東	216
第216図	水主神社東遺跡G 地区の調査 西	216
第217図	水主神社東遺跡F 地区の調査	217
第218図	水主神社東遺跡G 地区の調査	218
第219図	水主神社東遺跡E ・ F 地区の地割	219
第220図	水主神社東遺跡F ・ G 地区の地割	220
第221図	小樋尻遺跡・水主神社東遺跡の調査区配置図	223

付 表 目 次

付表 1	小樋尻遺跡の調査履歴	11
付表 2	水主神社東遺跡の調査履歴	14
付表 3	新名神高速道路整備事業に伴う小樋尻遺跡の調査	16
付表 4	新名神高速道路整備事業に伴う水主神社東遺跡の調査	17
付表 5	小樋尻遺跡 B 地区の調査	21
付表 6	小樋尻遺跡 C 地区の調査	60
付表 7	小樋尻遺跡 D 地区の調査	99
付表 8	水主神社東遺跡 E 地区の調査	139
付表 9	水主神社東遺跡 F 地区の調査	166
付表 10	水主神社東遺跡 G 地区の調査	181
付表 11	各調査区の遺構面・検出遺構の時代一覧	222
付表 12	B 1 ～C 4 出土土器観察表	226
付表 13	B 地区出土石製品、金属製品	233
付表 14	C 4 区旧谷地形出土縄文土器観察表	234
付表 15	C 4 区旧谷地形出土石器・石製品観察表	238
付表 16	C 10～14 区・D 区・E 区・F 区・G 区出土土器観察表	238
付表 17	C ～G 地区出土石製品、金属製品観察表	248
付表 18	C 4 区旧谷地形出土石器観察表	248

図 版 目 次

小樋尻遺跡

- 図版第 1 (1) B 1 区 調査区第 1 面全景(西南から)
(2) B 1 区 調査区第 1 面全景(北から)
- 図版第 2 (1) B 1 区 土坑群検出状況(東から)
(2) B 1 区 土坑群検出状況(北から)
(3) B 1 区 土坑 S K 05 土層(東から)
- 図版第 3 (1) B 1 区 土坑 S K 05 完掘状況(東から)
(2) B 1 区 溝 S D 08・09・12 検出状況(北から)
(3) B 1 区 溝 S D 03 完掘状況(北から)

- 図版第4 (1) B 1 区 20層上面全景(東から)
 (2) B 1 区 第2面全景(東から)
 (3) B 1 区 26層上面全景(東から)
- 図版第5 (1) B 1 区 第3面全景(東から)
 (2) B 1 区 第3面N R 15検出状況(北から)
 (3) B 1 区 第3面N R 15・S P 16完掘状況(東から)
- 図版第6 (1) B 2 区 調査区全景(東から)
 (2) B 2 区 北壁土層(南東から)
- 図版第7 (1) B 2 区 北東部窪地跡検出状況(北東から)
 (2) B 2 区 北壁畝状土層(南から)
 (3) B 2 区 南壁畝状土層(北から)
- 図版第8 (1) B 3 区 調査区全景(北西から)
 (2) B 3 区 溝S D 07・22検出状況(南西から)
- 図版第9 (1) B 3 区 北壁土層(南から)
 (2) B 3 区 南壁土層(北から)
 (3) B 3 区 東壁土層(西から)
- 図版第10 (1) B 3 区 断ち割り状況(南東から)
 (2) B 3 区 噴砂脈断ち割り内土層(南東から)
 (3) B 3 区 噴砂脈断ち割り内土層(南東から)
- 図版第11 (1) B 4 区 調査区第1面全景(南東から)
 (2) B 4 区 調査区第2面全景(南東から)
- 図版第12 (1) B 4 区 第1面足跡・鋤痕跡検出状況(南東から)
 (2) B 4 区 第1面足跡・鋤痕跡検出状況(西から)
 (3) B 4 区 第2面溝S D 03検出状況(北西から)
- 図版第13 (1) B 4 区 第2面溝S D 03-3検出状況(南東から)
 (2) B 4 区 第2面溝S D 03-5内遺物出土状況(南東から)
 (3) B 4 区 第2面溝S D 03-5内遺物出土状況(東から)
- 図版第14 (1) B 4 区 北壁土層(南東から)
 (2) B 4 区 北壁土層(南から)
 (3) B 4 区 北壁断ち割り内土層(南から)
- 図版第15 (1) B 5 区 調査区第1面全景(南東から)
 (2) B 5 区 調査区第2面全景(南東から)
- 図版第16 (1) B 5 区 第1面柱穴群検出状況(南東から)
 (2) B 5 区 第2面溝S D 34検出状況(南西から)
 (3) B 5 区 第2面溝S D 34断面土層(北から)

- 図版第17 (1) B 5 区 第2面溝 S D 34内遺物出土状況(南東から)
(2) B 5 区 北壁土層(南から)
(3) B 5 区 北壁断ち割り内土層(南から)
- 図版第18 (1) B 6 区 調査区全景(南から)
(2) B 6 区 調査区全景(南東から)
- 図版第19 (1) B 6 区 溝 S D 01検出状況(北から)
(2) B 6 区 西壁土層(東から)
(3) B 6 区 南壁土層(北から)
- 図版第20 (1) B 7 区 調査区全景(南から)
(2) B 7 区 調査区全景(北東から)
- 図版第21 (1) B 7 区 溝 S D 01内土層(南から)
(2) B 7 区 北壁土層(南西から)
(3) B 7 区 北壁土層(南から)
- 図版第22 (1) B 8 区 調査区全景(南東から)
(2) B 8 区 調査区全景(南西から)
- 図版第23 (1) B 8 区 溝 S D 01検出状況(北西から)
(2) B 8 区 溝 S D 02検出状況(北東から)
(3) B 8 区 南壁土層(北から)
- 図版第24 (1) B 8 区 溝 S D 01内土層(西から)
(2) B 8 区 溝 S D 02内土層(東から)
(3) B 8 区 小溝群土層(南から)
- 図版第25 (1) B 9 区 調査区全景(南から)
(2) B 9 区 調査区全景(南西から)
- 図版第26 (1) B 9 区 溝 S D 01内遺物出土状況(北から)
(2) B 9 区 溝 S D 02内土層(東から)
(3) B 9 区 溝 S D 03内遺物出土状況(南から)
- 図版第27 (1) B 9 区 溝 S D 03内土層(西から)
(2) B 9 区 北壁土層(南から)
(3) B 9 区 北壁断ち割り内土層(南から)
- 図版第28 (1) B 10区 調査区全景(南東から)
(2) B 10区 調査区全景(北から)
- 図版第29 (1) B 10区 掘立柱建物跡 S B 10・柵列 S A 15検出状況(南西から)
(2) B 10区 北壁土層(南東から)

- 図版第30 (1) B 10区 地震による地層の変形(北壁；南から)
(2) B 10区 地震土坑 1 検出状況(南東から)
(3) B 10区 溝 S D 04検出状況(北から)
- 図版第31 (1) B 10区 不明遺構 S X 09検出状況(南東から)
(2) B 10区 不明遺構 S X 09・溝 S D 14検出状況(北から)
(3) B 10区 不明遺構 S X 08検出状況(北西から)
- 図版第32 (1) C 1 区 調査区第 1 面全景(南から)
(2) C 1 区 調査区第 2 面全景(南から)
- 図版第33 (1) C 1 区 調査区第 3 面全景(南から)
(2) C 1 区 第 2 面掘立柱建物跡 S B 41全景(南西から)
- 図版第34 (1) C 1 区 第 1 面土坑 S X 33検出状況(西から)
(2) C 1 区 第 2 面耕作溝畔土層(南から)
(3) C 1 区 第 3 面溝 S D 127土層(南から)
- 図版第35 (1) C 1 区 第 1 面柵列 S A 02 S P 06断面土層(東から)
(2) C 1 区 第 1 面柵列 S A 02 S P 07断面土層(東から)
(3) C 1 区 第 2 面土坑 S X 126遺物出土状況(南から)
- 図版第36 (1) C 2 n 区 調査区全景(南から)
(2) C 2 n 区 調査区下層断ち割り全景(南から)
- 図版第37 (1) C 2 s 区 調査区第 1 面全景(北から)
(2) C 1 区 調査区下層断ち割り全景(北から)
- 図版第38 (1) C 2 n 区 北壁土層(南から)
(2) C 2 s 区 南壁土層(北から)
- 図版第39 (1) C 2 n 区 溝 S D 02内土層(南東から)
(2) C 2 n 区 溝 S D 02内土層(南東から)
(3) C 2 n 区 ピット S P 06内遺物出土状況(西から)
- 図版第40 (1) C 2 s 区 溝 S D 01内土層(北東から)
(2) C 2 n 区 北壁土層(南西から)
(3) C 2 s 区 南壁土層(北西から)
- 図版第41 (1) C 3 区 調査区全景(南西から)
(2) C 3 区 調査区全景(南から)
- 図版第42 (1) C 3 区 溝 S D 02北畔土層(南西から)
(2) C 3 区 溝 S D 02南畔土層(南西から)
(3) C 3 区 溝 S D 03南畔土層(西から)

- 図版第43 (1) C 3 区 北壁土層(南から)
 (2) C 3 区 北壁土層(南東から)
 (3) C 3 区 南壁土層(北から)
- 図版第44 (1) C 4 区 調査区全景(南東から)
 (2) C 4 区 西壁土層(南東から)
- 図版第45 (1) C 4 区 北壁土層(南から)
 (2) C 4 区 南壁土層(北から)
- 図版第46 (1) C 4 区 北壁土層(南東から)
 (2) C 4 区 攪乱土坑内噴砂検出状況(北東から)
 (3) C 4 区 旧谷地形内縄文土器出土状況(南東から)
- 図版第47 (1) C 10区 調査区第1面全景(北から)
 (2) C 10区 調査区第1面全景(南から)
 (3) C 10区 調査区完掘状況全景(南から)
- 図版第48 (1) C 10区 第1面東壁土層中央部(西から)
 (2) C 10区 西壁土層北半部(東から)
 (3) C 10区 西壁土層(北東から)
- 図版第49 (1) C 10区 北壁土層北張り出し部(南から)
 (2) C 10区 北端断ち割り内東壁土層(西から)
 (3) C 10区 中央断ち割り内東壁土層(西から)
- 図版第50 (1) C 12区 調査区全景(北から)
 (2) C 12区 調査区全景(南から)
 (3) C 12区 下層断ち割り状況(北から)
- 図版第51 (1) C 12区 調査区南半部(東から)
 (2) C 12区 調査区北半部(東から)
 (3) C 12区 西壁土層北半部(東から)
- 図版第52 (1) C 12区 西壁土層中央部(東から)
 (2) C 12区 南壁土層(北から)
 (3) C 12区 断ち割り内東壁土層(西から)
- 図版第53 (1) C 13区 調査区全景(北から)
 (2) C 13区 調査区全景(南から)
 (3) C 13区 調査区断ち割り後全景(南から)
- 図版第54 (1) C 13区 溝 S D 10内遺物出土状況(東から)
 (2) C 13区 溝 S D 10検出状況(西から)
 (3) C 13区 溝 S D 10内土層(東から)

- 図版第55 (1) C 13区 完掘状況北半部(東から)
 (2) C 13区 完掘状況北半部(西から)
 (3) C 13区 南壁土層(北から)
- 図版第56 (1) C 13区 南壁土層東半部(北から)
 (2) C 13区 西壁土層中央部(東から)
 (3) C 13区 東壁土層北半部(西から)
- 図版第57 (1) D 1 区 調査区第 1 面全景(北から)
 (2) D 1 区 調査区第 1 面全景(東から)
- 図版第58 (1) D 1 区 島畑183 a 全景(南から)
 (2) D 1 区 島畑183 b 全景(南から)
- 図版第59 (1) D 1 区 調査区第 2 面全景(北から)
 (2) D 1 区 調査区第 2 面全景(東から)
- 図版第60 (1) D 2 区 調査区全景(北から)
 (2) D 2 区 調査区全景(南から)
- 図版第61 (1) D 2 区 溝 S D03内土層(北から)
 (2) D 2 区 井戸 S X05検出状況(東から)
 (3) D 2 区 井戸 S X05完掘状況(南から)
- 図版第62 (1) D 2 区 北壁土層(南から)
 (2) D 2 区 島畑179北壁土層(南から)
 (3) D 2 区 北西隅断ち割り内土層(南から)
- 図版第63 (1) D 3 区 調査区全景(北東から)
 (2) D 3 区 調査区全景(南から)
- 図版第64 (1) D 3 区 島畑181検出状況(北から)
 (2) D 3 区 島畑180検出状況(北東から)
 (3) D 3 区 島畑181北壁土層断面(南から)
- 図版第65 (1) D 3 区 溝 S D09検出状況(北から)
 (2) D 3 区 溝 S D09完掘状況(北西から)
 (3) D 3 区 溝 S D09内土層(南から)
- 図版第66 (1) D 3 区 溝 S D09北壁土層(南から)
 (2) D 3 区 断ち割り状況(東から)
 (3) D 3 区 断ち割り内北壁土層(南東から)
- 図版第67 (1) D 4 区 調査区遺構検出状況全景(北から)
 (2) D 4 区 調査区遺構完掘状況全景(北から)
- 図版第68 (1) D 4 区 南壁土層(北西から)
 (2) D 4 区 北壁土層(南西から)

- 図版第69 (1) D 4 区 自然流路N R 03遺物出土状況(北西から)
 (2) D 4 区 自然流路N R 03遺物出土状況(北から)
 (3) D 4 区 自然流路N R 03遺物出土状況(南東から)
- 図版第70 (1) D 4 区 自然流路N R 03畔 1 土層(北西から)
 (2) D 4 区 自然流路N R 03畔 2 土層(北から)
 (3) D 4 区 自然流路N R 03畔 4 土層(北から)
- 図版第71 (1) D 5 区 調査区全景(南東から)
 (2) D 5 区 島畑190上検出溝群(北から)
- 図版第72 (1) D 5 区 調査区下層全景(南東から)
 (2) D 5 区 自然流路N R 03完掘状況(北東から)
- 図版第73 (1) D 5 区 東壁土層(南西から)
 (2) D 5 区 南壁土層(北東から)
 (3) D 5 区 南壁断ち割り内土層(北から)
- 図版第74 (1) D 5 区 植物痕跡検出状況(北から)
 (2) D 5 区 植物痕跡断ち割り状況(北から)
 (3) D 5 区 断ち割りB植物痕跡(西から)
- 図版第75 (1) D 6 区 調査区全景(南東から)
 (2) D 6 区 調査区全景(北東から)
- 図版第76 (1) D 6 区 溝 S D 03完掘状況(北から)
 (2) D 6 区 南壁土層(北東から)
 (3) D 6 区 南壁断ち割り内土層(北から)
- 図版第77 (1) D 7 区 調査区全景(南東から)
 (2) D 7 区 調査区全景(北西から)
- 図版第78 (1) D 7 区 島畑173・耕作溝 S D 01・02検出状況(北から)
 (2) D 7 区 島畑173・耕作溝 S D 01・02検出状況(南西から)
 (3) D 7 区 耕作溝 S D 01・02掘削状況(南東から)
- 図版第79 (1) D 7 区 耕作溝 S D 02断面状況(南から)
 (2) D 7 区 南壁土層(北西から)
 (3) D 7 区 北壁断ち割り内土層(南西から)
- 図版第80 (1) D 13区 調査区全景(南から)
 (2) D 13区 調査区全景(南西から)
- 図版第81 (1) D 13区 島畑188・185検出状況(南東から)
 (2) D 13区 島畑185検出状況(南東から)
 (3) D 13区 溝 S D 02内耕作溝・ピット検出状況(南から)

- 図版第82 (1) D13区 溝 S D02内耕作溝・ピット検出状況(北西から)
(2) D13区 溝 S D04・05検出状況(南東から)
(3) D13区 溝 S D04・05検出状況(南西から)
- 図版第83 (1) D13区 溝 S D05内獣骨出土状況(南西から)
(2) D13区 溝SD05東側畦断面(西から)
(3) D13区 ピット S P38内石礫検出状況(北から)
- 図版第84 (1) D13区 焼土 S X100検出状況(南から)
(2) D13区 焼土 S X100断ち割り状況(南東から)
(3) D13区 南壁断ち割り内南壁土層(北東から)
- 図版第85 (1) D15区 調査区全景(南から)
(2) D15区 調査区完掘後全景(南から)
- 図版第86 (1) D15区 島畑194検出状況(西から)
(2) D15区 溝 S D09検出状況(東から)
(3) D15区 溝 S D09内土層(南東から)
- 図版第87 (1) E 1 区 調査区全景(北西から)
(2) E 1 区 調査区全景(南西から)
- 図版第88 (1) E 1 区 南壁土層(北から)
(2) E 1 区 溝 S D07東壁土層(西から)
(3) E 1 区 溝 S D07土層(西から)
- 図版第89 (1) E 2 区 調査区全景(北東から)
(2) E 2 区 調査区全景(南東から)
- 図版第90 (1) E 2 区 北壁土層(南から)
(2) E 2 区 北壁土層(南西から)
(3) E 2 区 北壁断ち割り内土層(南西から)
- 図版第91 (1) E 3 区 調査区全景(北東から)
(2) E 3 区 調査区完掘後全景(南東から)
- 図版第92 (1) E 3 区 島畑121検出状況(北から)
(2) E 3 区 北壁土層(南から)
(3) E 3 区 南壁土層(北から)
- 図版第93 (1) E 4 区 調査区全景(北から)
(2) E 4 区 調査区全景(北東から)
- 図版第94 (1) E 4 区 東壁土層(南西から)
(2) E 4 区 溝 S D02内土層(北から)
(3) E 4 区 北壁断ち割り内土層(南から)

- 図版第95 (1) E 5 区 調査区全景(西から)
(2) E 5 区 調査区全景(東から)
- 図版第96 (1) E 5 区 東半部全景(南西から)
(2) E 5 区 西半部全景(南東から)
(3) E 5 区 島畑121上面耕作溝検出状況(北から)
- 図版第97 (1) E 5 区 島畑121・低位部 S D01検出状況(南西から)
(2) E 5 区 島畑120・自然流路 NR05・06・落ち込み S X04検出状況(南西から)
(3) E 5 区 島畑117・低位部 S D03・島畑120検出状況(南西から)
- 図版第98 (1) E 5 区 流路 NR05内遺物出土状況(南から)
(2) E 5 区 落ち込み S X04内土層(南から)
(3) E 5 区 北壁断ち割り内土層(南から)
- 図版第99 (1) E 6 a区 調査区全景(西から)
(2) E 6 a区 北壁土層(南から)
- 図版第100 (1) E 6 b区 島畑116全景(南東から)
(2) E 6 b区 調査区下層全景(北東から)
- 図版第101 (1) E 6 b区 島畑116全景(北東から)
(2) E 6 b区 調査区西半部全景(北から)
(3) E 6 b区 溝 S D06全景(北西から)
- 図版第102 (1) E 6 b区 溝 S D14・S D05検出状況(北東から)
(2) E 6 b区 溝 S D05全景(南から)
(3) E 6 b区 北壁土層西半(南から)
- 図版第103 (1) E 6 b区 南壁土層(北西から)
(2) E 6 b区 南壁土層東半(北西から)
(3) E 6 b区 南壁断ち割り内土層(北から)
- 水主神社東遺跡
- 図版第104 (1) F 1 区 調査区第2面全景(西から)
(2) F 1 区 調査区第2面全景(北西から)
- 図版第105 (1) F 1 区 調査区第1面全景(東から)
(2) F 1 区 調査区第1面全景(北西から)
(3) F 1 区 第1面島畑124・溝 S D01検出状況(東から)
- 図版第106 (1) F 1 区 第2面島畑124検出状況(東から)
(2) F 1 区 第2面島畑123検出状況(東から)
(3) F 1 区 溝 S D02西壁土層(東から)
- 図版第107 (1) F 2 区 調査区第3面全景(北から)
(2) F 2 区 調査区第3面全景(北東から)

- 図版第108 (1) F 2 区 調査区第2面全景(北から)
(2) F 2 区 調査区第4面全景(北東から)
- 図版第109 (1) F 2 区 土坑S K 30検出状況(北西から)
(2) F 2 区 東壁土層(西から)
(3) F 2 区 断ち割り内北壁土層(南から)
- 図版第110 (1) F 3 区 調査区全景(北西から)
(2) F 3 区 調査区全景(東から)
- 図版第111 (1) F 3 区 東壁土層(南西から)
(2) F 3 区 島畑122東壁土層(西から)
(3) F 3 区 東壁断ち割り内土層(西から)
- 図版第112 (1) F 4 a 区 調査区全景(南東から)
(2) F 4 a 区 島畑127上耕作溝S D 01検出状況(南から)
- 図版第113 (1) F 4 a 区 流路N R 04・05完掘状況(南東から)
(2) F 4 a 区 流路N R 04・05完掘状況(南から)
- 図版第114 (1) F 4 b 区 調査区全景(北西から)
(2) F 4 b 区 溝S D 07内耕作跡検出状況(東から)
- 図版第115 (1) F 4 a 区 島畑127・洪水砂整理土坑検出状況(南から)
(2) F 4 a 区 流路N R 04完掘状況(南東から)
(3) F 4 a 区 流路N R 05完掘状況(南東から)
- 図版第116 (1) F 4 a 区 流路N R 04内土層(南東から)
(2) F 4 a 区 流路N R 05内土層(南東から)
(3) F 4 a 区 北壁断ち割り内土層(南から)
- 図版第117 (1) G 1 区 調査区第1面全景(南西から)
(2) G 1 区 調査区第2面全景(北から)
- 図版第118 (1) G 1 区 第2面島畑142検出状況(北から)
(2) G 1 区 溝S D 07内土層断面(南から)
(3) G 1 区 北壁土層断面(南西から)
- 図版第119 (1) G 1 区 西壁土層(東から)
(2) G 1 区 西壁洪水堆積層(東から)
(3) G 1 区 西壁断ち割り内自然流路土層(東から)
- 図版第120 (1) G 2 区 調査区第1面全景(南から)
(2) G 2 区 調査区第2面全景(北西から)
- 図版第121 (1) G 2 区 北壁土層(南東から)
(2) G 2 区 西壁土層(南東から)
(3) G 2 区 断ち割り内北壁土層(南東から)

- 図版第122 (1) G 3 区 調査区全景(南から)
(2) G 3 区 調査区全景(南東から)
- 図版第123 (1) G 3 区 不明土坑 S X 14 検出状況(南西から)
(2) G 3 区 北壁土層(南東から)
(3) G 3 区 断ち割り内北壁土層(南西から)
- 図版第124 (1) G 4 区 島畑164全景(北西から)
(2) G 4 区 島畑164全景(南西から)
- 図版第125 (1) G 4 区 島畑164検出状況(東から)
(2) G 4 区 島畑163検出状況(南東から)
(3) G 4 区 島畑164西壁土層(東から)
- 図版第126 (1) G 4 区 溝 S D 01 西壁土層(東から)
(2) G 4 区 島畑163西壁土層(東から)
(3) G 4 区 断ち割り内北壁土層(南から)
- 図版第127 (1) G 5 区 調査区全景(南東から)
(2) G 5 区 調査区全景(北西から)
- 図版第128 (1) G 5 区 島畑165西壁土層(東から)
(2) G 5 区 溝 S D 02 西壁土層(東から)
(3) G 5 区 溝 S D 01 西壁土層(東から)
- 図版第129 (1) G 5 区 溝 S D 01 北半西壁土層(東から)
(2) G 5 区 島畑163西壁土層(東から)
(3) G 5 区 断ち割り内西壁土層(東から)
- 図版第130 (1) G 6 区 調査区全景(南から)
(2) G 6 区 調査区全景(南東から)
- 図版第131 (1) G 6 区 流路 N R 02 内畔土層(南東から)
(2) G 6 区 流路 N R 02 内畔土層(南東から)
(3) G 6 区 流路 N R 02 内遺物出土状況(西から)
- 図版第132 (1) G 6 区 流路 N R 01 検出状況(南東から)
(2) G 6 区 南壁土層(北西から)
(3) G 6 区 南壁断ち割り内土層(北から)
- 図版第133 (1) G 7 区 調査区全景(南から)
(2) G 7 区 調査区全景(南東から)
- 図版第134 (1) G 7 区 南壁土層(北西から)
(2) G 7 区 島畑134南壁土層(北から)
(3) G 7 区 流路 N R 05 検出状況(南東から)

- 図版第135 (1) G 7 区 焼土 S X03検出状況(南西から)
(2) G 7 区 断ち割り内北壁土層(南から)
(3) G 7 区 流路 N R05内有機物検出状況(南から)
- 図版第136 (1) G 8 区 調査区全景(南東から)
(2) G 8 区 調査区全景(北東から)
- 図版第137 (1) G 8 区 南壁土層(北から)
(2) G 8 区 島畑131東溝南壁土層(北から)
(3) G 8 区 島畑131西溝南壁土層(北から)
- 図版第138 (1) G 8 区 縄文土器検出状況(南東から)
(2) G 8 区 自然木検出状況(南東から)
(3) G 8 区 南壁断ち割り内土層(北から)
- 図版第139 (1) G 9 区 調査区全景(南東から)
(2) G 9 区 調査区全景(北西から)
- 図版第140 (1) G 9 区 拡張調査区全景(北西から)
(2) G 9 区 調査区全景(南西から)
- 図版第141 (1) G 9 区 不明土坑 S X07内土層(北から)
(2) G 9 区 南壁土層(北西から)
(3) G 9 区 南壁断ち割り内土層(北から)
- 図版第142 (1) G10区 調査区全景(南東から)
(2) G10区 島畑151北壁土層(南から)
- 図版第143 (1) G10区 断ち割り 1 内北壁土層(南から)
(2) G10区 流路 N R11検出状況(東から)
(3) G10区 流路 N R11検出状況(南東から)
- 図版第144 (1) G10区 流路 N R11南壁土層(北から)
(2) G10区 流路 N R11南壁土層(北東から)
(3) G10区 流路 N R11南壁土層(北東から)
- 図版第145 (1) G18区 調査区全景(北東から)
(2) G18区 調査区全景(北西から)
- 図版第146 (1) G18区 調査区全景(西から)
(2) G18区 調査区全景(東から)
- 図版第147 (1) G18区 島畑154上耕作溝 S D03・04検出状況(北から)
(2) G18区 島畑155検出状況(北から)
(3) G18区 島畑155東溝盛土検出状況(南から)

- 図版第148 (1) G18区 南辺断割り内島畑154検出状況(南東から)
(2) G18区 南辺断割り内島畑155検出状況(南西から)
(3) G18区 島畑154北壁土層(南から)
- 図版第149 出土遺物 1
- 図版第150 出土遺物 2
- 図版第151 出土遺物 3
- 図版第152 出土遺物 4
- 図版第153 出土遺物 5
- 図版第154 (1)出土遺物 6
(2)出土遺物 7
- 図版第155 (1)出土遺物 8
(2)出土遺物 9
- 図版第156 (1)出土遺物10
(2)出土遺物11
- 図版第157 (1)出土遺物12
(2)出土遺物13
- 図版第158 (1)出土遺物14
(2)出土遺物15
- 図版第159 (1)出土遺物16
(2)出土遺物17
- 図版第160 (1)出土遺物18
(2)出土遺物19
- 図版第161 (1)出土遺物20
(2)出土遺物21
- 図版第162 (1)出土遺物22
(2)出土遺物23
- 図版第163 (1)出土遺物24
(2)出土遺物25
- 図版第164 (1)出土遺物26
(2)出土遺物27
- 図版第165 (1)出土遺物28
(2)出土遺物29
- 図版第166 (1)出土遺物30
(2)出土遺物31

- 图版第167 (1)出土遺物32
(2)出土遺物33
- 图版第168 (1)出土遺物34
(2)出土遺物35
- 图版第169 (1)出土遺物36
(2)出土遺物37
- 图版第170 (1)出土遺物38
(2)出土遺物39
- 图版第171 (1)出土遺物40
(2)出土遺物41
- 图版第172 (1)出土遺物42
(2)出土遺物43
- 图版第173 (1)出土遺物44
(2)出土遺物45
- 图版第174 (1)出土遺物46
(2)出土遺物47
- 图版第175 (1)出土遺物48
(2)出土遺物49
- 图版第176 (1)出土遺物50
(2)出土遺物51
- 图版第177 (1)出土遺物52
(2)出土遺物53
- 图版第178 (1)出土遺物54
(2)出土遺物55
- 图版第179 (1)出土遺物56
(2)出土遺物57
- 图版第180 (1)出土遺物58
(2)出土遺物59
- 图版第181 (1)出土遺物60
(2)出土遺物61
- 图版第182 (1)出土遺物62
(2)出土遺物63
- 图版第183 (1)出土遺物64
(2)出土遺物65

图版第184 (1)出土遺物66

(2)出土遺物67

图版第185 (1)出土遺物68

(2)出土遺物69

图版第186 (1)出土遺物70

(2)出土遺物71

小樋尻遺跡・水主神社東遺跡発掘調査報告

1. はじめに

西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所は、大阪～京都における名神高速道路・京滋バイパスの慢性的な混雑緩和のため、新名神高速道路整備事業(大津～城陽間)の建設を進めている。平成20年度からは、先行して認可を受けた城陽ジャンクション・インターチェンジ(以下、城陽JCT・ICと表記)から八幡京田辺ジャンクション・インターチェンジ(以下、八幡京田辺JCT・ICと表記)までの区間(事業距離3.5km)についての発掘調査を実施し、東から京田辺市門田遺跡、同西村遺跡、同向谷遺跡、同向山遺跡、同松井横穴群、八幡市女谷・荒坂横穴群、同荒坂遺跡、同御毛通古墳群、同美濃山廃寺、同美濃山廃寺下層遺跡の各遺跡の調査を行った。この調査成果については『京都府遺跡調査報告集』137・142・148・154・157・161・171冊として平成29年度までに刊行している^(注1)。

平成23年度から令和3年度にかけて、城陽JCT・ICの建設に伴い、城陽市下水主遺跡ならびに水主神社東遺跡の発掘調査が行われ、この調査成果については『京都府遺跡調査報告集』167・168・173・174・192冊として刊行している^(注2)。

平成27年度からは城陽ICから大津に至る、新名神高速道路本線部分の発掘調査を実施しており、令和7年度まで継続して行った。このうち、宇治田原町内の保安塚、長井野塚、唄田遺跡、奥城土遺跡、禪定寺跡については『京都府遺跡調査報告集』第181冊として令和2年度に刊行している^(注3)。城陽市域については、芝山遺跡・芝山古墳群と水主神社東遺跡、小樋尻遺跡で調査を実施しており、芝山遺跡・芝山古墳群については『京都府遺跡調査報告集』第189冊として令和4年度に刊行している^(注4)。

今回報告するのは平成29年度より実施した小樋尻遺跡と水主神社東遺跡に関する調査報告で、令和7年度まで調査を行った。小樋尻遺跡と水主神社東遺跡は、城陽市のほぼ中央部の木津川右岸に位置し、木津川により形成された沖積平野部に立地する。新名神高速道路は両遺跡を東西に横切る高架道路で、基本的に橋脚及び調整池の建設範囲の調査となった。

これら西日本高速道路株式会社による城陽JCT・ICの整備事業および新名神高速道路の新設事業に併せて、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所は国道24号の拡幅・整備計画を進めてきた。平成24年度以降、国道24号金尾交差点改良事業関係の事業を進め、これら一連の調査成果は『京都府遺跡調査報告集』第163・170冊でまとめている^(注5)。平成29年度からは国道24号が拡幅・新設される範囲の水主神社東遺跡と小樋尻遺跡の発掘調査を実施しており、このうち水主神社東遺跡に関する調査成果を『京都府遺跡調査報告集』第195冊として令和5年度に刊行している^(注6)。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ、城陽市教育委員会、京都府立山城郷土資

料館など各関係機関のご指導・ご協力をいただいた。また、城陽市南部土地改良組合、内川土地改良区、地元自治会や近隣住民の方々には発掘調査へのご理解とご協力をいただいた。なお、調査にかかわる経費は西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。本文は現地を担当した各調査担当者が執筆した(文末に文責)。

〔調査体制等〕

〈平成29年度(小樋尻遺跡第3・5次、水主神社東遺跡第8次)〉

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課参事調査第3係長事務取扱	岩松 保
	同 調査第1係主 査	高野陽子
	同 調査員	中谷可奈
	同 調査第2係副主査	竹原一彦
	同 調査員	藤田智子
	同 調査第3係主 任	加藤雅士
	同 調査員	岡村美知子
	同 調査員	竹村亮仁
	同 調査員	安達香織

調 査 場 所 城陽市寺田金尾・大畔・島垣内・新池

現地調査期間 平成29年5月2日～7月26日、8月21日～平成30年2月28日

調 査 面 積 3,729㎡

〈平成30年度(小樋尻遺跡第6次、水主神社東遺跡第11次)〉

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課参事調査第3係長事務取扱	岩松 保
	同 調査第1係副主査	引原茂治
	同 調査員	加藤雄太
	同 調査員	山本 梓
	同 調査第2係副主査	竹原一彦
	同 副主査	岡崎研一
	同 調査員	橋本 稔
	同 調査第3係副主査	増田孝彦
	同 主 任	加藤雅士
	同 調査員	竹村亮仁

調 査 場 所 城陽市富野小樋尻・久保田、寺田金尾・大畔・島垣内・新池

現地調査期間 平成30年4月12日～平成31年2月27日

調 査 面 積 10,866㎡

〈令和元年度(小樋尻遺跡第8次、水主神社東遺跡第13次)〉

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課調査第2係長	高野陽子
	同 調査第1係調査員	浅田洋輔
	同 調査第2係総括主査	岩松 保
	同 主 任	加藤雅士
	同 調査員	竹村亮仁
	同 調査第3係総括主査	石井清司

調 査 場 所 城陽市富野小樋尻・久保田、寺田金尾・島垣内

現地調査期間 平成31年4月22日～令和2年2月14日

調 査 面 積 2,830㎡

〈令和2年度(小樋尻遺跡第11次)〉

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課調査第1係長	村田和弘
	同 調査第1係主 任	福山博章
	同 調査員	荒木瀬奈
	同 調査第2係副主査	石井清司
	同 副主査	岡崎研一
	同 調査員	三好博喜
	同 調査第3係総括主査	岩松 保

調 査 場 所 城陽市富野久保田、寺田島垣内

現地調査期間 令和2年4月20日～令和3年3月2日

調 査 面 積 2,777㎡

〈令和3年度(整理等作業)〉

調 査 責 任 者	調査課長	小池 寛
調 査 担 当 者	調査課参事調査第4係長事務取扱	中川和哉
	同 調査第4係副主査	引原茂治
	同 副主査	岡崎研一
	同 主 任	福山博章

委 託 期 間 令和3年4月1日～令和4年3月31日

〈令和4年度(整理等作業)〉

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 調査第4係副主査	竹原一彦
	同 主 任	加藤雅士
	同 主 任	福山博章

整 理 期 間 令和4年4月1日～令和5年3月31日

〈令和5年度(整理等作業)〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

同 調査第1係主任 加藤雅士

整 理 期 間 令和5年4月1日～令和6年3月31日

〈令和6年度(整理等作業)〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

同 調査第4係副主査 小泉裕司

同 調査第1係主任 加藤雅士

整 理 期 間 令和6年4月1日～令和7年3月31日

〈令和7年度(水主神社東遺跡第18次)〉

現地調査責任者 調査課長 高野陽子

現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

同 調査第1係主 査 加藤雅士

同 調査第4係副主査 岩松 保

同 調査第1係主任 福山博章

調 査 場 所 城陽市寺田大畔

現地調査期間 令和7年5月12日～令和7年7月15日

調 査 面 積 900m²

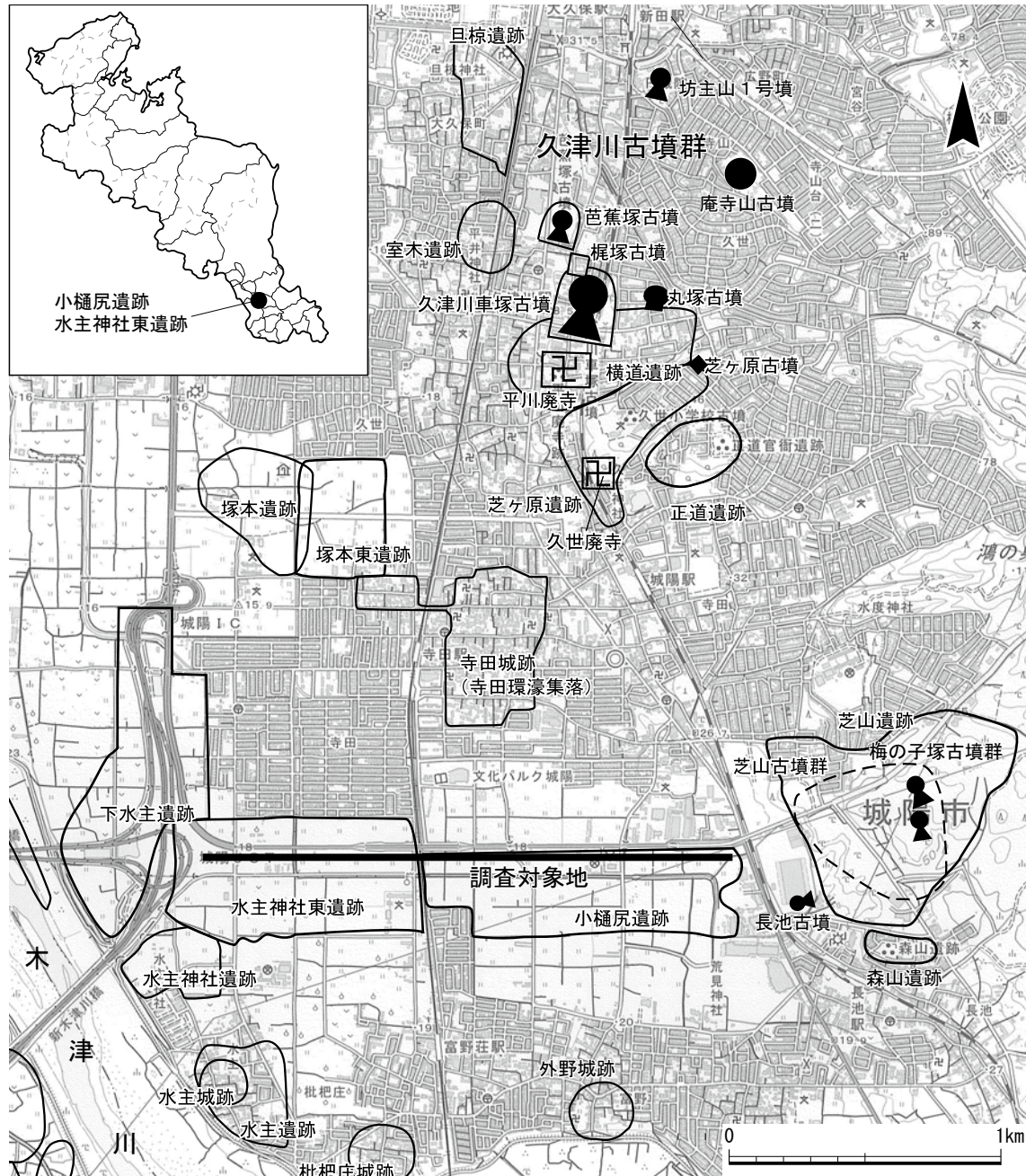
2. 位置と環境

京都府城陽市は、京都府南部を北流する木津川の右岸に位置する。城陽市域の地形は、西から東に向かって木津川に接した平野部、丘陵部、山地へと変化している。西部の平野部は木津川によって形成された沖積平野で、木津川流域に形成された微高地上には富野、枇杷庄、水主などの集落が営まれている。その周辺に広がる後背湿地には条里型地割が良好に遺存し、所々に水田内に土を盛り上げて畑作を行う島畑が分布している。東部の山地から西側へは宇治丘陵・城陽丘陵があり、この丘陵部と沖積平野の境界には段丘が発達し、大谷川、長谷川、青谷川などの小規模な河川が東から西へと木津川に流れ込んで扇状地が形成されている。このような段丘上や扇状地上には古墳や官衙遺跡、寺院跡、集落遺跡が分布している。

以下、水主神社東遺跡・小樋尻遺跡周辺に分布する主要な遺跡について概観する(第1図)。

旧石器時代の遺物としては、芝ヶ原遺跡でナイフ形石器と舟底形石器が出土している。また、同時代と推定されるサヌカイト片が森山遺跡で出土している。

縄文時代では、横道遺跡で前期後半の深鉢形土器を納めた土坑が検出されている。水主神社東



第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 宇治)

遺跡では中期の土器のほか、後期の水場遺構や土器集積遺構が検出されている。森山遺跡では後期後半と考えられる円形の竪穴建物が検出されている。晩期では、沖積低地に立地する塚本東遺跡や下水主遺跡、水主神社東遺跡などで土器が出土しており、木津川流域の沖積低地が活動領域として利用されていたと考えられる。

弥生時代になると、木津川沿いに遺跡が広く分布する。城陽市域では、森山遺跡で中期後半の甕棺と後期後半の竪穴建物2棟が検出されており、下水主遺跡では後期後半の竪穴建物が2棟検出されている。さらに芝ヶ原遺跡や正道遺跡では、中・後期の土器や石器が出土している。沖積平野に位置する塚本遺跡や塚本東遺跡、水主遺跡などでは後期末から古墳時代初頭の土器が出土

している。特に塚本東遺跡では、壺・甕・高杯・器台・鉢・手焙形土器などの大量の庄内式土器が出土した。これらの土器の中には丹波・丹後地域の特徴を持つ土器も多数含まれている。

古墳時代になると、南山城地域にも多くの古墳が築かれる。城陽市域の庄内期の古墳には、芝ヶ原古墳や上大谷6・7号墳、長池古墳下層などがある。芝ヶ原古墳は全長22.5m以上の前方後方形の古墳で、四獣形鏡や銅製腕輪、鉄製品、多数の玉類、土器などが出土している。前期では、庄内期から続く上大谷古墳群をはじめ、西山古墳群、尼塚古墳群が形成される。これらの古墳群は小規模であるが、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳と多様な墳形の古墳が築造された。

中期になると、城陽市の北半部に多くの古墳が集中し、これらは久津川古墳群と総称されている。久津川車塚古墳と芭蕉塚古墳(前方後円墳)、丸塚古墳(帆立貝形前方後円墳)、梶塚古墳や青塚古墳(方墳)、山道東古墳(円墳)などの大規模な古墳が築造される。これらは南山城の他地域と比べて群を抜いた規模を有している。このうち、久津川車塚古墳は長持形石棺を埋葬施設として有し、三角縁神獣鏡をはじめとする銅鏡、多数の玉類や石製模造品、刀剣類、甲冑等などが副葬されており、5世紀前半の築造と考えられている。久津川車塚古墳は、墳丘規模、埋葬施設、副葬品において他の同時期の山城地域の古墳を凌駕しており、被葬者は城陽市域のみならず、山城地域を支配するような大首長であったと考えられている。

城陽市域、特に北・中部では中期後半から後期にかけて芝ヶ原古墳群、上大谷古墳群、芝山古墳群などで小規模な古墳が築造される。これらの多くは木棺直葬墳で、横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳は尼塚5号墳、上大谷12号墳、上大谷17号墳と数が少なく、全国的に普及する横穴式石室があまり造営されない地域として特徴的である。

古墳時代の集落遺跡はおもに市域東部の段丘上に営まれている。前期では芝山遺跡で竪穴建物1棟が検出されている。また、隣接する森山遺跡では竪穴建物とともに豪族居館の堀の可能性が指摘されている溝状遺構が検出されている。中期前半には室木遺跡で小規模な竪穴建物が検出されており、玉作りが行われた工房的な集落と考えられている。後期後半から飛鳥時代にかけて、芝ヶ原遺跡、正道遺跡、芝山遺跡、森山遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。特に芝ヶ原遺跡では150棟以上の竪穴建物、40棟以上の掘立柱建物が検出されており、城陽市域で最大級の集落である。

文献資料によると、飛鳥時代以前に城陽市域には栗隈県が置かれたと考えられている。県の実態は不明であるが、『日本書紀』仁徳天皇十二年十月条に「大溝を山背の栗隈県に掘」とあり、同推古天皇十五年是歳条にも「山背国に大溝を栗隈に掘る」と記載されている。この栗隈大溝を現在の古川に比定する説もあるが、発掘調査等では確認されていない。いずれにしても大型の古墳築造と相まって、この時期に周辺の開発が大きく進められたことがうかがえる。

城陽市域は、古代律令制のもとでは山背国久世郡や綴喜郡に属していた。飛鳥～奈良時代の遺跡としては、久世廃寺、平川廃寺、正道官衙遺跡などがある。久世廃寺は7世紀に創建された寺院で、塔を東に、金堂を西に置く法起寺式伽藍配置である。正道官衙遺跡は大型掘立柱建物群が複数検出され、山背国久世郡衙跡と推定されている。また、木津川東岸には古代の官道である北

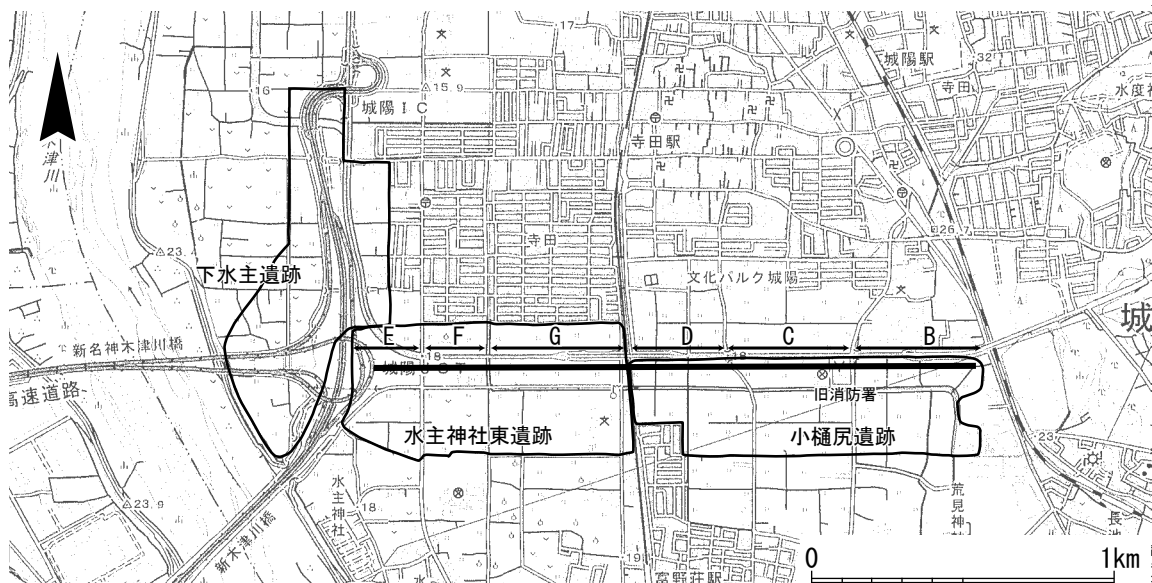
陸道や東山道が想定されており、芝山遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての道路側溝と想定される遺構とともにコの字に配置された掘立柱建物群が検出されており、文献資料等にはみられないが、北陸・東山道の駅家の可能性が指摘されている。この時期の集落には、芝ヶ原遺跡や正道官衙遺跡、横道遺跡、芝山遺跡などが確認されており、竪穴建物や掘立柱建物が確認されている。

この時期、城陽市西部の平野部には、奈良時代に施行されたと推測される条里制による方形の区画の遺構が明瞭に遺存している。条里とは、方一町(109m四方)を基本単位とする古代の農地区画である。奈良時代に遡る遺構は確認できていないが、今回の小樋尻遺跡の調査では、中世以前の土地区画を示す可能性がある溝群が確認されている。また、中世に造られた多くの島畑もこういった土地区画に則って造られている可能性がある。

鎌倉時代になると調査地周辺は、賀茂別雷神社、石清水八幡宮、元興寺などの寺社領となって寺田荘、富野荘、水主荘などの荘園が整備された。このころ城陽市域の平地にはこの地域に特有の島畑が形成される。島状に土を盛り上げてやや高まった平坦地で畑作を行う一方、島畑と島畑の間の凹地では水田もしくは畑作を行っていたと考えられる。

3. 調査の方法

水主神社東遺跡は遺跡の範囲が東西約800mと広範囲におよぶため、城陽JCT・IC内の調査を参考として、調査区の呼称とした(第2図)。城陽JCT・ICおよびその西側本線部分の発掘調査時には、下水主遺跡が主体であったが、東側に分布する水主神社東遺跡の範囲も一部、調査の対象地であった。その際に、A～D地区の呼称を付して調査区としており、その並びで西から東へとE・F…と付することとした。西から見ると、城陽JCT・ICから府道寺田水主線の大畦交差点までをE地区、大畦交差点から今池川の間をF地区、今池川から近畿日本鉄道京都線の間をG地区



第2図 小樋尻遺跡・水主神社東遺跡の地区割(国土地理院 1/25,000 宇治)

とした。

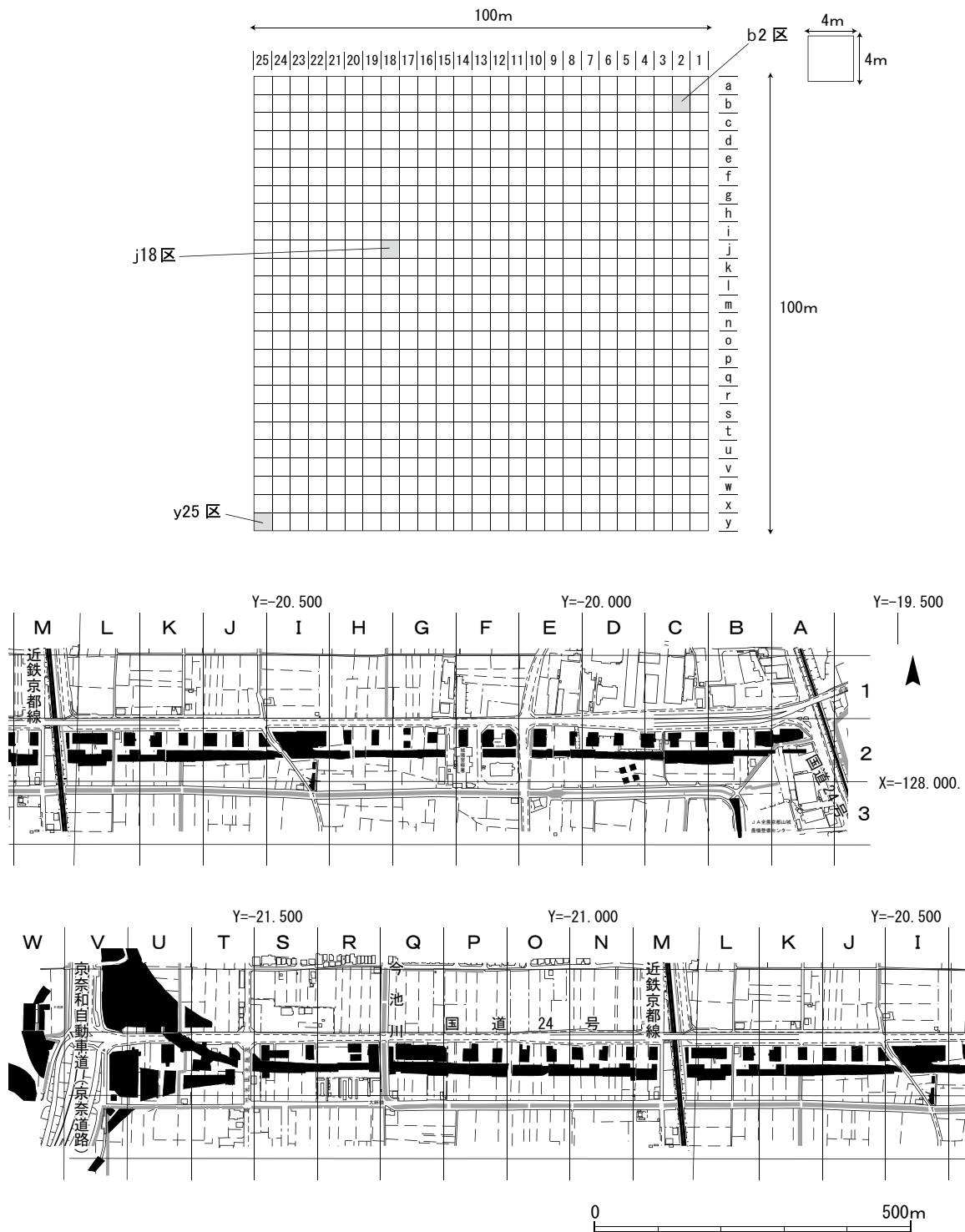
小樋尻遺跡においても東西に約1,100mの範囲に分布しているため、地区名を設定した。現在においては水主神社東遺跡と小樋尻遺跡の境界は近畿日本鉄道京都線を境界としているが、当初の小樋尻遺跡は24号新池交差点から西、旧消防署より東の範囲であることから、新池交差点を起点に西方向に番号を付すこととした。その際に、新池交差点よりも東側に遺跡範囲が延びることも想定し、B地区とした。結果的に、小樋尻遺跡は西側に遺跡範囲が広がり、近鉄京都線までがその範囲となったため、各地区は次のようになった。J R 奈良線・国道24号に隣接した新池交差点より消防本部前交差点(旧)までをB地区、消防本部前交差点(旧)から市道11号(旧)までをC地区、市道11号(旧)から近鉄京都線までをD地区とした。

それぞれの地区の中において、調査に着手した順に、1、2、3・・・と番号を付して小調査区名とすることを基本とした。この各地区の範囲および番号は、今回報告の新名神高速道路整備事業関連遺跡の発掘調査と同時期に実施した国道24号寺田拡幅事業ほか関連遺跡の調査でも準用することとした。また、一部、調査を予定したものの、諸般の事情で調査着手が遅れたり、その年度内に着手できなかったものもある。これについては、着手前から番号を付して調査地として協議していたこともあり、混乱を避けるため、当初に付与した番号を踏襲したため、実際に調査に着手した順番と異なっているものもある。

新名神高速道路は高架道路として計画されたため、調査対象地は橋脚部分と雨水処理のための調整池部分および城陽JCT・ICにおける普通道路と高速道路間の連絡路の橋台・盛土部分がある。高速道路建設に際しては西日本高速道路株式会社により橋脚(Pier)番号が東からP 1、P 2、・・・が付されており、その番号を併記した。

城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査では、上記の調査地区とは別に、検出遺構や出土遺物の位置を記録する目的で、対象地全体を覆う地区割を国土座標(世界測地系)にもとづいて設定した。まず、対象地全体に100m四方の大区画を設定した(第3図)。大区画の基準線は一番最初に調査を実施したB 1区の北東にある国道24号新池交差点付近を通る、国土座標 $X = -127,900$ 、 $Y = -19,600$ を起点とし、東西方向は東からA、B、C、……とし、南北方向は北から2、3、4とし、アルファベットと数字の組み合わせとしたが、一連の調査区はほぼ東西に位置しているため、すべて2区におさまっている。大区画の地区名は100m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。この大区画の一辺を25等分して4m四方の方眼を設定し、小区画とした(第3図)。小区画の基準線も国土座標系と一致させ、東西方向は東から1、2、3、……、25とし、南北方向は北からa、b、c、……、yとし、両者の交点をa1、b1、c3、y25などとした。小区画の地区名も4m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。Y軸座標の下2桁で表すと、1ラインは00m、25ラインは96mに当たる。また、X軸座標の下2桁で表すと、aラインは04m、yラインは00mに当たる。国土座標系にもとづく地区名は「G4-r9区」のように表記する。

なお、実際の発掘調査では、大区画の地区割名を調査時に表記していないことが多い。また、個々の遺構図には小地区割の基準となるライン名を表記した。



第3図 調査地区割図(1/10,000)

4. 小 樋 尻 遺 跡 ・ 水 主 神 社 東 遺 跡 の 調 査 履 歴

1) 小 樋 尻 遺 跡 の 調 査 履 歴

今回報告する小樋尻遺跡、水主神社東遺跡は、主として、新名神高速道路整備事業および国道24号の金尾交差点改良事業並びに寺田拡幅事業に係る調査が実施されている。本報告で扱わない調査を中心に記述する。

小樋尻遺跡は令和7年度までに15次の調査が実施されている(付表1)。このうち、第1・2・4次調査が城陽市教育委員会による調査で、それ以外は当調査研究センター実施の調査である。^(注7)

第1次調査は今池川改修工事に伴う調査で、平成12・13年度に、旧城陽市消防本部よりも東側において実施された。平成12年度に2m×2mのグリッドを32か所設置し、試掘調査が実施された。平成13年度には引き続き上流側にグリッドを12か所設けて試掘調査を実施するとともに、遺構・遺物が確認された3グリッドを中心に発掘調査が実施された(B3区南約100m)。この調査では、時期不明の柱穴や土坑とともに7世紀前半と7世紀後半～8世紀前半の土器を含む溝が検出され、古代の集落が近辺にあったものと想定された。

第2次調査は関西電力鉄塔建て替えに伴う調査で、平成28年度に調査が行われた。調査により、耕作に伴うと判断される2時期の溝群を検出した。ともに何らかの区画に則って掘削されたと判断され、一つは正方位に掘られた溝群で、現在の田畑に残る条里型地割のものと判断される。もう一つは正方位をとらない溝群で、正方位に先行するもので、条里型地割に先行する地割りがあったものと想定されている。先行する地割りは、その時期を明確に示す遺物は出土しなかったが、7世紀中頃の遺物がわずかに出土している。

第4次調査は消防署の移設に伴う調査で、B10区の約200m南側の調査区である。平成29年度に調査を実施し、縄文時代晩期の竪穴建物や土坑、埋甕が検出された。竪穴建物からは土器片や敲石、サヌカイト製の石鏃や片などが出土している。また、古墳時代初頭の竪穴建物13棟、掘立柱建物1棟、溝1条と古墳時代後期の竪穴建物7棟、溝2条を検出し、両時期の溝から大量の土器が出土した。現地表面では確認できない微高地が地下に埋没しており、その上に集落が分布していることが明らかとなった。

第7・9・10・12・14・15次調査は当調査研究センターが国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて、国道24号寺田拡幅事業に伴う調査で、平成30年度から令和7年度にかけて実施している。報告書は未刊行であるが、今回の新名神高速道路整備事業の調査地の南側での調査であることから、『京都府埋蔵文化財情報』の各『略報』から調査の概要を見ておきたい。^(注8)

第7次調査は平成30年度にD8・9区で実施した。南北方向の島畑13基や北西から南東に向けて斜行する溝3条を検出した。中世の島畑を挟んで上層と下層で斜行溝が掘り込まれていた。上層の溝は中世以降近世以前、下層の2条の溝からは古墳時代初頭の土器片が出土している。うち、1条の溝は2段に掘られており、人工のものと判断される。

第9次調査は平成31(令和元)年度にC6区、D10・11区の3か所で調査を行った。D10区では南北方向の島畑1基、井戸3基、柱穴20数基を検出した。柱穴は掘立柱建物に復元できるものは

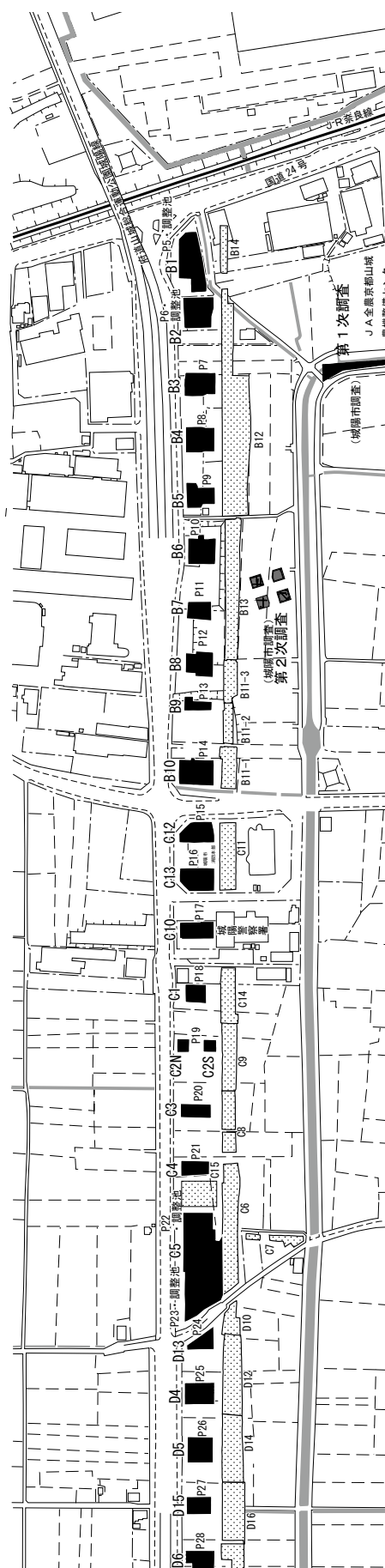
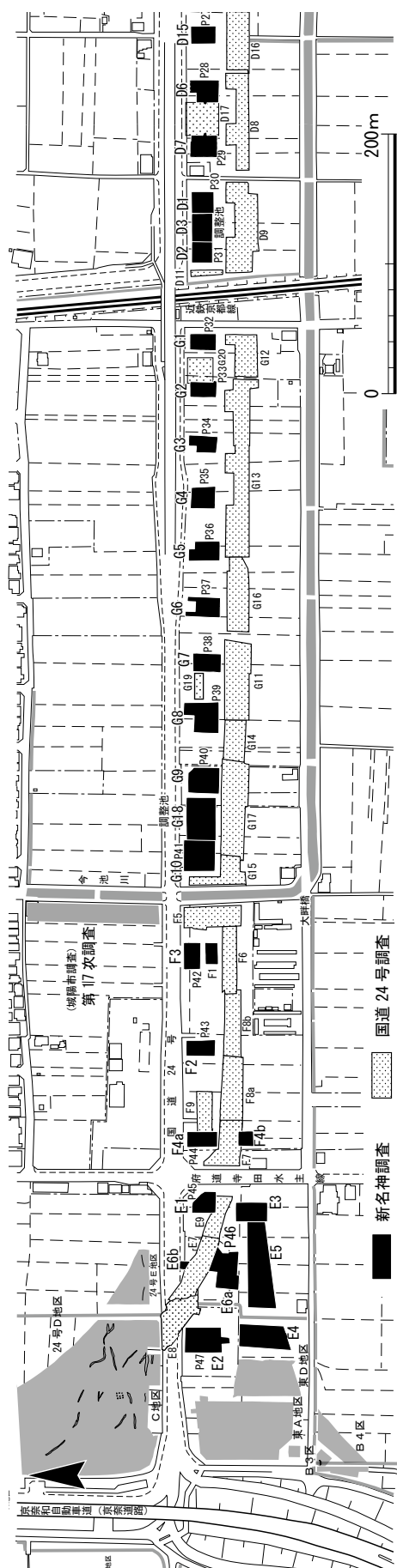
付表1 小樋尻遺跡の調査履歴

次数	調査年度	調査原因	調査区	調査機関	報告書
第1次	平成12・13年度	今池川河川改修		城陽市教委	『城陽市報告書』第43集(2003)
第2次	平成28年度	関電鉄塔建て替え		城陽市教委	『城陽市報告書』第71集(2016)
第3次	平成29年度	新名神高速道路整備	B1区	当調査研究センター	本報告
第4次		市消防署移設		城陽市教委	『城陽市報告書』第76集(2018)
第5次		新名神高速道路整備	D1・D2区	当調査研究センター	本報告
第6次	平成30年度	新名神高速道路整備	B2・B3・B4・B5・B6・B7・B8・B9・C1・C2・C3・C4・D3・D4・D6区	当調査研究センター	本報告
第7次		国道24号寺田拡幅	D8・D9区	当調査研究センター	
第8次	平成31・令和元年度	新名神高速道路整備	B10・C5・D5・D7区	当調査研究センター	本報告 C5区は第207冊を予定
第9次		国道24号拡幅寺田	D10・D11・C6区	当調査研究センター	
第10次	令和2年度	国道24号寺田拡幅	C6・C7・C8・C9・C11・C14・D12・D14・D16区	当調査研究センター	
第11次		新名神高速道路整備	C5・C10・C12・C13・D13・D15区	当調査研究センター	本報告 C5区は第207冊を予定
第12次	令和3年度	国道24号寺田拡幅	B11・B12・B13・C11・C14区	当調査研究センター	
第13次		府道路整備	B12区南接部	当調査研究センター	『京都府報告集』第192冊(2023)
第14次	令和4年度	国道24号寺田拡幅	B13・B14区	当調査研究センター	
第15次	令和7年度	国道24号寺田拡幅	C15・D17	当調査研究センター	

確認できなかった。井戸からは13～14世紀の瓦器碗や土師器皿が多数出土した。中世集落がこの周辺に分布しているものと推定される。D11区では島畑1基と島畑上で耕作溝を検出し、島畑以前の氾濫流路1条を検出している。C6区は東西約100m、南北約12mの調査区で、古墳時代の流路、溝跡、中世の土坑、時期不明の耕作関連の小溝群、東辺で島畑1基を検出した。慶長伏見大地震に伴う地層の変形が認められたことから、調査区周辺は中世段階には池沼であったと考えられ、この範囲には島畑が造られなかったものと推定される。流路は幅約30mで、南東から北西に延び、最終的には古墳時代前期から後期にかけての溝として利用され、溝肩に護岸のための施設が設けられていた令和2年度に北側のC5区と繋げて継続して拡張調査を実施した。

令和2年度には、C6区のほか、第10次調査としてC7～9・11・14、D12・14・16区の8か所で新たに調査を実施した。南北方向の島畑を新たに13基確認したほか、古墳時代後期～奈良時代の溝、古墳時代前期の溝、古墳時代前期、縄文時代後期～弥生時代の流路を検出した。特筆すべきものとして、C9区で縄文時代晩期の土器埋納遺構を確認した。

前年度から引き続いて実施したC5・6区の調査は、西・北側に可能な限り拡張を行って調査を実施した。結果、自然流路は弥生時代中期から古墳時代前期まで機能し、古墳時代後期に新たに人工の溝が掘削されて奈良時代まで継続して利用されていること、杭列のほか敷葉工法を用いて護岸していること、溝の中には堰が設けられて水位を調整していることが判明し、遺物としては祭祀に用いられた斎串や人形が出土した。また、自然流路内でも堰や導水施設、杭列が検出さ



第4図 新名神高速道路整備事業に関わる調査区配置図(1/5,000)

れるとともに、多量の弥生～古墳時代の土器や木製農工具、木製品が出土した。弥生時代の流路の下層からは縄文晩期の自然流路・河道を検出している。『日本書紀』仁徳12年10月条と推古15(607)年に栗隈県に大溝を掘る記事が見え、城陽市域周辺で大規模な開発が行われたことがうかがわれ、今回の発見した大溝はその一端を示す資料として重要である。

第12次調査は令和3年度に、B11～13区、C11・14区の5か所で実施した。B11区では、中世の南北の溝や土坑状遺構、瓦器埋納土坑、北東から南西に延びる古墳時代後期の溝2条、古墳時代初頭の井戸1基などを検出した。B12区は府道路整備事業(第13次調査)と合同で調査を実施し、^(注9) 堅穴建物2基、掘立柱建物1棟、井戸2基、土坑4基、溝20条を検出した。掘立柱建物は、南北2間、東西1間以上で、柱穴は、一辺約40cmの方形を呈し、埋土から奈良時代の須恵器が出土した。2基の井戸のうち1基は時期不明であるが、1基は古墳時代初めの完形の土師器甕1点などが出土した。また、奈良時代の須恵器・土師器の他、骨片を含む溝は、掘立柱建物に隣接し、関連する溝と考えられる。B13区は、西半と東半に分けて調査を行った。西半は井戸や溝の存在を確認し、東半は重機により表土及び堆積土の上層のみを除去し、令和3年度の作業を終了した。C11区では、中世以降の耕作に伴うと考えられる東西の溝1条を検出した。C14区では、中世以降と考えられる南北の島畑1基と南北の溝8条を検出した。B11・12区で弥生時代末から古代に至る堅穴建物や掘立柱建物、井戸などの遺構を確認したことから、この周辺は、弥生時代末～古墳時代前期に集落域としての土地利用が行われ、その後、古墳時代後期や奈良時代にも集落域として断続的に利用されていたことが明らかとなった。

第14次調査は、令和4年度にB13区とB14区の2か所で調査を実施した。B13区では、井戸1基、土坑2基、溝4条を検出した。B14区は表土を除去したところ、調査区に重複して排水管が設置されていたことが判明し、遺構の検出は困難と判断し、埋め戻して調査を終了した。

小樋尻遺跡第3・5・6・8・11次調査は新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査で、本報告書で報告するものである。

2) 水主神社東遺跡の調査履歴

水主神社東遺跡は令和7年度までに19次にわたる調査が実施されている(付表2)。令和2年度の第15次調査および令和4年度の第17次調査は城陽市教育委員会が実施しており、他は、当調査研究センターが調査を行っている。平成23年度に第1次調査が実施され、以降、平成27年度の第7次調査にいたるまでは新名神城陽JCT・IC整備及び国道24号金尾交差点改良事業に係る調査を実施している。これらの調査成果を見ると、水主神社東遺跡の西側・北側は下水主遺跡に接しており、それぞれの境界は里道と京奈和自動車道となっているが、両遺跡は島畑が途切れることなく続いており、明瞭な境界は認められない。そして、水主神社東遺跡の発掘調査では、島畑と弥生時代～古墳時代と判断される溝群が検出されているだけで、顕著な遺構は確認されていない。一方、下水主遺跡の北端部では弥生時代の土坑や溝などの遺構を検出しており、同時期の集落があった可能性がある。また、下水主遺跡の中央部から南側にかけて、京奈和自動車道の西側では弥生時代の堅穴建物や井戸・土器だまり、古墳時代の流路、飛鳥～奈良時代の溝・井戸、平安時

付表2 水主神社東遺跡の調査履歴

次数	調査年度	関連事業	調査区	調査機関	報告書
第1次	平成23年度	新名神城陽IC整備	A1・A2区	当調査研究センター	『京都府報告集』第167冊(2016)
第2次	平成24年度	新名神城陽IC整備	B1・B2区	当調査研究センター	『京都府報告集』第167冊(2016)
第3次		国道24号金尾交差点改良	A～E地区	当調査研究センター	『京都府報告集』第163冊(2015)
第4次	平成25年度	国道24号金尾交差点改良	D地区	当調査研究センター	『京都府報告集』第163冊(2015)
第5次		新名神城陽IC整備	A3・B3・C1・C2地区	当調査研究センター	『京都府報告集』第167冊(2016)
第6次	平成26年度	新名神城陽IC整備	B4区	当調査研究センター	『京都府報告集』第174冊(2018)
第7次	平成27年度	新名神城陽IC整備	D地区	当調査研究センター	『京都府報告集』第174冊(2018)
第8次	平成29年度	新名神高速道路整備	E1・E3・E5・F1・F2・G1・G2・G3・G4区	当調査研究センター	本報告
第9次		国道24号寺田拡幅	G11・G12区	当調査研究センター	『京都府報告集』第195冊(2024)
第10次	平成30年度	国道24号寺田拡幅	G13・F5区	当調査研究センター	『京都府報告集』第195冊(2024)
第11次		新名神高速道路整備	E2・E4・E5・F3・F4・G5・G6・G7・G8・9・G10区	当調査研究センター	本報告
第12次	平成31・令和元年度	国道24号寺田拡幅	E7・F5・F6・G14・G15・G16区	当調査研究センター	『京都府報告集』第195冊(2024)
第13次		新名神高速道路整備	E6区	当調査研究センター	本報告
第14次	令和2年度	国道24号寺田拡幅	E8・E9・F7・F8a・F8b区	当調査研究センター	『京都府報告集』第195冊(2024)
第15次		市道拡幅		城陽市教委	
第16次	令和3年度	国道24号寺田拡幅	F9・G17区	当調査研究センター	『京都府報告集』第195冊(2024)
第17次	令和4年度	市道新設	22-1tr	城陽市教委	『城陽市報告書』第82集(2023)
第18次	令和7年度	新名神高速道路整備	G18区	当調査研究センター	本報告
第19次		国道24号寺田拡幅	G19・G20区	当調査研究センター	

代の井戸などが見つかり、大規模なものではないが、それぞれの時期の集落があったものと推定される。古墳時代の流路は弥生時代の流路を再掘削したもので、幅10mを超える大規模なもので、吉備系や東海系の土器が出土することもあり、川津や運河として機能し、木津川を遡って運ばれた物資が、ここから東に向けて運ばれたものとして注目される。

第9・10・12・14・16・19次は国道24号寺田拡幅事業に伴う調査で、城陽JCT・ICから東側の調査にあたり、平成29年度から令和7年度まで継続して調査を実施している。今回の新名神関係の調査の南側での調査であることから、報告書から調査の内容を個別に見ておきたい。

第9次調査は平成29年度に実施した。G11・12区の2地区の調査を実施した。G11区では島畑5基と古墳時代前期の斜行溝1条、G12区では島畑8基、自然流路、縄文時代後期の土器を包含する土坑を検出している。

第10次調査では、平成30年度にG13・F5区の調査を実施した。G13区では東西方向の島畑2基と南北方向の島畑3基、古墳時代前期の溝、縄文時代中期後半の自然流路を検出している。F5区では島畑4基と下層の流路を検出した。F5区は次年度も引き続き調査を行っている。

第12次調査は平成31(令和元)年度に、E7・F5・F6・G14・G15・G16区の6地区で調査を実施した。G14区では島畑2基、E7区では3基の島畑と島畑上・下で耕作関連の溝を検出した。F5区では下層の流路の調査を行い、縄文時代後期から晩期の流路に伴う水場遺構を確認した。打製石斧や削器、剥片、敲石、石斧のほか加工木が出土していることから、木材や石材の小規模な加工が行われたものと推定されている。F6区では島畑1基、下層で古式土師器を含む溝5条、F5区へと延びる自然流路を検出した。G14区では島畑2基と島畑上・下で耕作関連の溝を、G15区では島畑2基と下層で縄文土器を含む自然流路を、G16区では東西方向の島畑2基、南北方向の島畑2基、古式土師器を包含する氾濫流路を検出した。

第14次調査は令和2年度にE8・E9・F7・F8区の5地区で調査を実施した。E8区では島畑3基と耕作関連溝、E9区では島畑1基と不明土坑・溝を検出した。F7区では島畑2基と島畑間の窪地内での耕作関連遺構を検出した。F8区は東西a・b区に分けて調査を行い、島畑4基と島畑間の窪地内での耕作関連遺構、素掘り井戸、氾濫流路2条を検出した。

第16次は令和3年度にF9・G17区の2地区の調査を実施した。F9区はF7区の北側、F4a区とF2区との間の調査で、調整池建設予定地の調査である。調整池の建設により標高15.1mまでの遺構が壊されるため、それよりも上位で顕著な遺構の有無を確認したところ、近世の島畑1基および周辺の畑作の痕跡を検出した。

第19次調査として、G19・G20区の2地区の調査を行った。ともに調整池建設予定地の調査で、調整池の建設により壊される遺構の有無を確認したが、G19区では顕著な遺構は検出できず、G20区では島畑1基を確認しただけであった。

第17次調査は令和4年度に城陽市教育委員会が市道建設に伴い調査を実施したもので、今池川の西側、F5区の北側にあたる。調査により、縄文時代晩期の溝1条、弥生～古墳時代前期の溝1条、土坑3基、南北方向の島畑1基、自然流路^(注10)を検出している。

第8・11・13・18次は新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査で、本報告書で報告する。

以上のように、国道24号関連の水主神社東遺跡の調査では、島畑がほぼ全域に稠密に分布していること、弥生～古墳時代の氾濫流路が所々に流れ込んでいること、縄文時代の水場遺構のほか縄文時代の自然流路が確認されている。

5. 各年度の調査概要(付表3・4)

1) 平成29年度

城陽JCT・IC建設工事と国道24号拡幅工事に伴い、平成27年度まで下水主遺跡・水主神社東遺跡の調査が実施されていた。それらの一連の発掘調査が終了した後、城陽ICから東側の新名神高速道路本線工事が計画・推進され、平成29年度から同事業地予定地内の小樋尻遺跡・水主神社

付表 3 新名神高速道路整備事業に伴う小樋尻遺跡の調査

年度	回数	地区	ピア等	担 当	調査面積 (㎡)	調査期間	主な遺構	備 考
平成 29 年度 (2017)	第 3 次	B 1	P5・調 整池	岡村美知子 高野陽子 中谷可奈	803	2017.5.2～7.26	近代土坑、近世以前の池沼	
	第 5 次	D 1	P30	竹原一彦	293	2017.12.25～ 2018.2.28	島畑 1	
		D 2	P31		169		島畑 1・野井戸	
平成 30 年度 (2018)	第 6 次	B 2	P6・調 整池	加藤雅士 引原茂治 山本 梓 増田孝彦	623	2018.9.3～12.3	近世以前の湿地堆積	
		B 3	P7	竹村亮仁	435	2018.12.4～ 2019.1.25	時期不明溝、噴砂	
		B 4	P8		436	2019.1.22～2.27	古墳溝 5	
		B 5	P9		360	2018.12.4～ 2019.1.24	中世耕作溝・ピット、古墳 溝 4	
		B 6	P10	引原茂治 加藤雄太	165	2018.8.6～10.9	古墳溝、地震痕跡	
		B 7	P11	引原茂治 加藤雄太 山本 梓	265	2018.9.21～11.7	中世耕作溝、時期不明溝	
		B 8	P12		388	2018.9.11～11.7	耕作溝、溝 2	
		B 9	P13	引原茂治 加藤雄太	186	2018.7.23～9.27	耕作溝、近世島畑 1、古墳 溝 2、古代溝 1	
		C 1	P18	岡崎研一 加藤雄太	233	2018.5.14～7.9	中世掘立柱建物 1・柵列 2・ 土坑、流路	
		C 2	P19		202	2018.5.17～7.10	島畑 1、古墳溝、流路 2	
		C 3	P20		255	2018.5.8～7.10	島畑 1、中世土坑、流路 2	
		C 4	P21		248	2018.5.24～7.11	島畑 1、流路、縄文時代谷 状地形、噴砂	
		D 3	調整池	竹原一彦	438	2018.4.23～6.14	島畑 3、流路	
		D 4	P25	加藤雅士 橋本 稔	394	2018.10.1～ 2018.12.21	近世島畑 2、古墳溝 1・流 路 2	
		D 6	P28		361	2018.10.25～ 2019.1.11	島畑 1、近世島畑 2	
令和元 (平成 31) 年 度 (2019)	第 8 次	B 10	P14	岩松 保	350	2019.6.3～7.25	中世耕作溝、古墳？、掘立 柱建物 1・柵 1、流路、地 震痕跡	
		C 5	P22・ 調整池	岩松 保 浅田洋輔	1,220	2019.8.7～12.13	井戸 4、古墳～古代溝 1、 古墳溝	次年度拡 張調査
		D 5	P26	加藤雅士	390	2019.9.17～11.19	島畑 1・耕作溝、流路	
		D 7	P29	岩松 保	350	2019.4.22～6.13	島畑 1・耕作溝	
令和 2 年度 (2020)	第 11 次	C 5	P23・ 調整池	福山博章 岡崎研一	1,530	2020.4.20～12.23	古墳～古代大溝、縄文自然 流路	前年度よ り拡張調 査
		C 10	P17	石井清司	138	2020.10.15～ 11.26	改良土壌、中世耕作溝	
		C 12	P15	石井清司 三好博喜 荒木瀬奈	395	2021.1.12～3.2	改良土壌、時期不明溝	
		C 13	P16	石井清司 三好博喜 荒木瀬奈	252	2021.1.14～3.2	中世小溝群、溝・土坑・ピ ット	
		D 13	P24	岩松 保 石井清司	226	2020.9.1～11.24	島畑 2・耕作溝、中世柱穴・ 溝 2、時期不明焼土	
		D 15	P27	石井清司	236	2020.11.26～ 2021.1.8	島畑 1・耕作溝、流路	

付表4 新名神高速道路整備事業に伴う水主神社東遺跡の調査

年度	次数	地区	ピア等	担 当	調査面積 (㎡)	調査期間	主な遺構	備 考
平成 29 年度 (2017)	第 8 次	E 1	P45	加藤雅士 藤田智子 安達香織	275	2017. 11. 16 ～ 2018. 2. 27	島畑 1 ・耕作関連溝、 時期不明溝	
		E 3	橋台		635		島畑 1 ・耕作溝	
		E 5	盛土部		—		—	次 年 度 継 続
		F 1	P42	竹村亮仁 安達香織 竹原一彦	185	2017. 10. 12 ～ 2018. 2. 19	島畑 2 ・耕作溝	
		F 2	P43		310	—	島畑 1 ・耕作溝	
		G 1	P32		250	2017. 11. 1 ～ 2018. 2. 27	島畑 1 ・耕作溝	
		G 2	P33		240	2017. 8. 21 ～ 2018. 2. 27	島畑 1 ・耕作溝	
		G 3	P34		259	2017. 9. 1 ～ 2018. 2. 27	島畑 1 ・耕作溝	
		G 4	P35		310	2017. 12. 28 ～ 2018. 2. 27	島畑 2	
平成 30 年度 (2018)	第 11 次	G 5	P36	竹村亮仁 橋本 稔	338	2018. 4. 19 ～ 6. 28	島畑 3	
		G 6	P37	竹原一彦 竹村亮仁 山本 梓	360	2018. 6. 13 ～ 10. 12	島畑 4 ・耕作溝、汜 濫流路 2	
		G 7	P38	竹村亮仁 橋本 稔	320	2018. 4. 19 ～ 6. 26	島畑 1、流路	
		G 8	P39	引原茂治 竹村亮仁 山本 梓	542	2018. 5. 16 ～ 10. 30	島畑 1	
		G 9	P40	竹村亮仁 山本 梓	477	2018. 8. 7 ～ 10. 30	島畑 2 ・耕作溝・足 跡	
		G 10	P41 ・ 調整池		594	2018. 7. 9 ～ 10. 12	島畑 2 ・耕作溝、流 路	
		F 3	P42		228	2018. 7. 20 ～ 10. 11	島畑 2	
		F 4	P44	竹村亮仁	420	2018. 10. 10 ～ 11. 29	島畑 2 ・耕作痕、汜 濫流路 3	
		E 2	P47	加藤雅士 引原茂治	592	2018. 5. 8 ～ 6. 18	島畑 1 ・耕作溝	
		E 5	盛土部	加藤雅士	1, 293	2018. 4. 13 ～ 6. 21	島畑 4 ・耕作溝、落 ち込み・流路 2	前 年 度 か ら継続
		E 4			713	2018. 6. 27 ～ 8. 9	島畑 1 ・耕作溝	
令和元（平 成 31）年度 (2019)	第 13 次	E 6	P46	加藤雅士	520	2019. 11. 18 ～ 2020. 2. 14	島畑 2 ・耕作溝、流 路 3	
令和 7 年度 (2020)	第 18 次	G 18	調整池	岩松 保	900	2025. 5. 12 ～ 7. 15	島畑 3 ・耕作溝 2	

東遺跡における発掘調査が実施され、令和 7 年度まで断続的に現地調査が実施された。

平成 29 年度において、小樋尻遺跡では第 3 次・第 5 次調査として、2 次にわたって 3 地区の調査を実施した。調査次数は 1 年度の 1 事業につき 1 回の次数を取得することとしているが、この年度のみ 2 次にわたる調査となっている。これは、年度当初は春から夏にかけて B 地区の調査が計画されており、秋以降に新たに D 地区の調査が委託されたため、それぞれ別回の次数の登録となった。この時点では、通年にわたっての調査ではなかったため、それぞれの調査において別回の次数となっている。

小樋尻遺跡第 3 次調査の B 1 区では近世以前には池沼と判断され、顕著な遺構は確認できな

った。第5次調査のD1・2区では島畑およびそれに伴う水溜井戸を検出した。

水主神社東遺跡では第8次調査として、E1・3・5区、F1・2区、G1～4区の9地区で調査を実施した。E地区は城陽JCT・ICと新名神本線が接続する地点で、橋脚のほか、脚台や土盛りの設置部分にあたる。水主神社東遺跡は、城陽JCT・ICの建設に伴い7次にわたる調査が行われており、島畑を中心とした遺構が検出されている。E地区の一連の調査では、島畑を中心とした遺構を検出した。E2区の調査は、当初計画で平成29年度に調査が予定されていたが、諸般の事情により、次年度調査となった。また、E5区は部分的な調査にとどまり、次年度に継続して調査を行うこととなった。F1・2区、G1～4区でも島畑を中心とした遺構を確認した。

2) 平成30年度

小樋尻遺跡は第6次調査として、15か所で調査を行った。B2～9区、C地区の1～4区、D3・4・6区の調査を実施した。D3区は29年度に調査を行ったD1・2区の間で、調整池の建設予定地にあたり、他はすべて橋脚建設予定地の調査である。

B2区では近代以前は湿地もしくは池沼といった環境下であり、B3～9区においては島畑は検出されず、中世の耕作溝とそれ以前の溝等を検出している。これらの調査区では慶長伏見大地震による地層の変形や噴砂が確認されていることから、近世初頭には湿地もしくは池沼であったものと推測される。また、比較的古墳時代の遺物が多く認められることから、中世以前と判断される遺構は古墳時代のものである可能性がある。

C1～4区では、中世の島畑とともに、斜行する流路を検出した。また、C1区では中世の柵列や掘立柱建物・土坑、C3区では中世遺物を包含する土坑を検出した。C1区を中心に中世の集落が分布していることが推測された。さらに特筆されるのは、C4区で縄文時代晩期の土器が多数廃棄された谷状地形が確認され、周辺に同時期の集落が存在する可能性がある。

D3・6区では、島畑および耕作溝等を検出した。また、D4区では中世の島畑を検出できなかったが、古墳時代前期の自然流路内から土器がまとまって出土した。

水主神社東遺跡では、第11次調査としてE2・4・5区、F3・4区、G5～10区の11か所の調査を実施した。これらの調査区では、主として、島畑を中心とした遺構を確認した。また、G6・7区やF4区では弥生時代後期～古墳時代初頭の氾濫流路が検出され、木津川の逸水による旧河道が低地に数多く分布していることが判明した。

3) 令和元年度(平成31年度)

令和元(平成31)年度には、小樋尻遺跡第8次調査、水主神社東遺跡第13次調査を実施した。小樋尻遺跡では、B10区、C5区、D5・7区の4か所の調査を実施した。B10区、D5・7区は橋脚部分、C5区は橋脚・調整池の範囲の調査である。D5区は前年度に調査予定であったのが、調査に着手できなかったものである。

B10区では、中世の耕作溝、慶長伏見大地震の地層の変形、中世以前の掘立柱建物・柵列を検出した。

C5区では調査区の西端で古墳時代～奈良時代の大溝が検出され、多量の土器とともに多数の

木器が出土した。南側のC 6区は、国道24号寺田拡幅事業として国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて同時期に調査を実施していたが、この調査区でも大溝が検出された。そのため、令和2年度には、両地区の間の大畔を取り除き、大溝の調査を実施することとなった。

D 5・7区では、それぞれ、地山を削り出すタイプの南北方向の島畑を検出した。

水主神社東遺跡ではE 6区の調査を行った。南と北の2か所に橋脚の建設が計画され、島畑・耕作溝、流路などを検出した。

4) 令和2年度

令和2年度には令和元年度に引き続きC 5区の調査を実施し、小樋尻遺跡第11次調査としてC 10・12・13区、D 13・15区の調査を新たに実施した。C 5区は新たに調整池西半部および橋脚23の範囲までを拡張し、併せて南側のC 6区(国道24号関係調査)との間の調査区間の土壁を取り除き、C 6区と合同で調査を実施した。

C 5・6区では縄文時代から続く流路を、古墳時代初頭以降奈良時代にいたるまで、多量の土器が出土するとともに井堰や護岸施設を構築して人為的に改変し、運河として利用されていることが判明した。この運河は、『日本書紀』仁徳天皇十二年十月条に「大溝を山背の栗隈県に掘」る、推古天皇十五年是歳条にも「山背国に大溝を栗隈に掘る」と記載された「栗隈大溝」との関連が注目された。この調査報告は別途、作成しているところである(『京都府遺跡調査報告集』第207冊所収予定)。

C 10・12・13区は、城陽警察署跡地、城陽市消防署跡地の調査である。これらの調査では、中世の耕作溝を検出したが、島畑の造作は確認できなかった。また、それ以前の遺構も確認できなかった。D 13区では中世の島畑とそれ以前の柱穴を多数検出した。柱穴は掘立柱建物に復原できるものは確認できなかったが、この周辺に中世村落が分布しているものと推測される。D 15区では、島畑1基とそれに伴う耕作溝を検出した。

5) 令和3～6年度

現地調査はなく、整理等作業を実施した。

6) 令和7年度

水主神社東遺跡第18次調査として、G地区において調整池の予定地の調査を実施した(G 18区)。調整池建設に伴う掘削高が標高15.3mで、遺構面の保護層0.3mを加えた標高15.0mまでに重要な遺構の有無を確認するために調査を実施した。調査により、島畑3基を確認したが、島畑基盤層がほぼ15.0mにあり、最初期の中世段階の島畑はそれを掘り窪めて造られていること、標高15.0mでは島畑間の溝上では近世段階の包含層が分布していることが確認でき、工事による影響はないものと判断された。

このG 18区の調査をもって、新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査はすべて終了した。その後、整理作業を引き続き行い、本報告書の作成に努めた。(岩松 保)

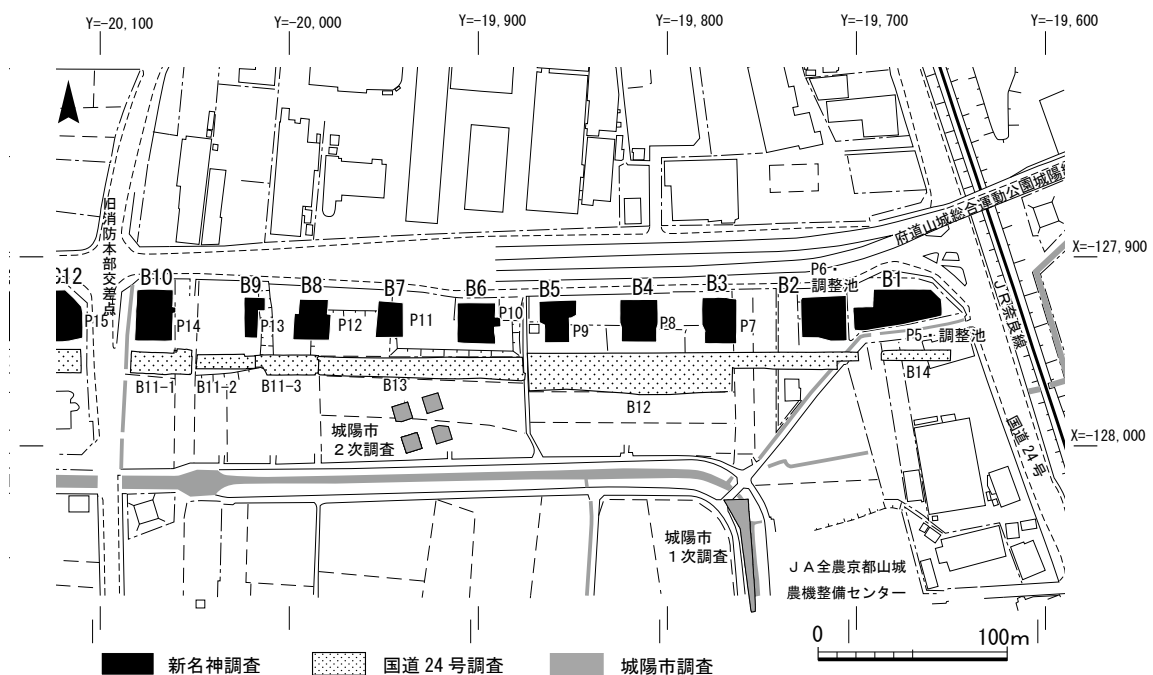
6. 小樋尻遺跡B地区の調査

1) 調査の経過

小樋尻遺跡の発掘調査は、新名神建設工事に先立ち、城陽市教育委員会によって2次にわたる調査がB地区の近辺で行われている。平成12・13年度には今池川改修に伴う調査(第1次)、平成28年度には関電鉄塔建替に伴う調査(第2次)が行われている。1次調査では7世紀前半と7世紀末～8世紀初頭の2時期の遺構を検出している。2次調査では正方位を向く条里地割と考えられる溝群とそれに先行する区画溝を検出している。平成29年度からは(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによる新名神建設工事に伴う発掘調査が始まり、同年度には城陽市教育委員会が城陽市消防署移設に伴う調査(第4次)をB10区の南側約100mの地点で行っている。この調査では縄文・古墳時代の竪穴建物、古墳時代の掘立柱建物等の遺構が検出されており、縄文時代から奈良時代の遺物が出土している。

小樋尻遺跡のB地区は国道24号新池交差点より東、旧消防本部前交差点の範囲に設定した(第5図)。新名神高速道路整備事業に伴う小樋尻遺跡の調査は、平成29年度のB1区の調査を皮切りに、令和元(平成31)年度のB10区の調査まで、10区の調査を実施した(第5図)。これらの調査は橋脚とその間の調整池の建設に伴う調査であり、基本的に方形の調査区となるが、一部、民地や水路、現地における制約のため、対象地の一部の範囲の調査にとどまった調査区もある。東端のB1区およびB2区の調査は、橋脚5と橋脚6および調整池建設予定地の調査であるが、調整池予定地の南側の民地への通行を確保するため、調整池の範囲を東西の調査区に分割して調査を実施した。B5・7・9区は現地形の制約により、部分的な調査にとどまった。

新名神高速道路の建設に平行して国道24号拡幅事業が新名神高速道路の南側に計画され、令和



第5図 小樋尻遺跡B地区の調査(1/4,000)

付表5 小樋尻遺跡B地区の調査(新名神・国道24号関係)

調査区	調査次数	調査年度	関係事業	構造物等	備 考
B 1	第3次	平成29年度(2017)	新名神	P5・調整池	
B 2	第6次	平成30年度(2018)	新名神	P6・調整池	
B 3				P7	
B 4				P8	
B 5				P9	
B 6				P10	
B 7				P11	
B 8				P12	
B 9				P13	
B 10	第8次	令和元(平成31)年度(2019)	新名神	P14	
B 11	第12次	令和3年度(2021)	国道24号	道路	
B 12	第13次		府道路		国道24号・府道対象地を合同で調査
B 13	第12次		国道24号		令和4年度継続調査
B 14	第14次	令和4年度(2022)	府道路	道路	

3・4年度には同工事に伴う調査(第12・14次)および府道の整備計画に伴う発掘調査(第13次)が行われた。新名神高速道路及び国道24号、府道関連の調査は付表5のとおりである。(岩松 保)

2) B 1 区 の 調 査

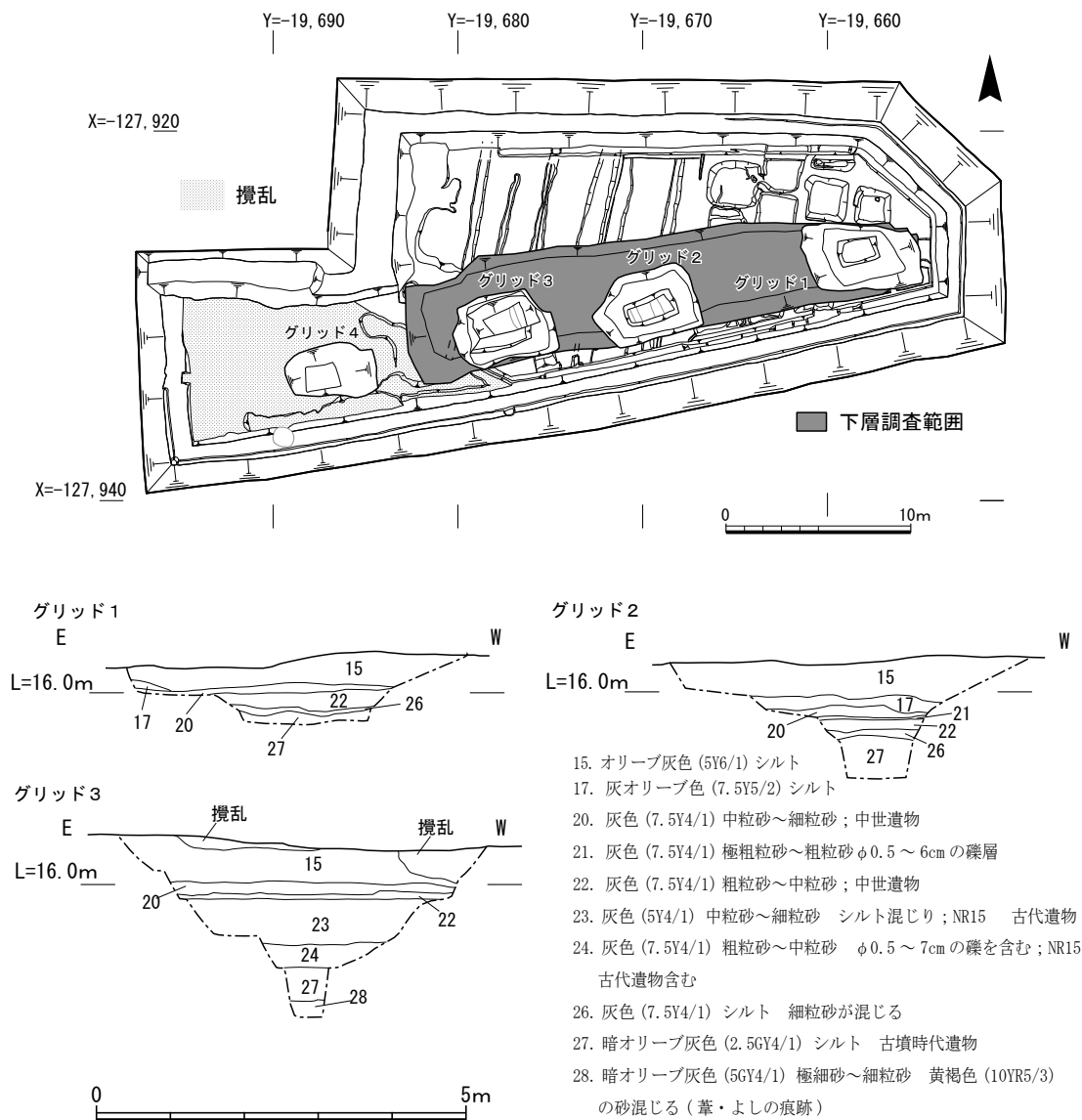
(1) 調査の概要

B 1 区の調査地は、国道24号新池交差点の南西に位置し、小樋尻遺跡の東端にあたる。調整池・橋脚5の建設予定地で、平成29年度に小樋尻遺跡第3次調査として実施した。

調査地は、旧表土(水田耕作土)の上に約2mの盛土がなされており、重機により盛土の掘削を行った。この周辺での遺跡の層序や遺構面の高さなどが不明であったため、南東隅で部分的に断ち割りを行ったところ、オリーブ灰色シルト(15層)が標高16.1～16.85mにかけて厚く堆積していることが判明した。この下位では砂層・シルト層が薄く堆積しているだけで、顕著な遺構・遺物が確認できなかったこと、15層上面で部分的に人力による精査を実施したところ、土坑状の遺構を確認したため、この面で平面的に調査を実施することとした(第1面)。

15層上面までの掘削を重機によって東側から西に向けて進めると、対象地の3分の2程度掘削した時点で、産業廃棄物が多量に埋まった攪乱坑が調査面にまで及んでいることが判明した。この攪乱坑の規模を見るために対象地の南辺のみの掘削を西側に向けて実施したところ、これより西側は対象地全域で攪乱を受けていることを確認したため、この攪乱に相当する西北部は調査対象から除外した。

15層上面で人力による精査を実施したところ、全域で遺構を検出した。東半では北でやや東に向いた方形の土坑群、西半では土坑群と同じ方位を有する数条の溝を検出した。これらの遺構は出土遺物から近現代のものと判断した。

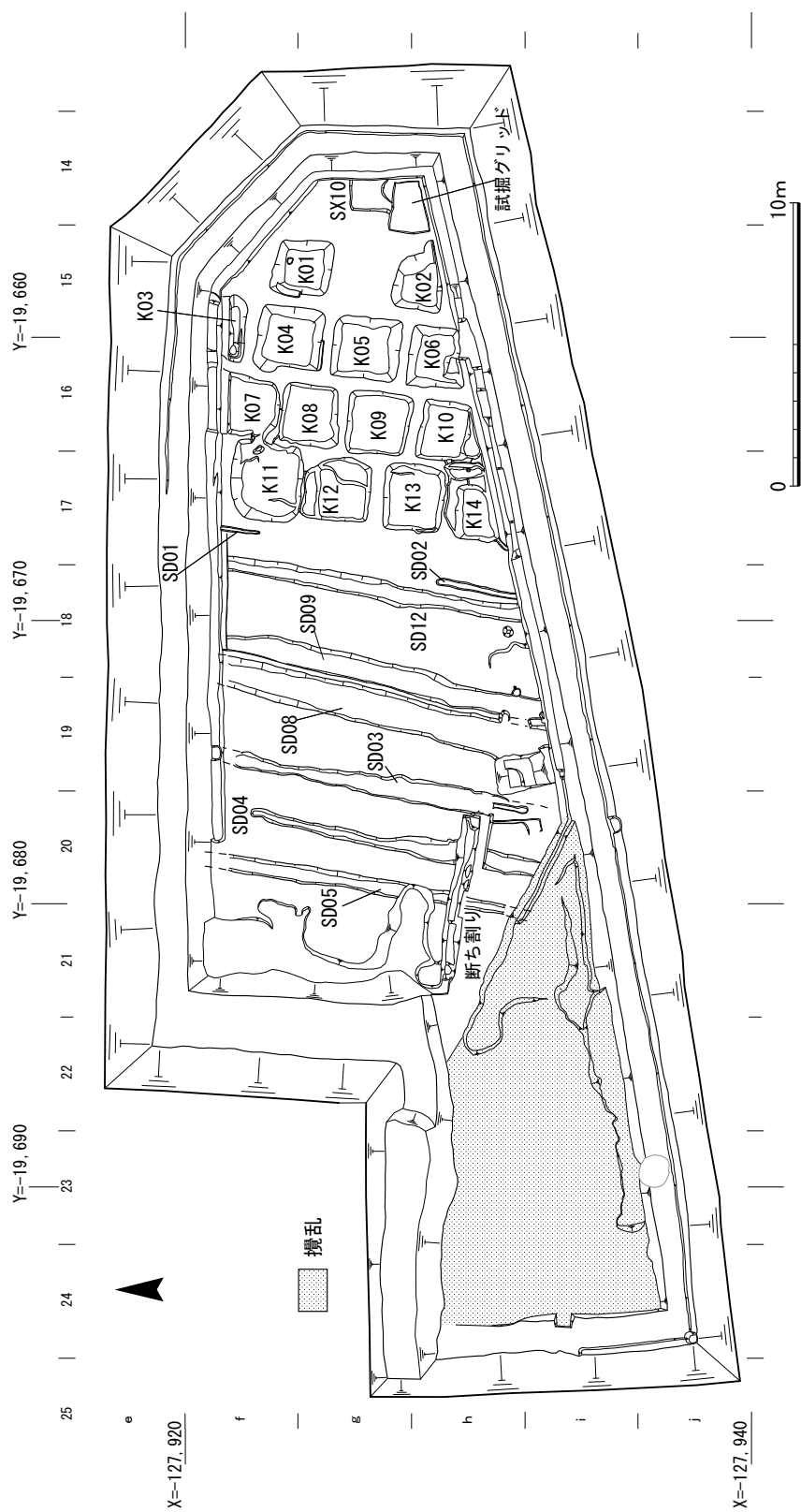


第6図 B1区断ち割りグリッド位置図・土層図(1/400・1/100)

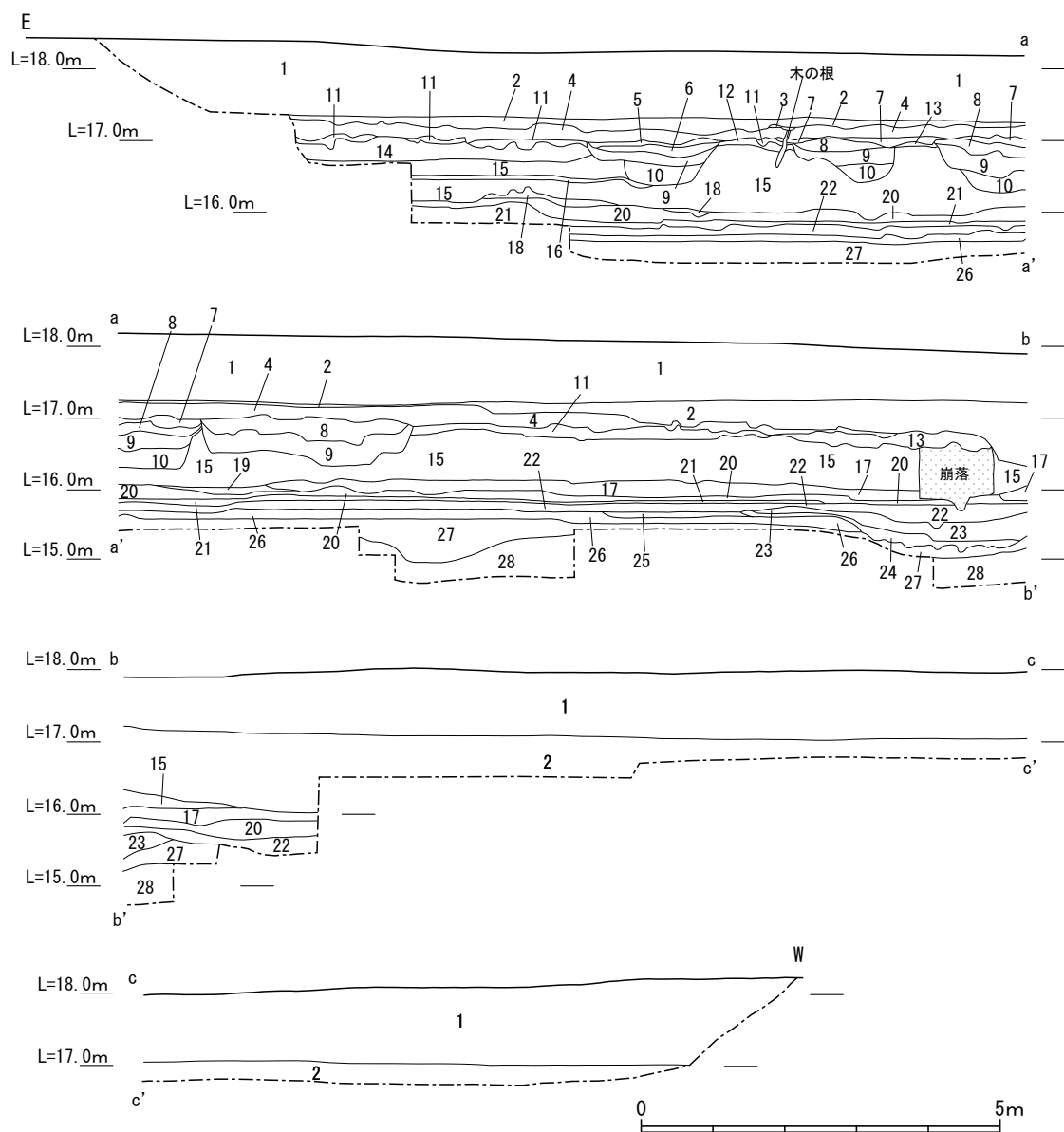
さらに下層遺構の有無およびその層序を調べるため、グリッドを4か所に設定した(第6図)。攪乱内に入れたグリッド4については、約1m(標高15.5m)付近まで産業廃棄物が入っており、それ以上の掘削を取りやめた。グリッド1～3内の土層の堆積は基本的に水平堆積で、シルト層と砂層からなっており、水性堆積と判断された。20層中からは瓦器片、22層中からは須恵器大甕片、24層、27層からは弥生土器もしくは土師器片が出土した。これらの層序の中で、いずれのグリッドでも確認できる層序を目途として、17・20・22・26・27層の上面で遺構を精査することとした。これら下層遺構面の調査については、重機による排土の除去・運搬を考慮して、調査区の南半部分のみとした。近代以前の遺構を確認したのは、22層および27層上面である(それぞれ第2面、第3面)。28層は極細砂～細砂で、池沼地形以前の河川内で堆積した砂層と判断される。

(2)基本層序(第8図)

調査地は、旧表土(水田耕作土)の上に約2mの盛土がなされており(1層)、国道24号の路面と



第7図 B1区検出遺構平面図 第1面(1/250)



1. 整地土
2. 黒褐色 (2.5Y3/2) 極細粒砂～粗粒砂；1～10cmの礫、産廃物含む
3. オリーブ黒色 (5Y3/2) 中粒砂～細粒砂
4. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 中粒砂～細粒砂
5. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂～シルト
6. 灰オリーブ色 (5Y3/2) 中粒砂～細粒砂；暗褐色の砂が少量混じる
7. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 中粒砂～細粒砂
8. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂～極細粒砂
9. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 中粒砂～細粒砂；明黄褐色 (10YR6/8) の細粒砂が混じる
10. 灰色 (N4/) 細粒砂～極細粒砂のブロック状のものが暗オリーブ色 (5Y4/4) 中粒砂～細粒砂の中に混じる
11. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
12. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂～シルト
13. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細粒砂～極細粒砂；黄褐色の砂粒が混じる
14. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂～細粒砂；黄褐色 (10YR5/8) の砂が少量混じる、砂粒は下層より上層が粗い、
15. オリーブ灰色 (5Y6/1) シルト
16. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂～極細粒砂
17. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
18. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粗粒砂～中粒砂
19. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 中粒砂～細粒砂 φ5mmの礫が少量混じる
20. 灰色 (7.5Y4/1) 中粒砂～細粒砂；中世遺物
21. 灰色 (7.5Y4/1) 極粗粒砂～粗粒砂 φ0.5～6cmの礫層
22. 灰色 (7.5Y4/1) 粗粒砂～中粒砂；中世遺物
23. 灰色 (5Y4/1) 中粒砂～細粒砂 シルト混じり；NR15 古代遺物
24. 灰色 (7.5Y4/1) 粗粒砂～中粒砂 φ0.5～7cmの礫を含む；NR15 古代遺物含む
25. 灰色 (10Y4/1) 粗粒砂～細粒砂
26. 灰色 (7.5Y4/1) シルト 細粒砂が混じる
27. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト 古墳時代遺物
28. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 極細砂～細粒砂 黄褐色 (10YR5/3) の砂混じる（葦・よしの痕跡）

第8図 B1区南壁土層図(1/100)

同じ高さ、標高19.2m付近までかさ上げされていた。重機により掘削を行ったところ、盛土下には2層の黒褐色砂が堆積しており、西に向けて厚く堆積していた。この中には電化製品をはじめとする産廃ゴミが多く含まれており、現代の攪乱である。3層は2層からの汚水の染み込みによる変色である。4層の暗オリーブ中粒砂～細粒砂が薄く堆積しており、その下位の11～13層の下面が上層遺構面である。上述の2層に相当する廃棄穴がこの面にも及んでおり、西側の3分の1は調査を実施できなかった。調査地の東側では、現地表・旧表土の下0.2mのシルト層上面で1辺約2mの方形の近代の土坑を複数検出した(第7図)。

第1遺構面の基盤となるのは15層のシルト層で、厚さ0.7mを測る。このシルト層には、葦・ヨシの痕跡と判断される黄褐色の直径5mm程度の斑混が多数認められた。シルト質の土壌であることから、砂粒が届かない、岸边から十分に離れたところで、水中の微粒子がゆっくりと堆積した環境下であったこと、葦・ヨシの繁茂が認められることから、水中であってもさほど深くない位置であったものと推測できる。18層から下は砂層の堆積であることから、17層のシルト層が池沼であった環境下における底面であったと判断される。沼池以前は流水のある川底もしくはその周辺の砂が堆積する環境下であったものと考えられる。また、15層中には16層の細粒砂～極細粒砂が筋状に入り込んでいるのが認められたが、これは洪水砂と判断され、一時に砂が流れ込んだものと推測される。この下層では、トレンチの東端から1.8mの範囲に岸边で波打った跡と判断される黄褐色に酸化した層、さらにその下層では沼状の水性堆積を表すシルト層の堆積や土砂流と判断される砂層や礫を含む層が認められた。

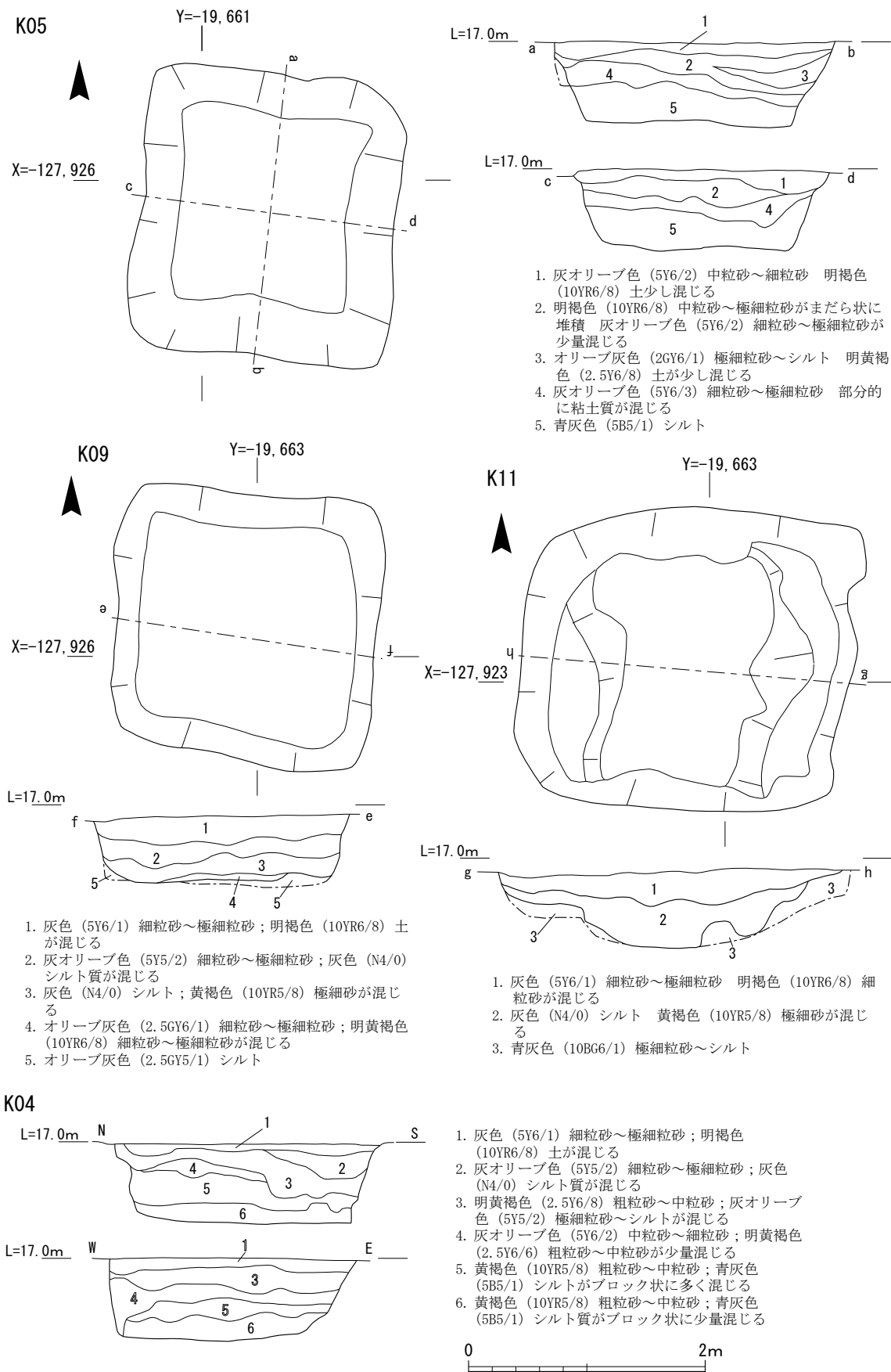
遺構を検出したのは、15層上面(第1面)、22層上面(第2面)、27層上面(第3面)である。第1面は近代以降、22層は奈良時代の土器(第38図2・3)や古墳時代の須恵器(5)とともに白磁(4)や瓦器片が出土しており、中世以降のものである。

(3)検出遺構(第7・9・10図)

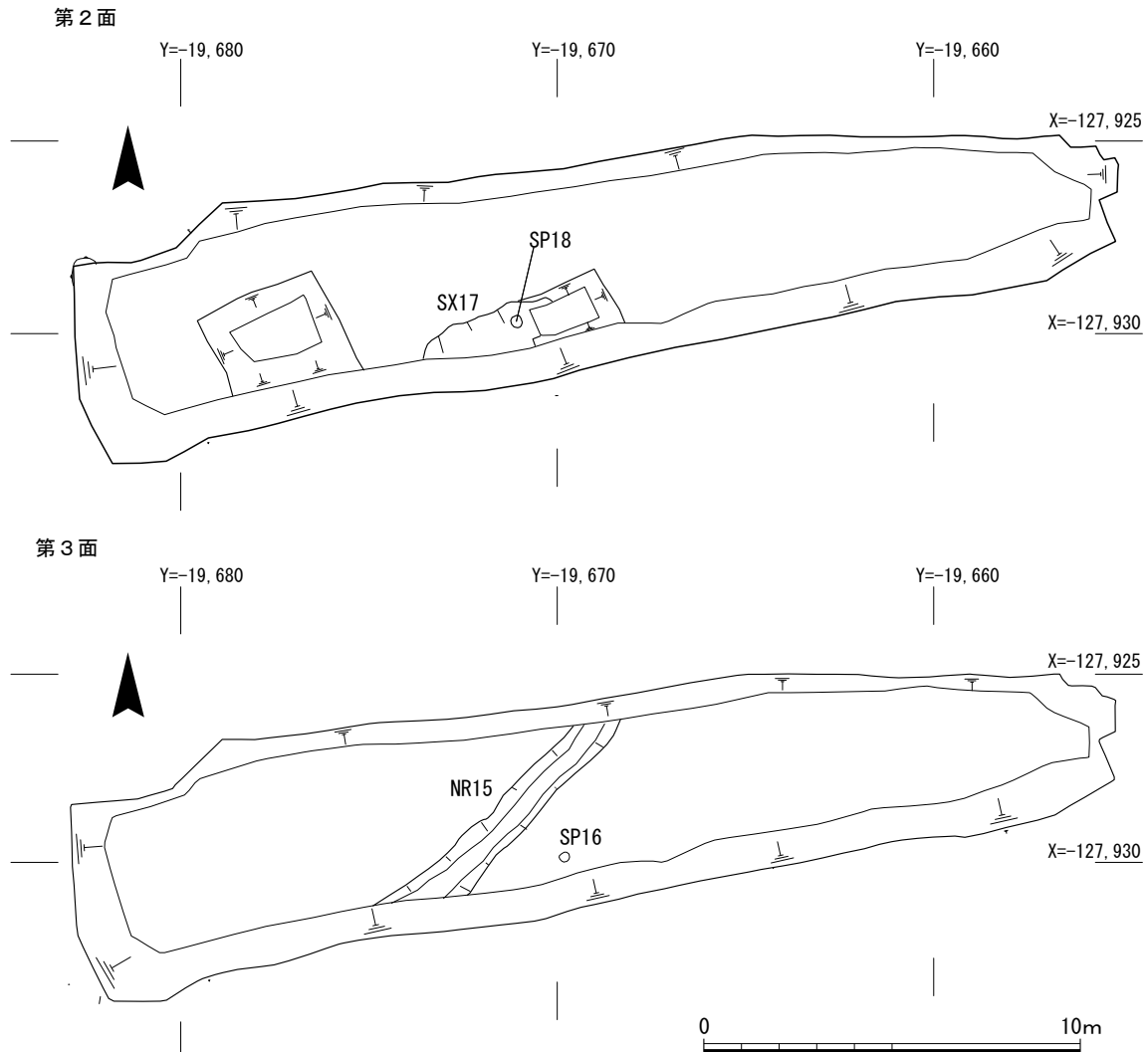
第1面では、1辺約2mの方形の近代の土坑、西側で素掘り溝を複数検出した(第7図)。第2面では小ピットと土坑状の落ち込み、第3面では北東から南西に向かう流路N R15を検出した(第10図)。

土坑K01～14 第1面の東半で検出した土坑群で、北で東に約10°振れる。土坑群の西辺はS D01・02より東側にあってほぼ揃っており、東端のK01・02の東側に空閑地が認められる。これらの土坑は一辺2.2～3.0mの方形を呈しており、うち、2.2～2.5mのものが大多数である。また、それぞれが0.3～0.5m程度の空閑地を空けて穿たれており重複関係を有さないことから、同時に穿たれた土坑群と判断される。検出した深さは0.7m程度でほぼ揃っている。断面形は箱形を呈するものが基本であるが、やや崩れたものもある。出土遺物から近現代のものである。その用途は不明であるが、土取り穴、苗木等を植えた土坑などが想定できる。

溝S D01～05・08・09 第1面の西半で検出した溝群で、北で東に約10°振れる。それぞれがほぼ平行して掘られている。また、東側で検出した土坑群と同一方向であることから、同時期のものと考えられる。S D03の底面には竹が埋設されており、水抜きの暗渠溝であったものと考えられる。



第9図 B1区土坑群平・断面図(1/50)



第10図 B1区検出遺構平面図 第2・3面(1/200)

えられる。また、S D08とS D09のみやや幅広の溝で重複していることや、両側の間隔が他の溝の間隔と比べてやや広いことから、他の溝とは異なった性格を有していたと想定される。他の溝を耕作に伴う溝とするならば、地境としての溝であった可能性が指摘できる。

S X10 調査区の東端で土坑K01～14とやや空閑地を空けて検出した土坑で、掘形の方位を同じくする。東は調査地外、南は断ち割りで攪乱を受けている。西側の土坑群と比べて、掘形が直線的で、検出高も0.1mと浅い。検出した層位としては近代のものであるが、西側の土坑と一連のものかどうかは不明である。東西1.1m以上、南北1.4m以上である。

不明土坑S X17 第2面で検出した。平面的には土坑状を呈していたが、グリッド2内の21層を埋土とするものである。自然堆積層が流水により部分的に抉られたものとも判断されたが、人為的なものである可能性もある。遺物の出土は無い。

ピットS P18 第2面で検出したピットである。径0.25m、深さ0.1mである。人為的なものかどうかは不明である。

ピットS P16 第3面で検出した。径0.25m、深さ0.15mである。他に検出しておらず、人為

的なものかどうかは不明である。流路NR15の底面で小ピット状の抉れが認められることから、それらと同様の小ピットが、溝自体が消失したためにピットとして検出した可能性がある。

流路NR15 3面で検出した溝状の流路で、北東から南西に向けて検出した。第23・24層が埋土となる。この溝は自然の土砂が流れた流路と考えられ、急激な土砂の流れが軟弱な川底を抉った痕跡で、その流れが渦状に舞い、底面を小ピット状に穿ったものと判断される。調査区の北東側には芝山遺跡が所在する丘陵があり、その丘陵の斜面を流れた土砂流の痕跡と推定され、溝深が南に向けてやや浅くなっていることから、その流路の先端部分と推測される。^(注11)古墳～奈良時代の土師器片が出土した。

(4)小結

B1区では、近代の土坑、土砂流の痕跡を検出し、古墳時代から近現代にいたる遺物が出土した。土層の堆積状況からB1区は古墳時代以前から近代近くまで、水をたたえた沼地もしくは湿地であったものと推測される。しかも、土層に認められる葦の根痕の状況や砂の堆積状況から、比較的水深の浅い環境から、水際、陸地へと変化したことが判明した。この状況は近世頃まで続き、近代以降には土坑や溝などの遺構が掘削されるなど、土地利用が行われたと考えられる。

(岡村美智子・岩松 保)

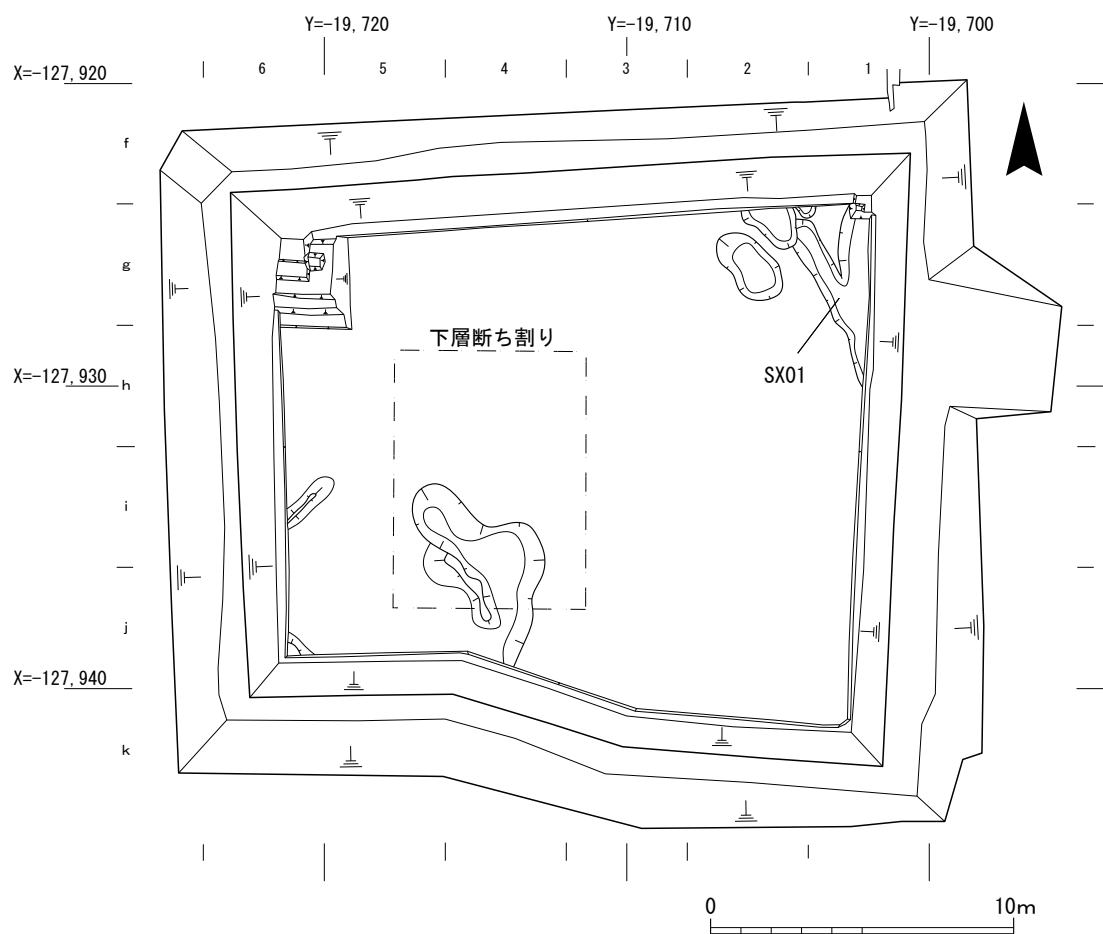
3) B2区の調査

(1)調査の概要

平成30年度に第6次調査で実施した。橋脚6および調整池の西半の建設予定地である。重機により表土を掘削したところ、現地表下0.8mまで現代の盛土があり、標高17.8mで旧地表の水田耕作面を検出した。旧地表面より下では、土層の観察により、近世以降の耕作に関わる区画、近世初頭の地震痕跡を認めた。平面的な調査は、地表下2.3m下の標高16.2m、34層上面の暗オリーブ灰色礫質砂の上面で実施し、自然のくぼ地を数基検出ただけで、顕著な遺構は確認できなかった。最終的に、下層における遺構・遺物の有無を確認するために深さ2m程度の断ち割りを行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

(2)基本層序および検出遺構

第12図の土層断面の観察では、37層と38層の境界が上下に波うっており、地震の揺れによる地層の変形と判断された。池沼や湿地において水分を十分に含んだ粘土が地震により動かされ、固定したものと考えられる。39・41層のオリーブ灰色礫質砂・暗オリーブ灰色砂質シルトには、瓦器小片や土師器片が混じることから、この地震痕跡は南山城地域に甚大な被害を与えた慶長伏見地震(文禄5年)によるものと判断された。おおむね、42層の暗オリーブ灰色礫質砂の上面で精査を行ったが、中央部分と北東部分で数基のくぼ地(SX01等)を確認しただけで、顕著な遺構は認められなかった(第11図)。これらのくぼ地は深さ最大で0.2m程度で、平面形や掘形の形状、埋土の状況から人為的なものではなく、自然地形と判断されるものである。前述の地震にともなう地形・地層の変形の可能性もある。これより下位の層序は、ほぼ水平方向のシルト質泥、砂が堆積しているだけで、池沼における堆積状況を確認しただけである。

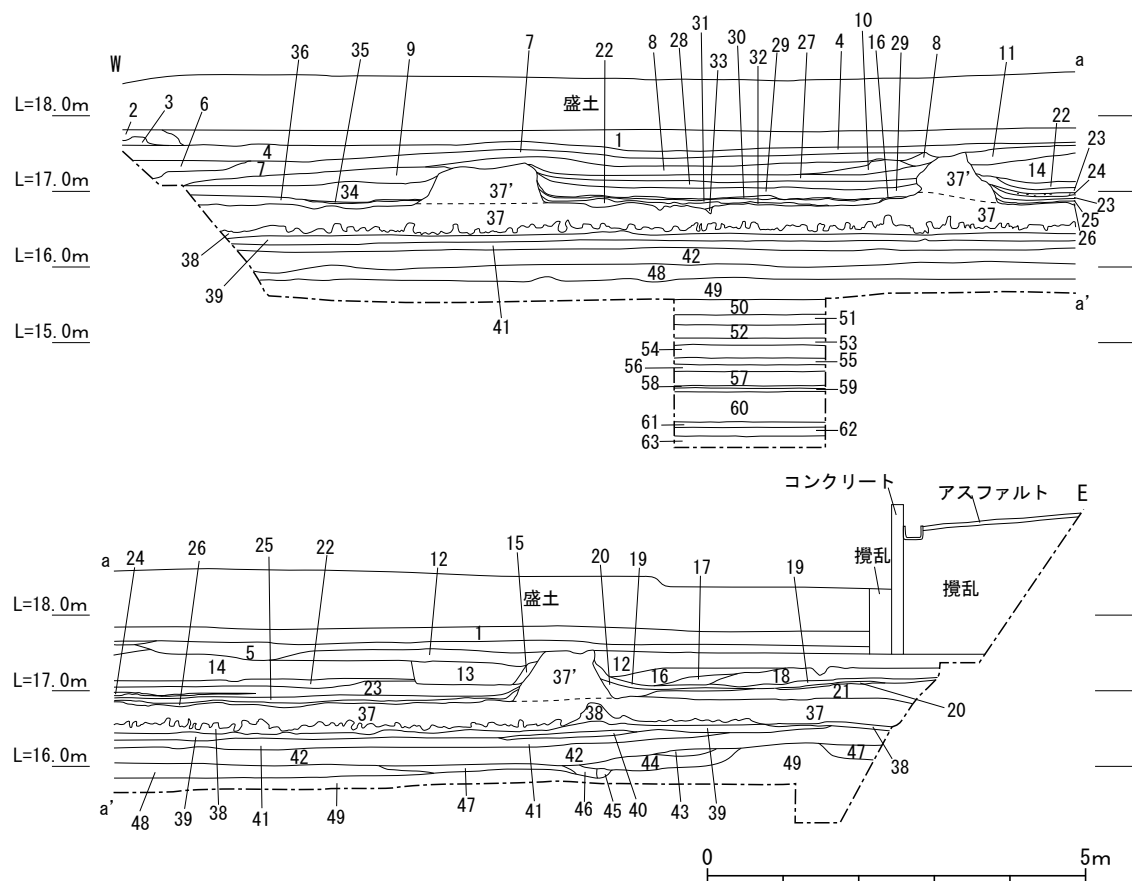


第11図 B2区検出遺構平面図(1/250)

地震痕跡と判断される37・38層よりも上位においては、37層の上位に37'層が畝状に盛り上がっていることが観察された。37層と37'層との境界が不明であることから、37'層は37層を掘削し人為的に盛り上げられたものと判断する。この畝状の盛り上がりと盛り上がりとの間は、シルトや砂が細かく水平に堆積しており、水分を含んだ土壌において、何らかの作物を耕作していたものと判断される(写真図版第7-2)。遺物の出土が無く、時期は不明であるが、地震痕跡の上位にあることから近世初頭以後であること、この段階で池沼といった環境から陸地へと環境が変化したことがわかる。この耕作に伴うと推測される畝状の盛り上がりは北壁・南壁ともに数条確認できること、北壁と南壁で畝状の盛り上がりの位置・形状が異なることから、広く耕作地として利用されていたものの、内部は小区画に分かれていたものと考えられる。

(3)小結

B2区では、顕著な遺構面を確認することができなかった。B1区では、おおむね、古墳時代以前からの池沼と判断される湿地堆積が近世に至るまで確認され、近代にいたってはじめて土地利用が開始されたものと推定された。この調査区もB1区と同じく、近世に至るまで池沼といった環境下にあり、陸地化したのは近世以降と判断される。この時点で土地利用が開始され、壁面土層の観察より、土手状の盛土もしくは大形の土坑を掘削することで小区画を配置しており、何

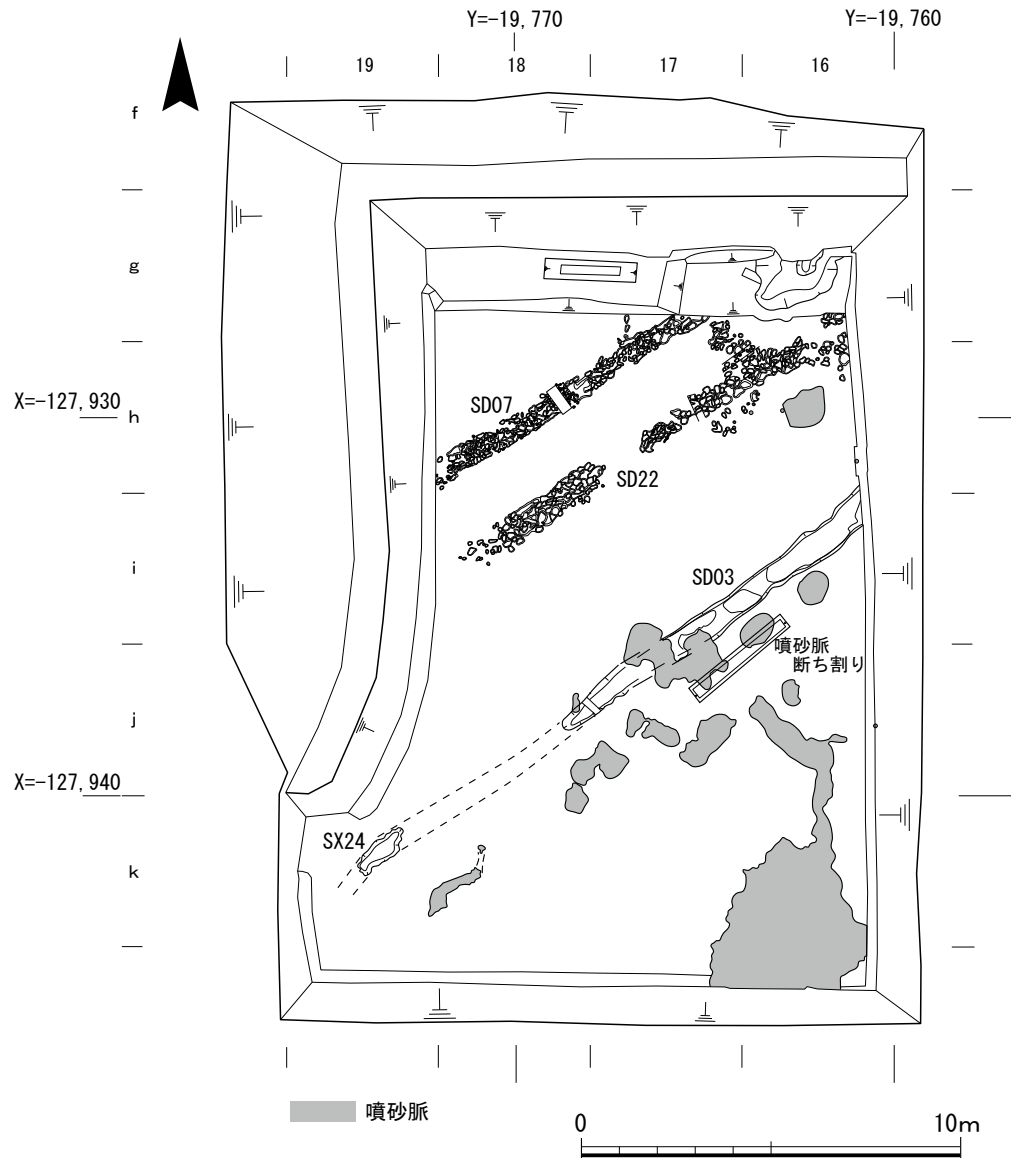


1. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 礫質砂；中～細粒砂 酸化物斑状に10%、炭化物1%
2. 黒褐色 (2.5Y3/1) 礫質砂；炭化物
3. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂
4. 灰色 (7.5Y6/1) 礫質砂；中～細粒砂 酸化物斑状に30%、炭化物1%
5. 灰色 (5Y6/1) 礫質砂；中～細粒砂 酸化物斑状に30%、炭化物1%
6. 灰色 (7.5Y5/1) 礫質砂；中～細粒砂
7. 灰色 (5Y5/1) 礫質砂；中～細粒砂 酸化物斑状に50%、やや粘質
8. 灰白色 (7.5Y7/1) 礫質砂；中～細粒砂；酸化物斑状に50%、炭化物1%、粘質
9. 灰白色 (7.5Y7/1) 細砂；酸化物斑状に1%沈殿、18' 酸化物斑状に30%、明褐色 (10YR6/8) 細砂泥に
10. 灰白色 (5Y7/1) 砂質礫；直径50cm大の礫、酸化物斑状に2%
11. 明褐色 (10YR6/8) 礫質砂；粗～中粒砂；明褐色 (7.5YR5/6) 砂質礫層2層はさむ
12. 明褐色 (10YR6/8) 砂質礫；粗～中粒砂；灰白色 (2.5Y4/1) 砂質礫はさむ
13. 灰白色 (5Y7/1) 砂質礫
14. 淡黄色 (2.5Y8/3) 極粗砂；酸化物斑状に10%、沈殿 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂層あり
15. 灰白色 (7.5Y7/3) シルト；酸化物斑状に10% 砂層はさむ
16. 浅黄色 (2.5Y7/4) 礫質砂；緑灰色 (7.5GY6/2) シルト層あり
17. 明褐色 (10YR5/2) 礫質砂；酸化物沈殿
18. 灰白色 (5Y7/2) 礫質砂；中～細粒砂 酸化物沈殿
19. 灰白色 (7.5Y7/1) 細砂混じりシルト
20. 浅黄色 (2.5Y7/4) シルト；酸化物沈殿
21. 灰白色 (7.5Y7/1) シルト
22. 灰白色 (7.5Y7/1) シルト；酸化物斑状に10%、沈殿
23. 灰色 (7.5Y6/1) シルト；酸化物斑状に5%
24. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト；酸化物斑状に1% 植物片多量に含む
25. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト；酸化物斑状に3%沈殿、淡黄色 (2.5Y8/3) 細砂層あり
26. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト；酸化物斑状に1%沈殿
27. 灰白色 (7.5Y7/1) シルト
28. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) シルト；酸化物斑状に5%
29. 灰白色 (7.5Y7/3) シルト；酸化物斑状に10%
30. 浅黄色 (2.5Y7/4) 礫質砂
31. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト
32. 浅黄色 (2.5Y7/3) 礫質砂；緑灰色 (7.5GY6/2) シルト
33. オリーブ黄色 (5Y6/4) 細粒砂質シルト；酸化物斑状に1%
34. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト
35. 浅黄色 (2.5Y7/4) 礫質砂
36. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト
37. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト；酸化物斑状に20%、炭化物5%
- 37' . 酸化物斑状に50%
38. 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト；FS 酸化物斑状に10%、炭化物2%
39. オリーブ灰色 (5GY5/1) 礫含む極細～細粒砂；酸化物斑状に30%、炭化物1%
40. 灰色 (N6/0) 砂質礫；酸化物斑状に10%、炭化物1%
41. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 細粒砂質シルト；酸化物斑状に30%、炭化物1%未満
42. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 礫含む粗～中粒砂；酸化物斑状に20%、炭化物1%未満
43. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 礫含む極粗粒砂
44. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 礫含む粗～中粒砂 灰白色 (7.5Y7/1) 細砂層あり
45. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 礫含む極粗～粗粒砂；同色シルト混
46. 暗オリーブ灰色 (5GY5/1) わずかに礫含む極粗～粗粒砂；同色シルト混

第12図 B2区北壁土層図(1/100)

第12図土層名の続き

- | | |
|----------------------------------|---|
| 47. 暗オリーブ灰色 (5GY5/1) 礫 中～細 | 56. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細砂質泥、有機物含む |
| 48. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト | 57. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細～細砂質シルト、有機物含む |
| 49. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質砂 | 58. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質泥 |
| 50. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 極細～細砂質シルト | 59. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質泥 |
| 51. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 極細砂質シルト | 60. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質泥、炭化物あり、サンプルあり |
| 52. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト、(陸下面) | 61. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト、有機物あり |
| 53. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細～細砂質シルト | 62. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細砂質シルト |
| 54. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細砂質シルト | 63. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト、有機物あり |
| 55. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細砂質シルト | |



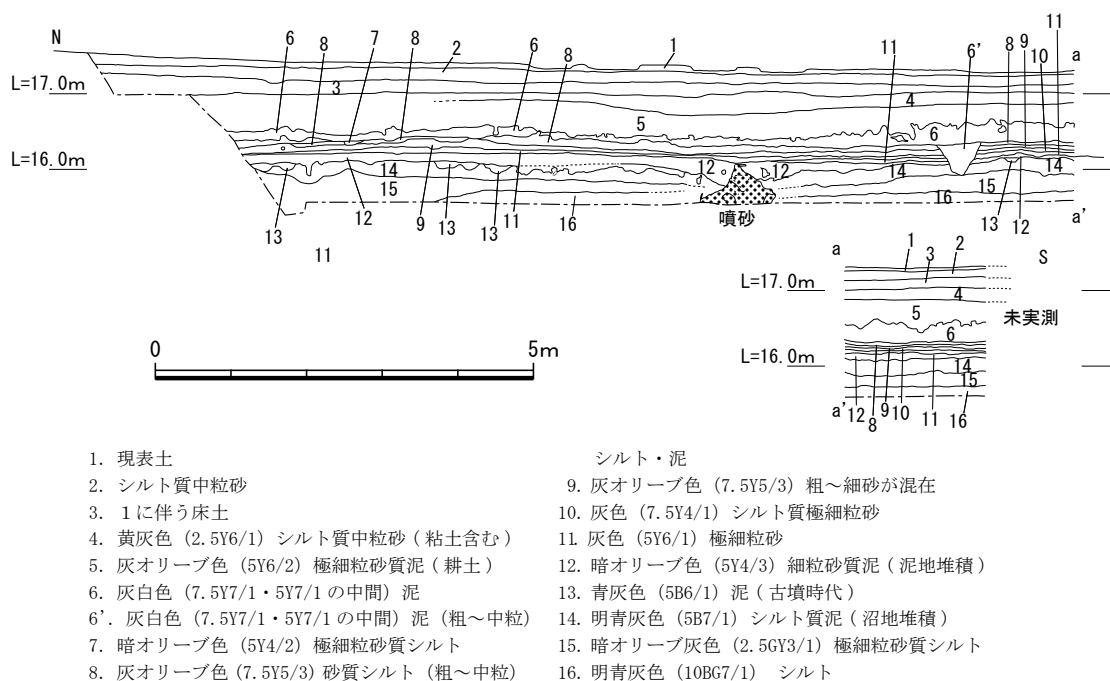
第13図 B3区検出遺構平面図(1/200)

らかの作物が耕作されていたと判断される。

4) B3区の調査

(1) 調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。橋脚7の建設予定地である。重機により表土を除去したところ、標高16m付近の12層下面で色調の違いを確認し、精査を行った。遺構と



第14図 B3区東壁土層図(1/100)

しては、古墳時代のものと想定される溝S D03・S X24および溝状の遺構を検出した。そのほか、地震による噴砂および地層の液状化に伴う攪乱が認められた。調査においては、噴砂痕にも遺構ナンバーを付与してを記録を行ったため、遺構番号を24まで付したが、ほとんどが噴砂痕である。遺構もしくはそれに準ずるものを報告する。

(2) 基本層序

現地地表下、11層の灰色極細粒砂にいたるまではほぼ水平に堆積している(第14図)。このうち、5層と6層の間が地震により攪乱を受け、6層が5層の中に火炎状に混じり込んでいた。これは1596年の慶長伏見地震のものと判断される。4層より上はこの地震の影響を受けていないため、近世以降の堆積と判断される。12層以下では粗砂が下位の層から吹きあがった噴砂が認められ、12層近辺でその頂部が認められた。この噴砂より下の地層では、噴砂の吹きあがりのため地層が歪められた状況が認められる。8層から13層上面にいたるまで遺構の検出に努め、溝S D03等が12層下面から掘り込まれているのを確認した。遺構はなく、13層よりも古墳時代の遺物がわずかに出土した。最終的に断ち割りを行って下層の調査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第13図)

溝S D03 調査区の南半部で検出した溝で、北から東に約55°振れている。底面の掘形は一様ではなく、深く掘り込まれた部分と浅い部分がある。S D03は幅0.65mで、検出高は0.03～0.15m、検出長は9.85mである。遺物は土師器小片が一点出土するのみで詳細な時期は不明である。南西端は土坑状(S X24)を呈しており、幅0.63mで、検出長は1.45m、検出高は0.15mである。S D03の南西側に延長した位置にあり、同一の溝の残欠と判断する。噴砂により遺構は引き裂かれている。

溝SD07 調査区の北辺近くで検出したもので、北から東に約55°振れている。幅0.64mの範囲に足跡状のくぼみが多数穿たれたものである。SD03、SD22と平行していることから人為的なものと判断され、何らかの区画を反映しているものと推測される。足跡状のくぼみは、調査時には溝底を通路として利用したためと判断したが、氾濫流路の可能性も否定できない。

溝SD22 SD07と1.4～1.6mの空閑地を開けて平行する遺構である。北で東に約55°振れる。足跡状のくぼみが多数穿たれたもので、SD07と同様のものである。

噴砂痕 調査区の南半を中心に噴砂痕が多数確認できた。噴砂は粗砂が主体で、調査面から約1.3m下の砂層から吹き上がったものである(写真図版第10)。

(4)小結

B3区では溝状の遺構を3条検出しただけで、顕著な遺構は確認できなかった。噴砂をはじめとして地層の変形といった地震痕跡を検出したことから、近世初頭には池沼といった環境下にあったものと判断される。溝状の遺構SD03・07・22は時期は不明であるが、地震よりも古い時期の遺構であることは検出した層位や、SD03が噴砂に遺構が引き裂かれていることから明らかである。SD07・22は足跡状の小ピットが底面に認められることから氾濫流路の可能性はあるが、これらが平行して直線状に検出されている点で人為的な遺構である蓋然性が高い。地震の発生した近世初頭以前のある時期に、陸地化して土地利用がなされていたことがうかがえる。また、これらの溝がほぼ平行していることから、地割りに関するものとも想定され、これに準じた地割りがなされていた可能性が想定できる。

5) B4区の調査

(1)調査の概要

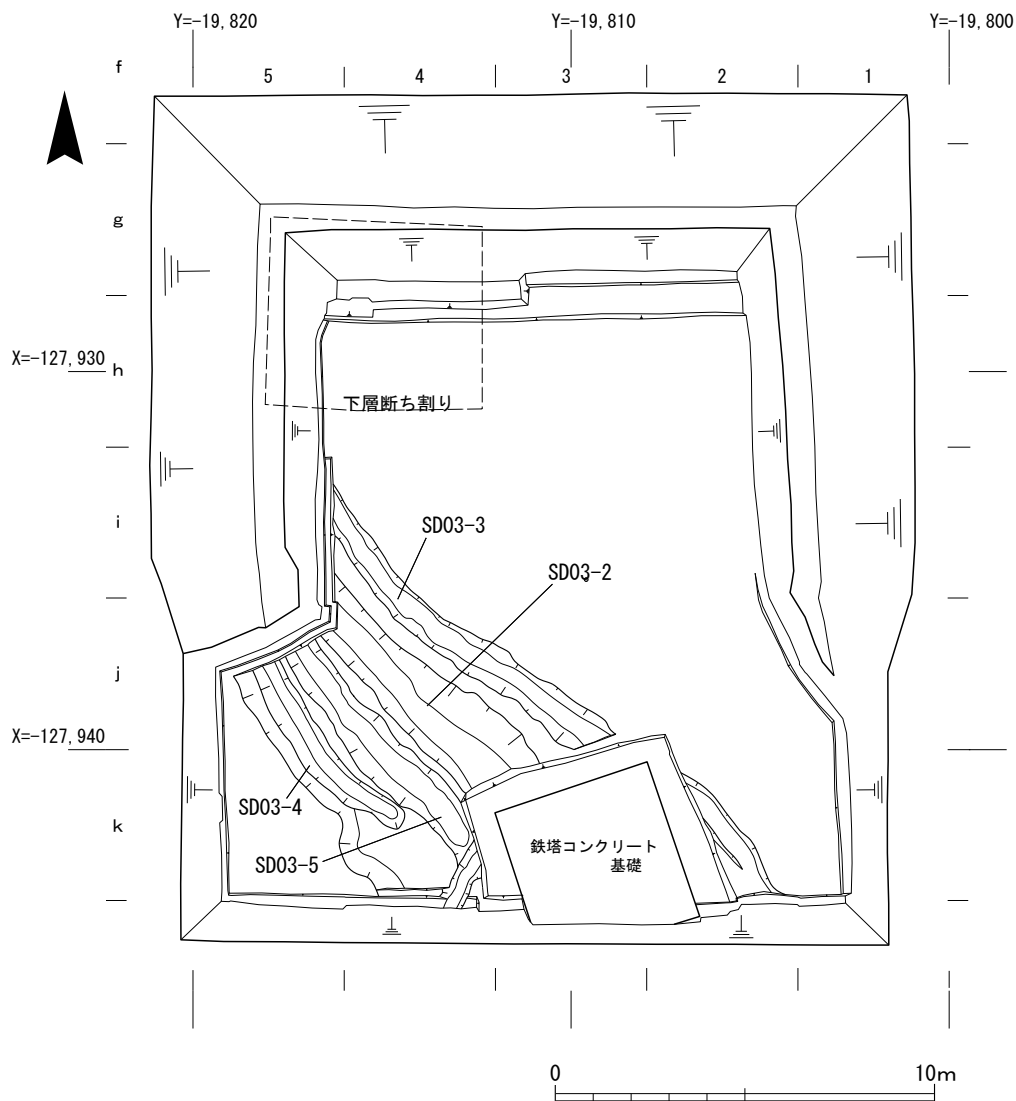
平成30年度に第6次調査として実施した。橋脚8の建設予定地である。中世の遺構面と古墳時代の遺構面の2面で調査を行った。第1面の中世の遺構面では、畦畔などの遺構は確認できなかったが、偶蹄類の足跡や鋤痕の可能性のある痕跡を確認した(写真図版第12-1・2)。耕作に伴う農地として土地利用されたものと判断される。第2面の古墳時代の遺構面では5条の溝を検出した。これらの溝は調査区を北西から南東に斜行して重複して掘削されていることから、長期間にわたって、継続的に利用されていたと考えられる。

(2)基本層序(第16・17図)

水田耕作土の下、16層までは水平堆積となっており、このうち3層と5層で地震による地層の変形が認められた(写真図版第14-1・2)。近世初頭の慶長伏見地震によるものと推定される。7層の暗オリーブ色細粒砂質泥中からは中世以前の遺物が少量出土し、8層の上面(第1面)および下面(第2面)で遺構を検出し、それぞれの標高はおおむね16.2m、16.0mである。11層以下については、シルト層、泥層が重なっており続き、表土から2.2m下で砂層を確認した。これらの層からは遺物の出土は認められなかった(写真図版第14-3)。

(3)検出遺構(第15図)

第1面(写真図版第11-1、12-1・2) 畦畔などの遺構は確認できなかったが、偶蹄類の足跡や鋤



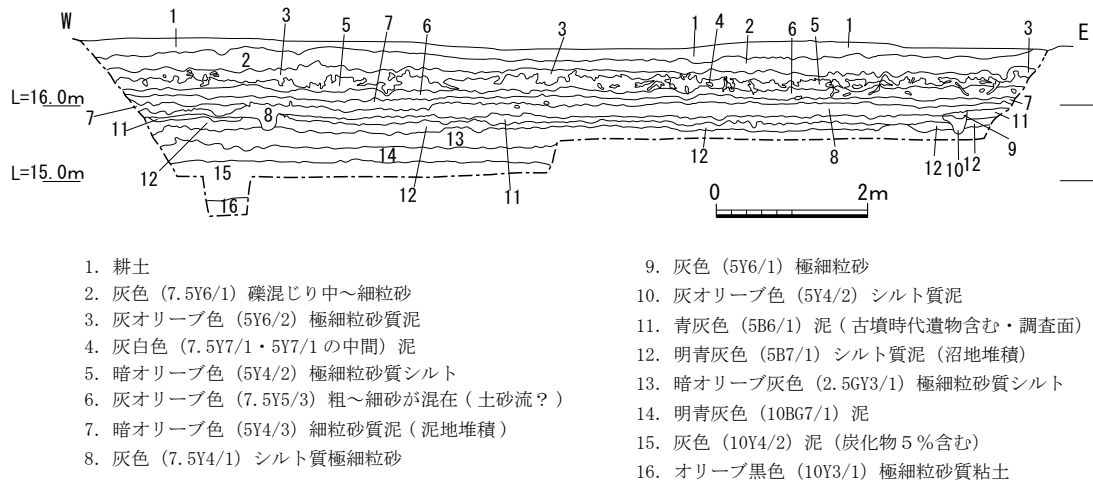
第15図 B4区検出遺構平面図 第2面(1/200)

痕の可能性のある痕跡を確認した。

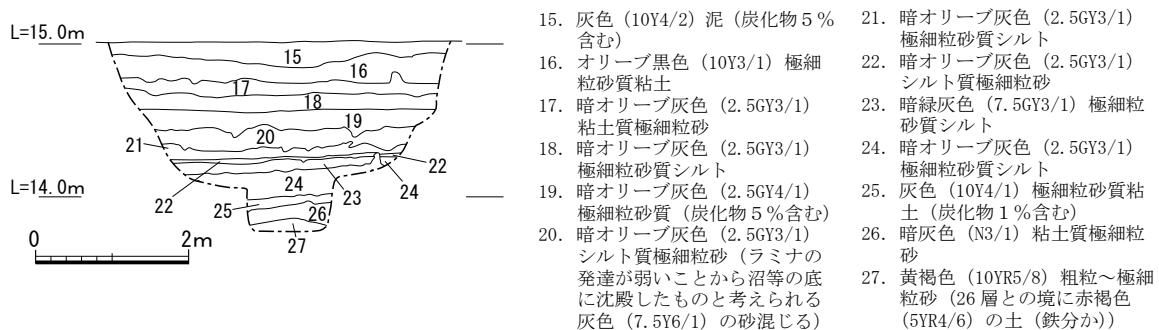
溝SD03(第18・19図・写真図版第12-3) 第2面の調査区南西付近で検出した溝である。溝は調査区を北西から南東に斜行している。複数の時期の溝がほぼ位置を変えずに、再掘削を行うことで、継続的に利用されていたと考えられる。最も新しい溝はSD03-2で、埋土中には土師器、瓦器など中世の遺物を包含し、溝底には足跡状の多数の痕跡が認められた。最も古い段階の溝はSD03-5で、古墳時代後半の土師器、須恵器甕が出土している。埋土の堆積状況から、SD03-5はもともと自然流路だったものを人工的に再掘削した可能性がある。また、遺物の出土状況から、土器は東側から流れ込んだものと考えられる。須恵器杯身・杯蓋(第38図21～23)、土師器鉢(24)、須恵器甕(25・26)が出土した。

(4)小結

この地区では、近世初頭の地震痕跡が認められたことから、地震発生時には池沼の底といった水を多く含む環境下にあったことは、この東側のB1～3区と同様である。しかし、中世および



第16図 B4区北壁土層図(1/100)



第17図 B4区北壁断ち割り土層図(1/100)

古墳時代における土地利用を示す遺構を確認したことは、少なくとも古墳時代～中世においては池沼といった湿潤な環境下にあったのではなく、陸地化していたものと判断される。人間活動の痕跡が極めて稀薄であることは、居住に適した条件ではなかったことがうかがえる。

6) B5区 の 調査

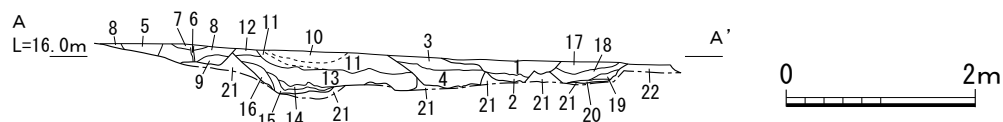
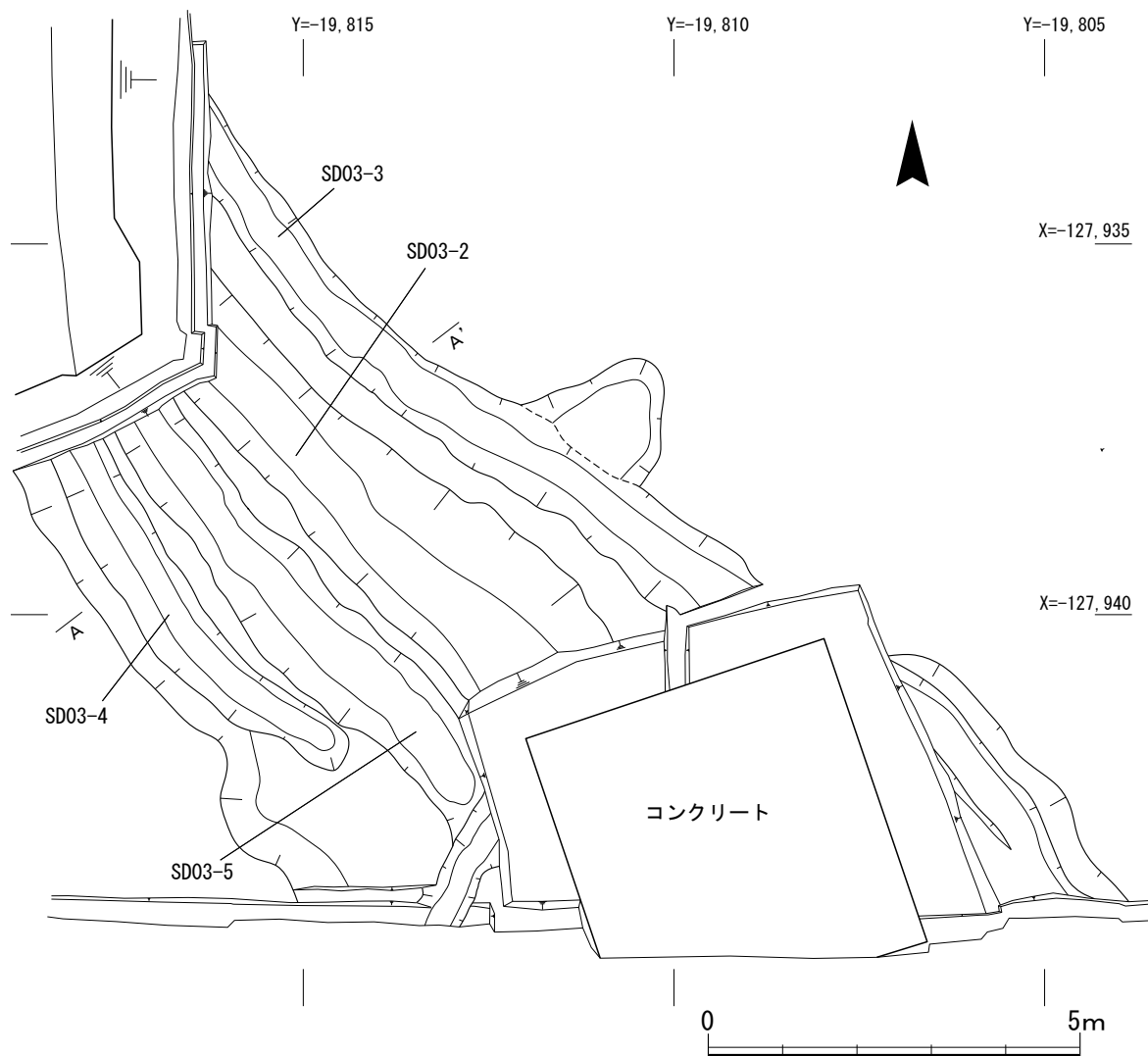
(1) 調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。橋脚9の建設予定地である。2面で調査を行った。上層の第1面は中世の遺構面で、耕作溝と判断する小溝群およびピット群を検出した。建物に復元できる柱並びは確認できなかった。耕作溝は南北方向と東西方向の溝を検出し、条里地割りに伴う区画溝の可能性が考えられる。これらの溝は切り合い関係を有することから、比較的長期間にわたって土地利用されたものと推測される。

第2面では古墳時代の溝を検出した。北西から南東に斜行する溝と円弧状に掘削された溝がある。円弧状の溝からは古式土師器が出土しており、古墳時代前期のものと考えられる。

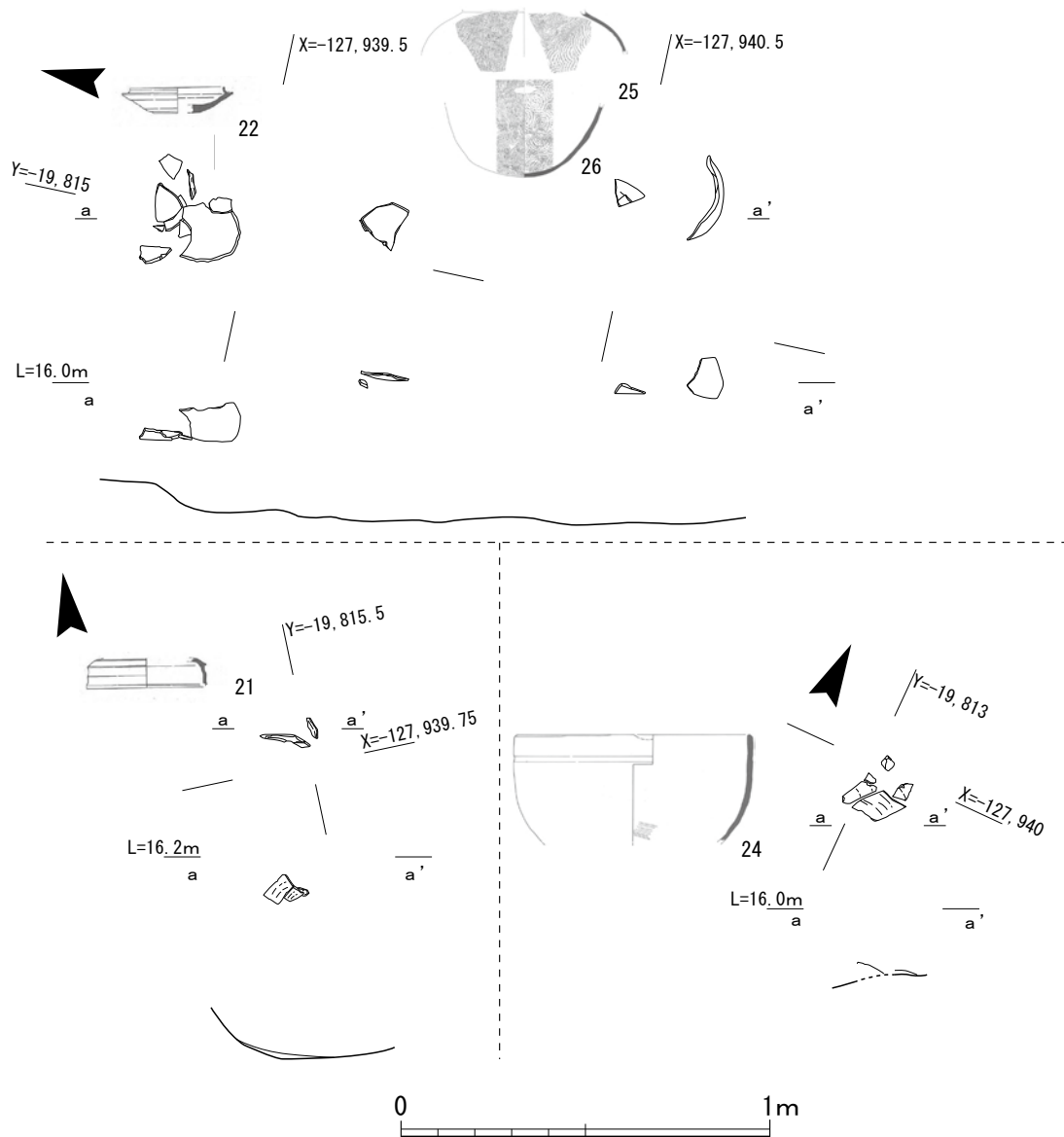
(2) 基本層序(第21・23図)

上位から、1層の黄灰色シルト質中粒砂、2層の灰オリーブ色極細粒砂質泥、3層の灰白色泥、4層の暗オリーブ色極細粒砂質シルト、5層の灰色シルト質極細粒砂、6層の灰オリーブ色シルト質泥は平面的に検出できなかったが、南半で検出した小溝群と同様の溝が北半にも分布してお



1. 灰色 (7.5Y4/1) 泥質シルト; 灰オリーブ色 (5Y4/2) 極細粒砂質のラミナが発達・S D03-1 埋土
2. 灰色 (10Y4/1) シルト質泥; 偽礫 (2層) 含む・S D03-1 埋土
3. 灰色 (10Y5/1) 泥質シルト; 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂のラミナが発達・S D03-2 埋土
4. 暗オリーブ色 (5G3/1) 極細粒砂質シルト・S D03-2 埋土
5. 灰色 (7.5Y6/1) シルト質泥・S D03-4 埋土
6. 灰色 (7.5Y5/1) シルト泥; ひび割れに流入したものか・S D03-4 埋土
7. 灰白色 (7.5Y4/1) 極細粒砂質シルト・S D03-4 埋土
8. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 極細粒砂質シルト・S D03-4 埋土
9. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 泥質シルト・S D03-4 埋土
10. 灰色 (7.5Y4/1) 泥質シルト・S D03-5 埋土 (須恵器・土師器を包含する)
11. オリーブ灰色 (10Y4/1) 泥質シルト・S D03-5 埋土
12. 灰白色 (10Y8/2) 極細粒砂質シルト・S D03-5 埋土
13. 灰色 (10Y4/1) シルト質泥; 偽礫 (21層) 含む・S D03-5 埋土
14. オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト質極細粒砂; 溝形成時に強い浮力によって運ばれた・S D03-5 埋土
15. 灰色 (10Y6/1) シルト質泥; 炭化物含む・S D03-5 埋土
16. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト質極細粒砂; 溝底方向へのラミナが発達・S D03-5 埋土
17. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂質シルト; 偽礫 (21層) 含む 中世耕作溝・S D03-3 埋土
18. 暗オリーブ色 (2.5GY4/1) 泥質シルト; 細粒砂のラミナが発達 東側から溝が埋まった・S D03-3 埋土
19. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 泥質シルト・S D03-3 埋土
20. オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト質泥・S D03-3 埋土
21. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土<ベース面>
22. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土<21より粘性強い>

第18図 B4区 溝S D03平・断面図(1/100・1/80)

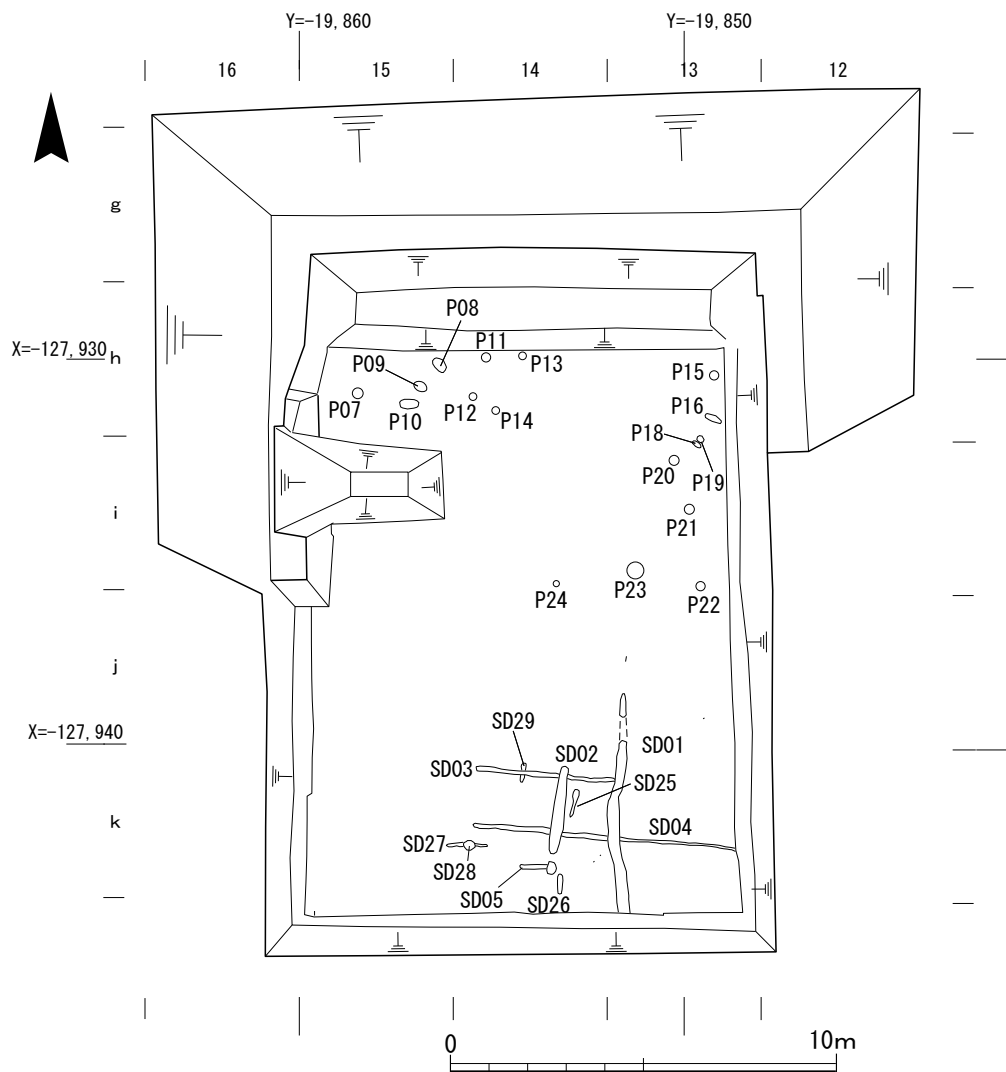


第19図 B4区溝S D03内遺物出土状況図(1/20)

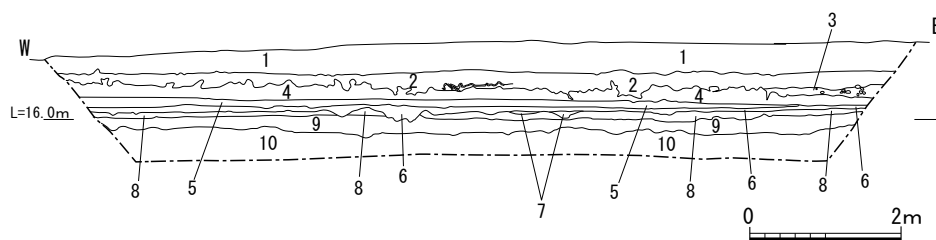
り、溝群の埋土となる。7層の灰オリーブ色粘質土シルト、8層の灰オリーブ色粘質シルト、9層の青灰色泥が堆積している。基本的に水平堆積である。3層と4層の間に、地震による火災状の地層の乱れが認められ、この時点では池沼の中など、水中にあったものと判断される。それ以前は陸地化していたようで、6層下面、8層上面が上層遺構面である第1面で、中世の遺構を検出した。8層下面、9層上面が下層遺構面の第2面で、古墳時代の遺構を検出した。8層からは須恵器杯蓋(第39図30・31)が出土している。9層から下では遺物の出土は無い。第2面の調査終了後、下層を断ち割り、遺構の有無を確認したところ、これより下はシルト層が厚く堆積しており、長期間にわたって池沼であったと判断される。1.2m下で砂層を確認し、河川による砂層と判断される。断ち割り内から、遺構・遺物は認められなかった。

(3) 検出遺構

① 第1面(第20図)



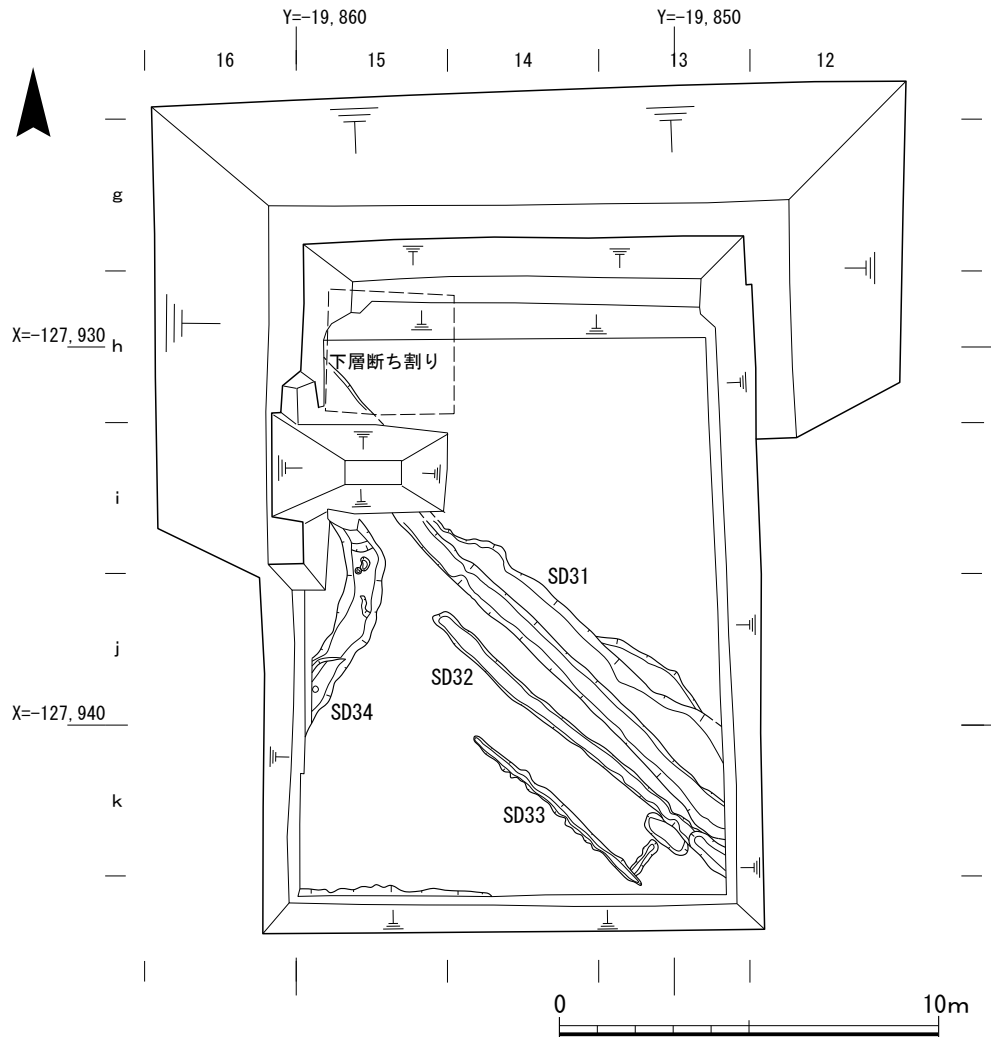
第20図 B5区 検出遺構平面図 第1面(1/200)



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト質中粒砂 (粘土含む) | 6. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質泥 (マンガン1~2%) |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂質泥 (耕土) | 7. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土シルト (6層が混じる) |
| 3. 灰白色 (7.5Y7/1・5Y7/1の中間) 泥 | 8. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質シルト (中世~古墳時代遺物含む) |
| 4. 暗オリーブ色 (5Y4/2) 極細粒砂質シルト | 9. 青灰色 (5B6/1) 泥 |
| 5. 灰色 (7.5Y4/1) シルト質極細粒砂 | 10. 明青灰色 (5B7/1) シルト質泥 (沼地堆積) |

第21図 B5区北壁土層図(1/100)

小溝群 調査区の南半で検出した。南北溝を5~7条、東西溝を4条検出した。これらは切り合い関係を有し、S D29(南北)→S D03(東西)→S D01・02(南北)の3時期のものがある。溝の規模は深さは最大で0.15m、幅0.06~0.3m、検出長は最大のもので6.9mである。また、平面的には確認できなかったが、北壁断面で同様の小溝群と判断される土壌を確認しており、本来的には



第22図 B5区検出遺構平面図 第2面(1/200)

ほぼ全面に分布していたものと推測される。

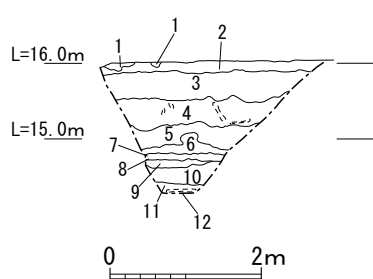
ピット群 調査区の北半で検出した。径0.1～0.2m、深さ0.1～0.2m程度のピットであるが、建物に復元できるものはない。

②第2面(第22図)

溝SD31 二段に掘り込まれた溝で、東辺は一段浅く掘られており、西辺に沿って深く掘られている。北西に向かうにつれて削平を受けたためか、上段の溝は狭くなっている。上段の溝を含めた幅は0.65～2.15m、深さ0.1～0.15m、下段の溝は幅0.55～0.95m、深さは0.15～0.3m、検出長15.6mである。北西から南西に下る傾斜をもつ。北で西に約50°振れる。

溝SD32 SD31の南側に平行して掘削された溝である。北西端は浅くなって終わる。底面は凸凹になっている、南東端のみ土坑状に深く穿たれており、それ以外はほぼ水平な傾斜を有する。幅0.45～0.7m、深さ0.05～0.15m、検出長10.05mである。

溝SD33 調査地内で北西端と南東端を検出した。底面は凸凹に穿たれているが、溝全体としては傾斜は認められず、ほぼ水平である。幅0.2～0.35m、深さ0.1m、検出長5.9mである。



1. 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト＜マンガン 10% 下の方は2が混じるところあり、上方に向かって若干の変色が見られる＞
2. 青灰色 (5B6/1) 泥 古墳時代 地山
3. 明青灰色 (5B7/1) シルト質泥 沼地堆積
4. オリーブ灰色 (10Y5/1) 極細粒砂質シルト＜植物痕跡により泥が40%程度斑に混じる＞
5. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト質細粒砂＜植物痕＞
6. オリーブ色 (5Y5/4) シルト質細粒砂＜4層と同一層と推定されるが水の影響により土色変化をおこしている＞
7. 明黄褐色 (10Y6/8) シルト質極細～細粒砂＜褐灰色 (10YR6/1) が上層に堆積し波状を呈する＞
8. にぶい黄褐色 (10YR4/2) シルト質細粒砂＜黒褐色 (2.5Y3/1) が6層との境にたまる。堅固＞
9. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質極細粒砂
10. 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト質細粒砂＜横方向のラミナが発達 若干西下がり＞
11. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂質シルト
12. オリーブ色 (5Y5/6) シルト質極細粒砂

第23図 B5区北壁断ち割り土層図(1/100)

溝SD34 調査区西側で円弧状に検出した。溝西側の肩部は垂直に近い形状をしており、人為的に掘削されたと考えられる。古墳時代前期のものと考えられる。幅1.6m、深さ0.43m、検出長5.7mである。用途は不明である。土師器鉢(第39図33)が第1層から出土した。

(4) 小結

B5区では2面で調査を行い、中世のピット・小溝群、古墳時代の溝を検出した。中世の遺構面では南北方向の溝5～7条、東西方向の溝4条を確認した。同様の正方位に掘削された溝は、関電鉄塔建て替えに伴い城陽市教育委員会が調査を実施した第2次調査でも確認されている。これらの溝は正方位に掘削されていることから、条里地割に伴う区画溝の可能性が考えられる。また、建物跡には復元できなかったが、ピット群を検出し、この周辺が人が住まう居住域として利用されていた可能性がある。第2面の古墳時代の溝SD31～33については、北で西に約50°振れて平行した状況で検出した。その用途は不明であるが、その中でもSD31は南へ下る傾斜を有することを重視すると、水路として利用された可能性がある。SD32・33は水が流れた溝とは積極的に評価できないが、SD31に平行して直線的に検出したことから、人工の溝である可能性が高く、区画溝などの性格であった可能性が高い。B3区では北で東に約55°振れる溝群が検出されており、ほぼ直交している。

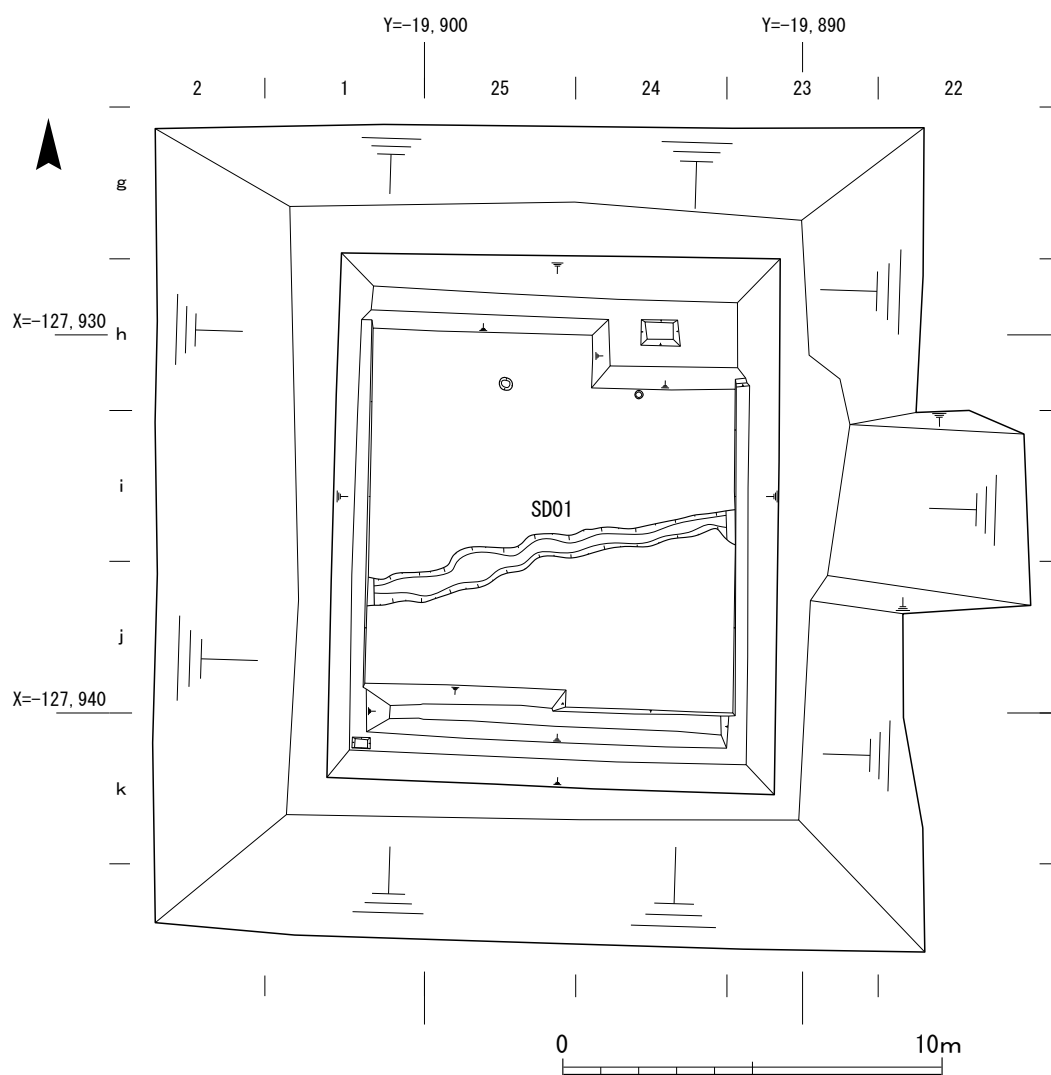
(竹村亮仁・岩松 保)

7) B6区の調査

(1) 調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。南北21.6m、東西20mの調査区である。旧耕作土の上に2m程度の盛土が置かれており、これを除去して調査を行った。旧耕作土以下の掘削範囲は南北14m、東西12mである。耕作土を除去した面から調査に着手した。遺構面にいたるまでに地震による地層の変形を確認した。池などの湿潤な土地に地震などが残す土壌の液状化現象の痕跡であり、水浸かりの時期と乾いていた時期が交互に訪れていたことが確認できた。この下層には耕作土が3層にわたって堆積する。耕作土層はそれぞれ数cmの薄い堆積で、中世前期の遺物をわずかに含む。遺構を精査した結果、東西方向に延びる溝SD01を確認した。埋土からは古代以前の土師器片が出土した。溝SD01は、中世以降に農耕地として利用されたため、その上部が削平されたと判断される。鳥畑の痕跡は確認できなかった。

(2) 基本層序(第25図)

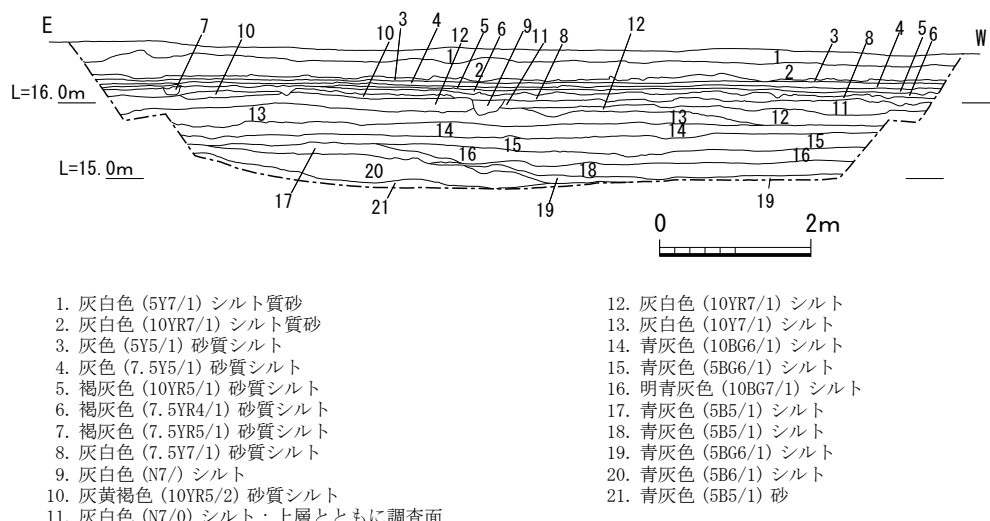


第24図 B6区検出遺構平面図(1/200)

1層は近代から現代にかけての耕作土層である。2層はその造成にともなう層序でその下層である3層との層境に地震によるゆれ痕跡が確認できる。3層から10層は中世後期から古代にかけての遺物包含層であり、これらの層を除去した11層上面を調査面とした。精査時の10・11層中から瓦器碗(第39図36・37)や須恵器杯・鉢や瓦質土器鉢などが出土している。調査面から下層の土層では、12層から20層にかけて、シルト層の堆積が続く。これらの層序は層ごとの変化があまり見られず、漸次的な堆積をした様子の砂質シルト層が4～5層続き、その下位で有機質や木質の混じる粗砂主体の青灰色砂層を確認したが、遺物は確認できなかった。粗砂層より湧水層となり、旧河川に関連する層と考えられるが、礫の混入が認められないため、河床そのものではなく、旧河川周辺に堆積した砂の様相である。

(3) 検出遺構(第24図)

溝SD01 東西方向の溝で、検出長10m、深さ0.2mを測る。耕作関連の溝と判断するが、これ以外に溝を検出していないため、後代の耕作地として利用された際に削平を受けていると判断



第25図 B6区南壁土層図(1/100)

される。土師器甕(44)と土師器甕底部(46)が出土している。古墳時代前期と判断する。

(4) 小結

地震などの成因により土壌が攪拌されたと判断される土層の乱れが確認できたことから、近世初頭にはこうした堆積状況が生成される程度に湿潤な池や湿地などの環境であったようである。そのほか、中世の耕作土と推定される土壌を確認し、この下位で東西方向に延びる溝を検出した。この溝は後世の耕作などにより上位が削平を受けているものと考えられ、中世段階に耕地化した時点で削られたものと想定できる。

8) B7区の調査

(1) 調査の概要

平成29年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。橋脚11の建設予定地の調査である。南北19.4m、東西15mの調査区である。正方位にのる溝5条(東西溝3条、南北溝3条)を確認した。溝の埋土からは摩耗した土師器皿などが出土し、遺物の年代から中世前期までには埋没したものと判断した。このほか南東から北西に延びる溝S D03を検出した。溝S D03は方位にのる溝S D02との切り合い関係から溝S D02よりも古い時期に構築されたものと判断した。また遺構面直上の精査では南宋の古銭や中世前期の瓦器碗が出土している。調査面から下層には厚さ1mにわたってシルトが堆積し、さらに下層で粗砂層を確認した。

(2) 基本層序(第27図)

1～4層は近代から現代の耕作土である。7・9・13層は中世耕作土で、その下15層上面で安定面を確認し、調査面とした。調査面直上の13層からは白磁(第40図47・49)、瓦器碗(50)などが出土している。島畑の盛土や削り込みは確認できず、調査面より下の堆積は砂質シルトからシルト層が続く。また、地表面より0.3m下あたりの5層と6層の間に、約10cmの幅に波打つ層が形成されており、近世に起こった地震の痕跡のようである。さらに、B7区全域において、下層の中粒砂層の浮き上がりが数か所が認められ、地震の影響で隆起してきた噴砂であると言える。

(3) 検出遺構(第26図)

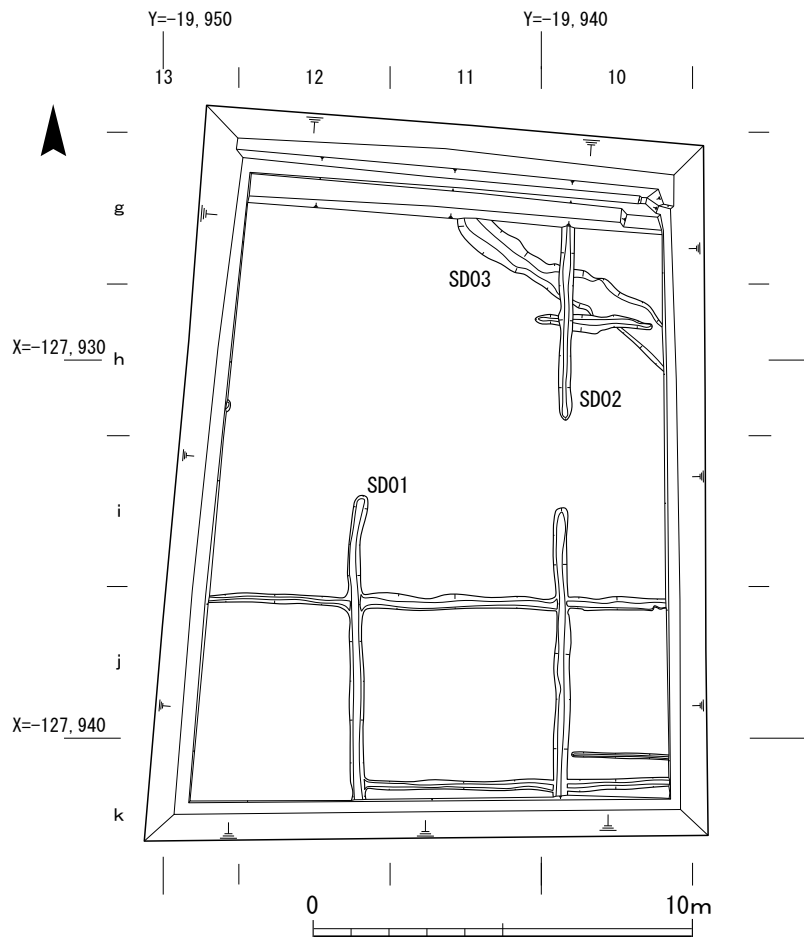
溝 S D01 調査地の南側で検出した正方位にのる溝である。検出幅0.4m、長さ8 m、深さ0.15mを測る。

溝 S D02 調査地の北側で検出した正方位にのる溝である。検出幅0.4m、長さ5 m、深さ0.15mを測る。

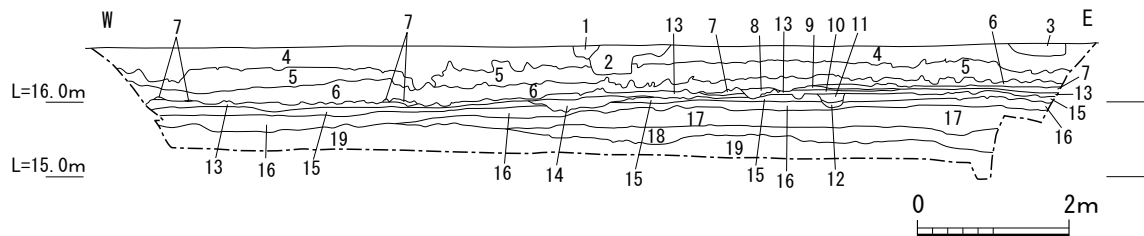
溝 S D03 調査地の北東部で検出した斜行する溝である。溝 S D02と重複しており、切り合い関係より S D02に先行するものである。検出長6.6m、深さ0.15mを測る。遺物を包含しない。

(4) 小結

B 7 区では正方位の溝を検出した。これらの溝は耕作溝として掘削され、条里地割に伴うものの可能性が考えられる。当地は一時期は耕作地として利用されているにも関わらず、島畑が造成された痕跡は確認できなかった。これは木津川氾濫による冠水の恐れがなく、島畑を造成して作物の被害を防ぐ必要がなかったため

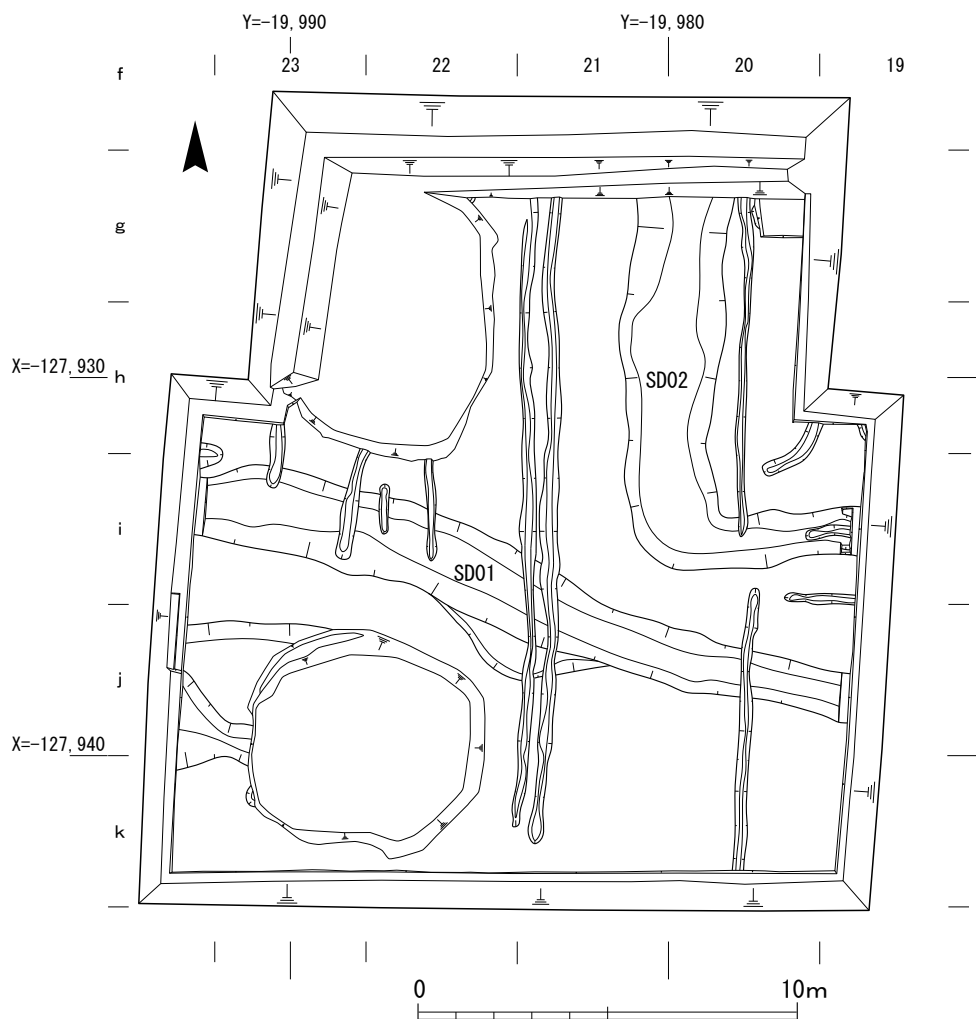


第26図 B 7 区検出遺構平面図(1/200)



- | | | |
|----------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| 1. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト | 8. 暗オリーブ灰色 (5GY5/1) 砂質シルト | 14. オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト質砂 (SD03) |
| 2. 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト | 9. オリーブ灰色 (5GY5/1) 砂質シルト | 15. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト |
| 3. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 砂質シルト | 10. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 砂質シルト | 16. 灰色 (10Y5/1) 砂質シルト |
| 4. 灰色 (7.5Y6/1) 砂質シルト | 11. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト質砂 (SD02) | 17. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト |
| 5. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂質シルト | 12. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト質砂 (SD02) | 18. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト |
| 6. オリーブ灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト | 13. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト質 | 19. 灰色 (5Y4/1) シルト質砂 |
| 7. 灰色 (10Y5/1) 砂質シルト | | |

第27図 B 7 区北壁土層図(1/100)



第28図 B8区検出遺構平面図(1/200)

と考えられる。その後、地震痕跡を確認したことより、近世初頭には水を含んだ湿地状の環境になったようである。

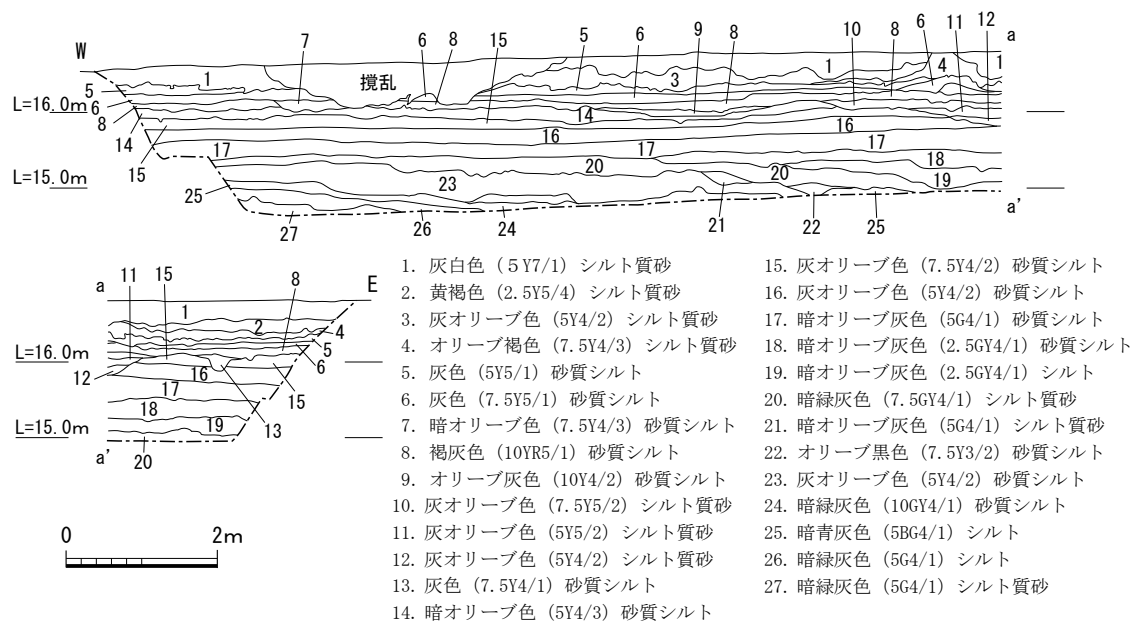
9) B8区の調査

(1)調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。南北20m、東西21mの調査区である。中世の南北・東西の耕作溝、東西方向に延びる溝SD01とL字に折れる溝SD02の溝2条を検出した。これらの溝の埋没以後に畑作地が構築され、中世前期の遺物を包含する鋤溝を確認し、鋤溝構築層の上層からは16世紀までには収まる瀬戸美濃天目茶碗などの中世遺物が出土した。さらに上層では近世初頭の地震による地層の乱れを確認した。下層を断ち割ったところ約1m下層までシルト層が堆積し、さらにその下からは流路と考えられる粗砂の堆積を確認した。

(2)基本層序(第29図)

1層から5層は近世以降現代の土層で、6・7層は中世の遺物を含む土層である。8層には古墳時代の遺物を含み、8層下面を調査面として遺構を検出した。6・8層からは中世土器(第40図53～59)が出土している。調査面以下、砂質シルト、シルト層が続く、遺物の出土は確認でき



第29図 B8区北壁土層図(1/100)

なかった。また島畑の痕跡は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第28図)

小溝群 東西・南北の小溝を調査区全域で検出した。後述のS D01・02に切り勝つ状況である。耕作に係る溝と判断される。

溝S D01 調査地を東西に横断する溝である。検出長18m、幅2m、深さ0.2mを測る。埋土の堆積状況から東から西に流れていたものと考えられる。土師器甕(第40図60)が出土した。このほか、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。

溝S D02 調査地北東部で検出したL字に折れる溝である。検出長14m、深さ0.2~0.3m、幅1.2~2.8mを測る。遺物は包含していないが、検出した層位から中世以前と考えられる。

(4) 小結

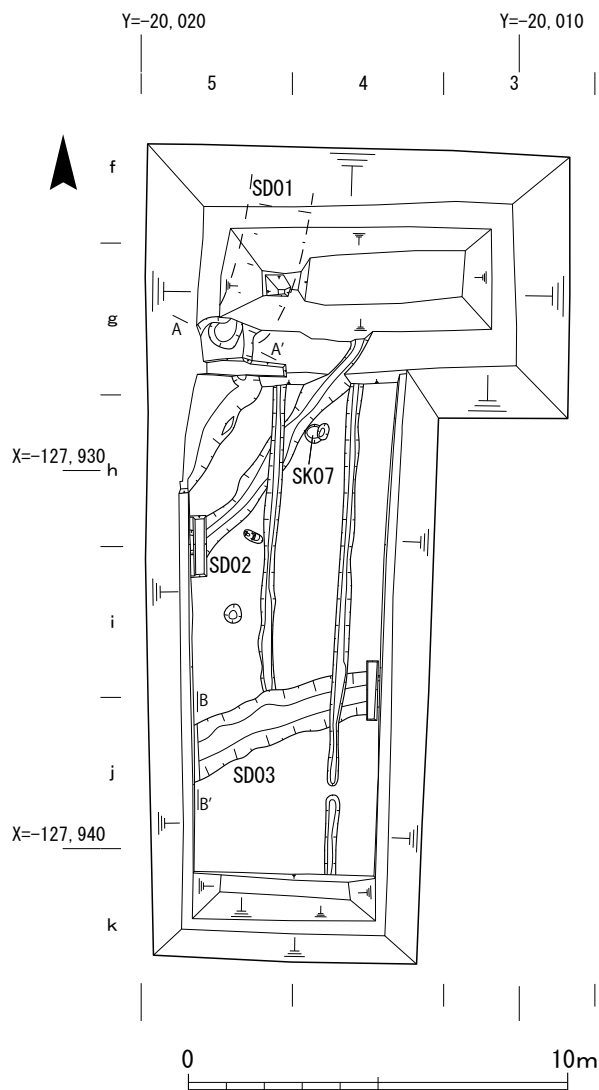
今回検出した遺構は、中世の耕作溝や古墳時代の溝である。中世・古墳時代以前の土壌は、シルト層が厚く堆積しており、水浸かりの時期が長い土地と考えられる。古墳時代、中世には溝や耕作関連の溝が検出されたものの、集落の中心部ではなく、その周縁部で、積極的な土地利用はなされなかったと考えられる。そして、近世初頭には、B7区などと同様に、地震による土壌の攪拌と推定される堆積環境が認められることから、再び、水浸かりの環境下に転じたものと想定される。

10) B9区の調査

(1) 調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。橋脚13の建設予定地である。南北21.4m、東西11.2mの調査区である。

B9区では断面観察により江戸時代に造成された島畑を確認した。壁面の観察により、調査区の東端に盛土による島畑の造成が確認でき、肥前Ⅲ期の遺物が混入することから、近世に造営さ



第30図 B9区検出遺構平面図(1/200)

れた島畑と考えられる。近世島畑以前の遺構としては、流路3条と土坑4基、耕作溝2条を検出した。西北端で検出したSD01・02は古墳時代、東西に延びる溝SD03は東から西にゆるやかな傾斜をもち、古代の溝である。下層を断ち割り確認したところ、下層には砂質シルトが堆積し、さらに西に向かって傾斜する堆積を確認した。調査面から約1m下からは粗砂主体の堆積層を確認したのみで遺構・遺物は確認できなかった。

(2) 基本層序(第31図)

遺構検出面の直上の層序では中世前期の遺物が出土し、鋤溝も同時期の遺物を包含する。基本層序はB6区からB8区までの調査区と同じであるが、近世以降の島畑を観察できた。8・13層は島畑西側の溝内に堆積した層序にあたり、この東側に島畑状の高まりが見て取れる。10・11・14・15層は島畑の盛土であり、造成土内から18世紀の肥前磁器片を確認した。こうした灰白色系統の砂質シルト層を除去した下層に中世遺物を包含する19層の

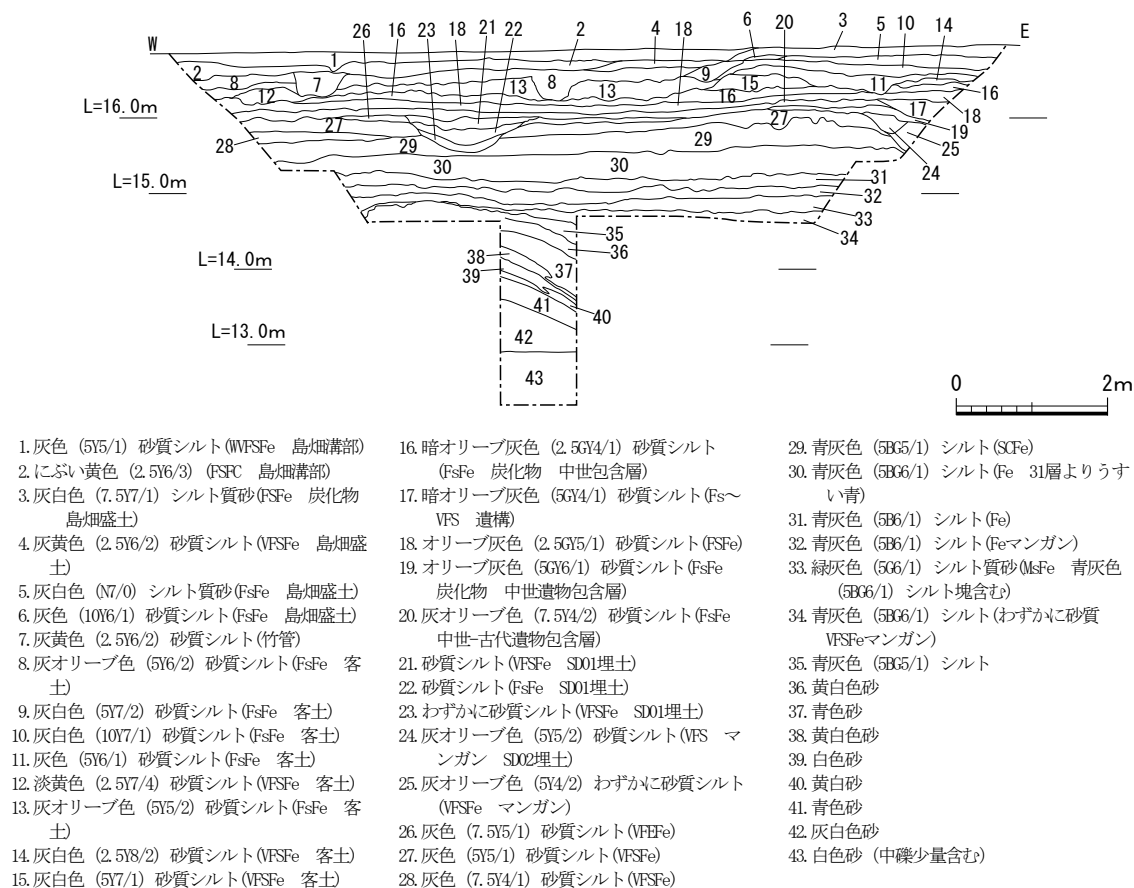
オリブ灰色砂質シルト層がありこれを除去した26・27層を調査面とした。精査時に19層を中心に瓦器椀(第40図62～64)が出土している。調査により古墳時代から古代の流路痕跡を確認した。調査後に調査面を断ち割ったところ、シルト層から白色の砂層が堆積しているのを認めた。断ち割り内からは遺物の出土は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第30図)

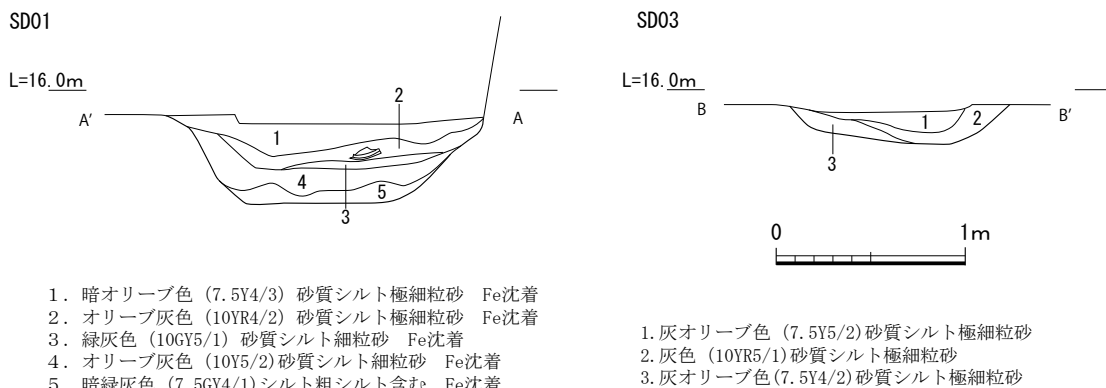
島畑 基本層序で述べたように、近世以降の島畑が盛土を行うことで造られたことが観察できた。中世の島畑はなく、平坦面における耕作溝群を検出した。

耕作溝 南北方向の小溝2条を検出した。検出長13m、幅0.4m、深さ0.15mを測る。

溝SD01 調査地西北端で検出した。検出長4.0m、深さ0.5mを測る。南から北に向けて下る傾斜をもち、古墳時代後期の須恵器杯身(67)が出土した。掘削後、徐々に埋没しながら使用され(第32図4・5層)、その後、3層の砂質シルトが堆積する段階で須恵器が廃棄され、溝としての機能が終了したと推測される。2層はやや土壌化している状況が見られることから、徐々に泥な



第31図 B9区北壁土層図(1/100)

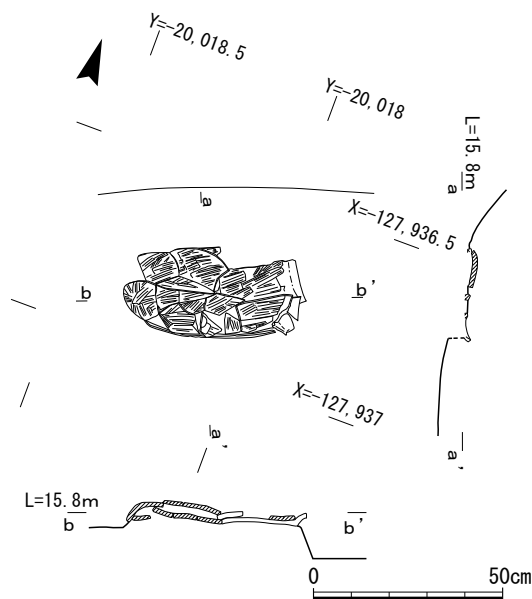


第32図 B9区溝S D01・03土層図(1/40)

どが堆積しながら埋没した過程を示し、1層では雨水などが溜まり、比較的短期間に埋没したものと考えられる。

溝S D02 調査地中央で検出した南西から北東に斜行する溝である。検出長7.0m、深さ0.2mを測る。遺物を包含しない。検出状況からS D01と同時期の遺構を考えられる。

溝S D03 調査地南側を東西に横断する検出長5.0m、深さ0.3mの溝である。土師器長胴甕(70)が出土した。溝が掘削され、機能している間、南側から土砂が流入・埋没している状況がうかがえる(第32図第3層)。これらの土砂がある程度堆積した段階で、溝の北側に長胴甕が廃棄されている(第33図)。第2層は長胴甕の廃棄が行われた段階以前までの堆積を示しており、溝としての



第33図 B9区溝S D03内甕出土状況図(1/20)

機能が失われてから甕が捨てられた状況を示している。第1層はその後にくぼみとして残っており、後代に埋め立てられたものと考えられる。

土坑S K07 調査区の北半中央で検出した土坑である。直径0.5m・検出高0.2mで、土師器杯(68)が出土した。

(4)小結

B9区は他のB区と同じく、主として水浸かりの土地であったと考えられる。近世段階においては、近世の食料増産の流れを受けて本来、耕地として不適格な土地を耕地として利用するために盛土を中心とした島畑を造成し、その上を利用したと考えられる。中世では島畑を検出できていない

が、耕作溝を確認しているので、農地としてある程度の利用があったと想定できる。それ以前の古墳時代～古代段階の溝と遺物は、溝内から出土した遺物があまり摩耗しておらず、移動していないことから、廃棄された当時の状態のまま出土していると考えられる。(加藤雄太)

11) B10区の調査

(1)調査の概要

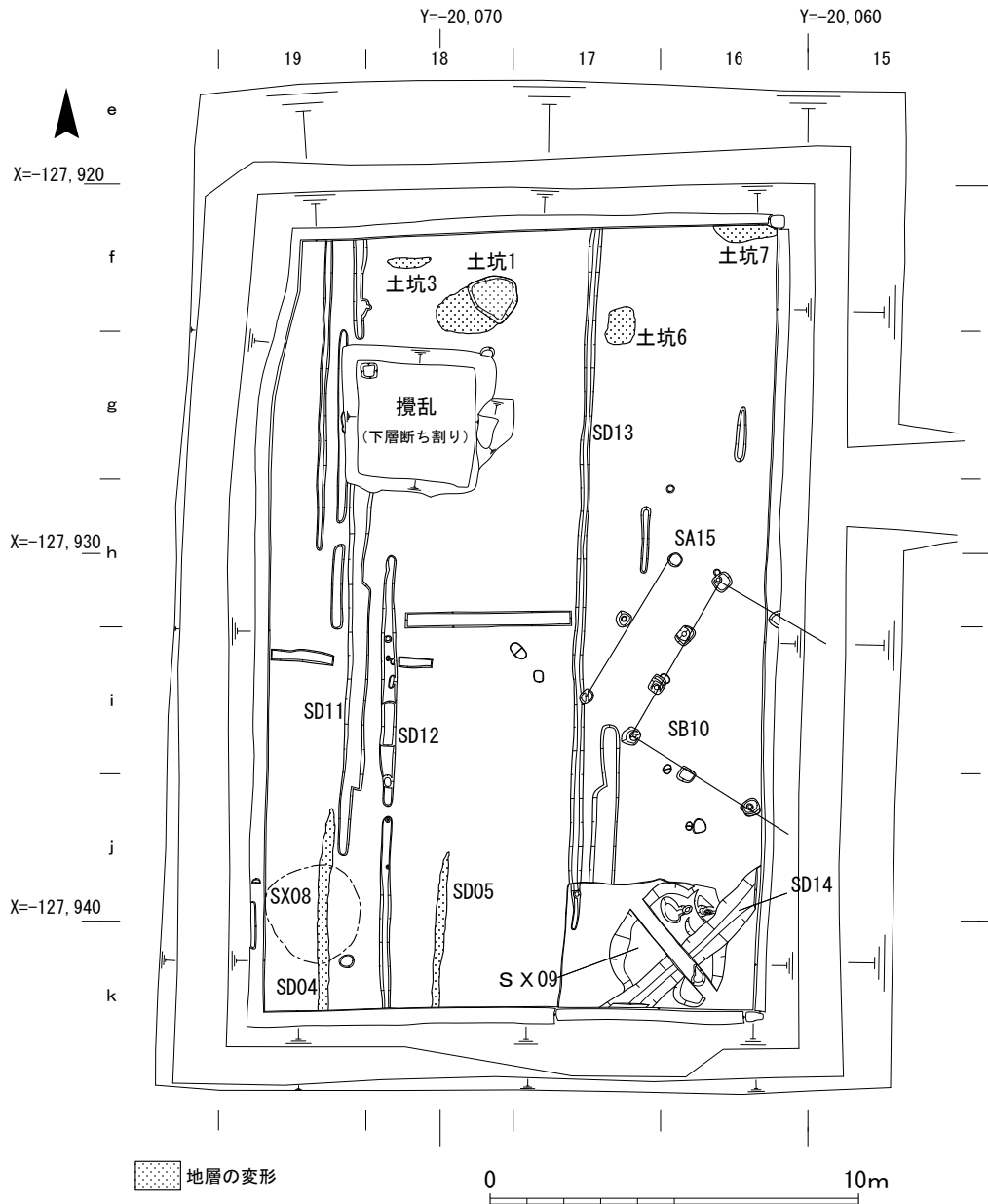
小樋尻遺跡の第8次調査として、令和元(平成31)年度に橋脚14の建設予定地の調査として実施した。調査区は東西20m、南北13.8mで、調査面積は350㎡である。調査地は、現代の水田の上にコンクリート基礎を含む土盛りが1.3m程度なされており、旧地表面の耕作土の標高は17.0mである。

調査は、重機により鎌倉後期～室町時代の堆積層である9層の褐灰色礫混土層までを掘削し、以下、人力により精査を繰り返した。15・17層の直上では、東西・南北方向の幅10～30cm程度の耕作溝と判断される多数の溝が重複して認められた。部分的にこの溝の掘削を行ったところ、深さは最大で5cm程度であった。長期間にわたって耕作が行われ多数の溝が重複したために溝の上半が消失したものと推測された。平面的に錯綜しており、遺構深度も浅いため、溝群の個別の記録は取りやめ、この状態から3～5cm程度にわたって全体を掘り下げて、溝数を減じた上で溝の掘削を行った。さらに、同一の面で時期不明の掘立柱建物跡、柵列、不明土坑・焼土等を検出した。また、調査区の壁には近世初頭の地震による地層の変形が認められた。

最終的に攪乱土坑内を1m程度を断ち割ったところ、0.65m下で砂層を確認し、遺構・遺物は認められなかった(第36図)。

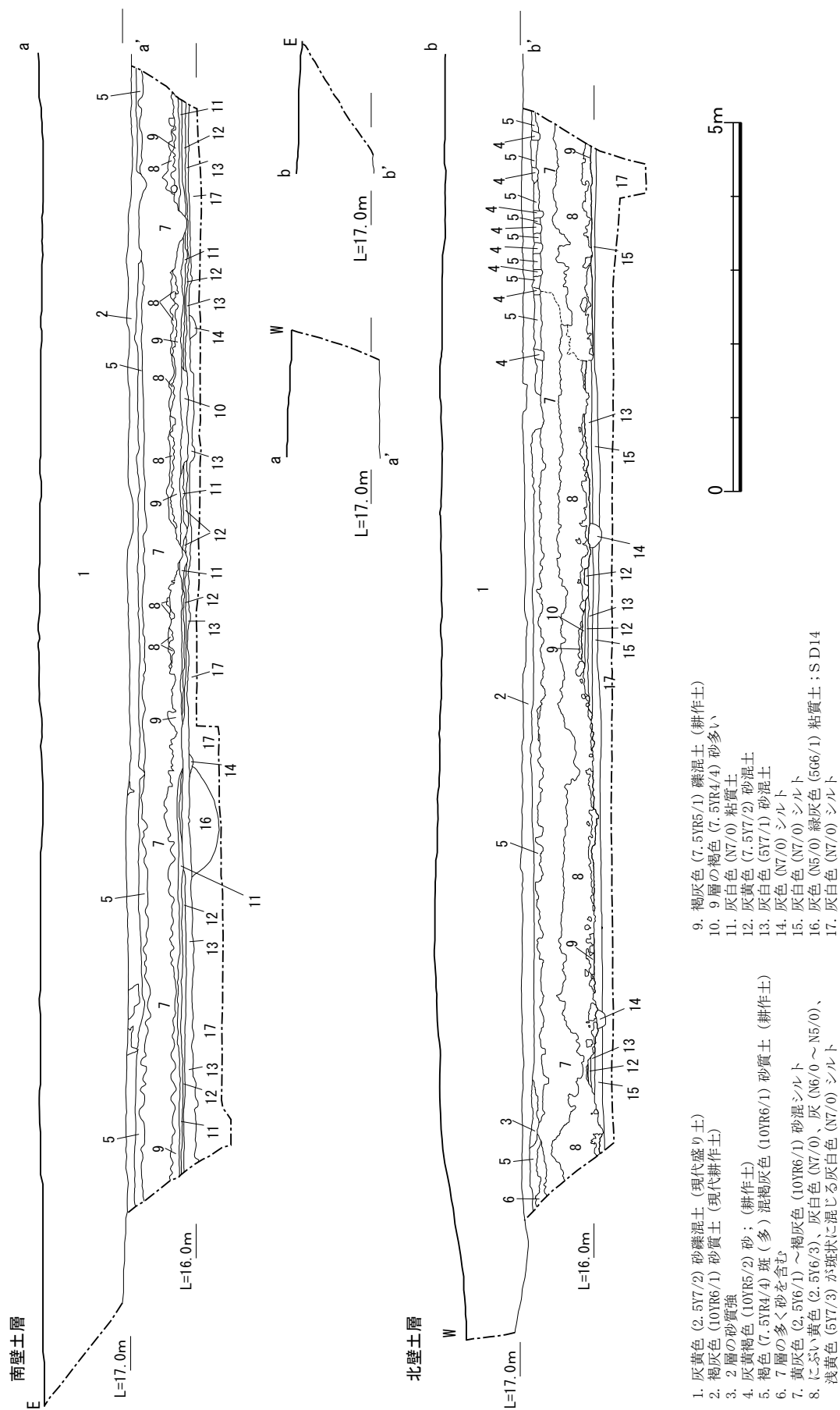
(2)基本層序(第35図)

調査着手直前には、水田に盛土を行い、畑として利用されていた。その堆積土中にはコンクリートによる基礎が水平に設けられていた。



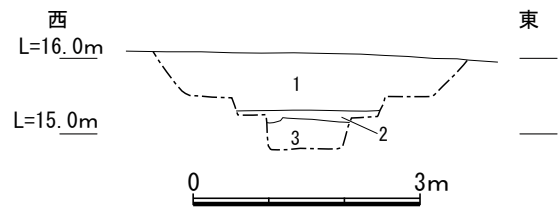
第34図 B10区検出遺構平面図(1/200)

13層から須恵器片口鉢(第40図71)や13世紀後半頃の瓦器椀(75)と白磁椀(76)が出土している。第7・8層はシルト層であり、水性堆積層と判断される。このうち、第8層はにぶい黄色・灰白色・灰色・浅黄色のシルトが斑状に混じる灰白色シルトである。白色・黄色・灰白色粘土の塊や縞状の筋が複雑に入り組んで混じり合った状況である(写真図版第30-1)。おおむねB2～10区の広範囲に広がることから人為的なものとは考えにくく、自然の営力によるものと推定される。その生成は、水を多く含んだ軟弱な白色・黄色・灰白色粘土層が地震動により揺り動かされ、上下左右に引き動かされて混じり合ったものと想定される。いわば、それらの土層が液状化し「攪拌」された状態で固定した状況である。出土遺物の年代観と南山城地域で生じた大地震の記録より、1596年の慶長伏見の大地震に伴う変形と考えるものである。この下位の第9層の褐灰色礫混土は、上方の第8層に向けて「火炎」状に溶出した状況である。



第35図 D10区北壁・南壁土層図(1/80)

8層中には黄色の斑痕が認められないことから、岸辺からかなり離れた地点で、イネ科が生育できないほどの水深が深いところで堆積したと判断された。この上の7層の上位はわずかながらも地震による変形を受けているものと判断され、土質はシルト質であるものの砂質が勝っており、しかもイネ科の茎跡が多量に認められ



1. 灰色 (7.5Y5/1) ～オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト
2. 灰白色 (N7/0) ～灰色 (N6/0) 粗砂
3. 浅黄色 (2.5Y7/3) ～にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗砂

第36図 B10区断ち割り内土層図(1/100)

ることから、岸辺から近くて水深の浅い、湿地環境下にあつて地震を受けたものと判断された。一方、この下の13層は出土遺物や耕作溝の存在より鎌倉時代後半の耕作土と判断され、この耕作土自体地震動により変形を受けている。この耕作土を覆ってシルト層が堆積しているが、これらのシルト層は汀から十分に離れた地点での水性堆積と判断される。このことから、これらのシルトをもたらしした水性堆積の環境は急激にもたらされたものであり、しかもその後、長期間にわたってシルトが安定的に堆積する環境であったものと判断される。調査は13層上・下面で実施した。

(3) 検出遺構(第34図)

地震土坑 1・3・6・7 調査地の北辺近辺で検出した土坑である。灰白色・淡灰色シルトに黄色が斑状に入り込んでおり、通常の遺構とは違った埋土をなしている(写真図版第30-2)。これは調査区の壁面に見られる、地震による変形を受けた土壌(第8層)と同じであり、地震により変形を受けた土壌が大きく下に撓んで平面にまで及び、平面的に認められたのがこういった土坑と判断される。南壁の西辺近く、北壁の西辺近くで、この8層は下方に大きく撓んでおり、調査面より下にまで到達しているのが確認できる。

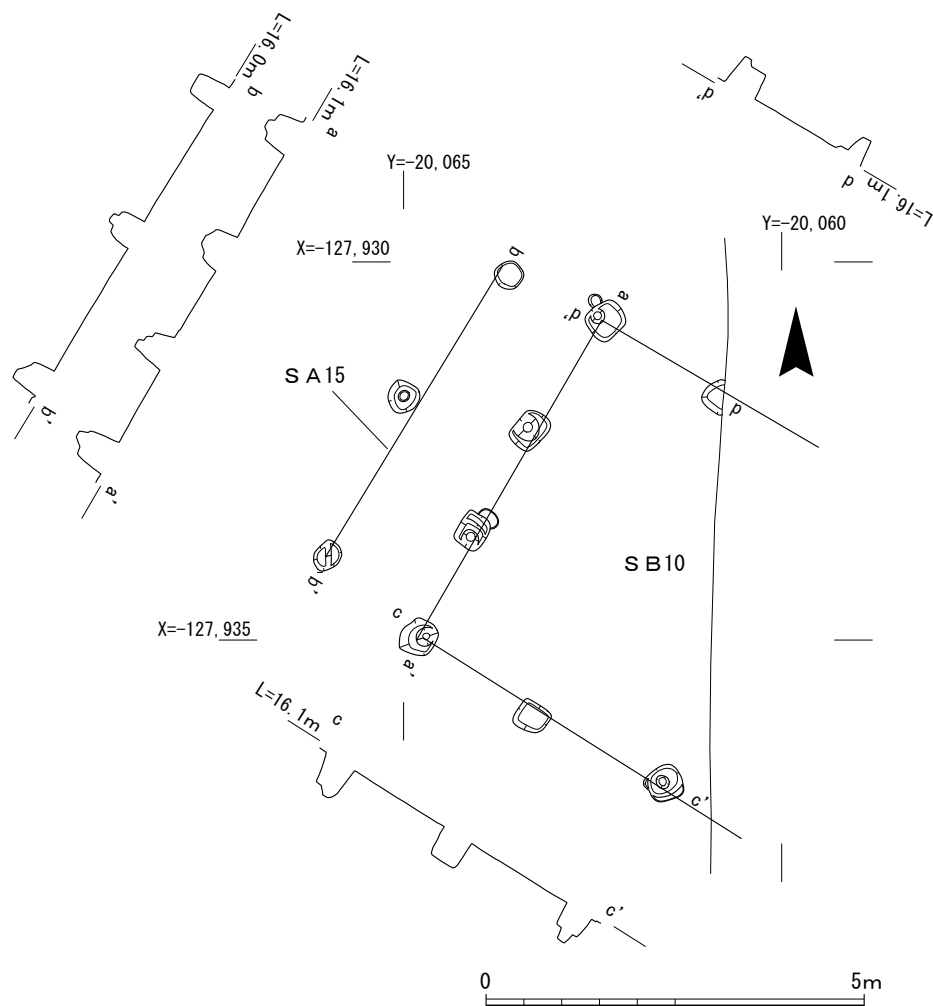
溝 S D04 調査区の西南部で検出した南北溝で、南壁の土層で見ると、耕作土と判断される9層を引き裂く溝である。埋土は、地震により変形を受けた土層と判断する8層である。調査地南辺で検出した。溝としているが、径十数cm程度の小土坑の連なりであり、地震土坑と同じく、地震動による地層の撓みが溝状に連なったものと判断する(写真図版第30-3)。遺物は出土しなかった。検出長5.5m、幅0.3mである。

溝 S D05 調査区南辺の中央で検出した溝で、S D04と同じく径十数cm程度の小土坑の連なりで、地震動による地層の撓みと判断する。検出長4.2m、幅0.28mである。

掘立柱建物 S B10(第37図) 調査地の東側中央部で検出した。2間以上×3間の建物で、北で東に約30°振れる。東側は調査区外にのびるため、本来の規模は不明である。北東-南西の柱間は1.6m、北西-南東の柱間は1.8mである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

耕作溝 S D11～13 南北方向の耕作溝と判断する溝である。検出幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.15mである。検出前には多数の溝が切り合っていたことから、本来はさらに深い溝であったものと推測される。瓦器等の小片が出土しており、中世のものと判断される。

柵列 S A15(第37図) S B10の西側に位置し、柱筋を合わせており、目隠し塀と判断するものである。2間分を検出し、柱間は2.2m、総長4.4mを測る。この塀を構成する柱穴はS D13に



第37図 B10区掘立柱建物 S B10・柵列 S A15平・断面図(1/100)

切られている。時期は不明である。

不明遺構 S X08 地山内で確認した焼土・炭化木が4 m×5 mの範囲に集中して出土した(写真図版第30-3)。周辺を丁寧に掘り下げ、段ち割りも行ったが、明瞭な掘形は確認できなかった。風倒木もしくは火災を受けた樹木等の痕跡と判断する。

不明遺構 S X09 S D14の上位で検出した有機質の堆積である(写真図版第31-1)。表面が凸凹に筋状にうねっており、堆積の厚さは1 cmに満たないものであった。水性堆積土中に有機質が自然の営力で集められ、その後、地中において地震による変形を受けたものとの専門的なご教示を得た。

溝 S D14 S X09の下面で検出した幅0.75～0.9m、深さ0.3mの溝である。北東から南西に向けて下る傾斜をもつ。遺物の出土は認められなかった。

(4)小結

中世の耕作溝とそれらに切られる形の掘立柱建物や柵列を検出した。掘立柱建物や柵列を確認したことは、周辺に集落があったことを示唆するものである。出土遺物はなく時期は不明であるが、B 4 区～B 9 区では古墳時代の遺物を含む溝等が検出されており、この時期のものである可

能性が高い。また、この建物の方位が北で東に約30°振れており、B地区の東半で散見される斜行溝も北で東に約50°振れており、ある段階の地割りを示している可能性がある。今後、面的な調査が進めば、南北方向に先行する地割りの存在も明らかとなろう。

また、地震痕跡と判断される地層の変形を平面的に分布しているのが確認できた。一つは地震土坑とした土坑状のものであり、一つはS D04・05といった溝状のものである。また、壁面の観察で認められる地層の波状にうねりも、S X09内で平面的に確認した。

12) 出土遺物

B 1～10区の出土遺物には古墳時代～古代の土師器片・須恵器片、中世の瓦器・土師器・陶器・磁器・貨銭などがあり、整理コンテナ5箱分が出土した。小片が多く、実測可能なものは少ない。

(1) B 1区(第38図1～5)

1は瓦質土器の鉢で調査区の20層から出土した。2～5は22層から出土した。2は須恵器杯Bで、高台が底部の内側に付く。5は大型の須恵器甕の頸部で、グリッド4の22層中から出土している。古代の遺物も混じるが、22層から4の白磁碗が出土していることから、中世以降の混入物と判断される。

(2) B 2区(第38図6～18)

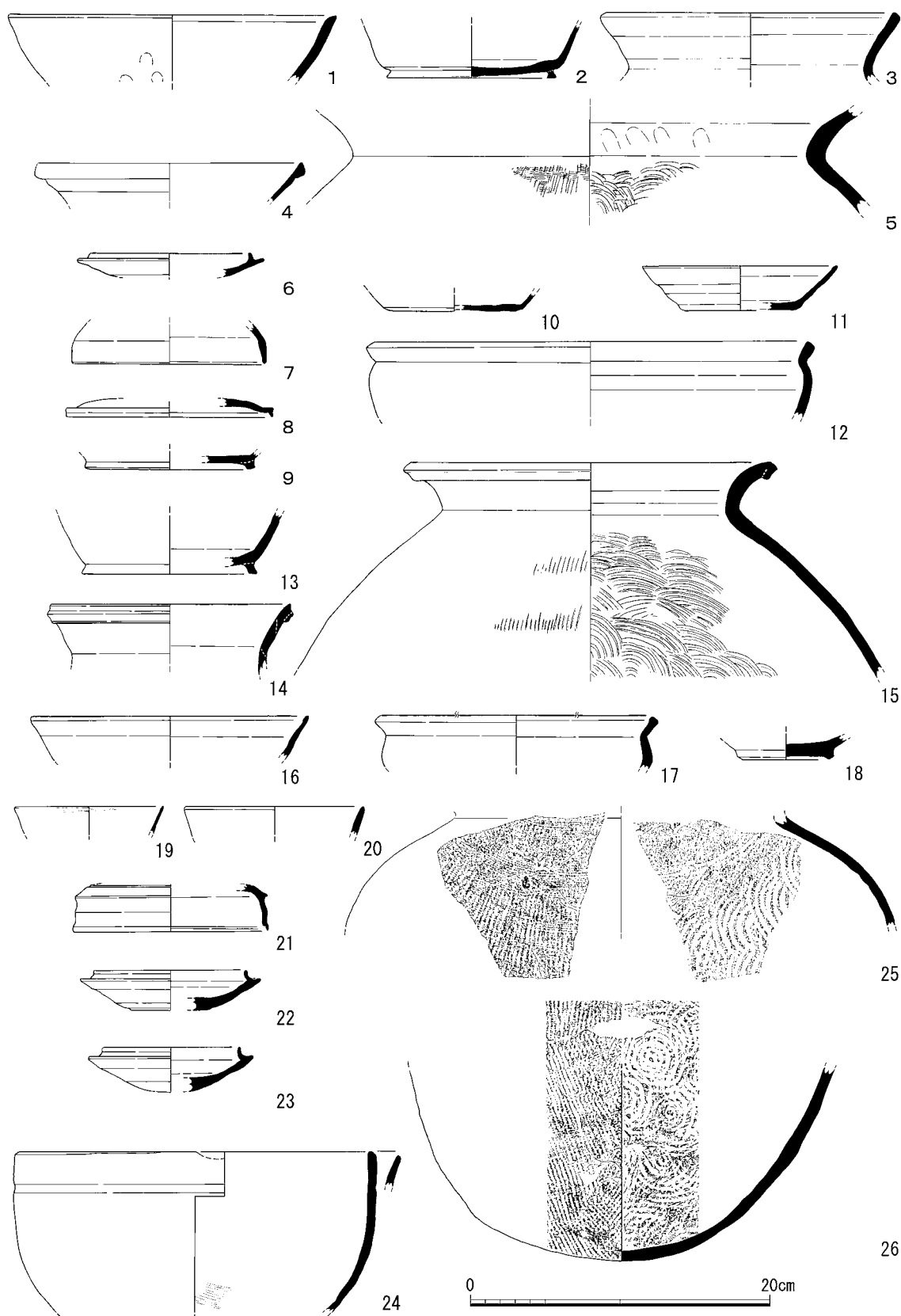
6～16はB 2区から出土した遺物であるが、整理作業中に出土遺物カードを紛失してしまい、出土地点・層位は不明である。しかし、B 2区では遺構を検出できていないので、すべて包含層からの出土と言える。6は須恵器杯身で、立ち上がりがわずかに付されるものである。7は須恵器杯蓋で、天井部から口縁がほぼ垂直に下がり、端部が丸く終わる。TK217。8～10は古代の須恵器で、8が蓋、9が高台が底部端に付く杯Bで、10は杯Aである。11は上方に斜めに大きく開く須恵器杯で、12はくの字型の頸部を有する須恵器鉢である。13は須恵器壺の底部で、ハの字型の高台を有する。14は須恵器の甕で、直立した頸部を有する。15は須恵器の大甕で、コンテナ1箱分の破片が出土したが、頸部上半部が接合しただけで、多くは未接合である。17は瓦質土器の壺で、くの字形の頸部にやや内傾して斜めに直に伸びる口縁を有する。18は白磁の碗で削り出しの高台を有する。

(3) B 3区

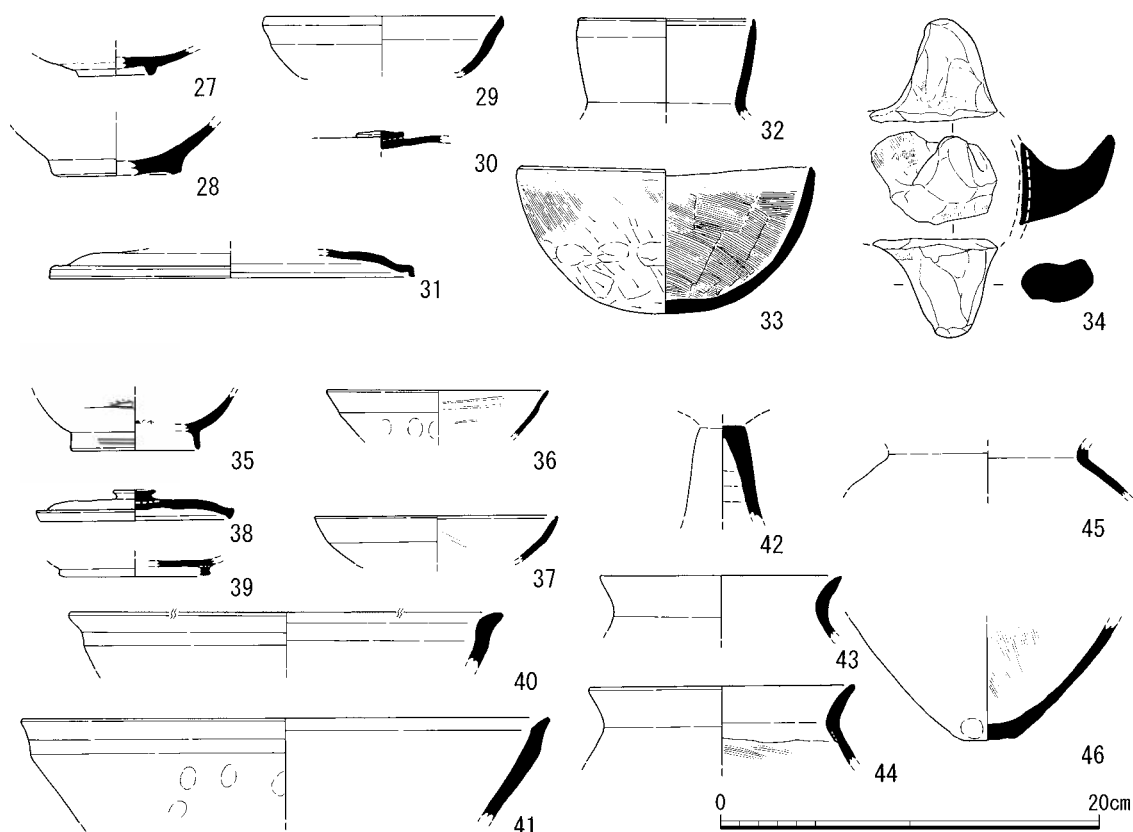
土師器や瓦器、須恵器の小片が出土しているが、図化しうるものはなかった。

(4) B 4区(第38図19～26・第41図77)

19は近世の磁器、20は龍泉窯の青磁碗で、第7層の暗オリーブ色細粒砂質泥から出土した。21～26はS D03から出土した土器である。21は須恵器杯蓋で、口縁端部内面に段を有し、天井部と体部の端部に沈線がめぐる。天井部はヘラ切り後に回転へら削りで調整している。MT15。22・23は須恵器杯身で、受け口部が斜めに短く立ち上がる。23は底部はヘラ切後、未調整である。TK217。24は土師器の鉢で、口縁部に片口が設けられている。全体に摩耗しているが、内面の底部にわずかにハケ目痕が残り、体部上半に凹線がめぐる。25・26は須恵器甕の体部で、接合面はないが、同一個体と判断される。77は天禧通寶で、6層から出土した。



第38図 B1～4区出土土器
1～5：B1区 6～18：B2区 19～26：B4区



第39図 B5・6区出土土器
27～34；B5区 35～46；B6区

(5) B5区(第39図27～34)

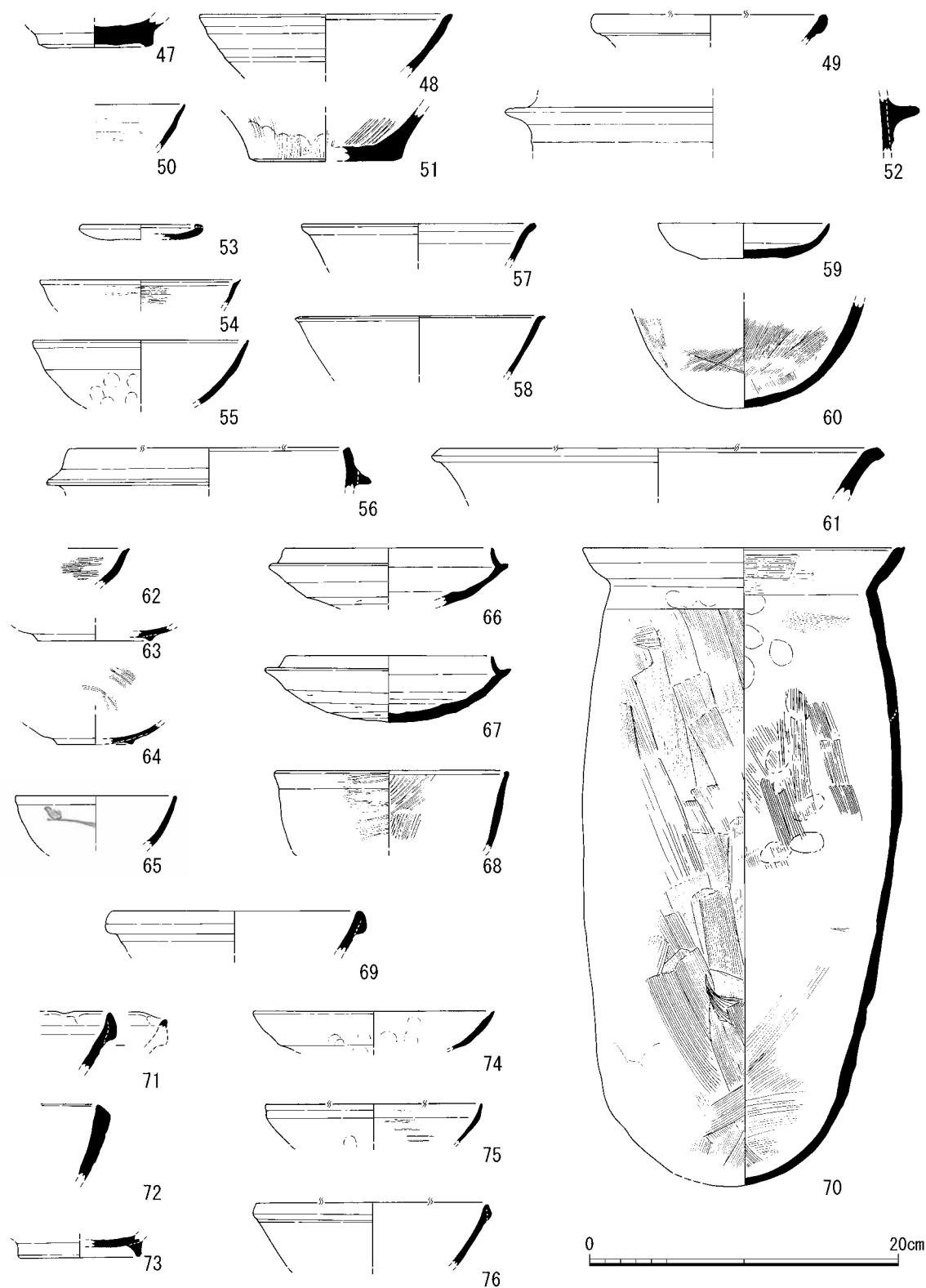
27は白磁の皿、28は白磁の碗で、ともに削り出し高台を有する。断ち割り内の6・8層から出土した。29は土師器皿、30は須恵器杯蓋で、8層から出土した。33は土師器鉢で、S D34から出土した。31は須恵器杯蓋で、8層の精査中に出土した。32は土師器壺で、口縁端部内面に沈線がめぐる。胎土は精良である。34は6・8層から出土した土師器甑の把手である。

(6) B6区(第39図35～46・第41図81)

35は染付碗で重機掘削時に出土した。36・37は瓦器碗で、10・11層から出土した。全体に摩滅しているが、36の内面には横方向のミガキがわずかに見て取れる。13世紀後半。38は須恵器の蓋、39は須恵器杯底部である。40は須恵器鉢で北壁断ち割り内から、41は瓦質の鉢で、上方に大きく開く口縁を有する。42は土師器高杯の脚部である。43・44は土師器甕で、緩やかにくの字に屈曲する頸部を有する。43は11層の精査時に、44はS D01から出土した。45は土師器甕の頸部で、「く」の字状に屈曲する。46は土師器甕の底部で、内面は縦方向のハケ目で、外面は摩滅のため不明である。S D01より出土した。胎土・焼成等から44と同一個体の可能性がある。81は砥石である。

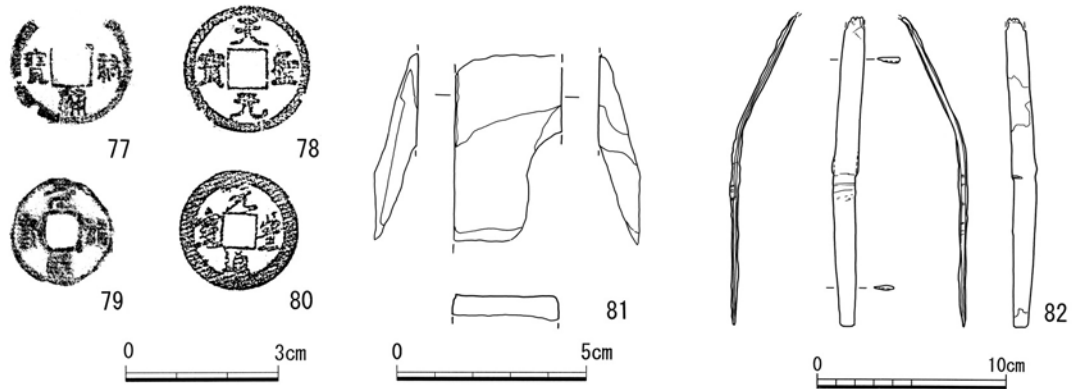
(7) B7区(第40図47～52・第41図78・79・82)

B7区では、13層の灰色粘質土を中心に遺物が出土した。47は厚手の白磁の底部で、壺の底部と考えられる。49は白磁碗、50は瓦器碗で、外面の口縁下を横方向に強くなでている。内外面に疎らな暗文が施されているのが見て取れる。51は瓦質の播鉢で、内面にハケによるおろし目(7



第40図 B7～10区出土土器

47～52 : B7区 53～61 : B8区 62～70 : B9区 71～76 : B10区



第41図 B地区出土石製品・金属製品
77：B4区 78・79・82：B7区 80：B10区 81：B6区

本/2.5cm)がある。52は土師器羽釜である。48は内外面に釉薬が施された瀬戸灰釉陶器の口縁部で、東側側溝内から出土した。78の天聖元寶、79の元祐通寶が13層から出土した。82は不明鉄製品で、13層から出土している。中央部に糸状の巻き付け痕が認められ、「く」の字状に曲がった矢じりや小刀と判断される。

(8) B8区(第40図53～61)

B8区は包含層である6・8層を中心に遺物が出土した。53はいわゆるコースター形の土師器皿である。54・55は瓦器碗で、54は内外面ともに密に横方向のミガキが見られる。12世紀代。55は内外面ともに摩滅しており、成形時の指押さえが全面に認められる。56は瓦質の羽釜で、灰色粘質土層から出土した。57は青磁碗、58は白磁碗、59は白磁皿である。60は土師器甕の底部でS D01から出土し、外面に×のヘラ記号がある。61は須恵器ねり鉢片で、口縁端部が肥厚し横方向に伸びる。内面に自然釉がかかる。

(9) B9区(第40図62～70)

62～64は瓦器碗で、63・64は底部に小さな高台が付されるものである。摩滅が著しいが、内面見込みにわずかに暗文が認められる。65は重機掘削時に出土した染付碗で、18世紀以降のものである。66・67は須恵器杯身で、体部下半に回転ヘラ削りが認められ、受け部の立ち上がりは明瞭である。口径は13.4cmを測る。66は19層中の精査時、67はS D01から出土した。TK209。68は土師器杯で、S K07から出土した。口縁端部の内面に沈線が巡り、内外面ともにミガキが認められる。7世紀前半。69は白磁碗で、北壁中より出土した。70は土師器長胴甕で、高さ41.5cmで、全体の形がわかるものである。S D03から出土した。

(10) B10区(第40図71～76・第41図80)

13層を中心に遺物が出土している。71は須恵器鉢の口縁部で、片口部の屈曲がわずかに認められる。72は瓦質の鉢の口縁、73は灰釉陶器の底部である。74は土師器皿で、斜め上方に立ち上がる口縁を有する。径は15.6cm。75は瓦器碗で口縁外面は強くなでて口縁は上方に立ち上がる。76は白磁の碗である。80の元豊通寶が11層から出土した。

13) B地区のまとめ(第42・43図)

B地区では、B1・2区で近代にいたるまでの沼地堆積、B3～B10区で中世の耕作関連溝・古墳時代溝、B10区で時期不明の柵列・掘立柱建物を検出した。また、中世段階の島畑は確認できず、B9区にて近世以降の島畑を土層断面で確認した。また、遺物の出土を見ると、古墳時代、古代、中世のものがあるが、細片の土器片がほとんどである。その中でも、古墳時代の土器は比較的破片が大きい傾向にある。

以下、簡単に土地利用の変遷を見ておきたい。

B1区では、土層の堆積状況と近代の土坑を検出したことから、近代近くまで、水を湛えた沼地もしくは湿地であったと推測され、比較的水深の深い環境から、水際、陸地へと変化したことが判明した。この状況はB2区においても認められた。

B3区からB10区においては、古墳時代前期以前の遺物・遺構の出土がなく、調査面より下にはシルト層が厚く堆積していることから、B1・2区と同じく、ここでも古墳時代よりも古い時代においては湿潤な環境にあり、人間が住まうことができなかったものと推測される。そして、古墳時代と推測される耕作溝・土坑が検出されていることから、古墳時代後期以降に陸地化したようである。中世の耕作溝も確認されていることから、中世に至まで、その状態が続いたと考えられる。

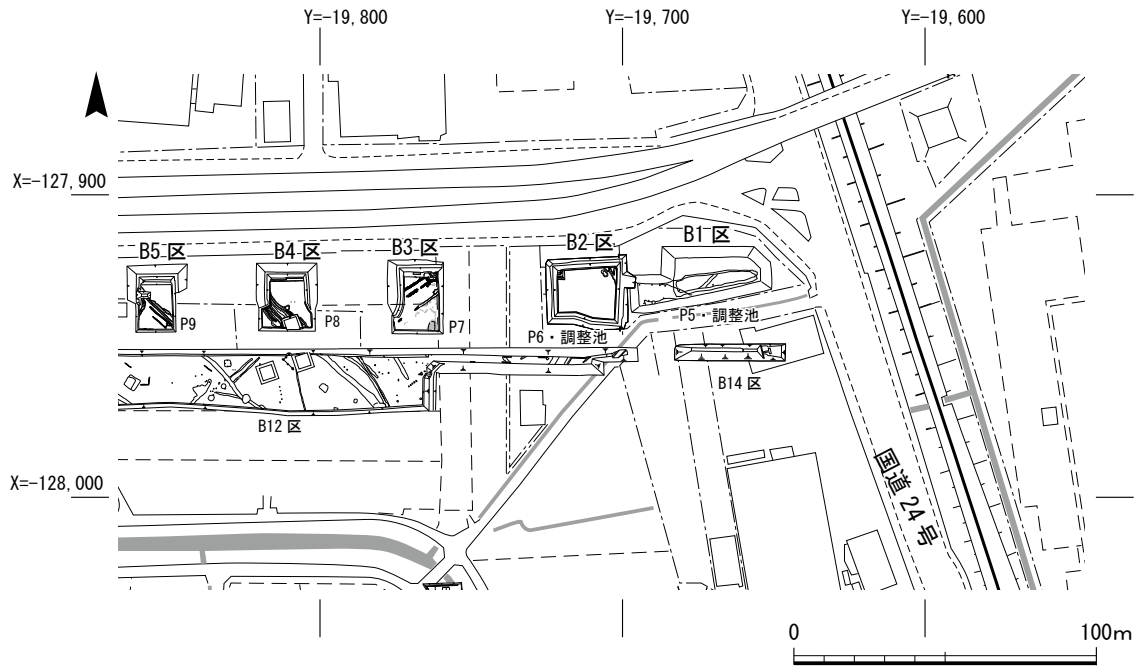
古墳時代後期の土器が、溝や流路内から比較的大きな破片として出土することから、この地が単に耕作地としてのみ利用されたのではなく、近辺に集落が立地していたものと想定される。B10区で検出した時期不明の掘立柱建物や柵列はこの時期のものである可能性が高いと考える。

関連する遺構として、城陽市教育委員会の第4次調査地はB10区の南約200mに位置しており、調査により縄文・古墳・奈良時代の集落がわずかな微高地を選んで立地していることが明らかとなっている。こういった集落に近接する農耕地として、B地区は利用されていたのであろう。

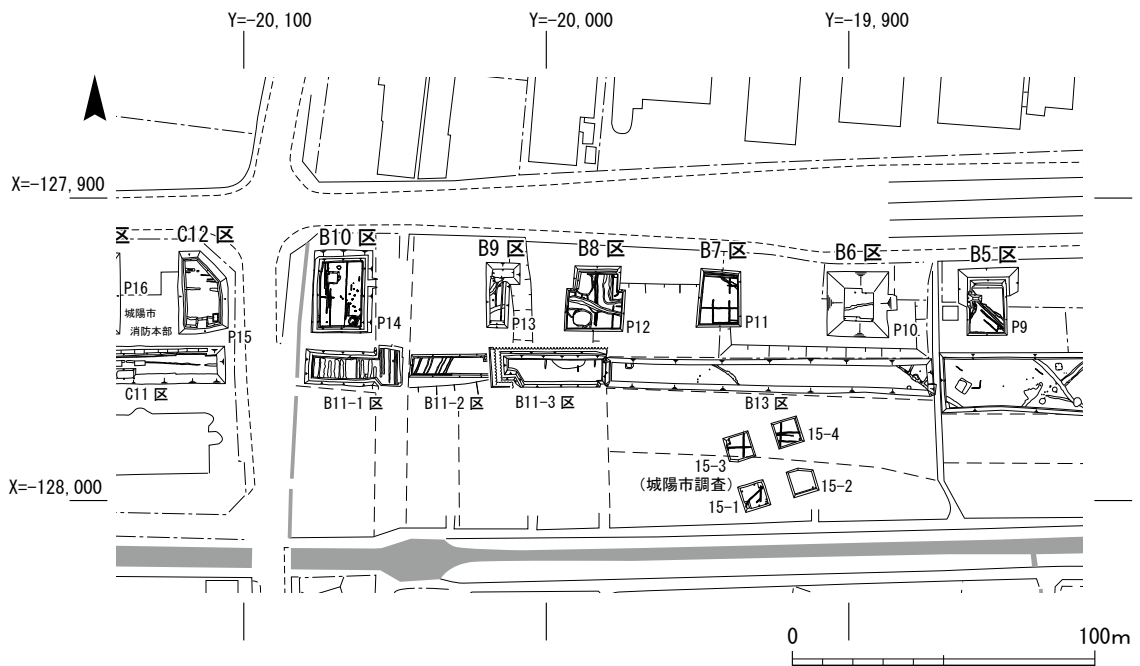
中世段階のB地区では耕作関連の溝群が検出されており、農耕地として利用されていた。この時期の遺物は小片でかつ表面が摩耗したものが多く、直接的に、この地で生活が営まれたものとは言にくい状況であることから裏付けられる。出土した遺物の年代観より、少なくとも12世紀代には耕地化されていたと考えられる。他の地区とは異なり、中世段階には島畑の造成は確認できないが、これは木津川氾濫による冠水の恐れが他の地区よりも少なく、比較的安定した環境下にあったためと判断される。

中世後半から近世初頭にかけては、B3区からB10区もB1・2区とともに、湿潤な環境であったと判断される。B3～B10区で検出した火炎状の地層の変形や噴砂は、水分を多く含んだ軟弱な地盤が1596年の慶長伏見の大地震により揺り動かされて生じたものと推定されている。このように、16世紀末には少なくとも湿地もしくは池沼の環境下にあったものと推察される。

次いで近世段階には、B1・2区を除き、全面が農地化し、部分的に島畑が造られていたようである。近代以降には、B1・2区も陸地化し、土坑状の遺構が掘削されるなどの土地利用が行われていたと考えられる。



第42図 小樋尻遺跡B地区の調査 東(1/2,500)



第43図 小樋尻遺跡B地区の調査 西(1/2,500)

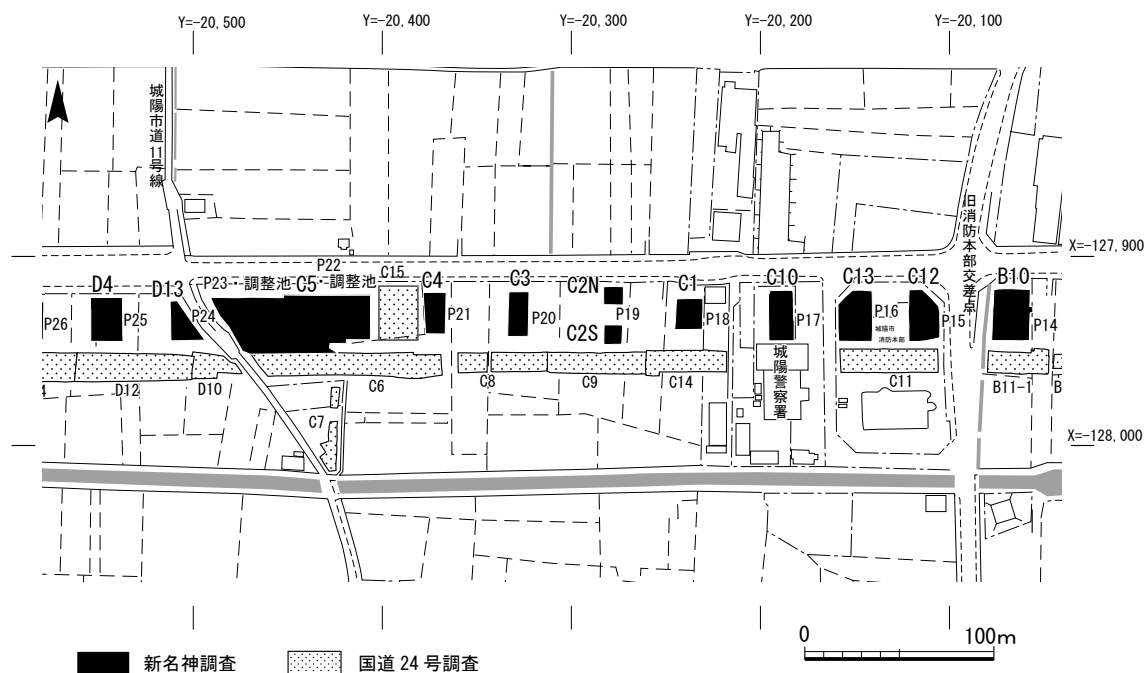
また、正方位の耕作溝の下に斜め方向の溝群が各区で確認できている。これらが先行する地割である可能性を指摘したところであるが、今回の一連の調査では調査面積が狭小であるため、検討しがたい。今後の検討課題としたい。

(岩松 保)

7. 小樋尻遺跡C地区の調査

1) 調査の経過

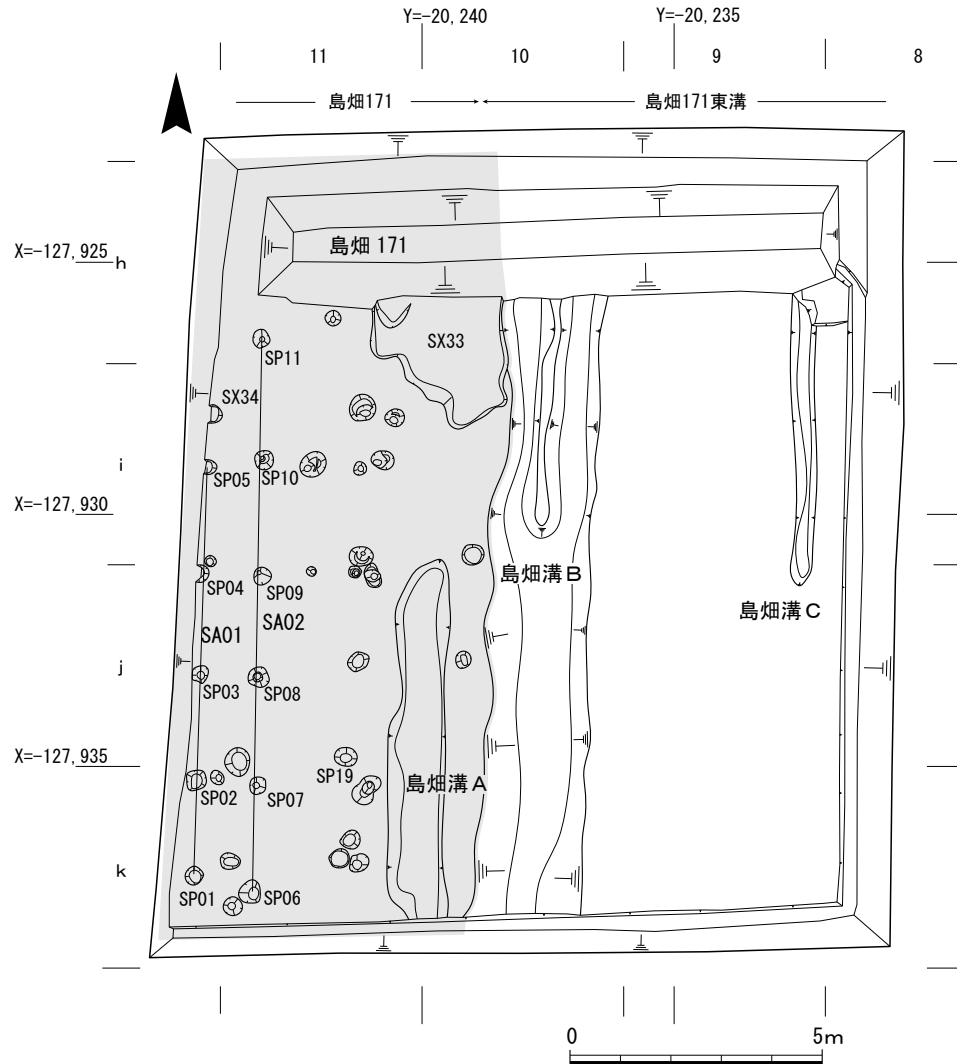
C地区は旧城陽市消防本部交差点から城陽市道11号線の範囲に設けた調査区である(第44図・付表6)。新名神高速道路整備事業関係としては、平成30年度に第6次調査としてC1～4区(橋脚番号P18～21)の調査を行った。令和元(平成31)年度には第8次調査のC5区の調査(P22・調



第44図 小樋尻遺跡C地区の調査(1/4,000)

付表6 小樋尻遺跡C地区の調査(新名神・国道24号関係)

調査区	調査回数	調査年度	関係事業	構造物等	備考
C1	第6次	平成30年度(2018)	新名神	P18	
C2				P19	
C3				P20	
C4				P21	
C5	第8次	令和元年度(平成31)(2019)	新名神	P22・P23・調整池	令和2年度拡張・継続調査。C6と合同調査
C6	第9次		国道24号	道路	令和2年度拡張・継続調査。C5と合同調査
C7	第10次	令和2年度(2020)	国道24号	道路	
C8					
C9					
C11					令和3年度に継続調査
C14	第11次		新名神		令和3年度に継続調査
C10				P17	
C12				P15	
C13	第12次	令和3年度(2021)	国道24号	道路	
C14					
C15	第15次	令和7年度(2025)	国道24号	調整池	



第45図 C1区検出遺構平面図 第1面(1/150)

整池)を実施したところ、西半で人工の大溝を検出した。同時期に南側で国道24号関係としてC6区の調査(第9次調査)を実施していたが、C6区でもこの大溝の続きを確認するに至った。令和2年度にはC5区の西側(P23)と、南側のC6区との間の空閑地を取り払い一続きにした上で、合同で調査を行った。同じく令和2年度には新たに第11次調査としてC地区の東辺でC10・12・13区(P15~17)の3地区の調査を行った。

新名神関係の発掘調査とは別に、国道24号拡幅事業に伴う発掘調査を国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて令和元(平成31)年度~令和7年度にかけて、C6~9・11・14・15区の調査を当調査研究センターが実施した。

今回のC地区の報告はC1~4区、C10・12・13区の7調査区である。C5区については別途、報告書を刊行する予定である。(岩松 保)

2) C1区の調査

(1) 調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。南北16.2m、東西15mの調査区である。

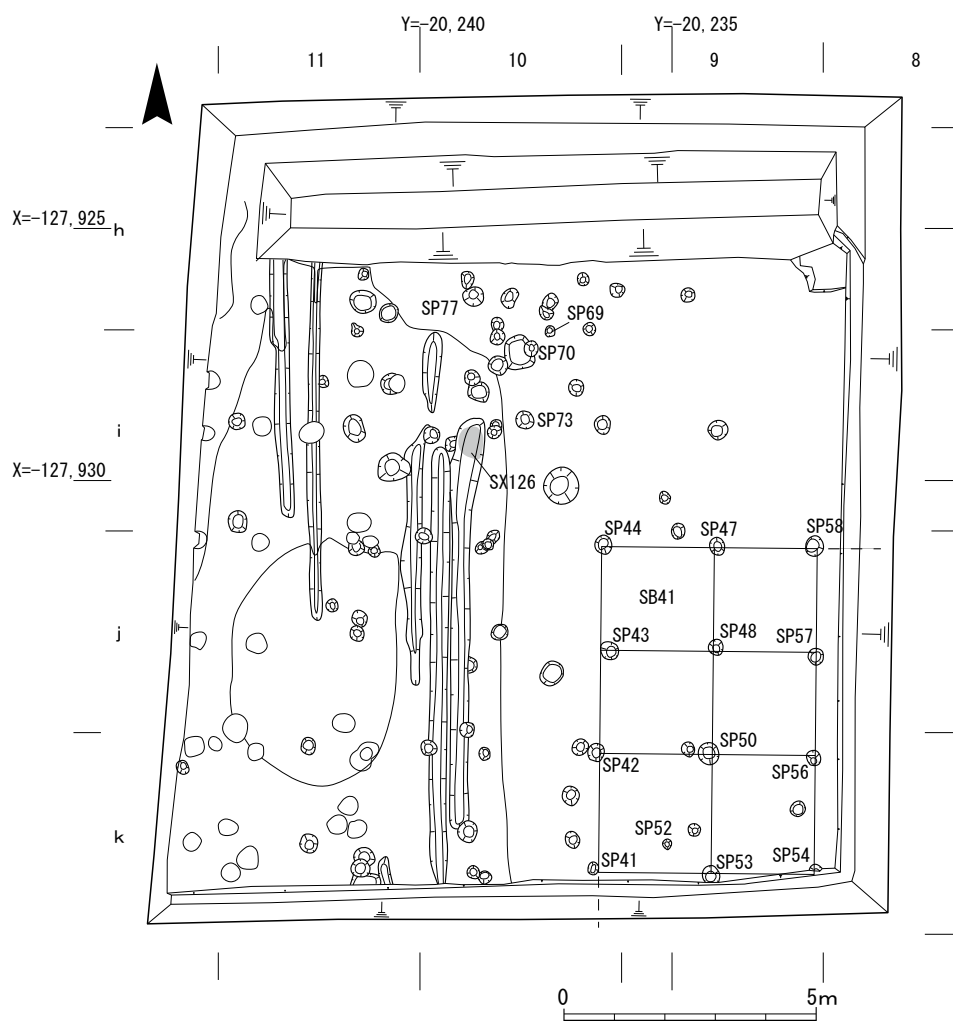
調査面の標高は約16mを測る。近世後期では盛土を主体とした島畑1基が南北方向に造成されていた。中世前期の遺構としては掘立柱建物S B41、柵列S A01、S A02、土坑S X126を検出した。建物S B41は東西2間、南北3間の掘立柱建物で柱穴から中世前期の遺物が出土している。柵列S A01と柵列S A02は南北方向に平行する柵列で、いずれも中世前期の遺物が出土している。土坑S X126は粒径1cmほどの礫と中世前期の土師器皿がまとまって出土した。下層では古墳時代の溝S D127を検出した。溝S D127は単一層でV字状の断面を呈し、古代以前の遺物を包含する遺構である。調査面よりも下層においては、砂層、礫層の互層となっており、旧河道の堆積の様相を呈している。

(2)基本層序(第47図)

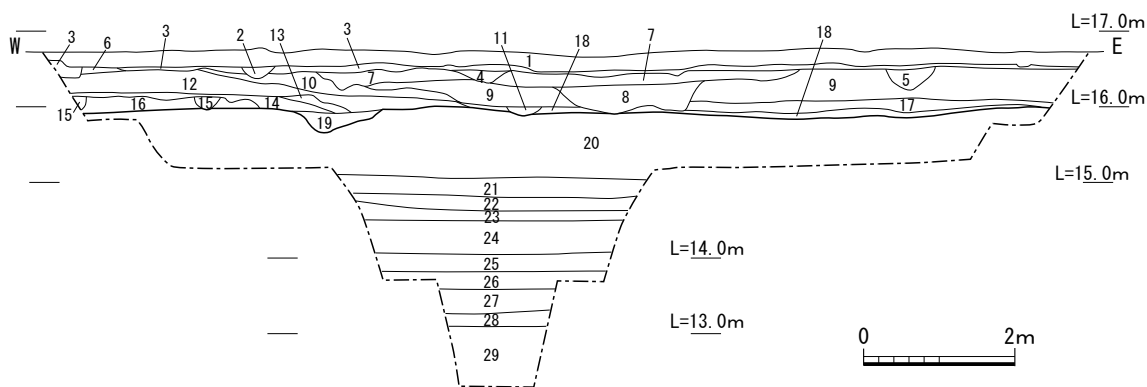
12～14層は近世島畑の基盤層である。これら近世島畑の基盤層を除去した20層上面で遺構の調査を行った。黄灰色系の砂質シルトからなるこれらの遺構面を断ち割って下層確認を行ったところ明青灰色の粗砂層を確認した。下層からは遺物・遺構ともに確認できていない。

(3)検出遺構(第45・46・52図)

島畑171 調査区の西半で検出した南北方向の近世の島畑である。中世段階では島畑は造営さ

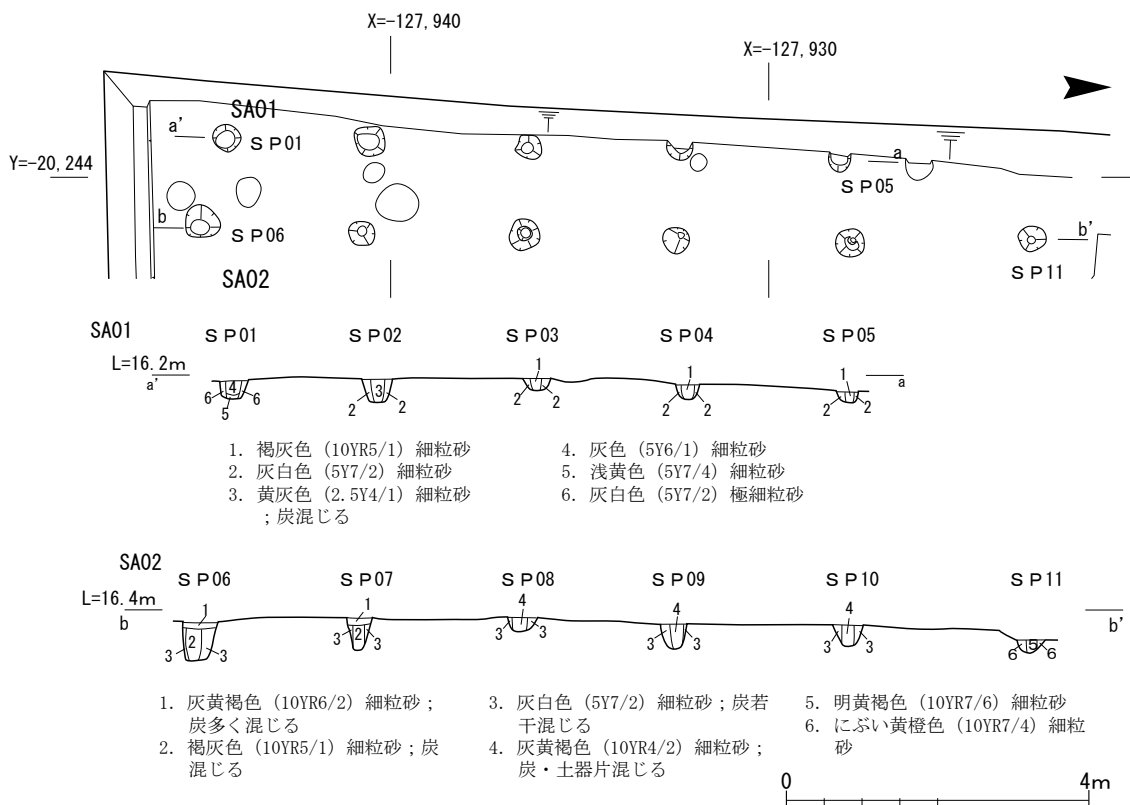


第46図 C1区検出遺構平面図 第2面(1/150)



- | | | |
|------------------------------|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 耕土 | 11. 灰色(5Y5/1)砂質シルト;細粒砂 | (2. 5Y7/3)粗砂混じり |
| 2. 褐灰色(10YR6/1)砂質シルト;極細粒砂 | 12. 灰オリーブ色(7. 5Y6/2)砂質シルト;細粒砂 | 21. 黄灰色砂質シルト;細粒砂 2.0~8.0cm大の礫多く含む |
| 3. 灰色(5Y6/1)砂質シルト;細粒砂 | 13. 浅黄橙色(10YR 4/4)砂質シルト;細粒砂 | 22. 黄灰色砂質シルト;粗砂 |
| 4. 黄灰色(2. 5Y6/1)砂質シルト;細粒砂 | 14. 黄灰色(2. 5Y 5/1)砂質シルト;細粒砂 | 23. 黄灰色細粒砂;2.0~8.0cm大の礫多く含む |
| 5. 灰色(7. 5Y6/1)砂質シルト;細粒砂 | 15. 灰色(5Y 6/1)砂質シルト;細粒砂 | 24. 灰白色粗砂 |
| 6. 明黄褐色(10YR7/6)砂質シルト;細粒砂 | 16. 浅黄橙色(10YR 8/4)砂質シルト;細粒砂 | 25. 灰白色細粒砂 |
| 7. 黄褐色(2. 5Y5/4)砂質シルト;細粒砂 | 17. 灰色(7. 5Y6/1)砂質シルト;粘砂 | 26. 黄灰色細粒砂;2.0~8.0cm大の礫多く含む |
| 8. 灰色(10Y6/1)砂質シルト;細粒砂 | 18. 浅黄色(5Y7/3)砂質シルト;細粒砂 | 27. 灰白色粗砂 |
| 9. 灰色(7. 5Y6/1)砂質シルト;極細粒砂 | 19. 暗灰黄色(2. 5Y5/2)砂質シルト;細粒砂 | 28. 黄橙色粗砂 |
| 10. にぶい黄褐色(10YR7/3)砂質シルト;細粒砂 | 20. 明青灰色(10BG7/1)砂質シルト;浅黄色 | 29. 白色粗砂 |

第47図 C1区北壁土層図(1/100)



第48図 C1区柵列S A01・02平・断面図(1/100)

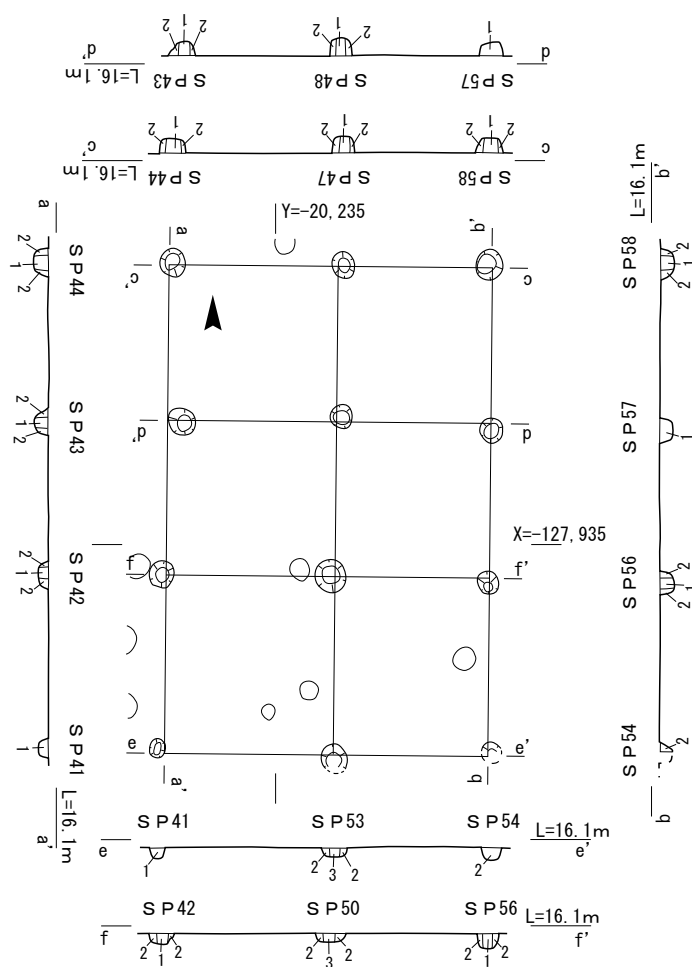
れておらず、近世以降の島畑に伴う東側溝として島畑溝A～Cを検出した。1面で検出した中世のピット群に切り勝つものである。

柵列S A01(第48図) 調査地西端で検出した南北方向に続く柵列である。検出長4mを測り、5つのピットから構成される。S P01は直径0.4m、深さ0.25m、柱当たりの直径は0.2mを測る。

S P 02は直径0.4m、深さ0.3m、柱当たりの直径は0.18mを測る。S P 03は直径0.35m、深さ0.18m、柱当たりの直径は0.15mを測る。S P 04は直径0.35m、深さ0.2m、柱当たりの直径は0.18mを測る。S P 05は直径0.3m、深さ0.18m、柱当たりの直径は0.15mを測る。S P 04から土師器皿(第72図135)が出土している。

柵列 S A 02(第48図) 調査区西端で検出した南北方向に続く柵列である。柵列 S A 01の東側に位置し、検出長11mを測る。6つのピットから構成される。S P 06は直径0.45m、深さ0.5m、柱当たりの直径は0.2mを測る。S P 07は直径0.35m、深さ0.4m、柱当たりの直径は0.16mを測る。S P 08は直径0.4m、深さ0.2m、柱当たりの直径は0.2mを測る。S P 09は直径0.34m、深さ0.35m、柱当たりの直径は0.2mを測る。S P 10は直径0.4m、深さ0.3m、柱当たりの直径は0.15mを測る。S P 11は直径0.35m、深さ0.15、柱当たりの直径は0.15mを測る。S P 07から土師器皿(第72図132・133・136・137・140)、S P 08から土師器皿(139)、S P 09から土師器皿(130・134)が出土している。

土坑 S X 33(第51図) 第1面の北辺の中央部で検出した不定形の土坑である。東西3.4m、南北残存幅3.6m、深さ0.6mを測る。



1. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂く炭混じる
2. 灰色 (7.5Y 5/1) 細粒砂く炭混じる
3. 灰色 (N 4/) 細粒砂く炭混じる

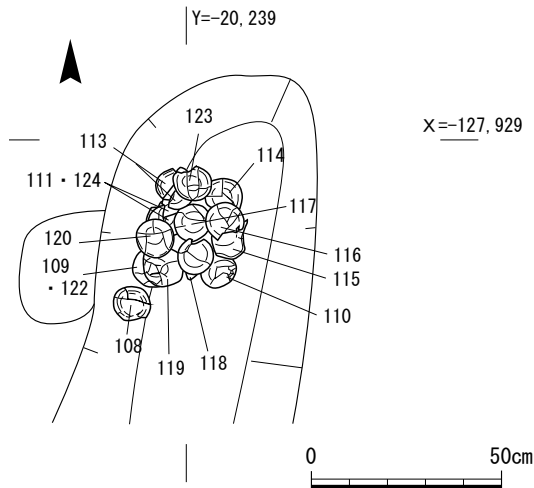
第49図 C 1区掘立柱建物 S B 41実測図(1/100)

土坑内から多量の遺物が出土した。残存状況が悪いものも一定量含まれているが、比較的まとまって出土した。土師器皿(第71図83~104)と瓦器碗などが出土している。

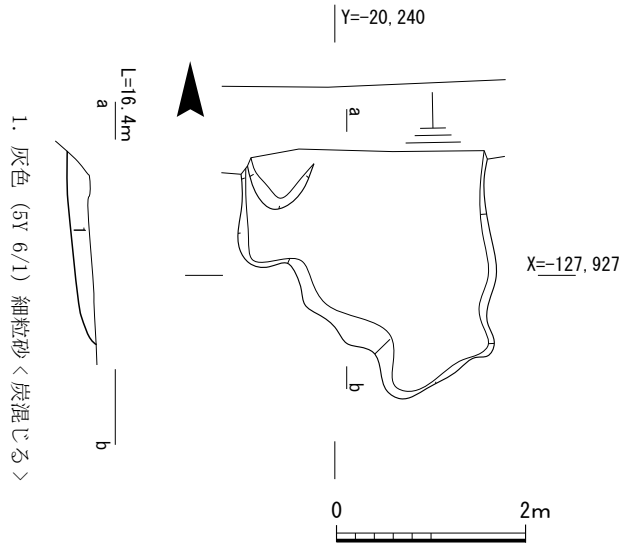
土坑 S X 34 第1面西辺の北端部で検出した。南北0.2m程度の円形の土坑である。瓦器碗(105・106)と白磁碗(107)が出土している。

掘立柱建物 S B 41(第49図)

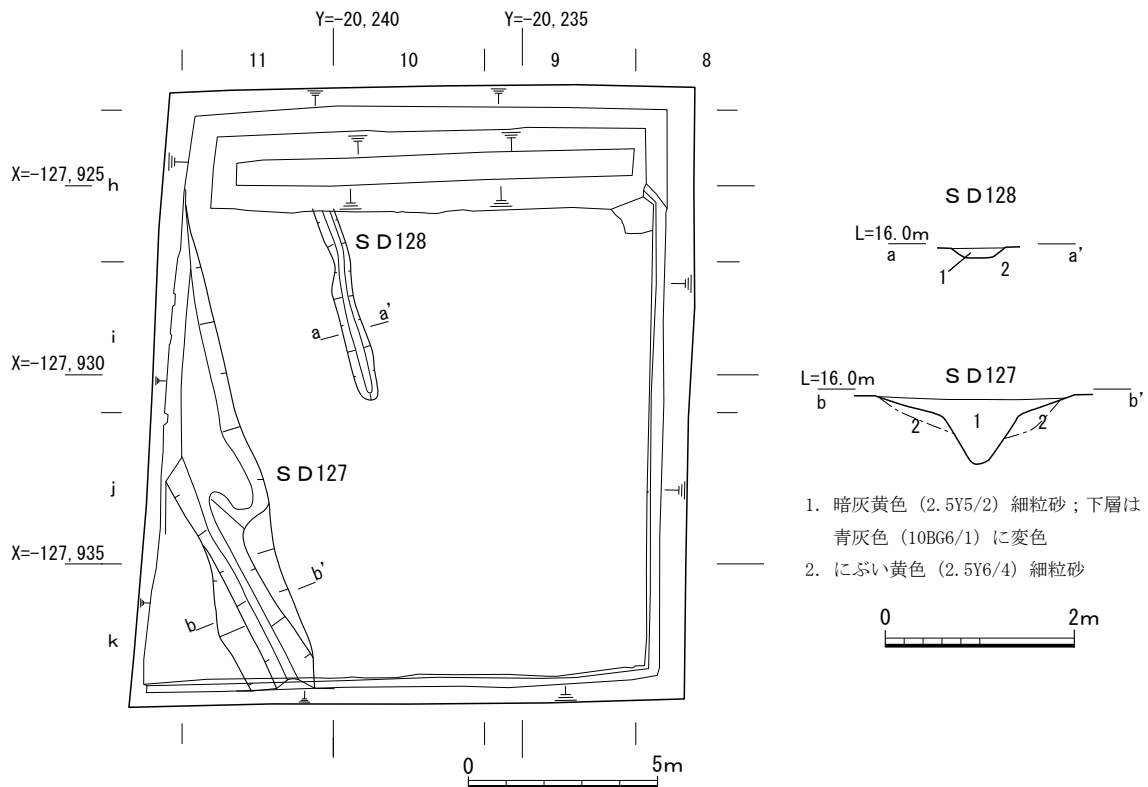
調査地南東部で検出した掘立柱建物で、東西2間、南北3間を検出した。東側と南側は調査区外に延びる可能性がある。1間あたりおよそ2m幅を測る。掘立柱を構成する柱穴は平面が円形を呈するもので、直径はおよそ0.4mを測る。検出高はばらつきがあるものの、およそ0.2m、



第50図 C 1 区土坑 S X 126平・断面図(1/20)



第51図 C 1 区土坑 S X 33平・断面図(1/80)



第52図 C 1 区 S D 127・128平・断面図 第3面(1/200・1/80)

柱当たりは直径0.2m前後である。S P 42からは土師器皿(第72図128)、S P 50からは土師器皿(132)など、中世前期の遺物が出土した。

溝 S D 127(第52図) 第3面で検出した。調査地南西部に位置する南東から北西に斜行する溝である。検出長11m、幅約1.6mを測る。単一層でV字状の断面を呈し、古代以前の遺物を包含する遺構である。第71図125～127の須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯が出土している。

土坑 S X 126(第50図) 調査地中央部で検出した径0.6mを測る円形土坑である。中世前期の

土師器皿がまとまって出土した。粒径1cmほどの礫を納めた土師器皿を互いの口縁を重ね合わせた状態を基本とした複数の土師器皿(第71図108~124)がまとまって出土した。このような出土状況の類例としては、京都市埋蔵文化財研究所が令和5年度に行った北野廃寺・北野遺跡の発掘調査^(注12)がある。この調査では19世紀前葉の埋葬遺構70が確認されており、「石英粒を納めた土師器皿を互いの口縁を重ね合わせた状態」で出土している。さらに地鎮に関連する墨書が土師器皿に施されており、鎮物の代替として納められた可能性が高いと評価される。S X126は、墨書はなく中央とその四方に土師器皿を重ね合わせて埋納しているように複数枚の土師器皿を伴うなど違いはあるものの、土師器皿の上下を合わせるようにして中に礫を入れている出土状況は共通するところがあり、中世前期の南山城地域の地鎮遺構の事例として評価できると考える。

(4) 小結

C1区では近世の島畑、中世前期の廃棄土坑、掘立柱建物や柵列、地鎮と考えられる遺構を検出した。さらにその下層からは古代以前の遺物を包含する溝2条を検出した。当地は土層の堆積状況から、溝が掘削される以前は水に浸かりやすい環境であったと推測されるが、他の調査区よりも比較的安定した地盤が早い段階で形成されたと考えられる。古墳時代~古代の段階での土地利用は判然としないが、B地区やC地区の他の調査区と同じように、溝を掘り、何らかの土地利用に努めていたことがうかがえる。中世前期における土地利用がもっとも盛んで、南北を軸とした建物や柵列などは人々が居住していた痕跡と言えよう。他の調査区では畑作や水田として利用されているにもかかわらず、C1区では生活基盤を築いていることは小樋尻遺跡の位置づけを考

えるうえできわめて貴重な成果と言える。その後、中世後半から現代に至るまで耕地として利用されており、近世段階で島畑の盛土痕跡が残されていることから、B9区のように大規模な食糧増産の流れを受けて、島畑が造成された土地であると考えられる。

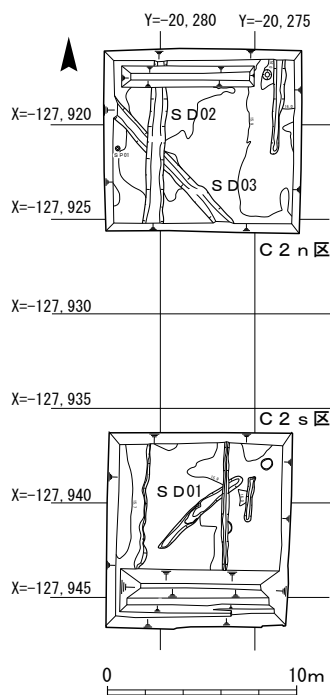
3) C2区の調査

(1) 調査の概要

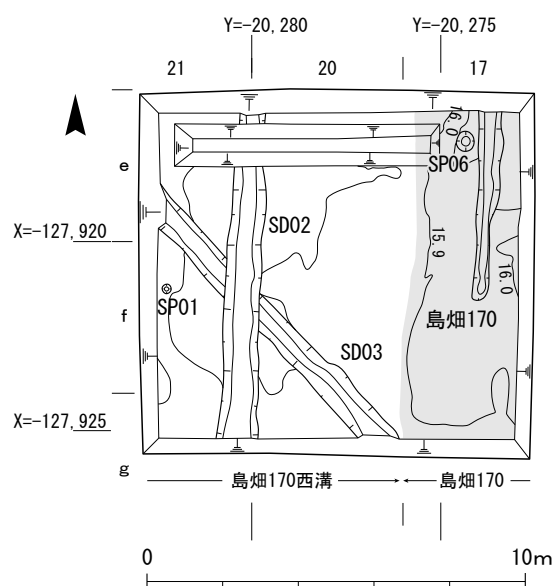
平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。調査地は南北2か所に分かれており、北側の調査地をC2n区、南側調査地をC2s区とした(第53図)。C2n区は南北9.6m、東西10.6mの調査区である。C2s区は南北10.4m、東西9.8mの調査区である。C2区では、南北両区にまたがる南北方向の島畑1基、C2n区内におさまる溝2条を検出した。

(2) 基本層序(第56・57図)

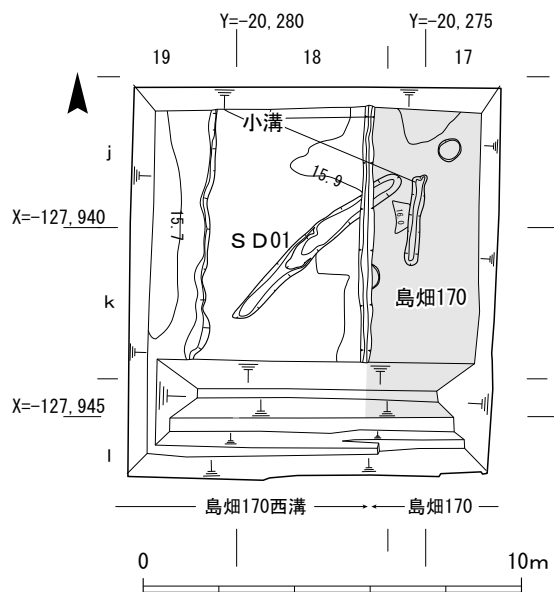
近代から現代にかけての耕作土、盛土が1m近く堆積しており、これを除去したC2n区は26層、C2s区は16層を調査面として遺構の検出を行った。他のC地区の調査区と同じく、青灰色の砂質シルトを主体とする堆積が続き、調査面以下を平面的に掘り下げて



第53図 C2n・C2s区
調査区配置図(1/400)



第54図 C2n区検出遺構平面図(1/200)



第55図 C2s区検出遺構平面図(1/200)

下層の遺構・遺物の検出に努めた。いずれの調査区でも、青灰色系のシルト質砂層が少なくとも検出高から深さ1mにわたり堆積している状況を確認し、湿地もしくは池沼下の堆積状況であることを確認した。地表面からの掘削深度が2mを超えたため、最終的に筋掘りを行い下層の遺構・遺物の確認を行ったが、なお遺物等の出土は認められなかった。

(3) 検出遺構

島畑170 C2n区、C2s区それぞれの東端で検出した島畑である。複数回の盛土をして造成されており、継続的に利用されていたと考えられる。出土遺物はなく年代は判然としない。

① C2n区(第54図)

ピットSP01 調査区の西辺で検出したの遺構で、径0.25mで、深さ0.1mを測る。遺物は出土していない。

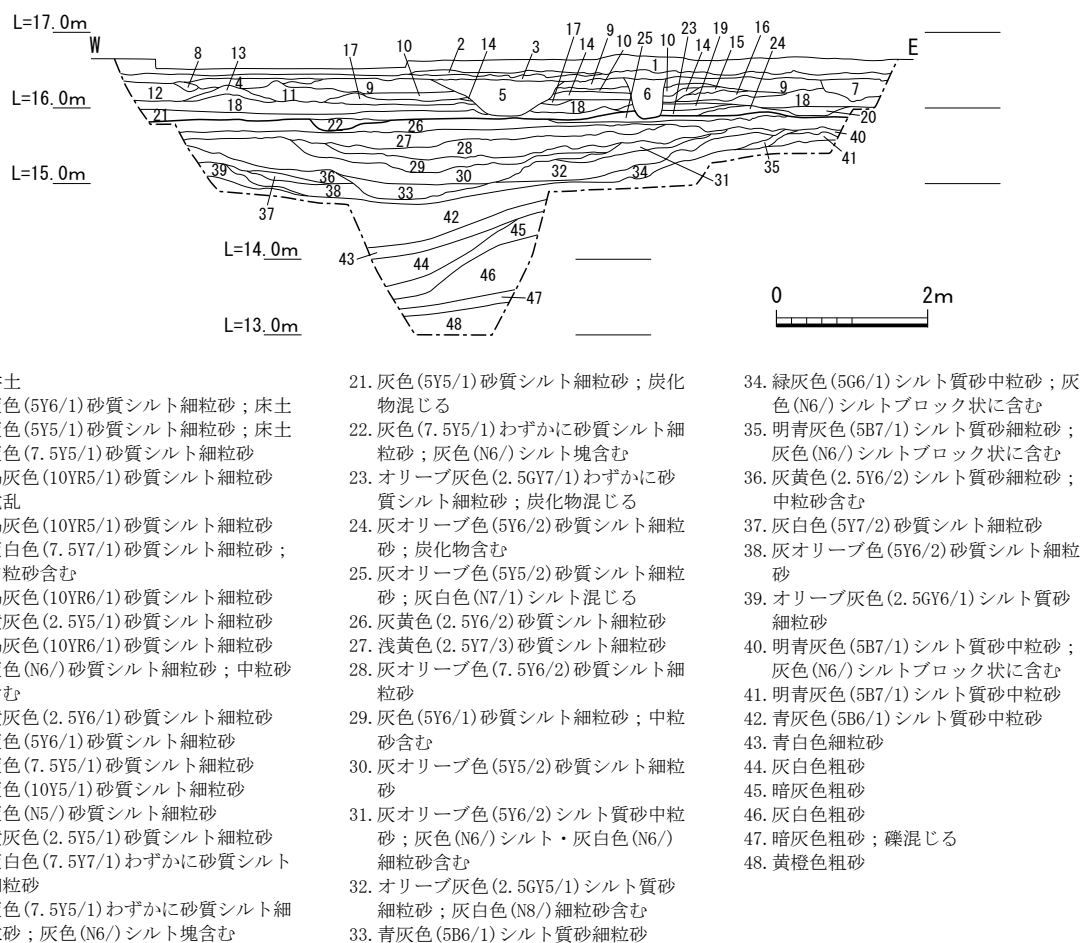
溝SD02 南北方向の溝で、検出長8.6m、深さ0.2mを測る。C2s区では確認できないが、島畑170西端から一段下がる地形が確認できており、溝SD02の残存する一部であると考えられる。

溝SD03 北西に斜行する溝である。北で西に約45°振れる。検出長9.6m、深さ0.25mを測る。島畑造成土の下層で検出しており、摩耗した古墳時代の土器細片が出土した。

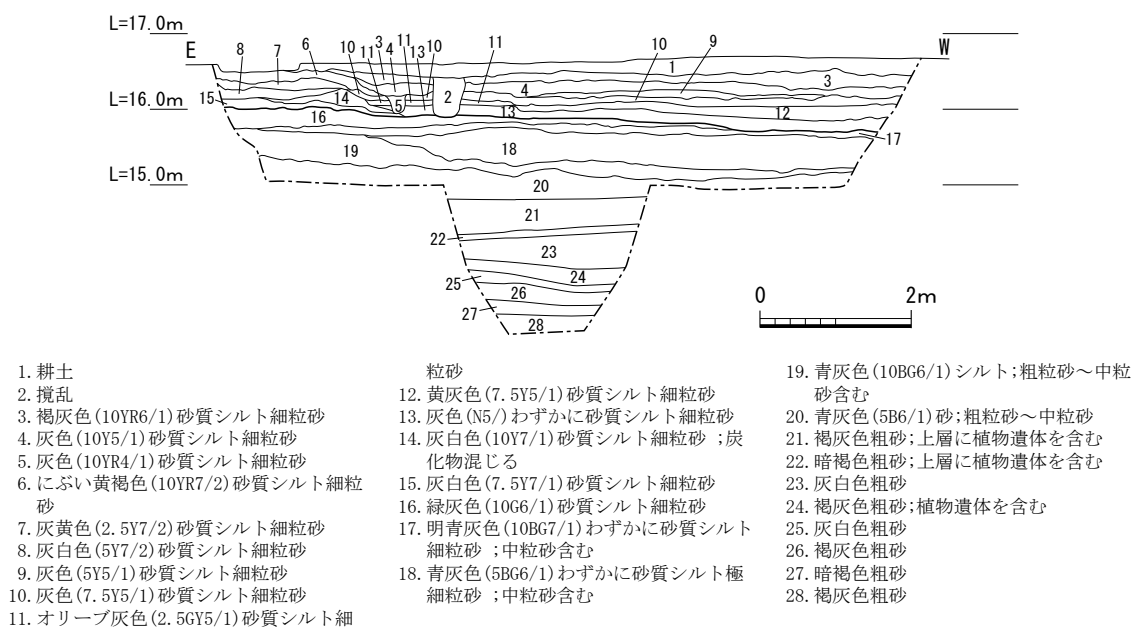
ピットSP06 調査区の北東部、島畑170上で検出した。径0.5m、0.45mにわたって土色が異なっており、内部に弥生土器甕(第73図161)片が詰っていた。掘削しても深さは最大でも0.05mで、しかも底面は一様ではない。埋土がはっきりとしないことから、水の染み込み等による変色と判断される。

② C2s区(第55図)

溝SD01 北東から南西につづく溝で、耕作溝に先行するものである。北で東に約55°振れる。溝の両端は浅くなって終わっている。検出長6m、深さ0.2mを測る。出土遺物はなく時期不明



第56図 C2n区北壁土層図(1/100)



第57図 C2s区南壁土層図(1/100)

である。C 3 区などでも確認されている斜行溝の一部と考えられる。

小溝 島畑170の西辺とその東側で2条を検出した。出土遺物はなく年代は不明だが、島畑に伴う耕作関連の溝と判断する。

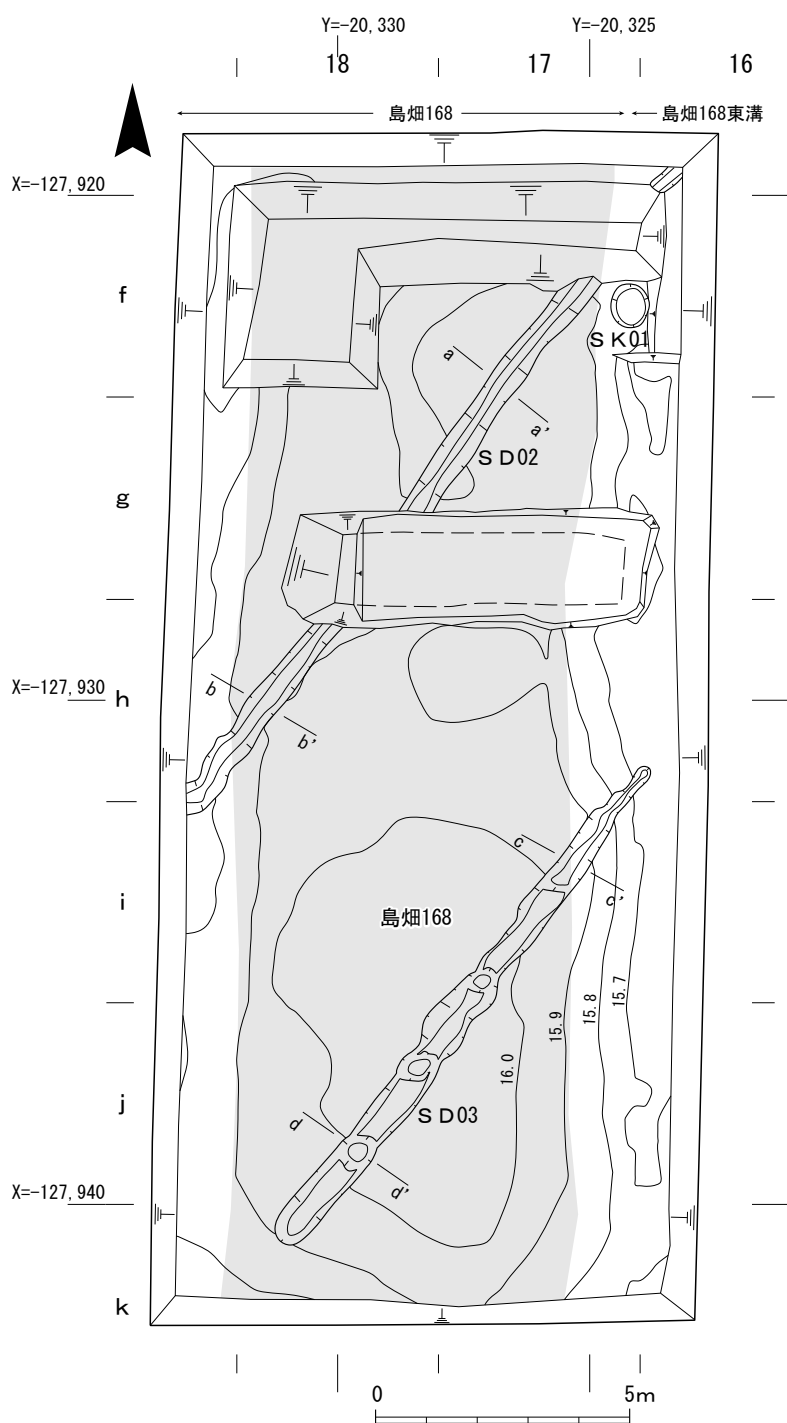
(4)小結

C 2 区は北側のC 2 n 区と南側のC 2 s 区からなる調査区で、時期は判然としないが調査地東側で島畑を検出した。島畑が造成される以前の状況は、鋤溝と考えられる遺構を検出したことから耕作地であった可能性があるものの、積極的な土地利用はうかがえない。C 2 n 区で確認したS D02・03などの溝は古墳時代の溝であるが、同時期のものはこれ以外に認められなかった。当調査区は低地で耕作に向かない環境下であったが、中世後期以降に島畑を造成し、耕作地として利用できるようになったのであろう。

4) C 3 区の調査

(1)調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。南北23.8m、東西10.8mの調査区である。島畑1基、溝2条、中世前期の土坑を確認した。南北方向にのびる島畑は調査区のはほぼ全面にわたり、島畑基盤層を掘削して造成されている。調査区東端で検出した土坑S K01は瓦器椀、土師器皿を包含する土坑である。遺物はその場で投棄されたと考えられる残存状況の個体と摩耗した碎片のみの個体が混在

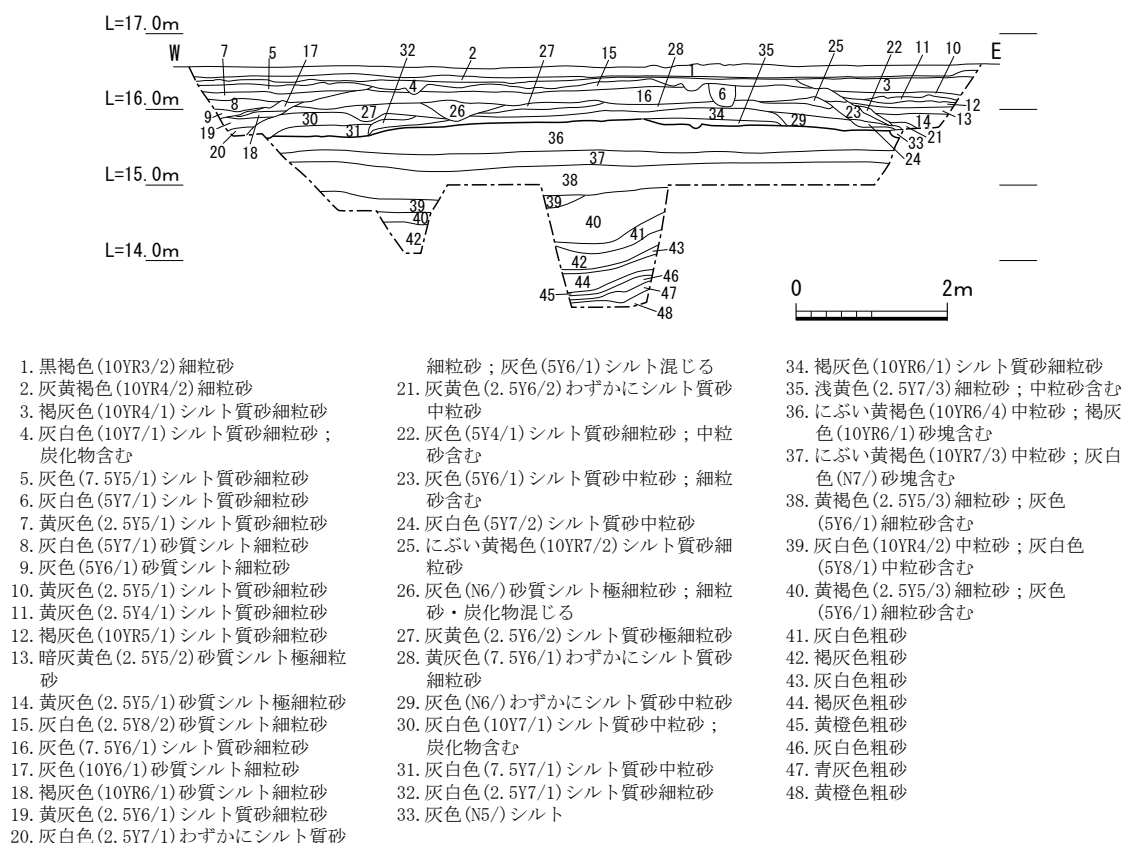


第58図 C 3 区検出遺構平面図(1/150)

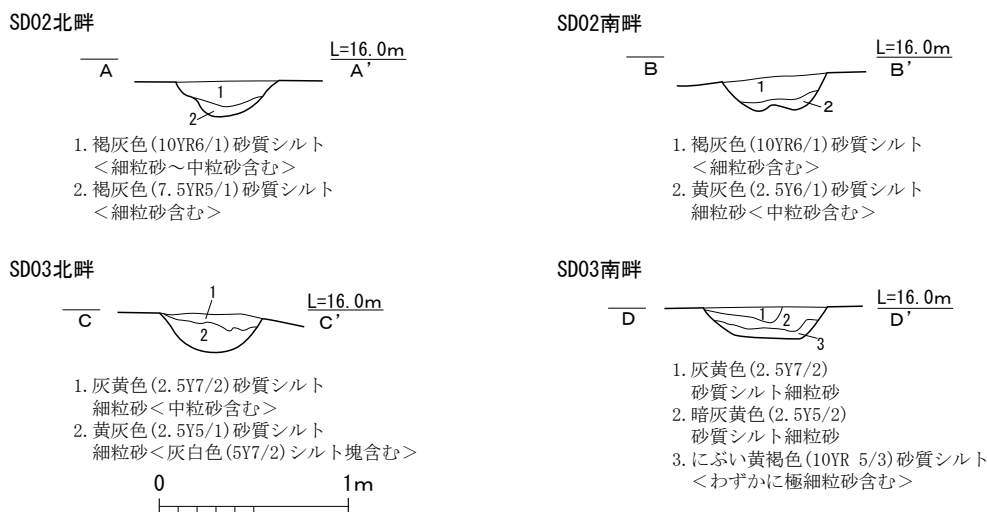
する。その他2条の流路は南西から北東に斜行する溝SD02・03で、残存状況が悪く遺物をほとんど包含していないが、層位から島畑成立以前の溝であると推定される。調査面下層では0.5mほど下層で灰白色粗砂層を確認した。

(2) 基本層序(第59図)

近現代の耕作土、造成土を除去した4層から島畑の掻き揚げ土の堆積を確認した。21層や22層は島畑の掻き揚げ土であり、15・16層、23～25層、27層、29～34層にかけてはその島畑を構成す



第59図 C3区北壁土層図(1/100)

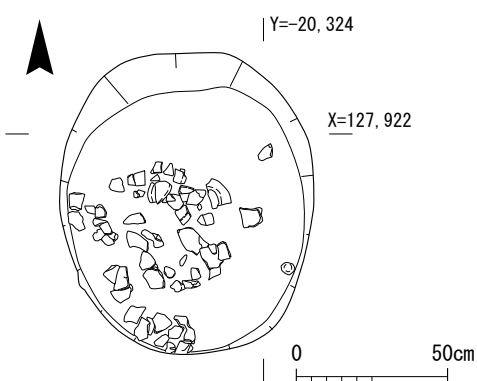


第60図 C3区溝SD02・03土層図(1/40)

る造成土である。調査はこの島畑痕跡を除去した黄褐色砂質シルト層の36層上面で行い、中世前期の遺構を確認した。調査面以下は北側に断ち割りを加え下層を確認した。青灰色系のシルト層が続き、調査面から1mほどを下げたところから白色砂が確認できた。断ち割り内からは遺物の出土は確認できていない。

(3) 検出遺構(第58図)

島畑168 南北方向の島畑で、調査区ほぼ全域に広がる。北壁断面では、東・西側に島畑東・西溝の盛土の境界が認められるが、最初期の島畑造成時における基盤層の掘削溝がほとんど認められない。一方、島畑の南半では、島畑基盤層が約0.2mの高低差で掘削されているのが認められることから、北半と南半で島畑が造成された時期が異なる可能性がある。島畑168の北東には土坑S K01が位置するが関係性は判然としない。



第61図 C 3区土坑S K01
遺物出土状況図(1/25)

溝S D02 調査地南西から北東に斜行する溝である。北で東に40°振れる。S D03にほぼ平行し、心々間で6.8mを測る。検出長16m、深さ0.2mを測る。

溝S D03 調査地南西から北東に斜行する溝で、北で東に35°振れる。長さ12m、深さ0.2mを測る。溝内には一定間隔で削られた土坑状の削平痕が認められる。削平痕は流路として水が流れていた期間に受けた痕跡であると考えられる。

土坑S K01 直径0.7mほどの円形土坑である。瓦器碗、土師器皿を包含する土坑である。遺物はその場で投棄されたと考えられる残存状況の個体と摩耗した碎片のみの個体が混在する。

(4) 小結

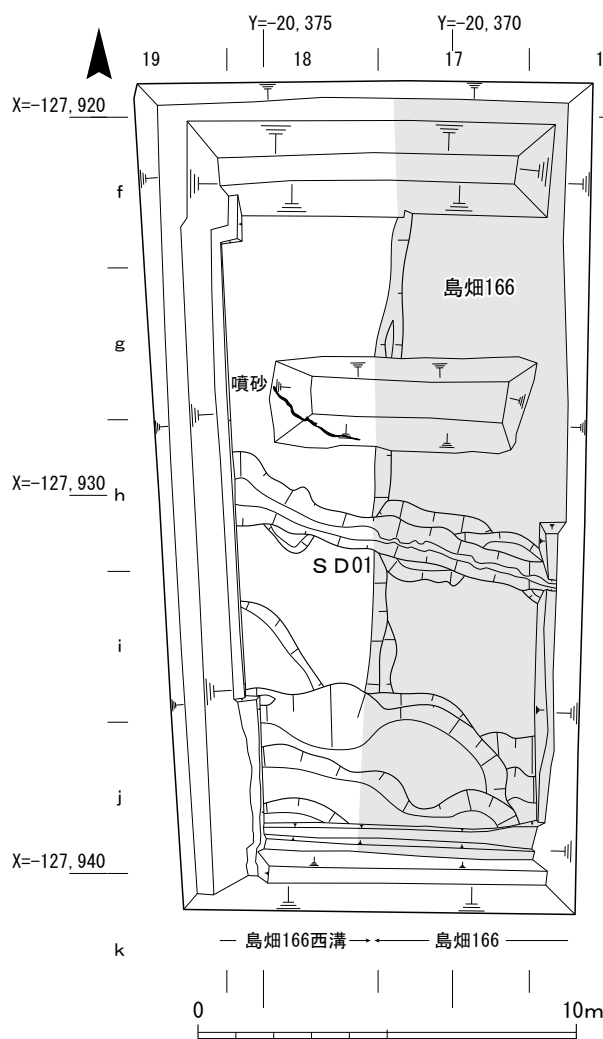
C 3区は時期不明の溝2条と中世前期の土坑1基、島畑1基を検出した。中世以降に島畑が造成され、耕作地として土地利用されているが、それ以前については確実な遺構が認められないため、よくわからない。溝S D02・03は平行する溝で人工のものである可能性があるが、S D03で確認できる溝底を抉るような円形状のくぼみは氾濫により形成された痕跡である可能性がある。何らかの要因により、人為的に掘削された溝に氾濫による急激な水が流れた痕であるとも考えられる。

5) C 4 区の調査

(1) 調査の概要

平成30年度に小樋尻遺跡第6次調査として実施した。南北22m、東西12.2mの調査区である。島畑1基、流路1条、縄文時代の旧谷地形と縄文時代晩期の土器を確認した。調査面標高は15.8mを測り、島畑は地山を掘削して造営されている。島畑除去後、縄文時代の旧谷地形を確認した。この地形は、調査区北側が微高地状になっており、南西側に向かって落ち込む地形で、そこに縄文時代晩期の土器や石器が投棄されていた。

土器や石器は地形の落ち込みに向かって継続して捨てられたようで縄文晩期の土器と石鏃およ



第62図 C4区検出遺構平面図(1/200)

込んでいるが、南壁付近は後述の谷状地形の埋土のため、この掘り込みは不明瞭である。調査区の土層の観察により複数回にわたって造成が行われているものと考えられ、26層を基盤とする段階、この島畑が崩れ再築した16・17層などからなる段階、その後一定期間を経て拡張した14・15層からなる段階、さらに拡張が進められた10～13層から構成される段階の合計4回にわたって積みなおしたことがうかがえる。島畑中からの出土遺物がほとんどなく、どの程度の期間維持されていたのかは不明であるが、周辺の成果より、中世のある段階から近現代に至るまで島畑が維持された可能性がある。

溝S D01 調査区の中央部やや南側で西北西－東南東に延びる溝である。幅2m、深さ0.9mを測る。遺物の出土は無く、氾濫流路の可能性はある。

旧谷地形 調査地南側で確認できた縄文時代晩期の土器(第74～79図189～293)堆積層である。青灰色シルトや砂層を主体とするC4区の堆積環境において、有機質を比較的豊富に包含した砂質シルト層から土器は出土した。底面に貼り付くようには出土しておらず、また接合する土器の個体数も限定的であることや後代の弥生土器(第73図186～188・第79図294～297)が確認できた状

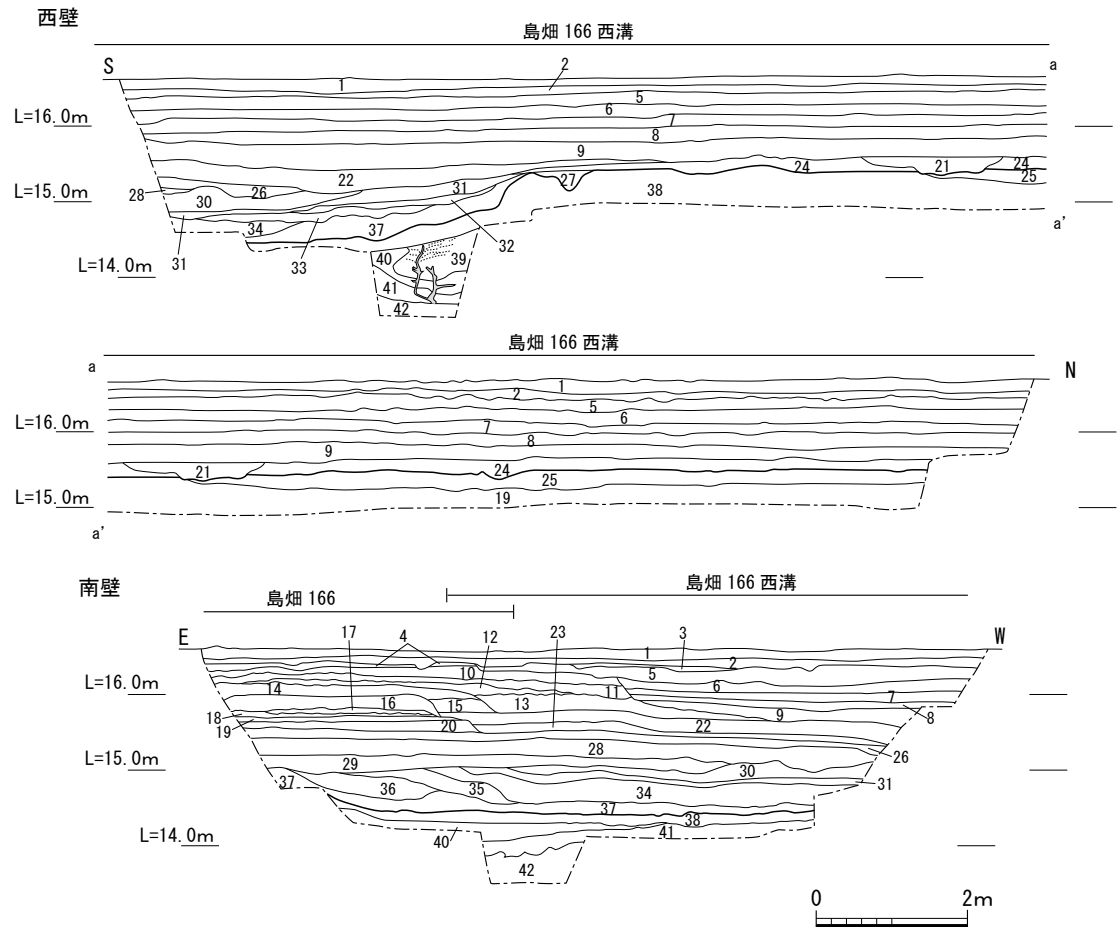
び石器の製作過程にできる剥片などが堆積している状況が確認できた。

(2)基本層序(第63図)

1層から9層は現代から近世にかけての耕作地の造成土である。近世耕作土を除去した24・26層上面を調査面とした。調査面からは削平を受けたと考えられる島畑痕跡を一部確認した。また調査地南側では暗灰色系の砂質シルトを確認した。26・28層から37層にかけては縄文晩期の土器を包含していた落ち込みである。この落ち込みの下の40層は灰色砂層(中粒砂)で遺物は出土していない。またさらに下層を断ち割りしたところ41層で黄灰色系の粗粒砂、42層で黄色から灰白色系統の粗砂が認められたが、これらの層中から遺物は出土していない。

(3)検出遺構(第62図)

島畑166 調査区の東半に造成された盛土を有する島畑である。最初期のものは0.4m程度の深さで基盤層を削り



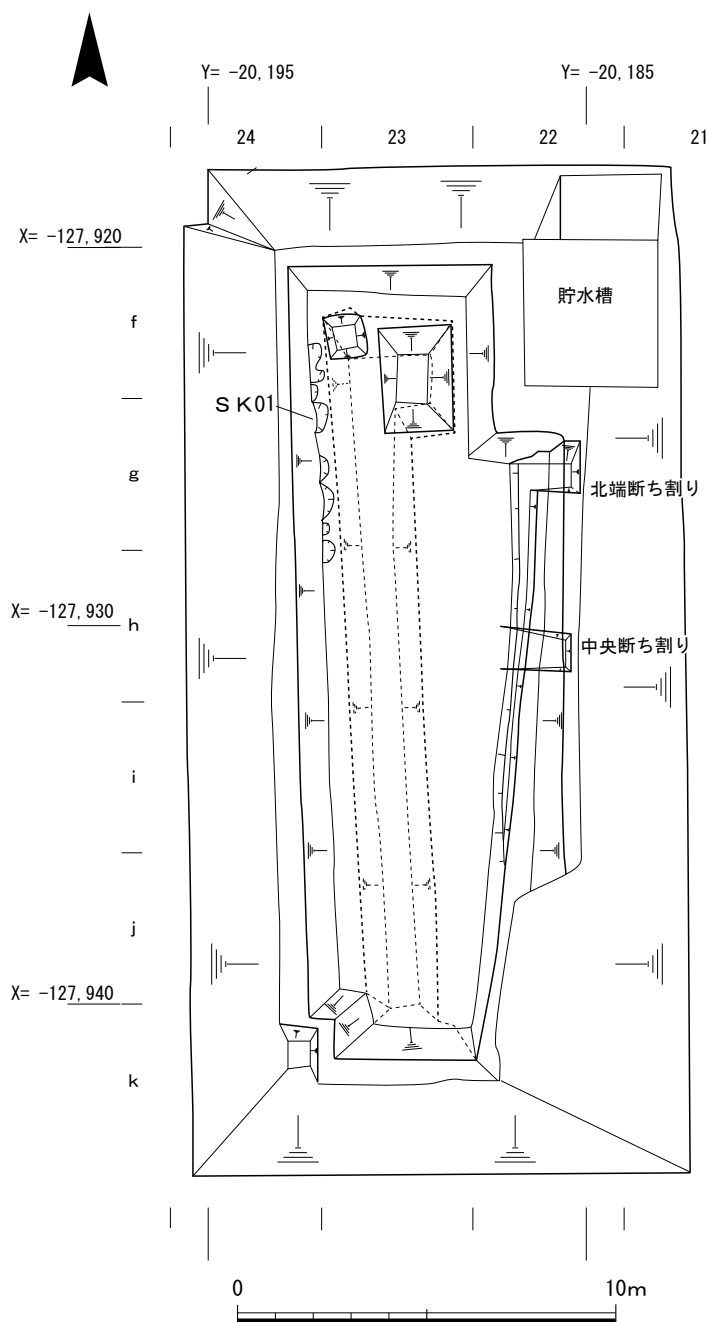
- | | | |
|----------------------------|--|--------------------------------------|
| 1. 耕土 | 19. 青灰色(10BG6/1)砂質シルト細粒砂 | 31. オリーブ黄色(5Y6/3)砂質シルト粗砂；土器片含む |
| 2. 褐灰色(10YR6/1)細粒砂 | 20. にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト細粒砂；炭化物混じる | 32. にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト粗砂 |
| 3. 褐灰色(7.5YR6/1)細粒砂 | 21. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂細粒砂；灰白色(10YR8/1)中粒砂少量含む | 33. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト細粒砂 |
| 4. 褐灰色(7.5YR6/1)細粒砂 | 22. オリーブ黄色(5Y6/3)砂質シルト細粒砂；灰白色(5Y8/1)シルト塊含む | 34. 青灰色(10BG6/1)砂質シルト粗砂；土器片含む |
| 5. 灰色(7.5Y5/1)シルト質砂細粒砂 | 23. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト極細粒砂 | 35. にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト細粒砂 |
| 6. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂細粒砂 | 24. 灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂 | 36. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質シルト細粒砂 |
| 7. 灰白色(5Y7/1)砂質シルト細粒砂 | 25. 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細粒砂 | 37. 青灰色(10BG6/1)細粒砂 |
| 8. 灰色(5Y6/1)砂質シルト細粒砂 | 26. 灰色(5Y5/1)わずかに砂質シルト細粒砂；炭化物少量含む | 38. 青灰色(10BG6/1)細粒砂；灰白色(5Y8/1)中粒砂含む |
| 9. 灰色(10Y5/1)細粒砂 | 27. 灰黄色(2.5Y6/2)わずかにシルト質砂細粒砂 | 39. 黄白色粗砂 |
| 10. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質シルト細粒砂 | 28. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト細粒砂；炭化物・土器片少量含む | 40. 灰色(N4/)中粒砂；黒色(2.5Y2/1)植物遺体含む |
| 11. 灰白色(5Y7/2)砂質シルト細粒砂 | 29. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト細粒砂 | 41. 灰黄色(2.5Y7/2)粗砂；黒色(2.5Y2/1)植物遺体含む |
| 12. 灰色(5Y6/1)わずかに砂質シルト細粒砂 | 30. にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト粗砂 | 42. 灰白色粗砂；黒色(2.5Y2/1)植物遺体含む |
| 13. 褐灰色(10YR6/1)砂質シルト細粒砂 | | |
| 14. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質シルト細粒砂 | | |
| 15. 青灰色(5B6/1)砂質シルト細粒砂 | | |
| 16. 青灰色(5B5/1)砂質シルト細粒砂 | | |
| 17. 青灰色(10BG6/1)砂質シルト細粒砂 | | |
| 18. 青灰色(5B6/1)砂質シルト細粒砂 | | |

第63図 C4区西壁・南壁土層図(1/100)

況から一定の期間、上部が開かれた環境にあったと考えられる。

(4) 小結

C4区では島畑1基と時期不明の東西溝と縄文時代晩期の土器を包含する谷状地形を検出した。島畑166の詳細は不明であるが、中世から近現代に至るまでの長期にわたって維持された可能性がある。このように島畑を造営する状況は、C4区がそのままの状態では土地利用できない、水に浸かりやすい地盤であったことを示している。第62図の平面図に図示した調査地中央の噴砂は、当地に大きな地震が発生した時に生じた地震痕跡であり、C4区が液状化しやすい軟弱な地盤であったことを示している(写真図版第46-2)。調査地南側で確認した谷状の落ち込み(旧谷地



第64図 C10区検出遺構平面図(1/200)

形)は縄文時代晩期を主体とする土器が出土した堆積層であった。これらの土器の一部が接合するものの破片が多く、また、弥生土器も一部出土していることから、一定期間にわたり、土器が堆積する環境であったと考えられる。

(加藤雄太)

6) C10区の調査

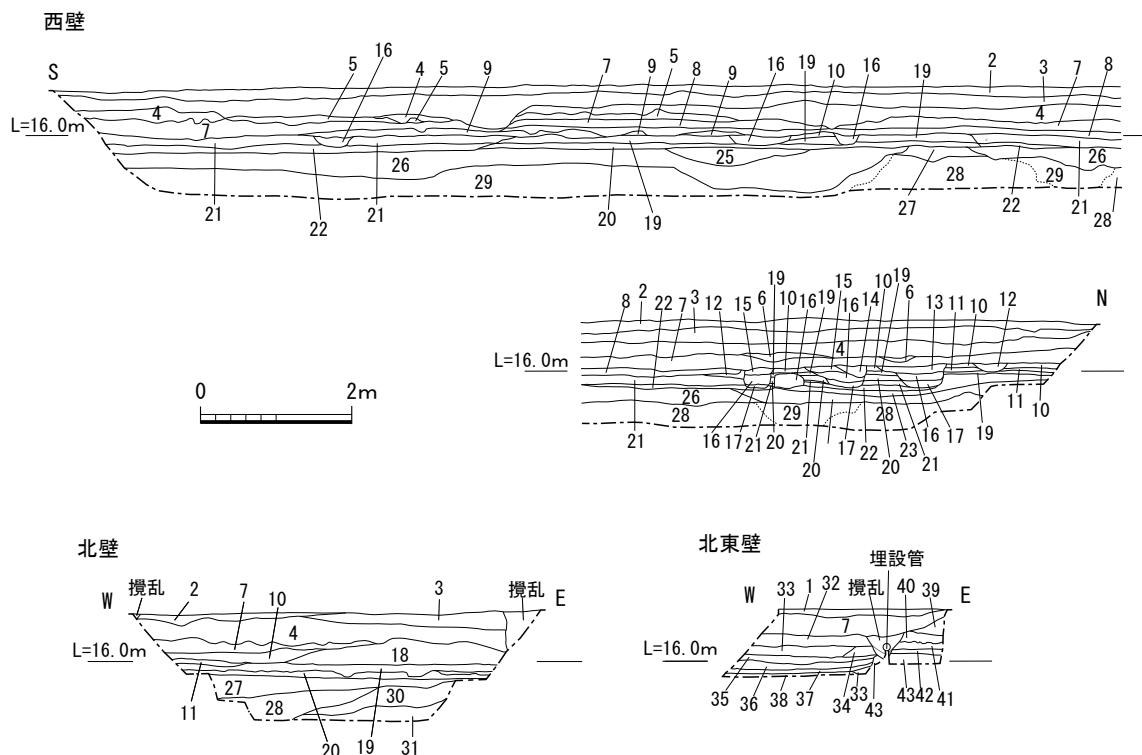
(1) 調査の概要

C10区の調査は橋脚17の建設予定地で、令和2年度に第11次調査として実施した。掘削面積は138㎡である。同年に移転した京都府城陽警察署の跡地に当たる。標高16.6m前後まで旧警察署跡の造成に伴う盛土があり、重機で表土掘削を標高16m前後まで実施し、それ以降は人力で掘削・精査を行った。標高16.1m付近で、トレンチ北西端で円形土坑(くぼ地)を数か所確認した。土坑からは出土遺物がなく、時期は不明である。本調査区において、鳥畑の痕跡は確認できなかった。断ち割り

を行い、下層を確認したが遺構・遺物は確認できなかった。

(2) 基本層序(第65図)

旧警察署庁舎の建築に伴い、標高16.6m前後まで盛土が施されていた。盛土の下層に厚さ0.5mの旧耕作土が確認された(第1～7層)。その下層の21層では、細粒砂と粘質土が攪拌されて堆積した状況が観察できた。これは、土中の水分が豊富な湿地帯を耕作に適した土壌に変えるために粗粒砂を含む土を人為的に入れ込んで、土地を改変したためと考える。標高16.1m付近の8層上面で、土坑および数か所のくぼ地を確認した。遺構が極めて疎らで浅いことから、21・22層の土



1. オリーブ黒色 (7.5Y2/2) 細粒砂 (表土)
2. 灰色 (N4/0) 極細粒砂
3. 灰白色 (N7/0) 極細粒砂
4. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 極細粒砂 (攪拌)
5. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂
6. 灰色 (N5/0) 極細粒砂
7. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂
8. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 極細粒砂
9. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂; 黄橙色 (7.5YR7/8) 細粒砂を斑点状に含む
10. 明緑灰色 (7.5G7/1) 細粒砂; 黄橙色 (7.5YR7/8) 細粒砂を斑点状に含む
11. 明緑灰色 (10GY7/1) 細粒砂; 橙色 (7.5YR7/6) 細粒砂を斑点状に含む
12. 緑灰色 (5G6/1) 極細粒砂
13. オリーブ灰色 (5GY6/1) 極細粒砂
14. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂
15. オリーブ灰色 (5GY6/1) 極細粒砂
16. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 極細粒砂; 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂を含む
17. 灰白色 (7.5Y7/2) 極細粒砂
18. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂; 橙色 (7.5YR6/6) 細粒砂を斑点状に含む
19. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂; 黄橙色 (7.5Y7/8) 細粒砂をブロックで含む
※19・20層は地山土に近い床土か?
20. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂; 黄橙色 (7.5YR7/8) 細粒砂の斑点、灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂のブロックを含む
※地山に近い土で古代の土師質の羽釜出土
21. 灰白色 (10Y7/2) 極細粒砂; オリーブ黄色 (5Y6/4) 粗粒砂をブロックで含む
※湿地帯を耕作土に変えるために粗粒砂を含む土を人工的に入
22. 灰白色 (7.5Y7/1) 極細粒砂
23. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂
25. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 極細粒砂; 灰色 (N7/0) シルトを含む
26. 青灰色 (5B5/1) 極細粒砂; 明青灰色 (5B7/1) 極細粒砂を多く含む
27. 青灰色 (5B5/1) 極細粒砂; にぶい橙色 (7.5YR7/4) を含む
28. 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗粒砂
29. 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗粒砂; 水等により還元され灰白色 (10Y7/2) に変化している
30. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 粗粒砂
31. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粗粒砂
32. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂と明青灰色 (5BG7/1) シルトが攪拌されたもの
33. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂
34. 灰白色 (5Y7/2) 細粒砂
35. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂
36. 浅黄色 (7.5Y7/3) 極細粒砂; にぶい橙色 (2.5Y6/4) 粗粒砂が斑点状に混ざる
37. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂; 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂が斑点状に混ざる
38. 明青灰色 (5BG7/1) シルト
39. 灰色 (10Y5/1) 極細粒砂
40. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂と緑灰色 (5G5/1) シルトが攪拌されて混ざる
41. 緑灰色 (5G5/1) シルト
42. 灰白色 (10Y5/1) 細粒砂
43. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト

第65図 C10区西・北・北東壁土層図(1/100)

砂入れの際に古代・中世の遺構が削平された可能性が高い。

断ち割りを行い、下層を確認したところ、トレンチ北半部分では0.5m程度の厚さで極細粒砂が堆積し(26・27層)、浅黄色の粗粒砂(28・29層)へと変化していた。

(3)検出遺構(第64図)

土坑S K 01 標高16.1m付近の8層上面で検出した浅い円形土坑の一つである。トレンチ北西端にオリーブ灰色の極細粒砂を埋土とする。他のくぼみとは異なり、比較的しっかりとした掘形を有する。直径約0.5m、深さ0.2mである。他のくぼ地と同じく、自然のくぼみの可能性がある。

(4)小結

C10区の調査では数基の土坑・くぼ地が検出されたが、鳥畑の痕跡などの顕著な遺構は確認できなかった。21層は湿地帯を耕作地へ改変するために造成した際の堆積土と思われる。粗粒砂を含む土を人工的に投入した可能性がある。この層を持ち込む過程で、古代・中世の遺構が削平された可能性が高い。

7) C12区の調査

(1)調査の概要

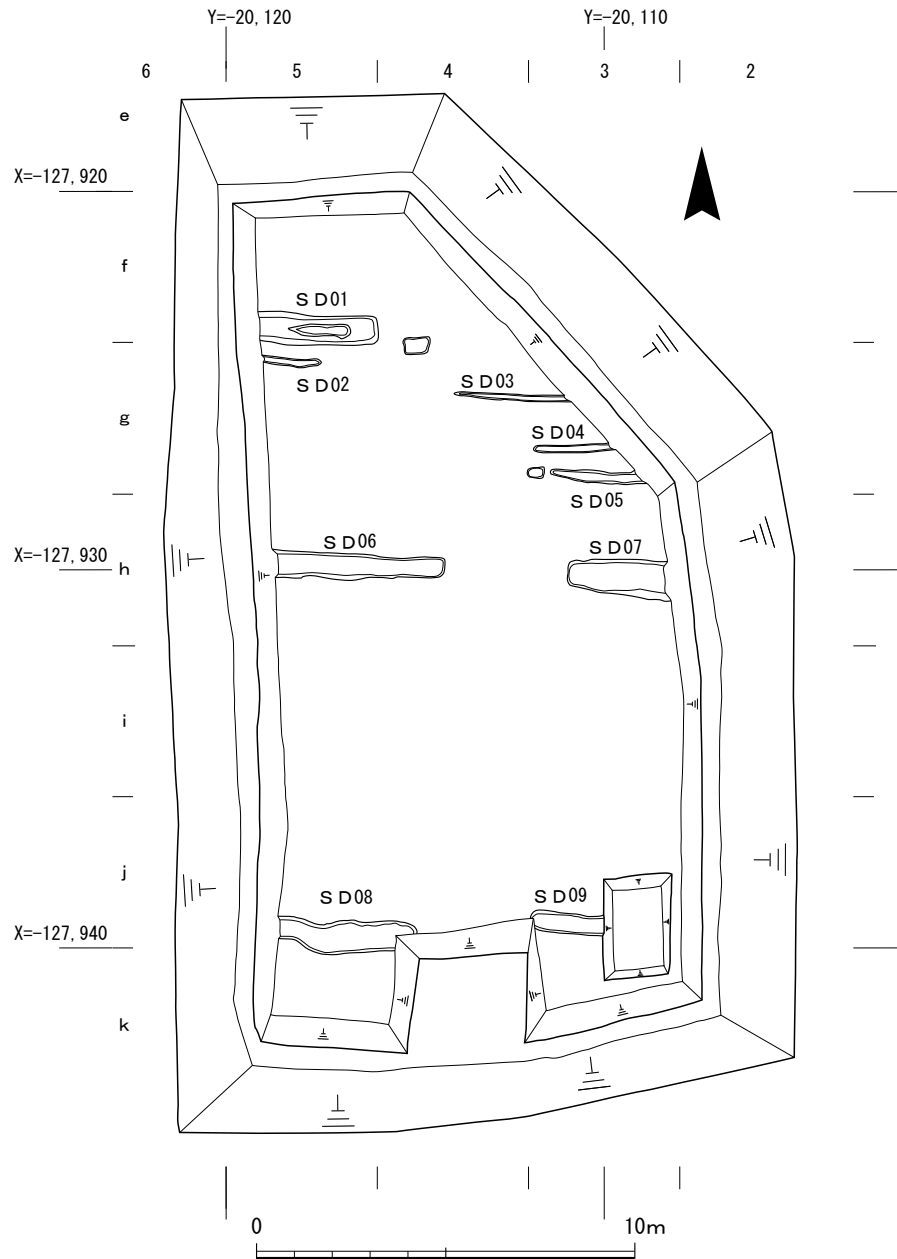
C地区の東端にあたる調査区で、旧消防署跡の東半にあたる。橋脚15の建設予定地で、令和2年度に第11次調査として実施した。調査面積は395㎡である。標高16.6m前後までは旧消防署の造成に伴う盛土があり、本体工事側による盛土除去後、人力による掘削に切り替えた。その結果、土壤改良の跡と思われる堆積土が標高16.1m前後の深さまで及んでおり、その下層で土器を少量含む包含層を確認した。精査を繰り返した結果、東西方向に延びる小溝群を検出した。中世以降の耕作溝と考えられる。下層遺構の有無を確認のため約1.2mの深さまで掘削したが、遺構・遺物を確認できなかった。

(2)基本層序(第67図)

標高16.6m前後までは旧消防署庁舎建築に伴う盛土が施されていた(1層)。その下層には、湿地を農地に変えるために砂礫を含む土壌を入れ込んだと推定される堆積土(5層)が標高16.1m前後の深さまで及んでいた。さらにその下層には、土師器や瓦器を少量含む包含層が確認された(9層)。この上面で、耕作に伴うと思われる東西方向の溝を検出した。埋土は灰白色極細粒砂で、深さはいずれも浅く、溝幅も広くはない。出土遺物から平安時代後期のものと考えられる。下層確認のため約1.2m掘削したが、シルトに近い細粒砂を経て粗粒砂へと変わることを確認し、遺構・遺物は確認できなかった。堆積土壌の状況から、平安時代中期にいたるまで湿地もしくは湖沼といった環境下にあったものと判断される。

(3)検出遺構(第66図)

溝S D 01 調査区の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。長さ約3.2m、最大幅約0.8m、深さ約0.05mから0.1mの規模をもつ。部分的に0.3m程度の深さのあるか所もある。東側へは続かない。南東方向に離れて深さ0.03m程のくぼみがあるが、一連の溝であるかは不明である。出土遺物はない。



第66図 C12区 検出遺構平面図(1/200)

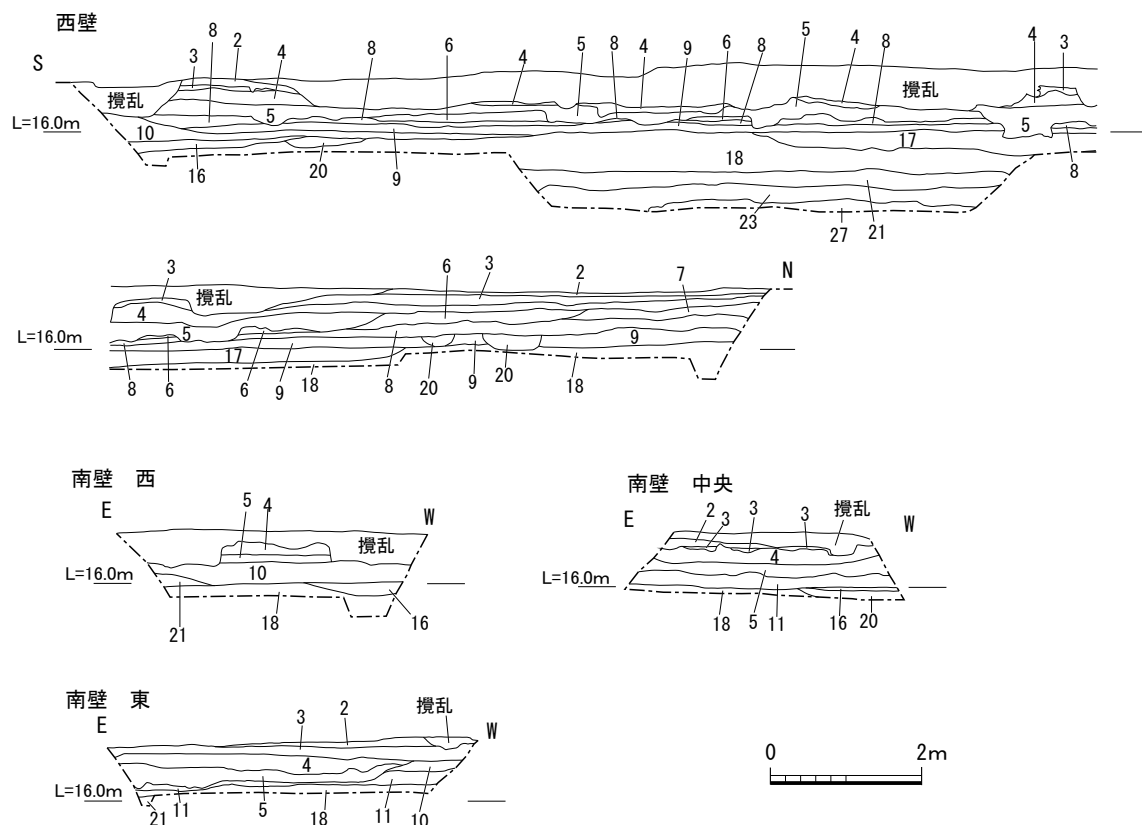
溝S D02 調査区の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。東側へは続かない。長さ約1.6m、最大幅約0.2m、深さ約0.05mの規模をもつ。出土遺物はない。

溝S D03 調査区の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。長さ約3.2m、最大幅約0.2m、深さ約0.2mの規模をもつ。西側へは続かない。出土遺物はない。

溝S D04 調査区の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。長さ約2.1m、最大幅約0.2m、深さ約0.01mの規模をもつ。西側へは続かない。出土遺物はない。

溝S D05 調査区の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。途中途切れるか所もあり、西側へは続かない。長さ約3.2m、最大幅約0.3m、深さ約0.3mの規模をもつ。出土遺物はない。

溝S D06 調査区の中央付近で検出した東西方向の素掘り溝である。東側へは続かない、少



- | | |
|---|--|
| 2. 青灰色 (10BG5/1) 極細粒砂 | 10. 明青灰色 (5BG7/1) 極細粒砂 |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂 | 11. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 |
| 4. 灰白色 (N7/0) 極細粒砂 | 16. 灰色 (N5/0) 極細粒砂；シルトに近い |
| 5. 灰白色 (N2/0) 極細粒砂で灰白色 (5GY8/1) シルトと灰色 (10Y6/1) 極細粒砂が混ざり攪拌された；近代以降の盛土 | 17. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 極細粒砂；瓦器片を含む、中世で凹みに堆積した包含層 |
| 6. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 | 18. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂；シルトに近い |
| 7. 緑灰色 (5G5/1) 極細粒砂；明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂を斑点状に含む | 20. 青灰色 (5BG5/1) 極細粒砂 |
| 8. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂；灰色 (10Y9/1) 極細粒砂が縞状に入る | 21. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂；シルトに近い |
| 9. 緑灰色 (5G6/1) 極細粒砂 | 23. 青灰色 (5BG6/1) 細粒砂；灰白色 (7.5Y7/2) 粗粒砂をブロックで含む |
| | 27. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粗粒砂 |

第67図 C12区西壁・南壁土層図(1/100)

しに離れてある溝 S D07へと続いていた可能性もある。長さ約4.5m、最大幅約0.7m、深さ約0.1mの規模をもつ。灰白色極細粒砂を埋土とする。土師器の細片13点、炭化物細片2点出土。

溝 S D07 調査区の中央付近で検出した東西方向の素掘り溝である。西に離れてある溝 S D06へと続いていた可能性もある。長さ約2.8m、最大幅約1.0m、深さ約0.01mの規模をもつ。灰白色極細粒砂を埋土とする。土師器の細片6点と須恵器細片1点が出土した。図示できたものに土師器皿の破片(第81図308)がある。

溝 S D08 調査区の南側で検出した東西方向の素掘り溝である。東に離れてある溝 S D09へと続いていた可能性もある。長さ約3.7m、最大幅約0.8m、深さ約0.02mの規模をもつ。出土遺物はない。

溝 S D09 調査区の南側で検出した東西方向の素掘り溝である。西に離れてある溝 S D08へ

と続いていた可能性もある。長さ約1.9m、最大幅約0.6m、深さ約0.06mの規模をもつ。出土遺物はない。

(4) 小結

C12区の調査では東西方向の素掘り溝を検出した。溝幅も狭く、深さも浅いものが大半である。出土遺物も少なく、構築時期は特定できないが、中世の耕作に伴う溝と考えられる。島畑の痕跡は認められなかった。中世に至るまでは湿地もしくは湖沼といった環境下であり、中世に至ってはじめて人間による土地利用が行われたものと推測される。

8) C13区の調査

(1) 調査の概要

令和2年度に第11次調査として実施した。旧消防署跡地の西半にあたる橋脚16建設予定で、掘削面積は252㎡(上端460㎡)である。施設造成のための盛土が標高16.7mまであり、本体工事側による盛土除去後に調査を進めた。その結果、標高16.2mまでは旧耕作土、土壌改良土と思われる堆積土があり、その堆積土下で遺構を検出した。検出した遺構は、小溝を15条、小溝に切り込まれた平面V字形の溝、円形土坑2基、柱穴8基を検出した。V字形の溝からは平安時代の土師器片が出土し、小溝の一部からは12世紀後半以降の瓦器片、土師器片が少量出土した。

(2) 基本層序(第69図)

標高16.7mまで旧消防署庁舎建築のための盛土がなされていた(1層)。その下、標高16.2mまでは旧耕作土(2・3層)、土壌改良土と思われる堆積土(5層)があり、その堆積土を除去した段階で遺構を検出した(21層上面)。下層確認のため約1.2mの深さまで掘削したが、遺構・遺物を確認することはできなかった。

(3) 検出遺構(第68図)

溝S D01 調査区北側で検出した東西溝で、西端で途切れる。検出長約6.2m、最大幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。出土遺物はない。

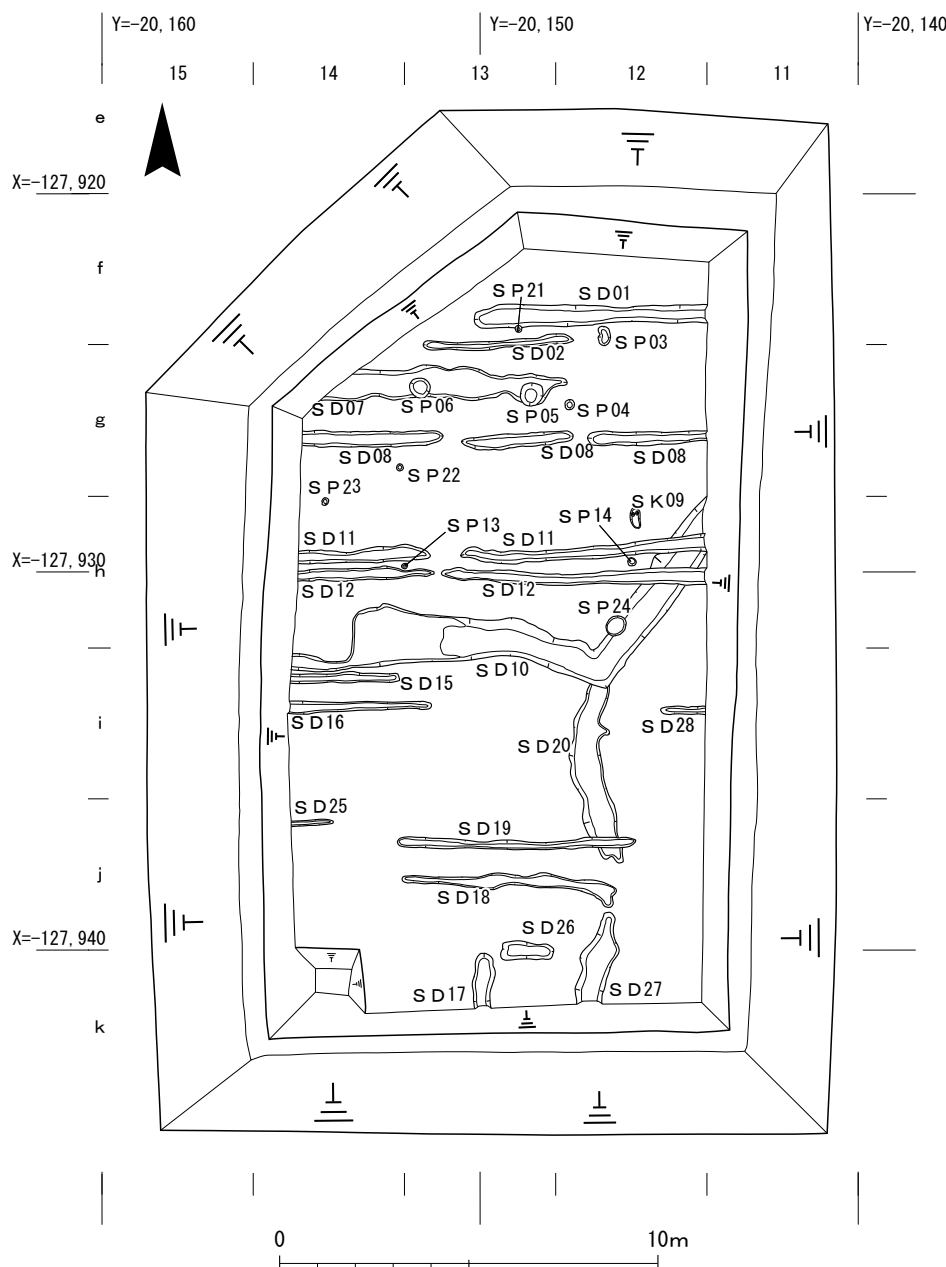
溝S D02 調査区北側で検出した東西溝で、東西両端で収束する。検出長約4.1m、最大幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。出土遺物はない。

ピットS P03 調査区北東部で検出した楕円形のピットである。最大径約0.5m・深さ約0.06mを測る。埋土は明緑灰色極細粒砂の堆積に灰色極細粒砂が掘りこまれた状態の堆積状況を示す。出土遺物はない。

ピットS P04 調査区北部中央付近で検出した円形ピットである。最大径約0.3m、深さ約0.2mを測る。埋土は青灰色極細粒砂である。出土遺物はない。

ピットS P05 調査区北部中央付近で検出した円形ピットである。最大径0.6m、深さ0.1mを測る。溝S D07の埋土に切り込むピットである。埋土は青灰色極細粒砂で、紫灰色でオリーブ黒色極細粒砂を含む緑灰色極細粒砂が掘り込んでいる。出土遺物はない。

ピットS P06 調査区北部中央付近で検出した円形ピットである。最大径0.6m、深さ0.1mを測る。溝S D07の埋土に切り込むピットである。埋土はオリーブ灰色極細粒砂である。砥石(第



第68図 C13区検出遺構平面図(1/200)

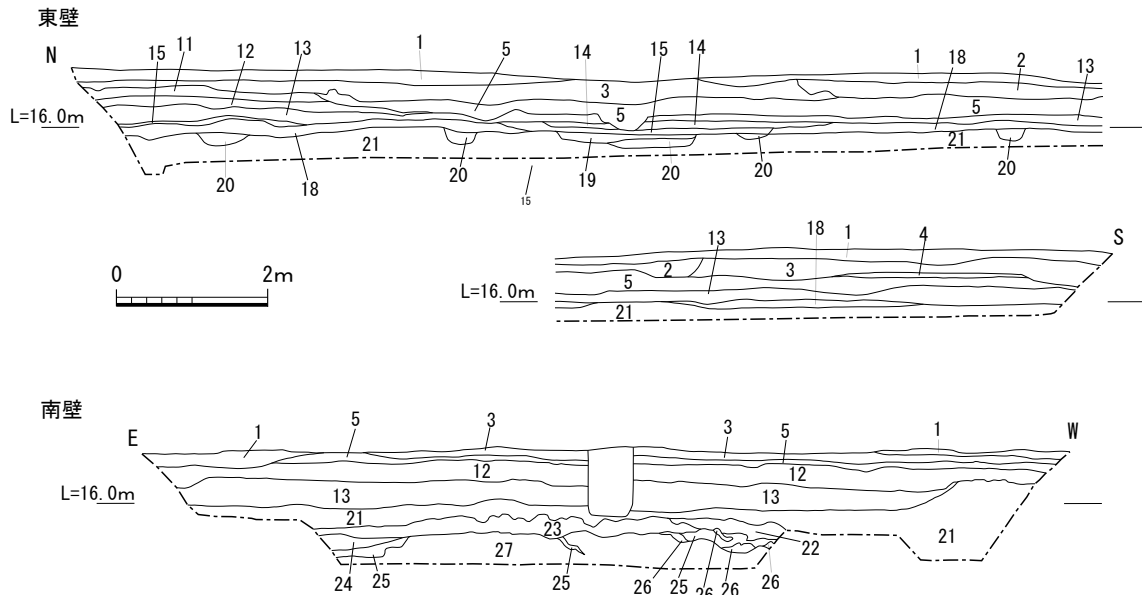
82図315)と土師器の細片2点が出土した。

溝SD07 調査区北部で検出した東西溝で、東側で収束する。検出長約6.5m、最大幅約0.9m、深さ約0.1mを測る。出土遺物はない。

溝SD08 調査区北部で断続的に検出した東西溝である。検出長約10.8m、最大幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。2か所で途切れるが、一連の溝である。東側で土師器の細片1点が出土した。

土坑SK09 調査区中央北東部で検出した楕円形の土坑である。南北長約0.6m×東西長約0.3m、深さ約0.03mを測る。北辺2か所にくぼみがある。出土遺物はない。

溝SD10(第70図) 調査区中央で検出した直線的な溝であるが、途中で大きく屈曲する。検出長約13.5m、最大幅約1.7m、最大深約0.4mを測る。西側4m弱については深さ0.05mと極端に



- | | |
|--|--|
| 1. 明青灰色 (5B7/1) 細粒砂；消防署建物に伴う盛土 | 19. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂 |
| 2. 青灰色 (10BG5/1) 極細粒砂 | 20. 青灰色 (5BG5/1) 極細粒砂 |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂 | 21. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂 (シルトに近い) |
| 4. 灰白色 (N7/0) 極細粒砂 | 22. 明青灰色 (10BG7/1) 細粒砂；灰白色 (7.5Y7/2) 粗粒砂をブロックで含む |
| 5. 灰白色 (N2/0) 極細粒砂；灰白色 (5GY8/1) シルトと灰色 (10Y6/1) 極細粒砂が混ざり攪拌された下の近代以降の盛土 | 23. 青灰色 (5BG6/1) 細粒砂；灰白色 (7.5Y7/2) 粗粒砂をブロックで含む |
| 11. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 | 24. 26 層と 27 層が混ざる |
| 12. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂 | 25. 浅黄色 (7.5Y7/3) 粗粒砂；明青灰色 (10BG7/1) 細粒砂をブロックで含む |
| 13. 灰色 (5Y6/1) 極細粒砂 | 26. 青灰色 (5BG6/1) 粗粒砂 |
| 14. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 | 27. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粗粒砂 |
| 15. 浅黄色 (5Y7/3) 細粒砂 | |
| 18. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 (シルトに近い) | |

第69図 C13区東壁・南壁土層図(1/100)

浅くなり、西端では幅も狭くなる。埋土は下層にオリーブ灰色極細粒砂、上層に青灰色極細粒砂が堆積する。溝内から破片となって距離を置いて土師器鍋(第81図313)が出土した。

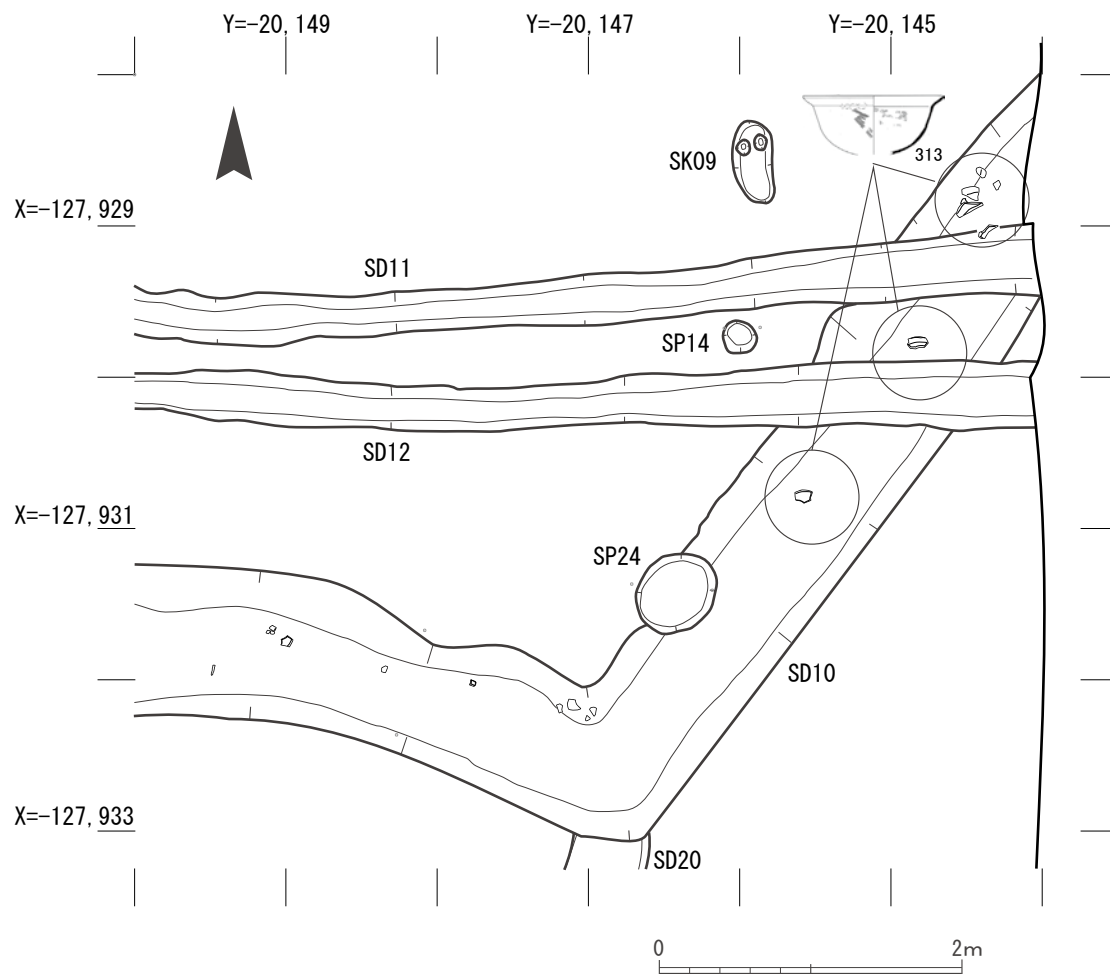
溝S D11 調査区中央で検出した東西溝である。検出長約10.8m、最大幅約0.5m、最深部で約0.05mを測る。途中1か所で途切れるが、一連の溝である。溝S D10の埋没後に構築されている。出土遺物はない。

溝S D12 調査区中央で検出した東西溝である。検出長約10.8m、最大幅約0.5m、最深部で約0.07mを測る。途中1か所で途切れるが、一連の溝である。溝S D10の埋没後に構築されている。土師器の細片が2点出土した。

ピットS P13 調査区中央西側で、溝S D11と溝S D12に挟まれた箇所検出した円形ピットである。最大径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土はオリーブ灰色極細粒砂である。土師器の細片が1点出土した。

ピットS P14 調査区中央東側で、溝S D11と溝S D12に挟まれた箇所検出した円形ピットである。最大径約0.2m、深さ約0.03mを測る。出土遺物はない。埋土は青灰色極細粒砂である。

溝S D15 調査区中央西側で検出した東西溝である。東端で収束する。検出長約2.9m、最大



第70図 C13区溝SD10内遺物出土状況平面図(1/50)

幅約0.3m、深さ約0.04mを測る。出土遺物はない。

溝SD16 調査区中央西側で検出した東西溝である。東端で収束する。検出長約3.9m、最大幅約0.4m、深さ約0.05mを測る。出土遺物はない。

溝SD17 調査区南部中央で検出した南北溝である。北端で収束する。検出長約1.5m、最大幅約0.6m、深さ約0.01mを測る。土師器の細片が2点出土した。

溝SD18 調査区南部中央で検出した東西溝である。検出長約5.7m、最大幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。須恵器の細片が1点出土した。

溝SD19 調査区南部中央で検出した東西溝である。検出長約6.4m、最大幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。出土遺物はない。溝SD20の埋土を切り込む溝である。

溝SD20 調査区東側の南寄りで検出した南北溝である。検出長約4.8m、最大幅約0.9m、深さ約0.04mを測る。出土遺物はない。溝の埋土の北端が溝SD10に、南端が溝SD19に切り込まれる溝である。出土遺物はない。

ピットSP21 調査区北側中央で検出した円形ピットである。最大径約0.2m、深さ約0.1mを測る。埋土は下層が明緑灰色極細粒砂、上層が灰色極細粒砂である。出土遺物はない。溝SD01

の埋土に切り込むピットである。

ピット S P 22 調査区北西部で検出した円形ピットである。最大径約0.16m、深さ約0.06mを測る。埋土はオリーブ灰色極細粒砂である。出土遺物はない。

ピット S P 23 調査区北西部で検出した円形ピットである。最大径約0.2m、深さ約0.2mを測る。埋土はオリーブ灰色極細粒砂である。出土遺物はない。

ピット S P 24 調査区東側中央で検出した円形ピットである。最大径約0.52m、深さ約0.06mを測る。埋土はオリーブ灰色極細粒砂である。出土遺物はない。

溝 S D 25 調査区南西部で検出した東西溝で、東端で収束する。検出長約1.1m、最大幅約0.1m、深さ約0.01mを測る。出土遺物はない。

溝 S D 26 調査区南側中央で検出した東西溝である。両端で収束する。検出長約1.4m、最大幅約0.5m、深さ約0.01mを測る。出土遺物はない。

溝 S D 27 調査区南東部で検出した南北溝である。北端で収束する。検出長約2.6m、最大幅約0.8m、深さ約0.05mを測る。出土遺物はない。

溝 S D 28 調査区東側中央で検出した東西溝である。西端で収束する。検出長約1.2m、最大幅約0.2m、深さ約0.03mを測る。出土遺物はない。

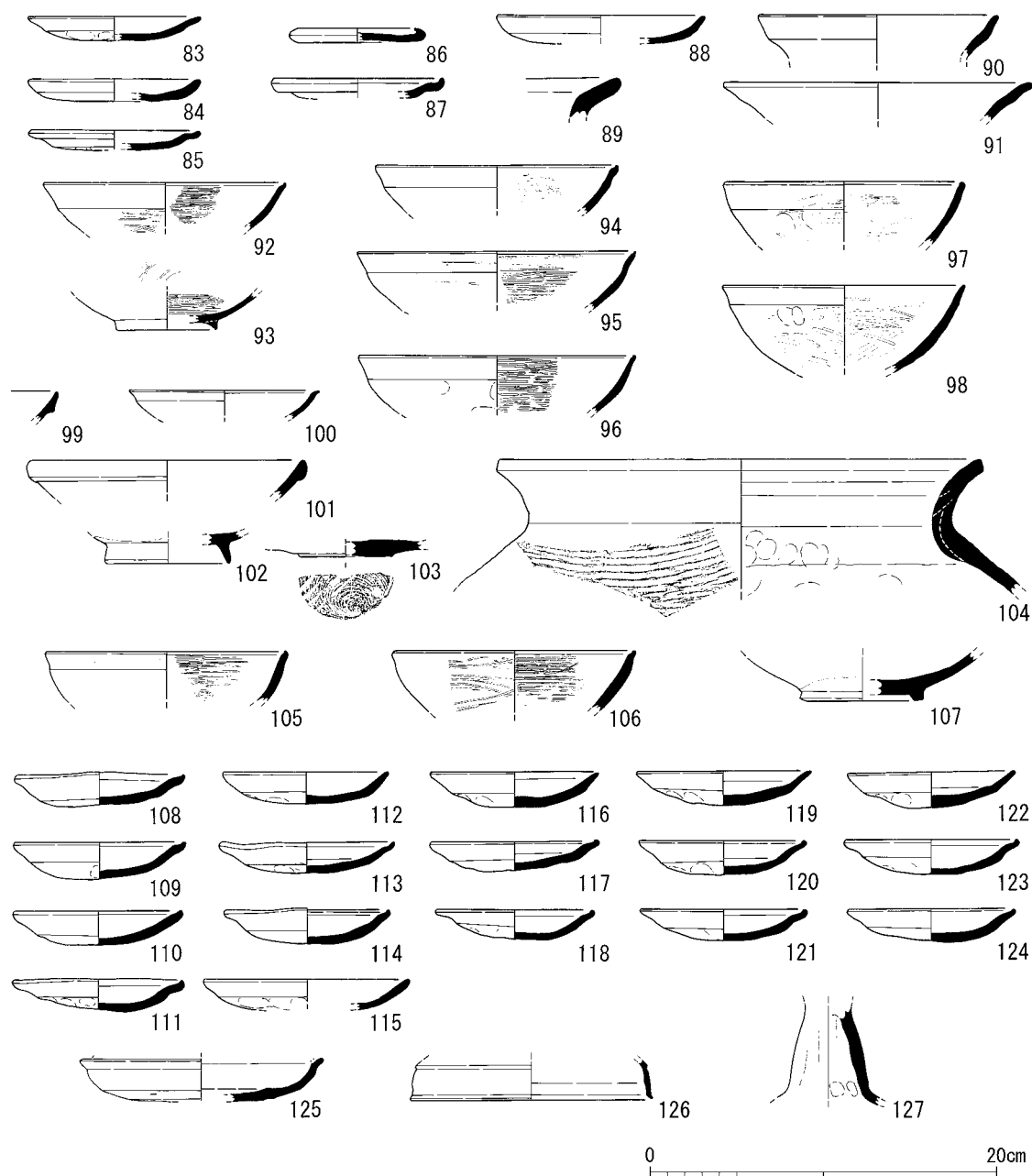
(4) 小結

C13区では、不定方向の溝、南北方向の溝、東西方向の溝、ピット・土坑を検出した。それぞれに重複関係が認められ、構築時期に差がある。南北方向の溝(溝 S D 20など)が最も古く、続いて不定方向の溝(溝 S D 10など)、東西方向の溝(溝 S D 07など)、ピット群(ピット S P 05など)の順で構築されていったものと考えられる。遺構の性格は不明である。おそらく耕作に伴う構築物なのであろう。また、この地域特有の島畑の痕跡は認められなかった。(三好博喜)

9) 出土遺物

(1) C1区(第71・72図83～160)

83～104は S X 33から出土した。83～88は土師器皿で、すべて小片である。83は体部上半から口縁を強くなでて、斜め外方に伸びる。84・88は口縁の外面をなでて面を有し、直立気味の口縁となる。85・87は「て」字状のもので、86はコースター形である。11世紀後半から12世紀前半の時期の83～85、87・88と12世紀半ばから後半の86がある。92～98は瓦器碗で、土師器皿と同じく、小片で出土した。92～96は内面のミガキは比較的密に施されているが、外面は摩滅のため疎らにしか認められない。97・98の内面は比較的密にミガキを施しており、外面も比較的密にミガキが認められる。92・94・95・96が大和型、93・97が楠葉型、98は摩耗しており判然としないが胎土と口縁部の特徴から和泉型と考えられる。93・94・97は12世紀前半、92・95・96・98は12世紀後半であろう。99～101は白磁碗の口縁で99・101はⅣ類、100はⅤ類と考えられる。11世紀後半から12世紀前半と思われる。102は東海系の灰釉陶器の碗の底部である。103は回転台成形の土師器である。底部底には糸切痕が見て取れる。内外面にミガキはなく、ナデによる調整が施されている。104は中世段階の須恵器の甕である。内面首部に指頭圧痕、肩部に叩き調整の痕跡が残る。

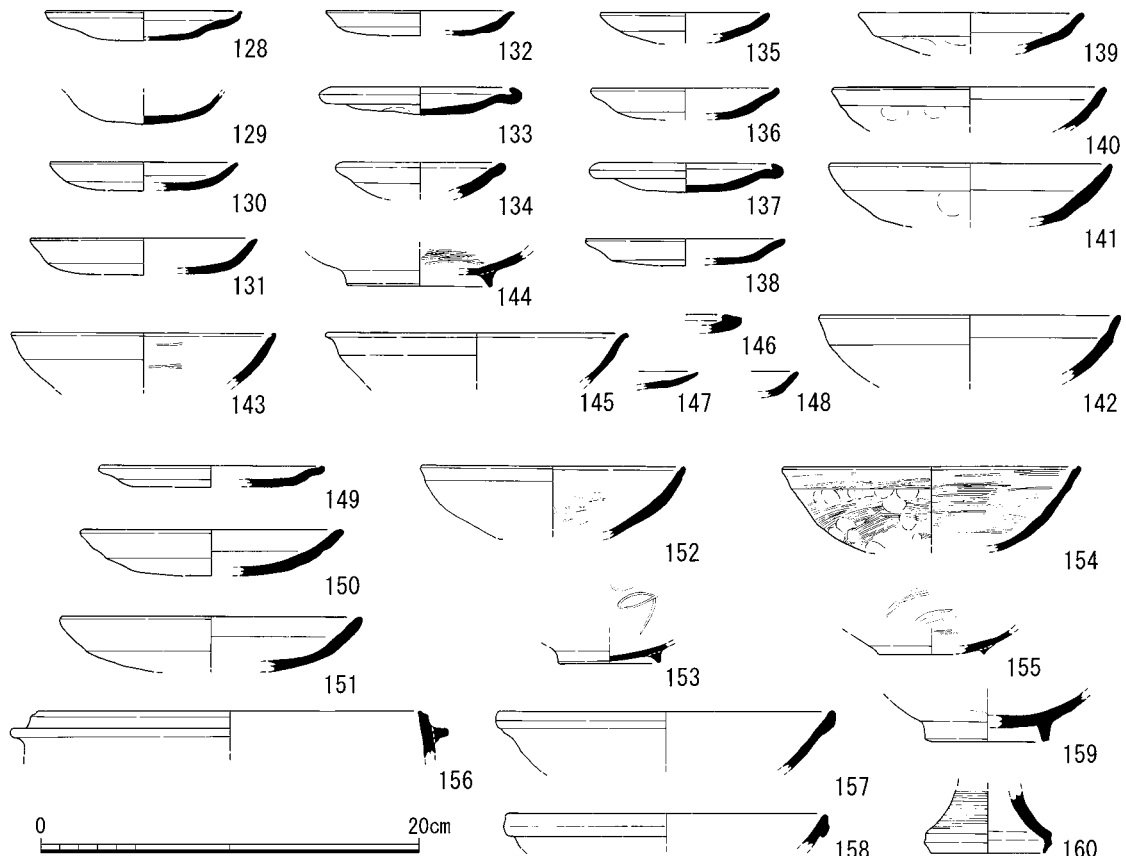


第71図 C1区出土土器1

105～107はS X34から出土した。105・106は瓦器碗で、内面はともに密にミガキを施す。105は外面のミガキは不明であるが、106は外面のミガキはやや疎らであるものの全面に施されている。105が大和型、106が楠葉型である。いずれも12世紀中頃。107は白磁碗である。12世紀後半。

108～124はS X126から出土した土師器皿である。完形のものと及び完形に近いものが土坑内に収められていた。体部から口縁部を強くなでて横方向に引き出し気味のもの(116・119・122)、体部から口縁部を強くなでて面を有するもの(112・115)、体部から口縁部を強くなでて横方向に引き出して端部を上方につまみ上げるもの(108～111ほか)がある。11世紀後半。なお115は残存状況が悪く、年代もやや新相を示すため上層の耕作土層の混じりこみの可能性がある。

125～127はSD127から出土した。125は立ち上がり部を欠く杯身で、体部下半から底部は回転

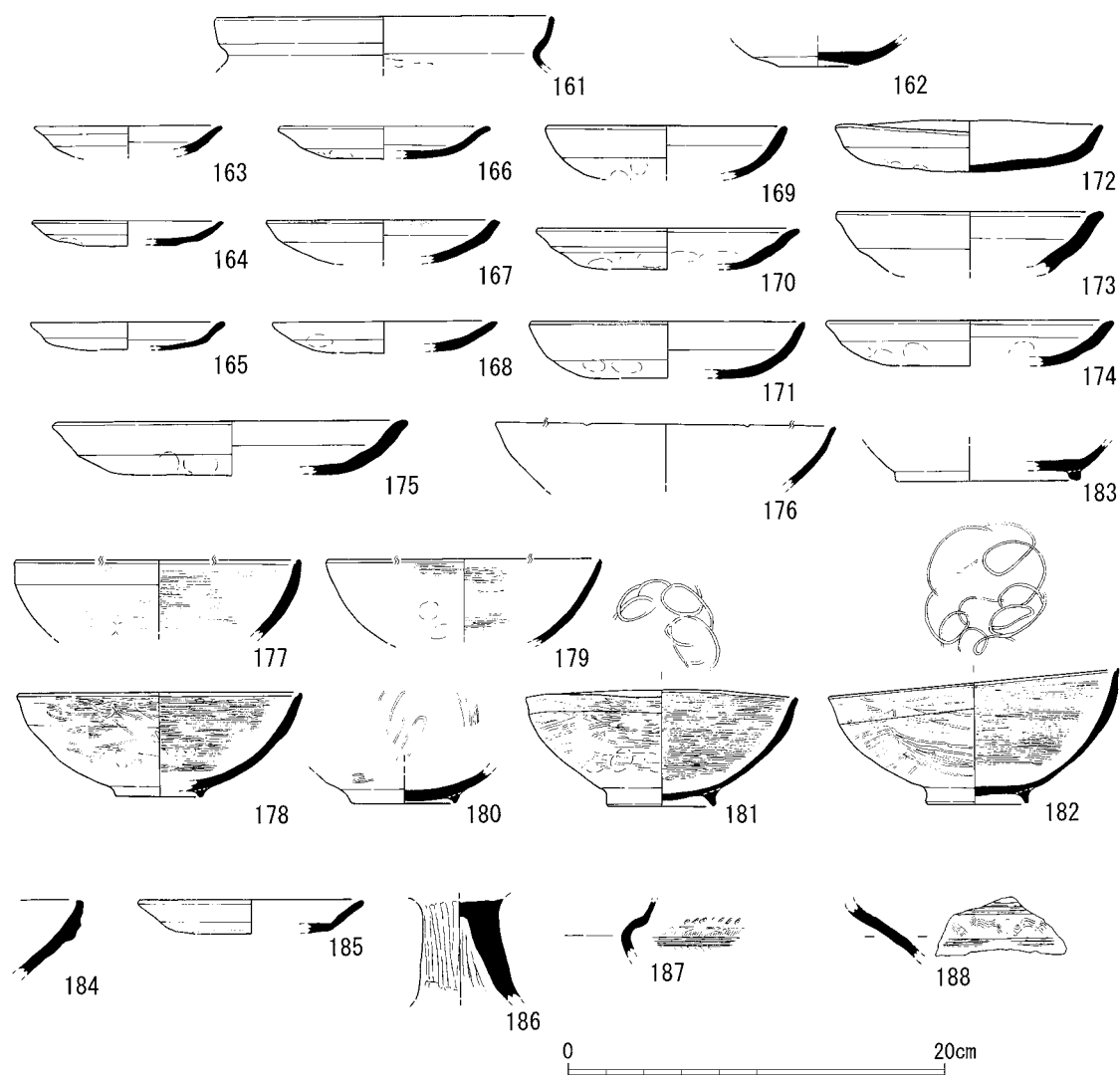


第72図 C1区出土土器2

ヘラケズりする。126は天井部と口縁の間に沈線状の段を有し、口縁端部の内面に段をもつ。

128～148は各柱穴から出土した遺物である。128～140・146・147は土師器の皿、148は瓦器の皿である。体部から口縁部を強くなでて横方向に引き出し気味のもの(134・135・136・138・139・147)、体部から口縁部を強くなでて面を有するもの(130・131・132・140・148)、体部から口縁部を強くなでて横方向に引き出して端部を上方につまみ上げるもの(128)、コースター形のもの(133・137・146)がある。141・142は土師器杯、143・144は楠葉型の瓦器碗で、摩滅が著しい。144は高台が高く、見込みに暗文が残存している。135は柵列S A01のS P04から出土した。柵列S A02を構成するS P07からは129・133・136・137・140、S P08からは139の土師器皿、S P09からは130・134・145が出土している。SB41を構成するS P42から128の土師器皿、S P50からは132の土師器皿が出土している。おおむね11世紀後半から12世紀前半のものであろう。

149～160は包含層出土で、主に18層から出土している。149は「て」字状の皿、150・151は外側上方に口縁が伸びる土師器皿である。152・153は瓦器碗で、152は、口縁端部内面の沈線がかろうじて認められる。楠葉型で12世紀後半か。153の瓦器碗内面見込みには暗文が認められ、三角形の高台が付されている。大和型で12世紀中頃か。154の大和型の瓦器碗は、内外面ともに比較的密なミガキが施されている。12世紀中葉。155の楠葉型の瓦器碗は内面にわずかにミガキが認められ、高台はかなり小さなものである。13世紀前半。157・158はⅣ類の白磁碗の口縁部で、159はⅤ類の白磁碗の高台と考えられる。160は古墳時代の須恵器高杯の脚部である。



第73図 C2～4区出土土器

161・162；C2区、163～183；C3区、184～188；C4区

(2)C2区(第73図161・162)

161は弥生土器甕で、近江系の受け口状の口縁を有するもので、C2 n区のSP06から出土した。162はC2 s区の島畑盛土内から出土した白磁皿V類の底部である。

(3)C3区(第73図163～183)

163～182はSK01から出土した。163～175は土師器皿で、すべて破片で出土した。体部から口縁部を強くなでて横方向に引き出し気味のもの(163～166・170・173・175)、体部から口縁部を強くなでて面を有するもの(167～169・171・172・174)がある。11世紀末から12世紀初頭。176は白磁碗V類、177～182は瓦器碗である。182のみほぼ完形で出土したが、他は小片での出土である。177～180が楠葉型、181・182は大和型である。177・179・180は器壁の摩滅が著しくミガキは消失しているようであるが、178や181・182の内面は密に横方向のミガキを施し、外面はやや疎らなミガキを施し、高台は比較的高く三角形を呈する。12世紀前半から中頃であろう。183は須恵器杯身で、精査時に出土した。

(4)C4区(第73～80図))

①遺構等出土(第73図184～188)

184は17世紀後半の信楽の鉢、185は龍泉窯系Ⅰ類の青磁皿で遺構精査時に出土した。

186は弥生土器高杯、187・188は弥生土器の近江系甕片で、同一個体のものと判断される。器表には列点文や波状文、櫛描文が施されている。これらは南壁断ち割り内から出土しており、後述の旧谷地形のサブトレンチ内から出土したものである。(加藤雄太)

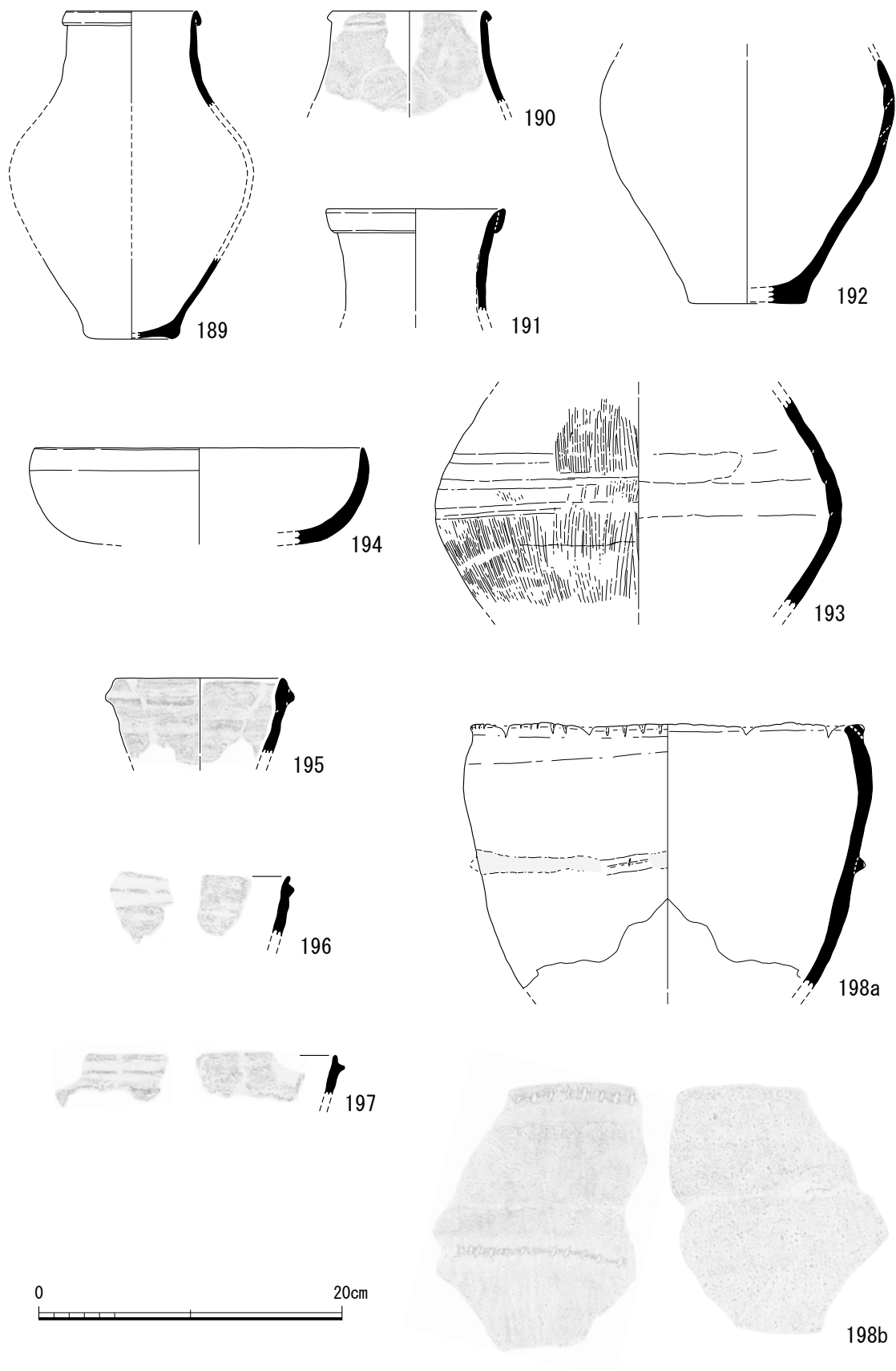
②旧谷地形埋土出土土器(第74～79図189～297)

下層包含層にあたる旧谷地形の埋土からは、整理箱5箱分程度の突帯文土器を中心とした土器・石器群が出土している。南山城地域における突帯文土器の末期を示す良好な資料であるため、土器の整理にあたっては、口縁端部が残存している大きさ2cm角以上資料については全てを図や拓本で提示する方針をとった。よって報告から漏れた土器資料の量は極めて少ない。^(注13)

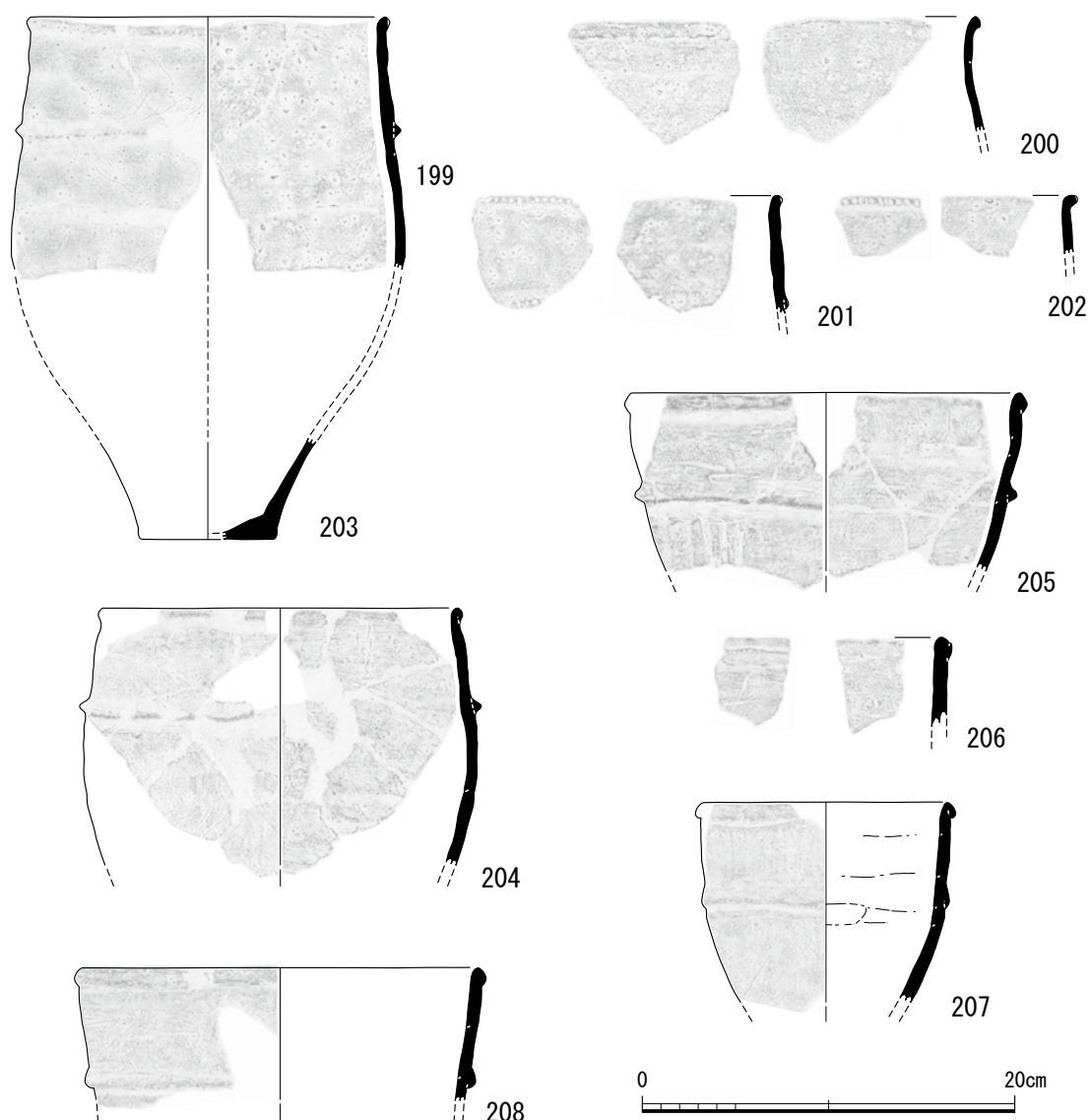
壺(189～193)のうち、189～191はいずれも口縁端部に接して粘土紐を貼り付けた無刻突帯を有している。突帯は189・190が断面三角形であるのに対し、191は貼り付けた粘土の下端が段状になっている。胎土は189が赤色系の発色で、191は含まれる角閃石粒の大きさは微細であるがいわゆる河内の胎土である。壺体部(192・193)のうち192は1.5cm幅の粘土紐による外傾接合が観察され、上端部は疑口縁となっている。193は体面をミガキ調整している。194は鉢形に復原できるものである。胎土は灰白色系の発色で砂粒が少ない。193・194が突帯文に伴うものかは不明である。195は口径10.8cmに復原される小型のもので、刻目の無い突帯を有する。196・197と同一個体であろう。砂粒の少ないやや精良な胎土であり、精製ないし半精製の器種と考えられる。

198～287は突帯文土器の深鉢である。器形が分かるもの(198～219)のうち198は二条突帯の深鉢で頸部に最大径がくるもの。今回の資料内では本例のみである。胴部突帯は最大径よりも低い位置に貼り付けられる。口縁端部は貼り付けた突帯と一体に調整がされており、口唇部に広い面を有する。突帯上にはしっかりとしたV字の刻みを施す。胎土には砂粒が多く含まれており、器壁は1cm前後の厚さがある。本資料群の突帯文土器は、器壁が薄く灰白色系の発色を有するものが多く含まれるなか、唯一特徴的に器壁が厚い。縄文土器らしいとも言える雰囲気胎土である。199～204は2条突帯の深鉢のうち、胴部に最大径があり、胴部突帯が最大径よりも高い位置に貼り付けられるもの。199～203は同一個体と判断した。口縁端部に貼り付けられる粘土紐は細く、破片によって突帯の断面形状が異なる。突帯上の刻みはO字ないしV字であるが、刻みは非常に浅く、突帯や刻みに対する意識が希薄である事が伺える。胎土は灰白色系の発色で、器壁厚は5mm程度と薄い。204は口縁部・胴部ともに突帯上を刻んでいない。

205～219は口縁が上方に向かって広がる器形のものを一括した。205～216は2条突帯の深鉢で、器形の屈曲が弱くいずれも突帯上を刻まない。205・206は同一個体で、胴部外面を工具で縦方向に調整している。208の突帯は、しっかりとした断面カマボコ形を呈している。209～215は同一個体と判断したものであるがやはり断面カマボコ形の突帯を貼り付けている。208と同一個体である可能性も残している。217は口縁部のみの破片で、胴部突帯の有無は不明である。口縁突帯



第74図 C4区旧谷地形埋土出土縄文土器 1

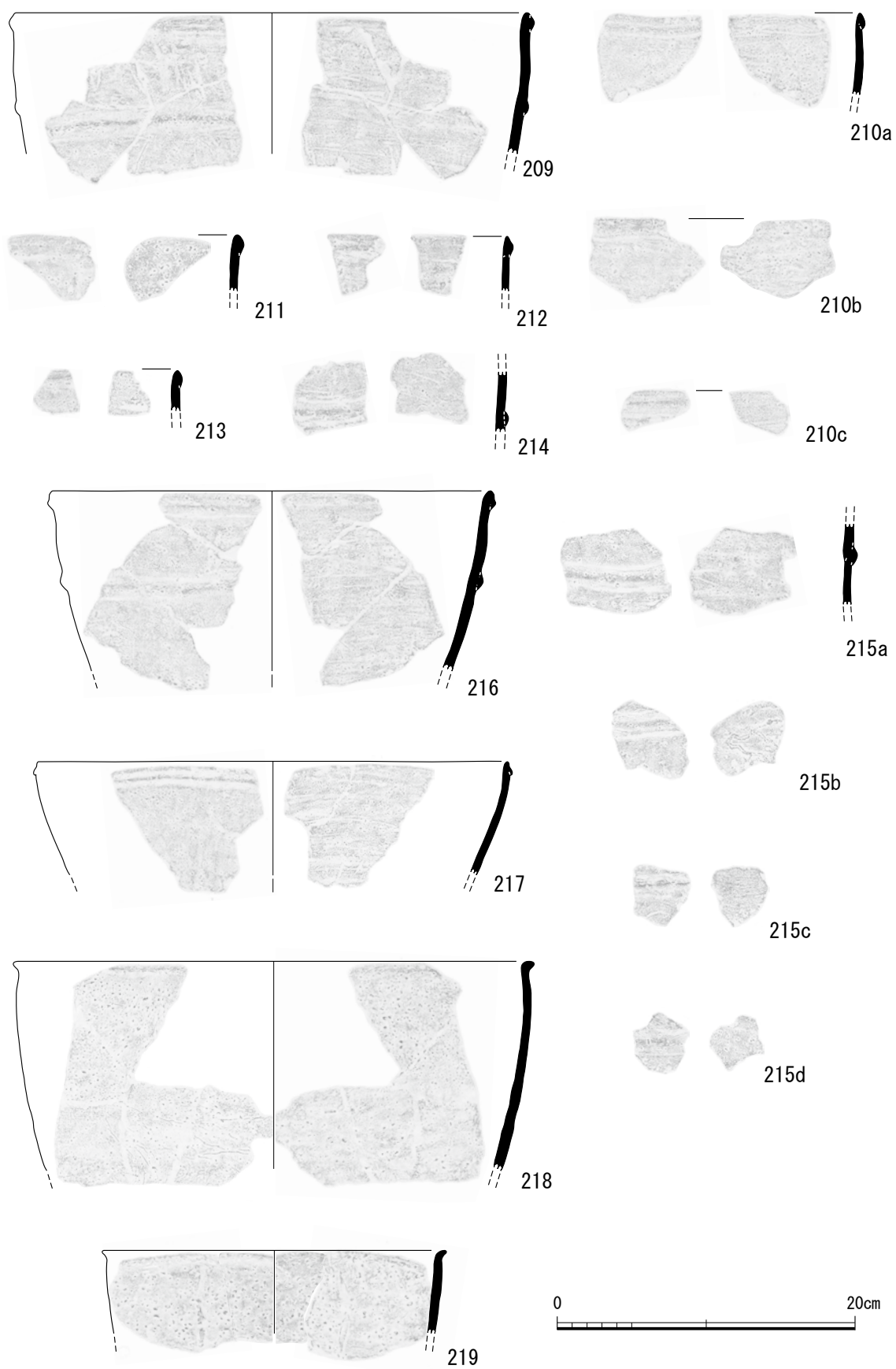


第75図 C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 2

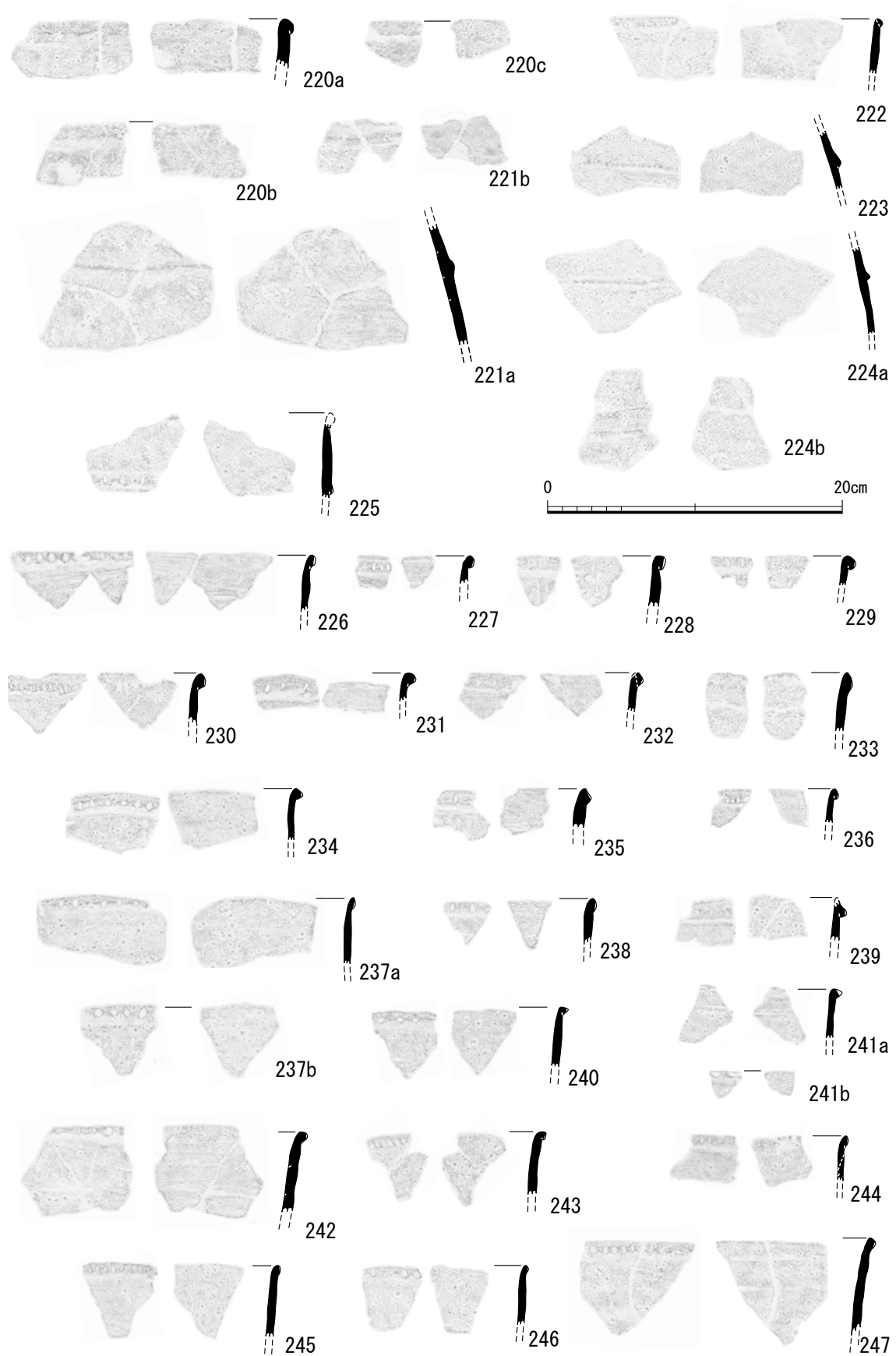
上は無刻である。

218は胴部に突帯を有さない確実な例で、口縁端部に細い粘土紐を貼り付けている。突帯の断面形は短く外反する口縁に類似した形状で、刻みはない。219も外反する口縁のような形状であるが、粘土紐を貼り付けずに口縁を折り返して外側に摘みだしている。やはり刻みはない。218との類似性から、219についても胴部突帯を有しないと考えられる。218・219は口縁端部に突帯状の造作をするが、その形状が短く外反する口縁のような形態をしている。胴部突帯を有しない点も合わせて注目される資料である。

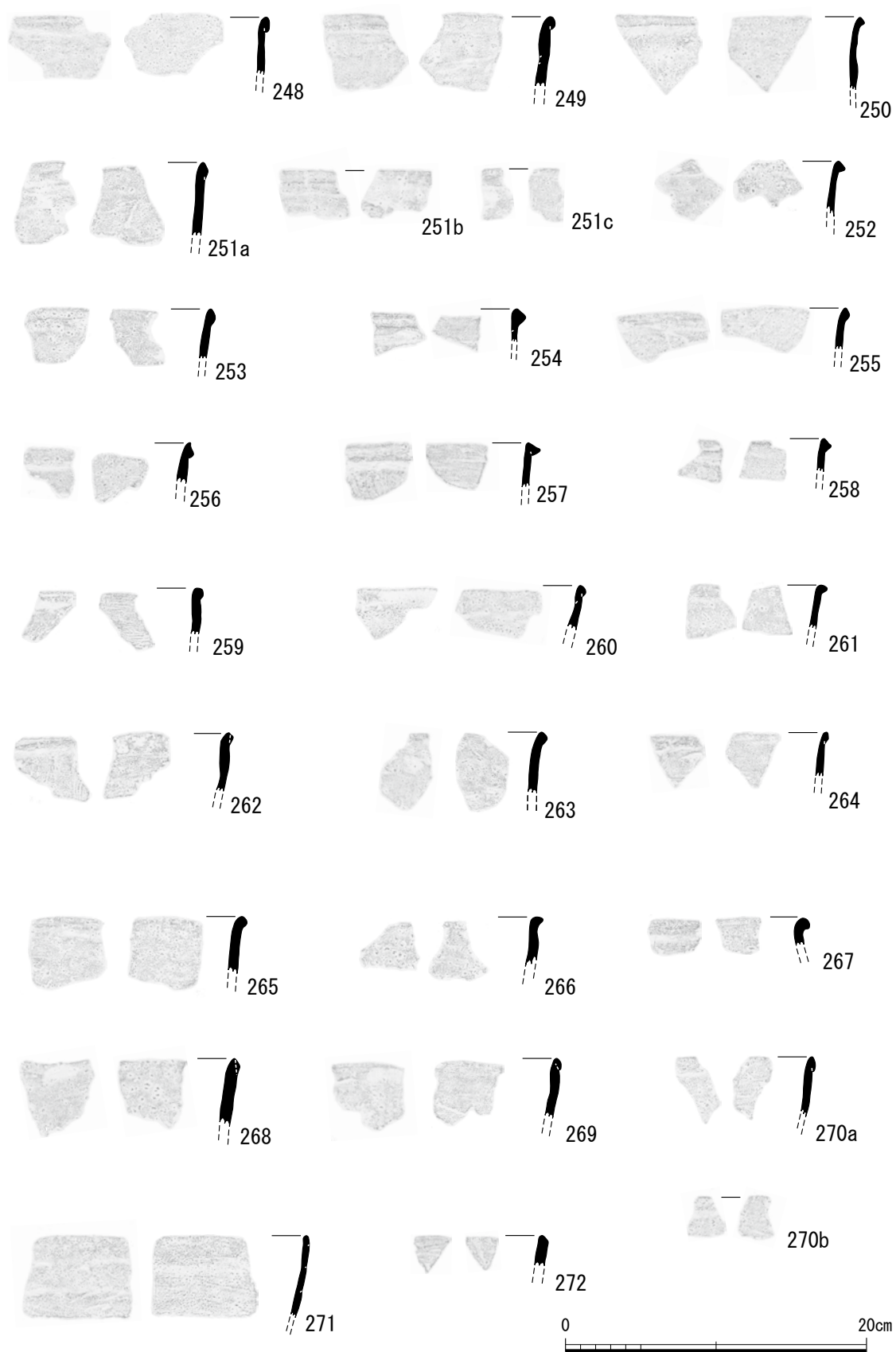
口縁部と胴部の突帯が揃った破片(220～225)のうち、220・221と222～224はそれぞれが同一個体であると判断した。口縁部と胴部の突帯に刻みは無く、胴部突帯は最大径よりも上位に位置するか。一方、225は刻みを有する胴部突帯の個体で、口縁端部を欠失している。口縁部片(226～272)のうち226～247は口縁部突帯に刻みを有するもので、226と227は同一個体と判断している。



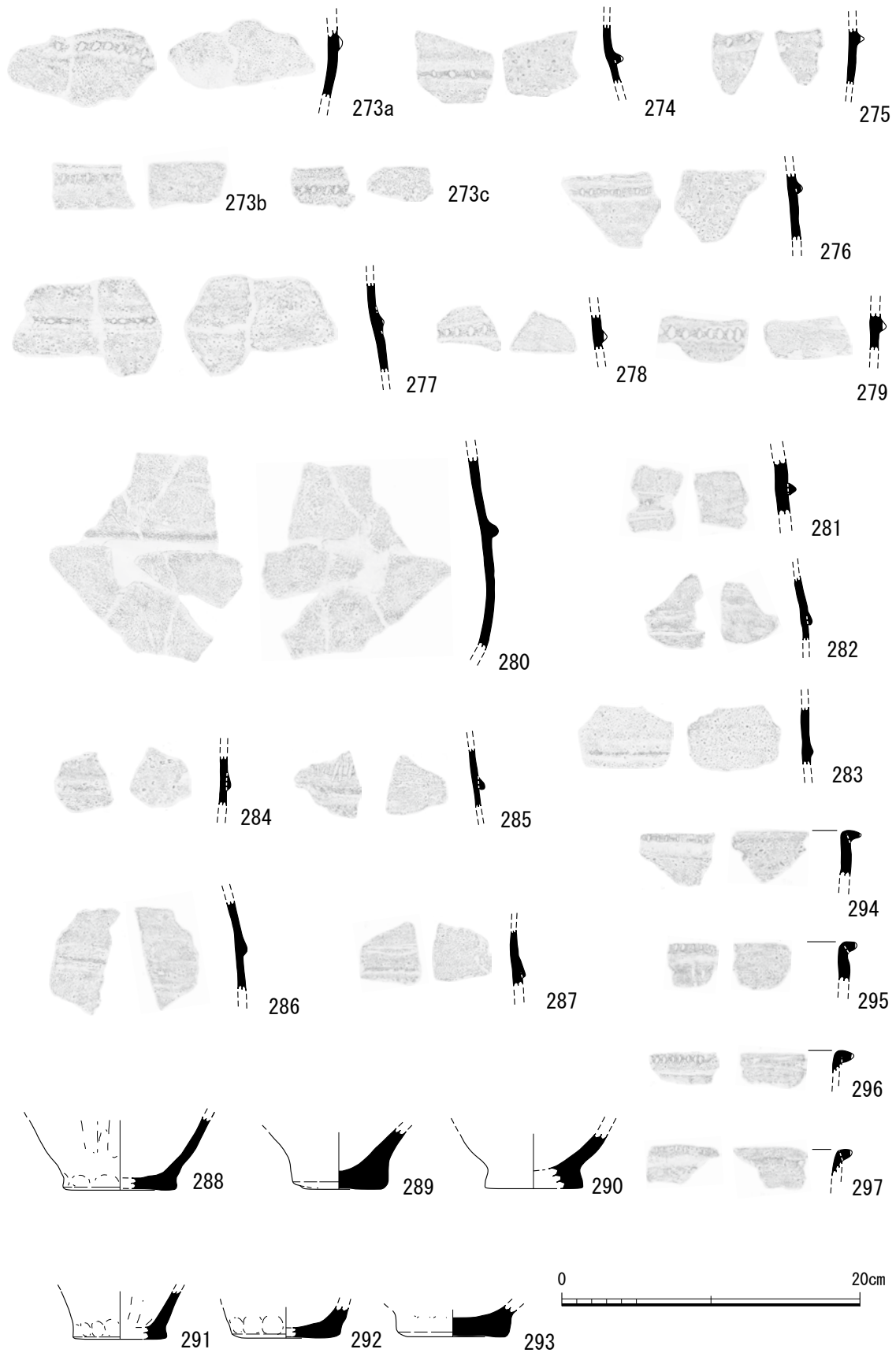
第76図 C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 3



第77図 C 4 区旧谷地形埋土出土縄文土器 4



第78図 C4区旧谷地形埋土出土縄文土器5



第79図 C 4区旧谷地形埋土出土縄文土器6・弥生土器

248～270は突帯に刻みがなく、257は壺の可能性もある。突帯を有しない口縁部片(271・272)は浅鉢の可能性もある。

胴部片(273～287)は、全てが突帯を有している。273～279は胴部突帯上に刻みを有するもので、280～287は突帯上に刻みがないものである。277は237と同一個体か。283はいわゆる河内の胎土であり、その中でも粒の大きな角閃石を含む唯一の例である。287は突帯の上半部に広い面を有しており、明確な垂下りの形状をしている。288～293は底部片である。290のみ猪口形を呈している。290の胎土の特徴は218に似るが、同一個体かは判断できなかった。294～297は弥生時代の甕口縁である。逆L字形を呈する口縁形態で、弥生時代前期後半～末の時期の瀬戸内地域に多いものである。胎土は他資料と大差なく、搬入品かは判断がつかない。

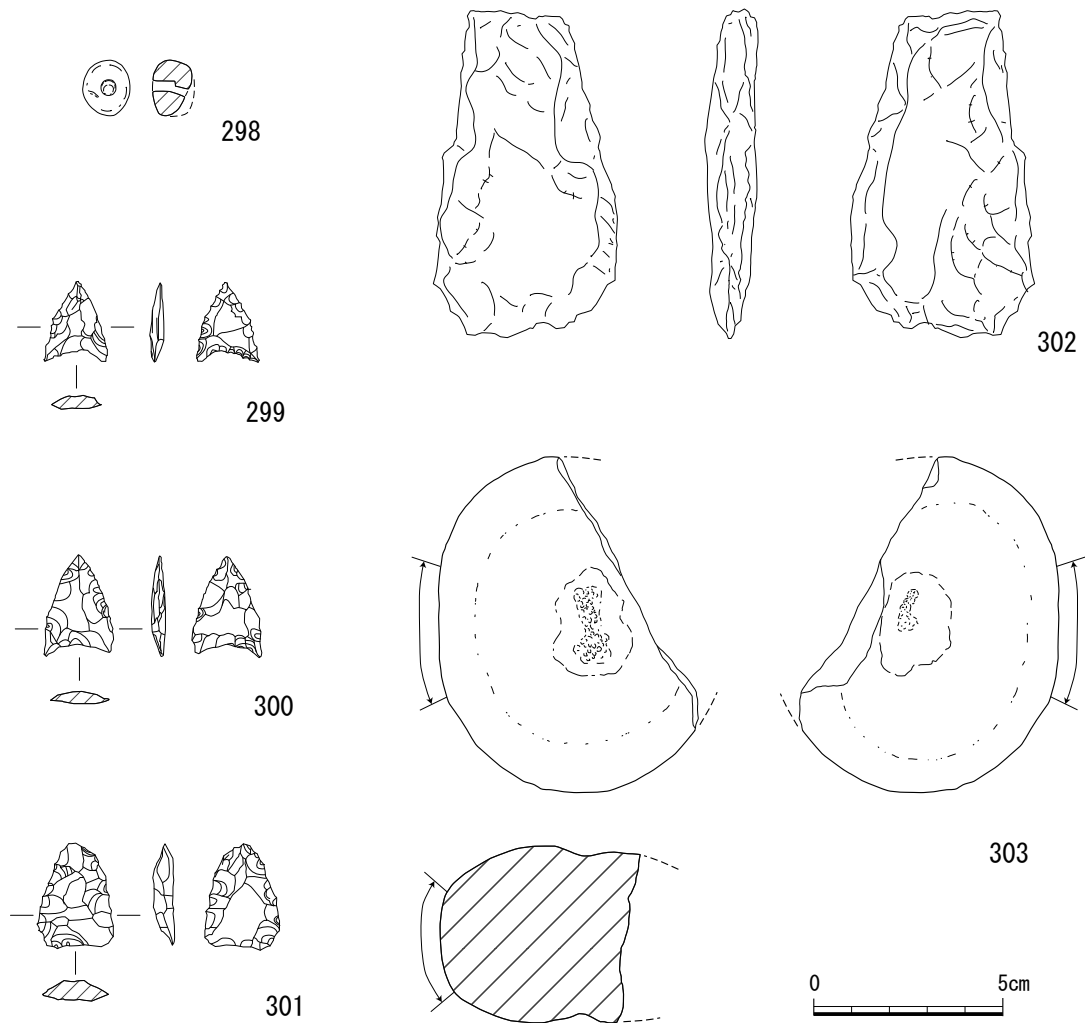
以上が旧谷地形から出土した土器群である。まず資料の一括性についてである。内容は突帯文土器を主体としているものの、弥生前期後半～末の資料が含まれており一括性が高いとは言えない。ただし突帯文土器については、二条突帯で口縁端部に接して突帯を貼り付けるものに限定されている。長原式や突帯文3期に位置付けられるものであり、突帯文土器に限れば一定の時期内に収まるものとみられ、逆L字口縁甕を除いては遠賀川式土器も含まれていない。近傍では、城陽市による小樋尻遺跡の調査や新名神に伴う下水主遺跡第6次L地区で突帯文土器が出土しているが、これらより時期的に新しいものである。その中でも198のように突帯上をしっかりと刻むものは相対的に古く位置付けられ、逆に199～203のように貼り付ける突帯の幅が細く突帯上の刻みが弱い例は突帯文土器の末期に該当するものと考えられる。後者の特徴は河内地域で設定された長原H型でも指摘されており、弥生時代前期に併行する時期に位置付けられている。また191の壺に見られる、粘土の下端の段も気にかかるところである。

注目されるのは218・219の深鉢であり、胴部突帯や器形の屈曲を失い、砲弾形の一条突帯状になっている。218は突帯文土器以来の伝統を受け継いで口縁端部に粘土を貼り付けているが、219では口縁端部に粘土を貼り付けることなく口縁を外側へ折り返して仕上げており、手抜き方向性が伺える。類例は京都市・下鳥羽遺跡土壙163にあり、同資料は弥生時代前期中段階に位置付けられている。218・219が突帯文土器の範疇に含まれるかは微妙であるが、突帯文土器の終末に位置付けられるであろう。同時期の他地域では口縁突帯位置の変化等が見られるが、同様の変化は本例では認められず、当該時期における南山城地域の特徴を示している可能性がある。胎土の面でも、下水主遺跡第6次L地区では茶褐色系で砂粒を多く含む器壁の厚いものが主体である。これに対して、本資料群では在地の弥生・古墳時代の土器と同質である灰白色系で器壁が薄い土器が少なからず含まれており、いわば土器の縄文らしい雰囲気希薄になっている。ちなみに角閃石が含まれる、いわゆる河内の胎土を有する土器は僅少である。

これまで南山城地域では突帯文末期のまとまった資料に恵まれていなかったが、今回の資料は同地域での弥生時代への移行を考える上で、今後欠かせないものとなるであろう。(加藤雅士)

③旧谷地形埋土出土石器・石製品(第80図、図版第168・183～186)

石器の全量は整理箱1箱分である。加工痕跡のあるものについては全量を提示する方針をとり、



第80図 C4区出土石器

図示した製品以外の2次加工片・石核・片については写真と一覧表を示した。石器の器種分類と石材の判別は面が行い、文章調整は加藤雅士が行った。文責は加藤にある。

298の玉は科学分析を実施して、凝灰岩製と判明したものの。裏面は摩耗していると見られ、断面が三角形になる。中央に孔があり、両端から穿孔を行っている。299～301は無茎の石鏃である。石材はいずれも二上山系のサヌカイト製である。302は打製石斧で、石材はホルンフェルスである。ホルンフェルスは近傍の宇治丘陵で容易に入手可能な在地の石材である。303は砂岩製の凹石で、側面に敲打痕がある。

写真と表のみで示した資料は2次加工品、石核、片の順で、それぞれの分類内で重いものから並べている。石核ないしその可能性があるものは12点あり、うち11点で両極打法が用いられている。石材は12点(100%)が二上山系のサヌカイトである。片は29点あり、両極打法とみられるものは2点。石材は25点(86%)が二上山系のサヌカイト、ホルンフェルス3点、チャート1点である。石材では、剥片石器の製品・石核・剥片で二上山系のサヌカイトが占める割合が極めて高い。両極打法の石核が多い点からも、当遺跡内に石材を持ち込み石鏃を中心とする石器作りが行われ

ていたと考えられる。また打製石斧などは在地のホルンフェルスが使われており、石材の使い分けがうかがわれる。(面 将道・加藤雅士)

(5) C10区(第81図304～307、第82図314)

C10区で出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦器・白磁などの破片が少量である。

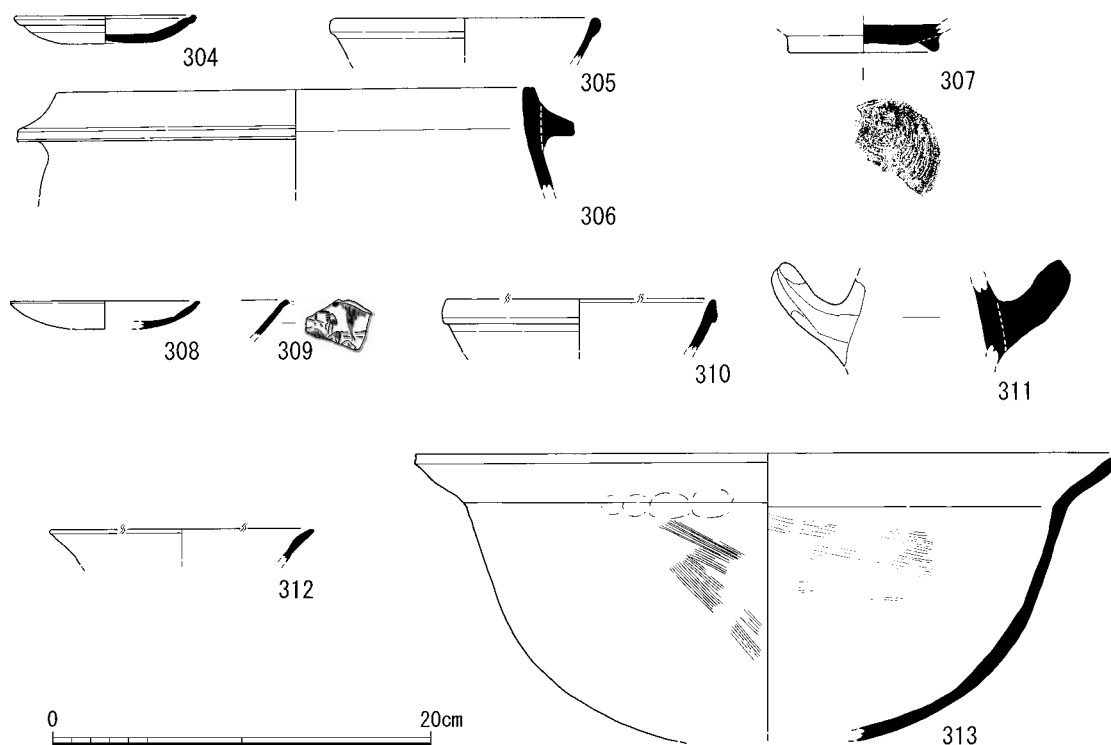
305は19層から出土した白磁片である。玉縁状口縁をなすもので、白磁Ⅳ類に該当する。306は20層から出土した土師器羽釜である。体部に粗いハケを施したのち、突帯を貼り付ける。10世紀末から11世紀にかけての所産である。314は26層から出土した金山産サヌカイトの片である。304は淡青灰色シルトから出土した土師器の皿である。口縁は、「て」の字状をなし、平安時代後期の所産と思われる。307は第1面検出中に21層から出土した灰釉陶器の底部である。糸切り痕を残し、貼付け高台をもつ。内面に灰釉がわずかに認められる。

(6) C12区(第81図308～311)

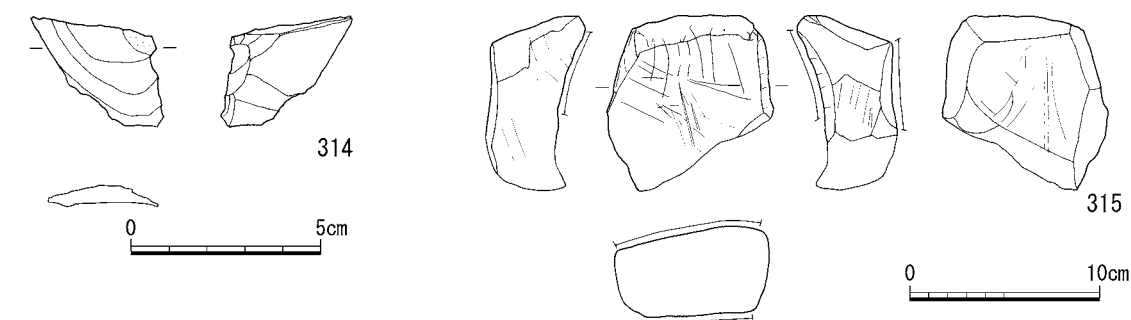
C12区の出土遺物の量は少なく、遺構に伴う遺物は限られる。310は重機掘削時出土の白磁碗Ⅳ類である。309は重機掘削時出土の16世紀後半頃の青花磁器碗の口縁部破片である。口縁端部は鋭く短く外反させる。人物画が描かれている。308は土師器皿の口縁部破片である。薄い体部から鋭く口縁部を立ち上げている。311は灰色土の掘削時に出土した土師器甑の把手部分である。三角錐の基部を扁平にして胴部に貼り付けたものである。

(7) C13区(第81図312・313、第82図315)

C13区の出土遺物の量は少なく、遺構に伴う遺物は限られる。313は溝S D10から出土した。

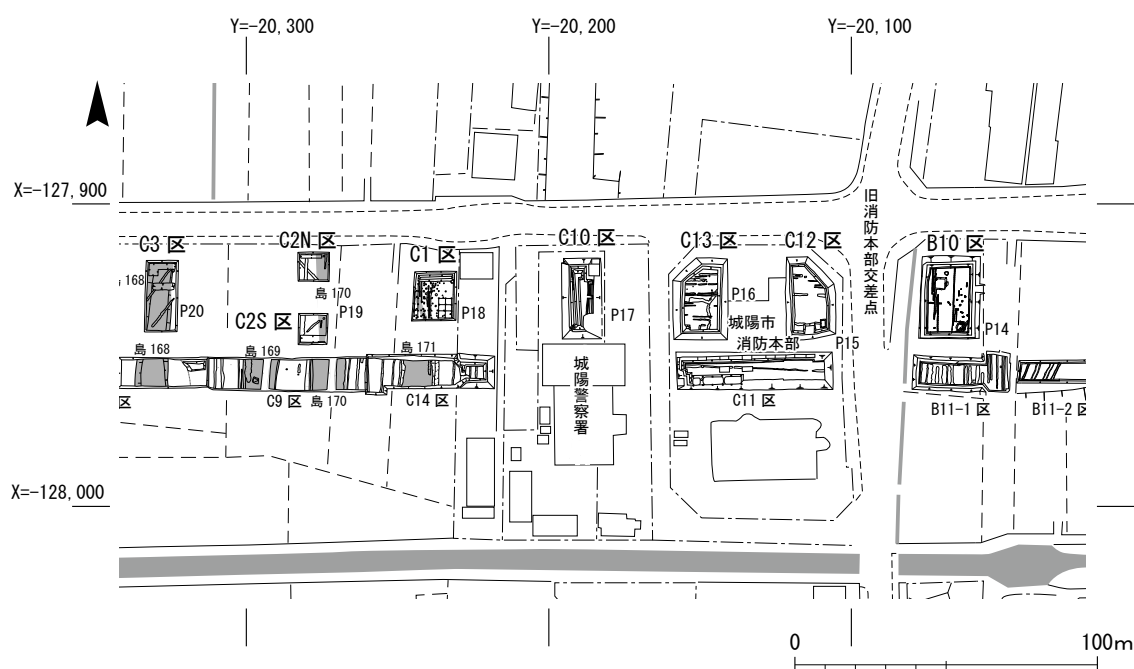


第81図 C10・12・13区出土土器
304～307；C10区、308～311；C12区、312・313；C13区



第82図 C地区出土石器

(314 ; C10区、315 ; C13区)

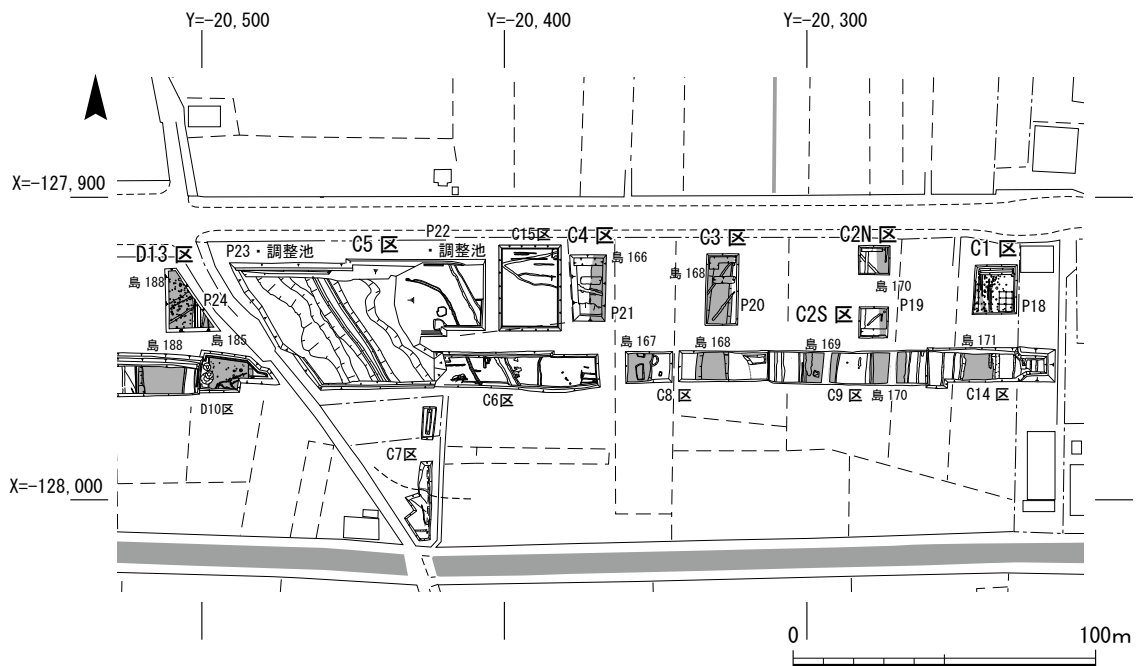


第83図 小樋尻遺跡C地区の調査 東(1/2,500)

土師器鍋の破片である。丸底の体部から口縁部が「く」の字状に立ち上がる。口径37cm程度に復元できる。内外面ともにハケ調整を行ったのちナデを施している。頸部にはユビオサエの痕跡が残る。溝内から破片となって離れた位置から出土している。中世末。312は重機掘削の際に出土した白磁碗の口縁部破片である。白磁V類に相当し、11世紀後半期から12世紀前半期の所産である。315はピット S P06から出土した砥石である。残存する6面すべてに砥ぎ痕が認められる。うち一面には溝状に窪む箇所が認められる。(三好博喜)

10) C地区のまとめ(第83・84図)

C地区では中世の集落・島畑・耕作溝、中世以前の氾濫流路、多くの縄文土器が廃棄された谷状地形などを検出した。このほか、C5区では縄文時代～奈良時代の流路およびそれを改修した運河が見つかっているが、この調査成果については別途、報告書をまとめているところである。一部、未報告の調査があり不正確なところもあるが、C地区の土地利用の変遷をまとめておきたい。



第84図 小樋尻遺跡C地区の調査 西(1/2,500)

C地区では、縄文土器を含む流路跡がC5区で検出されており、この流路の川上側である南東方向に当時の集落が存在した可能性がある。この集落は、C4区で縄文晩期の土器がまとまって出土したと関連するものと考えられるが、周辺の調査区においては関連する遺構は確認できていない。おそらく、広い範囲を占有した大きな集落ではなく、小さな微高地上に営まれた小集落であったと想定される。

こういった縄文集落などが立地した微高地を除くと、各調査区では厚くシルト層の堆積が認められるため、中世以前は広範囲に湿地であったと判断される。また、シルト層の中位にも氾濫流路と考えられる溝・流路が確認されていることから、木津川が時々において自然堤防を決壊し、氾濫がこの地にまで及んでいたことがわかる。このように中世の集落や畑地が造られる以前にあったのは湿潤な環境にあり、人的な土地利用にいたらなかったものと推測される。

中世以降においては集落、畑地が営まれる。C1～C4区において、11世紀後半～12世紀前半の掘立柱建物や柵列および11世紀後半から12世紀後半までの土器を含む土坑が検出されており、周辺に集落が立地していた。その後、13世紀前半には集落が廃されて島畑が造営されたようである。C地区における島畑の分布を見ると、島畑を確認したのはC1区より西側、C4区よりも東側の東西約100mの範囲に限られる。C5区よりも西側、D13区よりも東側では縄文時代～古代の流路・運河を検出しており、併せて近世初頭には地震による地層の変形が認められることから、近世初頭にいたるまでは、湿潤な環境下にあったと判断される。このことが、C5区よりも西側、D13区の東側で島畑が造られなかった要因と考えられる。

一方、C地区の東辺、C10区とC12区の間は、島畑は確認できず、中世のものと推測される耕作溝を確認しただけである。これらの調査区でも下層遺構を確認できず、中世以前は湿地帯もしくは池沼であったものと推測されるが、中世段階には乾燥化して陸地となり、耕作地として利用

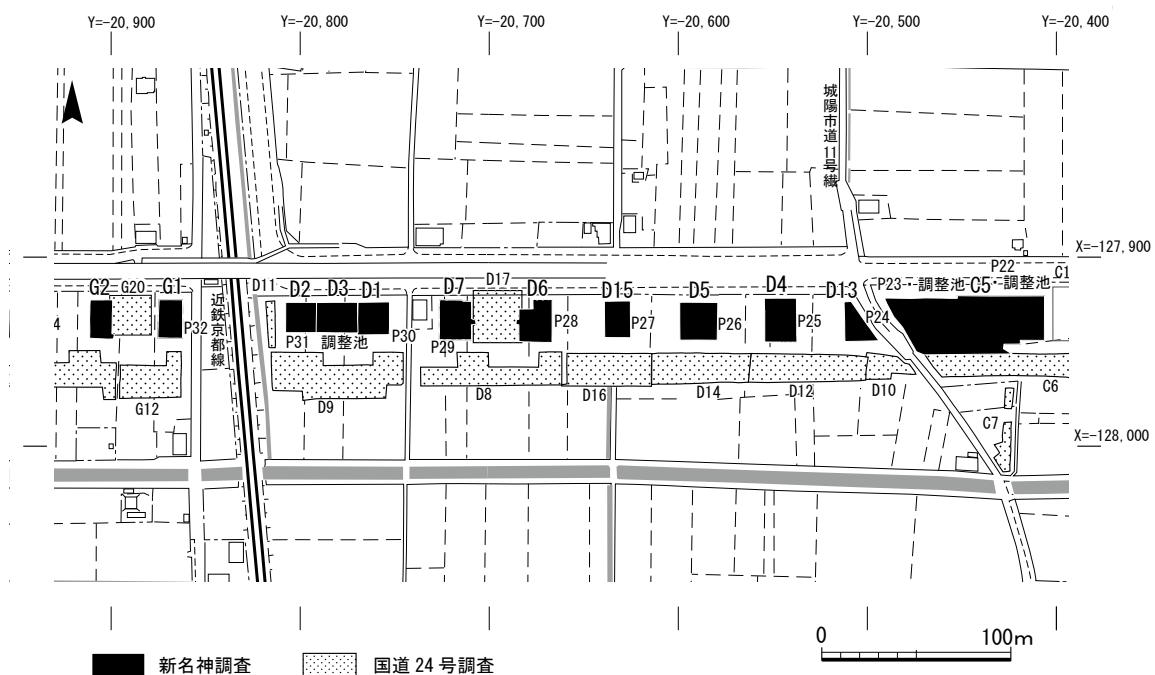
されたようである。以後、この地区では島畑は造られなかったが、これは比較的乾燥した環境下にあり、島畑を造る必要がなかったためであろう。(岩松 保)

8. 小 樋 尻 遺 跡 D 地 区 の 調 査

1) 調査の経過

付表7 小樋尻遺跡D地区の調査(新名神・国道24号関係)

調査区	調査回数	調査年度	関係事業	構造物等	備 考
D 1	第5次	平成29年度(2017)	新名神	P30	
D 2				P31	
D 3	第6次	平成30年度(2018)	新名神	調整池	
D 4				P25	
D 6				P28	
D 8	第7次	平成30年度(2018)	国道24号	道路	
D 9				道路	
D 5	第8次	令和元(平成31)年度(2019)	新名神	P26	
D 7				P29	
D 10	第9次	令和元(平成31)年度(2019)	国道24号	道路	
D 11				道路	
D 12	第10次	令和2年度(2020)	国道24号	道路	
D 14				道路	
D 16				道路	
D 13	第11次	令和2年度(2020)	新名神	P24	
D 15				P27	
D 17	第15次	令和7年度(2025)	国道24号	調整池	



第85図 小樋尻遺跡D地区の調査(1/4,000)

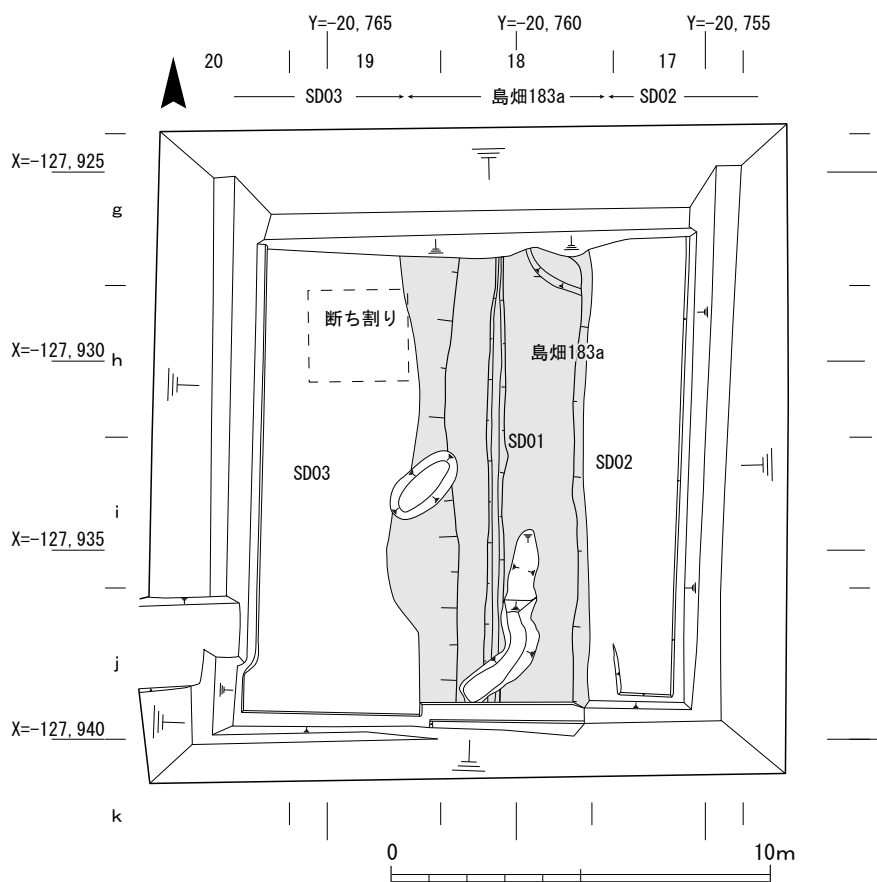
D地区は城陽市道11号線から西へ、近畿日本鉄道京都線の間に設けた調査区で、東西約360mを測る(第85図)。新名神高速道路整備事業関係としては、平成29年度に第5次調査としてD1区(橋脚30)、D2区(橋脚31)、平成30年度には第6次調査としてD3区(調整池)、D4区(橋脚25)、D6区(橋脚28)、令和元(平成31)年度には第8次調査としてD5区(橋脚26)、D7区(橋脚29)、令和2年度には第11次調査としてD13区(橋脚24)、D15区(橋脚27)の調査を行った(付表7)。平成30年度と令和元(平成31)年度の調査番号が連番でないのは、当該年度の調査着手前に調査予定地の番号を付したが、その後、諸般の事情で調査が実施できなかったためである。

新名神関係の発掘調査とは別に、国道24号拡幅事業に伴う発掘調査を国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて平成30年度～令和7年度にかけて、4次にわたる調査を当調査研究センターが実施した。この国道24号関係の発掘調査の成果については別途、『京都府遺跡調査報告集』にまとめられる予定である。

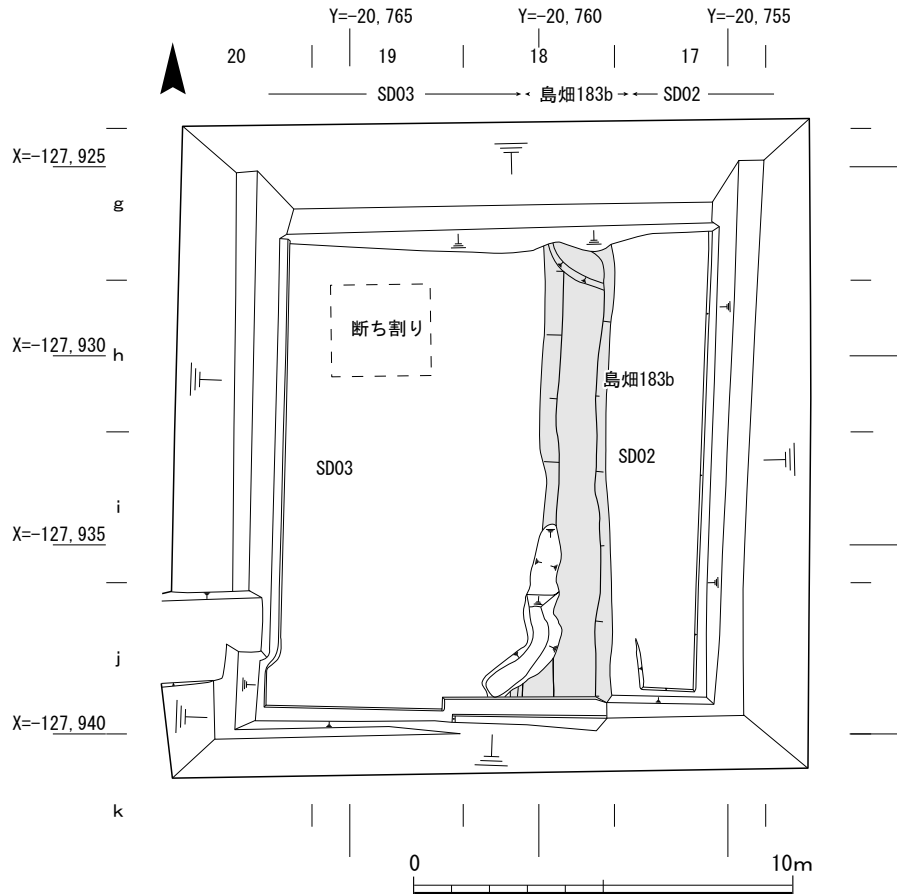
2) D1区の調査

(1) 調査の概要

橋脚30の建設に先立ち、平成29年度に第5次調査として実施した。同年度には小樋尻遺跡B1区の調査を第3次調査として実施したところであるが、D1区の調査は追加調査として依頼を受けたため、同一年度であるが別の次数となっている。



第86図 D1区検出遺構平面図 第1面(1/200)



第87図 D1区検出遺構平面図 第2面(1/200)

調査により南北方向の島畑を1基検出した。調査は2面で実施し、島畑の形状が上・下面で異なることを確認した。

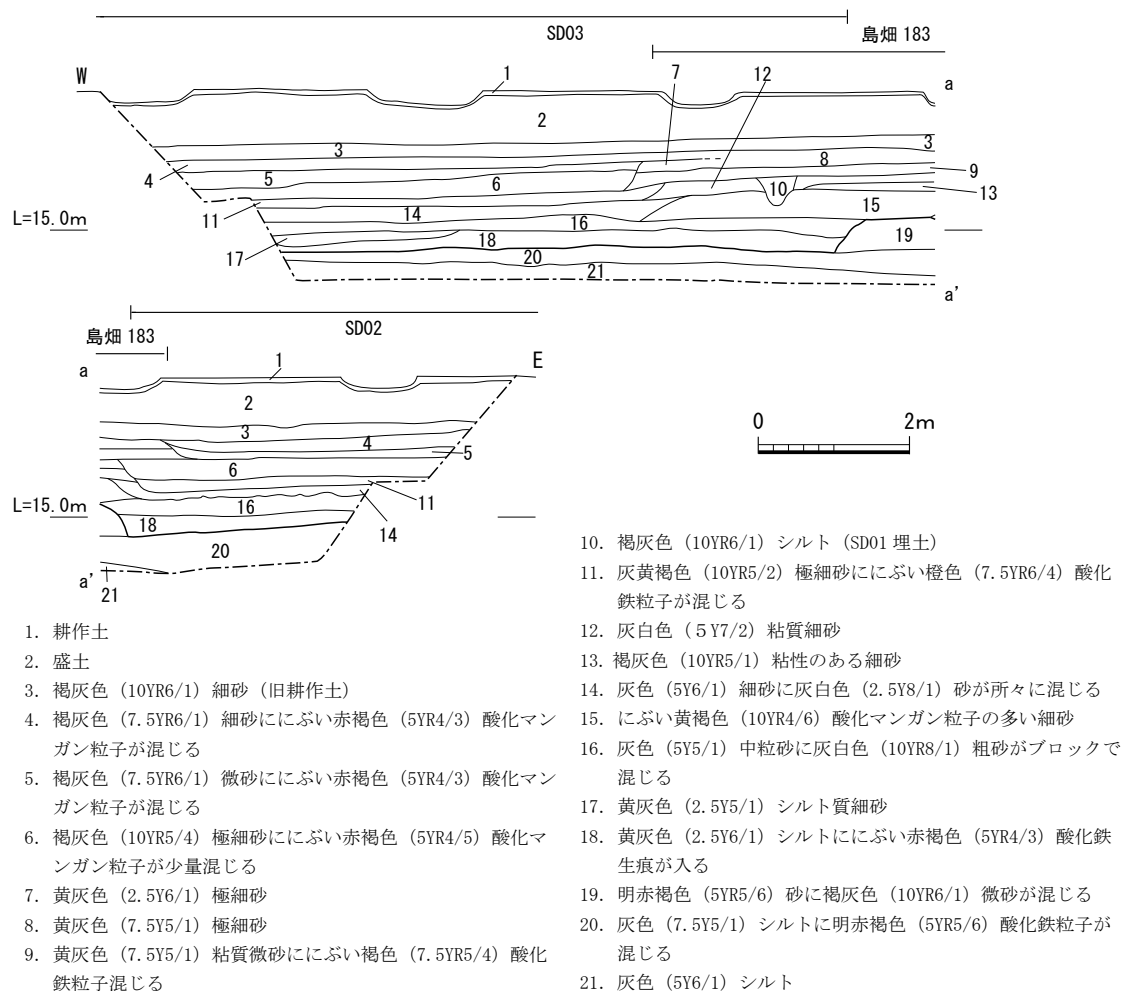
(2)基本層序(第88図)

現地表面の標高は16.8mを測り、表土直下に厚さ0.6mの盛土が存在した。調査は2面で実施し、第1面が15・16層上面で、第2面は島畑の基盤層である19・20層上面である。層序から見ると、19層が初期の島畑で、16～18層が西溝内堆積土となり、以下、対応関係を見ると、15層が14層、13・12層が11層、7・9層が5層となる。4層よりも上位には島畑の盛り上がりは認められず、広く一面の田畑として利用されたようである。標高14.7m以下にはシルトが厚く堆積し、シルト層の上には旧耕作土までの約1.5mの間に粘質細砂・中粒砂・粗砂層が0.1～0.25mの厚さで堆積している。トレンチ中央の標高15.6m付近から、南北方向に長い島畑183を検出した。最終的に深さ1.8m程度断ち割り、シルト・粘土が厚く堆積しているのを確認した(第89図)。

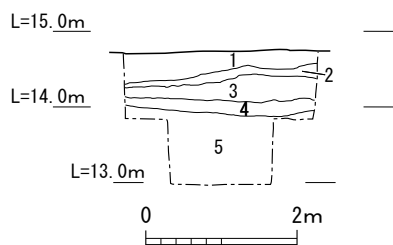
(3)検出遺構(第86・87図)

島畑183a 第1面で検出した南北方向の島畑である。幅4m前後・高さ約0.45mの規模を測り、粘質の砂を盛り上げて形成される。島畑の上面で南北方向の耕作溝SD01を検出した。

溝SD01 島畑183aの上面で検出した。埋土は10層となる。検出長13.6m、幅0.5m、検出した深さ0.4mである。瓦器碗(第122図316)が出土している。



第88図 D1区北壁土層図(1/100)



第89図 D1区断ち割り内北壁土層図(1/100)

島畑溝 S D02・03 島畑183の東側と西側には、島畑に伴う溝 S D02・03が存在する。島畑183aに対応する S D02・03の底面は標高15.3m前後を測る。この段階の S D02・03に堆積する砂層は、土壌化が進み酸化鉄等の付着した植物由来の痕跡が多数存在する。この砂層から出土した土師器皿・瓦器碗・近世陶器から、島畑183aは中世～近世に経営されたとみられる。島畑183bに対応する S D02・03の最下部に堆積するオリーブ灰色砂層からの遺物の出土はない。

島畑183b 島畑183aの下で南北に細長い島畑183b(第19層)を検出した。島畑183bは周囲の地盤を掘り下げて島畑の高まりを削り出すものである。島畑183bは幅約1.2m、高さ約0.45mの規模を測り、上面の標高は15.2mである。

(4)小結

南北方向の島畑を1基検出した。最も古い島畑は周囲を掘りくぼめて、島畑本体を削り出して形成されている。島畑の東西の溝内に洪水由来の砂の堆積が進むごとに、島畑上に土砂を盛るこ

とで嵩上げが行われていた。

3) D2区の調査

(1) 調査の概要

橋脚30の建設に先立ち、平成29年度に第5次調査として実施した。南北方向の島畑1基と島畑溝内で島畑に付随すると判断される井戸・溝を検出した。島畑の周囲のくぼ地内でも耕作を行っていたものと推定される。

(2) 基本層序(第91図)

現地表面の標高は16.2mを測る。基本土層は上から、細砂・極細砂・中粒砂がおよそ0.1～0.25mの厚さで何層にもわたり堆積している。標高14.7m以下はシルトが堆積する。地表から約0.8mの間は土壌化が進んだ細砂が堆積し、酸化鉄等の付着した植物由来による痕跡が多数存在する。トレンチ中央の標高

15.6m付近から、南北方向に長い島畑179を検出した。最終的に1.8m程度の深さで断ち割りを行ったが、遺構・遺物は確認できなかった(第92図)。

(3) 検出遺構(第90・93図)

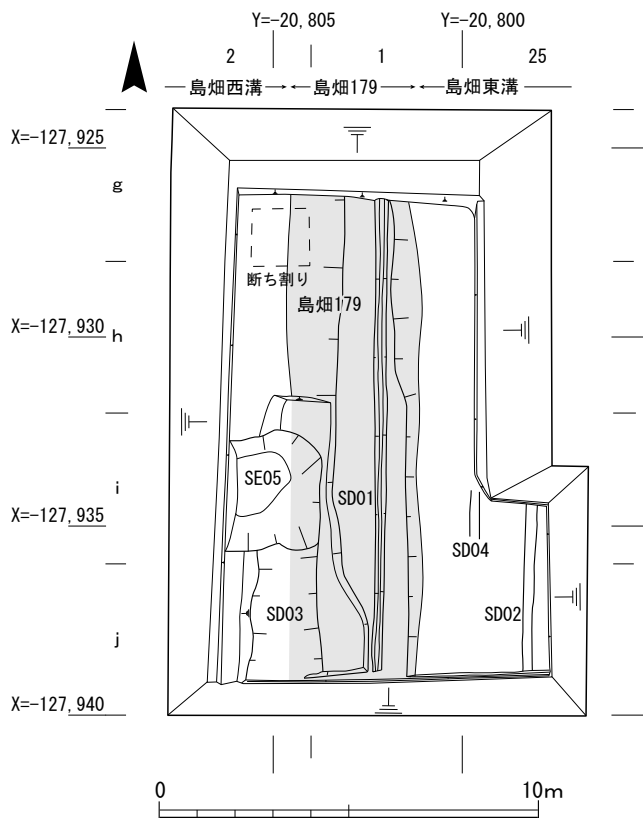
島畑179 幅2.8m前後・高さ約0.6mを測り、上面の標高は15.5mを測る。島畑上では耕作溝 S D01を検出した。島畑は削り出しで形成されるが、時代が新しくなるにつれて古い島畑の上に粘質の砂が盛られている。

溝S D01 島畑179の上面で検出した。埋土は15層となる。検出長12.8m、幅0.3m、検出した深さ0.2mである。

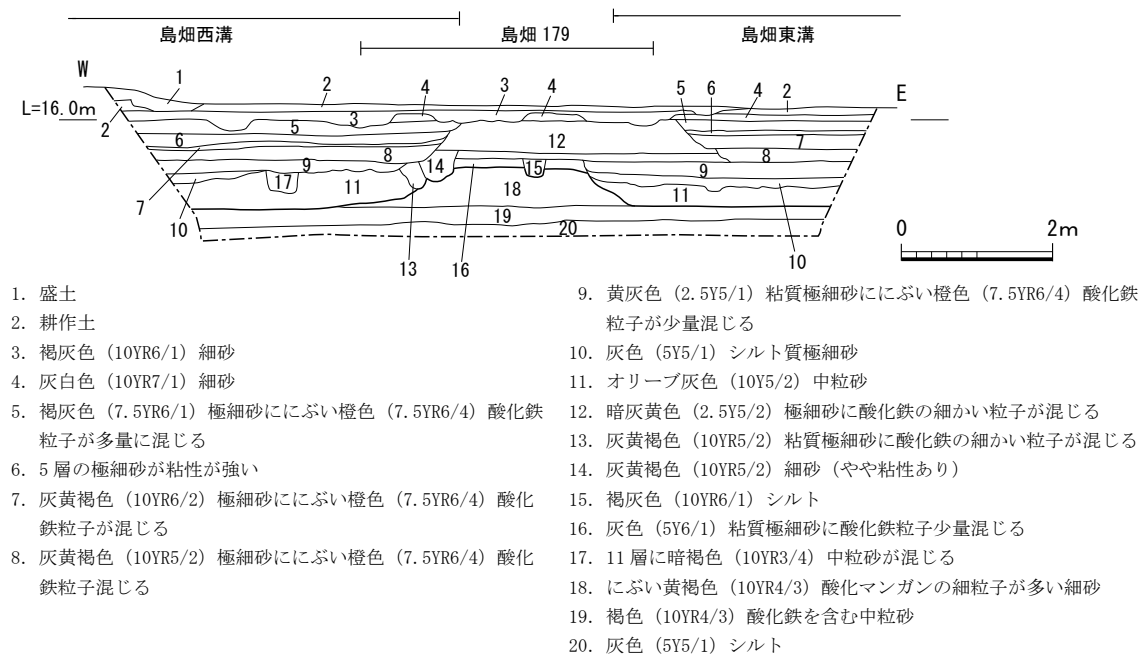
溝S D03 S E05から南方向に延びる溝で、島畑179の西側の溝内の底に堆積した11層のオーブ灰色砂(瓦器碗を含む)を掘り込んだ溝である。幅約2.0m×深さ0.3mの規模を測る。溝底は北から南に緩やかに下がる。出土遺物は見られない。

S D02・04 島畑東溝の底面で検出した。耕作に伴う溝と判断する。S D02は検出長4.5m、幅0.3m、検出した深さ0.04mである。

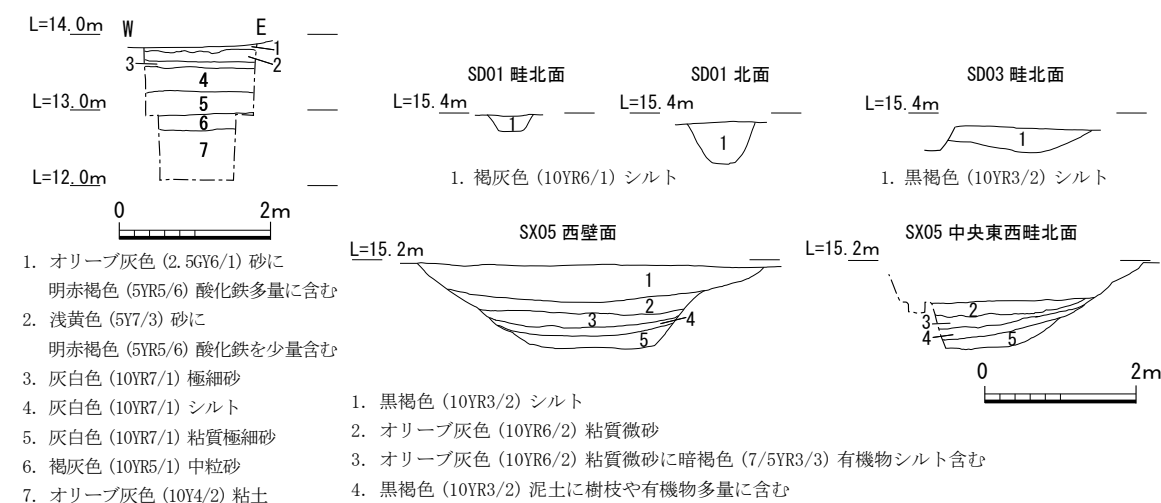
井戸 S E 05 島畑179の西側の大溝の底に堆積した11層のオリブ灰色砂を掘り込む形で検出した。部分的な検出で、掘形は方形を呈し、東西2.5m以上、南北4.6m、深さ1.1mの規模を測る。井戸側等はなく、素掘りの井戸である。埋土はシルト質で、下半部には有機物の包含層が存在する。遺物の出土は見られない。井戸 S E 05と溝 S D 03は、島畑179の上面に重なることなく存在



第90図 D2区検出遺構平面図(1/200)



第91図 D2区北壁土層図(1/100)



第92図 D2区断ち割り内北壁土層図(1/100)

第93図 D2区各遺構断面土層図(1/100)

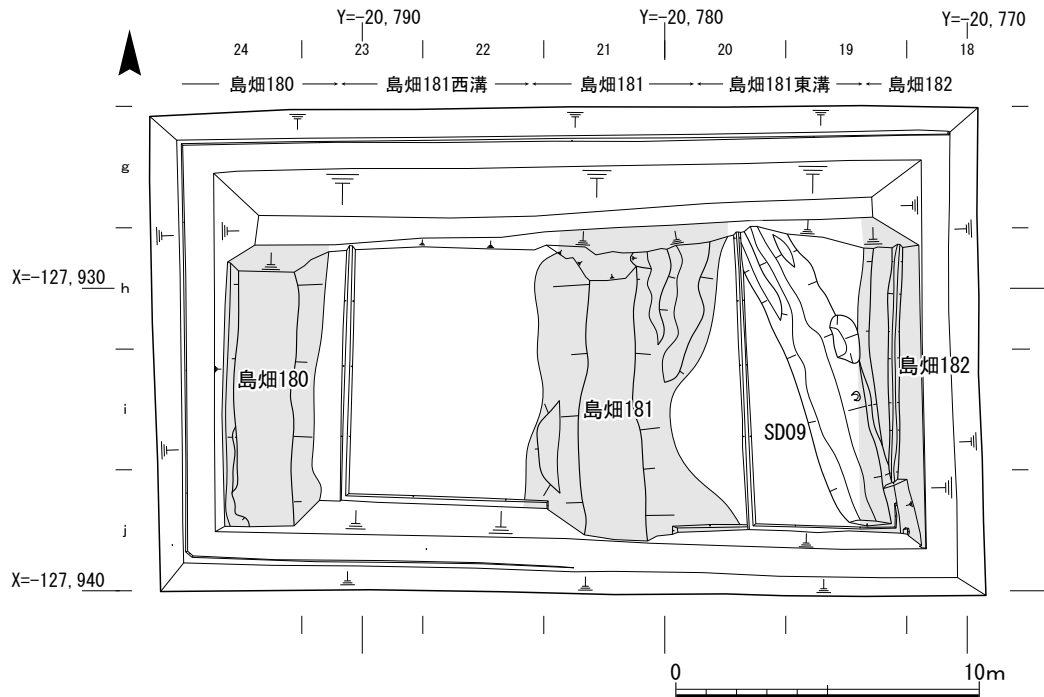
することや、それぞれの掘形の軸線と島畑長軸の方向がほぼ一致する点で、島畑179に規制された状況がうかがわれ、島畑に伴う野井戸等の施設とみられる。瓦器が出土した島畑西溝の最下部に堆積した砂層を掘り込むことから、初期島畑の造営後の施設である。

(4)小結

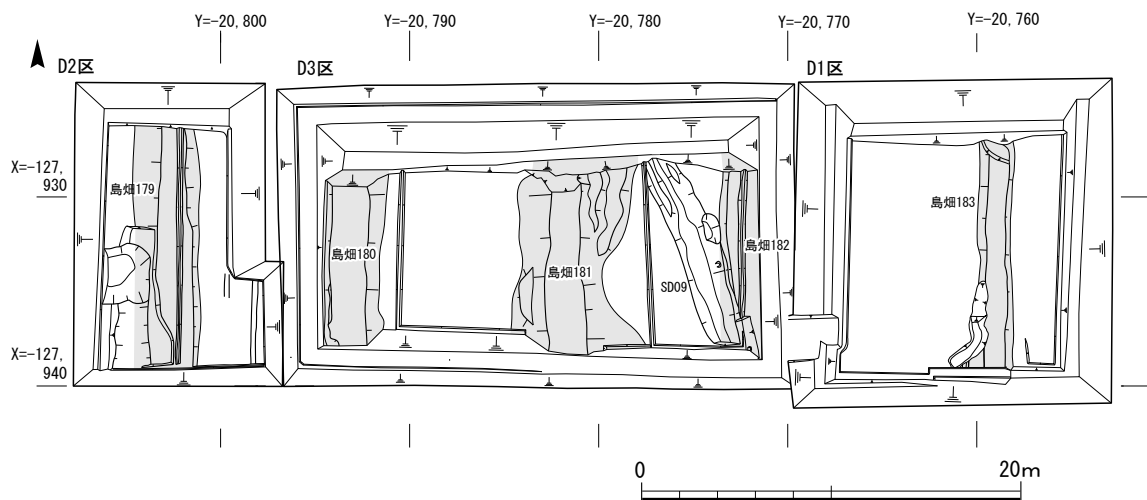
南北方向の島畑を1基検出した。島畑179が形成された後、本来は島畑周囲の大溝にはシルト層が堆積していることから湿地の環境であったと想定されるが、部分的に砂の堆積が認められることから、一時期、陸地化したようである。溝SD03と井戸SE05はこの陸地化の段階で造られたとみられ、島畑179に対する用水施設である可能性が高い。

4) D3区の調査

(1)調査の概要



第94図 D3区検出遺構平面図(1/250)

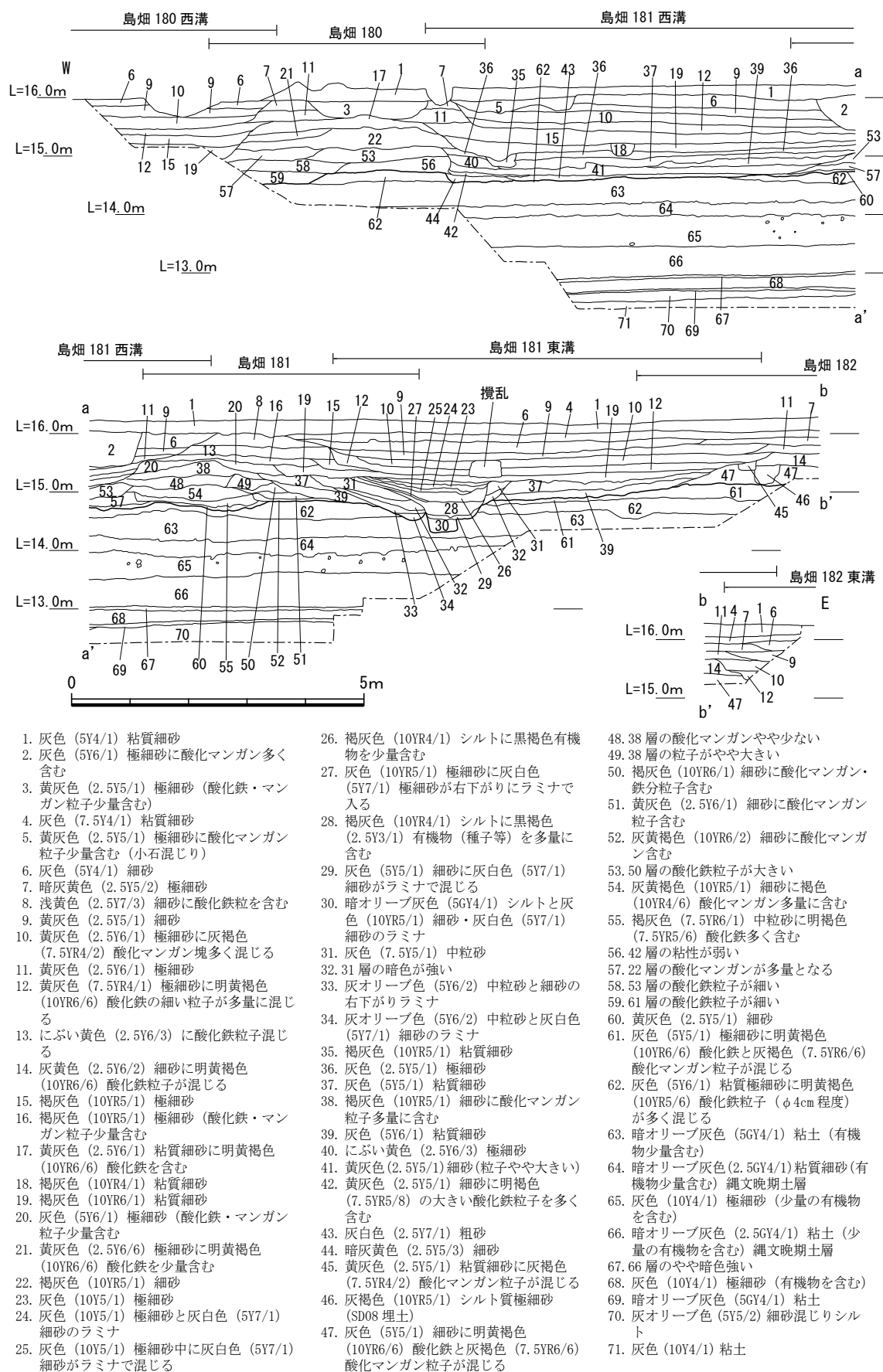


第95図 D1～3区調査区配置図(1/400)

平成30年度に調査を実施した。29年度に調査を実施したD1区とD2区の上に位置し、調整池が設けられる地点である(第95図)。調査では、トレンチの中央部と東西両端部から南北方向の島畑3基を検出した。島畑以外の遺構として、溝SD09を検出した。主軸は北から西に約20°振る。SD09埋土の下層には種子を含む厚い有機物層が存在したが、遺物は出土していない。重機により標高12.5mまで断ち割りを実施した。標高14m付近で検出の砂層(第64層)から、縄文晩期の土器が数点出土したが、遺構に伴うものではない。

(2)基本層序(第96図)

標高約16.2mを測る旧耕作土面には、コンクリート擁壁で囲われた厚さ約0.9mの盛土が存在する。盛土下の標高14.5～16.0m間には極細砂・細砂・粘質細砂などが堆積し、調査地内では耕作



第96図 D3区北壁土層図(1/100)

土直下から南北主軸の島畑3基(島畑180～182)を検出した。島畑は、ほぼ同一場所で盛土を繰り返しながら長期にわたって営まれている。繰り返される島畑の上部は土壌化が進んだ黄色系細砂、下部は還元化した灰色系細砂・極細砂となる。また、島畑部分は酸化鉄・酸化マンガン粒子の吸着が認められる。島畑に対応する西溝・東溝には黄灰色・褐灰色・灰色の細砂・粘質細砂が堆積する。標高14.5m以下は12.3mまで暗オリーブ色～灰色の粘土が堆積する。中でも標高14.0m付近の暗オリーブ灰色粘土(第64層)では縄文時代晩期の土器破片が出土している。

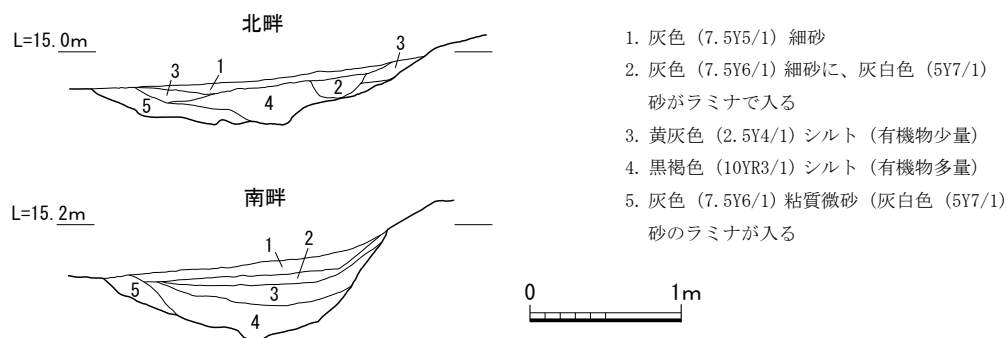
(3) 検出遺構(第94・97図)

島畑180 トレンチ北壁面の観察で、ほぼ同一場所で最低2回の砂の盛り上げが行われている。最も古い島畑は幅約2.5m、高さ0.4m(標高14.5～14.9m)の規模を測り、酸化鉄を含む粘質極細砂(62・56層)で形成される。1回目は古い島畑の上に砂を盛り上げているが、それに伴い西方向に幅を約4.0mに広げている。高さは約0.5mを測る。島畑は粘質細砂や粘質細砂(57・53・22・21・17層)で形成される。島畑裾の標高は14.9m、上面は15.7mを測る。最上部の島畑は2回目の盛り上げである。裾幅約4.7m、高さは約0.4mを測る。島畑裾の標高は15.6m、上面は16.0mを測る。暗黄灰色・黄灰色(11・7層)のでやや土壌化が進んだ極細砂で形成されている。

島畑181 中央部で検出した。島畑180と同じく3回の盛り上げが行われるが、形成過程の盛り上げた砂の範囲と厚みは細かく分かれる。島畑規模は最大幅(最下部)で約7.5mの褐灰色細砂(62層)である。標高約14.6mを測る。上面は褐灰色細砂(38層)で標高15.6mを測る。最上部の島畑は標高15.2mの灰色極細砂(20層)で、裾幅は2.6mに減少するがその上層は3m程に回復する。島畑の高さは0.5～0.7m、極細砂・細砂(16・13・8層)で形成される。島畑上面は標高16.0mを測る。

島畑182 東端部から検出した島畑で、西側斜面部の検出にとどまった。検出幅は約2.4mである。裾からの高さは約0.7mを測る。島畑最下部は標高約14.9mにあり、灰色細砂(47層)である。島畑は複数回の盛り上げが行われ、最上部は15.8mの黄灰色極細砂(11層)である。

溝S D09 島畑182の南西部から島畑181の北東部にかけて西に斜行する素掘り溝である。島畑181東溝内に堆積した灰色粘質細砂(37層)を切っている。方位は真北から西に約22°振る。溝上端の標高は15.2mを測り、溝幅2.0～2.2m、深さ0.8mを測る。斜面の傾斜はおおむね緩いが、最下部は幅0.5m、深さ0.2mで壁面がほぼ垂直に立つ小規模な抉れである。最下部の堆積土は暗オ



第97図 D3区溝S D09断面土層図(1/50)

リープ灰色シルトと灰色細砂のラミナで、水の流れが認められる(30層)。標高14.9m付近の褐灰色シルト(28層)は種子を含む有機物包含層である。S D09に伴う土器の出土はなく、時期は不明である。

島畑181西溝 最大規模は溝幅9.9m、深さ0.8mを測る。最も古い島畑に伴う溝の堆積土は最深部の暗灰黄色細砂(44層)から灰色極細砂(36層)間で、深さ0.6mを測る。1回目の島畑盛り上げに対応する溝内堆積土は、褐灰色極細砂(15層)と同色の粘質細砂(19層)で深さは0.3~0.4mを測る。2回目の島畑盛り上げに伴う溝堆積土は、島畑が埋没する灰色細砂(6層)となるが、島畑の性格上、本来の溝の上面は標高15.7m付近の黄灰色細砂(9層)と判断されよう。

島畑181東溝 最大規模は溝幅7.5m、深さ0.8mを測る。最も古い島畑に伴う溝内の堆積土は最深部の灰色粘質細砂(39層)から灰色粘質細砂(37層)の間と判断され、深さ0.6mを測る。1回目の島畑盛り上げに対応する溝内堆積土は、西溝と同じく15層と19層である。深さは0.3~0.4mを測る。2回目の島畑盛り上げに対応する溝内の堆積土は、黄灰色細砂(9層)・黄灰色極細砂(10層)・黄灰色極細砂(12層)で、深さは0.3mを測る。

島畑180西溝 調査区の西辺で溝の肩部を確認した。検出した溝幅は最大約2.8mを測る。島畑181の1・2回目盛り上げに伴う西溝と対応する。遺物の出土は極くわずかであった。

島畑182東溝 検出幅約0.8~1.1mである。10・12層、9層、6層が島畑182の最初期、1回目、2回目の盛り上げに伴う溝内の堆積土と判断する。

(4)小結

南北方向の島畑3基と島畑を切る斜行する溝を検出した。島畑の基底部は島畑周囲の地表を削り、その砂を主体とした土砂を島畑の上に盛り上げて整形したとみられる。また、島畑の周囲は低地となり、場合によっては耕作が行われている。調査対象地は木津川の氾濫原にあたり、調査地は石をほとんど含まない極細砂~細砂が広範囲に厚く堆積している。洪水に伴い砂が堆積する毎に耕作地と水路の修復が行われたと推測されるが、大規模に砂が堆積した際には通常の復旧を行わず、低地に堆積した砂を削り、島畑上に盛り上げて島畑を盛り上げたものと判断される。調査では、ローリングを受けた土師器・瓦器碗等の細片が僅かに出土したが、図化には至らなかった。1~3区で出土した遺物は、古くは縄文時代晩期に遡り、周辺調査区においても散見できるものである。そのほか多くの土器は12世紀中葉から13世紀の土器と判断される。(竹原一彦)

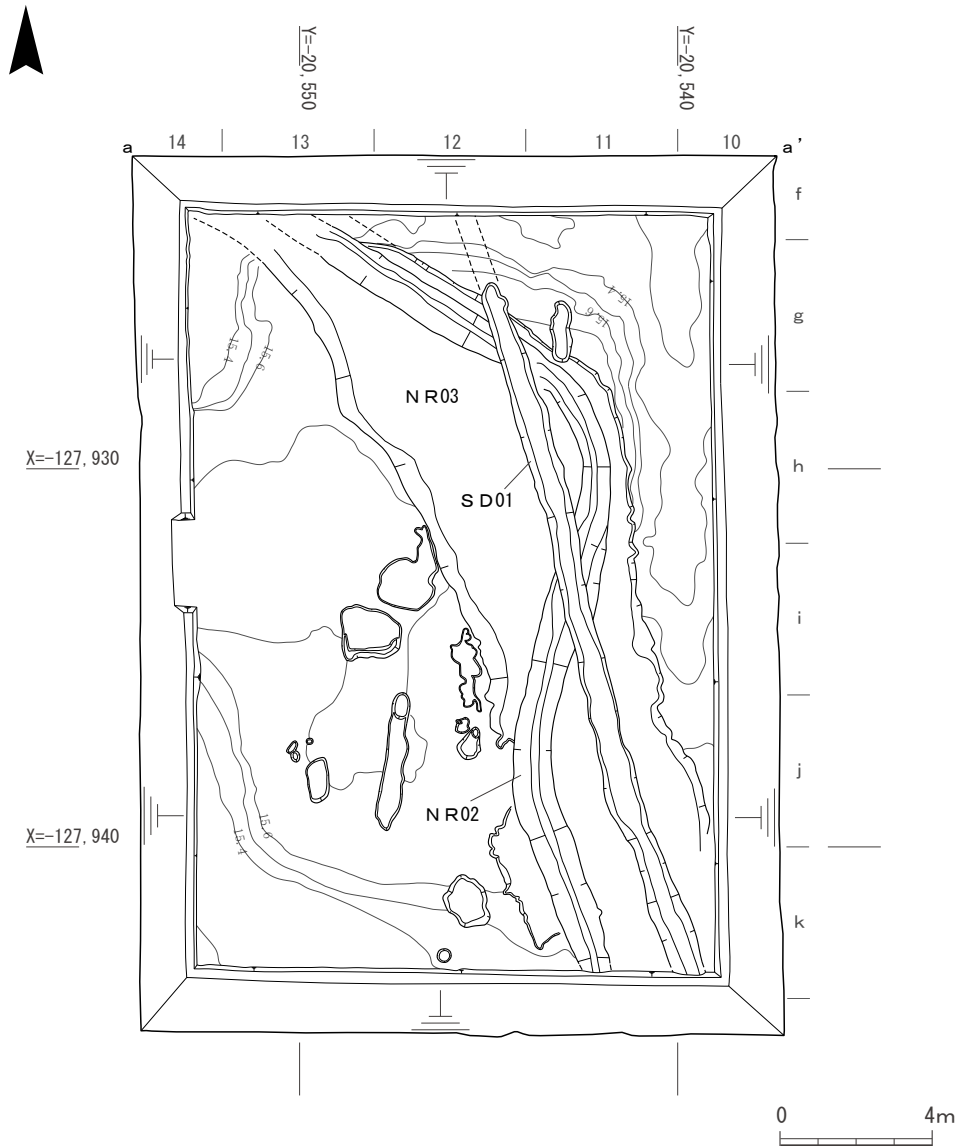
5) D4区の調査

(1)調査の概要

南北23m、東西17mの長方形を呈する調査区である。水田として利用されていた場所で、調査地の標高は16.8m付近である。調査の結果、斜方向の溝(S D01)と自然流路(N R02・03)を平面的に検出した。また壁面において南北方向の島畑を2基確認している。

(2)基本層序(第99図)

水田として利用されていた場所であるが、耕作土(1・2層)下に、幅1.06m、高さ0.2mの大きな南北方向の畦(3層)があり、現代において筆内を分割する土地利用の状況が伺われる。表土下

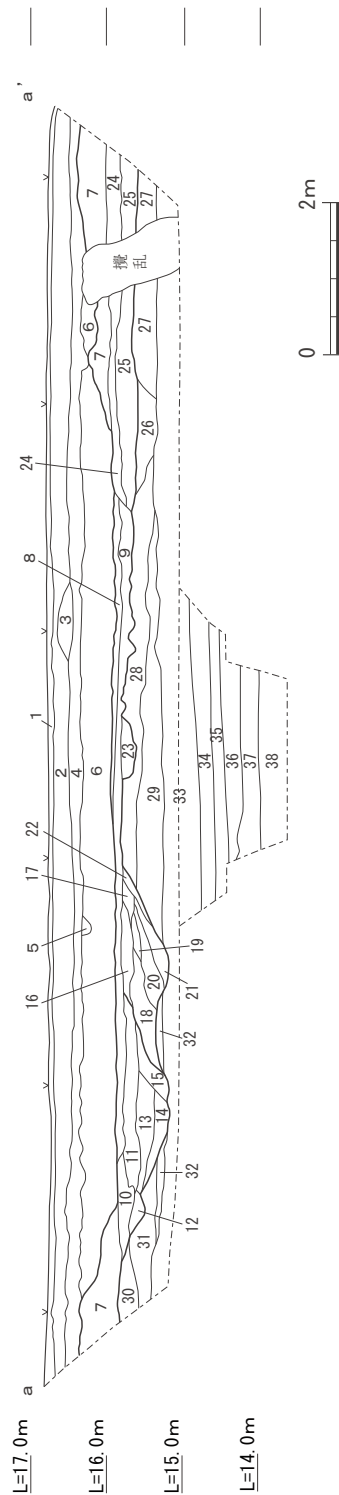


第98図 D4区検出遺構平面図(1/200)

0.4mである標高16.4m付近では、7層上面を頂部とする島畑がある。島畑は調査区の東辺と西辺に存在する南北方向のもので、両者に挟まれた低位部との比高は0.5mある。遺物の出土は無いが、基盤層に造られるものではない点から近世以降の島畑と考えられる。0.1～0.3mの間層を挟んだ島畑の下位には、砂層(28・29層)が存在する。砂層上面の標高は15.8m付近である。木津川の氾濫により形成された層であり、この上面で溝(SD01)と自然流路(NR02・03)を検出した。基盤層(33層)は砂層の下位に存在する。洪水性の堆積で形成されたもので、基盤層上面の最高所の標高は15.4mである。近傍の中世島畑は、基盤層を削り出して造られているが、当調査区ではこのタイプの中世島畑は確認されなかった。湖沼性の堆積層は36層以下であり、36層上面の標高は14.52mである。

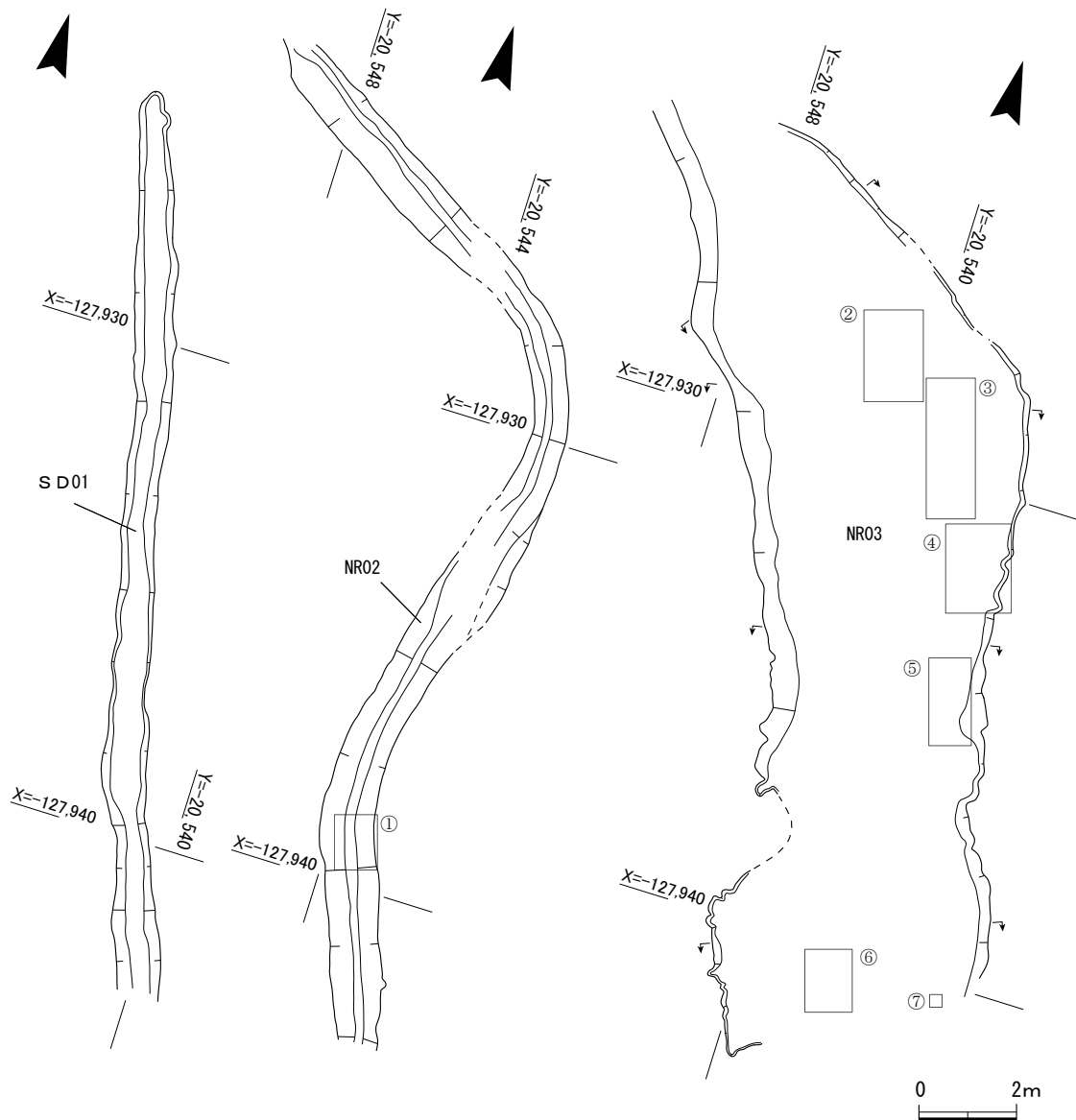
(3) 検出遺構(第98・100・101図)

斜行溝SD01 NR02・03を掘り込む斜方向の溝である。平面形は比較的直線形であり、幅



1. 有機化する (耕作土)
2. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂混じり極細粒砂 有機化する (耕作土)
3. 褐灰色 (7.5YR5/1) 細粒砂 (畦畔)
4. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルト
5. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂 径2cm大の竹状の植物が入られる (暗渠)
6. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト 橙色 (7.5YR7/6) がブロック状に40% マンガンが沈着する
7. にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルト マンガンが沈着する (島畑)
8. 灰色 (N6/0) シルト 粘質
9. 灰色 (N5/0) シルト粘質 色調が暗く有機化するか
10. 灰色 (10Y6/1) シルト 鉄分が径0.3cm大の斑状に入る
11. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 極細粒砂 (NR02 人為層か)
12. 灰色 (N4/0) シルト 粘質
13. 暗灰色 (N3/0) シルト 粘質 色調が暗く有機化するか<NR02>
14. 暗灰色 (N3/0) シルト混じり極細層 色調がやや暗く有機化する、流水痕を示す (NR02)
15. 灰白色 (10YR7/1) 均質な細粒砂 いわゆる砂層 (NR03)
16. 灰色 (N6/0) シルト やや粘質
17. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト混じり極細粒砂 (NR03)
18. 灰色 (7.5Y5/1) シルト混じり細粒砂 いわゆる砂層 (NR03)
19. にぶい黄橙色 (10YR7/2) シルト混じり細粒砂 いわゆる砂層 (NR03)
20. 暗青灰色 (5PB4/1) 細粒砂混じりシルト 色調が暗く有機化するか (NR03)
21. 灰白色 (7.5Y7/1) 細粒砂 いわゆる砂層 西に下がるラミナが見られる (NR03)
22. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂混じりシルト (NR03)
23. 褐灰色 (10YR5/1) シルト 灰白色 (5Y7/1) がブロック状に20%混じる (SD01)
24. 灰白色 (7.5Y7/1) シルト いわゆる砂層
25. にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルト いわゆる砂層
26. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂 いわゆる砂層 層の下方に粗粒砂が帯状に入る
27. にぶい黄橙色 (10YR7/3) 細粒砂混じりシルト いわゆる砂層
28. 淡黄色 (2.5Y8/3) シルト混じり細粒砂 いわゆる砂層
29. 灰色 (N5/0) 細粒砂 粘質 いわゆる砂層 色調が暗い
30. にぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト
31. 青灰色 (5BG6/1) シルト混じり細粒砂 いわゆる砂層
32. (10G7/1) シルト 径1cm大の鉄分斑が沈着する
33. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 径0.5~1cm大の鉄分斑が沈着する
34. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト 粘質 径0.3cm大の鉄分斑が非常に多く沈着 マンガンが多く沈着
35. 淡黄色 (5Y8/3) シルト 粘質 径0.3cm大の鉄分斑が非常に多く沈着する
36. 青灰色 (5BG/1) 極細粒砂混じりシルト 粘質 やや砂味あり
37. 青灰色 (5BG/1) シルト 粘質 上下の層に比べてやや暗い色調
38. 青灰色 (5B5/1) シルト 粘質

第99図 D4区北壁土層図(1/100)

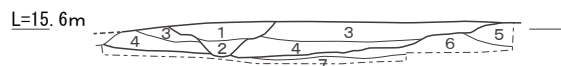


第100図 D4区斜行溝S D01・自然流路N R02・03平面図(1/150)

0.84m、深さ0.22m。溝底面の標高は南壁15.4m、北壁で15.6mである。埋土は人により埋めたと考えられる比較的単純な1層ないし2層で構成されており、流水の痕跡は認められない。このような特徴から人為的に掘られた溝と判断したが、N R02・03と方位が一致しており自然流路の可能性も残る。

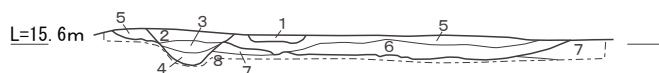
自然流路N R02(第102図) 斜方向をとりながら蛇行する自然流路である。N R03を掘り込み、S D01には切られる関係である。幅1.2mで、深さ0.62m。流路底面の標高は南壁で15.1m、北壁では15.2mである。埋土の下半部は砂質でラミナを呈しており、一定の水流があったとみられる。埋土の上半は人為的に埋めたと判断される。遺構掘削の際、断面観察用の畦を設定し、畦に区切られた場所に対応して北から1～5区として遺物を取り上げた。

自然流路N R03(第102・103図) 斜方向の自然流路で、調査区北辺でやや西流れが振れる。



畦1

1. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 土器片を多く含む 人為的に埋めたか (NR02)
2. 暗緑灰色 (5G4/1) 極細粒砂混じりシルト 砂味が強い 部分的に極細粒砂がラミナを呈する (NR02)
3. 灰白色 (2.5Y8/2) シルト 植物根痕と考えられる径0.1cm大の鉄分班が多く混じる (NR03)
4. 青灰色 (10BG6/1) シルト混じり極細粒砂 北東側を中心にラミナが見られる (NR03)
5. 淡黄色 (2.5Y8/4) 均質な細粒砂混じり極細粒砂 いわゆる砂層
6. 青灰色 (5BG6/1) 細粒砂混じり極細粒砂 いわゆる砂層 還元雰囲気呈する
7. 灰白色 (2.5Y8/2) シルト 粘質 径1cm大の鉄分班を多く含む



畦2

1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト (SD01)
2. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 土器片・炭化物が少量混じる (NR02)
3. 褐灰色 (10YR5/1) シルト (NR02)
4. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 やや砂味が強い (NR02)
5. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂混じりシルト やや粘質 土器を少量含む 径0.3cm大の斑状や縦長棒状に鉄分が少量沈着する (NR03)
6. 明褐灰色 (7.5YR7/2) 細粒砂混じり極細粒砂 砂味が強い 部分的にラミナが見られる (NR03)
7. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 均質な極細粒砂 いわゆる砂層
8. 灰白色 (5Y8/2) シルト 粘質 径0.2～0.5cm大の斑状や縦長棒状に鉄分が多く沈着する



畦3

1. 褐灰色 (10YR5/1) シルト 淡黄色 (2.5Y8/3) シルトがブロック状に20%混じる 人為的に埋めたか (SD01)
2. 黄灰色 (2.5Y5/1) 極細粒砂混じりシルト 土器を含む 人為的に埋めたか (NR02)
3. 灰色 (5Y5/1) シルト混じり極細粒砂 粘質 砂味が強い (NR02)
4. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 粘質 所により極細粒砂の砂層が混じる 土器を多く含む 人為的に埋めたか (NR03)
5. 淡黄色 (10YR8/3) 細粒砂 いわゆる砂層 ラミナを呈する部分的に灰色 (5Y4/1) 粘質シルトを含む (NR03)
6. 浅黄色 (2.5Y7/3) 均質な極細粒砂
7. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト

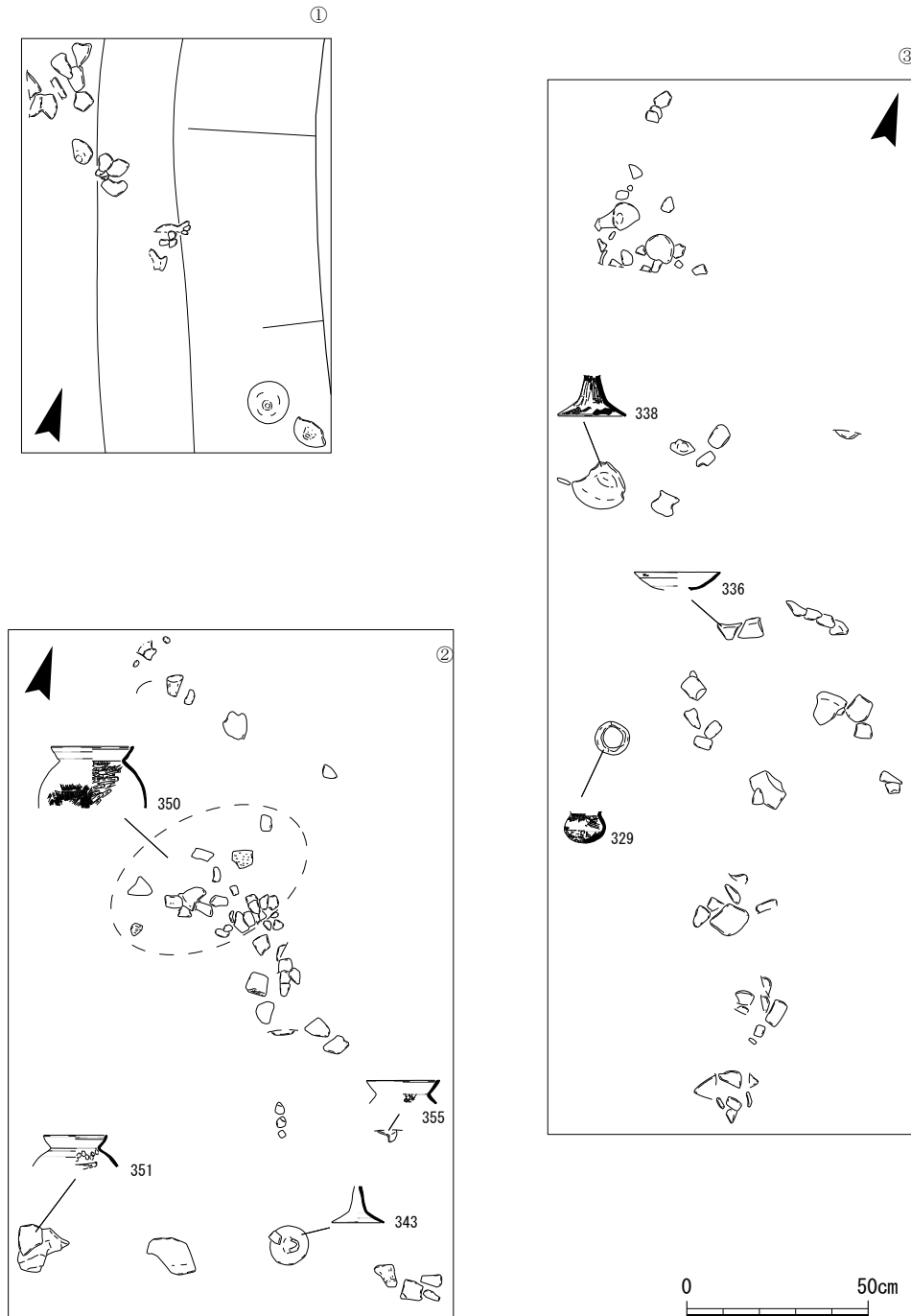


畦4

1. 浅黄褐色 (10YR8/4) シルト 褐灰色 (10YR6/1) がブロック状に30%混じる 人為的に埋めたか (SD01)
2. 褐灰色 (10YR6/1) シルト やや粘質 (SD01)
3. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト やや粘質 (NR02)
4. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂混じりシルト やや砂味が強い (NR02)
5. 淡黄色 (2.5Y8/3) 極細粒砂 土器を多く含む (NR03)
6. 灰白色 (10Y8/1) シルト混じり極細粒砂 いわゆる砂層 ラミナが認められる (NR03)
7. 褐灰色 (7.5YR6/1) シルト 粘質 (NR03)
8. 灰白色 (10YR7/1) 均質な極細粒砂 いわゆる砂層 (NR03)
9. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂混じりシルト 砂味が強い (NR03)
10. 浅黄色 (2.5Y7/3) 均質な極細粒砂 いわゆる砂層
11. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト 粘質 鉄分・マンガンが多く沈着する



第101図 D4区自然流路NR03畔1～4土層図(1/100)

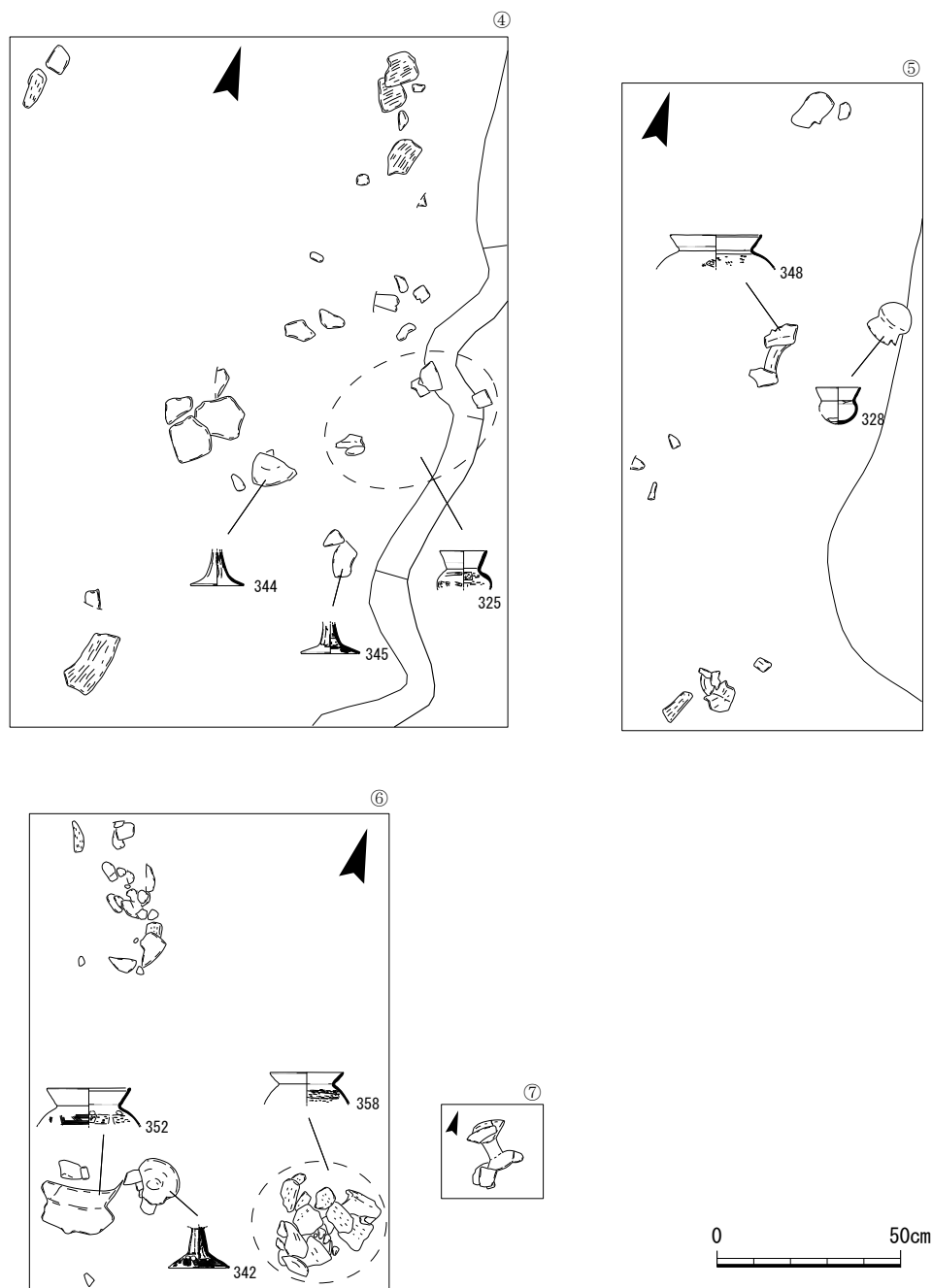


第102図 D4区自然流路N R02・03内遺物出土状況平面図(1/20)

幅5.8mで深さ0.52m。底面は平坦で、調査区南壁での底面の標高は15.0m、北壁では15.2mである。埋土は上下の2層で構成されており、下層は砂層で一定の流水があったことを示している。上層は人為的に埋め戻したと判断される土で、層中には古墳時代初頭の土器が多数含まれている。遺構掘削の際にはN R02と同じく、断面観察用の畦を設定し、畦に区切られた場所に対応して北から1～5区として遺物取り上げた。

(4)小結

溝S D01と流路N R02・03はほぼ同じ場所に位置しているが、埋土の上半は人為的な埋戻しが



第103図 D4区自然流路N R03内遺物出土状況平面図(1/20)

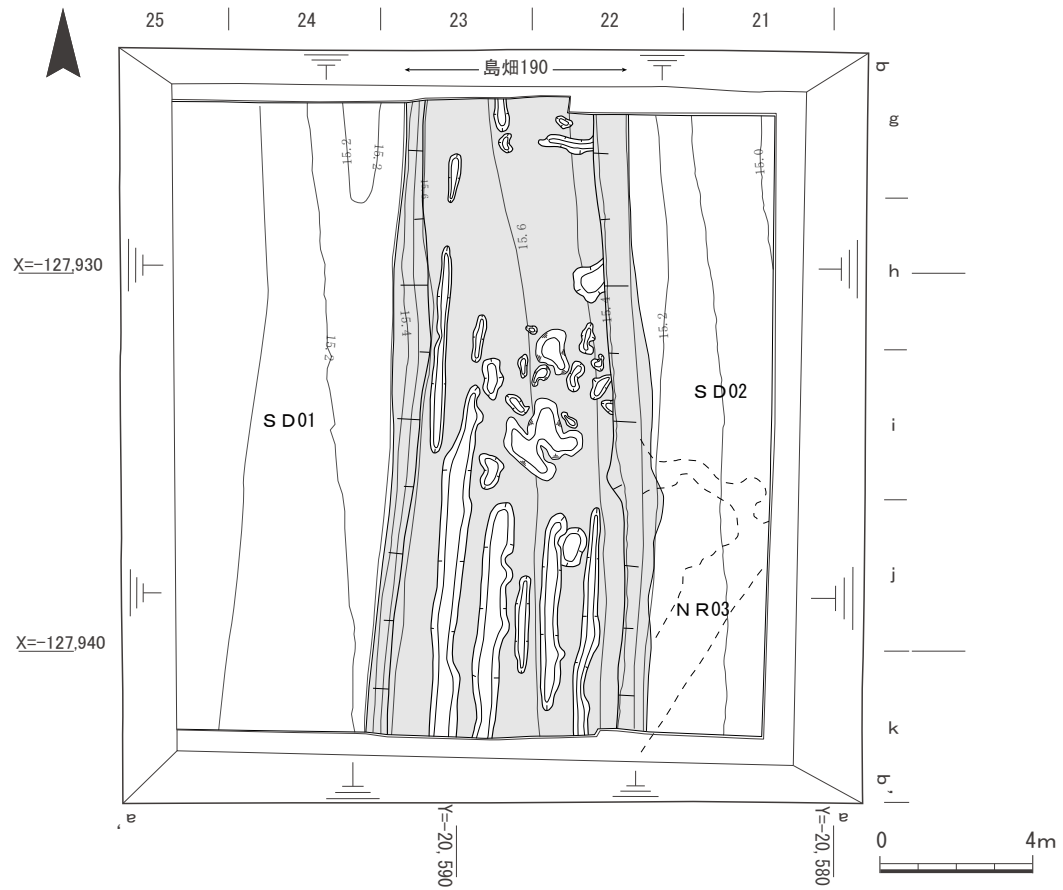
想定されるため、それぞれの形成の間には一定の時間があったものと復原される。また本調査区では、基盤層を削り出す形の中世島畑は確認されなかった。

6) D5区の調査

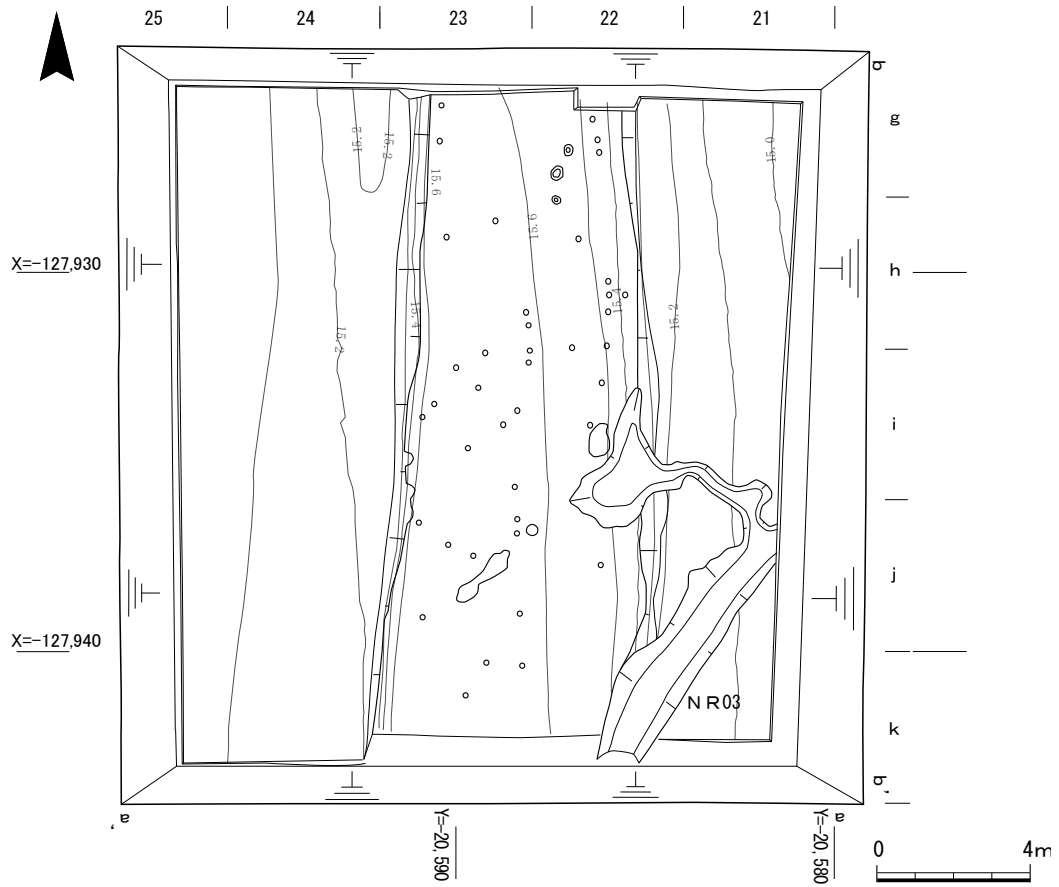
(1) 調査の概要

調査区は正方形で南北19.9m、東西19.6mの大きさである。畑であった場所に造成がなされており調査地の地盤高は16.5m付近である。調査の結果、島畑190および島畑間の低位部(S D01・02)、島畑が造られる以前の自然流路(N R03)を検出した。

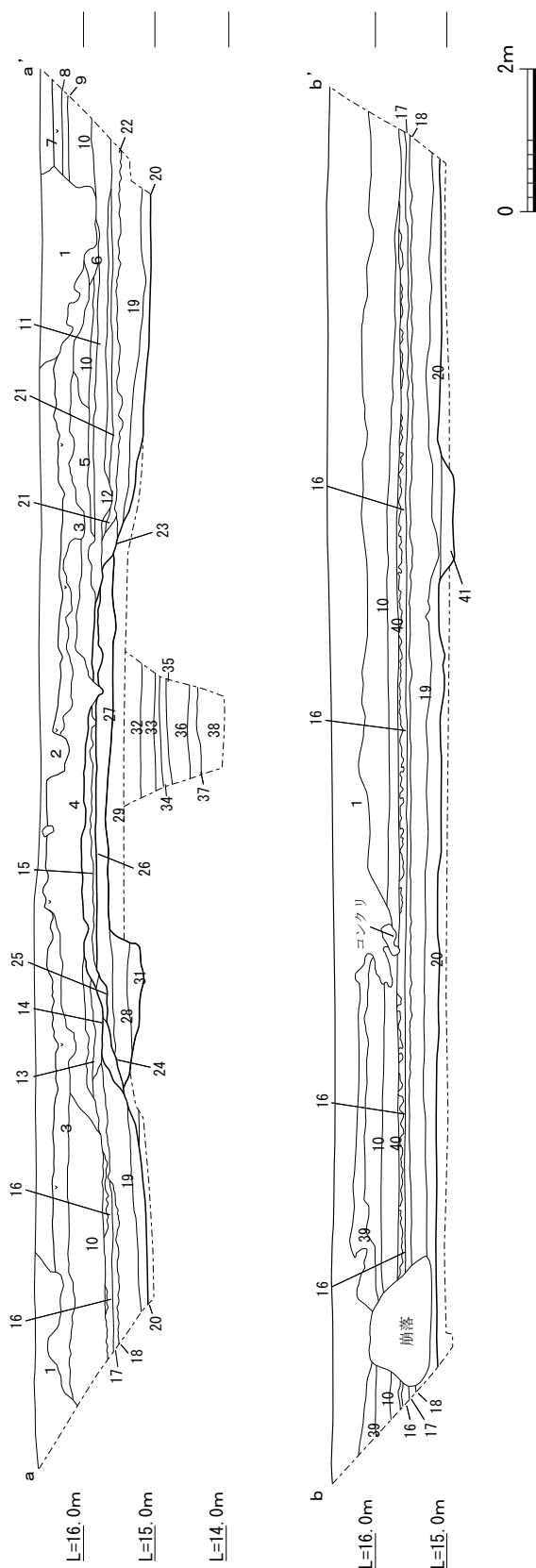
(2) 基本層序(第106図)



第104図 D5区検出遺構平面図1 (1/200)

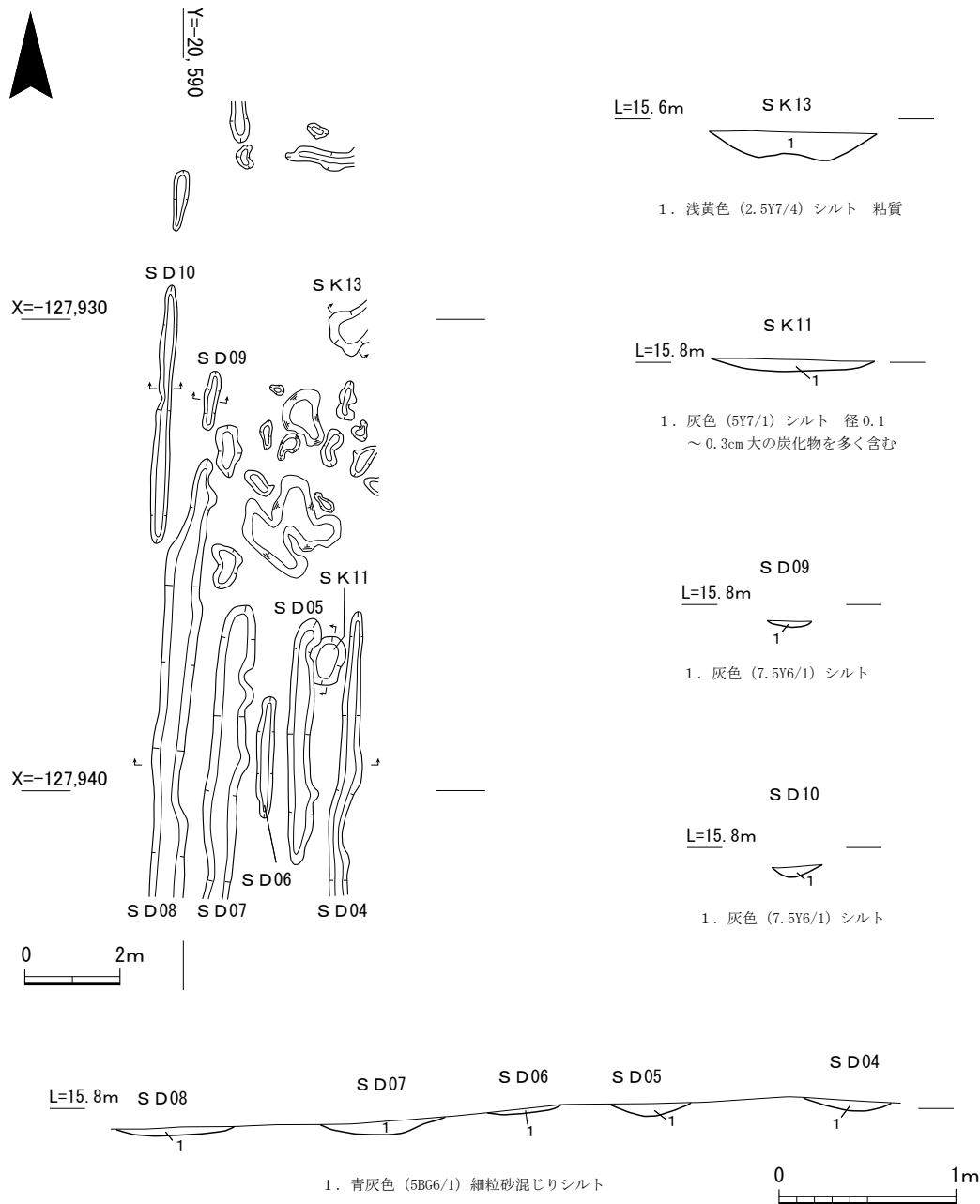


第105図 D5区検出遺構平面図2 (1/200)



1. 攪乱 コンクリート製擁壁の堀形
2. 盛土
3. 暗青灰色 (5BG3/1) シルト 第2層との間に有機化した植物跡が残る (旧表土)
4. 緑灰色 (10GY6/1) シルト にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径2cm大の斑状に混じる
5. 青灰色 (5BG5/1) シルト
6. 青灰色 (10BG5/1) シルト
7. にぶい黄橙色 (10GY6/3) 極細粒砂 (造成土)
8. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂 粘質 有機化する
9. 明褐灰色 (7.5Y7/2) 極細粒砂 粘質
10. にぶい黄橙色 (10YR7/3) 極細粒砂 粘質
明黄褐色 (2.5Y7/6) が径2cm大の斑状に40%混じる
径2cm大のマンガンが多く混じる
11. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径2cm大の斑状に30%混じる
12. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径2cm大の斑状に50%混じる 植物根痕と考えられる径0.5cm大の黄色斑が非常に多く混じる
13. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト 粘質
14. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト
15. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
16. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルトに灰白色 (2.5Y8/2) シルトがマーブル状に混じる (荷重圧痕か)
17. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 粘質 径0.2cm大の炭化物を少量含む 有機化する耕作土層
18. 褐灰色 (10YR5/1) シルト 粘質
19. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂混じり細粒砂 部分的にラミナを呈する いわゆる砂層<洪水による層>
20. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂混じり細粒砂 やや粘質
いわゆる砂層<洪水による層>
20. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂混じり細粒砂 やや粘質
いわゆる砂層<洪水による層>
21. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
22. 灰色 (5Y6/1) シルト
23. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト 砂味が強い
24. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
25. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト
26. にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト
27. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト 淡黄色 (2.5Y8/3) シルトが40%混じる 径0.1cm大のマンガン斑が少量混じる
28. 灰白色 (5Y8/1) 細粒砂 淡黄色 (2.5Y8/3) シルトが混じる (NR03)
29. にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルト 淡黄色 (2.5Y8/3) シルトが30%混じる
31. 灰白色 (10YR8/1) 中粒砂混じり細粒砂 いわゆる砂層 (NR03 流水痕跡を示す)
32. 29と同じ
33. にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルト 粘質 径0.2cm大のマンガン斑が多く混じる 第35層に似るがより粘質
34. にぶい橙色 (7.5YR7/3) シルト 粘質 植物痕跡である径0.5cm大の鉄分斑が多く混じる
35. 青灰色 (10BG6/1) シルトとにぶい橙色 (7.5YR7/3) シルトが同僚混じる 粘質 第34-36層の漸移層
36. 青灰色 (10BG6/1) シルト 粘質 部分的に炭化物がごく少量混じる
37. 緑灰色 (7.5GY5/1) 極細粒砂〜シルト 粘質 やや砂質
38. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト 粘質
39. 緑灰色 (10GY6/1) シルト混じり極細粒砂
40. 浅黄色 (2.5Y7/4) シルト
41. 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト混じり極細粒砂 いわゆる砂層 (NR03)

第106図 D 5 区南壁・東壁土層図(1/100)

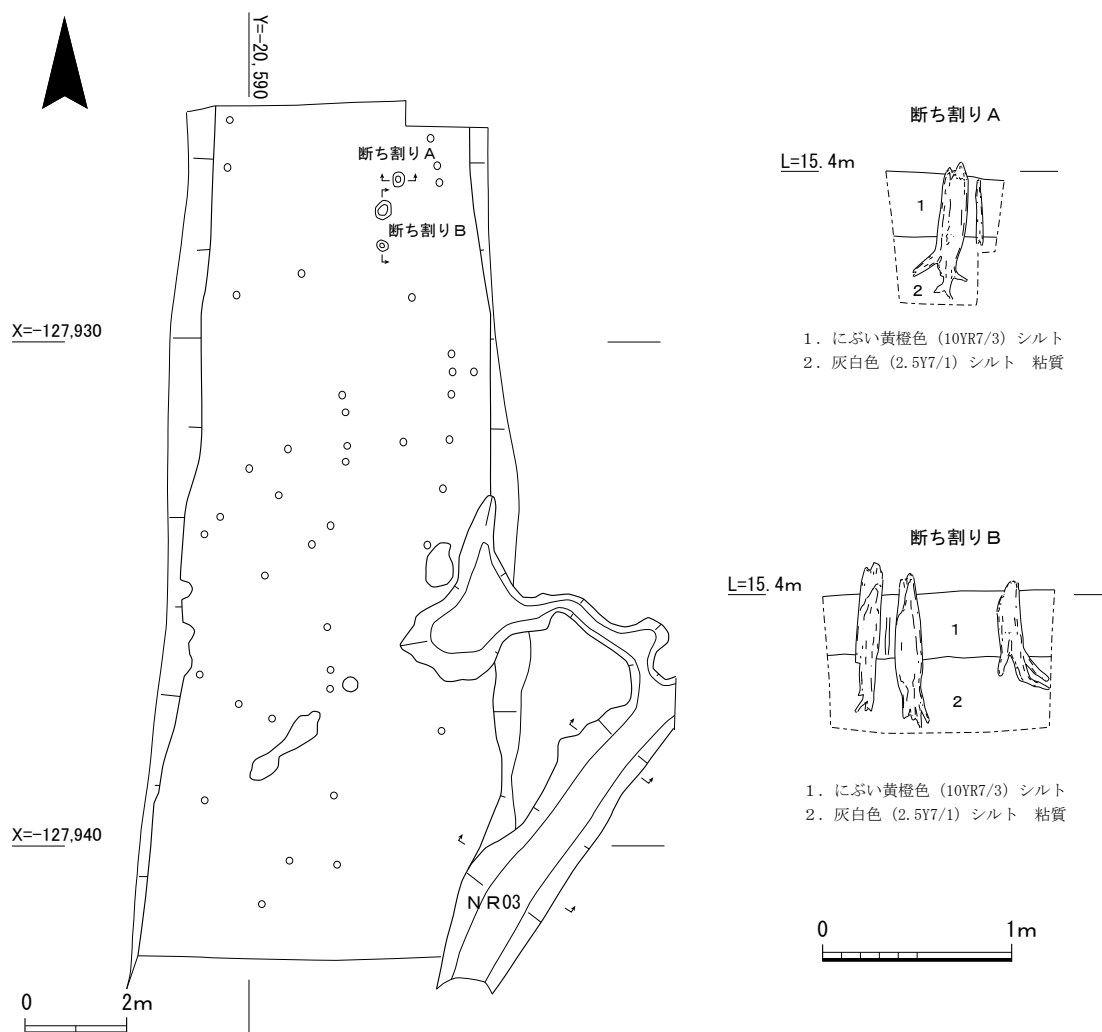


第107図 D5区島畑190上検出溝群平・断面図(1/150・1/40)

旧表土(3層)上面の標高は16.38mである。調査区壁面の観察では、南壁の中央付近に4層の高まりがある。この高まりは旧表土の上面まで達しており、近世以降の島畑の可能性ある。基盤層(27層)は標高15.56mで検出しており、この基盤層を削り出す形で島畑が造られている。27層は洪水性堆積により形成されたもので、最大0.44mの厚さがある。下位に29層があり、自然流路NR03は、27層の下位にある29層を掘り込み、27層にパックされている。標高14.8mで検出した36層から下位は、湖沼性の堆積層である。

(3) 検出遺構(第104図)

島畑190 上面幅は5.6m、低位部との比高は0.64mで、東西に低位部(SD01・02)を伴う。島畑は基盤層(27層)を掘り込んで造られるが、基盤層の西側面には24・25層が存在する。これは島



第108図 D5区植物痕跡実測図(1/150・1/40)

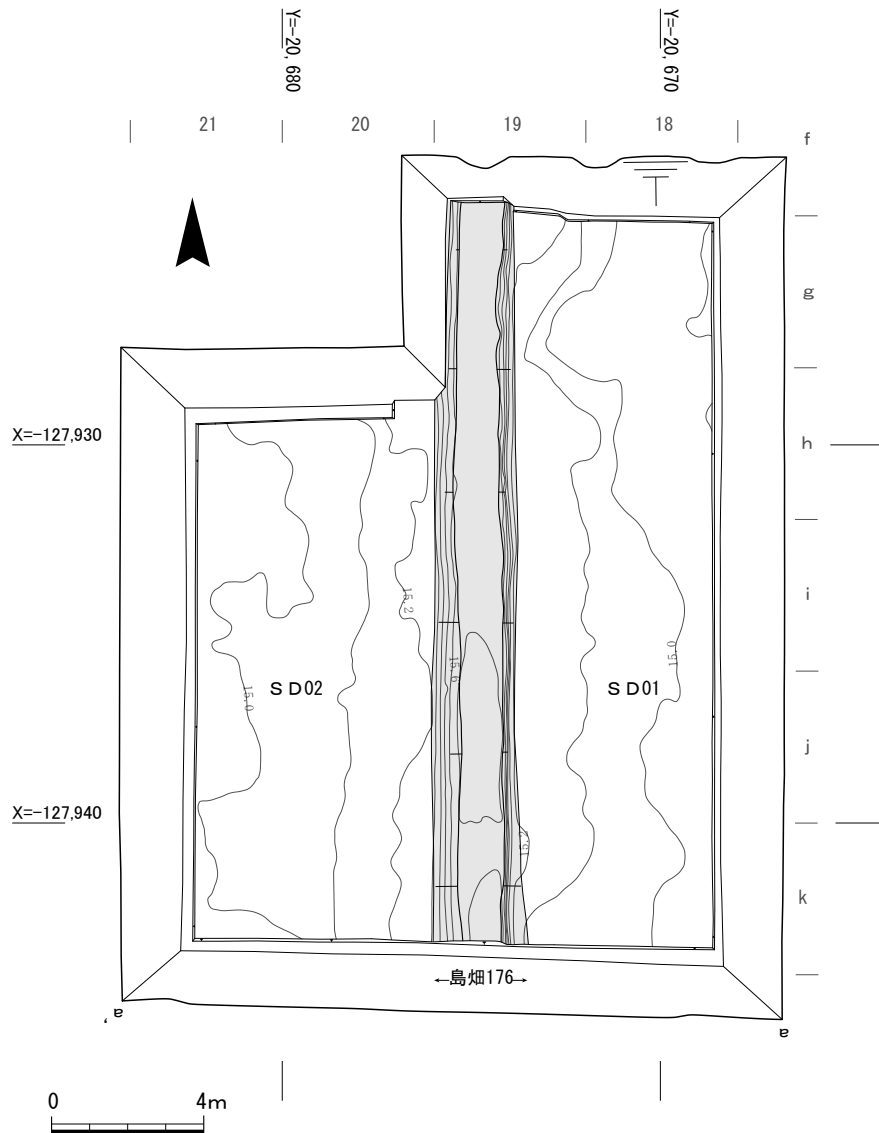
畑の使用が継続する間、島畑上に積みなおされた土と考えられる。

島畑上の平坦面では、南北方向の溝を検出した(第107図)。溝の幅は0.2～0.7m、深さは0.05m程度である。浅い溝が連続的に掘られており、島畑上での耕作に関わる溝と考えられる。

自然流路NR03(第105図) 低位部であるSD02の底面で検出した自然流路である。基盤層である27層でバックされており、平面検出作業の際には、島畑の東側面で遺構のラインが見えなくなる。島畑上面の調査が終了後に27層を除去し、NR03を完掘した。流路は0.9mで、深さは最大0.3m。流路の本線は調査区の南東部で斜行し、支流にあたる部分が島畑の側面に入り込んでいる。埋土は砂質であり、一定の水流があったものと見られる。

植物痕跡(第108図) 27層を除去した島畑部分において、植物痕跡を多数検出した。直径7cm程度の円形で、円形内は有機化した暗色の土で満たされている。調査区北辺部では、直径10cm程度の樹木を検出した。これを断ち割って断面観察してみたところ、いずれも下方に根を有する立木を確認した。基盤層の形成過程で、立木が生育する安定した時期があることを示しているものと考えられる。

(4)小結



第109図 D6区検出遺構平面図(1/200)

本調査区では基盤層を掘り込む形の島畑を確認した。また基盤層と自然流路の関係から、基盤層の形成に時間幅があり、安定した時期と氾濫を繰り返しながら基盤層が形成されていることが分かる事例である。

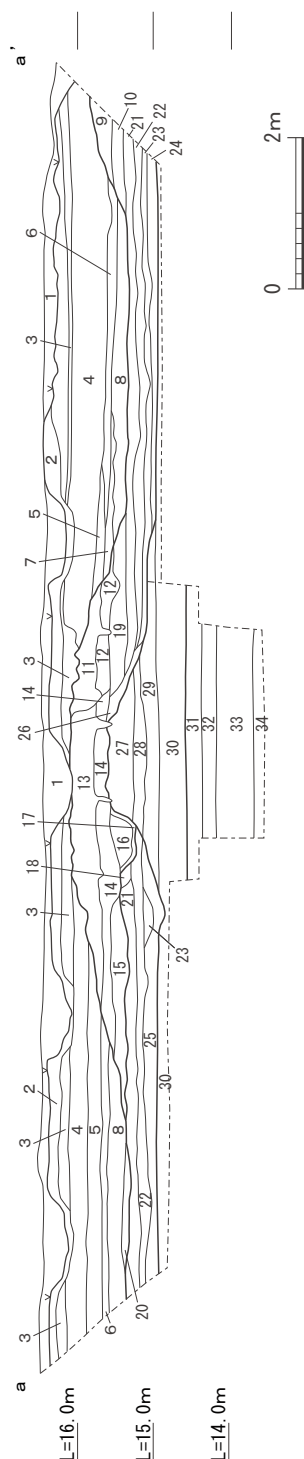
7) D6区の調査

(1) 調査の概要

調査区は南北22.7m、東西17.5mの大きさに逆L字形を呈する。道路事業の前までは耕作地として利用されていた場所であるが、調査直前に造成がなされている。造成土の標高は16.5m付近で、旧表土として確認した耕作土の上面の標高は約16.0～16.4mである。調査の結果、中世の島畑1基(島畑176)、島畑間の低位部(S D01・02)、南北溝(S D03)を平面的に検出した。また近世以降と考えられる島畑2基を壁面調査で確認した。

(2) 基本層序(第110図)

南壁面の観察によると、旧耕作土(2・3層)は比高0.4mの南北畝を作っている。畝と畝間の



- | | |
|---|--|
| 1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細粒砂 淡黄色 (2.5Y8/4) がブロック状に20%混じる
〈調査区南端部にのみある客土〉 | 18. 明青灰色 (10BG7/1) シルト 粘質 |
| 2. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 有機化する〈南北方向の畝を作る耕作土〉 | 19. 青灰色 (5BG6/1) シルト |
| 3. 灰白色 (10YR8/2) 極細粒砂 | 20. 緑灰色 (10G6/1) 細粒砂混じりシルト |
| 4. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR7/4) が斑状に30%混じる | 21. 青灰色 (5B6/1) シルト混じり細粒砂 いわゆる砂層 |
| 5. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 径0.3cm大の鉄分班が多く沈着する | 22. 明青灰色 (10BG7/1) 細粒砂 均質 いわゆる砂層 |
| 6. 褐灰色 (10YR5/1) シルト | 23. 青灰色 (5B6/1) シルト混じり細粒砂 |
| 7. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト | 24. 浅黄色 (5Y7/3) シルト |
| 8. 明青灰色 (5BG7/1) 極細粒砂混じりシルト | 25. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト 地山由来の土が混じる |
| 9. にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルト 径0.3cm大の鉄分班が多く沈着する | 26. 淡黄色 (5Y8/3) シルト |
| 10. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂混じり細粒砂 いわゆる砂層 | 27. にぶい黄褐色 (10YR6/3) シルト |
| 11. 灰白色 (2.5Y7/2) シルト混じり極細粒砂 径0.3cm大の鉄分班が多く沈着する | 28. 淡黄色 (2.5Y8/4) 均質な細粒砂 いわゆる砂層 |
| 12. 青灰色 (5BG6/1) シルト | 29. 灰白色 (2.5Y8/2) 極細粒砂混じりシルト 砂味が強くやや粘質 |
| 13. 黄褐色 (10YR8/6) シルト マンガンが多く沈着する | 30. 灰白色 (10YR8/2) シルト 粘質
径0.5cm大の鉄分班が多く沈着する |
| 14. 明青灰色 (5BG7/1) シルト | 31. 明青灰色 (5BG7/1) シルト 粘質 還元雰囲気呈する |
| 15. 浅黄色 (5Y7/3) シルト混じり細粒砂 いわゆる砂層だがやや粘質 | 32. 青灰色 (10BG5/1) シルト 粘質 やや砂味が強い |
| 16. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト 層の下半部には粘質シルトがブロック状に20%混じる (SD03) | 33. 緑灰色 (10G6/1) シルト 粘質 還元雰囲気呈する |
| 17. 明青灰色 (5BG7/1) 極細粒砂 (SD03) | 34. 青灰色 (5BG6/1) シルト 粘質 還元雰囲気呈する |

第110図 D6区 南壁土層図(1/100)

東西幅は1.0～1.8mと大きなものであり、近傍での耕作状況を参照するとイチジクの栽培がなされていたのであろう。地山は標高15.6m付近で検出している。一連の調査で基盤層とされる洪水性の堆積層(27層)であり、この層を削り出すかたちで南北方向の島畑176を1基検出している。31層以下の地山は還元雰囲気呈するもので、静水の環境で堆積したものである。島畑176の低位部(SD01・02)は21～25層が堆積している。上方にある21・22層は砂質であり、洪水性の自然堆積と判断されるが、最下層の25層は地山由来のブロックが多く混じっていることから、水田耕

作に使われた層の可能性がある。調査では21層上面に相当する高さで、南北方向の溝（S D 03）を検出している。島畑176の上位に重複する新しい島畑は、旧表土の畝間底部に接する標高16.1m付近を頂部としているものである。人為的に動かされたと判断される11・13・14層が高まりを作っており、このうち14層中からは瓦器片が出土している。島畑の低位部には4～8層が堆積する。このうち4・5層は人為的に動かされたと判断されるもので、近世の遺物が出土していることから近世以降の島畑と考えられる。同時期と判断される南北方向の島畑は、調査区の西端の壁面でも確認している。島畑176の上部のものと同じく、21層上に9・10層が積み上げて造られている。

（3）検出遺構（第109図）

島畑176 南北方向の島畑である。基盤層である27層を削り出して造られているが、上端の幅1.2mと幅が狭いものである。島畑頂部において、溝等の検出はない。島畑の東西に低位部（S D 01・02）を伴う。島畑上面と低位部の比高は0.66mである。低位部では水溝等は検出されなかった。

南北溝 S D 03（第111図） 島畑176の埋没後に掘られた南北溝である。幅0.7mで深さ0.4mである。埋土は流水等の痕跡はなく、人為的に埋め戻されたと判断される。よって耕作に関わる区画溝の可能性はある。土師器・瓦器が出土している。

（5）小結

地山を削り出すタイプの南北方向の島畑を検出するとともに、これが埋没する段階での土地利用の状況（S D 03）を確認した。また、同じ場所において近世以降も島畑が累重する状況を確認した。（加藤雅士）

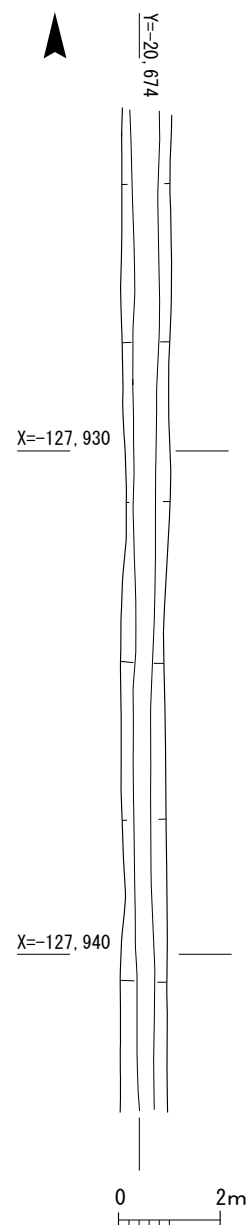
8）D 7 区の調査

（1）調査の概要

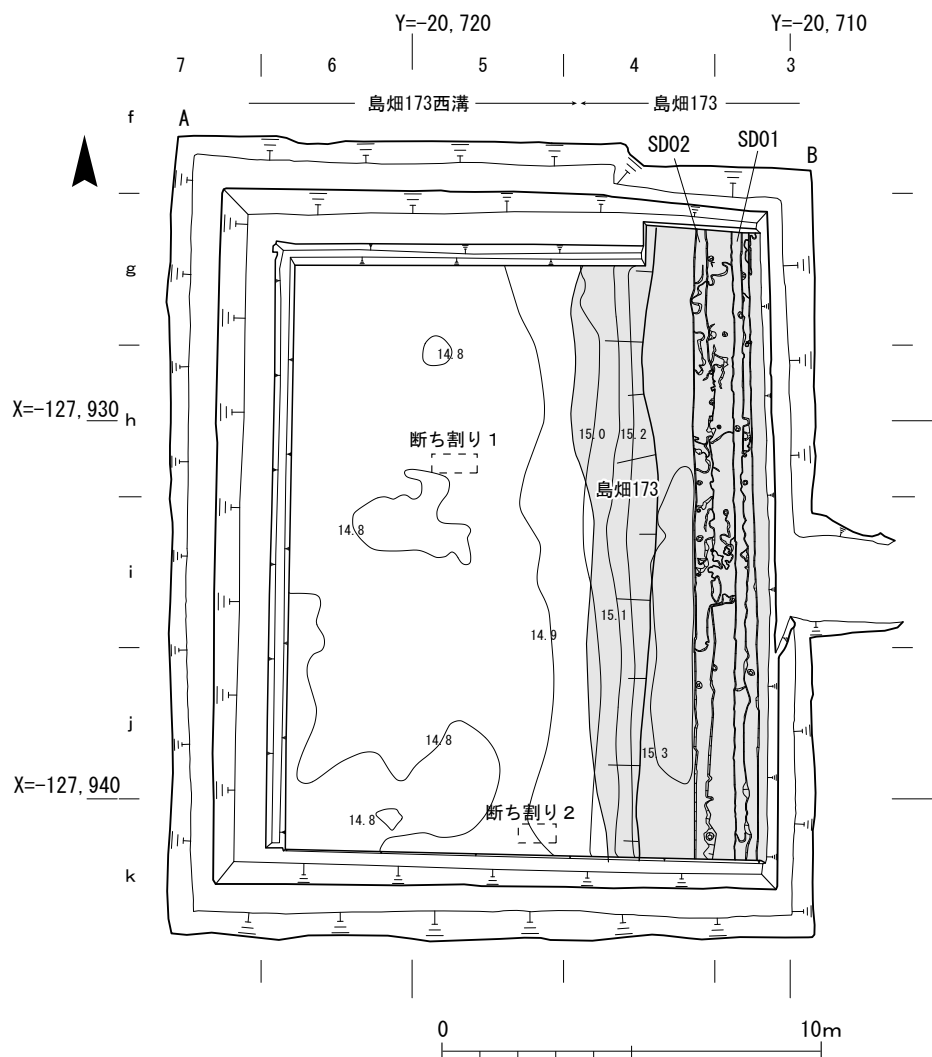
橋脚29の建設予定地の調査区である。調査区の平面形は方形で、東西17m、南北20.9mを測り、調査面積は355㎡である。重機により標高15m付近まで表土掘削を行い、以後、人力による掘削を行った。調査の結果、調査地の東辺で南北方向の島畑を1基と島畑の西側の溝、島畑上で南北方向の耕作溝を2条検出した。島畑は、土層の観察より、3時期にわたってほぼ同じ位置で作り替えられていた。島畑盛土や島畑間の溝内の堆積土層をすべて取り除いて遺構精査に努めたが、島畑以前の遺構・遺物は確認できなかった。最終的に北壁に沿って島畑基盤層を最大1.7mまで掘削して下層遺構の検出に務めたが、遺構・遺物は確認できなかった。

（2）基本層序（第113図）

調査着手直前には、新名神高速道路建設に伴う工事事務所・駐車場として利用されていたため、碎石や改良剤により整地がなされており（1～4層）、それ以前は畑として利用されていた。その



第111図 D 6 区溝 S D 03
平面図 (1/150)



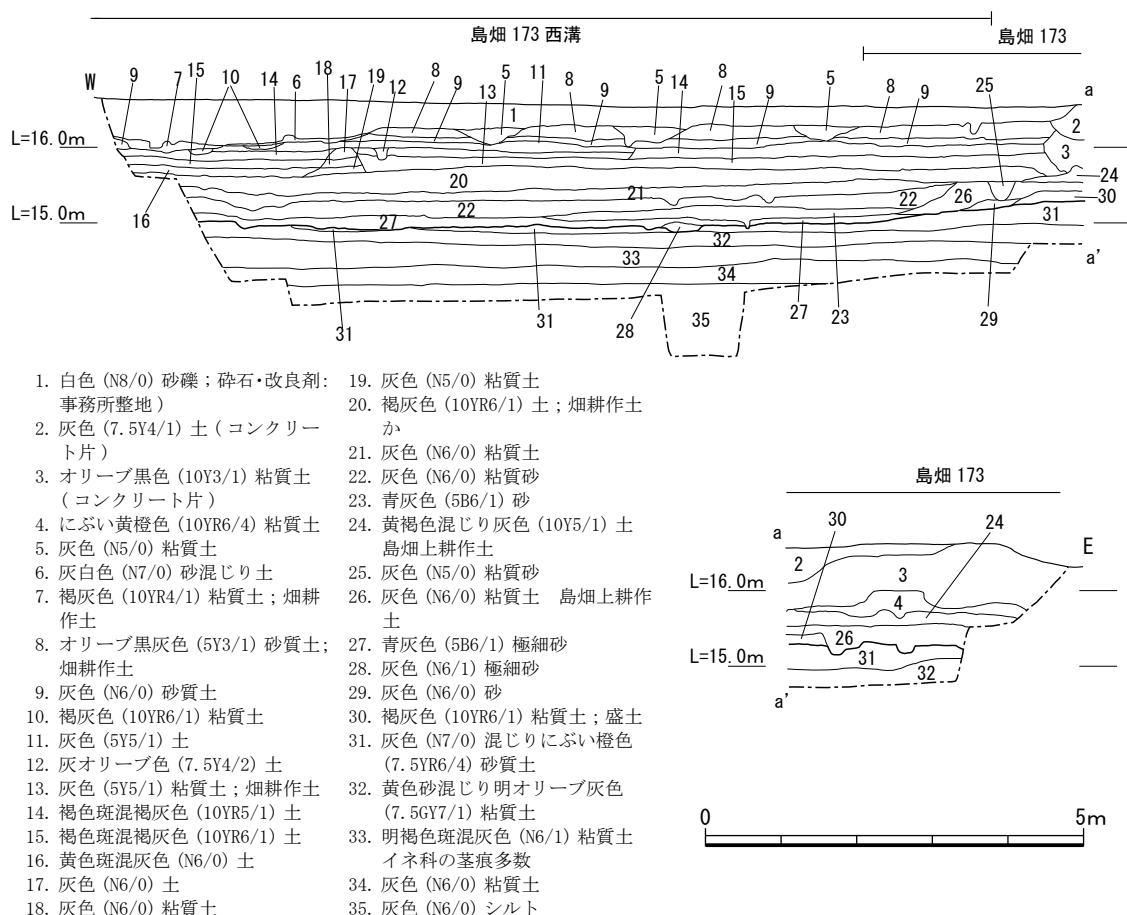
第112図 D7区検出遺構平面図(1/200)

下には、畑の耕作土と判断される数枚の水平堆積層(5～16層)や畔状の盛り上がり(17～19層)が確認できた。壁面の清掃時に近世と判断される陶磁器片が出土しており、これらは近世以降、現代のものである。

島畑の盛土・耕作土と判断する土層は、29・30層、26層、24層があり、31・32層以下が島畑を造り出した際の基盤層と判断する。遺物の出土は非常に少ない。

26層は島畑上の耕作土と判断され、厚さ0.3mの堆積が認められる。土層観察では2条程度の溝状の落ち込みが31層を掘り込む形で観察できるが、この溝が21層の上面から掘り込まれるラインは観察できなかった。これは、26層自体が耕作土であり、この上位から溝を掘り、土を横に盛り上げて畝を作った際に比較的深く穿たれた部分が溝状に掘り込まれたと判断される。平面的に検出したSD01・02の溝内は小さな凸凹が認められ、鋤や鍬が当たった痕跡と判断されるが、部分的に、SD01・02の溝と溝の間にもこの刺突痕が認められた。恒常的な溝が設けられていたのではなく、時々畝が動かされたものと判断される。

(3) 検出遺構(第112・114図)



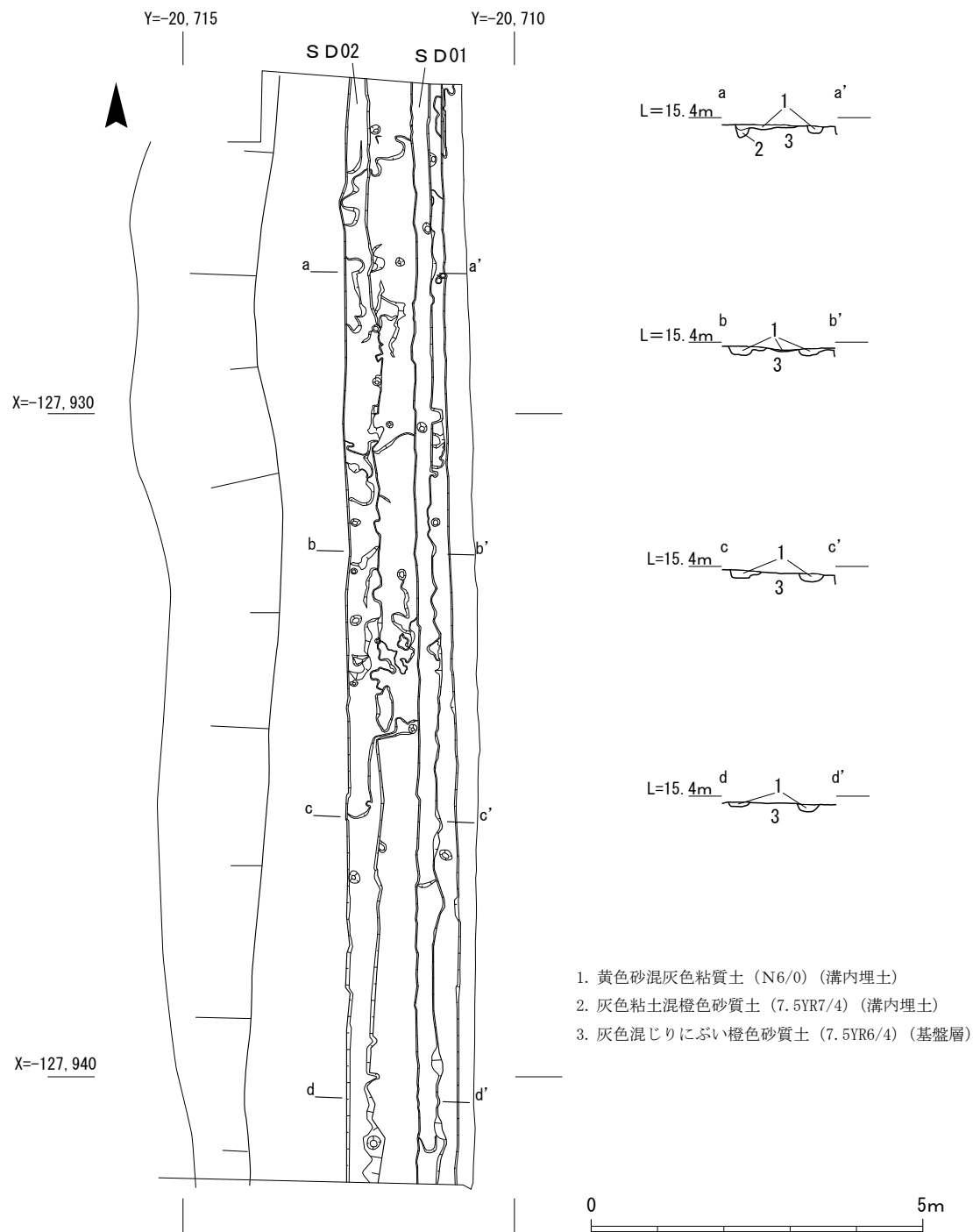
第113図 D7区北壁土層図(1/100)

島畑173 調査地の東端部の高まりで、溝との比高は最大で0.5mを測る。31層以下が基盤層であり、これを掘り込んで島畑を成形している。その上に29・30層の盛土を行い、島畑を造っている。26層と24層も新しい段階の島畑盛土と判断される。25層は島畑上に掘られた溝と推測される。

島畑西溝 島畑の盛土に対応する形で島畑の溝内堆積を確認した。島畑の盛土との関係より、20層、21・22層、27・28層の3時期に分かれる。この後、島畑は新たに盛り上げられておらず、畑作・水田として広く用いられたようである。瓦器碗(第126図386)が出土した。

耕作溝SD01・02(第114図) 島畑上で検出した2条の南北方向の溝群である。これらの溝の埋土は、島畑173上の整地土と判断する26層と同質であり、上面からの掘り込みラインは確認できなかった。溝内には径5cm程度の凸凹が認められ、鋤・鍬による掘削痕と判断された。また、溝と溝との間は、溝の検出時に輪郭が不鮮明であることから面的に掘り下げて検出に努めたところ、比較的残りの良かったところでは鋤・鍬の掘削痕が認められた。このことから、単なる溝が掘削されたのではなく、耕作土全体を動かして溝状の畝を形成したために、溝の形状が不鮮明であり、耕作土の厚みよりも深く掘削された部分だけが溝状になったものと判断される。

杭状の痕跡(第115図) 島畑基盤層上で径20cm程度の灰色粘質土が数か所で認められ、そのうちの一か所では高さ約10cm、径5cm程度の杭状の木質が残存していた。杭の残欠および杭痕跡



第114図 D7区溝S D01・02実測図(1/100)

の可能性が認められたため、最終的に断ち割りを行い、その状況を観察した。断ち割り1では、杭状の木質は20cm程度残存していたが、下部は「く」の字状に屈曲しており、しかも先端部は丸く収まっていて、加工痕は認められなかった。以上のことから、杭ではなく、木の根の痕跡と判断した。また、断ち割り2では、下部に木質が遺存していた。時期は不明である。

(4) 小結

南北方向の島畑を1基検出した。中世に造られた島畑は近世のある段階で島畑上での耕作を止めたようで、平坦な農地へと作り変えている。また、島畑上で検出した溝には鋤跡と判断される

痕跡が多数検出された。

9) D13区の調査

(1) 調査の概要

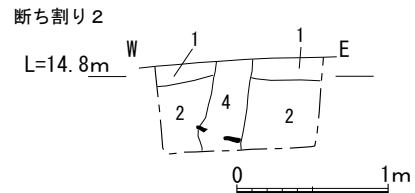
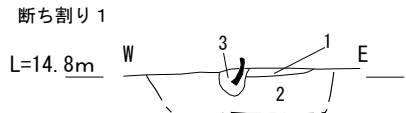
令和2年度に第11次調査として実施した。橋脚24の建設予定地である。調査区は国道24号と城陽市道11号との交差点の南西側にあたり、D地区の東端に位置する。城陽市道11号を挟んだ東側はC地区となる。調査地の南側には、国道24号寺田拡幅事業に係って平成31(令和元)年度に調査を実施したD10区の調査区がある。この調査では、島畑のほか、12世紀代の井戸や柱穴群、自然流路を検出している。

調査はD10区の調査成果を参考にして重機掘削を行い、人力による荒掘り、遺構検出作業をおこなった。地表下0.6～0.8m、標高16.0～16.2mで中世の遺構面を確認し、南北方向の島畑2基と南北方向の窪地状の溝、北東－南西方向の溝2条、ピット多数を検出した。この面での調査を終了した後、下層遺構の有無を確認するために重機による断ち割りを行ったところ、1～1.2mほど掘り下げた標高15m前後で焼土塊が集中した箇所を検出した。遺物の出土は無く、詳細は不明である。

(2) 基本層序(第117図)

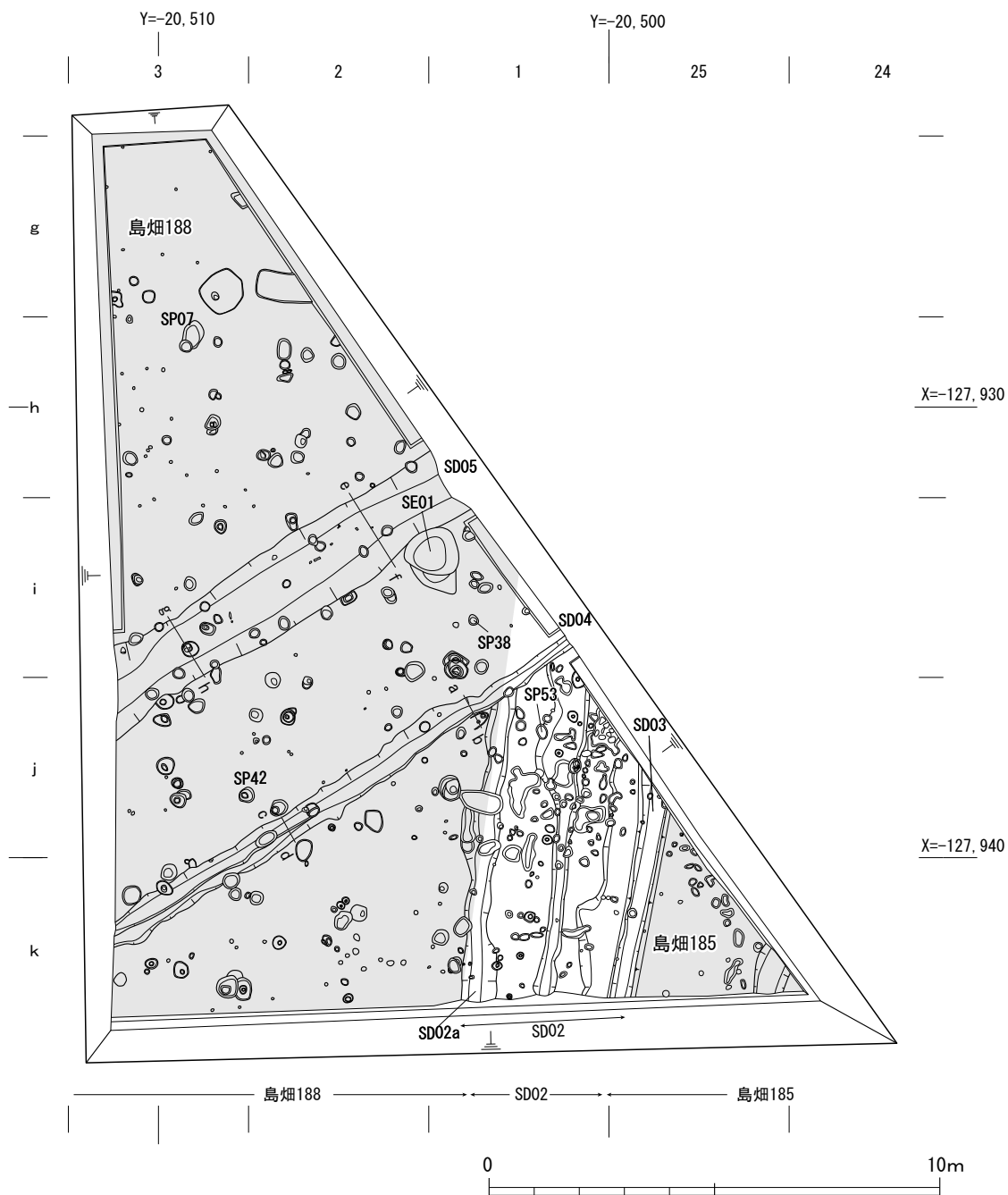
調査地は、調査着手直前は畑地として利用されており、その後、新名神高速道路建設に伴う工事ヤードとして利用されていた。そのため、盛土・造成土が厚く敷かれており(1層)、その下に耕作土が部分的に認められた(3・4層)。耕作土は一旦除去した後に改めて盛土しており、一部、改良剤による変色・変質が認められた(2層)。盛土・造成土、耕作土の下には6層がほぼ全面に堆積しており、これを除去した段階で柱穴等の遺構を確認した。13～18層上面が遺構検出面となり、これを切り込んでSD04・05、ピット(11・12層)を検出した(第1面)。この調査面は、西辺で見ると北端で標高16.2m、南端で16.05mで、北から南に向けてわずかに下る傾斜面をなしている。東西については、南辺で見ると、西端が16.2m、東端が16.1m、中央部付近のSD02の検出面が16.0m、中央部がくぼみ、東端と西端で高まる地形となっている。SD02の最深部が標高15.7mで、この溝が島畑造成時に掘り込んだ溝であり、東・西の高まりが島畑185・188となる。SD02の上面で溝、下面で溝・ピットを確認した。SD02の上面では幅0.2～0.3mの数条の南北溝幅があり、ほぼ同じ高さで溝SD03を検出した。これらの溝の埋土は7層となる。島畑間で行われた耕作に関する溝と考える。SD02の埋土は8～10層で、下面ではSD02の西辺でSD02aを検出し、埋土は10層となる。また、SD02下面では明瞭な掘形は確認できなかったが、くぼみ状の南北溝が数条確認できた。

下層遺構の確認のため南壁面を重機で断ち割ったところ、19層上面の標高15.0～15.1mで焼土塊SX100を確認した(第2面)。この断ち割り内から縄文土器と判断される土器片が出土している。この下は標高14.7～14.8m、21層以下が砂層となり、河川環境であったものと推測される。



1. にぶい橙色(5YR6/4)砂質土
2. 灰色(N6/0)粘質土
3. 青灰色粘質土(5B5/1); 2層の還元状態
4. 2層に同じ; 植物質を多く含む

第115図 D7区断ち割り内土層図
(1/50)

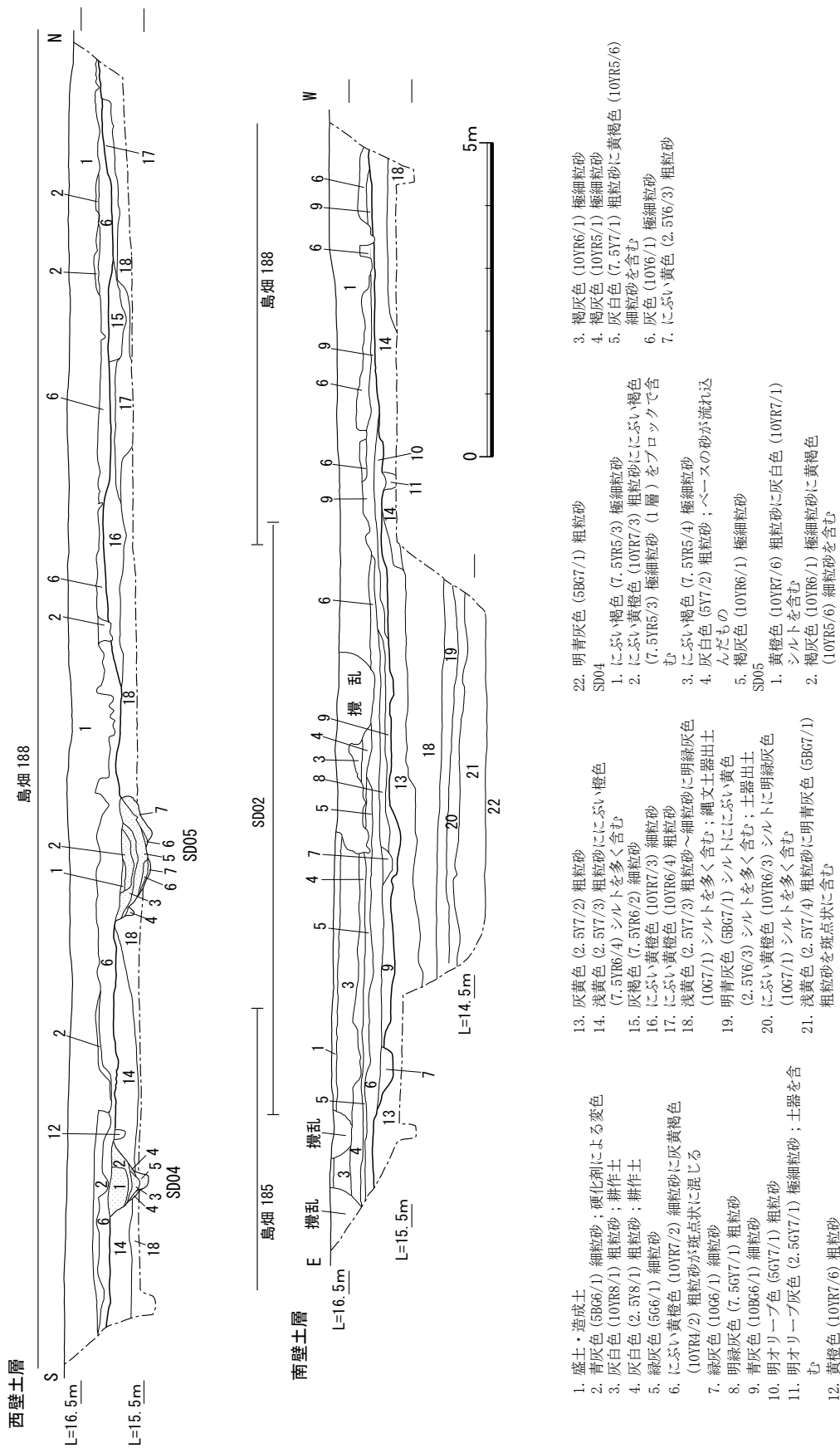


第116図 D13区検出遺構平面図 第1面(1/150)

(3) 検出遺構(第116・118・119図)

井戸SE01 近現代の溜め井戸である。長辺1.05m、短辺1.2m、深さ0.4mを測り、内部に木製の井戸枠が設置されていた。瓦器碗(第126図405)が掘形内から出土している。

溝SD02 調査区の南東部で検出した南北方向の幅広の溝で、島畑185と188を画するものである。幅4.4mで、比高0.3~0.45mとなる。この溝の底面では島畑に平行する南北方向の溝状のくぼ地を6条程度を確認できた。これらは幅0.3~1.0m、深さ0.1mの規模を有するが、南壁土層を観察しても明瞭な掘形は確認できなかった。これらの溝のうち、比較的しっかりと掘られたものをSD02aとした。これらの溝状のくぼ地の底面およびその間では、径5~10cmの小ピット



第117図 D13区西壁・南壁土層図(1/100)

が多数検出された。これらは作物の根株もしくは鋤先等の工具痕と判断され、このくぼ地が畑地として利用されたものと推測される。瓦器碗(395～397)、土師器皿(393)、白磁碗(398・399)が出土した。下面のS D02 aからは土師器皿(403・404)が出土した。

島畑188 調査区の西半で検出した南北方向の島畑である。溝S D02により東側が画されている。幅約11mにわたって確認したが、西辺は確認できていない。柱穴と判断されるピット類は島畑本体の上で確認されており、S D02の範囲では数基しか見つかっていない。ピット群が先行し、その後に島畑が造られたためと推測される。島畑の上部は削平を受けたためか、ほぼ平坦で、盛土は確認できていない。比高は最大で0.45mを測る。島畑は中世以降に形成されたようで、南側のD10区でも見つかっている。北で東に約8°振れる。

島畑185 溝S D02により西側が画された島畑で、幅3.8mの範囲で確認した。S D02からの比高は0.45mである。南壁の観察では、島畑の上の盛土は認められない。島畑185上で多くのピットを検出したが、島畑188上で検出したピットとは異なり、柱穴状を呈するものはない。北で東に約10°振れる。

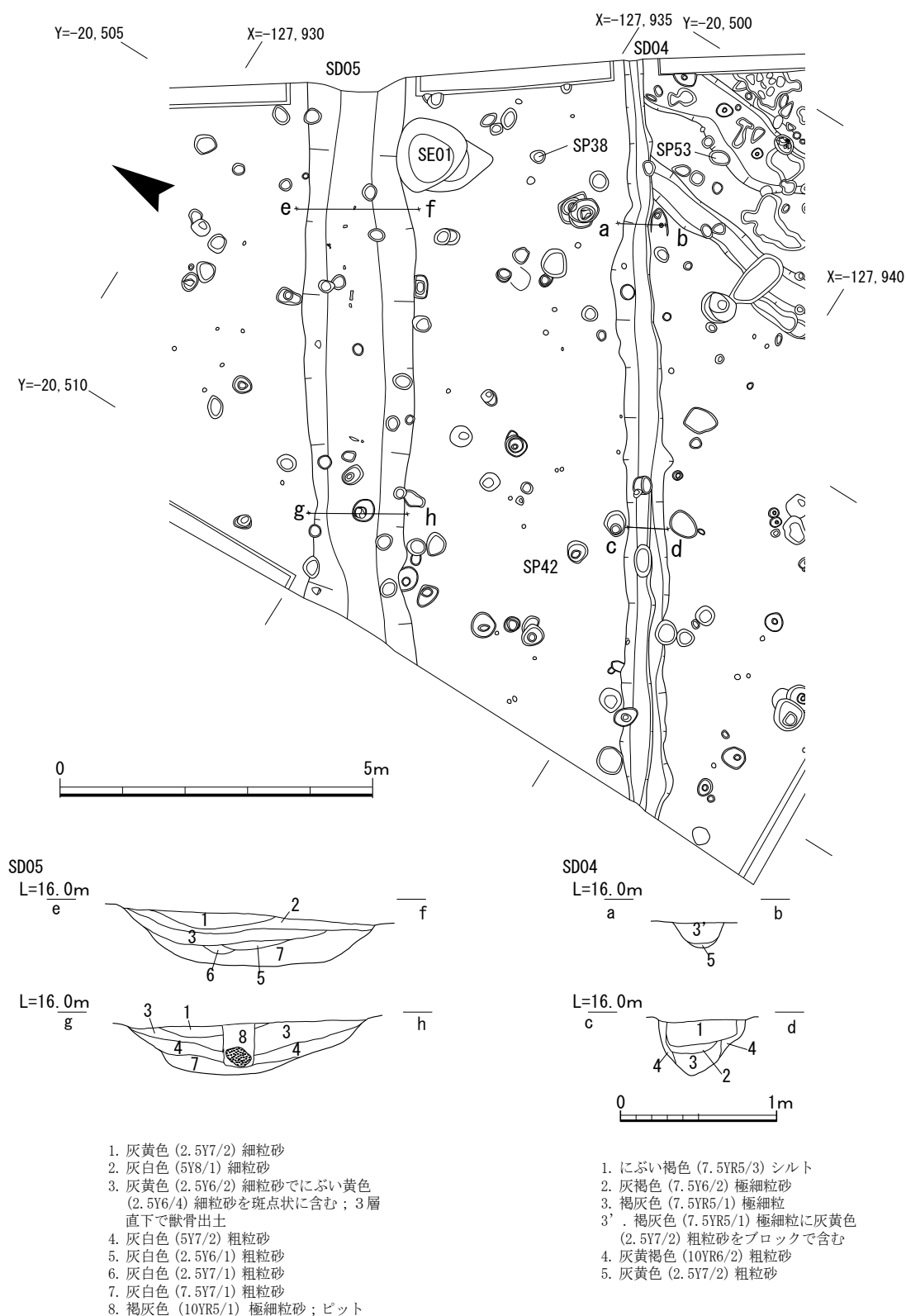
柱穴群 調査区のはほぼ全面で70基程度の柱穴を検出した。これらは後述のS D04・05の上位から掘り込まれており、後出するものである。この柱穴群では東石の残るものもあるが、柱穴列の並び関係からは掘立柱建物として復元できるものはなかった。柱穴群は基本的に調査地西半の島畑188上で検出しており、S D02の埋土を除去した底面でも数基検出している。島畑185上にはほとんど分布しない。S D02の出土遺物から島畑の年代観は12世紀後半～13世紀前半と判断され、居住区を廃して島畑を造作したものと推測される。瓦器碗(387・388)がS P42から、瓦器碗(389・390)、白磁碗(392)がS P07から、土師器台付大皿(391)がS P53から出土した。これらの年代観より12世紀前半～中葉の柱穴でと判断される。

溝S D03 S D02の東辺で検出した溝で、幅は0.55m、検出した深さは0.2mである。層位的にはS D02と重複関係を有し、後出するものである。溝S D02の上面では数条の同様の溝を確認しており、それらと同種の溝と判断する。S D02やS D02の下面で検出した溝群と同じ方向であることから耕作関連の溝と判断される。

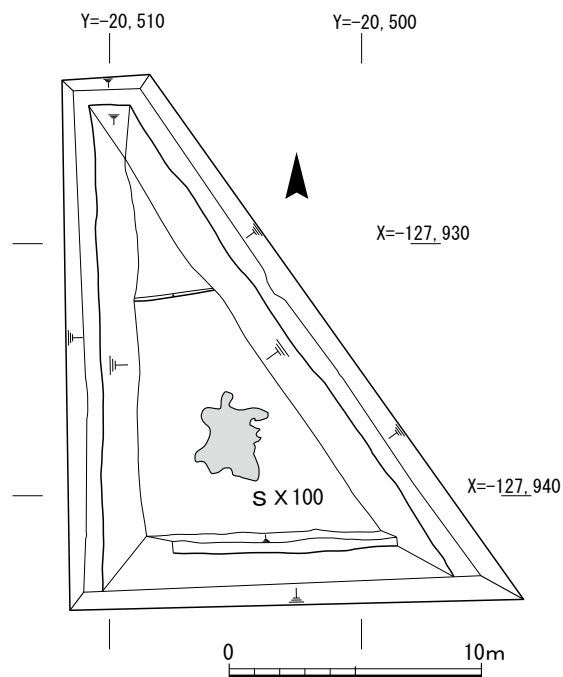
溝S D04(第118図) トレンチ中央で検出した溝で、東で35°程度北に振れている。溝の幅は0.65m、検出した深さは0.15m、検出長は12.1mである。柱穴群に切られており、柱穴に先行するものである。出土遺物には、土師器片と獣骨と推測される骨片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前期のものと判断される。

溝S D05(第118図) S D04の南側で検出した溝で、溝の幅は1.75m、検出した深さは0.4m、検出長は9.5mである。S D04に平行しており、両溝の心々距離は約4.5mを測る。柱穴群に先行するものである。

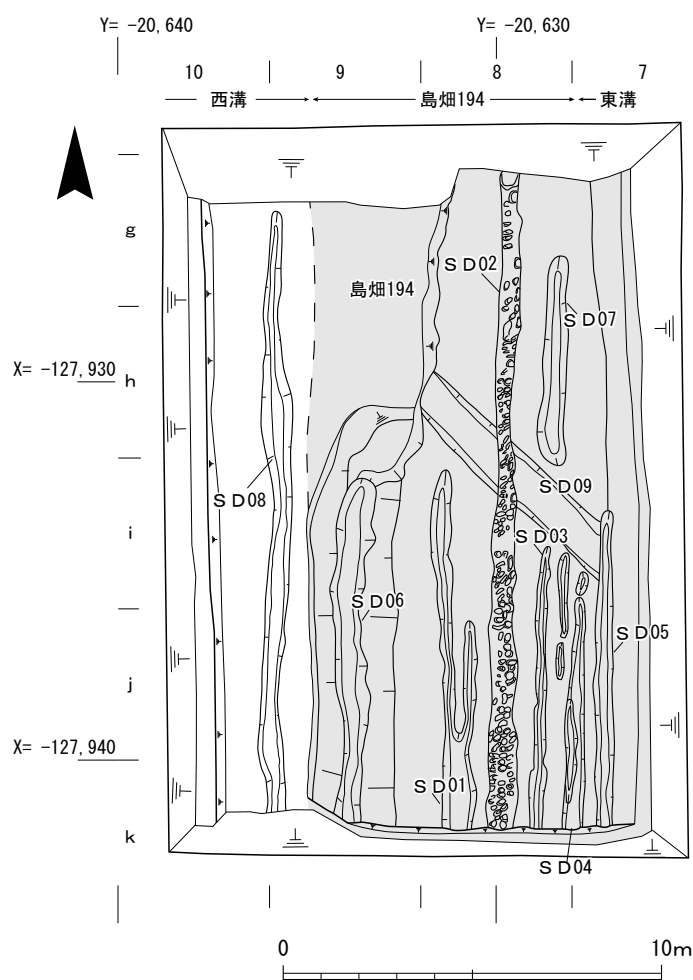
焼土S X100(第119図・写真図版第48-1・2) 第1遺構面から1.0～1.2m掘り下げた時点で、焼土の分布を認めた。S X100を検出するまでの堆積層には縄文土器細片を少量含んでいたが、焼土内からは遺物は出土しなかった。



第118図 D13区 S D04・05実測図(1/100・1/40)



第119図 D13区検出遺構平面図 第2面(1/300)



第120図 D15区検出遺構平面図(1/200)

(4)小結

D13区では多数の柱穴を検出し、中世の集落跡を確認した。国道24号の関連で調査を実施した南側のD10区でも井戸をやピット群が検出されており、この時期の集落がこの地に立地していたようである。その後、集落が廃絶した後に耕地となり、島畑が造られたものと考えられる。

(岩松 保)

10) D15区の調査

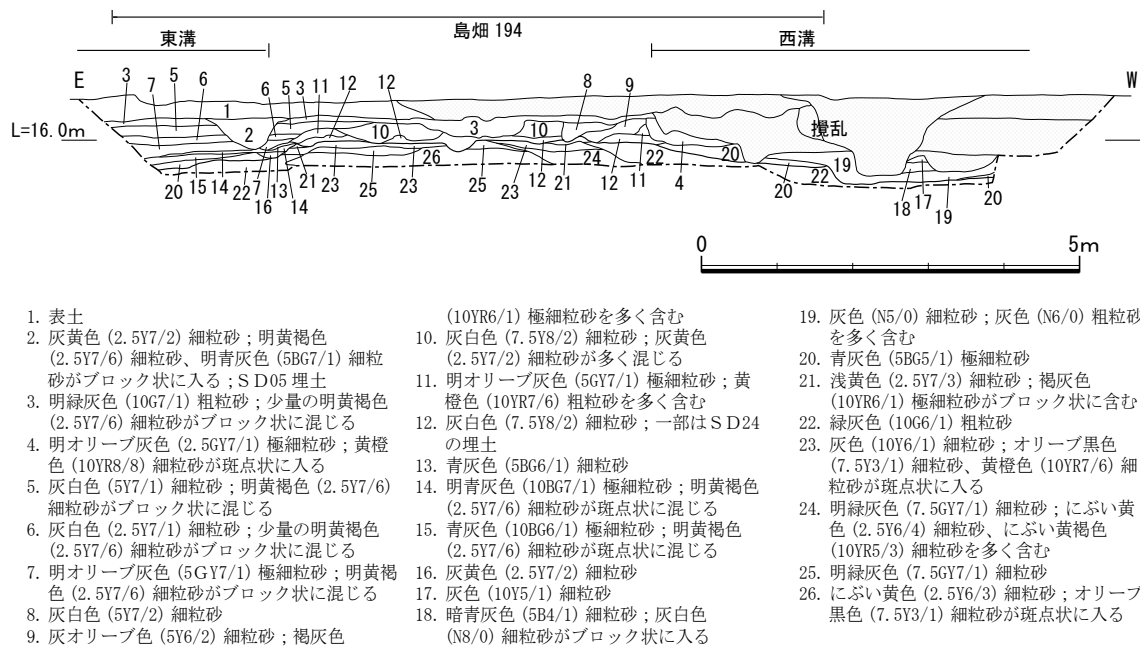
(1)調査の概要

令和2年度に第11次調査として実施した。橋脚27の建設予定地にあたり、調査区の南側では国道24号寺田拡幅事業にともなうD16区の調査を同年度に実施している。調査区の西半は、南北方向に延びる農道と水路によって削平されて

いる。検出した主な遺構は、南北方向の島畑1基と南北方向の溝1条、北西から南東にのびる溝1条である。

(2)基本層序(第121図)

調査区の西半は農道と水路により攪乱を受けている。島畑のベースと判断されるのは、21層以下の層序である。ただし、21～25層が細かく分層できることより、島畑の本体部分と島畑間の溝内の堆積土の可能性はある。21層以下が島畑本体であった段階では、14～20層が島畑間の溝内埋土である。8～13層は新たに盛り上げられた島畑で、5～7層がこの段階の島畑間の溝内堆積土と判断される。また、4層は古い段階の農道に関する攪乱と判断する。最終的には1～



第121図 D15区南壁土層図(1/100)

3層で島畑および島畑間の溝を埋めて、平坦な耕作地へと作り替えられて現在に至っている。

(3) 検出遺構(第120図)

島畑194 南北方向の島畑で、北西部分は農道と水路で削平される。検出した長さは17m、幅は8.7mある。島畑上面には、耕作溝と思われる南北方向の小溝が6条(S D01・02・03・04・05・07)ある。これらの小溝は、幅が0.3～0.8mあり、深さが0.1m程度の浅いものである。島畑上面中央の溝SD02の溝内では、耕作時の農具痕跡と考えられるくぼみを多数検出した。調査区南側のD16区では、南側の延長部にあたる島畑が検出されている。

島畑西溝 島畑194の西側で検出した島畑間の溝で、深さは0.5～0.6mある。検出幅は約3.5mであるが、調査区南側のD16区の調査成果から幅は約10mある。溝内では、南北溝S D08を検出した。埋土中より縄文土器口縁部片(第126図409)が出土した。

島畑東溝 島畑194の東側で検出した島畑間の溝で、深さは0.3～0.4mある。南側断面での検出幅約1mであるが、調査区南側のD16区の調査成果から幅は約20mある。

溝S D08 島畑の西裾部から西へ約0.6mのところ検出した島畑と併行する南北の溝で、北端は農道と水路で削平される。検出長は15.7m、幅は0.5～0.8m、深さは0.1～0.2mある。埋土中より瓦質土器の羽釜鏝部片(408)が出土した

溝S D09 調査区中央付近の島畑上で検出した北西から南東方向の溝で、検出長は6.5m、幅は1.2m、深さは0.1～0.2mある。両端は島畑間の溝で削平されており、島畑成形以前の遺構と考えられるが、出土遺物がなく時期は不明である。

(4) 小結

島畑194は、調査区内で北端は検出されず、また調査区南側のD16区では南端は検出されていない。これらの調査成果から、南北の延長は50m以上あると考えられる。溝SD08は調査区南側

のD16区では検出されておらず、D15区とD16区の間で途切れていると考えられる。(小泉裕司)

11) 出土遺物

(1) D1区(第122図316・317・322)

出土遺物には中世から近世の瓦器・土師器・陶磁器類があるが、小片のものが多く、実測できるものは2点だけである。316は瓦器碗で、島畑上の耕作溝と考えるS D01から出土した。内外面ともに摩滅を受けているが、内面のミガキがわずかに見て取れる。317は青磁菊皿で重機掘削時に出土した。322は開元通寶(621初鑄)で、S D01から出土した。

(2) D2区(第122図318～321)

D2区の調査で出土した遺物は中世から近世の瓦器・土師器・陶磁器類があり、整理コンテナ1箱に収まる量である。器表面の磨滅が進行した破片が多く、二次堆積物と判断する。

318は土師器皿で、9層から出土した。319～321は島畑東溝の10層から出土した。321の瓦器碗は内外面ともに摩滅を受けているが、内面の暗文がわずかに認められる。12世紀代。

(3) D3区

土師器や瓦器の細片が出土したが、小片のみで、実測できるものはない。(岩松 保)

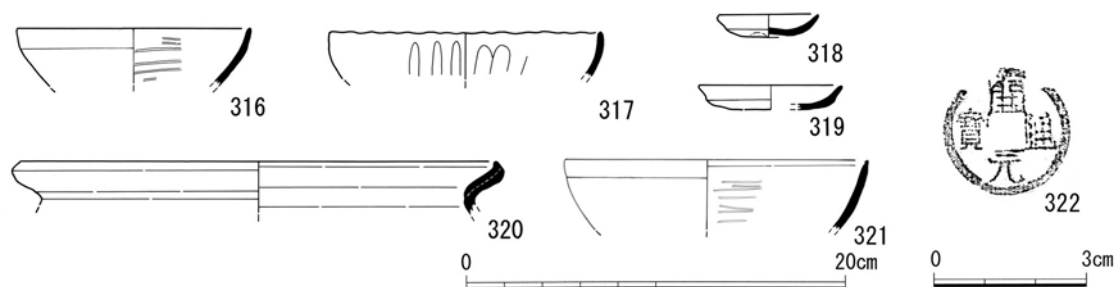
(4) D4区(第123図323～第125図365)

土器(323～361)のうち、323はN R02の2区上層(畦4第99図3層相当)から出土したもの。324～361はN R03からの出土である。324～329は壺、330～345は高杯である。346は庄内式、347～359は布留式の甕である。360は縄文晩期の突帯文土器で口縁端部にも刻みを有する。361は韓式系土器である。

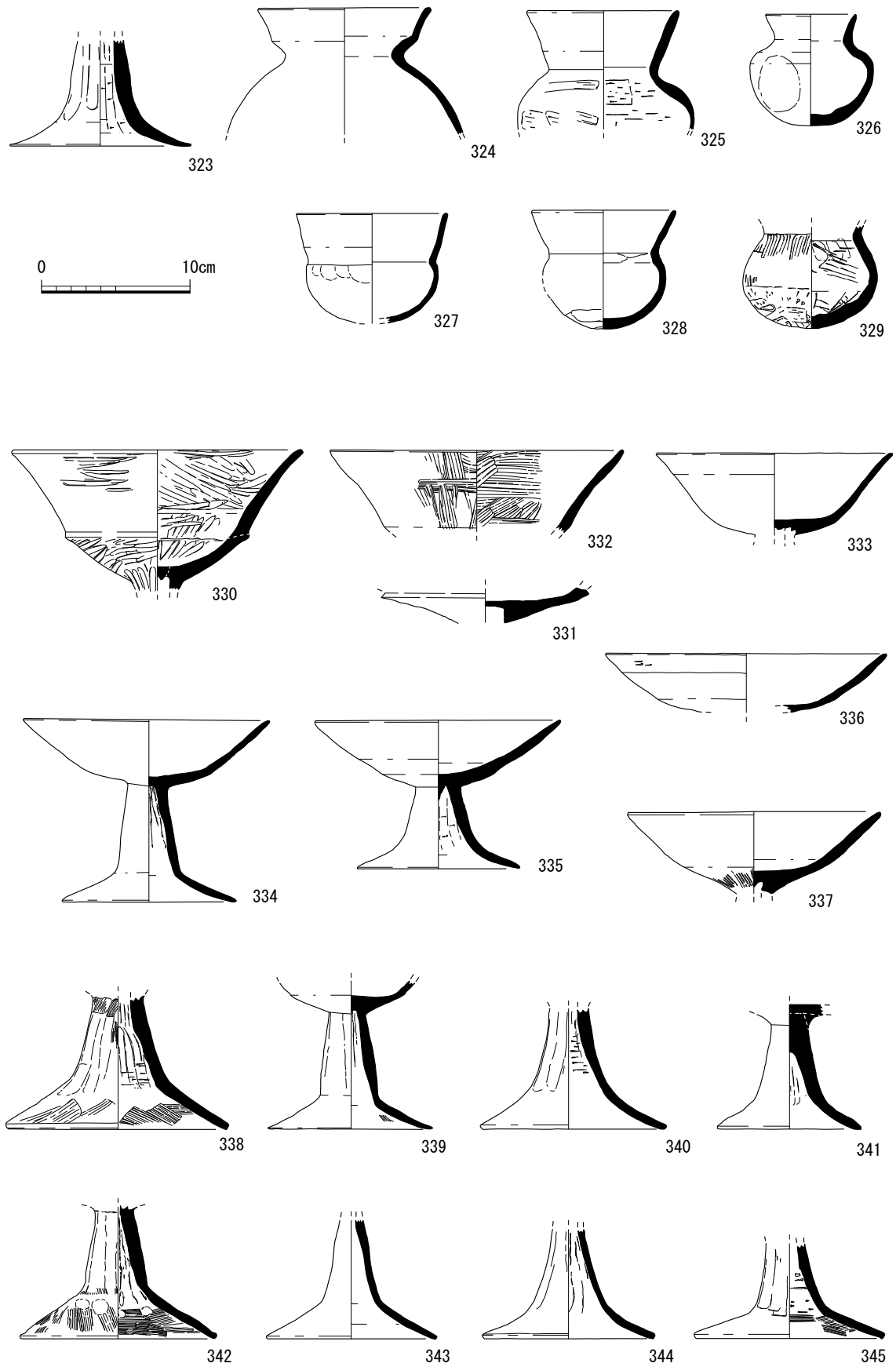
石器類(362～365)のうち362・363はN R02、364・365はN R03からの出土である。362は滑石製の有孔円盤。363・364はサヌカイト製の石鏃で弥生時代のものと見られる。礫石器(365)は砂岩製で、先端部に敲打痕がある。

(6) D5区(第125図366～372)

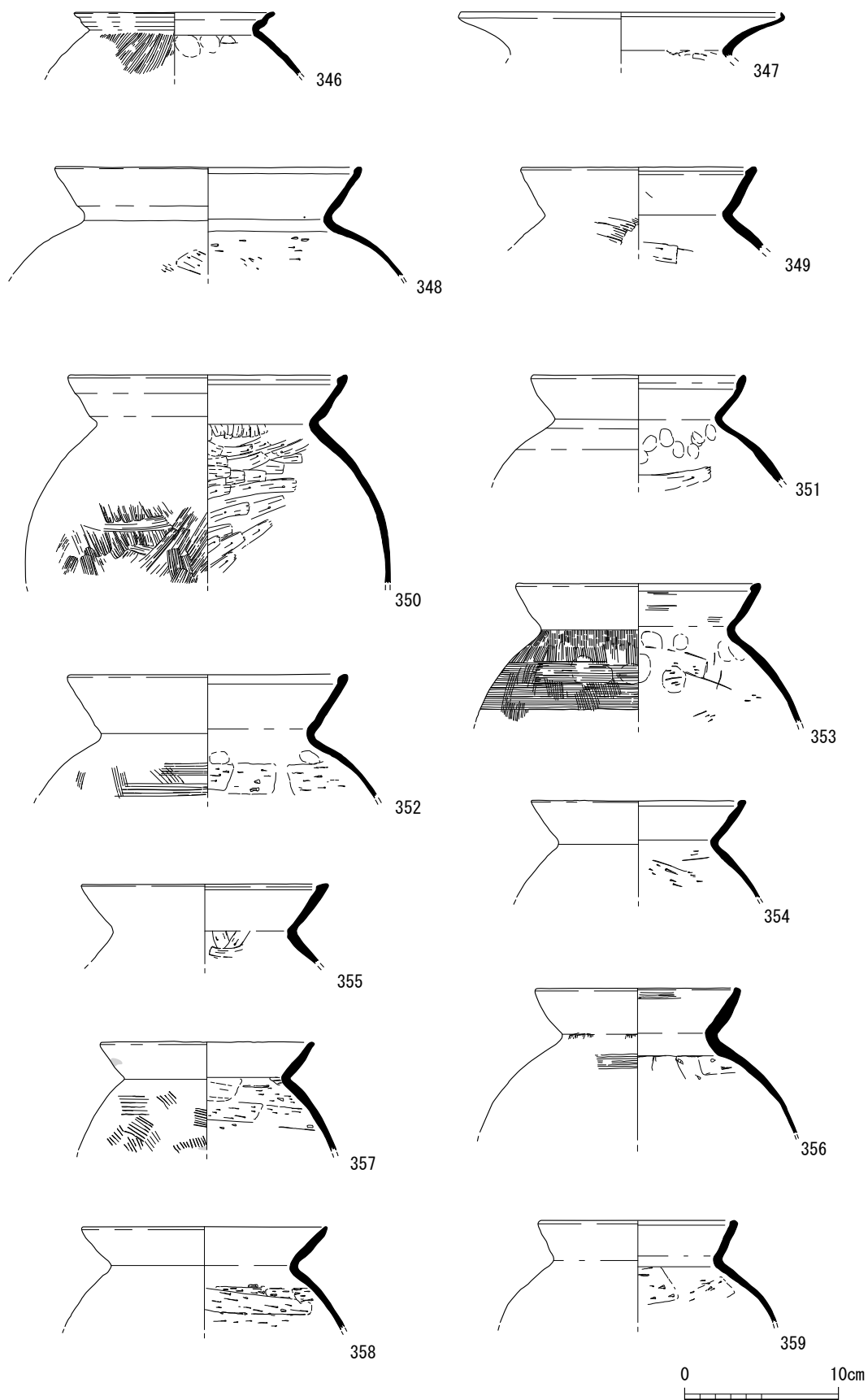
366・370は島畑間の低位部S D01から、368・372はS D02から出土したものであり、層位はいずれも北壁第30層に相当する。367・369・371は第27層上面の島畑において、遺構検出のための精査中に出土したものである。366～368は瓦器碗、369は土師器の皿である。370は信楽焼の播鉢口縁、371の陶器には内外面に自然釉のかかる。372は宋銭の政和通宝(初鑄1111年)である。



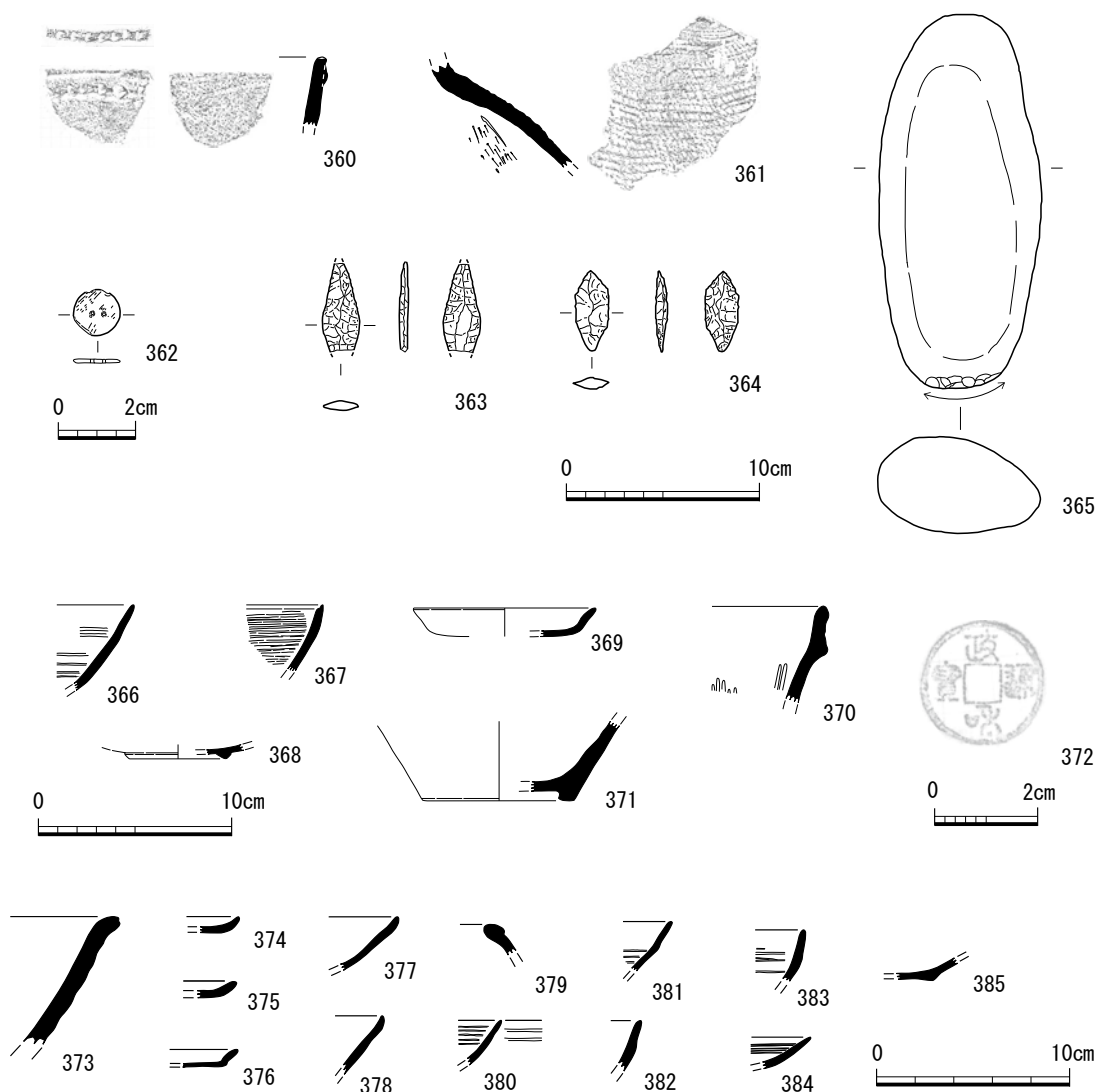
第122図 D1・2区出土遺物
315・317・322；D1区、318～321；D2区



第123図 D 4 区出土土器 1



第124図 D4区出土土器2



第125図 D4～6区出土遺物

323～365；D4区、366～372；D5区、373～385；D6区

(7) D6区(第125図373～385)

373は島畑低位部であるS D01から出土した信楽焼の鉢である。374～385は南北溝N R03からの出土である。374～376は土師器皿、377・378は同碗、379は同羽釜の口縁である。瓦器碗口縁(380～383)はいずれも口縁端部に沈線がなく、楠葉型と考えられるもの。380を除いて外面の暗文は確認できず、内面の暗文も粗である。384は皿の可能性のあるもの。高台(385)の断面形は、低い三角である。

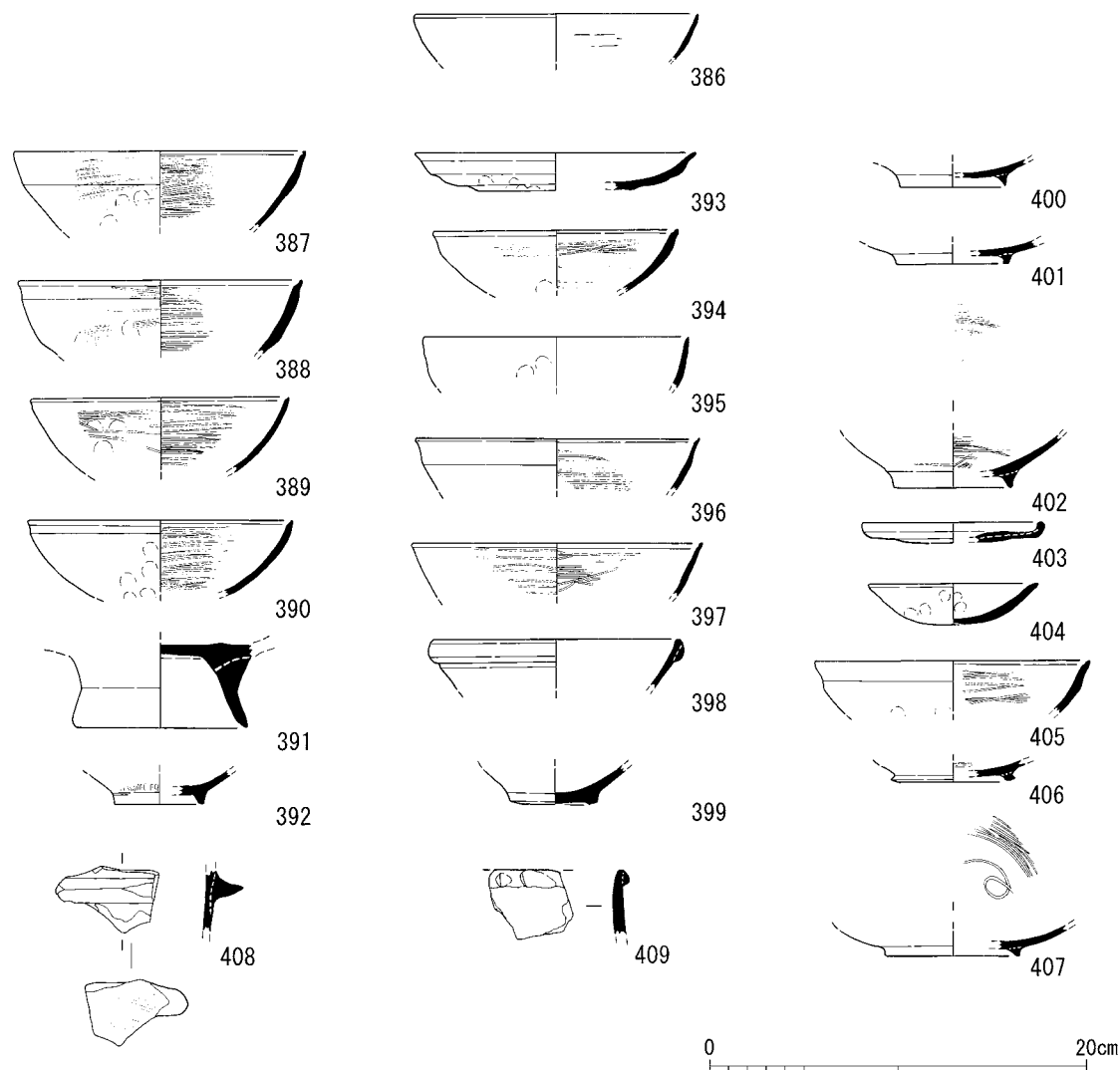
(加藤雅士)

(8) D7区(第126図386)

386は瓦器碗で、島畑西溝から出土した。内外面ともに摩滅を受けておらず、内面に暗文がわずかに見られるだけである。

(9) D13区(第126図387～407)

387～392は柱穴内から出土した遺物である。387～390は瓦器碗で、内面は比較的ミガキが認められるが、外面のミガキはわずかにしか認められない。12世紀前半～中葉。391は土師器台付



第126図 D7・13・15区出土土器
386：D7区、387～407：D13区、408・409：D15区

大皿、392は白磁碗である。

393～402は島畑間の溝SD02内から出土した遺物である。393は土師器皿で、上方外側に口縁端部を強くなでて引き出されたものである。394～397、400・401は瓦器碗で、柱穴内から出土した瓦器碗(387～390)に比べて外面のミガキは簡略化されている。403・404は土師器皿でSD02aから出土した。403はコースター形のもので、404は深手の皿である。おおむね12世紀後半～13世紀前半。405は近代の井戸であるSE01から出土した。井戸の時期を直接的に示すものではない。

(10) D15区(第126図407・408)

408は瓦質の羽釜で島畑の西側溝SD08から出土した。409は島畑西溝上面精査中に出土した縄文土器の深鉢で、口縁部突帯に刻みを有するものである。

12) D地区のまとめ

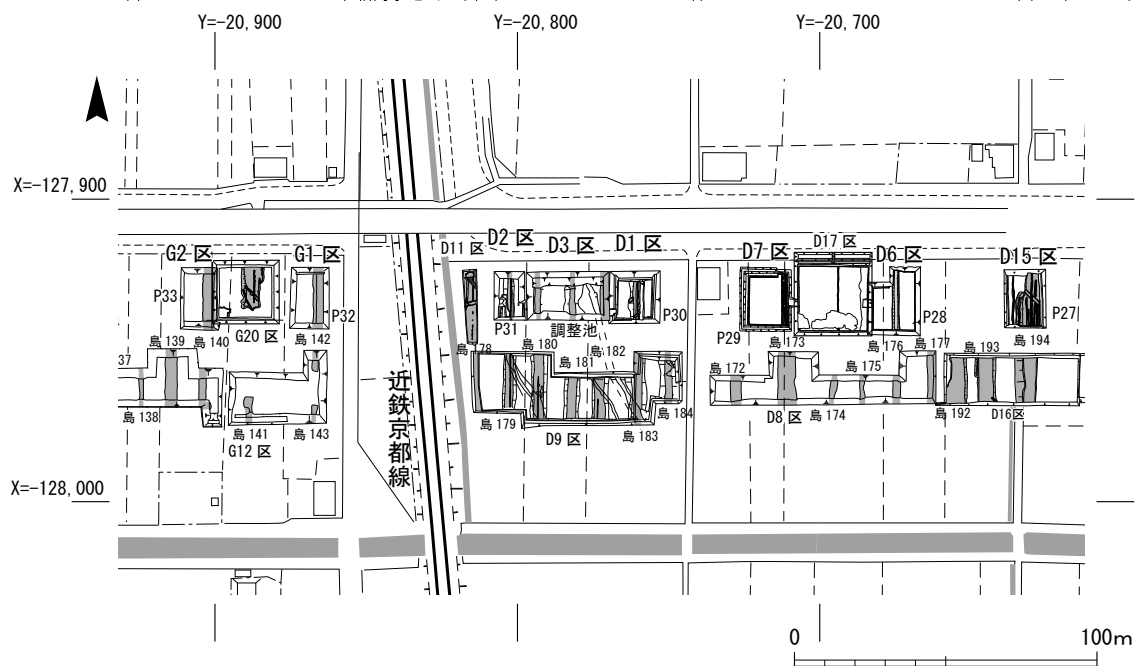
D地区では9地区で調査を実施し、それぞれの調査区で島畑を検出した。第127・128図はD地区で検出した主要な遺構を、国道24号関連調査分とあわせて図示したものである。多くの調査区

では島畑および耕作関連の遺構を確認し、そのほかD13区では中世のピット群・溝、D3・4・5・15区では自然流路を検出した。島畑の分布を見ると、D4区と南側のD12区では島畑187が不整合である。これは、D4区では調査地壁面の観察で近世の島畑の存在を確認しているが、中世段階に基盤層を掘り込んで造られたものでなく、D12区で検出した島畑とは時期を異にするからである。

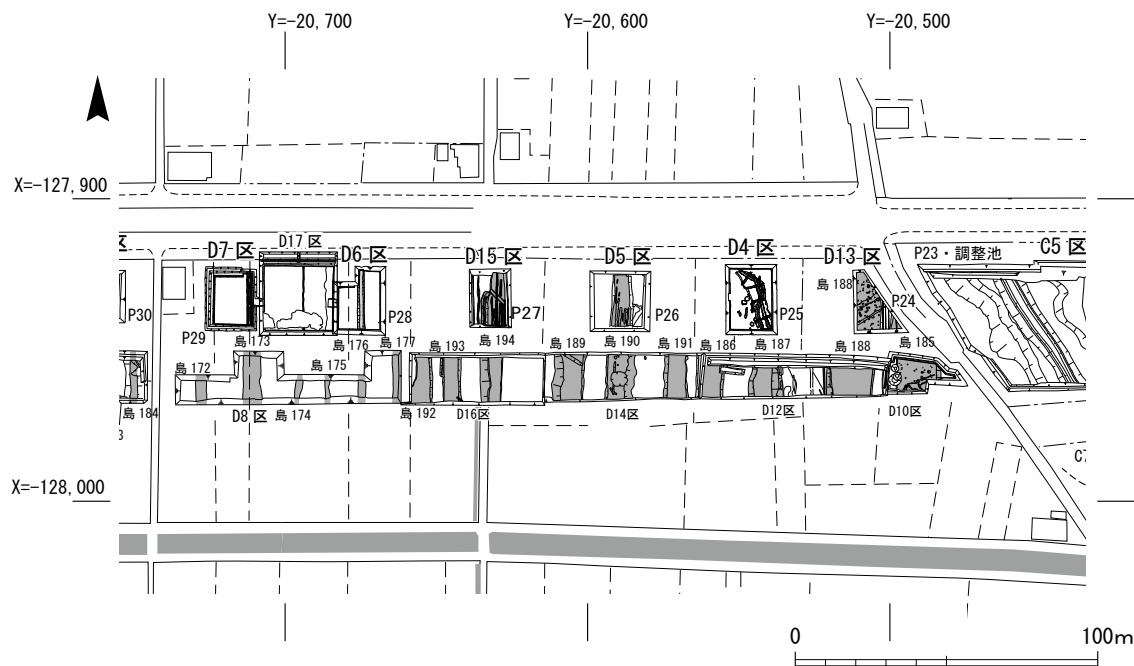
以下、時期を追ってD地区の土地利用の変遷を見ておきたい。

中世以前の遺構については顕著なものは確認できていない。D3・4・5・15区では、島畑以前の溝ないし流路を検出し、D4区の自然流路には古墳時代前期の遺物が含まれていた。D4区の溝SD01やD15区のSD09は自然のものか、人為的なものであるのか、確定はできなかったが、D地区の中では、東端のD13区以外では島畑を除いて中世以前の確実な遺構を確認できなかったことから、自然のものである可能性が高いと考える。また、各調査区で島畑調査後に断ち割りを行ったところ、厚くシルト層が堆積しているのを確認したことから、D地区のほとんどが中世以前には池沼といった水びたしの中にあつたと判断される。そういった中で、D4区では古墳時代初頭の土器を多数含む流路NR02・03を検出した。直接的な遺構は確認できなかったが、D4区の南東側、D10・13区の南側には微高地が広がり、同時期の集落が存在している可能性が高い。

中世段階になると、周辺は陸地化したようで、土地利用がはじまる。D地区の東端、D13区では中世の集落を確認した。掘立柱建物等は復原できなかったが、多数の柱穴を検出した。出土遺物から12世紀中葉頃のものだと判断されるが、D13区の南側で、国道24号関係で調査を実施したD10区では中世の井戸3基のほか、柱穴等を検出している。3基の井戸は重複していることから、比較的長期間にわたって集落が営まれたことがうかがえ、より早い段階に集落が周辺に営まれていた可能性がある。この集落は、D13・10区の南側と北側に存在したものと考えられ、古墳時代



第127図 小樋尻遺跡D地区の調査 東(1/2,500)



第128図 小樋尻遺跡D地区の調査 西(1/2,500)

前期の集落が想定した範囲と重複するものである。

13世紀頃には集落が廃せられ、一帯に島畑が造られた。以後、島畑を増改築しながら近代にいたるまで継続して用いられている。D4区は自然流路NR02・03の影響による湿地であったためか、島畑は中世段階には造られておらず、近世以降に農地化して島畑が造られた。(岩松 保)

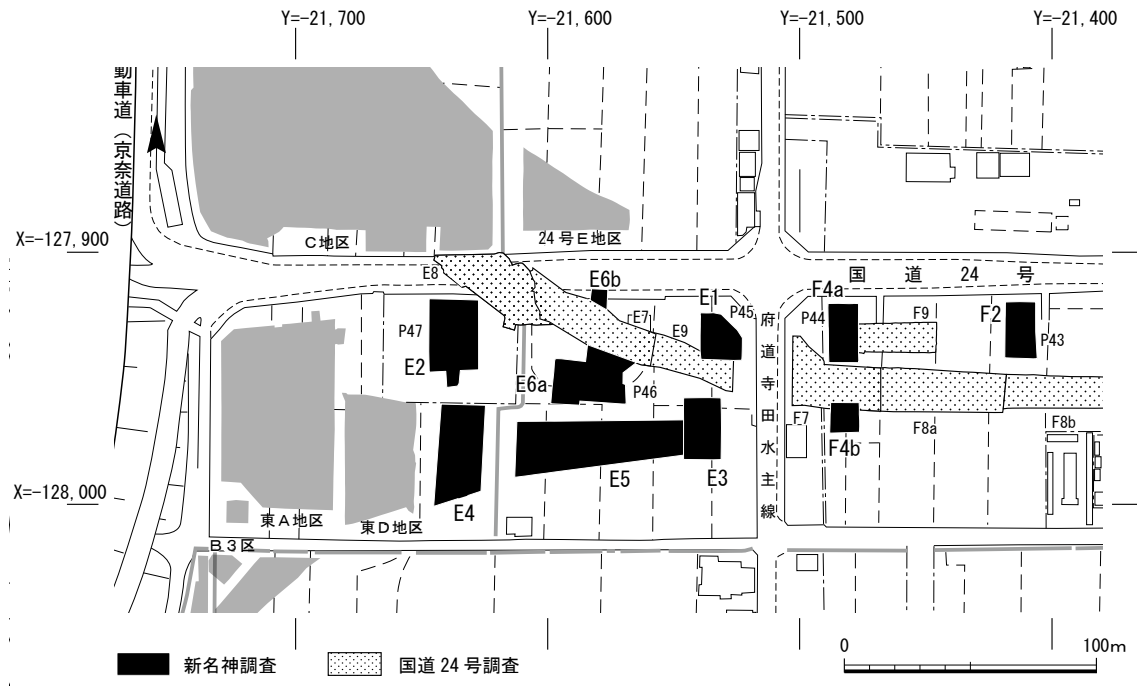
9. 水主神社東遺跡E地区の調査

1) 調査の経過

E地区は府道寺田水主線よりも西側、京奈和自動車道の間に設定した調査区である。他の調査区とは異なり、E地区に隣接しては過去に新名神城陽JCT・IC関係および国道24号拡幅関係として水主神社東遺跡と下水主遺跡で数多くの調査を実施している(第129図)。これらの調査については、水主神社東遺跡の調査は平成23年度から27年度にかけて7次にわたって、下水主遺跡の発掘調査は平成24年から令和3年度にかけて12次にわたって実施されており、多くの島畑のほか土坑・溝、古墳時代溝、奈良～平安時代の柵列・井戸・溝などを検出している。これらの調査については既に報告書を刊行している(『京都府遺跡調査報告集』第163・167・168・170・173・174・192冊)。

新名神高速道路が城陽JCT・ICから大津の間に建設される計画に基づき、平成29年度から水主神社東遺跡の調査を行った。平成29年度にはE1・3・5a区の調査を実施した。E1区、E3区は橋脚部分の調査で、E5a区は盛土部分の調査である。平成30年度はE2区、E4区、E5a・b区、平成31(令和元)年度にはE6区の調査を行った。

新名神関係の発掘調査とは別に、国道24号拡幅事業に伴う発掘調査を国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて平成31(令和元)年度～令和2年度にかけて、E7～9地区の調査を当調査研究



第129図 水主神社東遺跡E地区の調査(1/3,000)

付表8 水主神社東遺跡E地区の調査(新名神・国道24号関係)

調査区	調査回数	調査年度	関係事業	構造物等	備考
E 1	第 8 次	平成 29 年度 (2017)	新名神	P45	
E 3			新名神	橋台	
E 5			新名神	盛土部	平成 30 年度継続調査
E 2	第 11 次	平成 30 年度 (2018)	新名神	P47	
E 4			新名神	盛土部	
E 7	第 12 次	令和元年度 (平成 31) (2019)	国道 24 号	道路	
E 6	第 13 次		新名神	P46	
E 8	第 14 次	令和 2 年度 (2020)	国道 24 号	道路	
E 9			国道 24 号	道路	

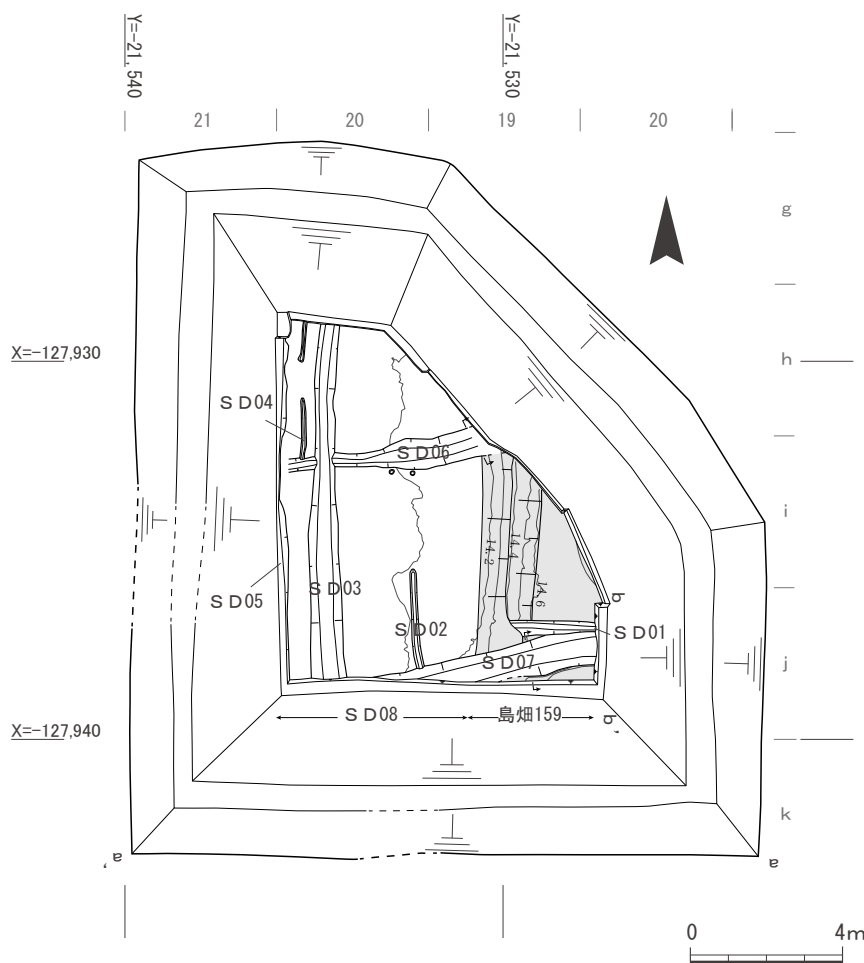
センターが実施した。この国道24号関係の発掘調査の成果については『京都府遺跡調査報告集』第195冊にまとめられている。

2) E 1 区の調査

(1) 調査の概要

新名神高速道路整備事業に伴って国道24号が拡幅される以前の旧金尾交差点の南西角に位置する調査区で、高速道路本線橋脚部分に該当する。調査区は南北6.1m、東西5.4mの大きさで台形を呈する。調査区周辺の標高は17.8m付近である。南北方向の島畑1基(島畑159)および島畑間の低位部(S D08)、島畑構築以前の東西・南北方向の溝(S D03・06・07)、島畑構築後の東西溝(S D01)を検出した。

(2) 基本層序(第131・132図)



第130図 E1区検出遺構平面図(1/200)

調査区周辺は国道24号の路面高に合わせて厚く盛土(第1層)されている。盛土に覆われる現代の旧耕作土(第2・3層)の上面は15.6m付近にある。旧耕作土下位にある第5・6層は砂質であることから洪水により形成されたとみられる。本調査区では基盤層を削り出した島畑を検出しているが、この上位の重複する新しい島畑を壁面で複数確認している。南壁の観察によると、東端部の第22層上面(標高15.2m)を最高所とする南北方向の島畑がある

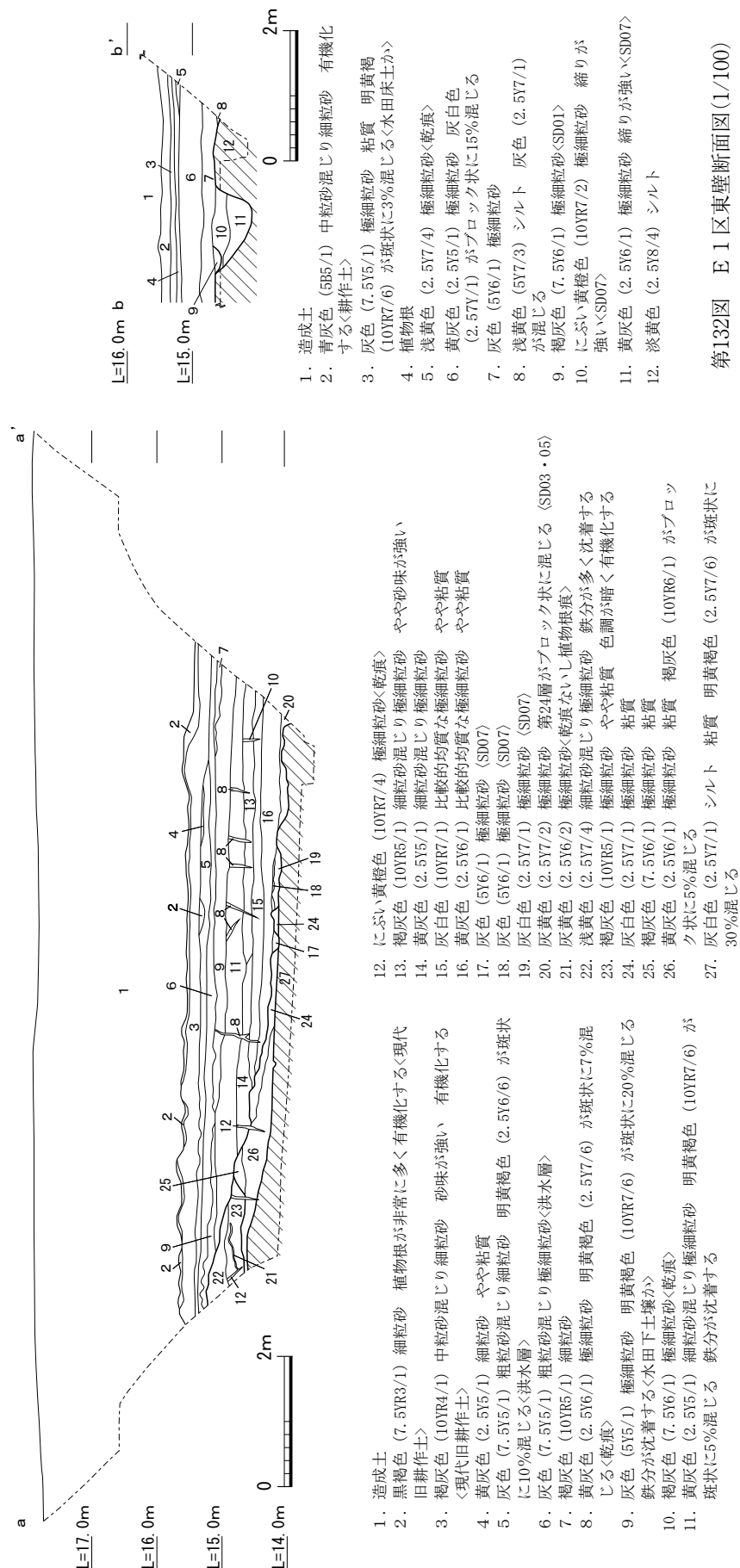
る。また、この下位にある第26層上面においては、平坦面の縁辺部に第25層により畔状の高まりを作っている。これは現在の島畑においても認められる造作であり、第26層上面についても島畑として利用されていたものと考えられる。第26層中から染付片が出土しており、近世以降の島畑と考えられる。近世島畑の低位部を埋める第11・13層中には乾痕の痕跡(第8・10層)が認められ、氾濫による影響をたびたび受けていたようである。基盤層を検出した最高所は、標高14.62mである。

(3) 検出遺構(第130図)

島畑159 調査区東端部で検出した南北方向の島畑である。基盤層を削り出して造られており、西半部のみを検出した。検出した上面の幅は1.8mで、西側の低位部(S D08)との比高は0.42mである。

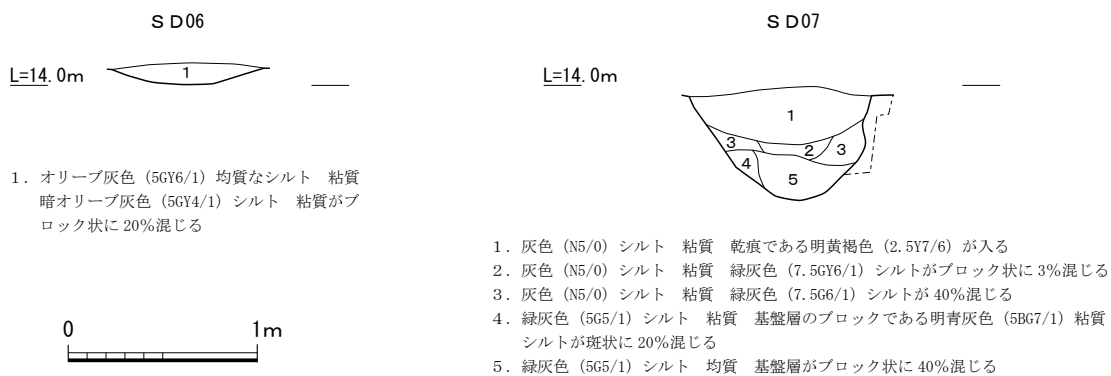
東西溝 S D01 島畑159の頂部に掘られる東西方向溝である。埋土中からは、土師器皿の破片が出土している。S D07を切り、幅0.45m、深さ0.1mと幅の狭いものであり、耕作に関わる溝と考えられる。S D01同じ規模であるS D02・S D04についても同じく、耕作に関わる溝と考えられる。

溝 S D03・06・07(第133図) 島畑が造られる以前において、基盤層に格子状に掘られた溝

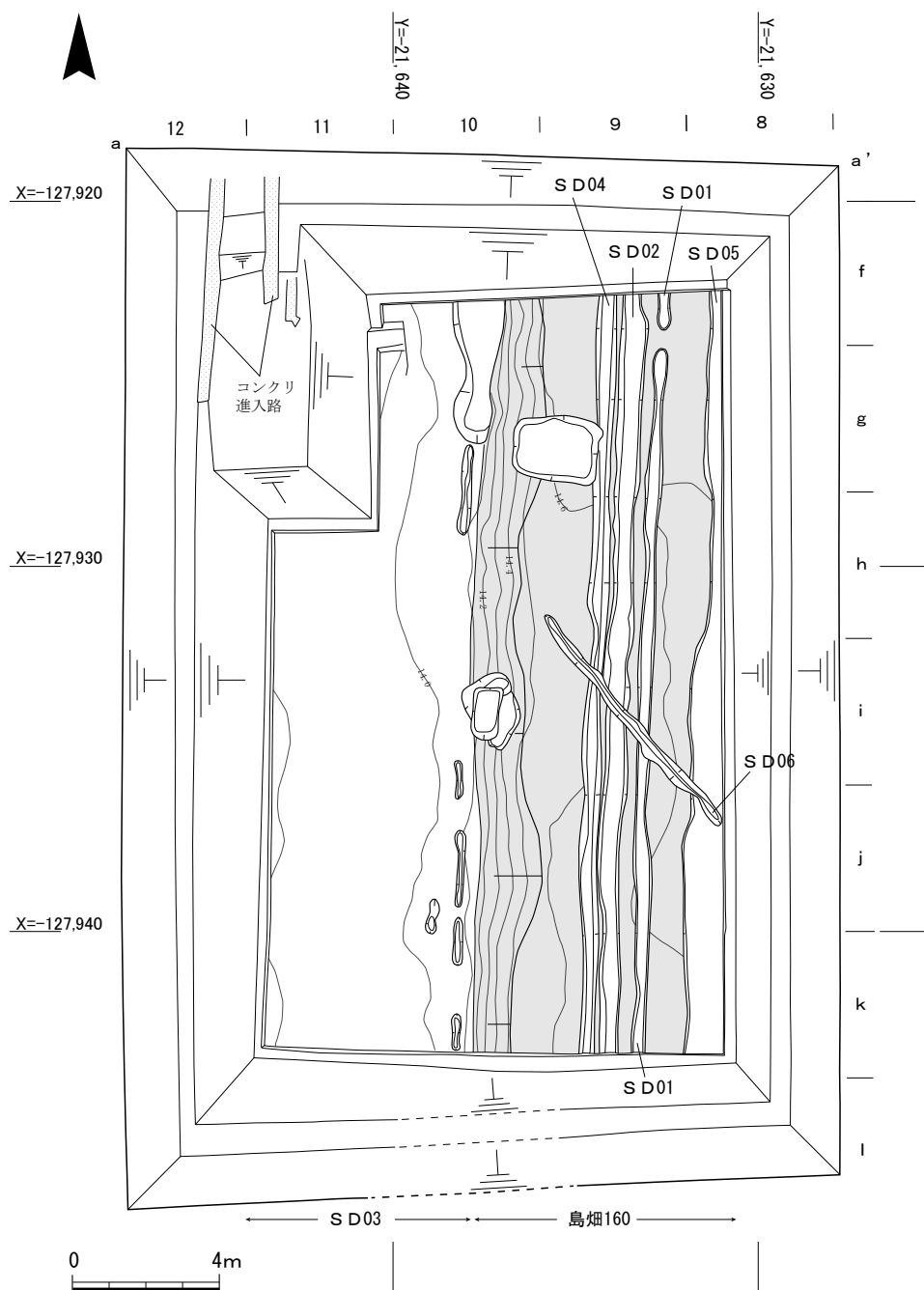


第131図 E 1 区南壁土層図(1/100)

第132図 E 1 区東壁断面図(1/100)



第133図 E 1 区溝 S D06・07土層図(1/40)



第134図 E 2 区検出遺構平面図(1/200)

である。南北方向のS D03はほぼ正方位、S D06・07については西で南に振れる。埋土の特徴はほぼ同じであり、切り合いは認められない。遺物の出土がなく時期は不明である。

(4)小結

基盤層を削り出して造られる中世段階の島畑を確認するとともに、これに累重する近世以降の島畑を確認した。また島畑構築以前の東西・南北方向の溝を確認した。

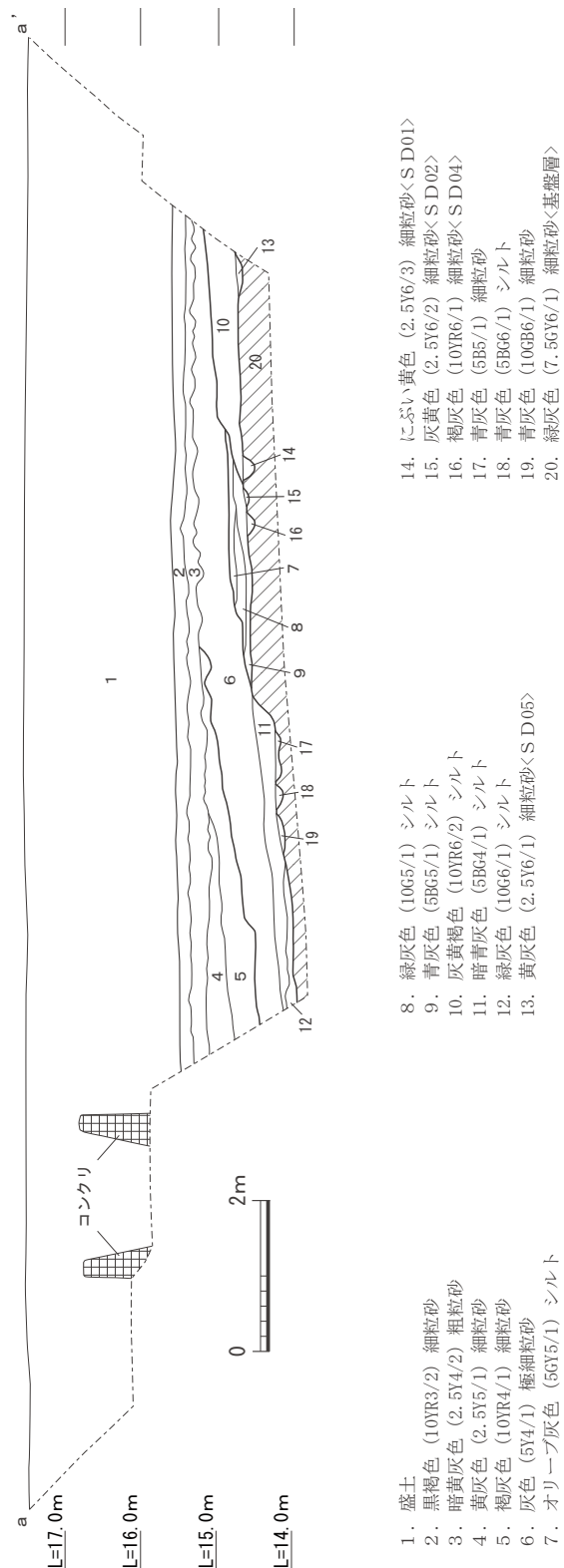
3) E 2 区の調査

(1)調査の概要

南北29.1m、東西19.5mの長方形を呈する調査区である。調査区北西端にはコンクリート製の農業用進入路があるため、調査区下端の平面形は逆L字形を呈する。調査区周辺の標高は17.5m付近である。調査の結果、南北方向の島畑1基(島畑160)および島畑間の低位部(S D03)、島畑上の耕作溝(S D01・02・04・05)を検出した。

(2)基本層序(第135図)

調査区周辺は1.9mの厚さで盛土(1層)がなされており、標高15.6m付近に盛土以前の現代の旧耕作土層(2層)がある。耕作土下の3層は粗粒砂層であり、氾濫による堆積物を耕作に伴って人為的に攪拌したものであると考えられる。この3層に覆われている6層上面の標高は15.3mであるが、西側に向かって低くなっている。6層上面の東西の比高は0.7mあり、新しい時期の南北方向の島畑と考えられる。6層より下位の11層からは近世の遺物が出土しており、近世以降の島畑であろう。基盤層(20層)を削り出して南北方向の島畑(島畑160)が造られているが、この基盤層(20層)上に7～10層を積み上げられている。積み上げた層が基盤層上の南北溝(S D



第135図 E 2 区北壁土層図(1/100)

01・02・04・05)をパックしており、基盤層を削り出して造られたものよりも新しい、南北方向の島畑と判断される。これらは1時期(9～10層を一体とする島畑)か2時期(7～9層の島畑と10層の島畑)であるのかは判断がつかなかった。

(3)検出遺構(第134図)

島畑160 調査区の東半部で検出した南北方向の島畑である。地山を削り出して造られたもので、西側に低位部(S D03)がある。島畑の東端は調査区外のため確認できず、検出した上面幅は5.7mである。

南北溝 S D01・02・04・05 島畑上面の基盤層上に掘られる南北溝である。新しい時期の島畑盛土(7～10層)にパックされる。溝の幅は0.3～1.2mとばらつきがあるものの、深さは最大でも0.3mと浅い。連続的に掘られている点からも、島畑上での耕作に関わる溝と考えられる。S D02埋土からは瓦器碗片(第155図413)が出土している。また島畑間の低位部であるS D03の底面

においても、同規模の南北溝を1条検出している。

(4)小結

地山を削り出して造られる南北方向の島畑1基と島畑間の低位部を検出した。またこの島畑の上位に重複する、2ないし3時期の島畑を検出した。

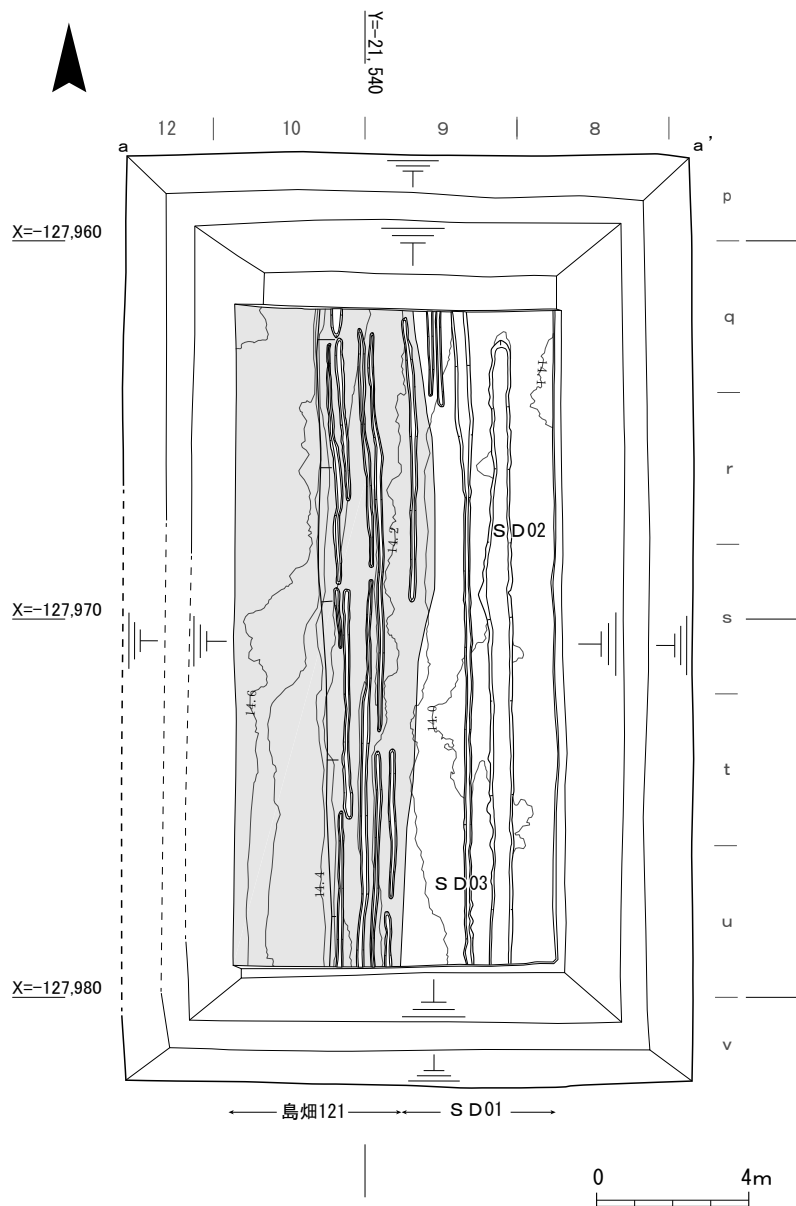
4) E 3 区の調査

(1)調査の概要

調査区の大きさは南北24.5m、東西15.0mで長方形を呈する。調査区周辺の標高は17.7m付近であり、本調査区の西側にE 5区が接する。調査の結果、南北方向の島畑1基(島畑121)および島畑間の低位部(S D01)、島畑上や低位部において耕作に関わる南北方向溝を検出した。

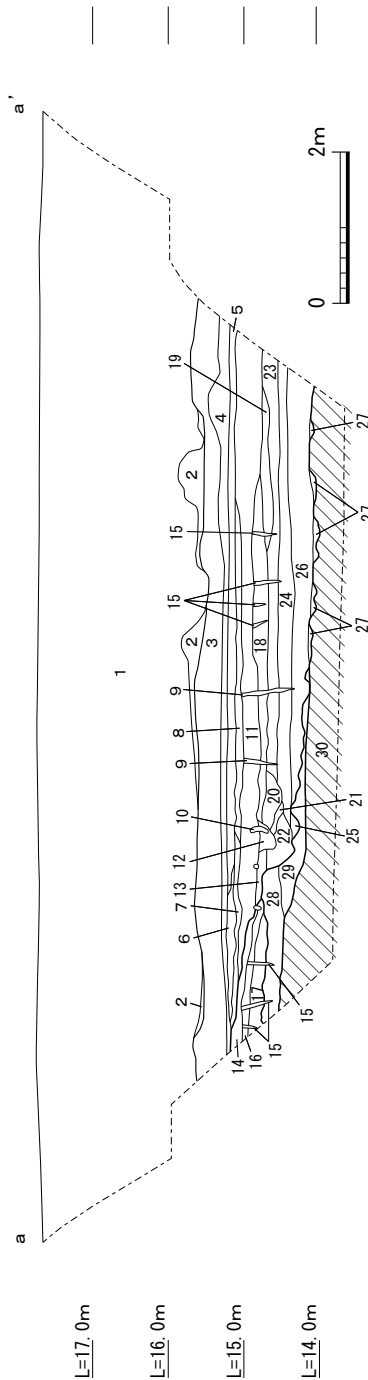
(2)基本層序(第137図)

調査区周辺は2.1mの厚さ



第136図 E 3区検出遺構平面図(1/200)

で造成がなされており、造成前の現代の旧耕作土（3層）は15.65m付近で認められる。旧耕作土下の4～6層には中粒砂や粗粒砂が混じっており、木津川の氾濫に由来する層と考えられる。4～6層中の中粒砂や粗粒砂は、部分的に固まって認められることから、氾濫による堆積層を人為的に攪拌したものとみられ、畑作などが行われていた可能性がある。調査区の西半部には基盤層上(30層)に最大0.54mの厚さで土が積まれ、14層を頂部とする南北方向の島畑を作っている。まだ28層の上面は、縁辺部が畝状の高まりを有している。E1区で検出した近世以降の島畑と同じ特徴であり、28層上面についても時期の異なる島畑として機能していたものと判断した。島畑を



北壁

- | | |
|--|--|
| 1. 造成土 | 16. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に10%混じる |
| 2. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 細粒砂 <耕作土と造成土の混じった層> | 17. 灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に3%混じる |
| 3. 褐灰色 (10YR4/1) 中粒砂混じり細粒砂<耕作土> | 18. 灰色 (5Y6/1) 極細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に40%混じる |
| 4. 黄灰色 (2.5Y6/1) 中粒砂混じり細粒砂 所により粗粒砂が塊状に混じる 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に3%混じる 砂味が強い | 19. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に10%混じる やや砂味が強い |
| 5. 灰色 (5Y6/1) 中粒砂混じり細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に7%混じる 砂味が強い | 20. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 |
| 6. 褐灰色 (10YR6/1) 粗粒砂混じり細粒砂 所により細粒砂が塊状に混じる 砂味が強い | 21. 明褐灰色 (7.5Y7/1) 極細粒砂 やや粘質 |
| 7. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に3%混じる | 22. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂 粘質 |
| 8. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に7%混じる | 23. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂 やや砂味が強い |
| 9. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂 <乾痕> | 24. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂 やや砂味が強い |
| 10. 植物根 | 25. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 粘質 |
| 11. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂 やや粘質 砂味がやや強い 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に15%混じる | 26. 灰色 (5Y4/1) 極細粒砂 粘質 色調が暗く有機化する |
| 12. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂 やや粘質 | 27. 灰色 (5Y6/1) 極細粒砂 基盤層のブロックが混じる |
| 13. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂 | 28. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂 基盤層由来の灰白色 (2.5Y5/1) がブロック状に混じる 色調がやや暗く有機化する |
| 14. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に40%混じる | 29. 灰白色 (7.5Y7/2) シルト 粘質 基盤層由来の灰白色 (2.5Y6/1) がブロック状に混じる |
| 15. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂<乾痕> | 30. 淡黄色 (2.5Y8/3) シルト 粘質 |

第137図 E3区北壁土層図(1/100)

埋める堆積土中には乾痕が形成されている。重機掘削中には、乾痕が平面的に網状を呈する状況を確認している。北壁の観察によると乾痕の上端と面を揃えているのは、それぞれ11・16・18層の上面であり、乾痕の形成は少なくとも3時期に及ぶものとみられる。基盤層を検出した最高所の標高は14.54mである。

(3) 検出遺構(第136図)

島畑121 調査区の西半部で検出した島畑である。南北方向のもので、地山を削り出して造られる。西半部はE5区において検出しており、島畑上端の幅は8.5mである。東側で検出した島畑間の低位部(SD01)との比高は0.34mである。

南北溝SD02・03 島畑間の低位部に掘られた南北方向の溝である。SD02は幅0.5m、深さ0.2mで、SD03は幅0.15mで深さ0.1mである。島畑間の低位部においては、調査区北辺のSD03の西側にあたる部分でも幅の狭い南北溝を検出したほか、島畑121の東斜面にあたる部分でも幅0.15m、深さ0.2mと幅の狭い南北方向の溝を複数検出している。幅が狭く連続して掘られている点から、島畑上や低位部での耕作に関わる溝であろう。

(4) 小結

地山を削り出して造られる南北方向の島畑1基と島畑間の低位部を検出するとともに、耕作に関わる溝を検出した。またこの島畑の上位に重複する、2時期の島畑を検出した。

5) E4区の調査

(1) 調査の概要

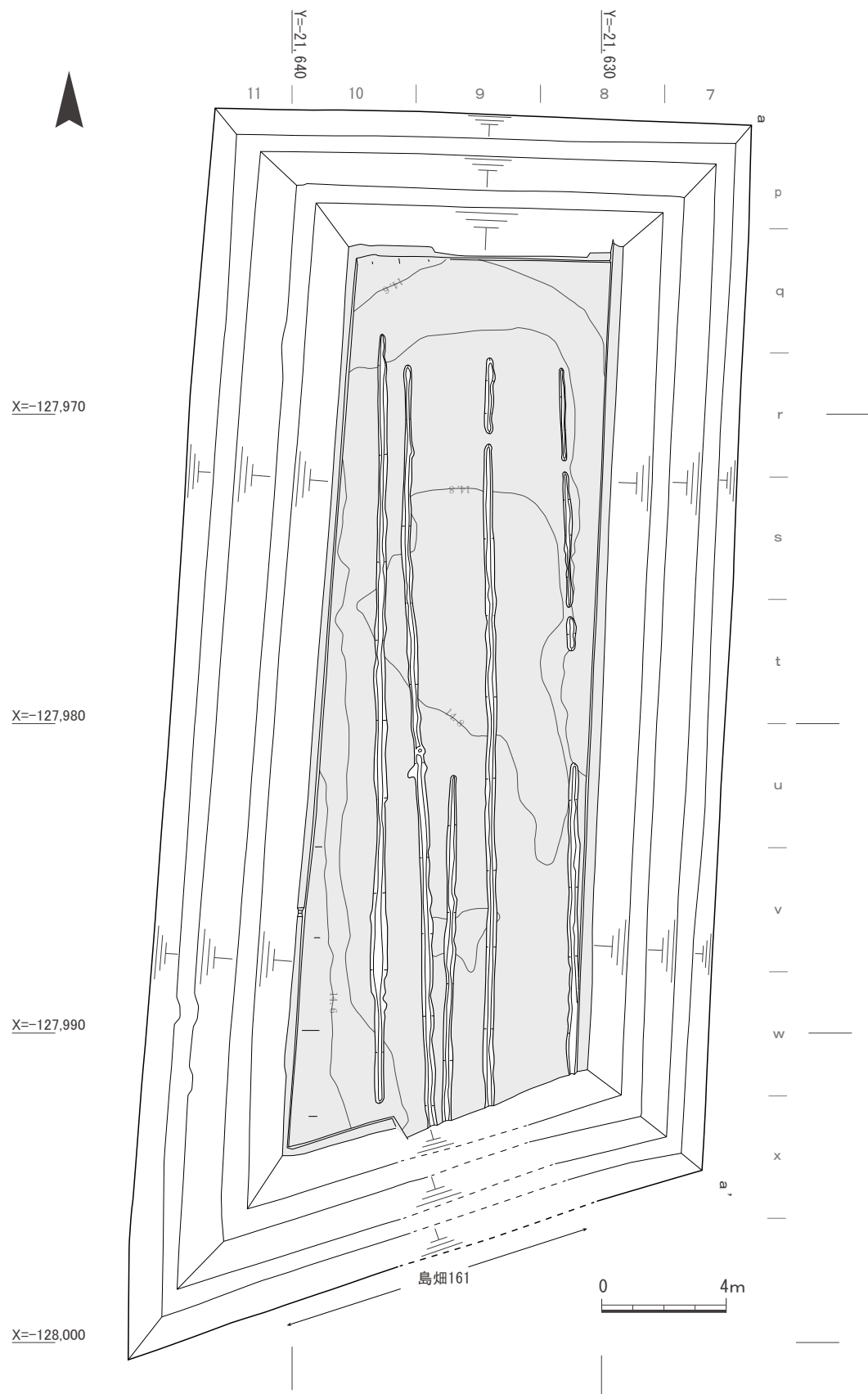
調査区の大きさは東西17.4m、南北40.6mを測る。南北に長い台形を呈する調査区である。調査地周辺の地盤高は18.1m付近である。調査の結果、南北方向の島畑1基(島畑161)と島畑上面で耕作に関わる溝を検出した。

(2) 基本層序(第139図)

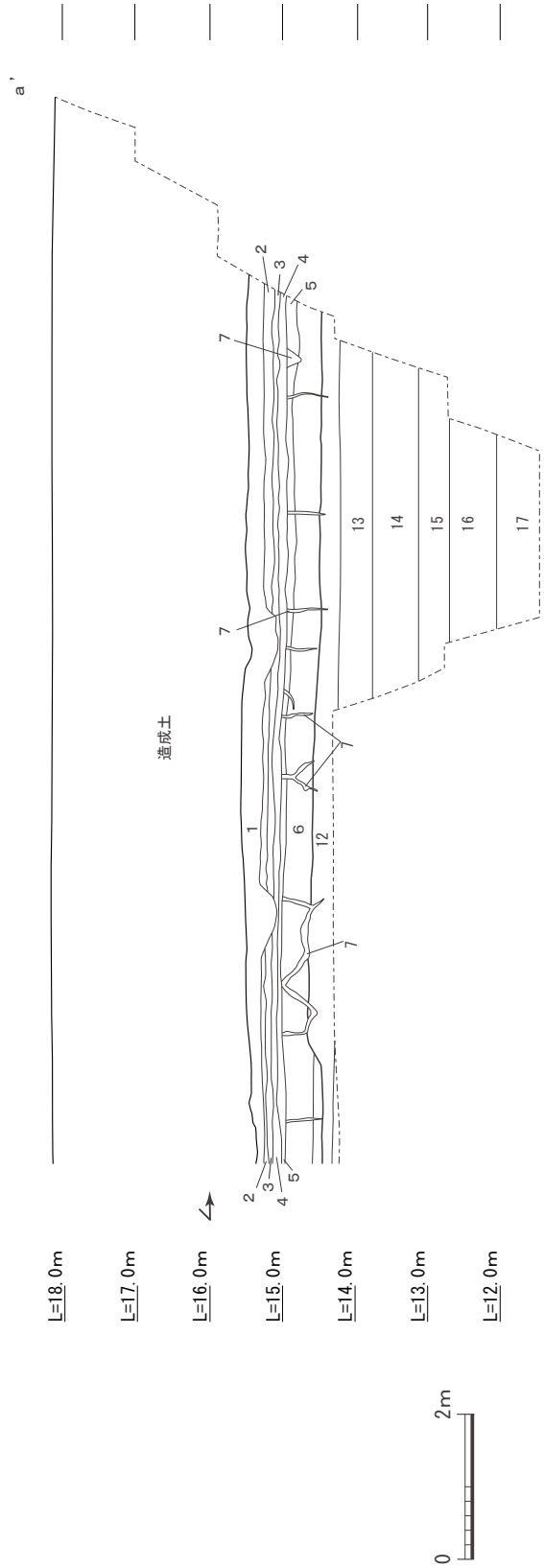
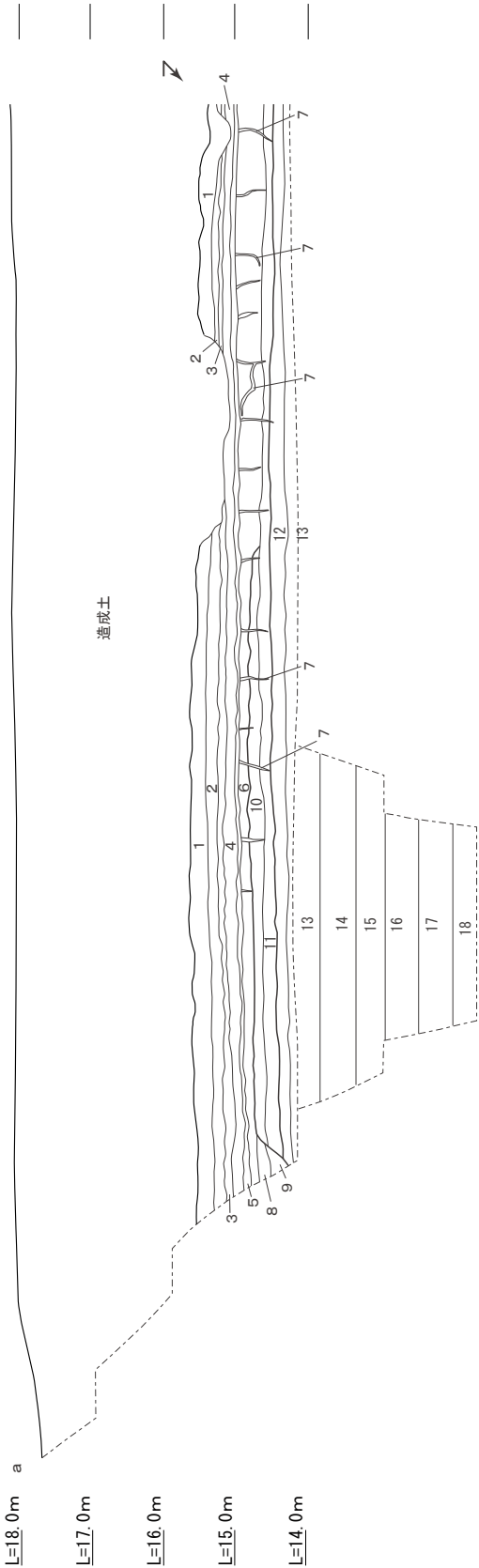
調査地周辺は約2.5mの厚さで造成がなされており、造成以前の耕作土は標高15.6m付近である。調査区東壁の観察では、旧表土下0.8mにある6層が有機化している状況が確認できる。乾痕が6層上面から入り込んでおり、島畑間の低位部が埋没(9・10層)後に耕作がなされていた痕跡と考えられる。基盤層(13層)は14.4m付近で検出しているが、基盤層上にはやや有機化した11・12層がある。13層上面で南北方向の溝5条を平面的に検出しており、11・12層については最初に造られた島畑よりも新しく積み上げられた土であると判断される。基盤層は洪水性堆積により形成された層であり、標高12.7mの17層以下は湖沼性の堆積である。

(3) 検出遺構(第138・140図)

島畑161 南北方向の島畑である。調査区の北端部および南西端部において、島畑の平坦面から側面へといった傾斜変換点を検出しており、調査区内の全体が島畑頂部の平坦面にあたる。基盤層を削り出して造られた島畑で、島畑頂部において南北方向の溝を5条(SD01～06)検出している(第140図)。溝の幅は0.22～0.32m、深さ0.06～0.12m。幅の狭い溝が横位に連続的に掘られており、島畑上での耕作に関わる溝と考えられる。

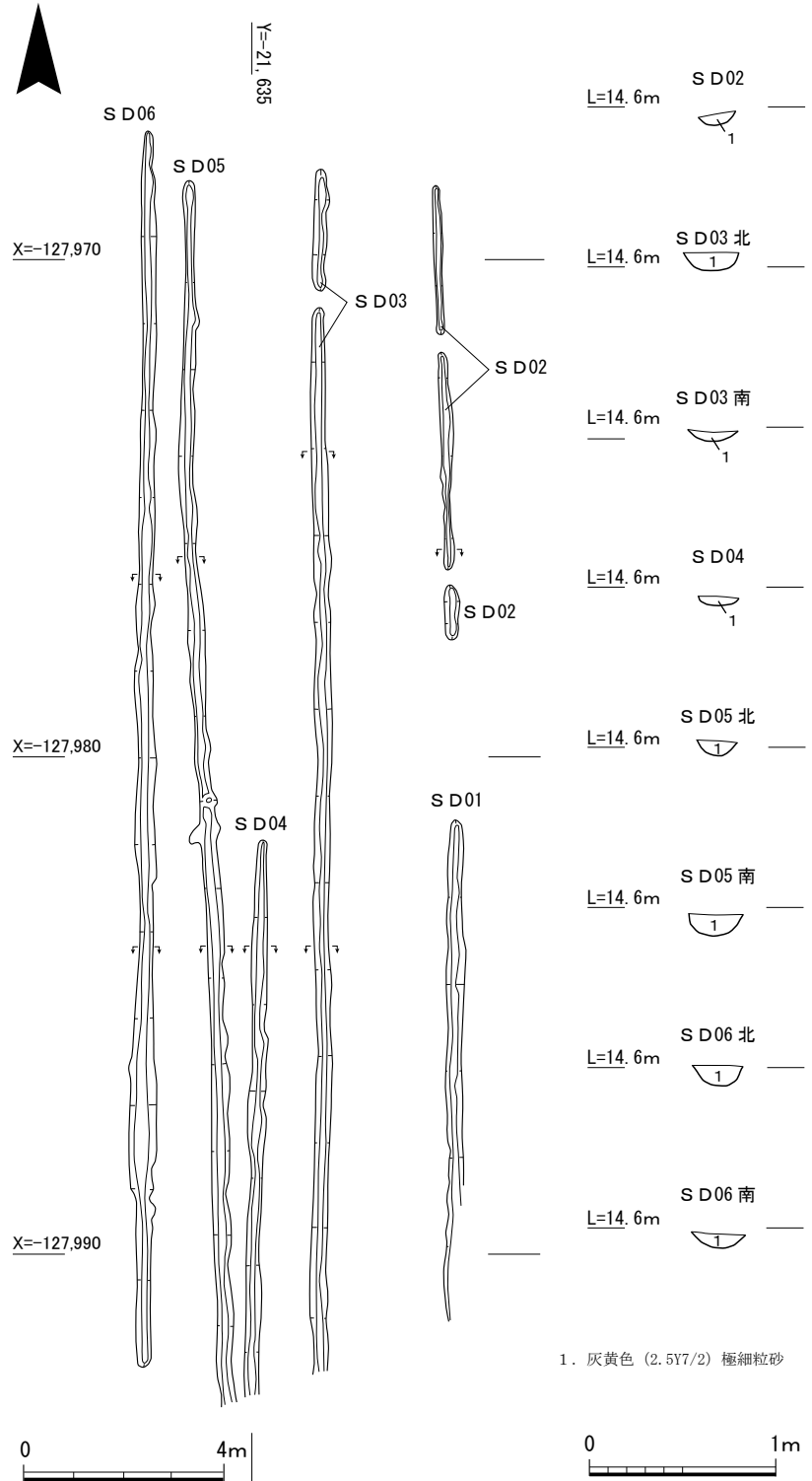


第138図 E 4 区検出遺構平面図(1/200)



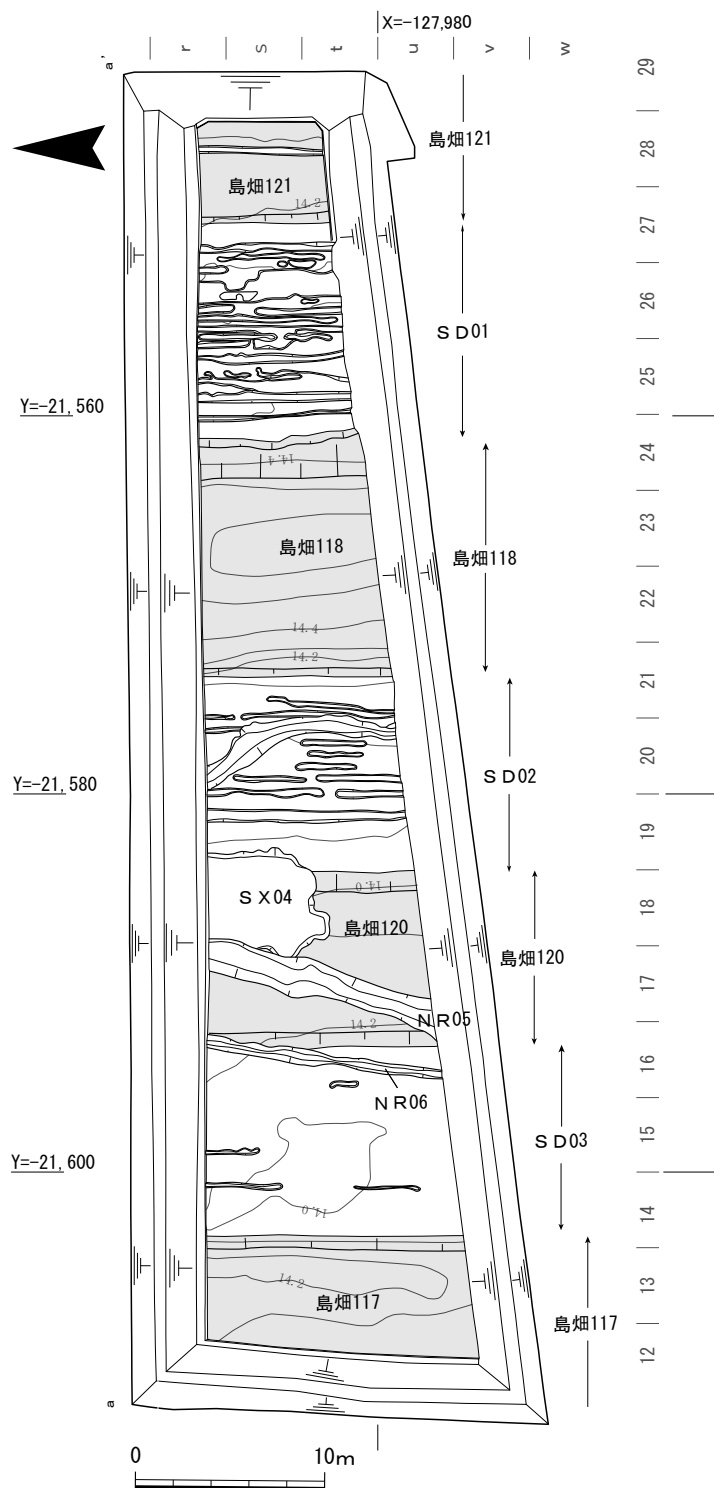
11. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 第10層よりも色調が暗く有機化する (島畑)
12. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト 径0.5cm大の鉄分班が40%混じる 色調が暗く有機化する
13. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト やや粘質 径0.5cm大の鉄分班が30%混じる
14. 灰白色 (5Y7/2) シルト 粘質 径0.5cm大の鉄分班が30%混じる
15. 浅黄色 (2.5Y7/4) シルト 径0.5~1cm大の鉄分班が40%混じる
16. 褐灰色 (10YR6/1) シルト (湖沼性堆積)
17. 淡黄色 (5Y8/4) 均質な極細粒砂
18. 灰色 (5Y7/1) 均質な極細粒砂 (湖沼性堆積)

第139図 E 4 区東壁土層図 (1/100)



1. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混じり極細粒砂 有機化する 砂味が強い (旧耕作土)
2. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂混じり極細粒砂 径1cm大の鉄分班が1%混じる
3. 灰黄褐色 (10YR5/1) 極細粒砂 マンガンが沈着する
4. 灰黄褐色 (10YR6/2) 極細粒砂 径1cm大の鉄分班が15%混じる マンガンが沈着する
5. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂 径1cm大の鉄分班が15%混じる
6. 灰白色 (7.5Y7/4) 極細粒砂 色調が暗く有機化する
7. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂 (乾痕)
8. 灰色 (5Y6/1) シルト 均質 やや粘質
9. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
10. 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂 色調が暗く有機化する (島畑)

第140図 E 4 区溝 S D06・07平・断面図 (1/150・1/40)



第141図 E5区検出遺構平面図(1/400)

畑を平面的に検出した。

(3) 検出遺構(第141・144図)

南北方向の島畑を4基検出し、それぞれの島畑間には低位部(S D01~03)が伴う。いずれも基盤層を削り出して造られたものである。

(4) 小結

南北方向の島畑の北辺を検出しており、一町内の島畑配置が南北方向の島畑を2列に配するものであることを確認した。

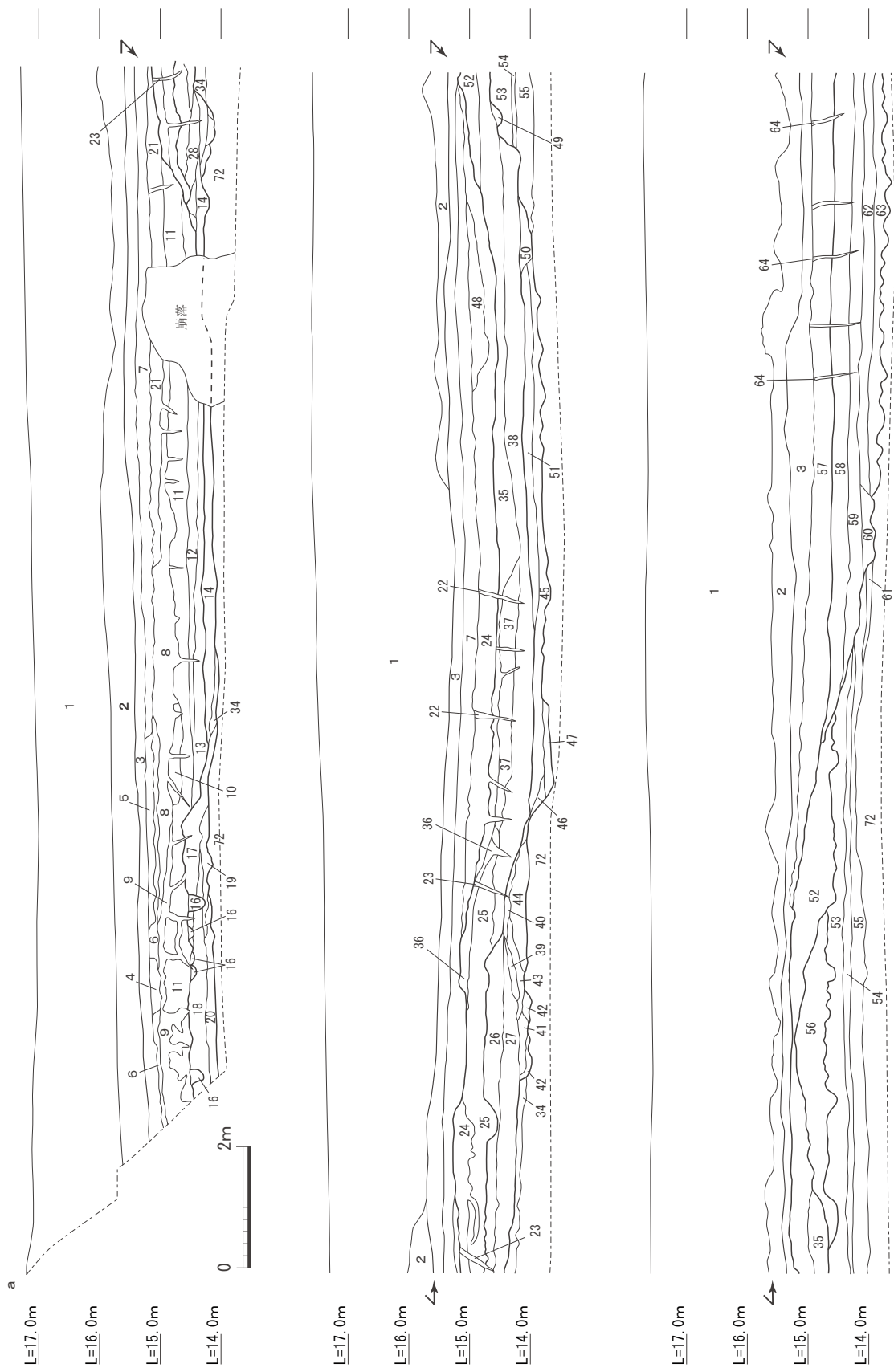
6) E5区の調査

(1) 調査の概要

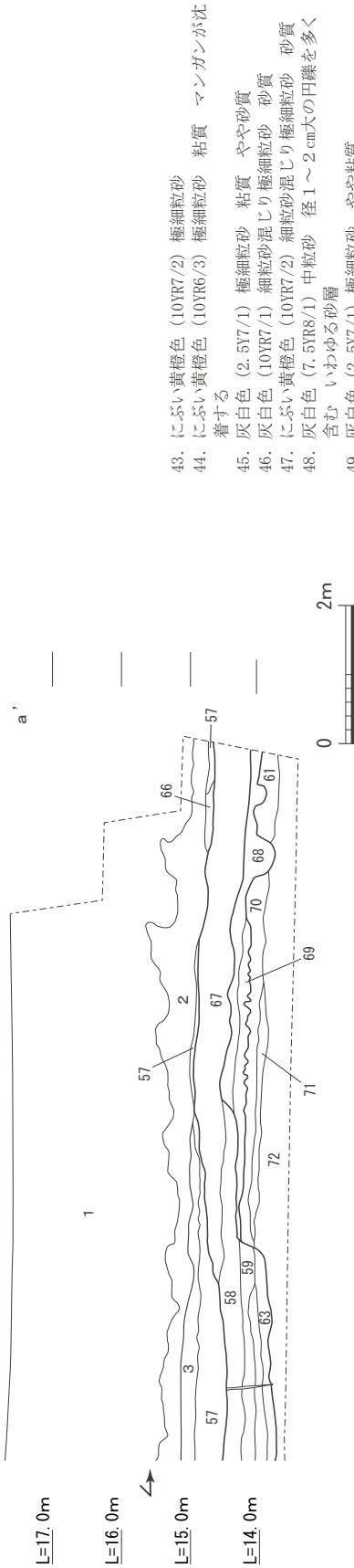
調査区の大きさは東西17.4m、南北40.6mを測る。東西に長い調査区で、東辺はE3区に接する。調査区の西辺は東辺に比べて長く、平面形は台形を呈する。調査区周辺の標高は17.2m周辺である。調査の結果、南北方向の島畑4基(島畑117・118・120・121)、島畑間の低位部(S D01~03)、自然流路(N R05・06)を検出した。

(2) 基本層序(第142・143図)

調査地周辺は造成がなされており、造成土の厚さは約1.6mある。造成前の現代の耕作土上面の標高は15.3~15.5mである。標高15m付近に高まりが3か所あり、東から順に67層、52層、24層が頂部に積まれている。近世以降に造られた南北方向の島畑であると考えられる。また52層と24層の下位には、56層と26層の高まりがあり時期の異なる島畑と考えられる。基盤層は標高14.2mで検出しており、基盤層を削り出して造られた中世島



第142図 E 5 区北壁土層図 1 (1/100)



1. 造成土
2. 造成土と旧耕作土の混じった層
3. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂混じり極細粒砂 砂質で有機化する<旧耕作土>
4. 灰黄色 (2.5Y7/2) 礫混じり極細粒砂 いわゆる砂層流水による層
5. 灰白色 (5Y5/2) 礫混じり極細粒砂
6. 黄灰色 (2.5Y6/1) 均質なシルト 粘質
7. 黄灰色 (2.5Y6/2) シルト 径1~2cm大の礫を少量含む
8. 黄灰色 (10YR6/2) 均質なシルト 粘質 径0.5~1cm大の鉄分班が30%混じる
9. 褐灰色 (10YR6/2) 均質なシルト 粘質 径1cm大の鉄分班が50%混じる
10. 黄灰色 (2.5Y6/2) 極細粒砂
11. 灰色 (7.5Y6/1) シルト やや砂質 径0.5cm大の鉄分班が15%混じる
12. 灰白色 (5Y7/2) シルト やや砂質
13. にぶい黄褐色 (10YR7/2) シルト やや砂質 径0.5cm大の鉄分班が10%混じる
14. 黄灰色 (2.5Y6/1) 均質なシルト 粘質
16. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂<耕作溝>
17. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 均質な極細粒砂 粘質 有機化する
18. 黄灰褐色 (10YR/6/2) 均質な極細粒砂
19. にぶい黄褐色 (10YR/2) 均質なシルト マンガン及び鉄分が沈着する
20. 灰白色 (10YR7/1) 均質なシルト 粘質 マンガン及び鉄分が沈着する
21. 灰白色 (5Y6/1) 均質な極細粒砂
22. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂<乾痕>
23. 淡黄色 (2.5Y8/4) 極細粒砂<乾痕>
24. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂 やや砂質 径1cm大の鉄分沈着班が50%混じる
25. 灰白色 (2.5Y7/1) 均質な極細粒砂
26. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 均質なシルト 有機化するか
27. 淡黄色 (2.5Y8/3) 均質なシルト マンガンが沈着する
28. 灰白色 (10YR7/1) 均質な極細粒砂 やや砂質
32. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 径0.2cm大の炭化物を多く含む
33. 灰白色 (2.5Y8/2) シルト 第31層のブロックが4%混じる
34. にぶい黄褐色 (10YR6/3) シルト
35. 灰黄色 (2.5Y6/2) 均質な極細粒砂 粘質 やや砂質
36. 灰白色 (2.5Y7/1) 均質な極細粒砂 鉄分班が30%混じる
37. 褐灰色 (10YR6/1) 均質な極細粒砂
38. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 均質な極細粒砂 マンガンが沈着する
39. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂
40. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 極細粒砂
41. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 径0.2cm大の炭化物をごく少量含む<R05>
42. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂 基盤層のブロックが30%混じる
43. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 極細粒砂
44. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 極細粒砂 粘質 マンガンが沈着する
45. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 粘質 やや砂質
46. 灰白色 (10YR7/1) 細粒砂混じり極細粒砂 砂質
47. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 細粒砂混じり極細粒砂 砂質
48. 灰白色 (7.5YR8/1) 中粒砂 径1~2cm大の円礫を多く含む いわゆる砂層
49. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 やや粘質
50. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 粘質
51. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂 やや砂質
52. 明褐色 (7.5YR7/1) 極細粒砂 やや砂質
53. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト マンガンが沈着 有機化するか
54. 淡黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂
55. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細粒砂 マンガンが沈着する
56. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 極細粒砂 灰白色 (10YR7/1) のブロックが30%混じる
57. 灰白色 (10YR7/1) 細粒砂混じり極細粒砂 やや砂質 鉄分班が30%混じる
58. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 やや砂質 鉄分沈着班が30%沈着混じる
59. 褐灰色 (7.5YR6/1) 極細粒砂 やや砂質 鉄分班が20%混じる
60. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂 粘質
61. 灰白色 (5Y8/1) シルト 粘質
62. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 粘質 やや砂質 径0.5cm大の鉄分沈着班が7%混じる
63. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 粘質
64. 淡黄色 (2.5Y7/3) シルト
66. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じり極細粒砂
67. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 鉄分沈着班が15%混じる
68. 淡黄褐色 (10YR8/3) 極細粒砂
69. 淡黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂
70. にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト マンガンが沈着する
71. 淡黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂
72. 淡黄色 (2.5Y8/3) 均質なシルト 粘質 径0.5cm大の黄色班が40%混じる

第143図 E5区北壁土層図2 (1/100)

島畑121 E 3区から続くもので、頂部平坦面の東西幅は8.5m。低位部(S D01)との比高は0.5mである。

島畑118 最も幅の広いもので、頂部平坦面の幅は9.9m、低位部との比高は0.8mである。島畑頂部において遺構は検出されなかったが、北壁では53層上面の当該部分に連続する凹凸が確認されるため、本来は耕作に関わる南北溝が掘られていた可能性がある。

島畑120 頂部平坦面の東西幅は7.4m、低位部との比高0.24mである。

島畑117 東半部のみ検出したもので、頂部平坦面の東西幅は5.6mである。低位部(S D03)との比高は0.18mである。

低位部S D01～S D03 底面において幅の狭い南北方向溝を多数検出した。低位部での水田耕作に関わる溝であろう。

自然流路N R05(第144・145図) 基盤層(72層)を掘り込む自然流路で、島畑が造られる以前のものである。斜方向の方位をとり、幅2.04m、深さ2.01mである。東端部で落込みS X04を切る。埋土は砂質であり、流水の痕跡を示す。埋土からは弥生土器と自然木が出土している。

自然流路N R06(第144・145図) 低位部S D03で検出した自然流路である。斜方向で、幅は0.56m、深さ0.08mである。埋土からは弥生土器が出土した。

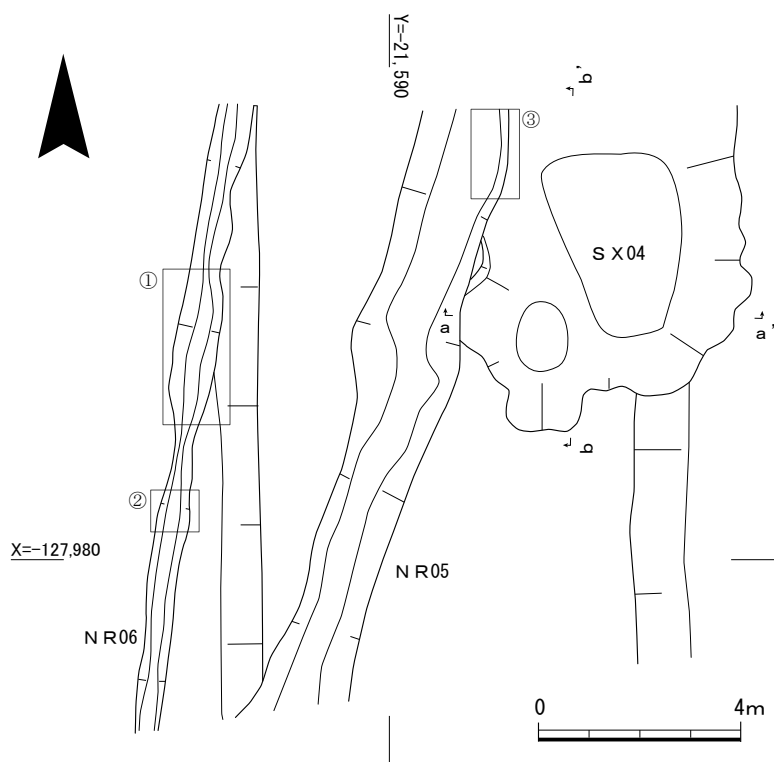
落込みS X04(第144・145図) 不整形の落込みである。浅い皿状の形を成すものの部分的に深い所がある。南西部では直径1.4m、深さ0.8mの規模でさらに落ち込んでおり、埋土には自然木や木質が確認された。氾濫の際、水流により部分的に下刻された痕と考えられる。

(5)小結

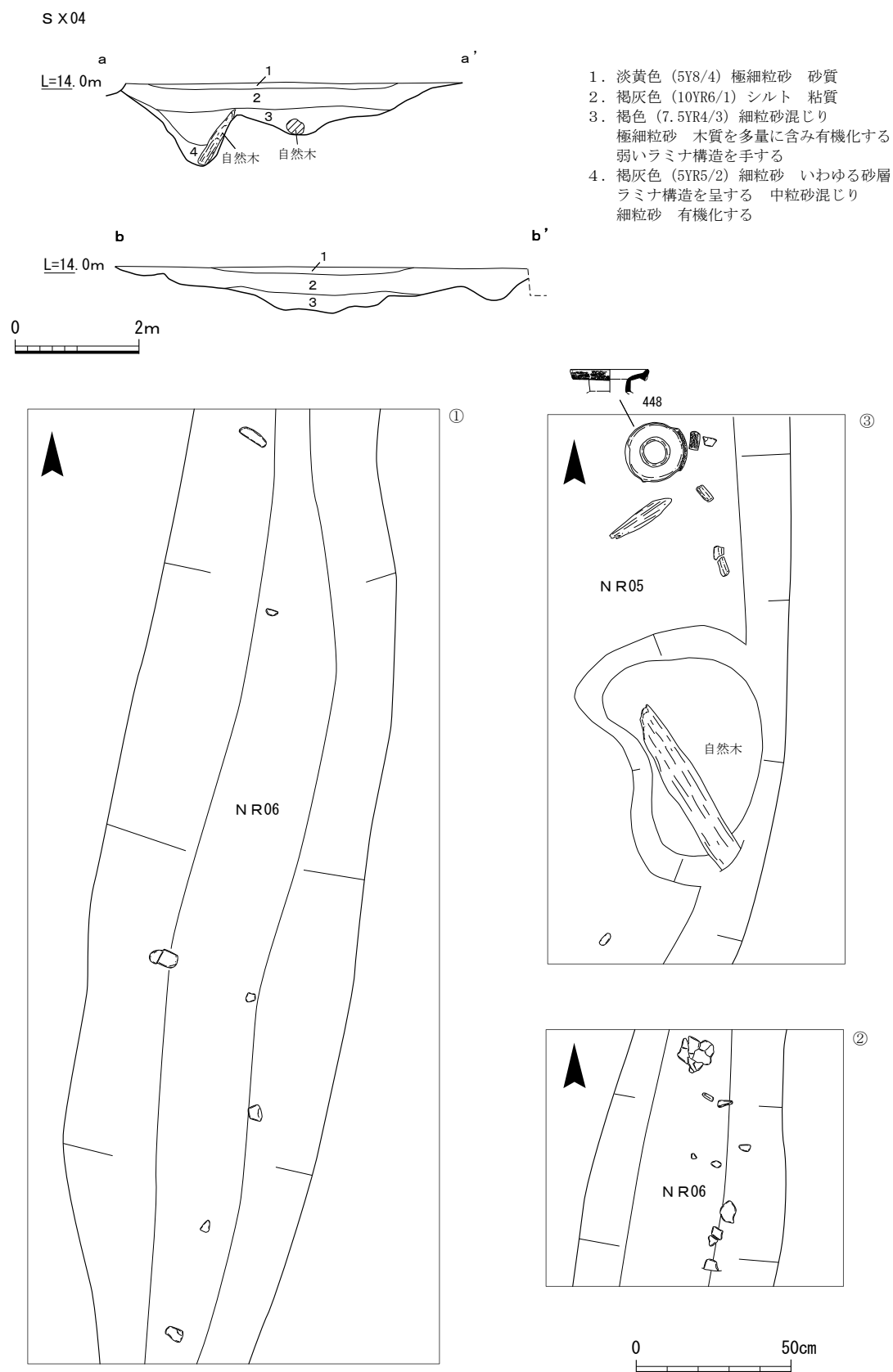
基盤層を削り出して造られる南北方向の島畑を4基検出するとともに、島畑以前の自然流路と落込みを検出した。

7) E 6 区 の 調 査

(1)調査の概要

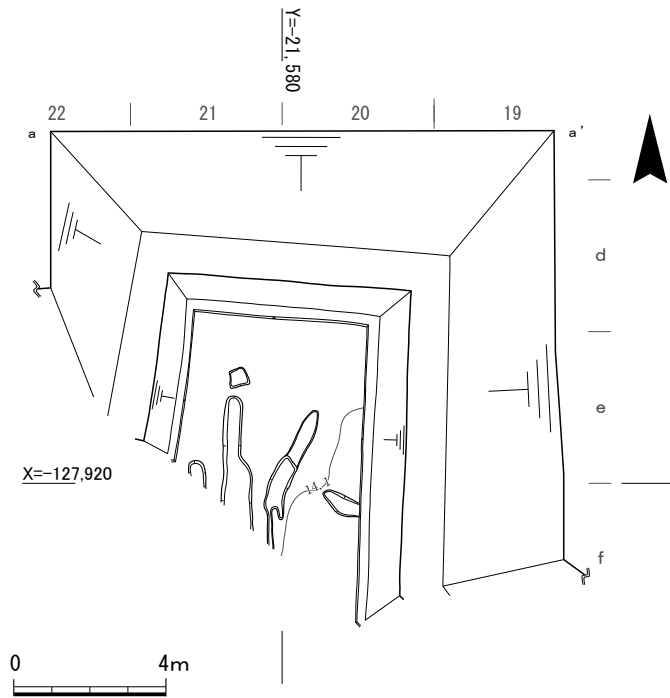


第144図 E 5 区 S X04、N R05・06内遺物出土状況位置図(1/150)



第145図 E 5区落ち込み S X 04土層、自然流路 N R 05・06内遺物出土状況図(1/100・1/20)

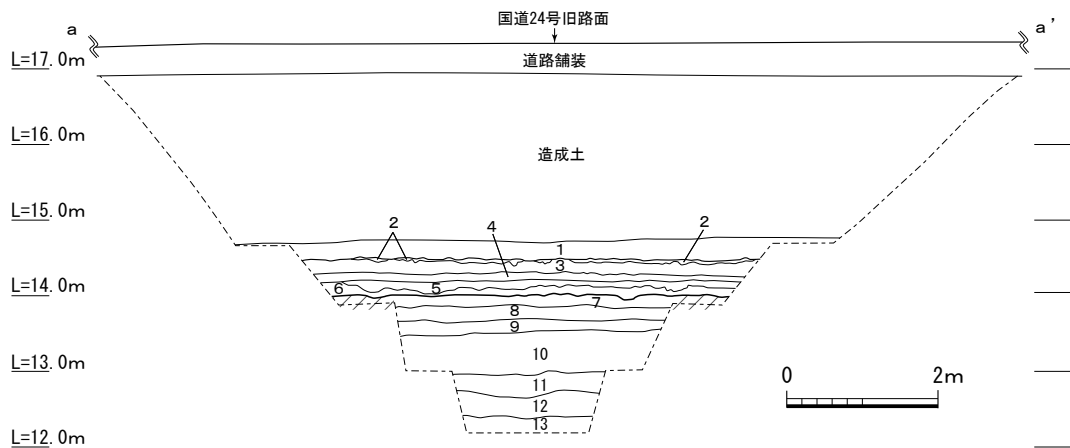
南北に橋脚を有する門型橋脚の建設予定地である。橋脚が新たに整備される国道24号を跨ぐ形となっており、国道部分の調査については水主神社東遺跡第12次調査のE7区として『京都府遺跡調査報告集』195冊で報告済みである。今回は橋脚の北側部分をE6a区、南側をE6b区とした。E6a区は南北13.0m、東西13.2mの方形を呈する調査区で、調査区周辺の標高は標高17.3mである。E6a区では島畑間の低位部および南北溝を検出した。E6b区は南北24.4m、東西28.4mの逆L字形を呈する調査区で、調査区周辺の標高は17.2mである。E6b区では南北方向の島畑および島畑間の低位部、溝、自然流路を検出した。



第146図 E6a区検出遺構平面図(1/200)

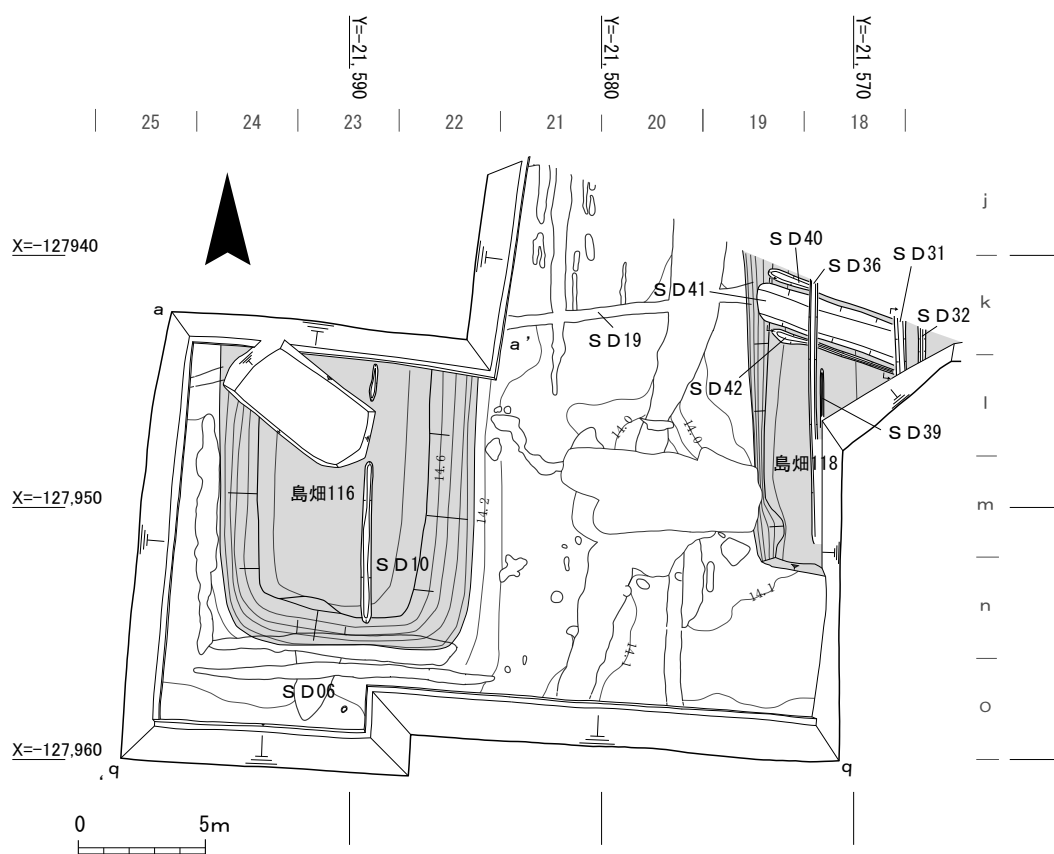
(2)基本層序(第147・149・150図)

E6a区は国道であった場所である。E6a区北壁では、アスファルトとコンクリートによる厚さ0.4mの国道の舗装を確認できる。その下位には厚さ2.45mの造成土が見られるが、旧耕作土は

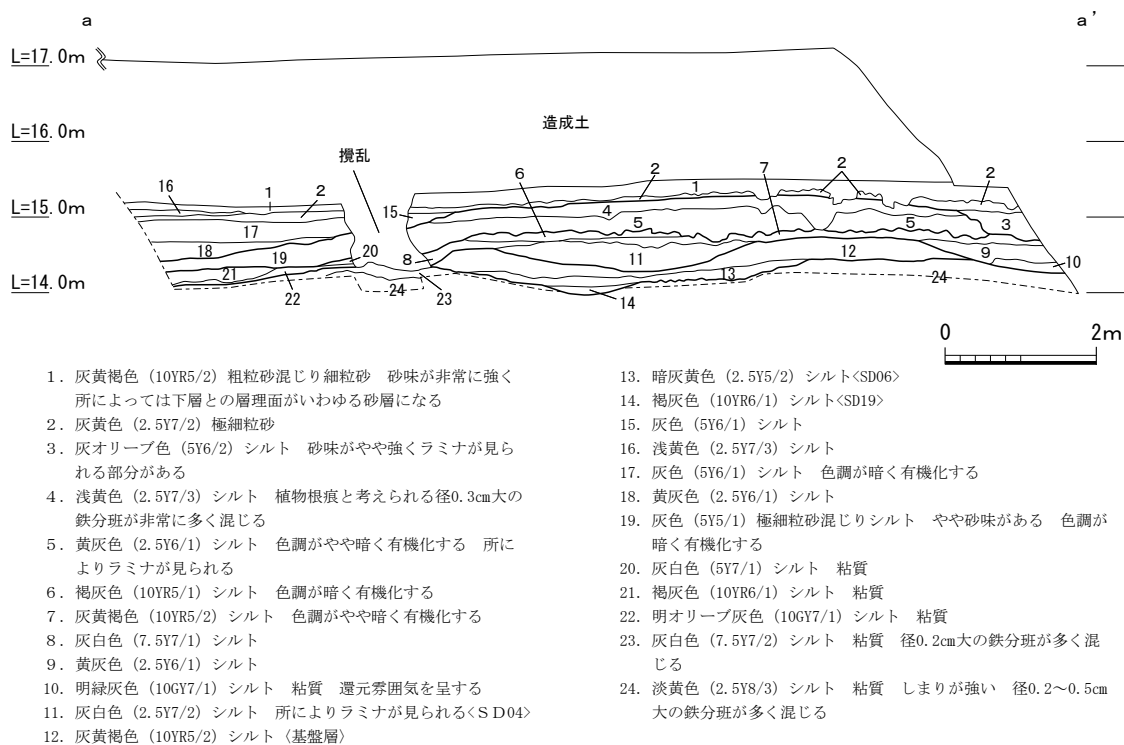


- | | |
|--|--|
| 1. 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂 砂味が強い 所によりラミナが見られる | 8. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂混じりシルト 粘質 径0.5cm程度の鉄分班が20%混じる |
| 2. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂 いわゆる砂層 | 9. 浅黄橙色 (10YR8/3) 細粒砂混じりシルト 粘質 やや砂味が強い 径0.5cm程度の鉄分班が70%混じる |
| 3. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂混じりシルト 粘質 やや砂味が強い やや有機化する | 10. 淡黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂混じりシルト 粘質 やや砂味が強い 径0.5cm程度の鉄分班が70%混じる |
| 4. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト 粘質 やや有機化する | 11. 灰白色 (5Y7/2) シルト 粘質 径0.5cm程度の鉄分班が15%混じる |
| 5. 灰色 (5Y6/1) シルト 粘質 やや有機化する | 12. 灰色 (5Y6/1) シルト 粘質 径0.2～0.5cm程度の炭化物が少量混じる |
| 6. 明緑灰色 (5G7/1) シルト 粘質 還元雰囲気呈する | 13. 灰色 (10Y5/1) シルト 粘質 径0.2cm程度の炭化物がごく少量混じる |
| 7. 淡黄色 (2.5Y8/4) 極細粒砂 シルト 粘質 植物根痕である 径0.3cm程度の鉄分班が30%混じる | |

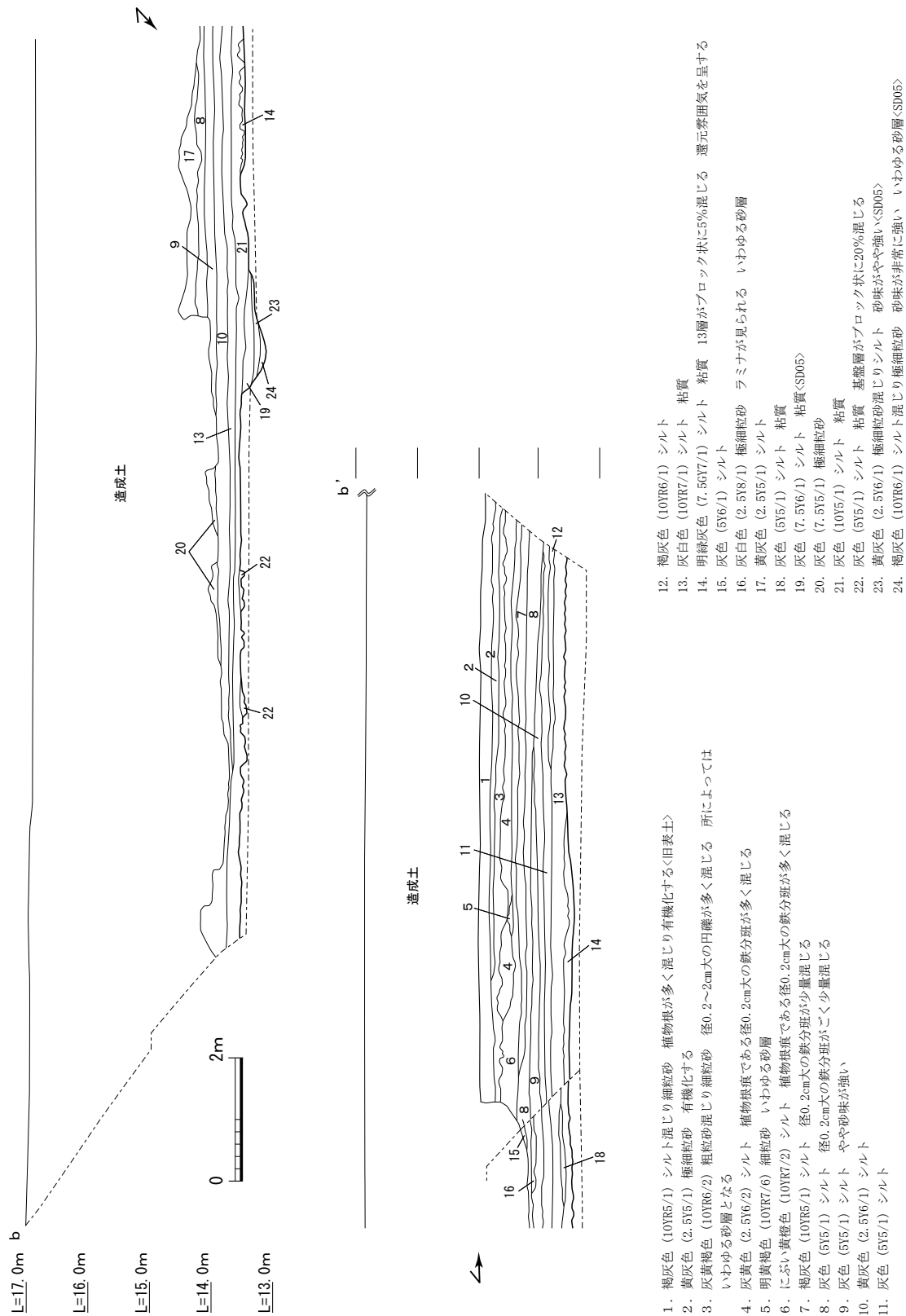
第147図 E6a区北壁土層図(1/100)



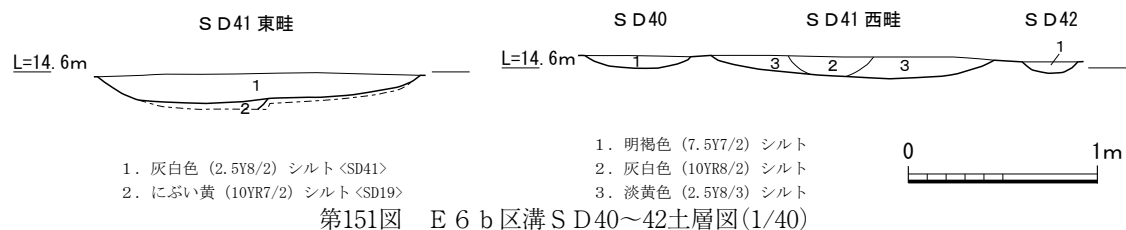
第148図 E 6 b 区検出遺構平面図 1 (1/300)



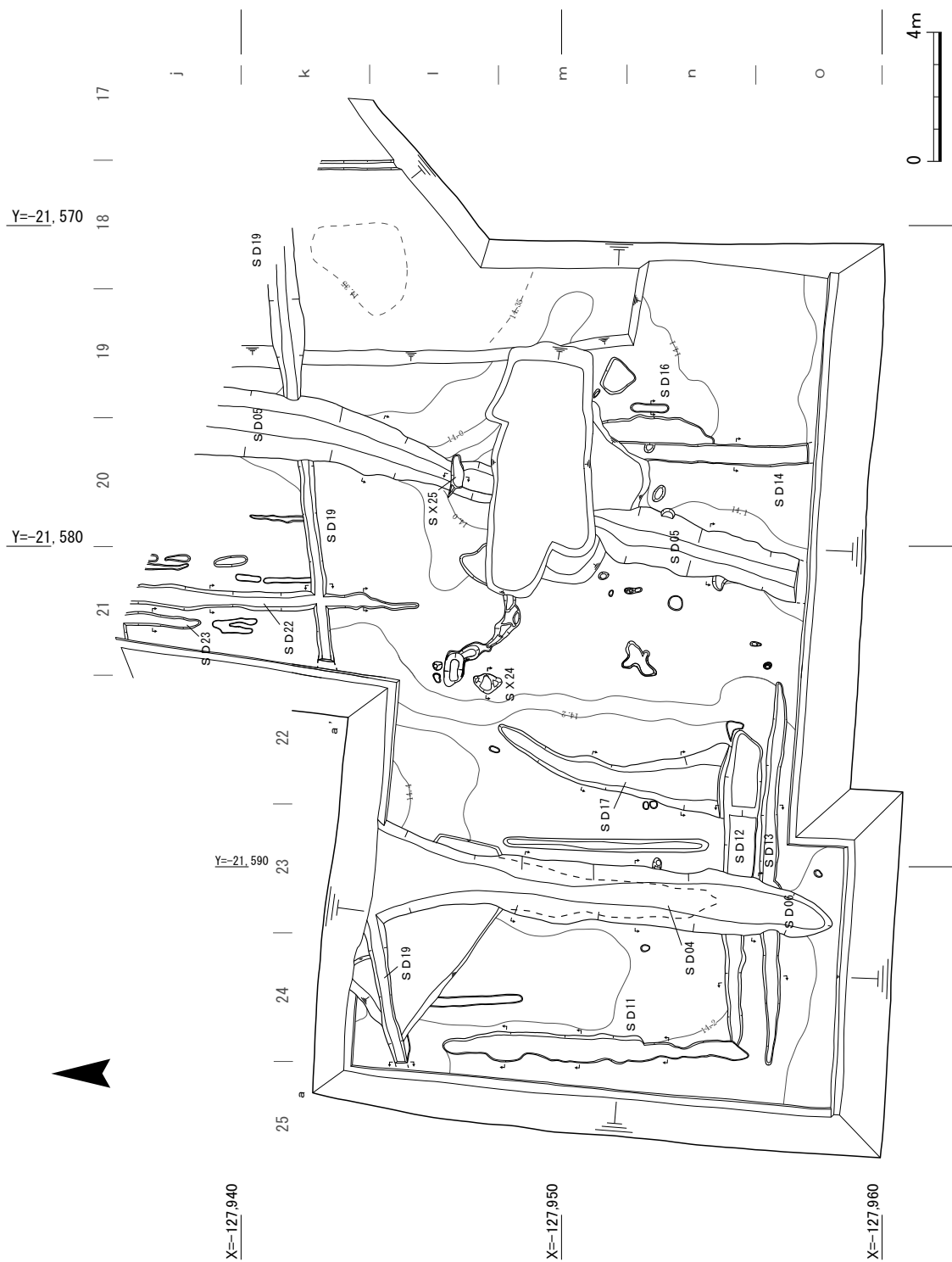
第149図 E 6 b 区北壁土層図(1/100)



第150図 E 6 b 区南壁土層図(1/100)



第151図 E 6 b 区溝SD40~42土層図(1/40)



第152図 E 6 b 区 検出遺構平面図2 (1/200)

確認できず、削平されているものと考えられる。基盤層(7層)は標高14mで検出した。7～11層は洪水性堆積により形成されたもので、標高12.74mで検出した12層以下は湖沼性の堆積である。

E 6 b 区の北壁では、標高15.28mの4層を頂部とする高まりを確認した。近世以降の島畑と考えられる。基盤層は(12層)を標高14.7mで検出するとともに、この12層を削り出して造られる南北方向の島畑を確認した。12層の下位には23・24層があり、23・24層から掘り込む溝(S D 06)は12層にバックされている。S D 06の埋土である13層の下位には、S D 19の埋土である14層が存在する。S D 19とS D 06は、平面的に切り合い関係を見出せなかった。E 6 b 区北壁の観察においても、少なくともS D 19の方が新しくなる可能性はない。

(3) 検出遺構(第146・148・152～154図)

島畑116 第12次調査E 7区で検出した島畑と同一であり、島畑の南端が本調査区内に収まる。島畑頂部の東西幅は6.9m。低位部との比高は0.6mである。島畑上では南北方向の小溝S D 10を検出した。耕作に関わる溝と考えられる。

島畑118 E 7区で検出した島畑と同一のものである。島畑の南端部は攪乱により削平されているが、調査区南壁で島畑を観察できないことから、島畑116と同じく本調査区内で島畑の南端が納まるものと考えられる。島畑上では東西の斜方向の溝(S D 40～42)および、正方位の南北方向の小溝(S D 31・32・36・39)を検出した。斜行する溝は島畑が造られる以前のものであり、南北方向の小溝は島畑上での耕作に関わるものと考えらる。

溝S D 11・12・13 島畑116を囲むように配される溝で、ほぼ正方位をとる。S D 12・13はS D 06を切る。低位部での耕作に関わる溝と考えられる。

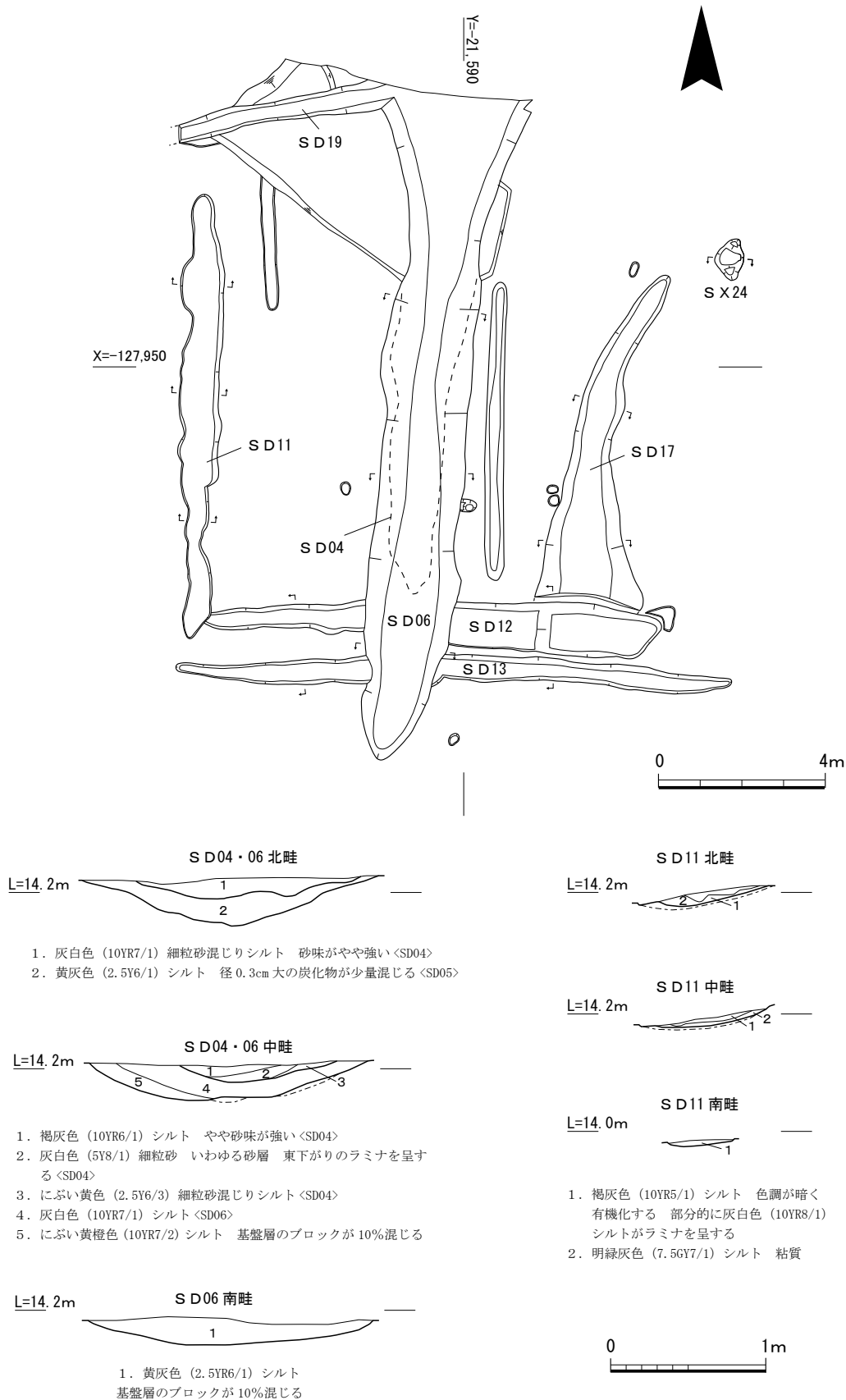
溝S D 06 島畑に先行する溝である。島畑116を構成しているE 6 b 区北壁12層を除去した段階で検出可能となった。南端部では東西方向の溝であるS D 12・13に切られる。設定した畦に観察によると、12層から掘り込むS D 04が重複している。埋土に流水の痕跡はない。

溝S D 05 島畑間の低位部で検出した南北方向の溝である。E 7区から続くもので、S D 19と交差する。両者の重複関係について検出作業時に入念に検討したが、どちらの溝も同種の埋土であることから同時期に埋没したものと判断した。後述のとおり、S D 19は島畑118の基盤層下げた状況で見える遺構である。よってS D 05についても島畑以前の溝であると考えられ、E 7区では庄内式土器が出土している

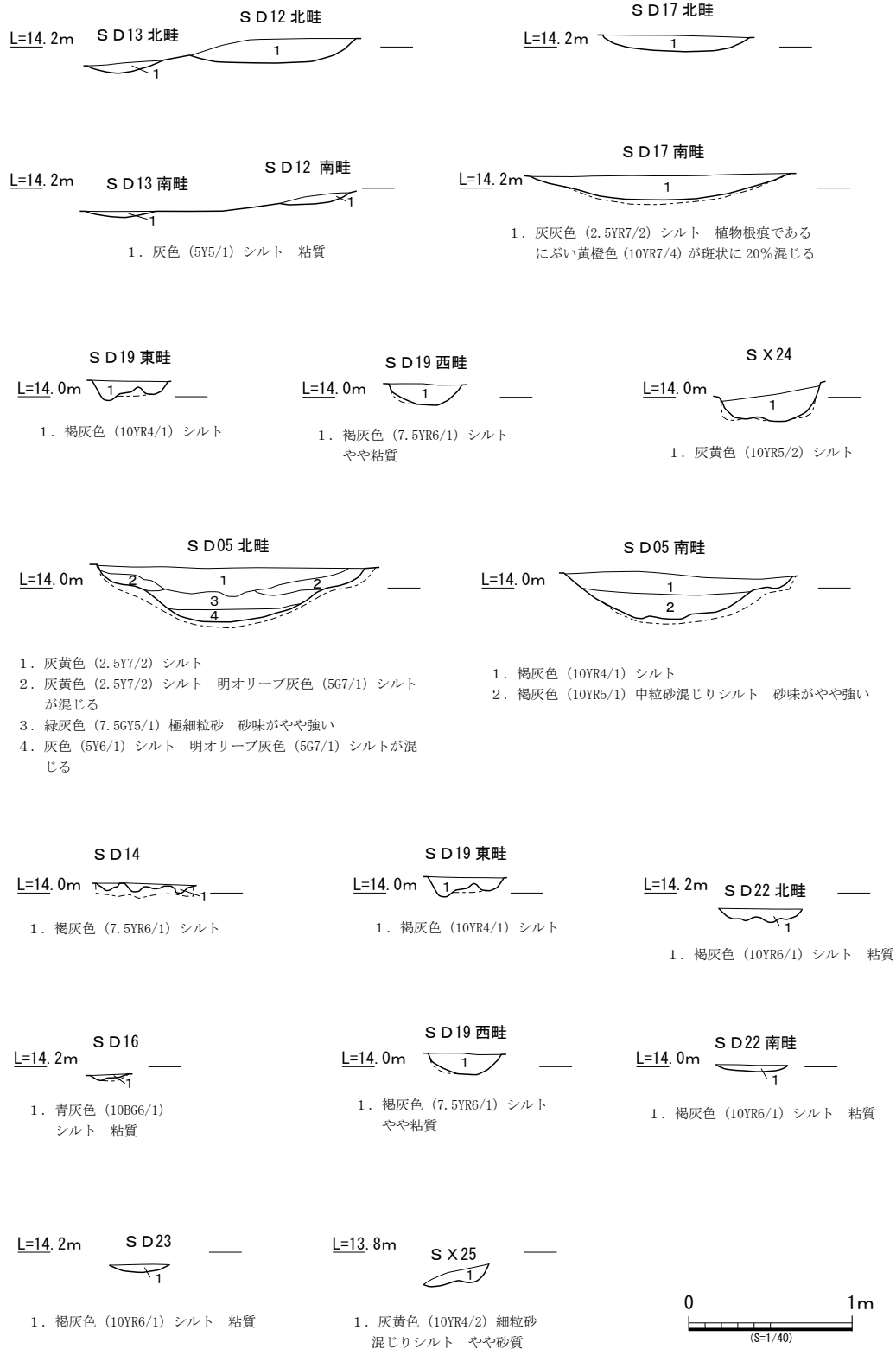
溝S D 19 島畑間の低位部で検出した、斜方位の東西方向の溝である。島畑118頂部の基盤層にバックされており、平面検出作業時には島畑の西側面でラインが見えなくなった。島畑118の上部を除去後、埋土に流水の痕跡はない。

(4) 小結

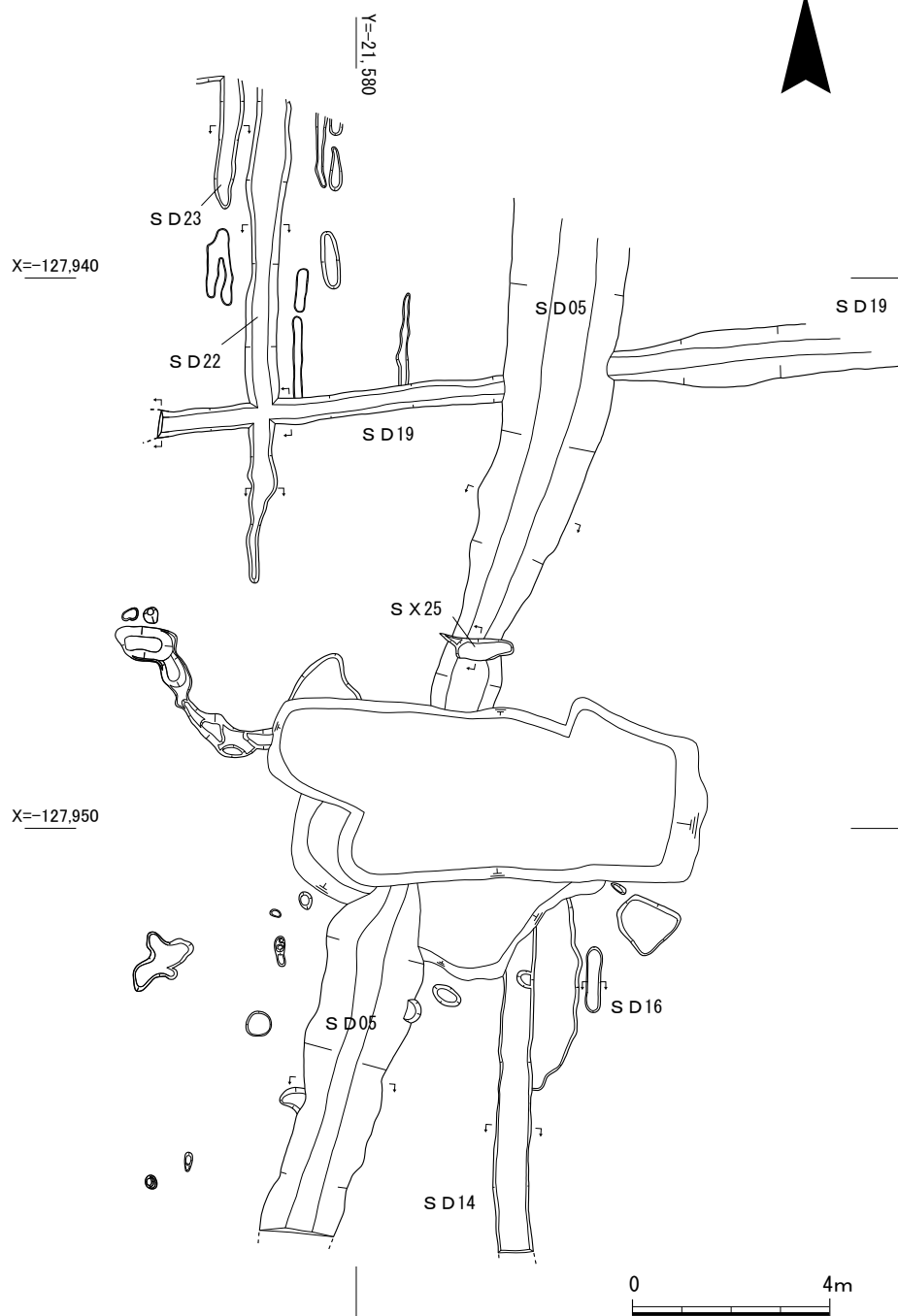
基盤層を削り出して造られる中世島畑を2基検出した。S D 06やS D 19のあり方から、基盤層の形成に時間幅があることが分かった。島畑以前の溝は斜方位をとりながら、格子状に掘られる状況を確認した。



第153図 E 6 b 区検出遺構平面図3(上段)、各遺構断面図1 (1/40・1/150)



第154図 E 6 b 区各遺構断面図 2 (1/40)



第155図 E 6 b 区検出遺構平面図 4

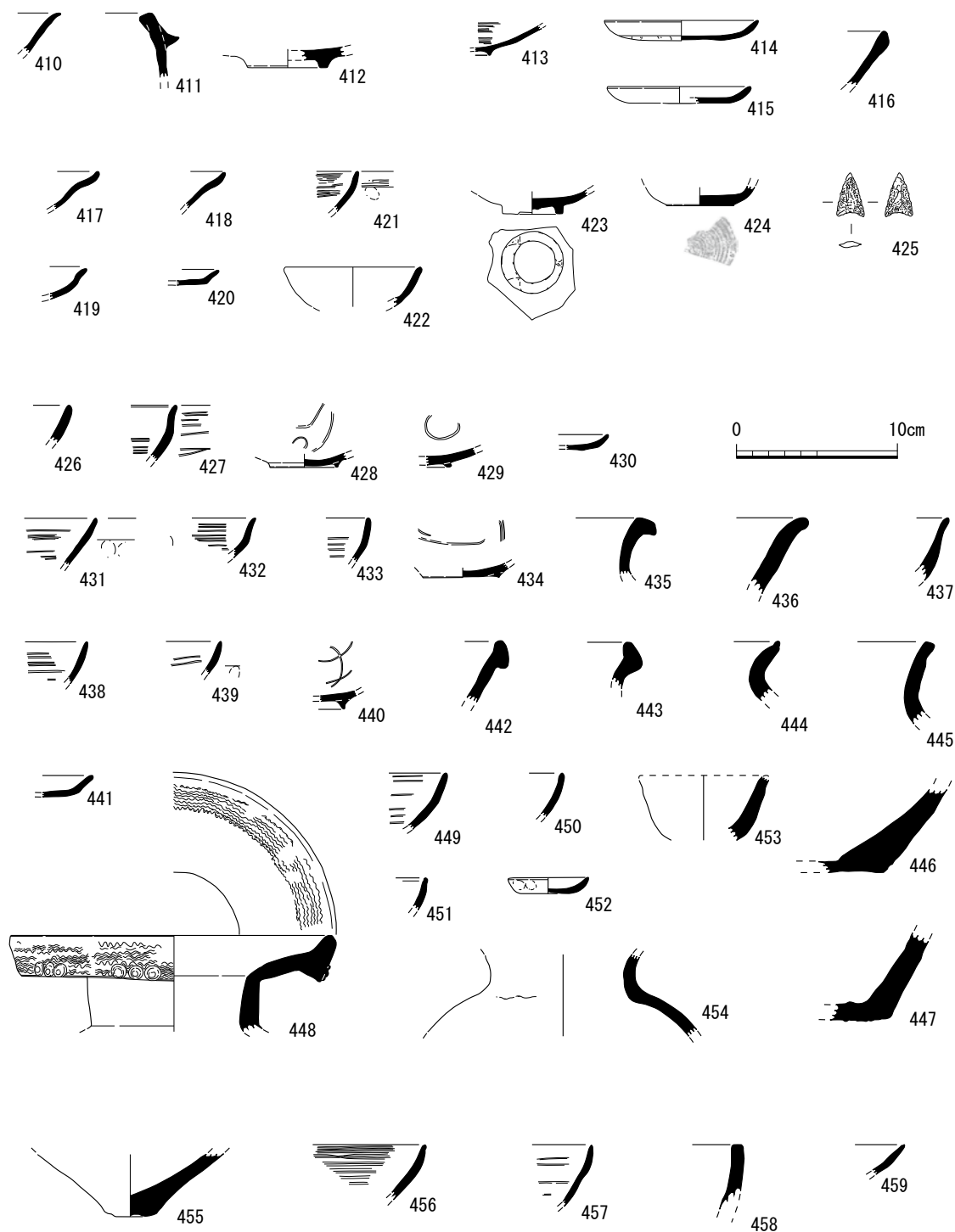
8) 出土遺物

(1) E 1 区(第156図410～412)

410は白磁碗で、S D 01から出土した。411は南壁の第26層中からの出土した土師器の羽釜である。412は南壁の第5・6層中からの出土である。

(2) E 2 区(第156図413～416)

413は基盤層上 S D 02の埋土から出土した瓦器碗の底部片である。414は島畑間の低位部である



第156図 E 1～6区出土土器

E 1区：410～412、E 2区：413～416、E 3区：417～425、E 4区：426～430、E 5区：431～454、E 6区：455～459

S D03から出土したもので、北壁断面の11層に相当する層位からの出土である。415はS D03を精査中に出土した土師器皿である。416は基盤層上に新たに造られた島畑の10層から出土した玉縁を有する白磁の口縁部片である。

(3)E3区(第156図417～425)

417～423・425は、島畑間の低位部S D01埋土の最下層からの出土である。北壁断面図では26

層に相当する層である。417～420は土師器皿、421は瓦器椀、422は磁器の椀で423は磁器の高台である。424は北壁を整形時に4層から出土。糸切り痕跡を有する。425はサヌカイト製の石鏃である。

(4) E 4 区(第156図426～430)

426はS D 02から出土した土師器皿、427はS D 03から出土した瓦器椀である。428・429は島畑上面を精査中に出土したもので、瓦器椀の底部である。430の土師器皿は北壁から出土したもので、東壁の2層に相当する部分から出土した。

(5) E 5 区(第156図431～454)

431～437は島畑間の低位部であるS D 01(北壁63層相当)からの出土である。431～434は瓦器椀、435は須恵器壺の口縁、436は須恵器鉢の口縁である。437は磁器製の椀である。438～447は島畑間の低位部であるS D 02(北壁45・55層相当から)の出土である。438～440は瓦器椀、441は土師器皿、442・443は須恵器鉢、444～447は須恵器甕である。448はS D 05から出土した口縁端部を櫛描波状文と円形浮文で飾る弥生土器壺である。449～454は島畑を精査中に出土したものである。それぞれ449は島畑118を、450・452・453は島畑120、451・454は島畑117を精査中に出土したもので、遺物の帰属は基盤層を覆う層である。449～451は瓦器椀、452は土師器皿、453は陶器の椀、454は須恵器壺の肩部である。

(6) E 6 区(第156図455～459)

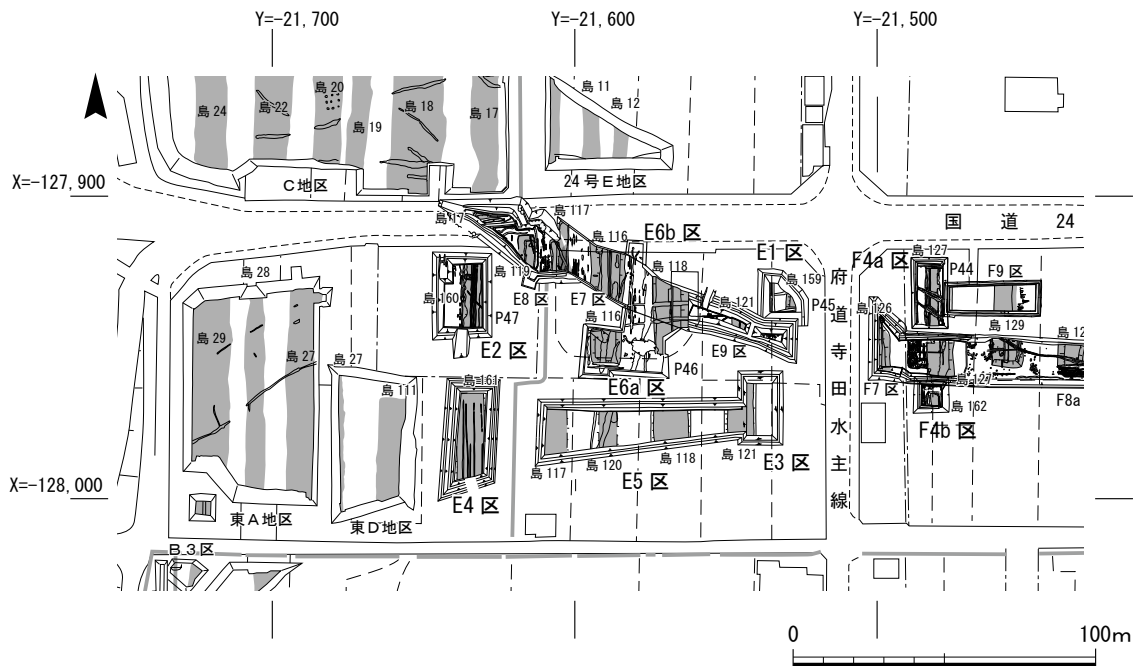
455はS D 06から出土した弥生土器の底部である。456・457はS D 12から出土した瓦器椀である。458はS D 14から出土した土師器椀の口縁。459はS D 23から出土した土師器皿である。

(加藤雅士)

9) E 地区のまとめ

水主神社東遺跡E地区では、新名神関係の調査でE 1～6区まで、6地区7か所の発掘調査を実施し、東から島畑159、121、118、116、120、117、160、161の島畑8基を確認した(第157図)。E地区では国道24号関係の調査としてE 7～9区の調査が実施されており、E 8区では別個に島畑119を検出している。また、先行して実施した城陽JCT・IC建設に伴う発掘調査では、東A地区、東D地区で4基の島畑27・28・29・111が検出されている。府道寺田水主線より西側、京奈和自動車道よりも東側、旧国道24号よりも南側では、現在までのところ13基の島畑を確認している。

島畑の認定について、若干の補足をしておきたい。E 6 a区とE 5区の調査により、島畑116と島畑120が別個の島畑であることが判明しているため、この並びで、島畑が半町の長さで南北に分かれる可能性がある。一方、東A地区では島畑27～29が検出されているが、南北に途切れずに、ほぼ1町の長さを有するものと推定される。このように、E地区で確認した南北方向の島畑は、1町、半町の島畑が混在しているため、それぞれの島畑が1町であるのか、半町であるのか、よくわからないのが実状である。島畑の側面がほぼ一致しているかどうか、を目安に1町の島畑であるか、半町の島畑であるか、とした。島畑121・118・117は島畑の側面がほぼ一致しているため、一町の長さの島畑とした。E 2区の島畑160とE 4区の島畑161は島畑の西側面が一致しな



第157図 水主神社東遺跡E地区の調査(1/2,500)

いため、別個の島畑とした。これらの島畑については今後の調査により、島畑の番号や基数について変更する可能性がある。

E地区では、島畑以外の遺構として時期不明の溝、弥生土器を包含する自然流路を検出したが、顕著な遺構は確認できなかった。自然流路は木津川の氾濫流路と考えられ、埋土中からの土器の出土量が少ないことから、近辺に同時期の集落があったとは考えにくい状況である。土地利用の在り方から推定すると、中世以前は湿潤な環境下にあり、中世段階にやや乾燥した環境へと変化すると島畑が造られるようになり、以後、生産域として土地利用されたものと考えられる。

(岩松 保)

10. 水主神社東遺跡F地区の調査

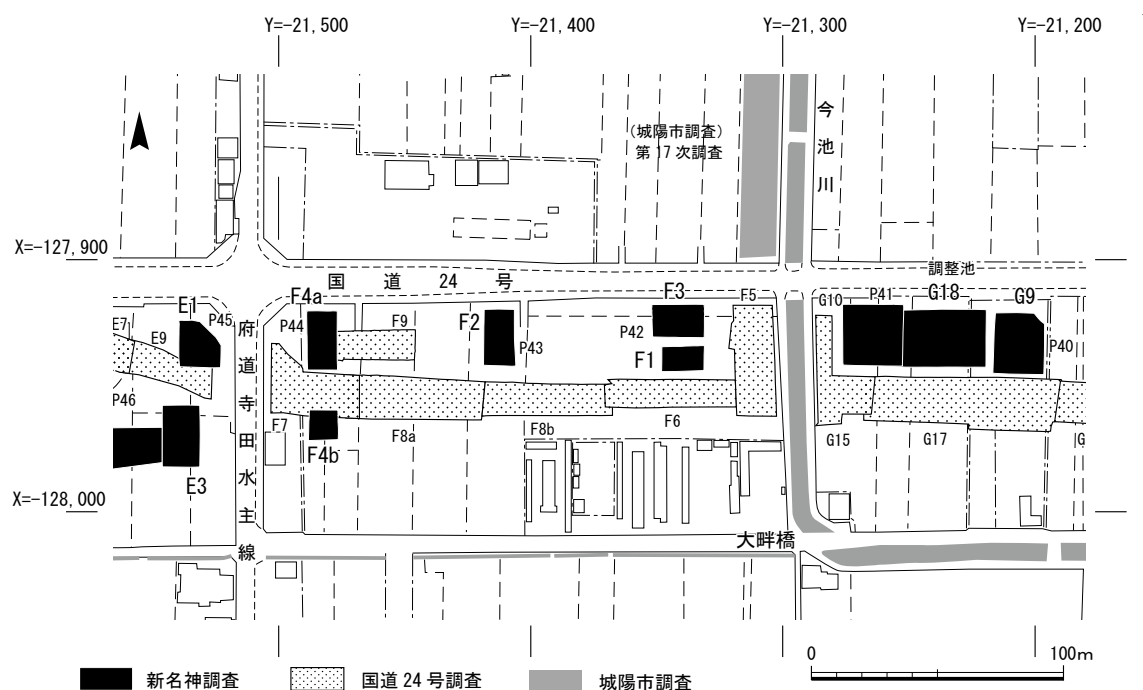
1) 調査の経過

F地区は府道寺田水主線よりも東、今池川よりも西側の範囲に設けた調査区である(第158図)。新名神高速道路整備事業関係の調査として、平成29・30年度の2か年にわたってF1～4区(P42～44)の4地区の調査を行った。平成29年度にはF1・2区(P42・43; Pは橋脚の略)、平成30年度にはF3・4区(P42・44)の調査を実施した。F1区とF3区は調査年度が異なるため別個の調査区名を付しているが、橋脚42は南北2本の橋脚からなり、F1区が北側、F3区が南側の橋脚となる。F4区も南北2本の橋脚に分かれており、北から南に、a、bの枝番号を付した。

新名神関係の発掘調査とは別に、国道24号拡幅事業に伴う発掘調査を国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて令和元(平成31)年度～令和3年度にかけて、当調査研究センターが実施している。この一連の調査では、道路新設(F5～8区)及び調整池(F9区)設置の事前調査であり、これらの調査成果については『京都府遺跡調査報告書』第195冊にまとめられている。また、新名神・国道24号における水主神社東遺跡のF地区とは別に、城陽市教育委員会により市道新設に伴う第

付表9 水主神社東遺跡F地区の調査(新名神・国道24号関係)

調査区	調査回数	調査年度	関係事業	構造物等	備 考
F 1	第 8 次	平成 29 年度 (2017)	新名神	P42	P42 の南脚部の調査
F 2		平成 29 年度 (2017)	新名神	P43	
F 3	第 11 次	平成 30 年度 (2018)	新名神	P42	P42 の北脚部の調査
F 4		平成 30 年度 (2018)	新名神	P44	北脚を a、南脚を b の枝番号
F 5	第 12 次	令和元年度 (平成 31) (2019)	国道 24 号	道路	
F 6					
F 7	第 14 次	令和 2 年度 (2020)	国道 24 号	道路	
F 8					
F 9	第 16 次	令和 3 年度 (2021)	国道 24 号	道路	



第158図 水主神社東遺跡F地区の調査(1/3,000)

17次調査が今池川の左岸、F 5 地区の北側で実施されている。

2) F 1 区 の 調 査

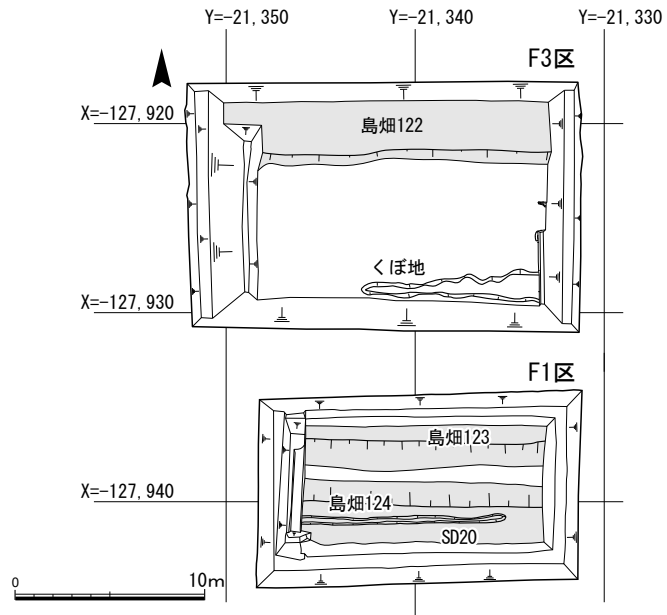
(1) 調査の概要

平成29年度に水主神社東遺跡第8次調査として実施した。橋脚42の調査区で、橋脚42の南側の脚部分の調査である。北脚はF 3 区調査として、平成30年度に調査を実施した(第159図)。

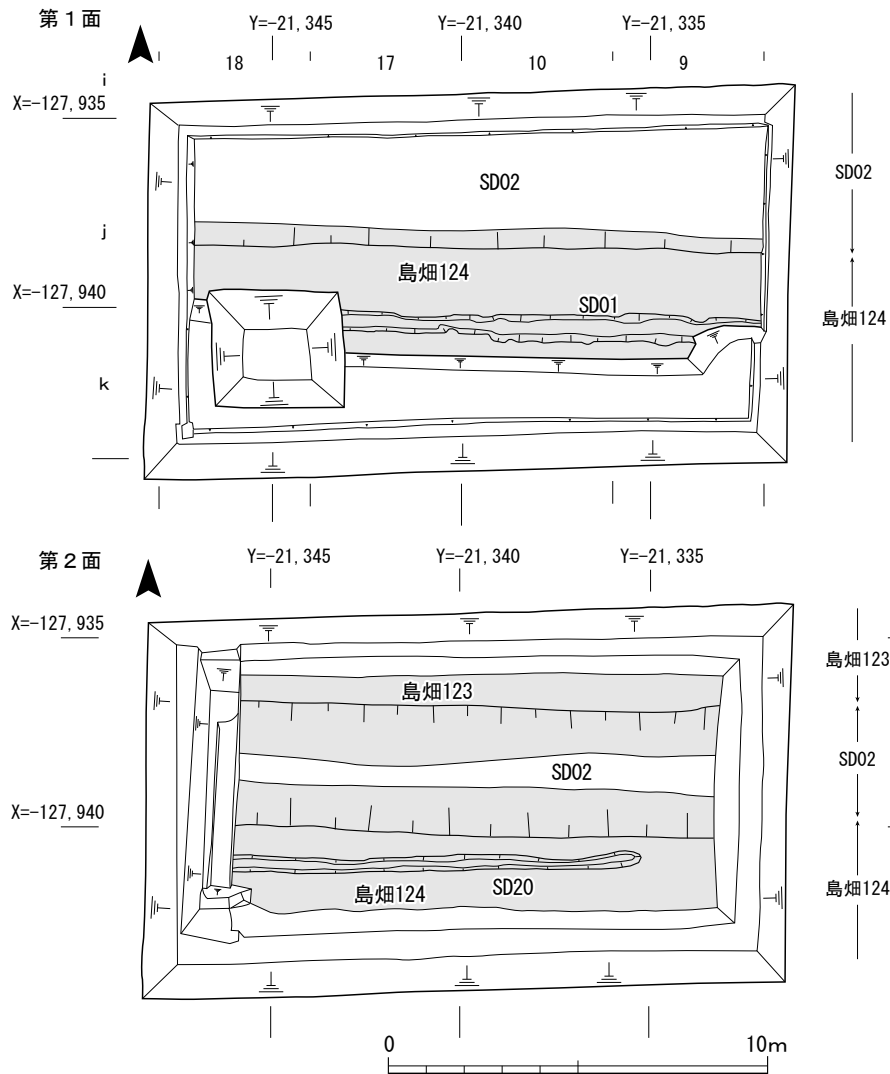
F 1 区 の 調 査 区 は 南 北 9.9m、東 西 16.7m の 調 査 区 で、南 脚 部 分 の 調 査 区 で あり ます。調 査 は 2 面 で 行 い、第 1 面 で は 調 査 区 南 半 で 東 西 方 向 の 島 畑 1 基 を 確 認 し、第 2 面 で は 東 西 方 向 の 島 畑 2 基 を 検 出 し た。第 2 面 で は、島 畑 と 島 畑 の 間 に 基 盤 層 を 掘 り 込 ん だ 幅 広 の 溝 が あ っ た が、後 世 に あ た る 第 1 面 で は 北 側 の 島 畑 123 は 島 畑 124 の 北 側 の 溝 内 に 埋 没 し た 状 況 と な り、廃 絶 し て い る。島 畑 基 盤 層 で の 精 査 や 断 ち 割 り 等 を 行 っ て、遺 構 の 検 出 に 努 め た が、他 の 遺 構 は 確 認 で き な か っ た。調 査 に よ り 土 師 器、瓦 器 な ど の 中 世 以 降 の 遺 物 が 出 土 し て い る。

(2)基本層序(第161図)

地表以下、現代の耕作に伴う土壌が堆積しており、標高15.5m前後で島畑盛土と判断される15層を検出した。この15層上面で島畑124を検出し、それに伴うと判断される溝を北側で検出した。この溝底は15.3m前後で、21層上面に相当する(第1面)。西壁の土層の観察では、島畑の盛土と判断される15層の南側は11~13・17層が水平に堆積しており、現代に近い段



第159図 F1・F3区配置図(1/400)



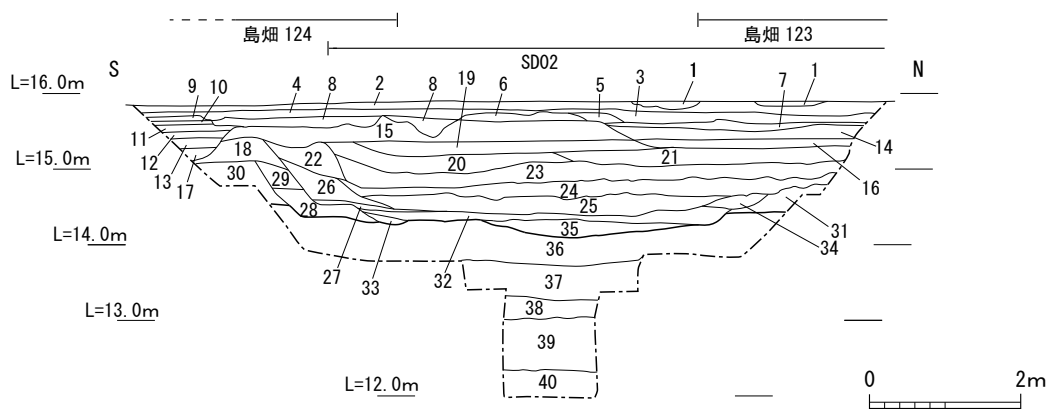
第160図 F1区検出遺構平面図 第1・2面(1/200)

階の水田造成に伴う攪乱土壌と判断され、調査区の南辺に沿って、東端まで及んでいる。第2面は基盤層の36層上面で調査を行った。検出面の標高は、島畑124上で14.5m前後、島畑123上で14.4m前後、島畑間の溝底で14.1m前後となる。層序の観察では、島畑123の盛土と判断されるのは31層、34層で、この上位には溝内堆積と判断される土壌が堆積している。島畑124の盛土は、30層、28・29層、22・26、18層で、これらは最初期の島畑の位置を踏襲して盛土されているが、20層を盛土する段階で北側に大きく拡張され、以後、15・19層が盛り上げられている。

島畑の調査終了後、この下を重機により標高12m前後まで断ち割ったが、37層は砂層、38～40層はシルト・粘質土を主体とし、おおむね水平堆積であることを確認した。河川および湖沼の環境下にあったものと判断される。

(3) 検出遺構(第160図)

島畑124 第1・2面で検出した東西方向の島畑で、調査区の南半で検出した。第1面では、島畑の南半約1.7mと西端部で3.2m×3.5mの方形に攪乱を受けていたため、南北幅は2.9mしか確



- | | |
|--|--|
| 1. オリブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土；黄橙色 (10YR7/8) 砂質土混じる | 16. 灰オリブ色 (5Y4/2) シルト；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土混じる |
| 2. 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土；橙色 (7.5YR6/8) 粘質土混じる | 17. 灰色 (2.5GY5/1) シルト；明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土混じる |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土；褐赤色 (5YR5/8) 粘質土僅かに混じる | 18. 灰オリブ色 (5Y5/2) シルト；明褐色 (7.5YR5/8) 砂質土混じる |
| 4. 灰色 (7.5Y4/1) 砂質土；橙色 (7.5YR6/8) 粘質土・灰白色 (7.5Y 8/1) 粘質土混じる | 19. 灰色 (5Y5/1) 粘質土；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土ごく僅かに混じる |
| 5. 灰白色 (10YR7/1) 砂質土；橙色 (7.5YR6/8) 粘質土混じる | 20. 灰色 (5Y5/1) 粘質土；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土ごく僅かに混じる |
| 6. 灰白色 (7.5Y8/1) 粗砂；明褐色 (7.5YR5/8) 粗砂、黒色 (7.5YR 2/1) 砂質土混じる。洪水砂層 | 21. 灰オリブ色 (7.5Y4/2) 中粒砂まじりの粘質土 |
| 7. 灰白色 (7.5Y8/1) 粗砂；灰オリブ色 (5Y5/2) シルト、橙色 (7.5YR6/8) 粘質土僅かに混じる | 22. オリブ灰色 (10Y4/2) 細粒砂混じりの粘質土 |
| 8. 灰白色 (5YR8/1) 粗砂；洪水砂層 | 23. オリブ黒色 (7.5Y3/2) 細粒砂 |
| 9. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト；黄橙色 (7.5Y7/8) 砂質土混じる | 24. オリブ黒色 (7.5Y3/1) 極細粒砂質粘土 |
| 10. 灰オリブ色 (5Y5/2) シルト；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土混じる。水田層 | 25. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂質粘土 |
| 11. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト；黄橙色 (7.5Y7/8) 砂質土混じる。床土層 | 26. 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土；島畑124 盛土 |
| 12. 灰オリブ色 (5Y 6/2) シルト；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土混じる。水田層 | 27. 灰オリブ色 (7.5Y4/2) 粘質土；島畑124 盛土 |
| 13. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土混じる。床土層 | 28. オリブ灰色 (10Y4/2) 極細粒砂質粘土 |
| 14. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト；橙色 (7.5YR6/8) 砂質土混じる | 29. 黄色 (2.5Y8/6) 粘質土；島畑124 盛土 |
| 15. 灰オリブ色 (5Y5/2) 粘質土；明赤褐色 (5YR5/8) 砂質土混じる | 30. オリブ黒色 (5Y3/1) 粘質土 |
| | 31. 灰色 (10Y4/1) 粘質土；島畑123 盛土 |
| | 32. 灰色 (10Y4/1) 粘質土 |
| | 33. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土 |
| | 34. オリブ灰色 (10Y6/2) 粘質土；島畑123 盛土 |
| | 35. 灰オリブ色 (7.5Y5/2) 34層が少量混じる粘質土 |
| | 36. 黄褐色 (2.5Y5/6) 粘質土；基盤層 |
| | 37. 明黄褐色 (10Y6/8) 極細砂をごく少量含む細粒砂 |
| | 38. 青灰色 (5B6/1) 粘質土を少量含む細粒砂 |
| | 39. 青灰色 (5B6/1) 粘土；青灰色 (10BG6/1) 炭化物を少量含むシルト |
| | 40. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 (炭化物少量含む) |

第161図 F1区西壁土層図(1/100)

認できず、検出長15.0m、高さ0.25mであった。第2面では幅2.4m、高さ0.4m、検出長は13.8mを測る。それぞれの島畑上では、溝SD01、SD20を検出している。耕作溝と判断される。

島畑123 第2面で検出した東西方向の島畑で、上幅1.0m、下幅2.4mを検出した。基盤層での比高0.3mである。第34層、31層が島畑の盛土と判断される。第1面にいたるまでに島畑124の北溝SD02の中に埋没している。

溝SD01 第1面の島畑124上で検出した東西溝で、検出長11.0m、幅0.7m、深さ0.15mである。耕作関連の溝と考えられる。

溝SD02 島畑124の北側で検出した溝で、第1面と第2面で検出した。第1面と第2面で状況が大きく異なり、第1面では島畑124の北側の溝で、第2面では島畑124の北側で島畑123の南側、島畑と島畑に挟まれた溝である。土層の観察により、当初は島畑123・124を造成する際に基盤層が掘り込まれて島畑と島畑を区切る溝となっていた(25・32・35層)が、溝内堆積の24層が島畑123の盛土部分である31層を覆っていることから、以後、島畑123はなくなり、SD02の中に取り込まれたことが分かる。20・21層、23層、24層がそれぞれの段階での島畑124に対応する溝内の堆積土で、島畑124が15層により大きく北側に造り直された後には14・16層がその埋土となる。第1面では、幅は3.0m以上である。第2面では幅3.5mで、東から西に下る傾斜をもつ。

溝SD20 第2面の島畑124上で検出した溝である。検出長10.8m、幅0.4m、深さ0.12mである。耕作に関連する溝と判断される。

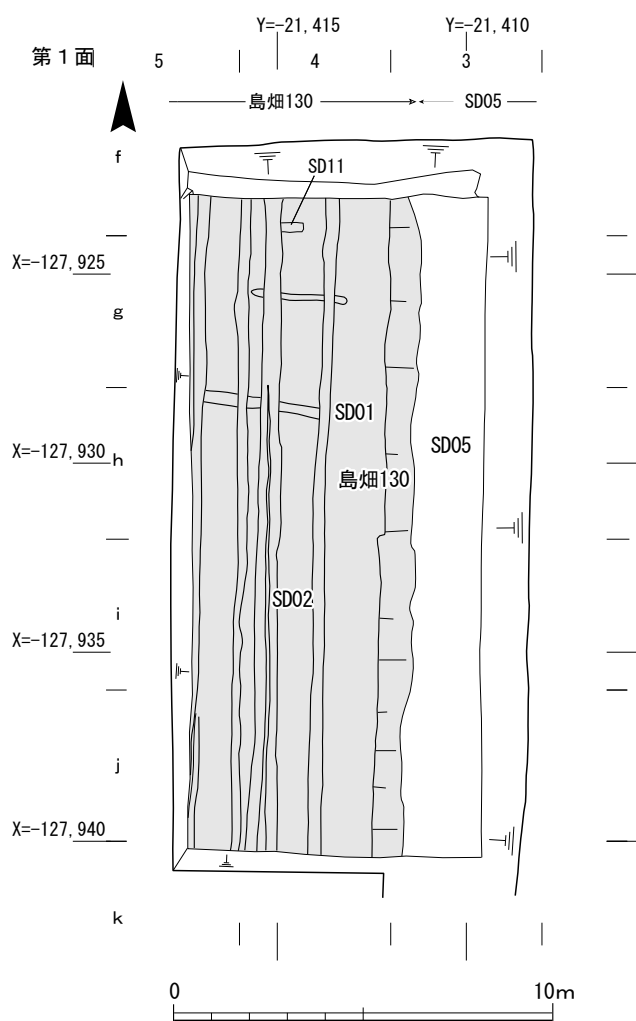
(4)小結

東西方向の島畑2基を検出した。2基の島畑は、途中までは島畑の溝が埋没するにつれて島畑上に盛土をして改修していくことを確認したが、最終的には、北側の島畑は南側の島畑の溝に取り込まれて消失している。

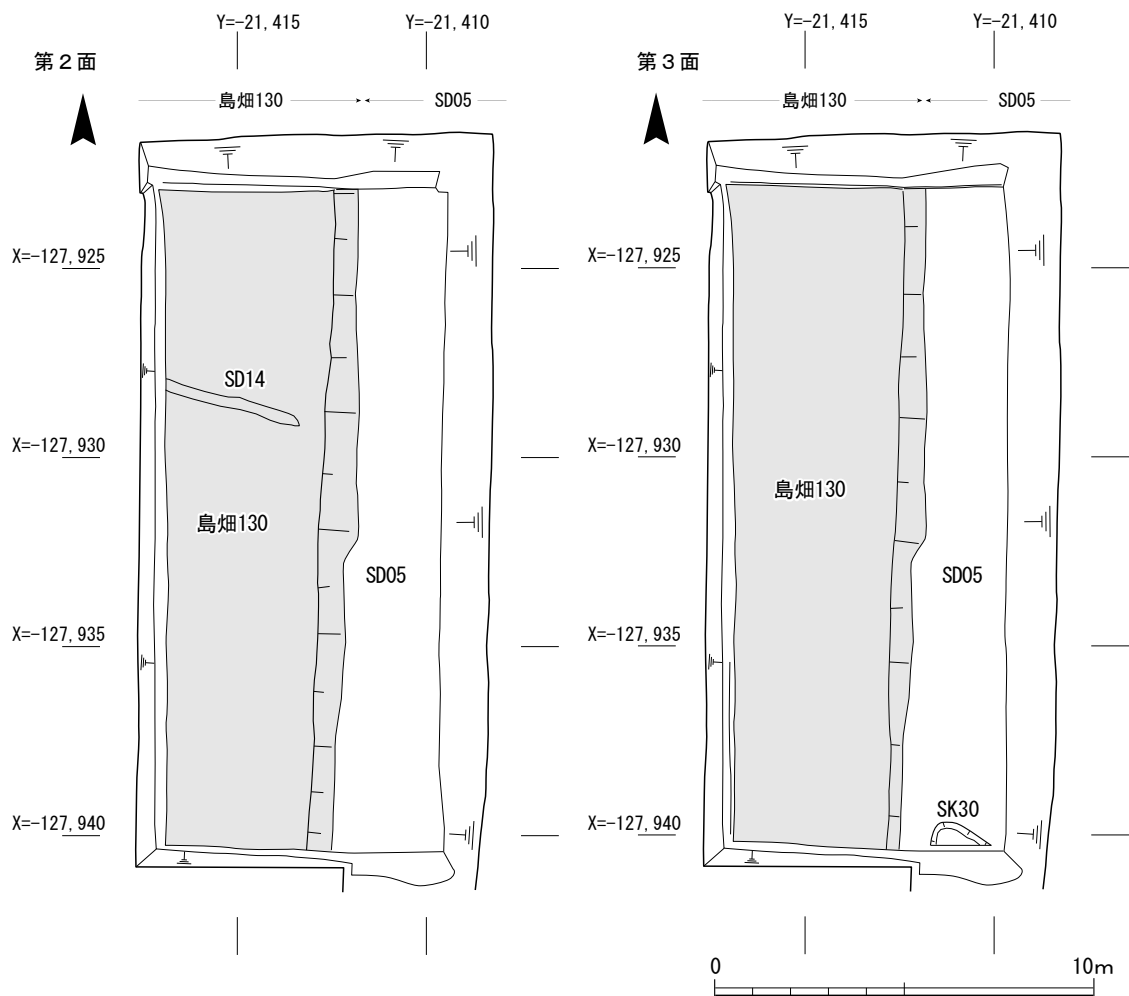
3) F2区の調査

(1)調査の概要

平成29年度に水主神社東遺跡第8次調査として橋脚43建設予定地の調査を実施した。南北22.5m、東西12.4mの調査区である。南北方向の島畑130を検出した。調査は3面で実施したが、島畑及びそれ



第162図 F2区検出遺構平面図 第1面(1/200)



第163図 F2区検出遺構平面図 第2・3面(1/200)

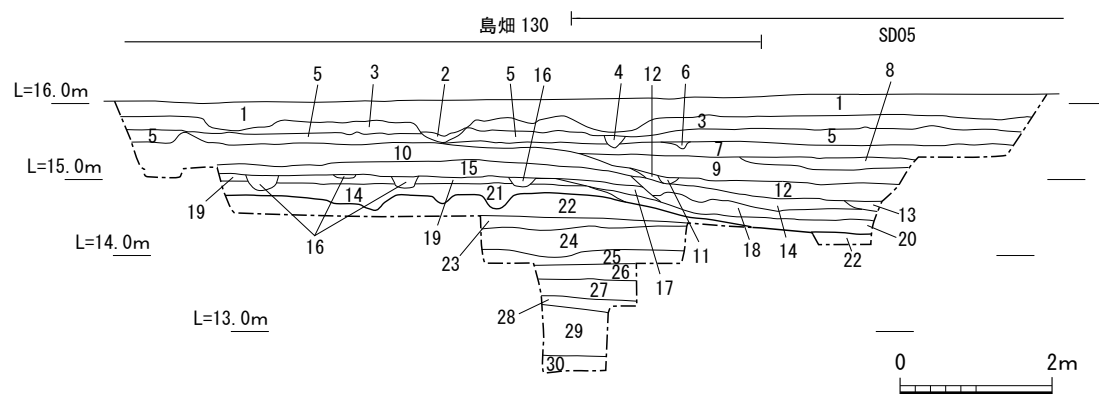
に伴う耕作溝を検出ただけで、島畑以外の遺構は確認できなかった。土師器、瓦器などの中世以降の遺物が出土している。

(2)基本層序(第164図)

地表下50cm程度にわたって現代の耕作に伴う地層がほぼ水平に堆積しており、それより下位で島畑に関わると判断される土層が確認できる。10層から下位が島畑の本体部分で、7層から下位が島畑に伴う溝SD05の埋土と判断される。調査は3面で行い、第1面が15層下面の標高15.0m付近で、第2面が19層下面、第3面が標高14.8m前後の22層上面での調査である。第3面の島畑間溝内は島畑造成時に掘り込まれたため、14.4m付近となっている。溝内の土の処理として、排土は島畑上に盛り上げられたと考えられるため、正確には、第3面は最初期の島畑面ではない。島畑は大きくは3～4回にわたって盛り上げられたようで、21層、19層、17・15層、10層が盛土と判断される。

下層の遺構の有無を確認するため、重機により2.3m程度の深さで標高12.5m付近まで断ち割ったが、遺構・遺物は確認できず、粘質土・粘土がほぼ水平に堆積しており、長期間にわたって池沼等の環境下にあったものと推定される。

(3)検出遺構(第162・163図)



- | | |
|---|--|
| 1. 黒褐色 (7.5YR3/1) 粗粒砂; 淡橙色 (5YR8/4) 粘質土 ブロック
状に混じる | 17. 灰色 (N5/0) 粘質土 |
| 2. 黒褐色 (7.5Y3/1) 粗粒砂 | 18. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土; 灰白色 (N8/0) 細砂が攪拌状
態で混じる (8層時の耕作土) |
| 3. 黒褐色 (7.5Y3/1) 粗粒砂; 5が20%混じる | 19. 灰色 (N6/1) シルト |
| 4. 黒色 (7.5YR2/1) 中粒砂 | 20. 緑灰色 (10GY6/1) シルト |
| 5. 灰白色 (7.5Y8/1) 粗粒砂; 洪水砂層 | 21. 灰色 (5YR8/1) 粘質土; 褐色 (7.5YR4/0) 土、黒褐色
(7.5YR3/1) 土がまだらに混じる |
| 6. 浅黄橙色 (7.5YR8/3) 粗粒砂; 洪水砂層 | 22. 橙色 (5YR7/8) 粘質土; 基盤層 |
| 7. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 | 23. 明黄褐色 (10YR7/6) 極細砂が少量含む粘質土 |
| 8. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土; 江戸時代の遺物包含 | 24. 明黄褐色 (10Y6/8) 粘質土 |
| 9. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 | 25. 淡黄色 (2.5Y8/4) 粘質土; 酸化マンガン多量に含む |
| 10. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土 | 26. 黄色 (2.5Y8/6) 粘質土; 酸化マンガン多量に含む |
| 11. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土 | 27. 淡黄色 (2.5Y8/4) 粘質土; 酸化マンガン多量に含む |
| 12. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 | 28. 淡黄色 (2.5Y8/3) 粘質土; 酸化マンガン少量含む |
| 13. 暗オリーブ灰色 (5G4/1) 粘質土; 石英粒子混じる | 29. 明青灰色 (5B7/1) 粘土 |
| 14. 灰色 (7.5Y6/1) シルト; 淡黄色土混じる | 30. 明青灰色 (5B7/1) 粘土; 炭化物を少量含む |
| 15. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘質土; 灰白色粘質土30%混じる | |
| 16. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土 | |

第164図 F 2区北壁土層図(1/100)

島畑130 南北方向の島畑で、調査区の西側半分程度で検出した。調査区の南北及び西側に広がるため、全長・全幅ともに不明である。土層の観察により、盛土は3～4回程度確認でき、現代までにはほぼ同じ位置で島畑を造営してる。検出長17.4m、検出幅4.8mを測る。溝底と島畑上との比高は、1面で0.55m、2面で0.65m、3面では0.4m程度を測る。

溝SD05 島畑130の東側に掘られた溝である。幅3.5m以上を確認した。

溝SD01・02・11 第1面で検出した島畑130の上面で検出した溝である。重複関係から、東西方向の溝が南北方向の溝に先行する。SD01が検出長16.3m、幅0.35m、深さ0.05mである。SD02が検出長16.3m、幅0.3m、深さ0.05mである。耕作関連の溝群と考える。SD01から瓦器碗(第174図460)が出土している。

溝SD14 第2面の島畑上で検出した溝で、検出長3.8m、幅0.25m、深さ0.05mである。

土坑SK30 第3面の調査区南東部で検出した土坑で、長さ1.4m以上、幅0.9m以上、深さ0.15mである。

(4) 小結

南北方向の島畑1基を検出した。土層の観察より、島畑は3～4回の盛土がなされたものと推測される。

4) F 3 区 の 調 査

(1) 調査の概要

平成30年度に調査を実施した。水主神社東遺跡の第11次調査にあたり、橋脚42の北側の脚にあたる(第159図)。第8次調査のF 1 区の北側にあたる。調査により東西方向の2基の島畑を調査区の北辺と南辺で検出した。調査区北側で検出した島畑122は土層の観察と出土遺物の出土状況から近代まで使用されていたと考えられる。最終段階の島畑の上層に洪水砂が堆積していることから、洪水により島畑が埋没し、その後は島畑の造成を行わなかったと考えられる。南側で検出した島畑123は島畑122に後出するもので、島畑122の南溝 S D02が掘削され、下層が一旦埋まった段階で設けられたものである。断ち割りを行って下層の遺構・遺物の検出に努めたが、島畑以前の遺構・遺物は確認できなかった(写真図版第111-3)。

(2) 基本層序(第166図)

1・2層は耕作に伴う土壌で、地表面は凸凹しているが、基本的に水平堆積を呈している。3層は中粒砂で、調査区の四周の壁面で観察できたことから、広範囲に堆積していると推定され、洪水砂と判断するものである。この下位に島畑および島畑に伴う溝の堆積が見て取れる。5・9・14~16・24~28層が島畑123の盛土と判断される。9層は島畑の本体部分と溝内の土層が連続しており、分層することはできなかったが、島畑本体と溝内堆積で分かれる可能性がある。溝内堆積土との重複関係より4ないし5回程度の盛り上げが認められる。北側の島畑122は、島畑の南辺部に盛土の"土手状"高まり(10・21・23層)が認められる。この高まりを基点として、この北側には4・7・20・22層、南側には12・13層、18・19層が盛り上げられている。30層もまた最初期の島畑に伴う盛土の起点として機能した状況が見て取れる。29層から6層までが島畑に伴う溝 S D02の埋土と判断するが、島畑123は29層の上から盛土して造成されており、層位的には島畑122に後出するものである。29層下面の31・34層より下が基盤層と判断する。

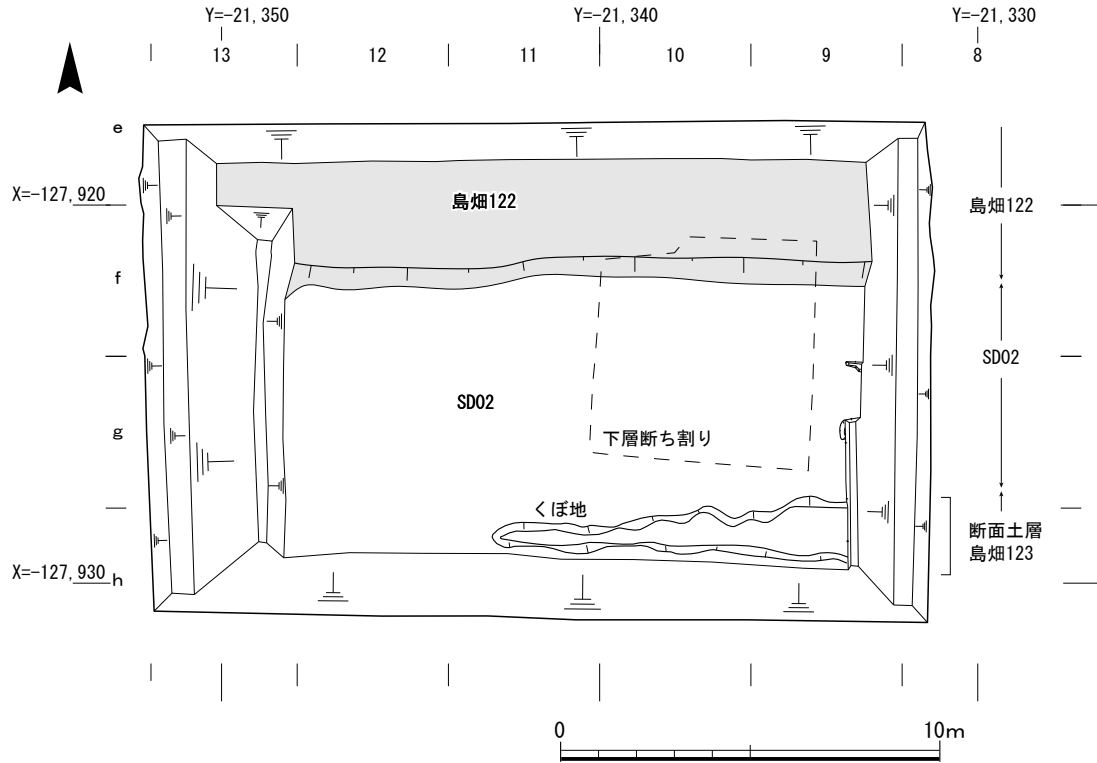
(3) 検出遺構(第165図)

島畑122 調査区の北側で検出した東西方向の島畑である。土層の観察より、大きくは3回程度の盛り上げが認められる。検出長17.2m、検出した上幅2.8m、下幅3.3mを測る。溝底と島畑上との比高は0.4mである。

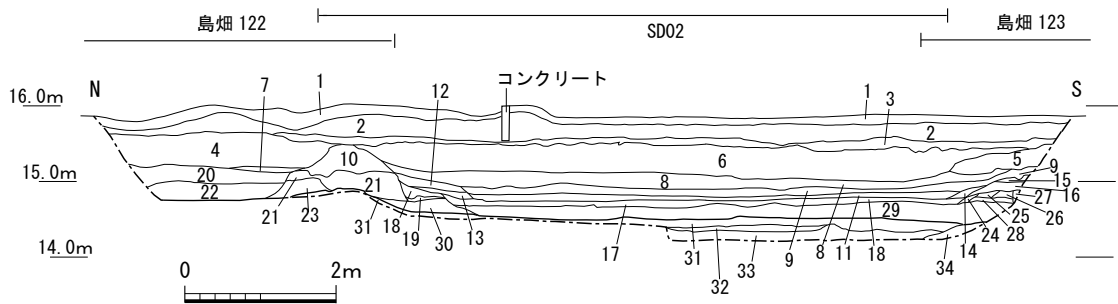
島畑123 調査区の南側で検出した島畑である。土層の観察により島畑を認めたもので、平面的には確認できなかった。島畑123の南溝 S D02内に堆積した土砂の上に盛土されており、島畑122と時期を違えて造られており、後出するものである。

溝 S D02 島畑122の造営に伴い、南側に掘削された溝である。土層の観察では、29層が溝底に堆積した後に島畑123が造成されている。

くぼ地 S D02内の南東隅で検出した。西から東へ下る地形をもつ。当初、島畑123に伴う溝と考えていたが、層序を確認したところ29層の下にあり、島畑造営以前のものと判明した。埋土は29層で島畑122の堆積土と同一で、島畑溝を掘削した際のくぼ地もしくは水が流れた痕跡と判断される。



第165図 F3区検出遺構平面図(1/200)



- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 灰色 (10Y5/1) 粘質土 | 18. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土 (19層より粘質強い) |
| 2. 灰色 (10Y5/1) 粘質土<マンガン少量含む> | 19. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土 (30層よりも粘性強い) |
| 3. 暗オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 中粒砂 | 20. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土 |
| 4. 暗オリーブ灰色 (5Y4/3) 粘質土 | 21. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 |
| 5. 灰色 (10Y5/1) シルト | 22. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土 |
| 6. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土 | 23. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土 (22層よりも粘性強い) |
| 7. 灰色 (10Y6/1) 粘質土 | 24. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 |
| 8. 暗オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 中粒砂 | 25. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土 |
| 9. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト | 26. 灰色 (10Y4/1) シルト (中粒砂を含む) |
| 10. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土 | 27. 灰色 (10Y5/1) 粘質土 (中粒砂を含む) |
| 11. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 | 28. 灰色 (10Y5/1) 粘質土 |
| 12. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 | 29. 暗オリーブ灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 |
| 13. 灰オリーブ色 (7.5Y4/1) 粘質土 | 30. オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘質土 |
| 14. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 | 31. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 |
| 15. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト (細粒砂混じる) | 32. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土 |
| 16. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 | 33. 緑灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 |
| 17. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土 (18層より砂質強い) | 34. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 |

第166図 F3区東壁土層図(1/100)

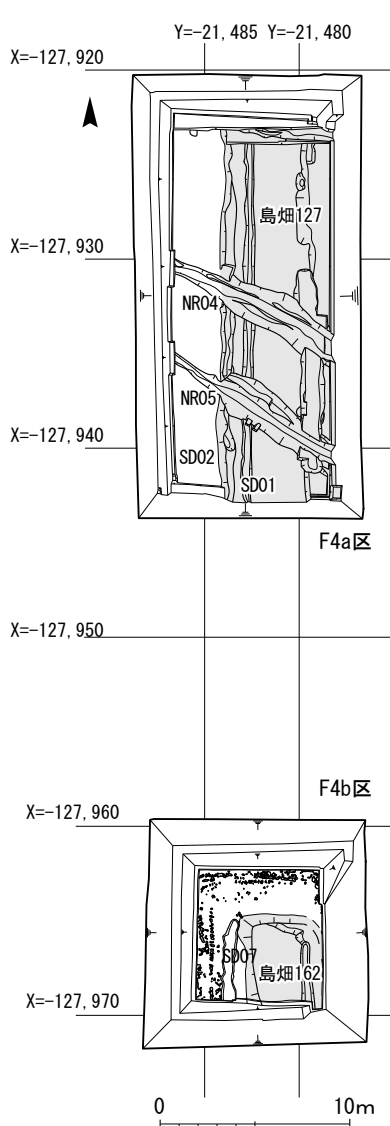
(4) 小結

東西方向の島畑を2基検出した。南側で検出した島畑123はF1区の北辺で検出した島畑と同一のものと判断できる。島畑122と島畑123は造営の時期が異なり、島畑123は島畑122の南溝SD02の埋土の上に造られており、後出するものと考えられる。

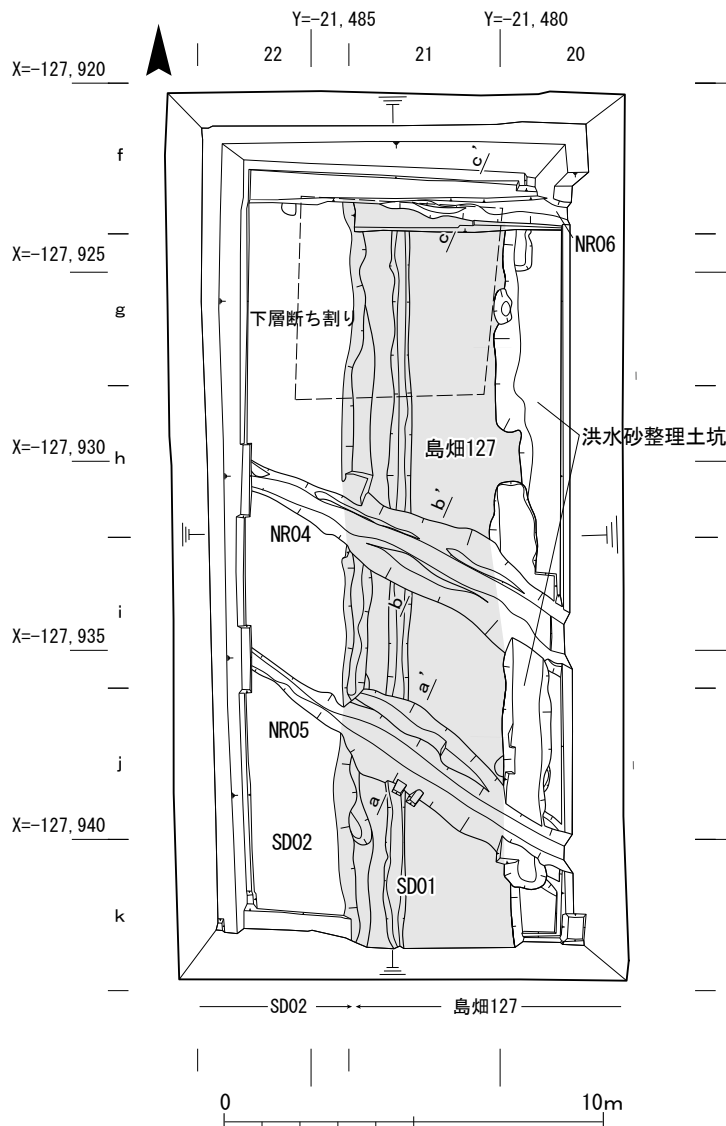
5) F4区の調査

(1) 調査の概要

水主神社東遺跡の第11次調査にあたり、平成30年度に調査を実施した。橋脚44の建設予定地にあたる。橋脚44は南北2か所に橋脚が分かれているため、北側をF4a区、南側をF4b区として調査を行った。F4a区では南北方向の島畑127を確認した。島畑以前の遺構として、流路NR04～06を検出した。流路NR04・05は平行して検出したが、人工のものではなく、自然の流路である。F4b区では南北方向の島畑162を確認した。検出した部分は島畑の北端にあたり、島畑は南に延びるものと考えられる。溝部には多数の掘削痕が認められた。出土した遺物から13世紀



167図 F4a・b区配置図(1/400)

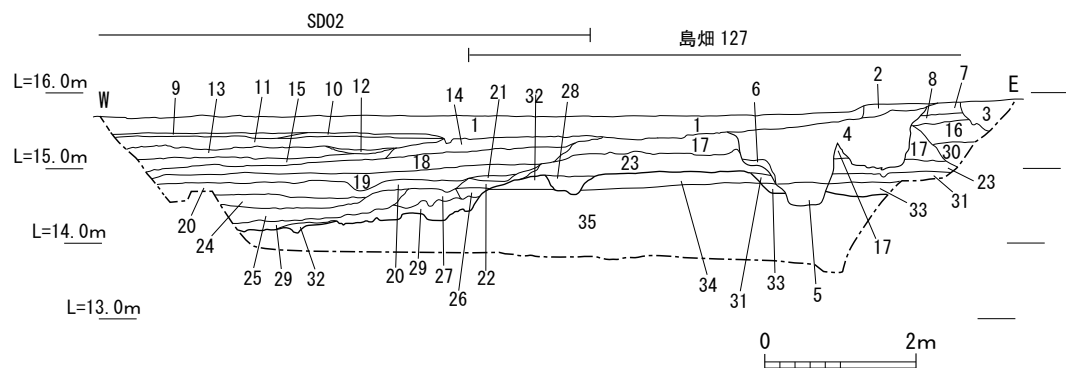


第168図 F4a区検出遺構平面図(1/200)

以降に造られたものと考えられる。

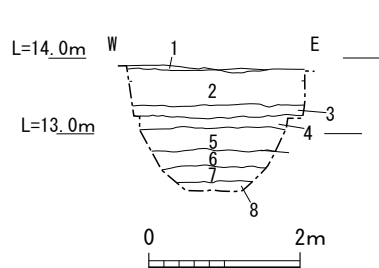
(2)基本層序(第169図)

a 区の基本土層を北壁土層でみると、1・2層は耕作に伴う土壌で、基本的に水平堆積を呈している。3～6層は粗粒砂を主体とした土壌で、洪水に伴う砂層を整理した層序と判断される。特に4～6層は洪水砂を収集して整理した大形の土坑の埋土で、北壁土層でみると、深さは0.8mに及ぶものである。この土壌は調査地内でも平面的に溝状の土坑として検出している。上位から見ると、11層には洪水砂が残ることから、洪水直後の耕作土と考えられ、12・13層には11層の土壌が混じることから、11層に伴う床土と判断される。14層から下が島畑溝内の堆積土と推定する。島畑の盛土は17・21～23・26・27層があり、島畑の基盤層34・35層上から28層の耕作溝が掘られている。島畑の西側の溝SD02内の土壌は、14・15・18～20・24・25・29・32層があり、東側は部分的に確認しただけであるが、16・30層が溝内堆積土と判断する。34・35層の島畑基盤層を最終的に深さ1.6mにわたって断ち割り、標高12.25mまで掘削を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった(第170図・写真図版第116-3)。シルト質の土壌が堆積しており、池沼内の堆積環境であ



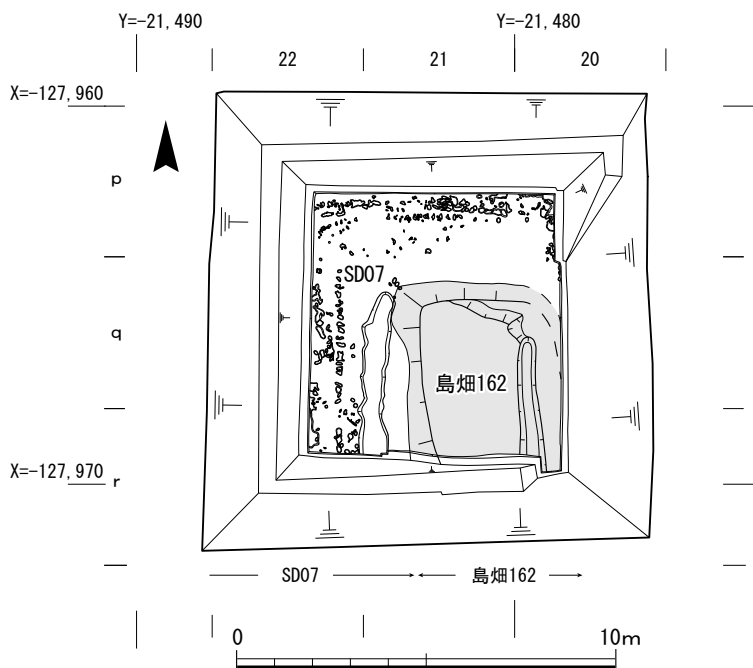
- | | |
|---|--|
| 1. 黒色 (5Y2/1) 中～粗粒砂<現代耕作土> | マンガンが混じる> |
| 2. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中～粗粒砂 | 19. 緑灰色 (7.5GY6/1) 粗砂質シルト<島畑溝部堆積 粗細粒砂がラミナ状に形成> |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗粒砂 洪水砂 | 20. 暗オリーブ灰色 (5GY7/1) 細砂質シルト<島畑 (23層) に伴う溝部堆積> |
| 4. オリーブ黒色 (5Y6/2) 粗粒砂<洪水砂整理土坑> | 21. 浅黄色 (7.5Y7/3) 細～中粒砂<島畑 (23層) に伴う盛土> |
| 5. 浅黄色 (5Y8/4) 粗粒砂<洪水砂整理 (17層がブロック状に混じる)> | 22. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細～中粒砂<島畑 (23層) に伴う盛土> |
| 6. オリーブ灰色 (10Y4/2) 細粒砂質シルト<整理土坑に伴う敷土> | 23. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂<島畑盛土 瓦器片出土> |
| 7. オリーブ色 (5Y5/6) 粗粒砂<洪水砂> | 24. 暗オリーブ色 (5Y4/1) 中粒砂質シルト<島畑に伴う溝部堆積> |
| 8. 赤褐色 (2.5YR4/8) 粗粒砂<洪水砂> | 25. 灰色 (N5/0) 極細粒砂シルト<島畑に伴う溝部堆積> |
| 9. 黒褐色 (2.5Y3/1) 中～粗粒砂<現代耕作土の整地土> | 26. 浅黄色 (2.5Y8/4) 中粒砂<島畑に伴う耕作土> |
| 10. 黄褐色 (2.5Y5/1) シルト質粗粒砂 | 27. 黄灰色 (2.5Y5/1) 中粒砂質シルト<島畑に伴う盛土> |
| 11. 灰色 (5Y6/1) シルト質粗粒砂<3層の洪水後の耕作土、15層との境に洪水砂が残る> | 28. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中粒砂質シルト<島畑に伴う耕作溝SD01 土器器片包含> |
| 12. 灰色 (7.5Y6/1) 中粒砂質シルト<11層と13層が混じる> | 29. 青灰色 (10BG6/1) シルト<島畑間溝最下層> |
| 13. 灰白色 (7.5Y7/1) 極細粒砂質シルト<11層に伴う床土> | 30. 緑灰色 (10GY5/1) 細粒砂質シルト<島畑に伴う溝部> |
| 14. にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト質中粒砂<最終段階の島畑盛土> | 31. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 中粒砂<島畑に伴う溝部> |
| 15. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂質シルト<土壌化が進んでいるが、島畑の溝部と考えられる> | 32. 明青灰色 (10BG7/1) シルト<基盤面が攪拌され29層と混じる> |
| 16. 緑灰色 (10GY6/1) 中粒砂質シルト<17層に伴う溝部> | 33. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 細粒砂<島畑に伴う溝部> |
| 17. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細～細粒砂<近世以降島畑盛土> | 34. 黄橙色 (10YR7/8) シルト質極細粒砂<島畑基盤面> |
| 18. オリーブ灰色 (5Y6/4) 中粒砂質シルト<17層島畑時の溝部堆積 | 35. 明黄褐色 (10Y7/6) 極細粒砂質シルト<島畑基盤面> |

第169図 F4 a 区北壁土層図(1/100)



1. 極細粒砂質シルト〈洪水性堆積、ヨシ類生痕多い〉
2. シルト〈洪水性堆積、ヨシ類生痕多い〉
3. 泥質シルト〈湖沼性堆積、ヨシ類生痕少ない〉
4. 泥〈湖沼性堆積、層位正位はヨシ類の影響が残る〉
5. シルト質泥（やや密）〈湖沼性堆積〉
6. シルト質泥〈湖沼性堆積、有機物が少量含〉
7. 泥質シルト質〈湖沼性堆積〉
8. 中～粗粒砂質シルト〈湖沼性堆積、洪水砂と考えられる 湧水層〉

第170図 F 4 a 区断ち割り内
北壁土層図(1/100)



第171図 F 4 b 区検出遺構平面図(1/200)

ったものと推測される。8層で砂質の強いシルト質の土壌があり、この層から湧水が認められた。河川内で堆積した砂層と堆積と判断する。

南側のb区の土層を東壁で見る(第172図)。北半部に重機の出入りの斜路を設けたため土層が記録されていない。1層が耕作土で、2・3層が洪水砂の堆積である。4層以下が島畑に伴う層序と判断する。5・6・9・11～14・16・17層が島畑に伴う溝内堆積土で、4・7・8・10・15・18・19層が島畑の盛土である。20・21層が島畑の基盤層である。

(3) 検出遺構(第168・171図)

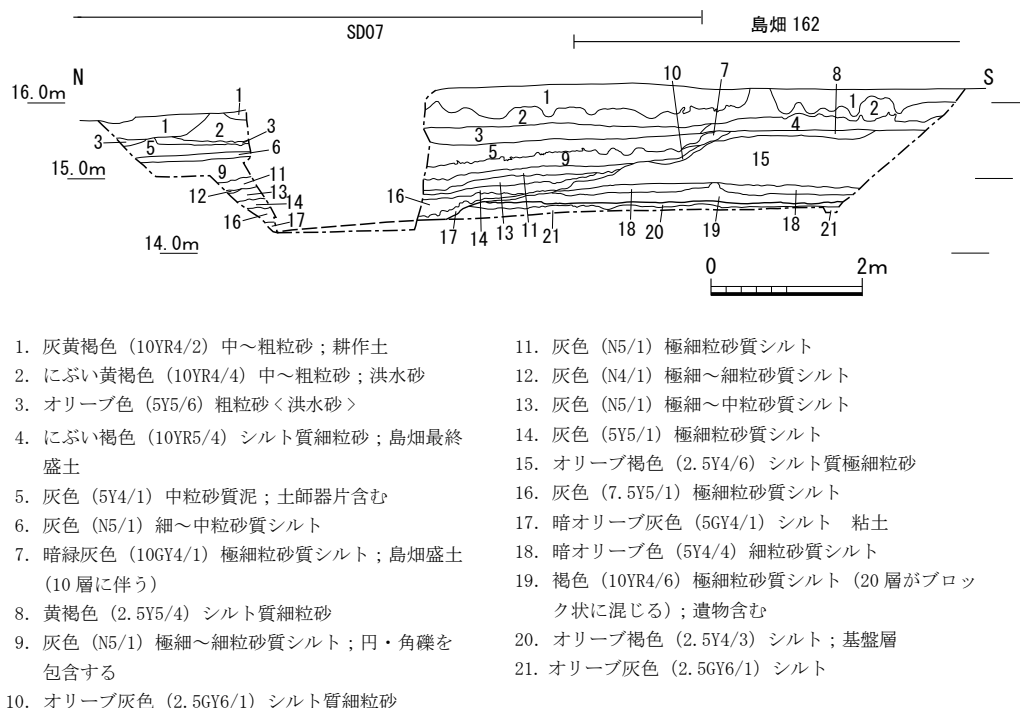
洪水砂整理土坑 a区の東辺で島畑127の東辺に沿って南北方向に検出した溝状の土坑である。深さは0.6～0.8mである。現代耕作土直下から掘られていること、埋土が粗砂を中心とする砂であることから、近代における洪水時の砂を整理・廃棄した土坑と判断する。

島畑127 a区の東半で検出した南北方向の島畑である。島畑は近代以降に洪水砂整理土坑で東辺が削平を受けていた。島畑上で耕作溝と判断するSD01を検出した。島畑は少なくとも3回の盛土がなされているのを確認できた。出土遺物から13世紀以降に造られたものと考えられる。最初期の島畑の規模は、東西の上辺で4.0m以上、下辺で4.5m以上、南北19.0m以上、溝底からの比高は0.75mである。

溝SD01 島畑127の上で検出した南北溝である。耕作に伴うものと考えられる。検出長18.9m、幅0.6m、深さ0.3mである。

溝SD02 a区の島畑127の西側に掘られた溝である。検出した幅は2.5mである。瓦質の鉢(第174図465)、須恵器杯蓋(466)が出土している。

流路NR04・05(第173図) a区の中央付近を北西-南東に斜行する2条の流路である。約6

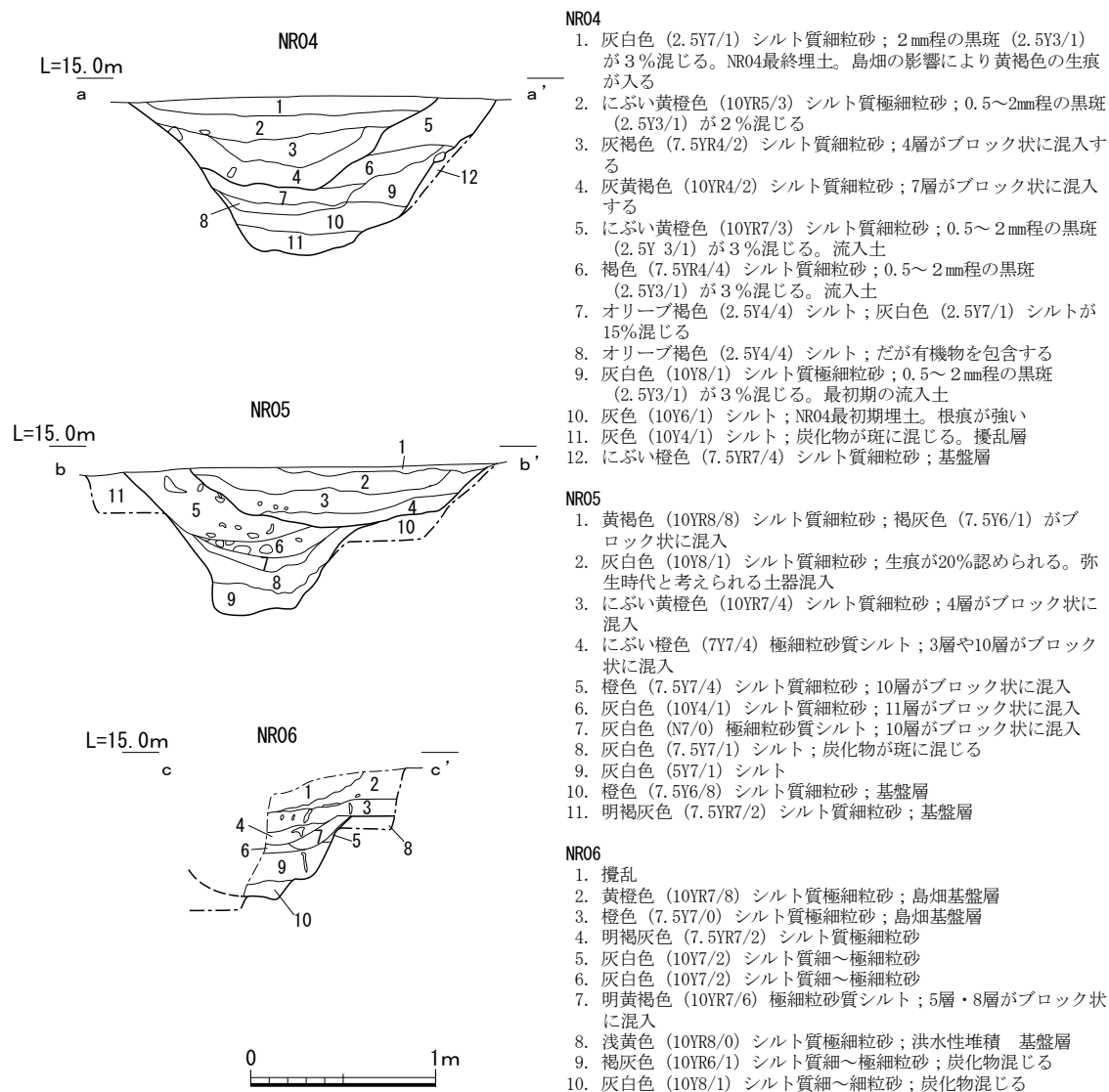


第172図 F 4 b区東壁土層図(1/100)

mの空閑地を挟んだほぼ平行した流路で、底面には多数の小ピットが穿たれている。調査時には人工の溝と判断していたが、令和2年度の第14次調査のF 8区でこの溝の東側延長上の溝を検出した。その際に地質の専門家のご教示により、氾濫流路という自然流路の痕跡であることのご指摘を得た。河川の満水時に自然堤防が破堤すると、急激な流れが低地に向かい流れ込み（この急激な流れを氾濫流路と呼ぶ）、この流れが地面を抉った痕跡を氾濫流路痕という。流路の特徴としては、流路の底は浅くなったり深くなったりして上下に波打っていること、底面には小石等が渦巻いて削り込んだ小ピット状のものが認められること、流れの方向は直線状ではなく蛇行していること、泥状の軟弱な土壌を水が抉ることで泥が掻き揚げられて堆積するため掘形が明瞭でないことなどを特徴とするものである。島畑が造成されて島畑の横に溝SD02が掘削されたことにより、氾濫流路の検出高は西半では見かけ上浅くなっている。最大の深さは島畑127上で、流路NR04が深さ0.86m、流路NR05が深さ0.75mである。流路NR04の検出長9.3m、幅2.15m、流路NR05の検出長9.7m、幅2.25mで、埋土中から古墳時代初頭と考えられる土器小片が出土している。

流路NR06（第173図） a区の島畑127の北辺で検出した東西方向の流路である。全長4.4m、幅0.7m以上、深さ0.7mを測る。遺物は出土していない。検出面が島畑の基盤層よりも下位であることから、島畑に先行する溝であり、遺物の出土もないことから、NR04・05と同じく、氾濫流路と判断する。

島畑162 b区で検出した島畑である。調査区の南東部で島畑の北西隅を検出した形となる。周辺の調査でこの島畑と同一のものと判断される島畑は確認できていないため、方向は不明である。最初期の島畑の規模は、東西の上幅が約3.5m、下幅が4.5m以上、南北の上幅3.1m、下幅4.6



第173図 F 4 a 区流路内土層図(1/40)

mを検出した。溝底からの比高は0.25mである。

溝S D07 b区の島畑162の最初期の段階で、島畑の西・北側に掘られた溝である。底面で小ピットを多数検出した。耕作跡と判断する。

耕作跡(写真図版第114) b区の島畑162の北側・西側のS D07の底面で検出した。0.03~0.1m程度の小ピット状の凸凹が列をなして数条連なるもので、島畑に平行して検出した。耕作に伴う鋤痕・足跡と判断する。

(4)小結

島畑を2基を検出した。氾濫流路NR04~06を検出し、頻繁に洪水による氾濫流路が形成されていることが判明した。特にNR04・05については、南東側の調査区のF 8 b区の中央部から続いている同一の流路と判断され、約62mにわたって検出したこととなる。

6) 出土遺物(第174図)

(1) F 1 区

瓦器、土師器、陶磁器片が出土しているが、実測し得るものはない。

(2) F 2 区(460～462・467)

460は瓦器碗でS D01から出土した。内面の圈線ミガキはやや疎らながら施されているが、外面のミガキはなされていない。12世紀中葉。461は陶器の碗底部で重機による表土掘削時にトレンチ北側から出土した。462は陶器のすり鉢で西壁断ち割り内から出土した。467は煙管の吸い口で、島畑130の東溝S D 05内から出土した。

(3) F 3 区(463・464)

463は瀬戸灰釉陶器の鉢で廃土中、464は土師器甕で、遺構面精査中に出土した。

(4) F 4 区(465・466・468)

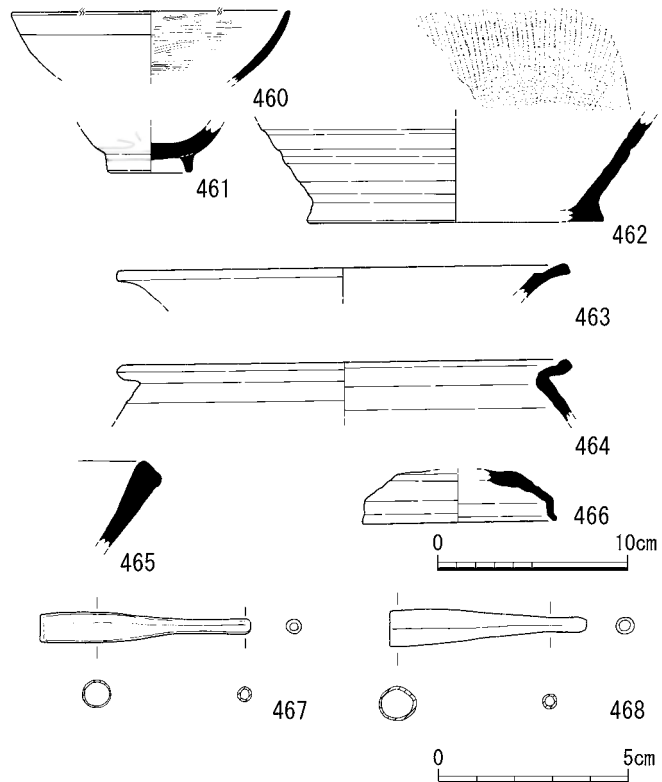
465は瓦質の鉢で、口縁部下端を強くなでているため、下方向に突出する。島畑162の西溝から出土した。466は須恵器杯蓋で、天井部はヘラ起こし後未調整である。島畑基盤層上の19層中から出土した。TK217。煙管の吸い口で、北壁中から出土した。

7) F 地区のまとめ

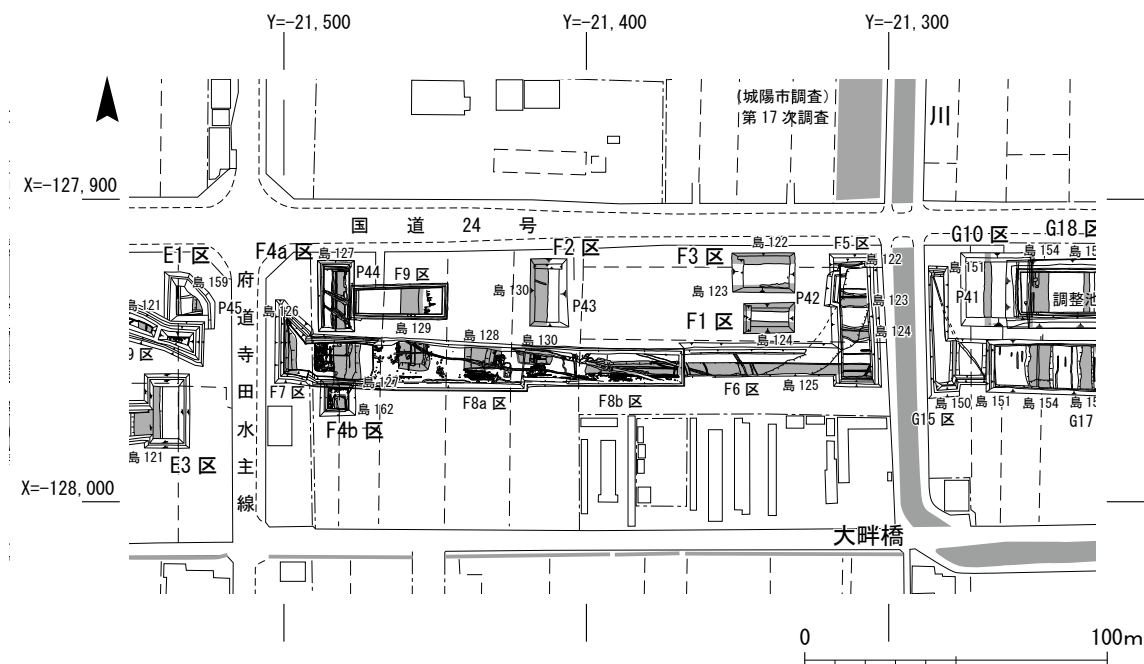
F 地区では新名神関係事業において、1～4区の4地区で5か所の発掘調査を実施した。基本的に中世段階の島畑を6基と氾濫流路と判断される自然流路をF 4区で検出ただけで、同時期の集落跡や中世以前の遺構は検出できなかった。

第175図は府道寺田水主線と今池川の間でF 地区において、新名神関係調査4か所と国道24号関係調査5か所、都合9地区の調査で検出した主要遺構の配置図である。現在までにF 地区で確認した島畑は10基を数える。注目されるのは、F 8 b・6区で、東西方向の島畑125が分布しており、総長約95mを確認できるが、東端は未確認であるため、さらに東に延び、ほぼ1町分の長さの島畑と言える。その北側でF 1・3・5区で東西方向の島畑122～124を検出しており、東西方向の1町分の長さの島畑が分布しているものと推定される。条里地割については12章第1節で簡単に考察を加えたい。

F 4区で検出した自然流路は、国道24号関係遺跡で調査を実施したF 8区やF 6区でも検出されており、総長は62mを測るものである。遺物の出土が少ないため時期は不明であるが、島畑の下層で見られることから、それ以前であることは間違いない。氾濫流路の痕跡は、湿地における軟弱な土壌の上に急激な流れが生じることでその痕跡が残ると考えられている。その生成過程を



第174図 F 地区出土遺物



第175図 水主神社東遺跡F地区の調査(1/2,500)

このように捉えると、氾濫流路が土壤に痕跡を残した時点では、この地点は水を湛えた湿地といった環境下にあったといえる。そして、13世紀に至るまで人為的な遺構が確認できないという点を重視すると、島畑を造営する直前まで、F地区は湿潤な環境下であり、人が利用できる土地ではなかったと判断される。このことは、中世をはじめとして、それ以前の遺物がほとんど出土しないという点でも整合的である。また、中世以降も島畑が延々と造営されている点を考慮すると、近代にいたるまで人が住まうにはやや不都合な土地であったのであろう。(岩松 保)

11. 水主神社東遺跡G地区の調査

1) 調査の経過

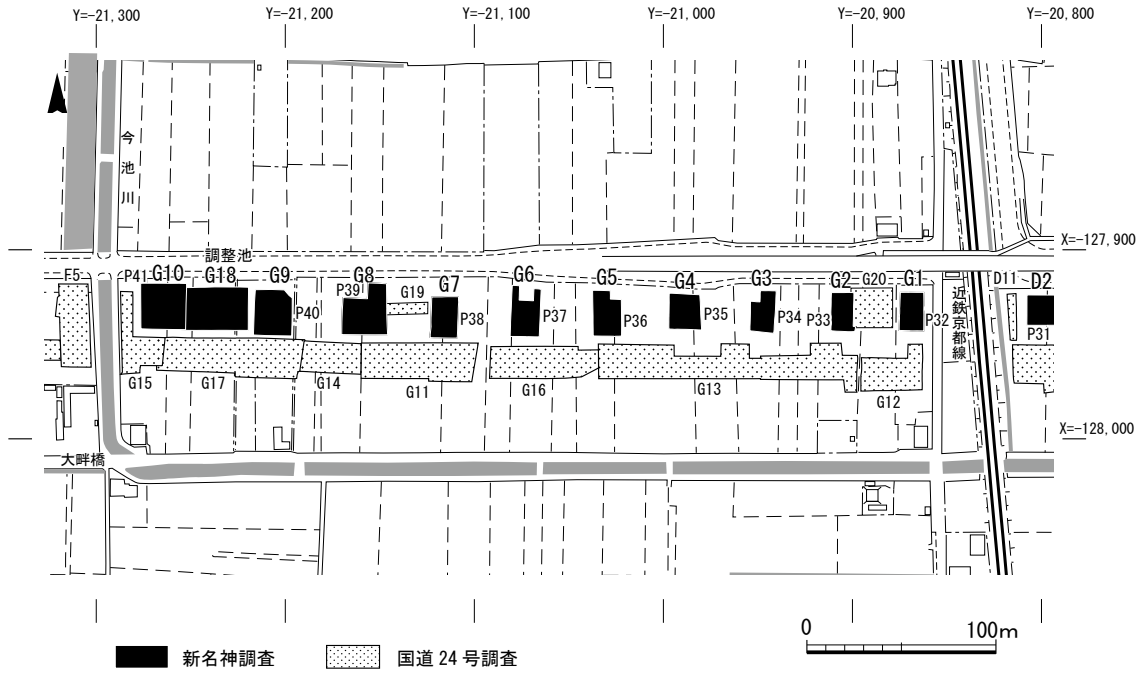
G地区は今池川から東、近鉄京都線よりも西側の調査区である。橋脚番号32～41および調整池建設に伴う発掘調査地で、橋脚については東から西に向けて順次調査を実施した。G1～4区は平成29年度の第8次調査、G5～10区は平成30年度の第11次調査、調整池建設地のG18区は令和7年度の第18次調査として実施した。それぞれの調査区で、中世以降の島畑を検出した。

これら新名神建設に伴う一連の調査の南側では、国道24号拡幅に伴う発掘調査を当調査研究センターが実施している。平成29年度にはG11・12区、平成30年度にはG13・14区、令和元(平成31)年度にはG14～16区、令和3年度にはG17区、令和7年度にはG19・20区の調査を実施した。

2) G1区の調査

(1) 調査の概要

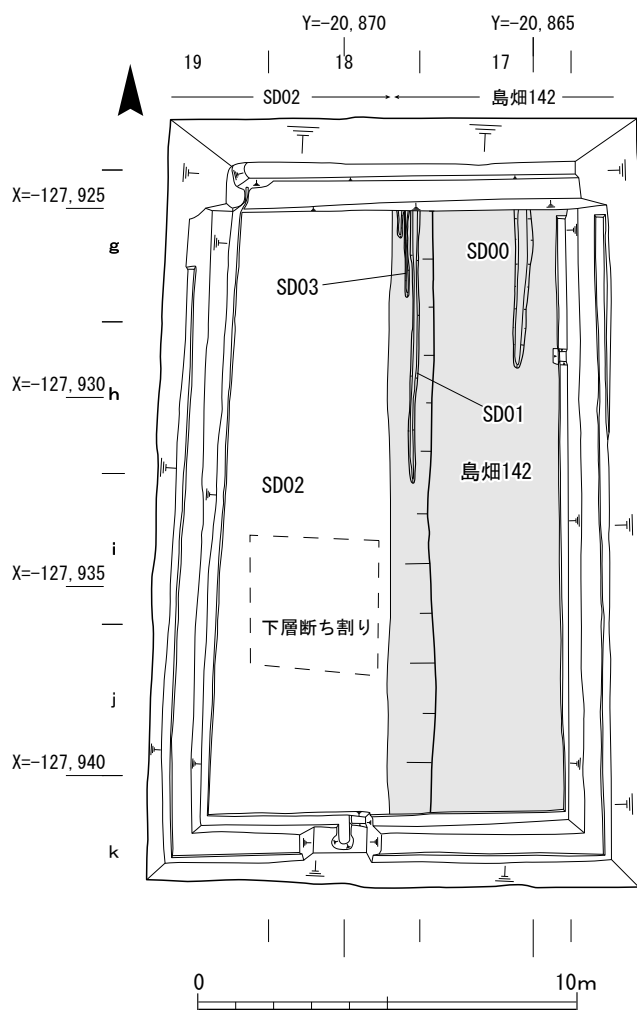
平成29年度に水主神社東遺跡第8次調査として実施した。南北20.3m、東西12.8mの調査区である。調査は2面で実施し、第1面では島畑1基と耕作溝を検出し、第2面では島畑の最初期の段階のものを検出した。島畑以前の遺構は確認できなかった。第2面での確認作業後、断ち割り



第176図 水主神社東遺跡G地区の調査(1/4,000)

付表10 水主神社東遺跡G地区の調査(新名神・国道24号関係)

調査区	調査回数	調査年度	関係事業	構造物等	備考
G 1	第 8 次	平成 29 年度 (2017)	新名神	P32	
G 2				P33	
G 3				P34	
G 4				P35	
G 11	第 9 次	平成 29 年度 (2017)	国道 24 号	道路	
G 12					
G 13	第 10 次	平成 30 年度 (2018)	国道 24 号	道路	
G 14				道路	次年度継続調査
G 5	第 11 次	平成 30 年度 (2018)	新名神	P36	
G 6				P37	
G 7				P38	
G 8				P39	
G 9				P40	
G 10				P41・調整池	
G 14	第 12 次	令和元年度 (平成 31) (2019)	国道 24 号	道路	前年度より継続調査
G 15					
G 16					
G 17	第 16 次	令和 3 年度 (2021)	国道 24 号	道路	
G 18	第 18 次	令和 7 年度 (2025)	新名神	調整池	
G 19	第 19 次	令和 7 年度 (2025)	国道 24 号	調整池	
G 20					

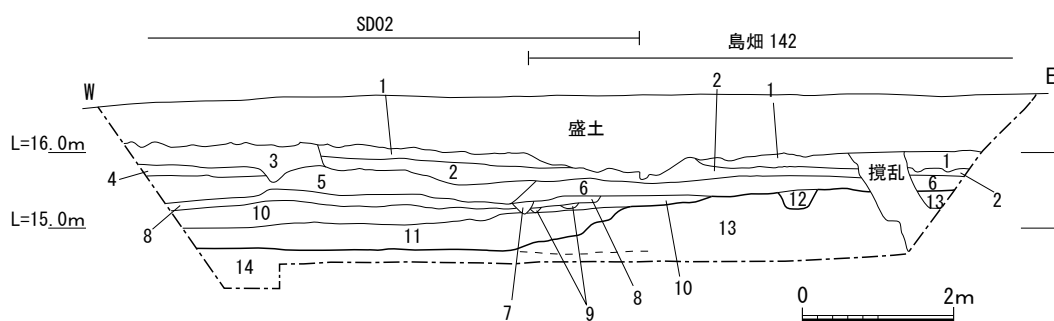


第177図 G1区検出遺構平面図 第1面(1/200)

を行ったところ、自然流路を確認した。流路内からの遺物はなく時期は不明である。

(2)基本層序(第178図)

13・14層が基盤層で、基盤層を掘り込んで島畑の高まりが形成されている。この段階での島畑上への盛土は土層の観察では認められなかった。11層が島畑西側溝SD02内の最下層の堆積土と判断され、その上に10層が溝内に堆積している。この上位から耕作に関わる小溝(9層)が掘り込まれている。島畑の本体部分である13層上面とほぼ同じ高さまで8層で埋まった段階でも、耕作溝と判断される土層が認められる(7層)。この後、島畑は改めて西側に大きく拡張されたようで、6層が島畑の本体部分である13層の上位を覆って



- | | |
|--|---|
| 1. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質細粒 | 8. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質細粒砂; 酸化マンガン含む |
| 2. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質細粒砂; 暗赤褐色酸化マンガン含む | 9. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質極細粒砂 |
| 3. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質細粒砂; 酸化マンガン | 10. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質極細粒砂 |
| 4. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質細粒砂 | 11. 黄灰色 (2.5Y5/1) 中粒砂 |
| 5. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質細粒砂; 酸化マンガン含む | 12. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト質細粒砂; 酸化鉄粒子少量含む |
| 6. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質細粒砂; 明黄褐色酸化鉄多く含む | 13. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中粒砂に酸化鉄・酸化マンガン粒子多量に含む; 基盤層 |
| 7. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質極細粒砂 | 14. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 白い中粒砂を少量含む中粒砂; 基盤層 |

第178図 G1区北壁土層図(1/100)

いる。5層はこの段階の島畑に伴う溝内の埋土となる。1～4層は現代の耕作に伴う土壌である。調査は、10層上面(第1面)と13・14層の上面(第2面)で実施した。第2面では島畑の盛り上がりを確認しただけである。

下層遺構の確認作業後、深さ約1.9mの断ち割りを行ったところ、自然流路を確認した。出土遺物はなく、時期は不明であった。他の遺構は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第177・179図)

島畑142 南北方向の島畑で、西辺のみの検出である。現代の攪乱により上部の詳細は不明であるが、断面の観察から少なくとも1回の盛土が行われている。第1面での検出長15.1m、上幅3.5m、下幅4.4m、比高0.2m、第2面では検出長15.1m、上幅3.1m、下幅4.5m、比高0.75mを測る。

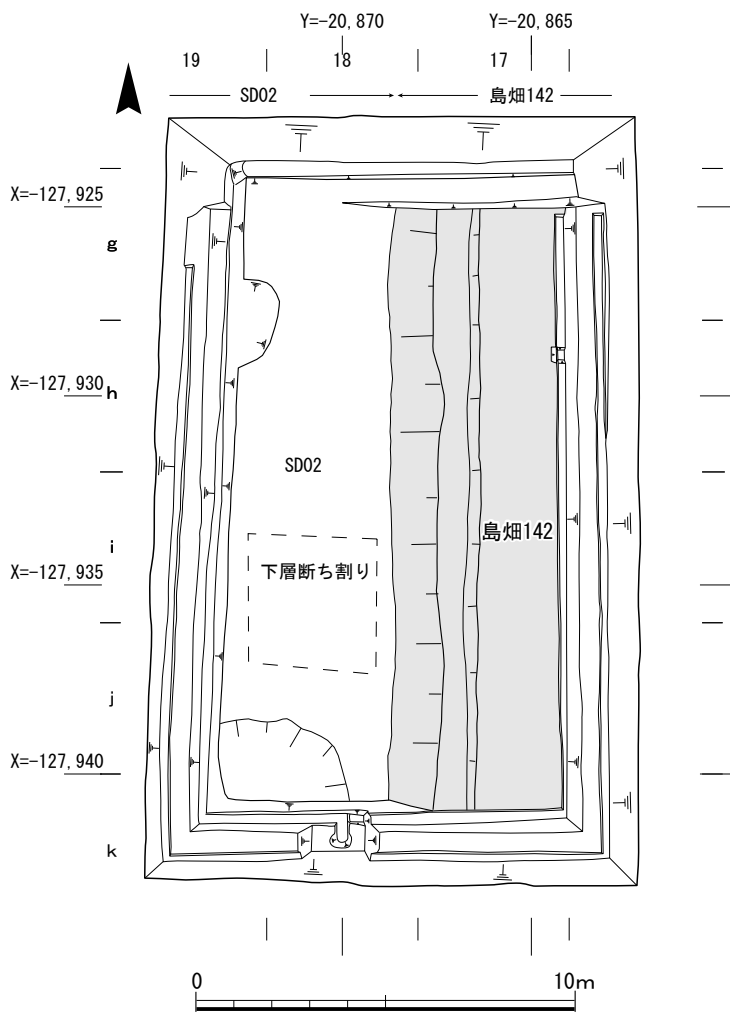
溝SD00 第1面の島畑上で検出した溝である。検出長4.2m、幅0.5m、深さ0.1mである。

溝SD01 第1面で検出した溝で、島畑142と西溝SD02との境界付近で検出した溝である。耕作に関わる溝と考えられる。検出長7.2m、幅0.25m、深さ0.1mである。

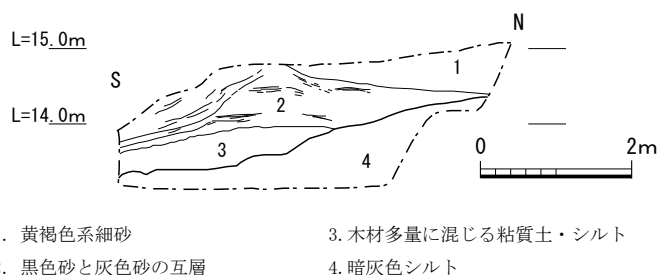
溝SD02 第1面と第2面で検出した島畑142の西側に掘削された溝である。底面はほぼ平坦であるが、北に向けて下る傾斜をもつ。第2面での検出長15.8m、上幅6.0m、下幅4.7mである。

溝SD03 第1面で検出した溝で、拡張後の島畑の斜面で検出した溝である。検出長2.3m、幅0.15m、深さ0.05mである。

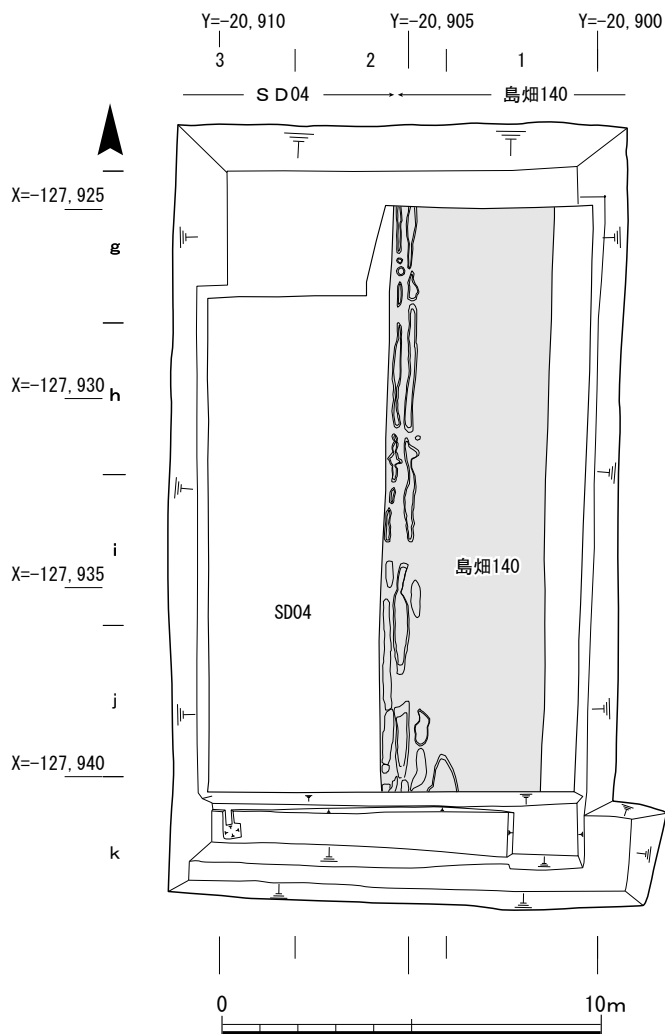
自然流路(第180図・写真図版第119-3) 下層遺構の確認作業後の断ち割り内で検出した。埋土は2・3層で、3層には炭化した木材が多く含まれる。検出幅2.5m、深さ0.4mの自然流路で、



第179図 G1区検出遺構平面図 第2面(1/200)



第180図 G1区断ち割り内流路土層図(1/100)



第181図 G2区検出遺構平面図 第1面(1/200)

氾濫に伴うものと推測される。流路内からの遺物はなく時期は不明である。

(4) 小結

島畑1基を検出した。島畑が改変されて西側に拡張したことがうかがえる。下層の断ち割り内で流路を確認したが、詳細は不明である。

3) G2区の調査

(1) 調査の概要

平成29年度に水主神社東遺跡第8次調査として実施した。橋脚33の建設予定地である。南北22.5m、東西12.4mの調査区である。2面で調査を実施し、南北方向の島畑1基と島畑上で耕作痕、島畑西側の溝内で不定形の溝を確認した。島畑の基盤層の上面で、遺構の検出に努めたが、島畑以前の遺構は確認できなかった。最終的に約2.9mの断ち割りをを行い、下層遺

構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。島畑の検出時に土師器、瓦器などの中世以降の遺物が出土している。

(2) 基本層序(第183図)

1・2層は水平堆積で、現代の耕作土に伴う層序である。3・4層は耕作に伴う溝・畦等と考えられ、5層から下位が島畑に関する層序となる。島畑本体に伴う層序と捉えられるのが、8・11・14・16・19層の高まりが島畑の盛土と判断される。島畑西溝SD04の埋土は、7・10・12・17・18層で、それぞれの段階の島畑に伴うものと考えられる。東溝SD05の埋土は5・6・13・15層である。9層は、第1面でその平面形を検出し島畑上の耕作溝の埋土である。調査は2面で行い、第1面は島畑上が14層直上、島畑溝SD04内は17層上面で調査を行い、第2面は基盤層である19層の上面で、最初期の島畑の直上で調査を行った。

下層を2.9m断ち割り、標高11.3mまで層序の観察を行ったが、水平にシルト質の土壌が厚く堆積しており、遺構・遺物は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第181・182図)

島畑140 島畑は調査区の南北の外側に延びるため、全長は不明である。検出長17.4mを測る。2回の盛土が確認でき、現代近くまではほぼ同じ位置で島畑を造営していたと考えられる。当初は基盤層を削り込んだ19層、次いで、16・14・8・11層を盛り上げて島畑をかさ上げしている。第1面で14層上面での耕作痕を検出している。第1面で上幅4.0m、下幅5.5m、第2面で上幅1.4m、下幅3.2m、溝底との比高は西溝SD04とは0.4m、東溝SD05とは0.5mを測る。

溝SD04 島畑140に伴って掘削された幅広の溝である。検出した上幅6.4m、下幅5.8mである。溝底は北に向けて低くなる。溝の下面で南北方向の溝群を検出した。耕作に伴う溝と判断する。

溝SD05 島畑140の造営に伴い東側に掘られた溝である。検出した上幅2.3m、下幅0.9～1.4mである。

耕作溝 第1面で検出した島畑140の西辺の幅約1mの範囲で検出した溝群である。長さ0.2～3.4m、幅0.1～0.4mの南北方向の小溝群で、底面は凸凹にうねっている。何らかの耕作に伴う痕跡と考えられる。島畑の縁辺部でのみ検出したことから、平坦部の溝痕跡は消去されている可能性が高く、島畑上に盛土する際に島畑の上辺の土をいったん平坦に削り取っていることが想定できる。

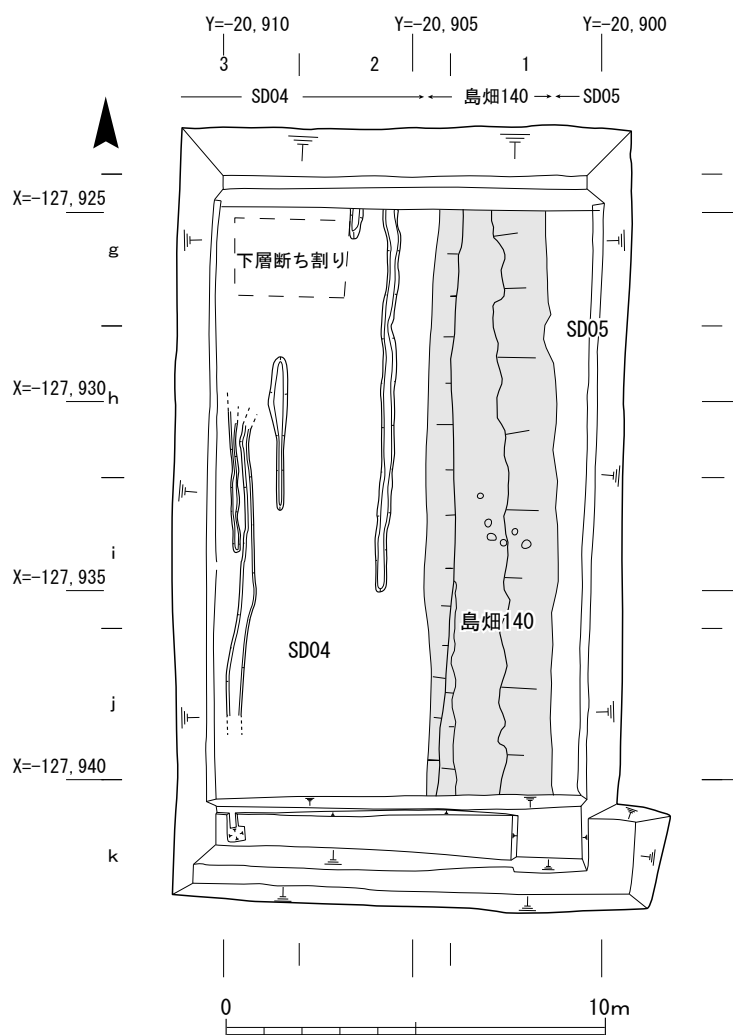
(4)小結

島畑を1基検出した。島畑の耕作溝が島畑上の裾部分でのみ検出されることから、島畑を盛り上げる際に島畑上を一旦平坦に揃えたことがうかがえる。

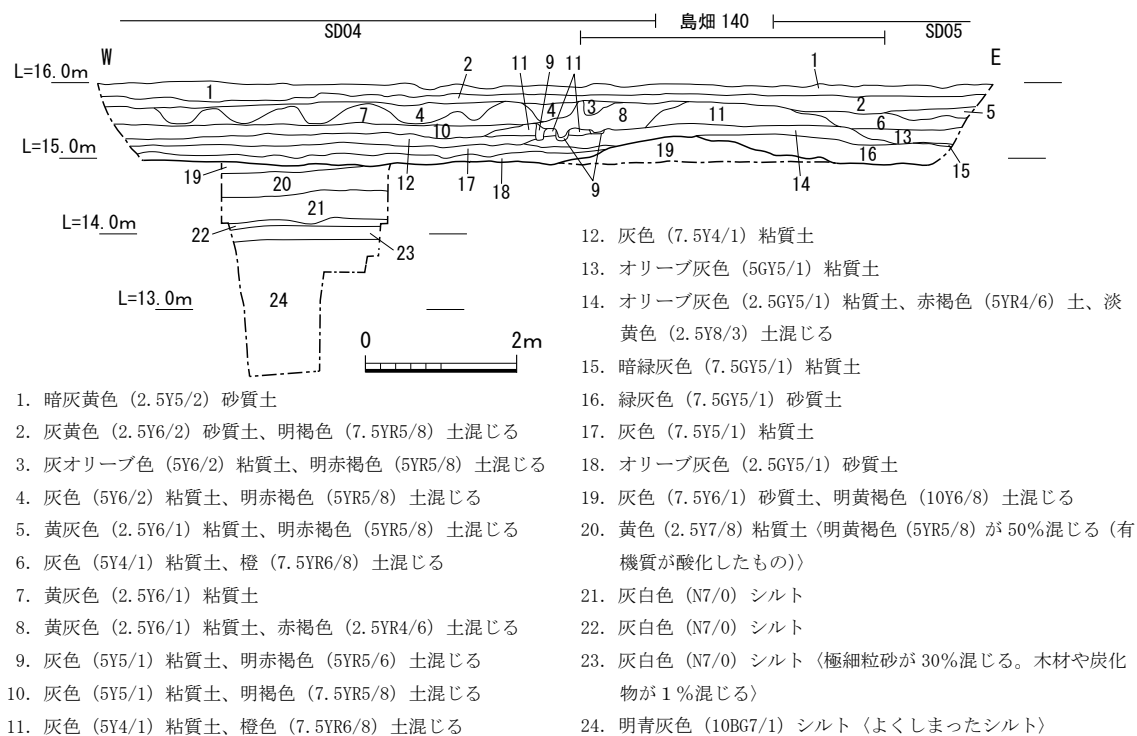
4) G 3 区の調査

(1)調査の概要

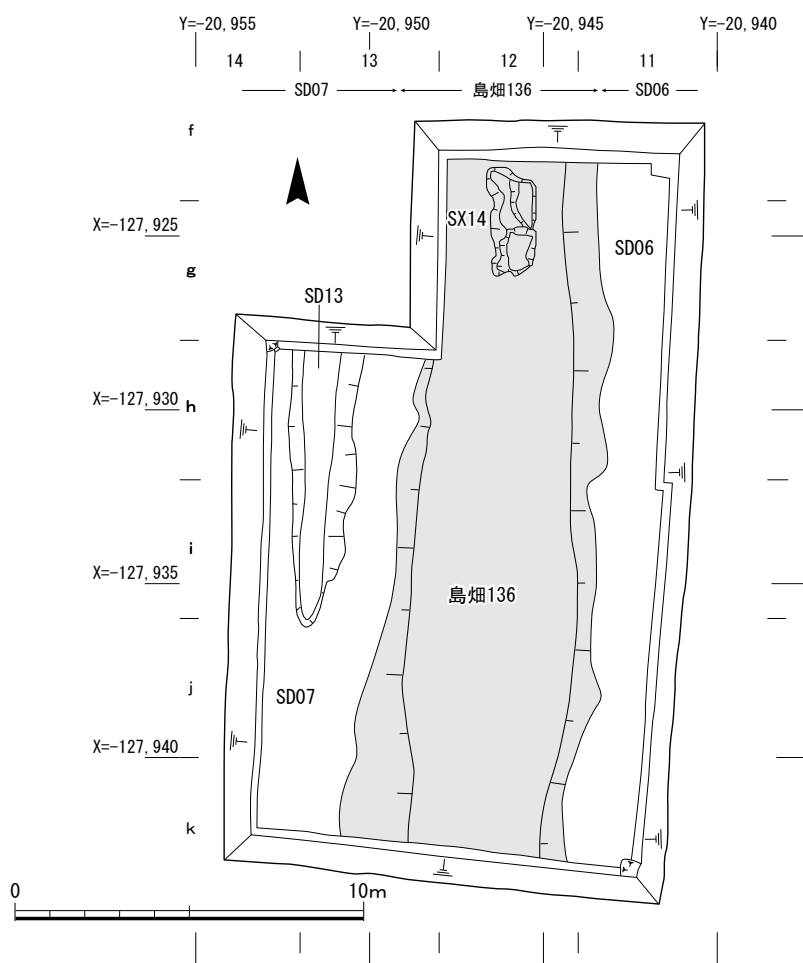
平成29年度に水主神社東遺跡第8次調査として実施した。橋脚34の建設予定地である。南北22.3m、東西13.2mの調査区である。南北方向の島畑136を検出した。南・北端は調査区外に広がり、



第182図 G 2 区検出遺構平面図 第2面(1/200)



第183図 G 2区北壁土層図(1/100)



第184図 G 3区検出遺構平面図(1/200)

東・西端は調査区内で確認した。島畑の基盤層直上から弥生時代の遺物が出土したが遺構は検出できなかった。島畑の調査終了の後に地山まで掘り下げ、下層の遺構・遺物の有無を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

(2)基本層序(第185図)

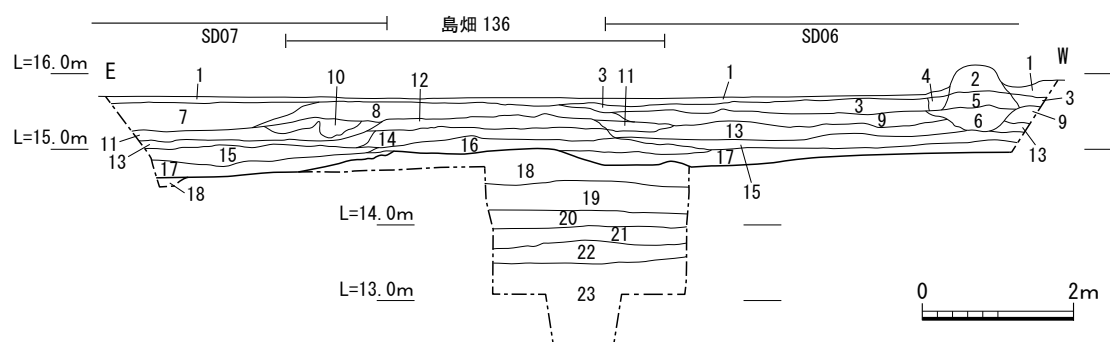
1層が現代耕作土で、4～6層については、現代の畦畔である2層の下にあることから、古い段階の畦畔および地境溝と推定され、3層はその時点の耕作土と考えられる。8・12・14・16層が島畑上の盛土で、18層上面が基盤層を掘り込んだ最初の島畑本体であり、島畑西溝のS D07底面と判断する。盛土8層の島畑に対応する溝の埋土が7・9層で、12層が11層、14層が13層、16層が15層で、最初期の島畑の埋土が17層と推定される。重機により16・17層までを掘削し、以下手掘りで調査を行い、18層上面で精査を行った。

島畑の調査後、下層を2.2m断ち割り、標高13.3mまでの層序を観察したが、シルト・粘質土が厚く水平に堆積しており、遺構・遺物は確認できなかった。

(3)検出遺構(第184図)

島畑136 南北方向の島畑である。検出長19.6m、上幅4.85m、下幅6.6mを測る。東溝S D06との比高は0.2m、西溝S D07との比高は0.2mである。

島畑東溝S D06 島畑136の東側を画する溝で、20.5mにわたって検出した。上幅4.5m、下幅2.6～4.3mである。北に向けて下る傾斜を有する。



- | | |
|--|--|
| 1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 | (5YR5/8) 土混じる> |
| 2. 灰色 (7.5Y4/1) シルト<粗砂混じる、明褐色 (7.5YR5/8) 土混じる> | 12. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土～シルト |
| 3. 灰色 (5Y5/1) シルト<明赤褐色 (5YR5/8) 土混じる (植物) | 13. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土～シルト<明褐色 (7.5YR5/6) 土混じる、灰白色 (10YR8/2) 土わずかに混じる> |
| 4. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土～シルト<礫混じる、明赤褐色 (5YR5/8) 土混じる> | 14. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土～シルト<細砂わずかに混じる、橙 (7.5YR6/6) 土混じる> |
| 5. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト<礫混じる、明赤褐色 (5YR5/8) 土、灰白色 (7.5YR8/1) 土混じる> | 15. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土～シルト |
| 6. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土～シルト<橙 (5YR6/8) 土混じる、粗砂混じる> | 16. 灰色 (10Y5/1) 粘質土～シルト<細砂混じる> |
| 7. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト<細砂混じる、明褐色 (7.5YR5/8) 土混じる> | 17. 緑灰色 (10G5/1) 砂質土 |
| 8. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト<明褐色 (7.5YR5/8) 土混じる> | 18. オリーブ灰色 (10Y5/2) 砂質土<明褐色 (7.5YR5/6) 土混じる> |
| 9. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘質土～シルト<黄橙色 (7.5Y7/8) 土混じる、灰白色 (7.5Y8/1) わずかに混じる> | 19. 黄色 (2.5Y7/8) 粘質土 (明黄褐色 (5YR5/8) が50%混じる (有機質が酸化したもの)) |
| 10. 灰色 (7.5Y6/1) シルト、橙色 (7.5YR6/8) 土混じる | 20. 灰白色 (N7/0) シルト |
| 11. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土～シルト<明赤褐色 | 21. 灰白色 (N7/0) シルト |
| | 22. 灰白色 (N7/0) シルト (極細粒砂が30%混じる。木材や炭化物がごく少量混じる) |
| | 23. 明青灰色 (10BG7/1) シルト (よくしまったシルト) |

第185図 G3区南壁土層図(1/100)

島畑西溝 S D07 島畑136の西側を画する溝で、14.1mにわたって検出した。上幅2.6m、下幅1.5～2.5mである。下面で S D13を検出した。

不明土坑 S X14 (写真図版第123-1) 基盤層直上から弥生土器片が出土したため、周辺の精査を入念に行ったが遺構は存在しなかった。自然の落ち込み内に流入土とともに土器が紛れ込んだものと判断した。平面形は不整形で、底面は一様ではない。検出長3.1m、幅1.3m、深さは0.1～0.25mである。

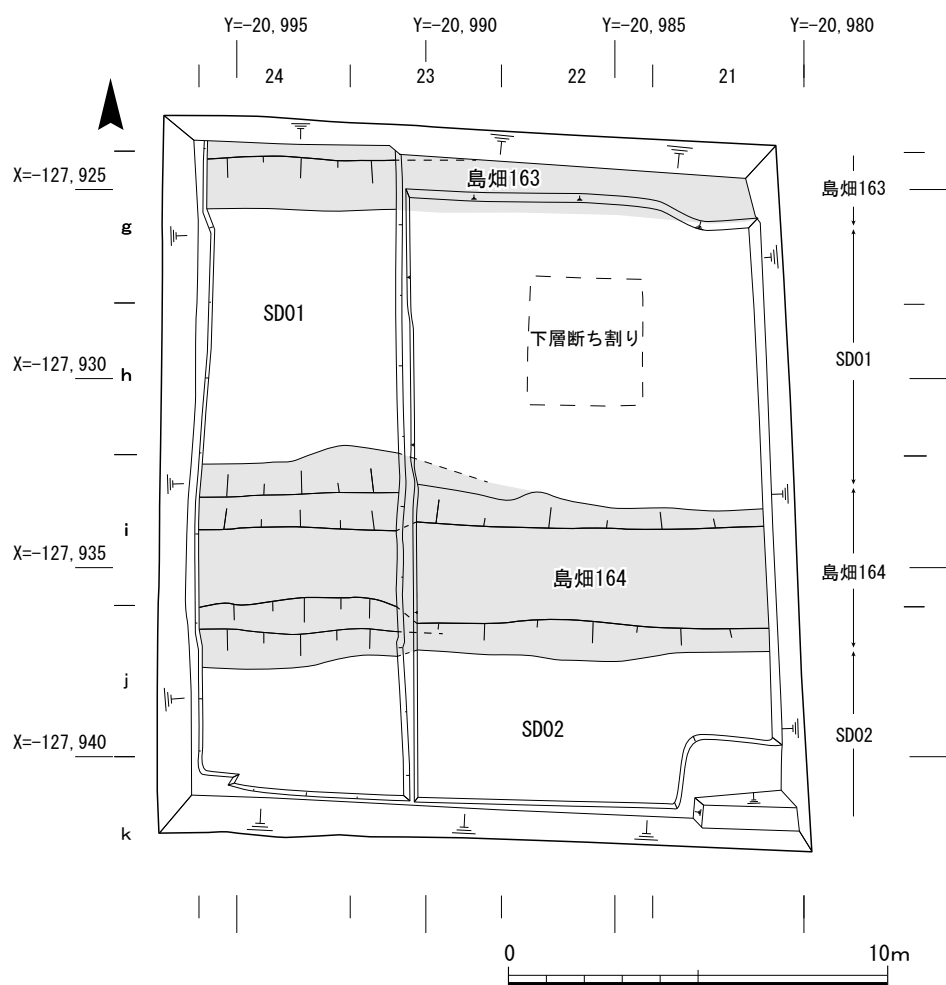
溝 S D13 S D07の下面で検出した。南半では検出できていない。埋土は S D07の最下面を埋める15層であり、S D07の北半では15層が最下層の堆積となる。水の流れによる挟り込みと判断され、北に下る傾斜を有する。検出長8.15m、幅2.1m、深さは最大で0.2mである。

(4) 小結

島畑 1 基を検出した。島畑は 4 回程度にわたって盛り上げられて改変されている。国道24号拡幅関係で調査を実施した G13区で検出した島畑と南北に連なり、同一のものと判断される。また、弥生土器片が出土し、周辺に同時期の集落があった可能性がある。

5) G 4 区 の 調 査

(1) 調査の概要



第186図 G 4 区検出遺構平面図(1/200)

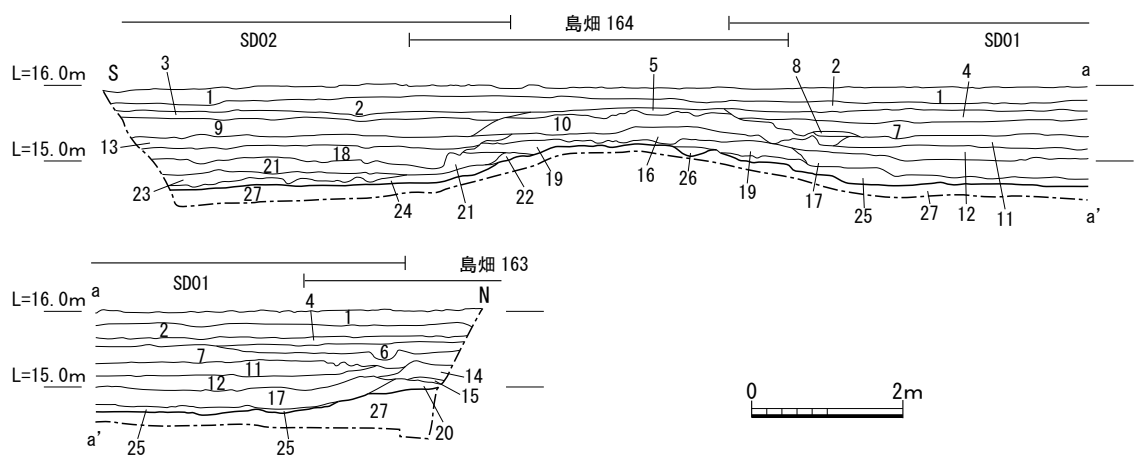
平成29年度に水主神社東遺跡第8次調査として実施した。橋脚35の建設予定地である。南北22.5m、東西19mの調査区である。東西方向の島畑163・164を検出した。島畑163は調査区の北辺で確認し、島畑の一部を確認しただけで詳細は不明である。島畑164は調査区の中央部で検出した。土層の観察より近代までは島畑の利用が行われていたようである。中世以降の土師器、瓦器、陶磁器などが出土している。島畑基盤層上で、遺構の検出に努めたが、遺構は確認できなかった。また深さ約2mの断ち割りを行ったが、下層遺構は確認できなかった。

(2)基本層序(第187図)

25層が基盤層で、この層を掘り込んで最初期の島畑163・164が造られている。それぞれ島畑163には14・15・20層が盛り上げられ、島畑164には5・10・16・19・22・24層が盛り上げられている。島畑163は2～3回、島畑164は3～5回にわたって盛り上げられたことが見て取れる。3・9・13・18・21・23・24層が島畑164の南側溝SD02内の堆積土で、4・7・8・11・12・17・25層が島畑163と島畑164を画する北溝SD01内の埋土である。最終的に深さ約1.8mの断ち割りを行ったところ、縄文土器深鉢片が出土したが、下層遺構は確認できなかった(第188図)。

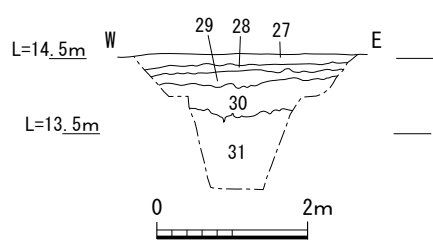
(3)検出遺構(第186図)

島畑163 調査区の北辺で確認した東西方向の島畑で、南辺の一部を確認しただけで詳細は不明である。検出長14.5m、上幅0.35m、下幅1.75mを測る。島畑溝との比高は最大で0.25mを測る。



- | | |
|--|---|
| 1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土; 現代耕作土 | 15. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土; 白い細粒砂が極少量混じる。 |
| 2. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細粒砂質; 1層に併う床土 | 島畑盛土 |
| 3. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 | 16. 暗オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 |
| 4. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土; 耕作土 | 17. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂を少量含む粘質土 |
| 5. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土; 島畑盛土 | 18. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土 |
| 6. 灰オリーブ色 (5.7Y5/2) 粘質土; 4層に併う床土 | 19. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土 |
| 7. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土; 盛土 | 20. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土; 15層より粘性高め。島畑盛土 |
| 8. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 | 21. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土; 灰白色 (N8/0) 極細粒砂が極少量混じる |
| 9. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土; 黒斑が多くみられる | 22. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 |
| 10. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土; 黒斑あり (9層より少なめ) | 23. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト |
| 11. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土; 白い細粒砂が極少量混じる | 24. オリーブ灰色 (10Y5/2) 極細粒砂を極少量含む粘質土 |
| 12. 緑灰色 (7.5GY6/1) 粘質土 | 25. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土 |
| 13. 灰オリーブ色 (10Y4/2) 粘質土; 淡黄色 (5Y8/3) の極細粒砂が少量混じる | 26. 緑灰色 (10GY5/1) 粘質土; 25層の土が少量混じる |
| 14. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質土; 盛土 | 27. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘質土 基盤層 |

第187図 G4区西壁土層図(1/100)



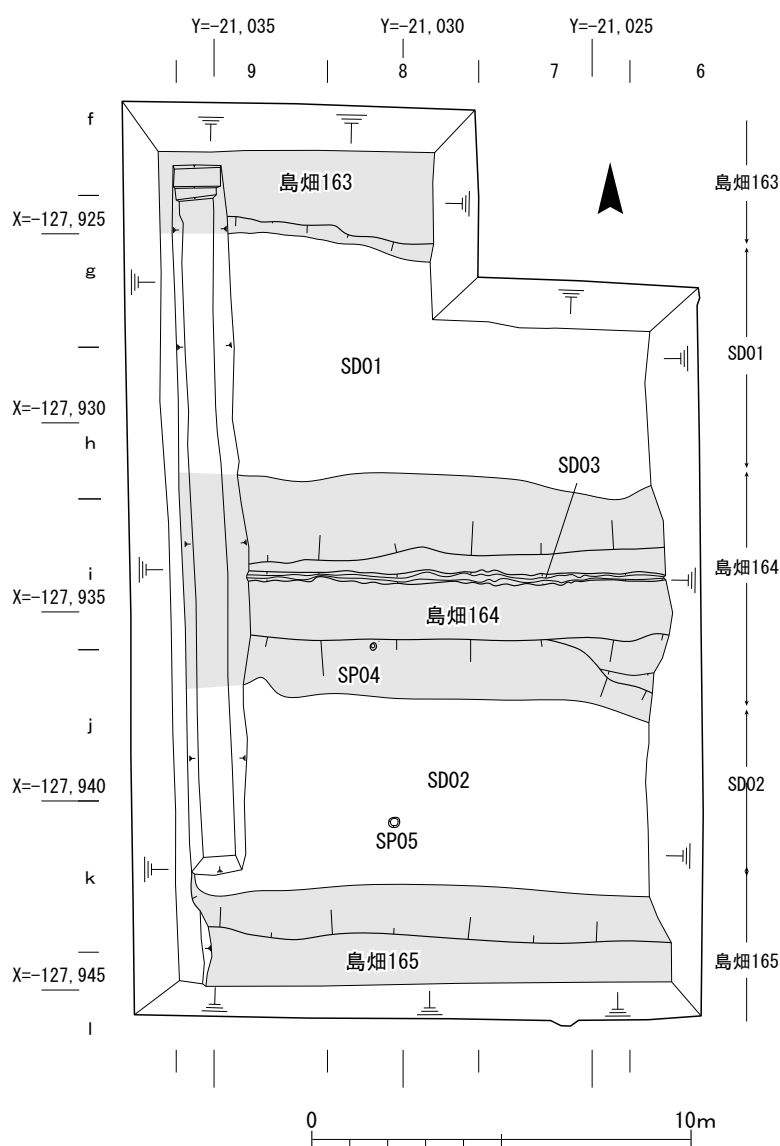
- 27. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土
- 28. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 (細粒砂少量含む)
- 29. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土
- 30. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土; 29層より粘質強い
- 31. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土

第188図 G4区断ち割り内土層図(1/100)

島畑164 検出長15m、上幅2.7m、下幅5.7mを測る。第187図西壁土層で見られるように、現地表面から0.2m程度下位で島畑164の上面を確認できることから、近代までは島畑の利用が行われ、その後平坦な耕作面へと変えられたようである。島畑北溝 S D01との比高は最大で0.65mを測る。

北溝 S D01 島畑163の南側、164の北側に掘削された溝である。上幅9.7m、下幅6.5mである。東から西に下る傾斜をもつ。

南溝 S D02 島畑164の南側に掘削された溝である。上幅5.2m、下幅4.0mである。



第189図 G5区検出遺構平面図(1/200)

(4)小結

東西方向の島畑を2基検出した。この2基の島畑は西側の調査区であるG5区で検出した島畑と同一のものと判断される。

6) G5区の調査

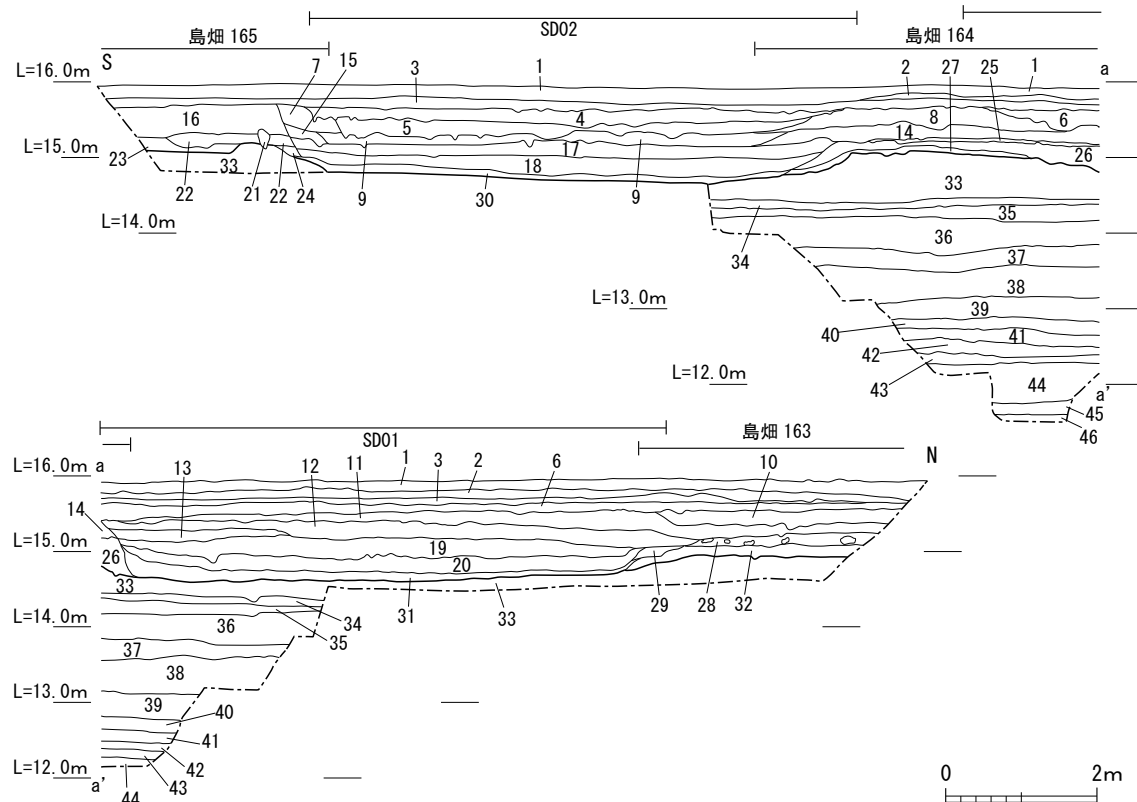
(1)調査の概要

平成30年度に水主神社東遺跡第11次調査として実施した。橋脚36の建設予定地である。基盤層直上まで重機で掘削を行った後、手掘り作業に切り替えて調査を行った。調査の結果、東西方向の島畑3基を調査区の北辺、中央、南辺で検出した。壁面の土層観察から、島畑163・165は近代まで使用されており、その後島畑は廃絶し、平坦な農地へと変貌している。調査区中央の島畑164上面では島畑に平行する耕作溝1

条を検出した。島畑163・164は平成29年度に調査したG 4 区の島畑の続きと考えられ、後述するG 6 区まで広がる。

(2)基本層序(第190図)

1～3層は現代の耕作に伴う土壌で、4層以下が島畑に伴う土層となる。島畑163の盛土は28・29層、32層があり、島畑164の盛土は8層、14層、25～27層があり、島畑165の盛土は7層、15層、16層、22～24層がある。島畑163は28・29層より上は盛土がなされておらず、島畑164北側溝SD01の中に取り込まれており、島畑としての耕作地は廃絶したようである。島畑間の溝内の



- | | | |
|----------------------------|---|------------------------------|
| 1. 青灰色 (5BG6/1) 細粒砂 | 17. 緑灰色 (10GY5/1) 細粒砂 | 31. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土 |
| 2. 灰色 (N6/1) 細粒砂 | 18. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 | 32. 緑灰色 (5G6/1) 粘質土 |
| 3. 緑灰色 (10GY6/1) 細粒砂 | 19. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 | 33. オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘質土 |
| 4. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 中粒砂 | 20. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土 | 34. 緑灰色 (7.5GY6/1) 粘質土<やや砂質> |
| 5. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂 | 21. 崩落のため土色未記録 | 35. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土 |
| 6. 灰色 (7.5Y6/1) 細粒砂 | 22. 崩落のため土色未記録 | 36. 青灰色 (10BG5/1) 粘質土 |
| 7. 崩落のため土色未記録 | 23. 崩落のため土色未記録 | 37. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘質土<やや砂質> |
| 8. 灰白色 (7.5Y7/1) 極細粒砂 | 24. 崩落のため土色未記録 | 38. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土 |
| 9. 緑灰色 (10GY6/1) 粘質土 | 25. 緑灰色 (5G5/1) 粘質土 | 39. 暗青灰色 (5BG4/1) 粘土 |
| 10. 暗オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 細粒砂 | 26. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土<やや砂質> | 40. 暗青灰色 (5BG3.5/1) 粘土 |
| 11. 灰色 (10Y5/1) やや粘質土 | | 41. 暗青灰色 (10BG4/1) 粘土 |
| 12. 灰色 (10Y6/1) 細粒砂 | 27. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土 | 42. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質シルト |
| 13. 灰色 (5Y5/1) 細粒砂 | 28. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土<一部に明青灰色 (10BG7/1) 細粒砂塊> | 43. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト |
| 14. 緑灰色 (10GY6/1) 土 | 29. 灰色 (5Y6/1) 粘質土 | 44. 暗緑灰色 (5G3/1) 粘質シルト |
| 15. 崩落のため土色未記録 | 30. 緑灰色 (10GY5/1) 粘質土 | 45. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト |
| 16. 崩落のため土色未記録 | | 46. 暗緑灰色 (10GY3/1) 粘質細粒砂 |

第190図 G 5 区西壁土層図(1/100)

埋土としては、島畑165と164の間の溝S D02は4・5層、9層、17・18層、30層があり、島畑164と163の間の溝は6層、10～13層、19・20層、31層がある。下層の遺構・遺物を確認するために断ち割りを3.7mの深さまで行ったが、粘質土～シルト層が水平に堆積しており、12.8m付近で砂層を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第189図)

島畑163 調査区の北端で検出した東西方向の島畑である。2～3回の盛土を行っている。土層の観察により、ある段階で島畑164の北溝S D01に取り込まれて、消失していることを確認した。検出長5.6m、上幅1.65～2.4m、下幅2.15～2.4mを測る。島畑溝との比高は最大で0.4mを測る。

島畑164 調査区の中央部で検出した。4回程度の盛土を行っている。島畑上で耕作溝S D03を検出している。検出長10.8m、上幅1.3m、下幅6.0mを測る。島畑溝との比高は最大で0.4mを測る。

島畑165 調査区の南辺で検出した。5回程度の盛土を行っている。検出長13.7m、上幅1.35m、下幅2.7mを測る。島畑溝との比高は最大で0.5mを測る。

溝S D01 島畑163と島畑164の間に掘られた溝である。検出長12.9m、上幅8.0～9.2m、下幅5.6～6.4mを測る。

溝S D02 島畑164と島畑165の間に掘られた溝である。検出長13.2m、上幅7.8m、下幅4.9mを測る。

溝S D03 島畑164上で検出した東西溝で、耕作関連の溝と考えられる。検出長10.8m、幅0.35m、深さ0.1mを測る。

ピットS P05 島畑164の南溝S D02の底面で検出した。径0.2m、深さ0.1mの円形のピットである。底面が不明瞭であることから、人工のものではなく、木の根等の痕跡と判断される。

(4) 小結

3基の島畑を検出した。土層の観察により、うち1基は島畑の周囲の溝の中に埋没し、島畑として用いられなくなったと推定される。出土遺物から、島畑の造営開始時期は13世紀頃と考えられる。

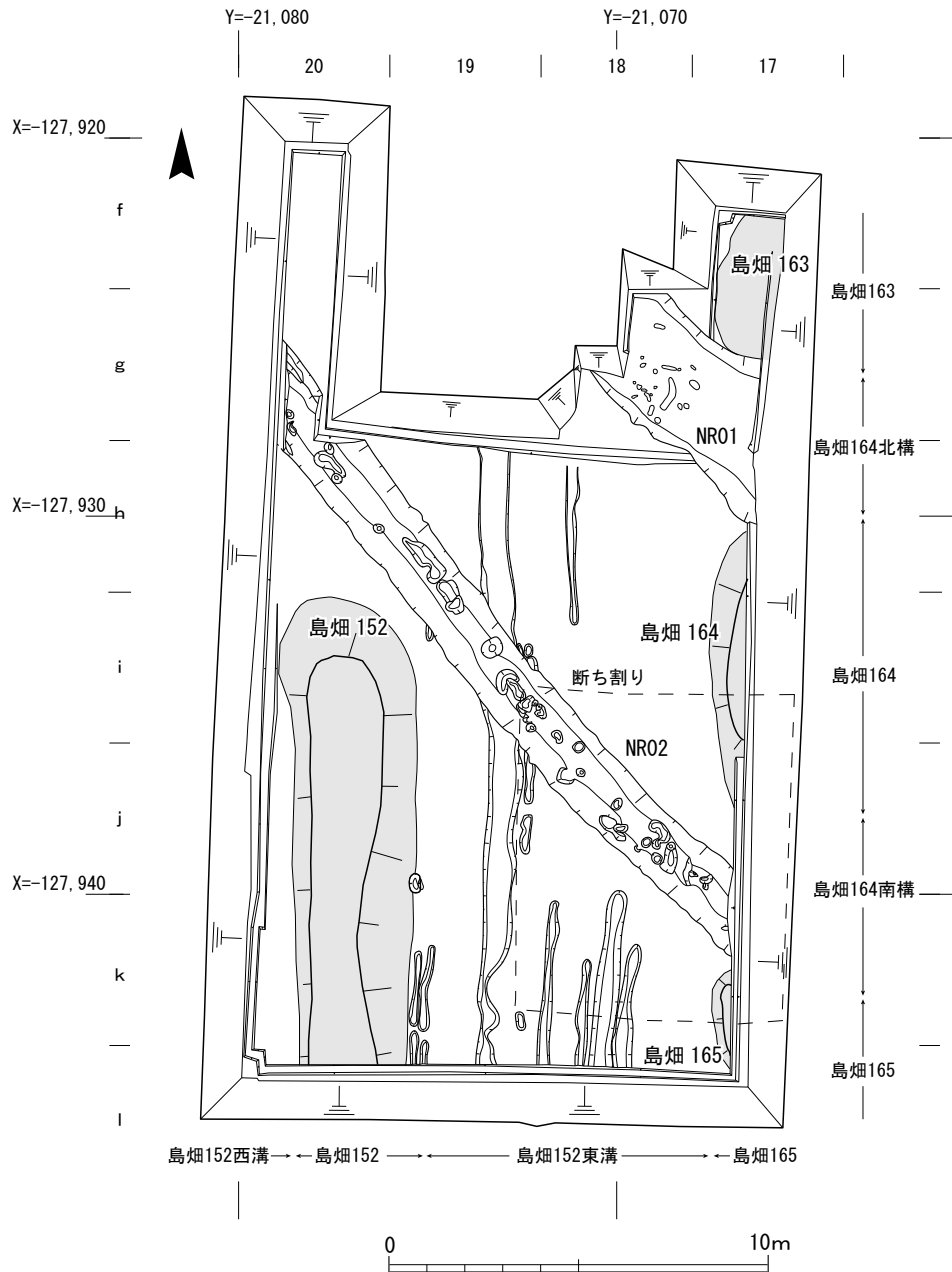
7) G6区の調査

(1) 調査の概要

平成30年度に水主神社東遺跡第11次として橋脚37の建設予定地の調査を実施した。調査により東西方向の島畑3基と南北方向の島畑1基、調査区を斜行する形で、洪水に伴う急激な水流によって形成されたと判断される自然流路2条を検出した。これらの流路からは古墳時代前期頃の土器片が出土している。最終的に約2.9mの断ち割りをを行ったが、これら以外に遺構などは確認できなかった。

(2) 基本層序(第192図)

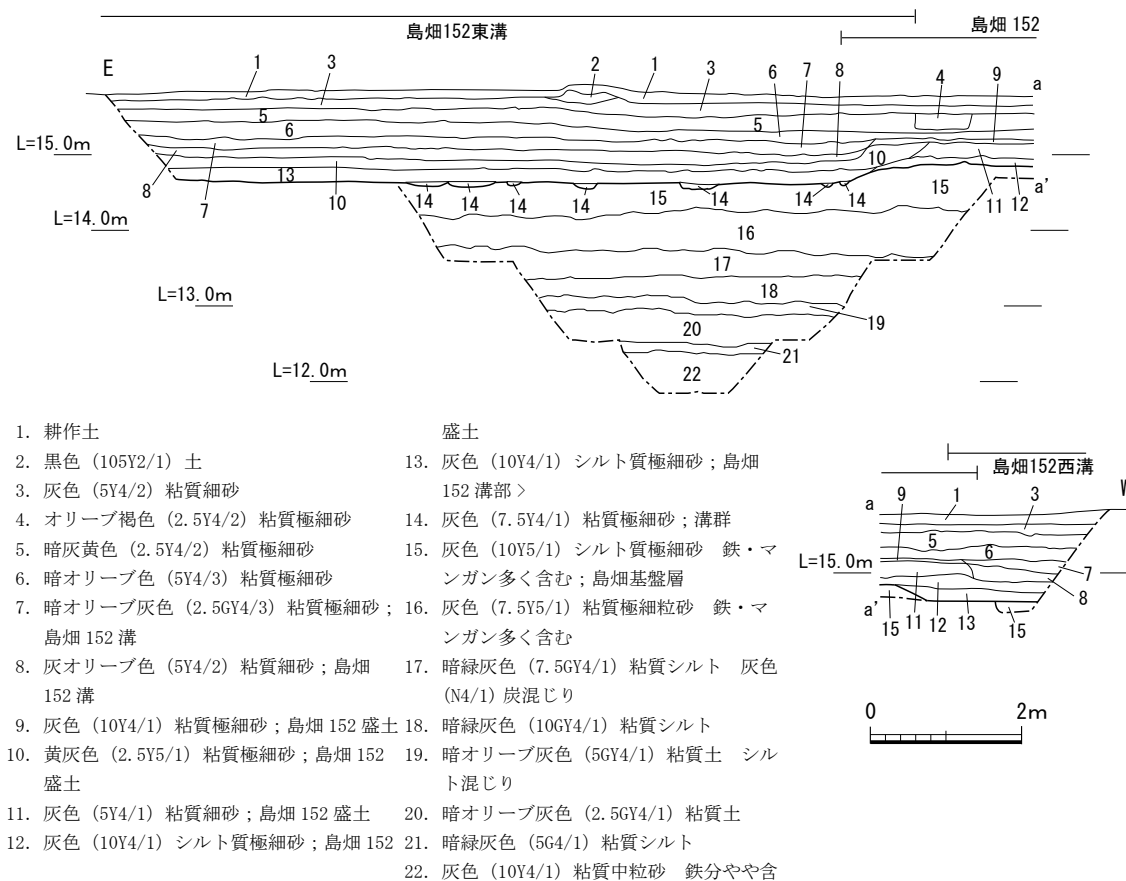
6層が島畑盛土と判断する8層を覆っていること、1～6層は水平堆積であることから、1～6層は現代にいたるまでの耕作土・床土である。島畑関連の土層は7層以下で、7・8層、13層



第191図 G6区検出遺構平面図(1/200)

が島畑152の東側の溝内の堆積土である。9～12層が島畑の盛土で、15層が基盤層であり、基盤層を掘り込んで島畑初期の高まりが形成されている。10層、12層は島畑上の盛土と判断するが、ともに島畑上のみならず周囲の溝内にまで堆積しており、島畑間の溝内堆積土との区別がつかなかった。

下層遺構を確認するために、深さ2.75m、標高11.9mまで断ち割りをを行った。島畑基盤層である灰色シルト質極細砂以下、灰色粘質極細粒砂、暗緑灰色粘質シルト、暗オリーブ灰色粘質土シルト混じり、暗オリーブ灰色粘質土、暗緑灰色粘質シルト、灰色粘質中粒砂があり、シルト・粘質土が厚く堆積しているのを確認した。遺構・遺物は確認できず、長期間にわたって池沼という環境であったものと推測される。



第192図 G 6 区南壁土層図 (1/100)

(3) 検出遺構 (第191図)

島畑163 調査区の北東部で検出したわずかな高まりで、周囲と比べて0.3m程度基盤層が高くなっていた。東壁の断面には明瞭な盛土の層序は確認できなかったが、南側の島畑164・165が平面とともに土層の観察でも島畑と確認できたため、G 5 区の3基の島畑がこの地区まで続いていると判断され、島畑163の高まりとした。NR01と重複している。

島畑164 調査区の東辺中央部で検出した高まりである。調査区東壁には島畑の土層が見て取れ、基盤層を掘り残した最大で0.3mの高まりがあり、その上位に高さ0.8mまで4～5回にわたる盛土が認められた。島畑上面の南北幅が2.2m、裾部の南北幅が7.0mである。

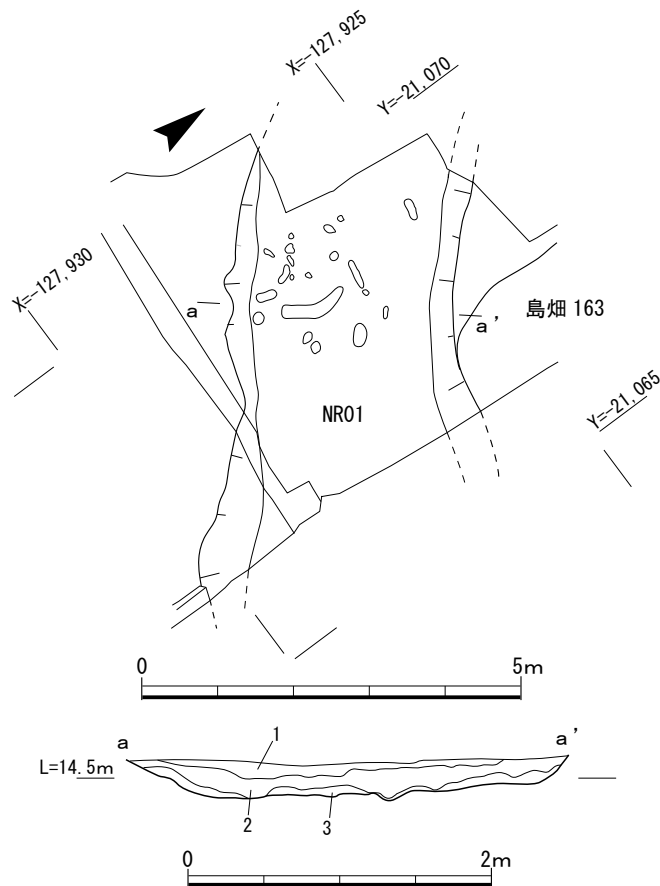
島畑165 調査区の南東隅で検出した。基盤層を掘り残した0.2mの高まりがあり、東壁の土層ではその上位に高さ0.75mまでに3～4回の盛土が認められた。島畑上面の南北幅が2m、裾部の南北幅が2.85mである。

島畑152 調査区の西南部で検出した南北方向の島畑である。検出長12.4m、島畑上面の幅は最大で1.95m、島畑裾幅が3.5m、高さ0.25mである。3～4回の盛土が認められる。

島畑152東溝 島畑163～165の西側、島畑152の東側を画する溝である。底面で南北方向の溝群を検出した。耕作に関する溝と判断する。上幅9.15m、下幅7.7mである。

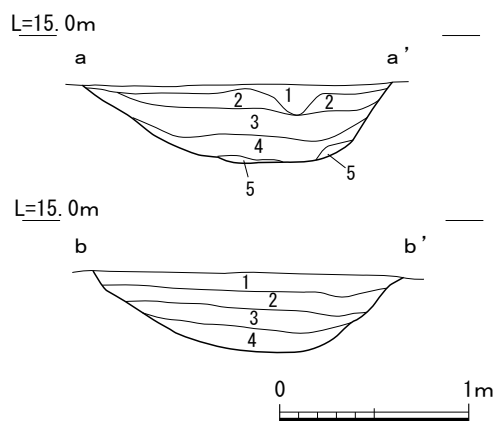
島畑164北溝 島畑163と島畑164の間に掘られた溝である。

島畑164南溝 島畑164と島畑165の間に掘られた溝である。



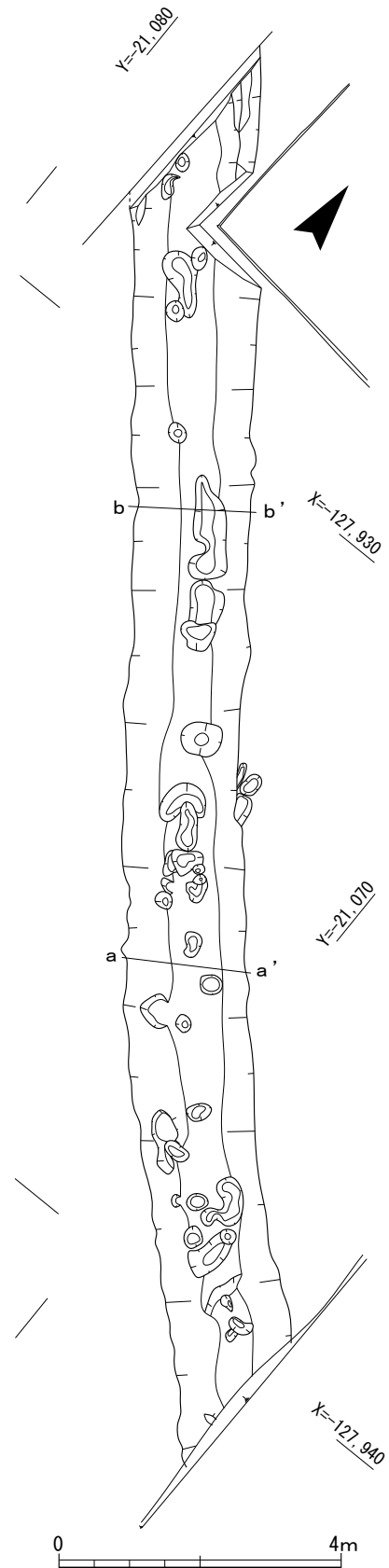
1. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 細砂
 2. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂
 3. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土
- 〈マンガンを含む〉

第193図 G 6 区流路N R01平・断面図(1/100・1/50)



1. 暗緑灰色 (5G4/1)
2. 暗青灰色 (5BG4/1) 〈オリーブ色 (5Y5/4) 中粒砂含む〉
3. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土
4. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘質土 砂混じり 〈鉄分・炭化物含む〉
5. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 砂混じり 〈鉄分多く含む〉

第195図 G 6 区流路N R02土層図(1/40)



第194図 G 6 区流路N R02平面図(1/100)

島畑152西溝 島畑152の西側に掘られた溝である。

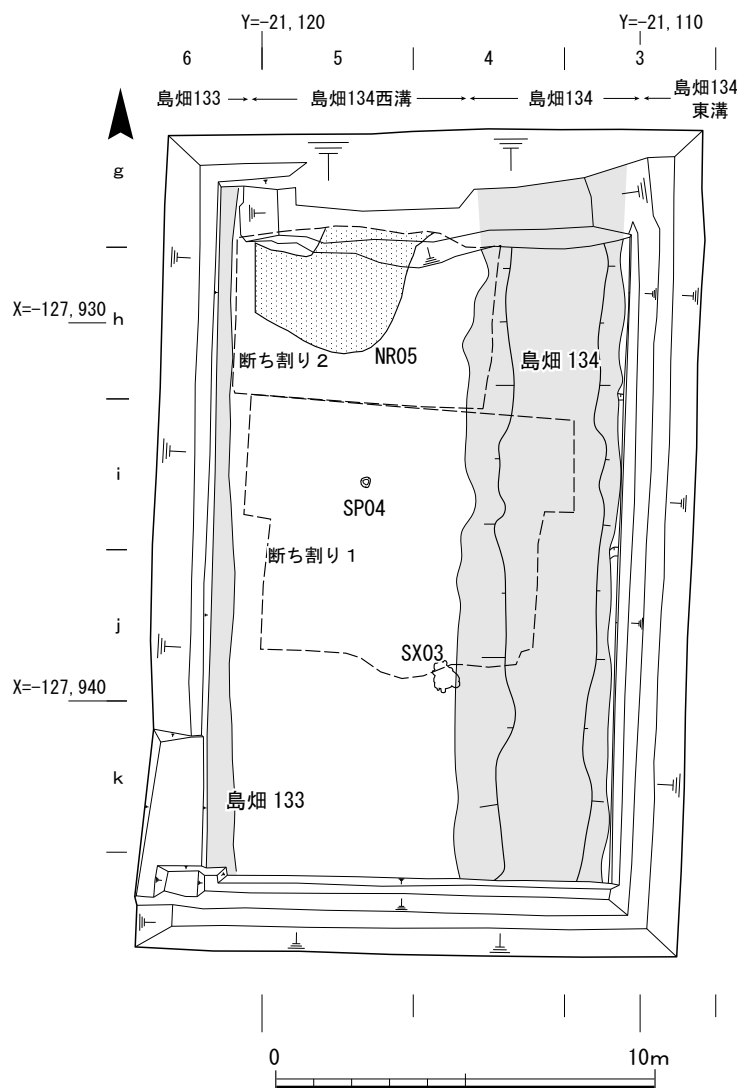
流路NR01（第193図） 調査区北半で検出し、北から西に30°振れる。底面では小ピット状の凸凹が検出した。洪水に伴う急激な水流が軟弱な泥を抉ってできた氾濫流路と判断する。検出長2m、幅3.5m、深さ0.15mを測る。島畑に先行するもので、埋土中より第213図510の布留式土器が出土した。

流路NR02（第194・195図） 底面で不整形の小ピット状の痕跡を多数検出した。検出長18.7m、幅1.8m、深さ0.5mを測る。北から西に約40°振れる。氾濫流路と判断する。島畑や耕作溝に先行するもので、遺物の出土はない。

溝群 島畑周囲の島畑152東溝の底面で検出した南北方向の溝群である。幅0.15～0.5m、深さ0.05～0.15mで、耕作に伴う溝と判断する。

（4）小結

島畑の周囲の溝底で耕作に伴うと判断する溝群を検出したことから、島畑上とともに島畑周囲の低地でも耕作が行われていたことがうかがえる。東西方向の島畑163～165は、新名神関係で調



第196図 G7区検出遺構平面図(1/200)

査を実施したG3・G4区でも検出されている。また、南側の24号拡幅工事関係の平成30・令和元年度調査のG13・G16区では総長97mの島畑144・145が検出されており、それらの北側に平行して検出されたことから、同程度の規模を有するものと判断できる。今回検出した流路NR01・02は、国道24号拡幅関係で調査を行ったG16区でも確認されており、それぞれ長さ51m、55m以上を測るものと推測される。

8）G7区の調査

（1）調査の概要

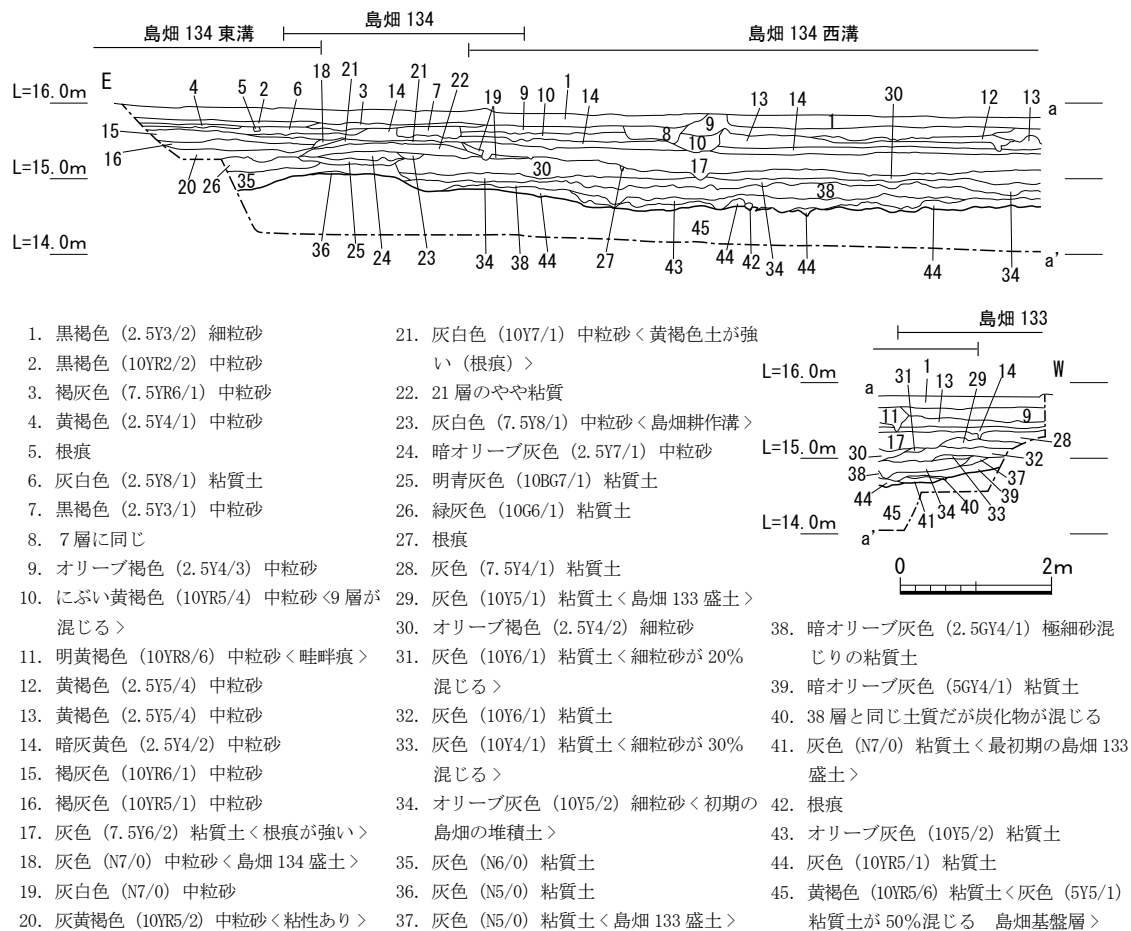
平成30年度に水主神社東遺跡第11次調査として実施した。調査区の東半で南北方向の島畑134を検出し、平面的に明瞭には認められなかったが、西辺で島畑133の東裾と推定される

南北の盛り上がりを確認した。下層遺構を確認するために断ち割りを入れたところ、標高12.8m付近で流路N R05を検出した。この流路から遺物は出土しなかった。

(2)基本層序(第197図)

1～14層が近代～現代の水田・畑作に関連する土層で、島畑を埋めて平らかな農地を造成している。15層から下が島畑関連の土層で、45層が最初期の島畑を切土して造成した基盤層である。調査区西辺で島畑133の盛土、調査区東半では島畑134の盛土を確認した。島畑133の盛土は、28・29・31～33・37・39～41層であり、島畑134の盛土は18・21～25・35・36層である。島畑133と島畑134間の溝内堆積土は、17層以下で、島畑134東溝の埋土は15・16・20・26層である。

下層遺構の確認のため調査区の中央部に断ち割りを実施した(断ち割り1)。標高11.65mまで、2.55mにわたって掘削を行ったところ、水平堆積の層序が10層認められ、上位の7層までがシルト・粘土で2.05mにわたって堆積しており、池沼の環境下にあったと推定された。標高11.65m以下の3層が細砂となり、河川内の堆積と判断される。遺構・遺物は確認できなかったが、平面的に6層上面で南半部に灰黄色の土色の違いが認められ(写真図版第134-3)、北半の緑灰色粘質土が流路内堆積土と判断した。この流路の性格を明らかにするため、北側に断ち割り2を設けて土層を観察した結果、5層の緑灰色粘質土をベースとして有機質を多く含む青灰色～紫灰色シルト



第197図 G7区南壁土層図(1/100)

を埋土とする流路N R05を確認した。

(3) 検出遺構(第196図)

島畑134 調査区の東半で検出した。島畑上の平坦面は幅が最大で2.8m、島畑裾幅が最大で4.6m、比高は0.5mである。

島畑133 調査区の西辺で検出した。平面的には裾部の盛り上がりを確認しただけで、南壁で島畑盛土および島畑溝の堆積土を確認した。裾部の盛り上がりの高さは0.3mである。

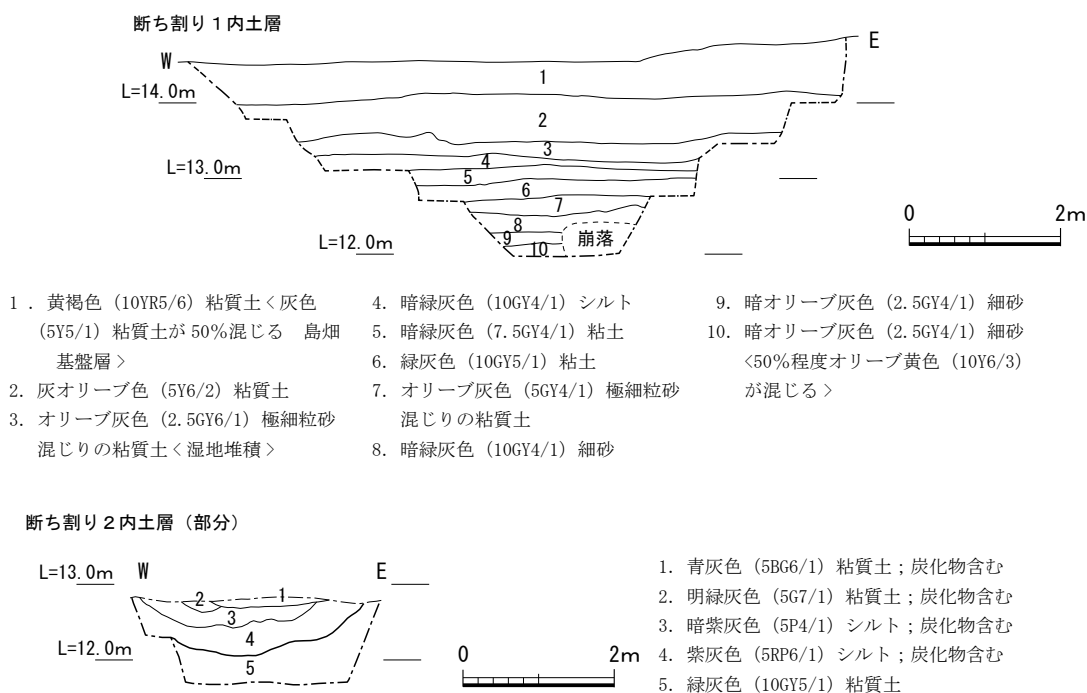
島畑134西溝 島畑134と133間の溝である。検出した上幅が9.0m、下幅が7.6mである。

島畑134東溝 島畑134の東側の溝である。島畑頂部から東にわずかに下る傾斜を確認した。大半が調査地外である。幅0.6m、深さ0.3mである。

流路N R05(第196・198図、写真図版第135-2) 断ち割り2の中で、第5層の緑灰色粘質土を切り込む形で西から北に屈曲する部分を確認した。標高12.8m、基盤層である45層のうち島畑134の島畑上から2.3m、島畑134西溝底から1.85m下で検出した。幅3m以上、深さ0.75mで、埋土は4層(1～4層)に分かれるが、いずれの層にも有機質が含まれている。西から北に向けて下る傾斜を有する。遺物の出土はなく、周辺の調査の層序の年代観より弥生時代以前のものである。

焼土S X03(写真図版第135-1) 島畑134西溝の下面、島畑134の西裾で検出した焼土である。土壌が火を受けて赤化していた。遺物は出土していないため時期は不明であるが、基盤層以下の層序には遺構や遺物が認められないこと、島畑造営時の地表面である溝底で検出したことから、島畑造営もしくは耕作に伴う焼土と判断される。

ピットS P04 島畑134西溝の下面で検出したピットである。径0.35m、深さ0.2mである。埋土とベースの境界が不明瞭であることから、木の根跡と推定する。



第198図 G7区断ち割り内北壁土層図(1/100)

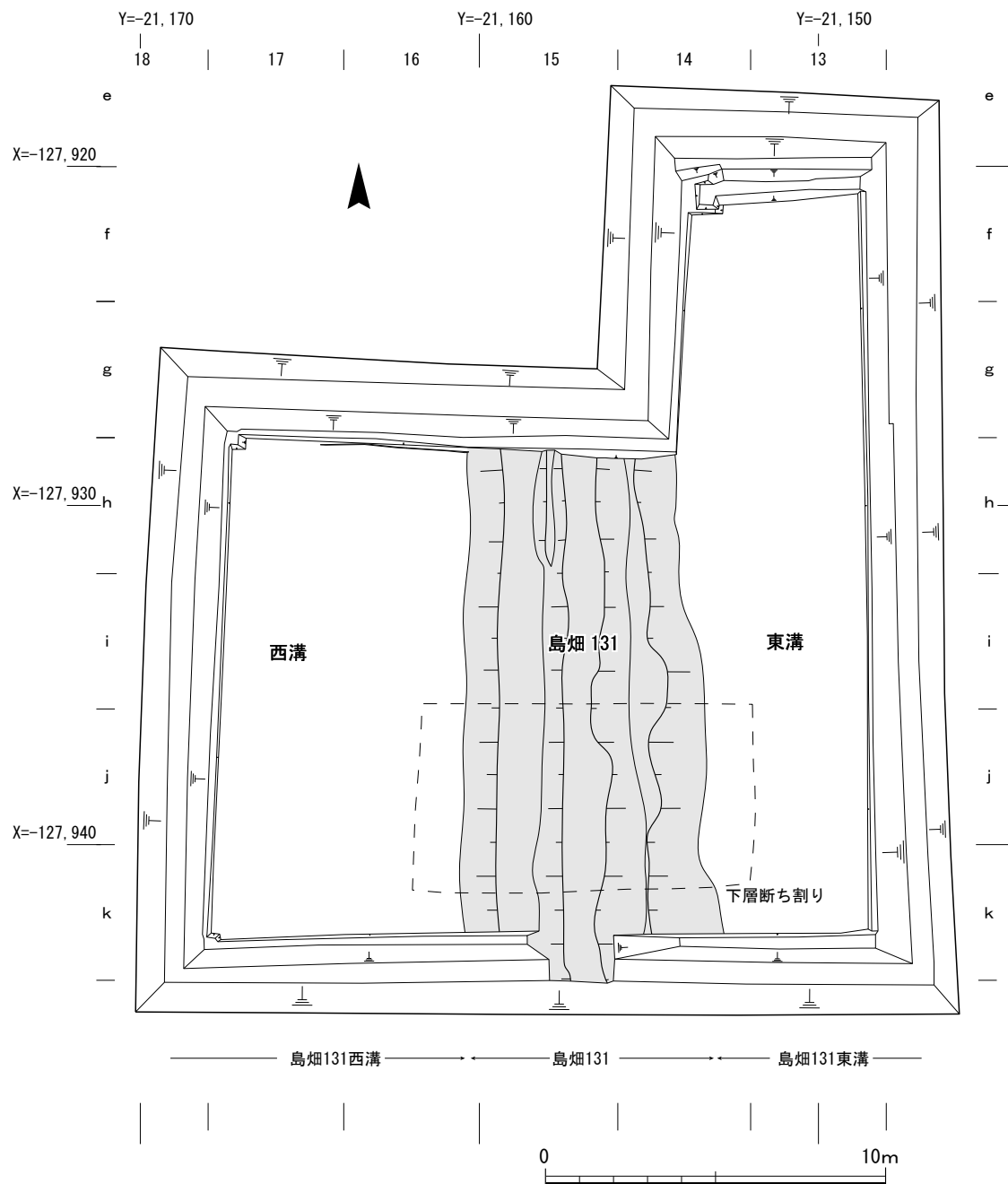
(4) 小結

南北方向の島畑を2基検出した。平成29年度に南側の国道24号拡幅工事に伴う調査で実施したG11区でも島畑133・134の南側の延長部を検出している。下層を断ち割ったところ自然流路を確認した。シルト層の中で検出した一時的な流路であることから、湿地内で発生した氾濫に伴う流路跡と考えられる。

9) G 8 区 の 調 査

(1) 調査の概要

平成30年度に水主神社東遺跡第11次調査として実施した。橋脚39建設予定地である。南北方向

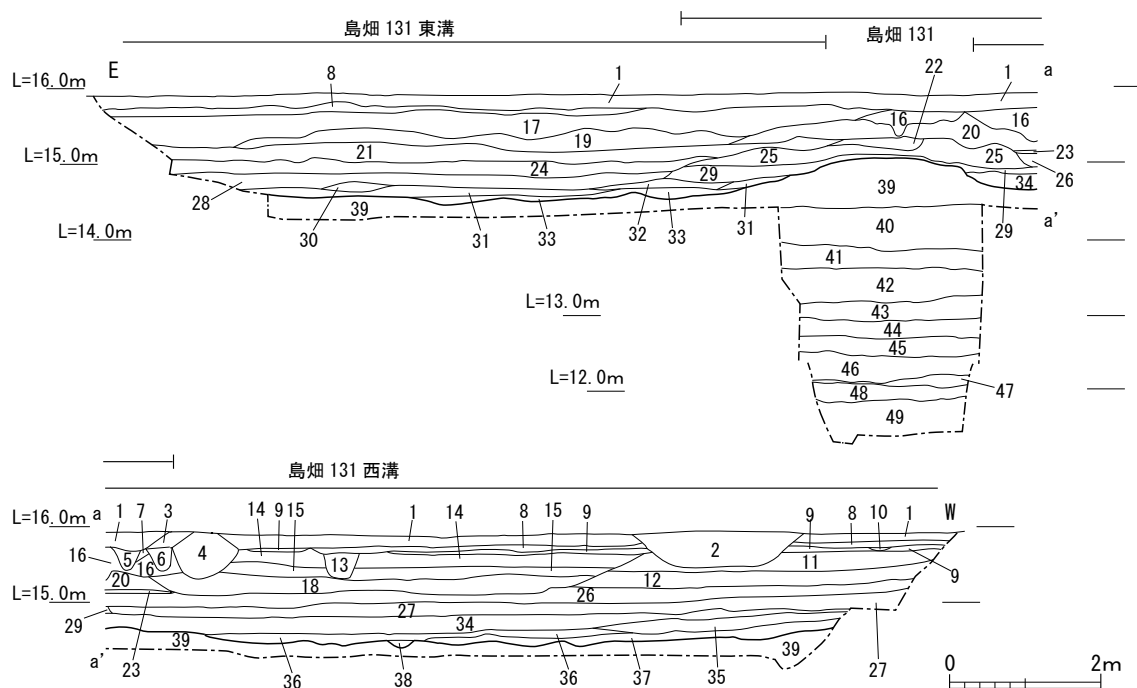


第199図 G 8 区検出遺構平面図(1/200)

の島畑を1基確認した。島畑は、土層の堆積状況から少なくとも3回の盛土が行われたものと考えられる。島畑以外の遺構は確認できなかった。

(2)基本層序(第200図)

島畑を造る基盤層は39層で、この層を掘り込んで島畑が造られている。島畑131の盛土は層序から、20・22・25・29・32層と判断され、3～5回の盛土が確認できる。19・21・24・28・30・31・33層が島畑東溝の埋土で、18・26・27・34～38層が島畑西溝の埋土と判断される。西辺近く



- | | |
|---|---|
| 1. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 細粒砂 | 26. 灰色 (5Y5/1) 細粒砂<鉄・マンガン含む> |
| 2. 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土<灰色 (10Y5/1) 鉄混じり粘質土ブロック含む> | 27. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土<鉄少し含む> |
| 3. オリーブ黒色 (5Y3/1) 細粒砂<鉄混じり> | 28. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 |
| 4. 灰色 (5Y4/1) 粘質土<鉄・マンガン含む 蓮根> | 29. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 |
| 5. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土細粒砂<鉄・マンガン含む> | 30. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土<部分的に炭化物含む> |
| 6. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘質土<鉄含む> | 31. オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘質土 |
| 7. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘質細粒砂<鉄含む> | 32. 緑灰色 (10GY5/1) 粘質土 |
| 8. オリーブ黒色 (10Y3/1) 細粒砂 | 33. 緑灰色 (10GY5.5/1) 粘質土<鉄含む> |
| 9. 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂<鉄含む> | 34. 暗緑灰色 (7.5GY4.5/1) 粘質土<少し含む> |
| 10. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂<鉄含む> | 35. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘質土細粒砂<鉄少し含む> |
| 11. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質細粒砂<鉄・マンガン含む> | 36. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土<鉄少し含む> |
| 12. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質細粒砂<鉄・マンガン含む> | 37. 暗緑灰色 (7.5GY3.5/1) 粘質土<鉄若干含む> |
| 13. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質細粒砂<鉄・マンガン含む> | 38. 暗緑灰色 (10G4.5/1) 粘土 |
| 14. 灰色 (5Y5/1) 粘質土<鉄・マンガン含む> | 39. 灰色 (5Y4.5/1) 粘質土<鉄少しマンガン多く含む> |
| 15. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<鉄・マンガン含む> | 40. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<マンガン1より多量に含む> |
| 16. 青灰色 (5B5/1) 粘質土<鉄・マンガン含む> | 41. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土<39・40層より粘性あり、マンガン多量に含む> |
| 17. 暗青灰色 (5B4/1) 粘質細粒砂<鉄含む 蓮根いっぱい> | 42. 暗緑灰色 (10GY4/1) 中粒砂シルト |
| 18. 緑灰色 (5G5/1) 細粒砂<鉄・マンガン含む> | 43. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 中粒砂シルト<細礫を1%含む> |
| 19. 暗青灰色 (5BG4/1) 粘質土<鉄・マンガン含む> | 44. 暗緑灰色 (10GY4/1) 細粒砂混じりの中粒シルト<細礫を1%含む> |
| 20. 暗青灰色 (5BG3/1) 粘質土 | 45. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 極細粒砂<粘性あり> |
| 21. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土<鉄・マンガン少し含む> | 46. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 細粒砂<粘性あり> |
| 22. 緑灰色 (10G5/1) 粘質土<鉄・マンガン含む> | 47. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂<8より粒大きい> |
| 23. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4.5/1) 中粒砂<鉄含む> | 48. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 中粒砂 |
| 24. 暗青灰色 (10BG4/1) 細粒砂 | 49. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘土<植物の根含む> |
| 25. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土<鉄・マンガン含む> | |

第200図 G8区南壁土層図(1/100)

で26層上に11・12層が認められ、島畑の盛土の形状を呈しているが、その確証はない。

島畑131の西側溝内の底面近くの掘削時に木質を、東溝の底面から縄文土器片が出土した(写真図版第138-1)。木質については周囲を掘削したところ自然木であり、39層中に埋まっていることが判明した。縄文土器はほぼ東溝の溝底で検出し、溝内であるのか、39層中であるのか、確証を得られなかった。いずれにしてもこの島畑の年代を示すものではない。

縄文土器を検出したこともあり、調査の最後に下層遺構・遺物の有無を確認するために深さ3.1m、標高11.35mまで断ち割りを行った。厚くシルト・粘質土が水平に堆積し、長期間にわたって池沼の環境下にあったことがわかり、標高12.1mで45・46層で細粒砂の堆積を確認し、河川堆積と判断した。断ち割り内での遺構・遺物は確認できなかった。

(3) 検出遺構(第199図)

島畑131 調査区の中央部で検出した南北方向の島畑である。検出長14.5m、島畑上面の幅は最大で1.7m、島畑裾幅が最大で7.15m、溝底からの比高0.65mである。3～4回の盛土が認められる。

島畑131東溝 島畑131の東を画する溝である。検出した幅は、上幅で5.5m、下幅で6.5mである。

島畑131西溝 島畑131の西側の溝である。上幅で8.6m、下幅で7.5mを確認した。

(4) 小結

島畑を1基検出した。令和元年度に南側で調査を実施したG14区でこの島畑の南側延長部を確認している。13世紀頃と考えられる土師器、島畑間の溝部の堆積層から出土した瓦器の年代観より、造成開始時期は13世紀頃と考えられる。縄文土器や自然木を検出したが、関連する遺構は確認できなかった。

10) G9区の調査

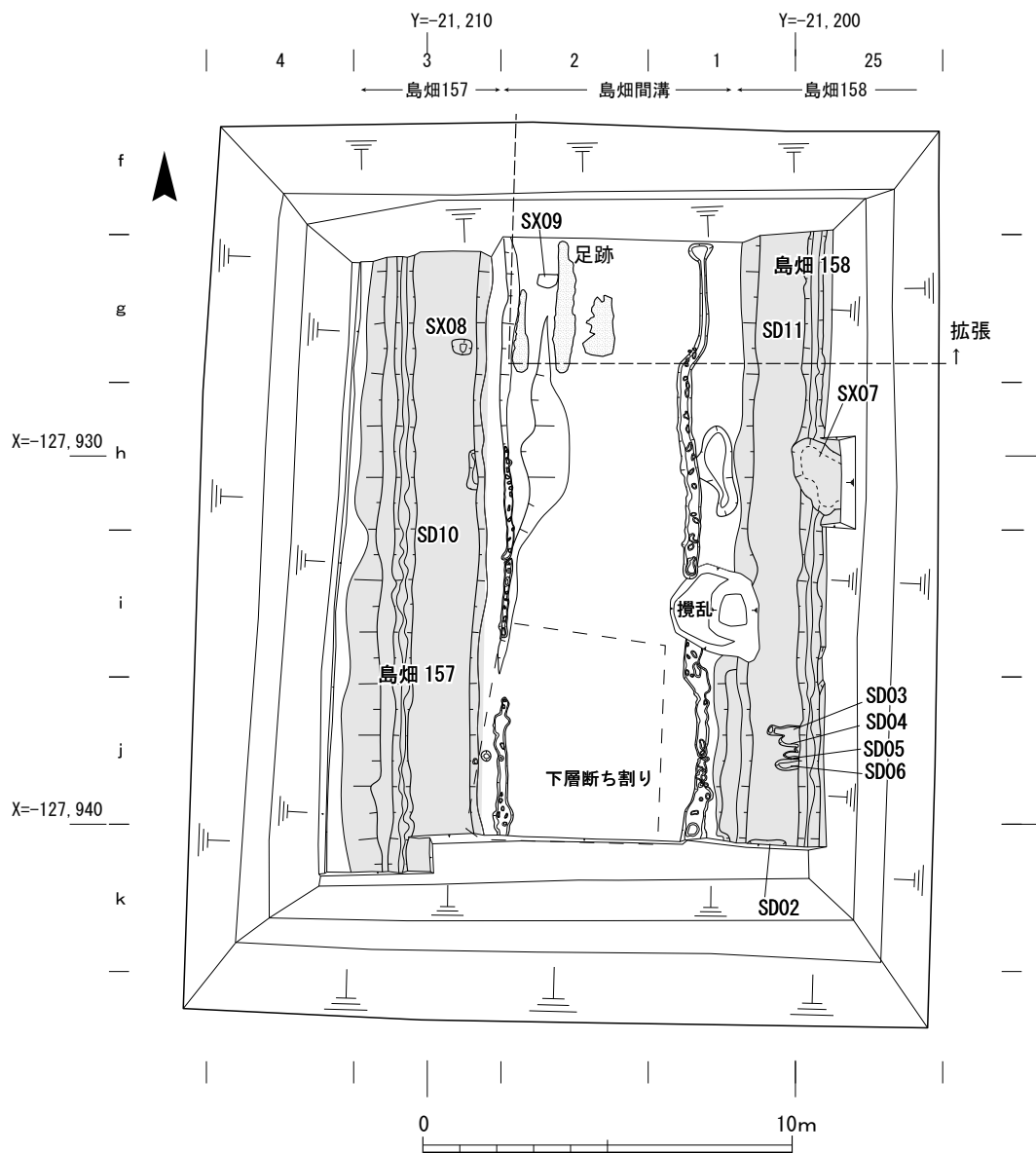
(1) 調査の概要

平成30年度に水主神社東遺跡第11次調査として実施した。橋脚40の建設予定地である。調査対象地が国道24号や水路に近接していたため、北東部に重機の出入り部分を残して調査を実施し、その調査が終了した後には部分的に埋め戻して、北東部の調査を実施した(拡張調査区)。

調査区内では南北方向の島畑を2基確認した。調査区西端で島畑157、調査区東端で島畑158を確認した。島畑157上面で南北方向の耕作溝を1条検出した。島畑158上面では南北方向の耕作溝を1条、島畑南辺近くで直交する東西方向の耕作溝を5条検出した。島畑間溝部において、南北方向の溝状遺構2条と偶蹄類と判断する足跡を多数確認した。

(2) 基本層序(第202図)

27層が島畑の基盤層である。島畑157の盛土が11・19・22層で、20・21・23層が島畑上に穿たれた溝の埋土と判断される。島畑158の盛土は24層で25層は島畑上の溝と考えられる。6層以下が島畑157と島畑158間の溝の埋土で、島畑157は4層に覆われているのに対して、島畑158は8層に覆われており、層序的には島畑158は島畑157よりも先に廃絶している。4・5層から上は近現代の耕作土に伴う層序で、島畑を廃絶し、平坦な農地へと転換している。標高12.55mまで断ち



第201図 G 9区検出遺構平面図(1/200)

割ったが遺構・遺物は確認できなかった(第203図)。

(3) 検出遺構(第201図)

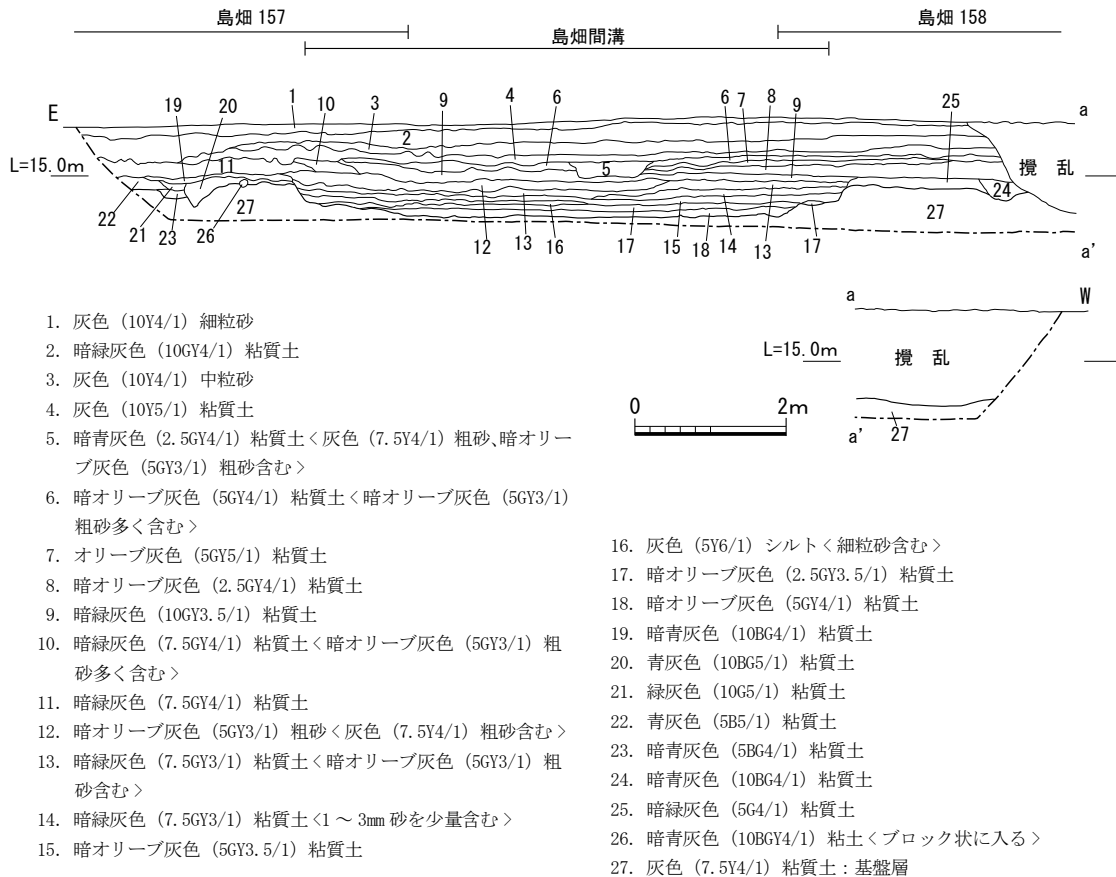
島畑157 調査区の西辺で検出した南北方向の島畑である。検出長15.3m、島畑上面の幅は最大で2.8m、島畑裾幅が最大で3.7m、溝底からの比高0.5mである。

島畑158 調査区の東辺で検出した南北方向の島畑である。検出長16.7m、島畑上面の幅は最大で1.4m、島畑裾幅が3.0m以上、溝底からの比高0.35mである。

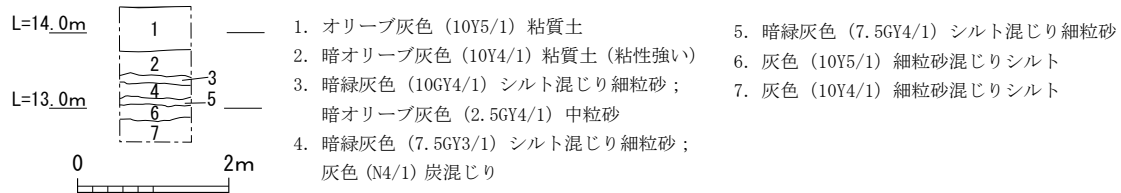
島畑間溝 島畑157と島畑158の間の溝である。上幅7.5m、下幅6.9mである。

溝SD11 島畑158上で検出した南北溝である。遺構の重複関係より、東西方向の耕作溝SD03～06に後出する。耕作に伴う溝と判断する。検出長16.8m、幅0.7m、深さ0.25mである。

溝SD10 島畑157上で検出した南北溝である。耕作に伴う溝と判断する。検出長16.7m、幅0.6m、深さ0.2mである。



第202図 G9区南壁土層図(1/100)



第203図 G9区断ち割り内柱状土層図(1/100)

溝S D02~06 島畑158上の南辺部で検出した東西方向の溝である。S D02のみS D11と重複関係を有さないが、S D03~06はそれぞれの溝が接したり、重複したりしている。また、遺構の重複関係より、南北方向の耕作溝S D11に先行するものである。耕作に伴う溝と判断する。検出長は最大で1.0m、幅0.3m、深さ0.1mである。

不明土坑S X07(写真図版第141-1) 島畑158上で検出した。島畑上の東壁に延びる形で、南北2.1m、東西1.35mの色調の違いを確認した。深さ1.7m程度にわたって掘削したが、遺物の出土は無く、遺構としての埋土の明瞭な違いは見いだせなかった。染み込みによる色調の違いを誤認したものとする。

S X08 島畑157上で検出したピットである。東西0.55m、南北0.44m、深さ0.4mである。

S X09 調査区北辺中央で検出した。東西0.5m、南北0.35mの方形に近い土坑で、深さは0.3mである。埋土は上から灰色シルト、青灰色砂質シルト、緑灰色中粒砂シルトである。

耕作関連溝 島畑間の溝の下面で検出した南北方向の溝である。島畑158の西裾、島畑157の東

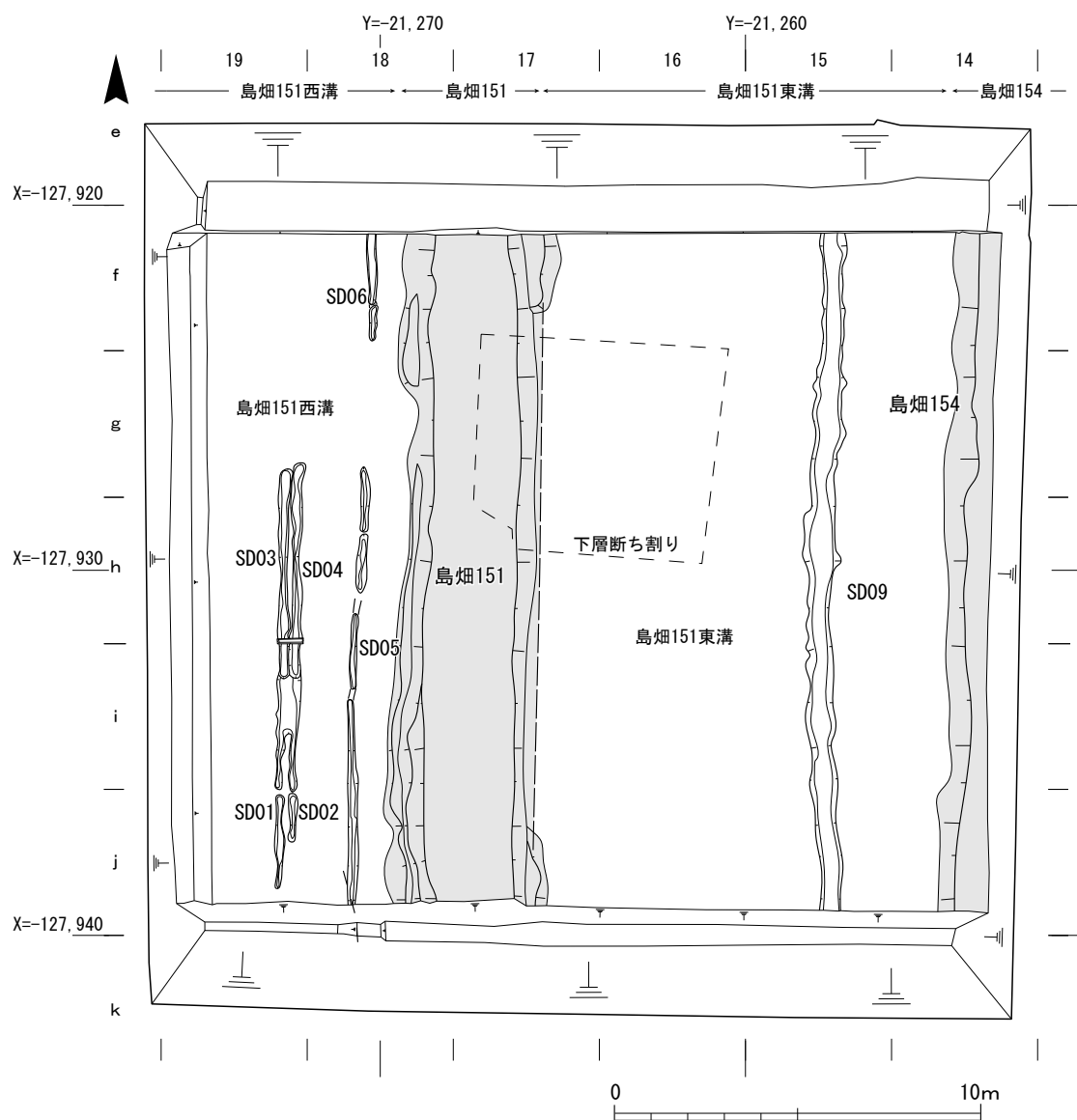
裾で2条を検出した。これらの溝は島畑の裾部に南北に位置していることから、島畑上もしくは島畑間の耕作に伴う人工の溝と判断される。それぞれの溝の底面には円形の掘り込みが多数認められ、埋土には不規則に砂が入り込むことから、溝底の小ピットは鍬の痕跡と考える。幅0.4m、検出した深さは0.15m、南から北に向けて下る傾斜を持つ。

足跡 (写真図版第140-1) 調査区の中央部北辺、拡張調査区で検出した。大きく3か所で集中して検出した。偶蹄類の足跡も見られ、島畑間の農作業に伴う牛の足跡の可能性が考えられる。

(4) 小結

島畑を2基確認した。南側のG17区(令和3年度調査)で検出した島畑の北側延長部と考えられる。島畑間の溝底で足跡や溝を検出したことから、少なくとも島畑と島畑の間は常に湿地状態であったのではなく、乾燥しているときには島畑の下でも耕作を行っていたものと考えられる。

11) G10区の調査



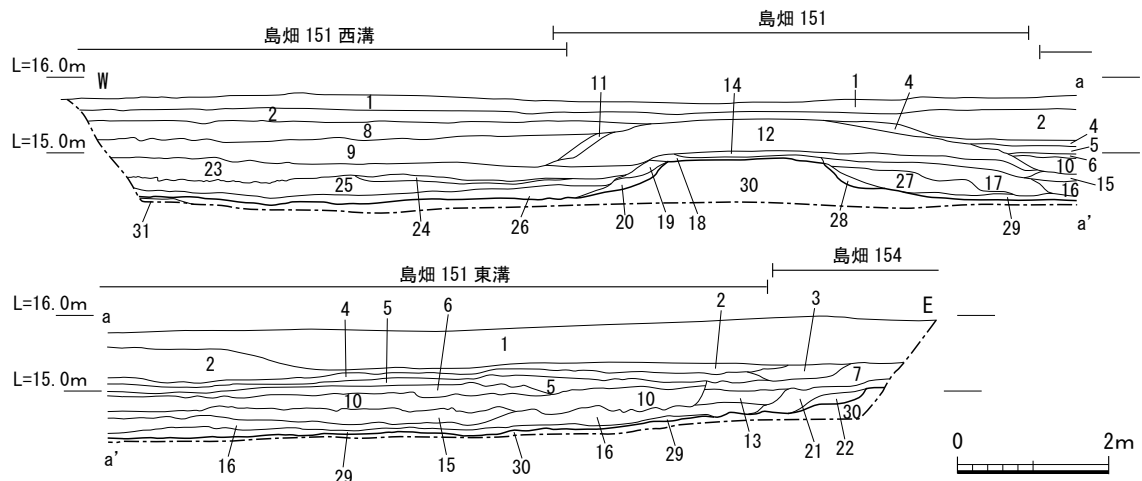
第204図 G10区検出遺構平面図(1/200)

(1) 調査の概要

平成30年度に水主神社東遺跡第11次調査として実施した橋脚41・調整池の建設予定地の調査地である。南北方向の島畑を2基確認した。島畑間の溝の中では小溝群を検出した。島畑下層では氾濫流路と考えられる流路NR10とNR11を確認した。流路内には泥炭層、砂層の堆積が認められたが、遺物は出土していない。

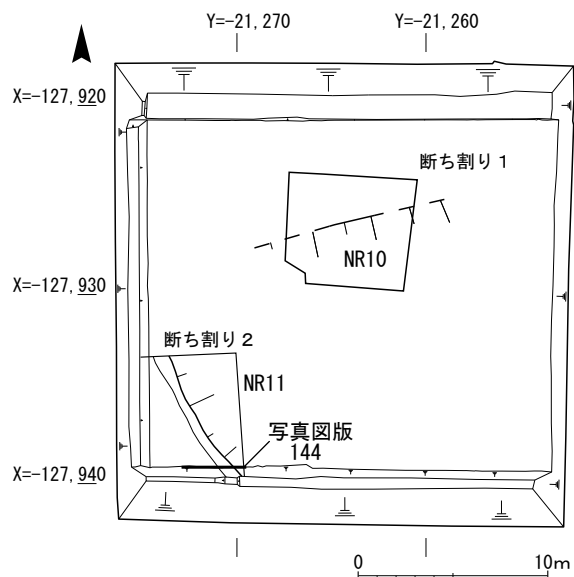
(2) 基本層序(第205図)

4層が島畑の頂部を覆うことから、1～4層は島畑廃絶以後の近現代の耕作に伴う土層で、5層以下が島畑に伴うものである。30層が島畑造営時の基盤層で、中央部と東端部で島畑の盛り上がりが見られ、それぞれ島畑151と島畑154で、周囲を掘り窪めて高まりを設けている。島畑151の造成土が12・14・17～20・27・28層で、島畑154の盛土が7・13・21・22層である。8・9・23～26層が島畑151の西溝内の埋土で、4～6・10・15・16・29層が島畑151と島畑154間の溝埋



- | | |
|---|--|
| 1. 灰色 (10Y4/1) 粘質土 | 17. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土; 16層より砂質強い |
| 2. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土<マンガンを多く含む> | 18. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土<マンガンを少量含む> |
| 3. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 細粒砂<少し粘性あり、マンガン含む> | 19. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土<マンガンを極少量含む> |
| 4. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 極細粒砂<マンガン含む> | 20. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<マンガンを少量含む> |
| 5. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂<マンガンを多く含む> | 21. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土; 細砂多く含む |
| 6. 灰色 (10Y4/1) 白い細粒砂を少量含む粘質土 | 22. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土<マンガン極少量含む> |
| 7. 緑灰色 (5G6/1) 粘質土<マンガンを極少量含む> | 23. オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘質土<細粒砂を極少量、マンガン極少量含む> |
| 8. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 極細粒砂<マンガンを多く含む> | 24. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土<マンガンを極少量含む> |
| 9. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細粒砂<粘性あり、マンガン含む> | 25. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土<24層より粘性あり、マンガン極少量含む> |
| 10. 暗オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘質土<マンガンを極少量含む> | 26. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 |
| 11. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 極細粒砂<マンガンを少し含む> | 27. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土<16層より粘性あり、マンガン少量含む> |
| 12. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土<白い細粒砂を少量含む> | 28. 緑灰色 (10GY5/1) 粘質土 |
| 13. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土<マンガン、白っぽい土を極少量含む> | 29. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<マンガンを少量含む> |
| 14. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<白い細粒砂を少量含む> | 30. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土<22層より粘性あり、マンガン少量含む> |
| 15. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<マンガンを少量含む> | 31. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質土<白い細粒砂を少量含む> |
| 16. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土<マンガンを極少量含む> | |

第205図 G10区北壁土層図(1/100)



第206図 G10区流路NR10・11平面図(1/400)

土である。

重機により断ち割り(断ち割り1)を行い深さ2.6m、標高12.1mまでの観察を行ったところ、遺構・遺物はなく、粘土・粘質土が厚く堆積していた(第207図)が、南半部では10層上面から切り込まれる流路状の落ち込み(NR10)が認められた。新たに調査区南西隅に断ち割り2を設けて観察したところ、自然流路NR11を確認した。

(3)検出遺構(第204・206図)

島畑151 調査区の西半で検出した南北方向の島畑である。検出長18.3m、島畑上面の幅は最大で2.5m、島畑裾幅が最大で4.0m、東

溝底からの比高0.45mである。

島畑154 調査区の東辺で検出した南北方向の島畑である。検出長18.5m、島畑上面の幅は1.0m以上、島畑裾幅が1.6m以上、島畑151東溝底からの比高0.65mである。

島畑151西溝 島畑151の西側の溝である。上幅6.2m、下幅5.4mを検出した。

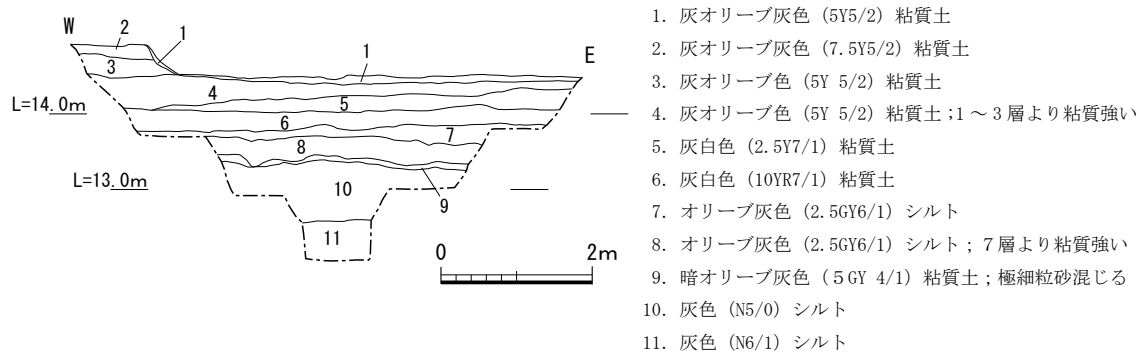
島畑151東溝 島畑151の東側、島畑154の西側の溝である。上幅12.3m、下幅11.6mを検出した。

溝S D01～04 島畑151上で検出した2条の溝で、途中でその境界が不明瞭になっている。便宜上、北側と南側で別の遺構番号を付した。耕作関連の溝と推定する。それぞれ、検出長は11m前後、幅0.25m、深さ0.5mである。

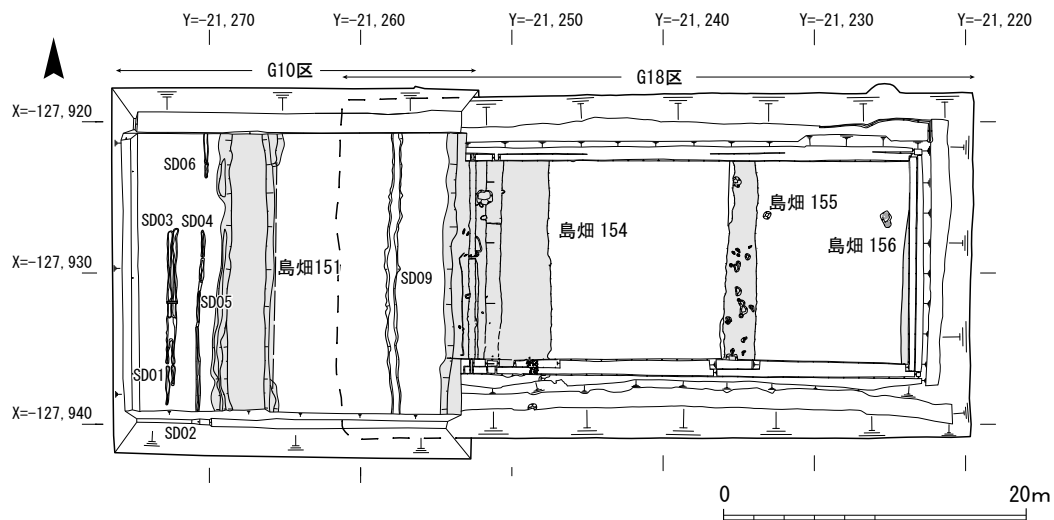
溝S D05・06 島畑151上で検出した3条の溝で、途中で途切れているが、その位置関係より1条の溝と考えられる。耕作関連の溝と推定する。検出長はS D06が2.9m、S D05が12.0mで、幅0.25m、深さ0.05mである。

溝S D09 島畑151東溝の底面で検出した南北溝である。耕作関連の溝と推定する。検出長18.6m、幅0.45から1.0m、深さ0.2mである。南から北に下る傾斜を有する。

流路NR10・11 NR10は断ち割り1内で検出した。第207図は断ち割り1内の北壁での状況で基本的に水平堆積であるが、断ち割り1内の南半部では暗青灰色シルトの堆積が平面的に認められ、10層上面から切り込まれる流路が断ち割り1の南側に存在することが想定された(写真図版第143-1)。この流路の形状や流れの方向が不明であったため、新たに南側に断ち割り2を設定し掘削を行った(第206図・写真図版第143-2・3)。サブトレンチ2内では標高14.45mで明瞭な土色の違いが認められ、暗青灰色粘土、灰白色粘土、明青灰色粘土が平面的に筋状に検出できた。これを断ち割ったところ、灰白色粘土が明青灰色粘土を直線的に切り込んでいるのに対して、暗青灰色粘土と灰白色粘土の境界は不明瞭で、波打った状態であった(写真図版第144-1・2)。水分を多く含んだ軟弱な暗青灰色粘土に灰白色粘土の氾濫流路(NR11)が流れ込み、暗青灰色粘土を



第207図 G10区断ち割り 1 内北壁土層図(1/100)



第208図 G10・18区検出遺構平面図(1/500)

巻き上げて混じり込み、その後、ゆっくりと沈殿したために境界が不明瞭になったものと推測される。このように堆積のプロセスを捉えると、明青灰色粘土をベースとして、灰白色粘土が流路本体と推定できる。断ち割り 1 と 2 で確認した 2 つの自然流路は流れる方向を異にしている。

(4) 小結

島畑を 2 基検出した。南側で調査を実施した G15・17区で検出した島畑の北側延長部分にあたる。島畑以前の土地利用はなく、湿地や池沼の環境下であり、氾濫流路が何度も生じていたものと推測される。

(竹村亮仁・岩松 保)

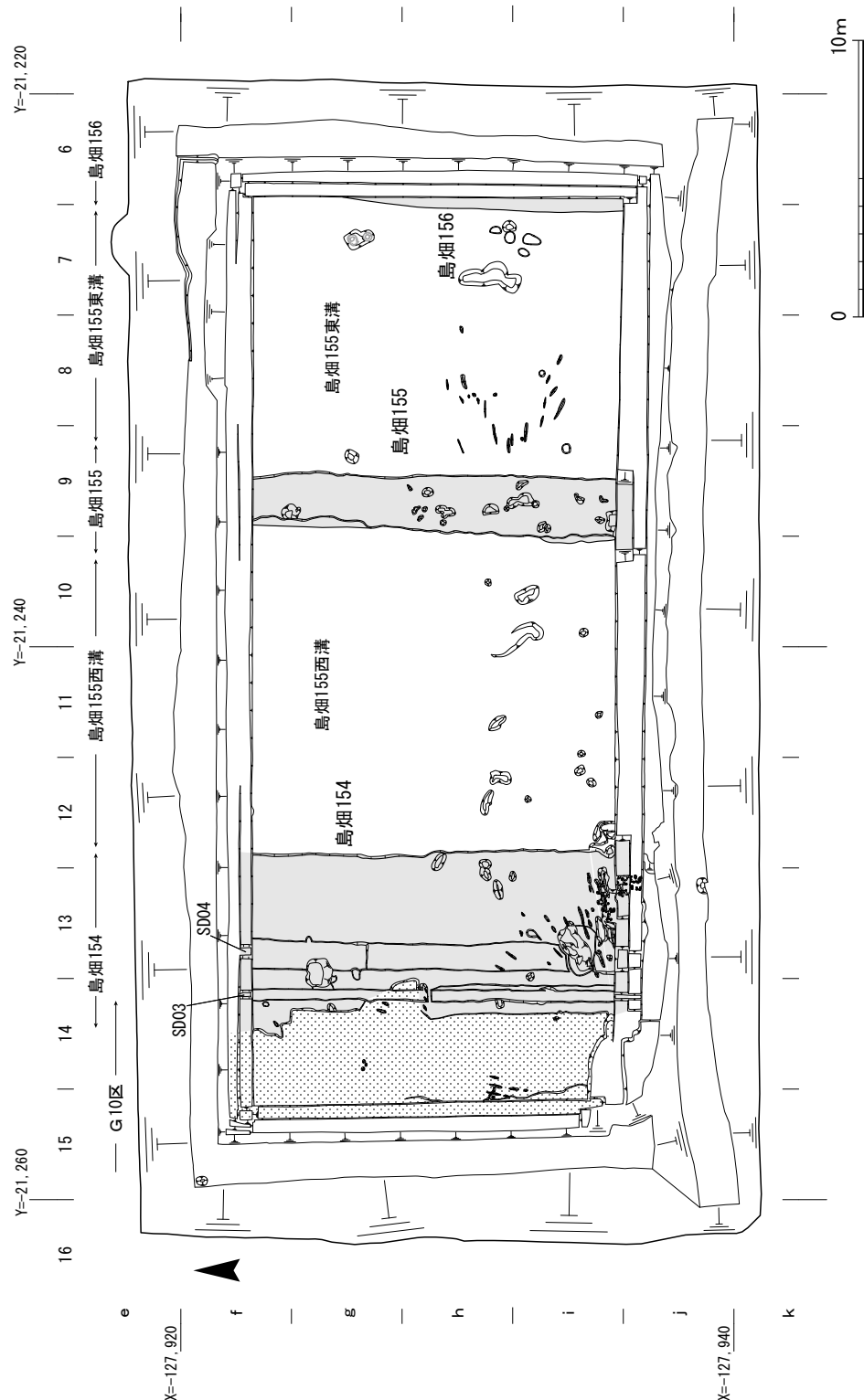
12) G18区 の 調 査

(1) 調査の概要

令和7年度に水主神社東遺跡第18次調査として実施した。調整池の建設予定地で、平成30年度に実施したG9区とG10区の間に位置する。調査により、南北方向の島畑を3基確認した。

今回の調査は、調整池の建設には標高15.3mまでの掘削しか伴わないため、遺構の保護のための層厚0.3mを考慮して、標高15.0mよりも上位に重要な遺構・遺物が包蔵されていないかを確認すること、遺構が毀損する場合にはそれを記録することを目的とした。調査面積は900㎡である。

新名神高速道路が計画される以前は、国道24号の路面は周囲の田畑よりも約2m高い位置に敷



第209図 G18区検出遺構配置図(1/250)

設されていたが、新名神高速道路・国道24号の整備工事に伴い、調査着手前には現国道24号路面の高さまで盛土がされていた。

表土掘削を重機を用いて開始したところ、G9区、G10区の橋脚工事を行った際に改良剤による地盤改良がなされていた。地盤改良がなされていたのは標高15.3～15.5m付近までで、ほぼ旧地表面である田畑の耕作土を除去した高さである。以下、標高15.0mの高さまで重機で掘削を行

ったところ、西辺についても、調査地内の約4mの幅にわたって、標高15.0mよりも低い位置にまで地盤改良が施されていた。西隣のG10区の調査区を重ね合わせたところ、地盤改良を受けているところはG10区の調査区であったことが判明した(第208図)。

重機掘削後、標高15.0m付近で人力により荒掘り・精査を行ったところ、重機による爪痕や掘り返しが南半部を中心に認められた。調査区の全面にわたって地盤改良がなされていることから、重機による薬剤の攪拌時につけられたバケットの爪の痕跡と判断した。遺構としては、南北方向に幅数mの帯状の色調の違いを3か所で認めた。これらは島畑の盛土の単位が平面的に見えているものと想定し、北辺と南辺に沿って断ち割りを行い、標高15mよりも下層の土層の堆積を確認した。

最終的に、中世の島畑の盛土および島畑上の溝、島畑間の溝を検出・確認したが、重要な遺構の分布は認められなかった。

(2)基本層序(第210・211図)

現在の国道24号の高さにまで約2mの地盤改良がなされており、ほぼ旧地表の水田耕作土を除去した高さである。調査区の東半は国道24号に面した店舗があり、コンクリート擁壁とその盛土が造られている。調査区の西辺の島畑154の西側では、遺構面よりも下にまで地盤改良による攪乱が及んでいるが、その範囲はG10区の調査において調査済みの部分である(第209図)。

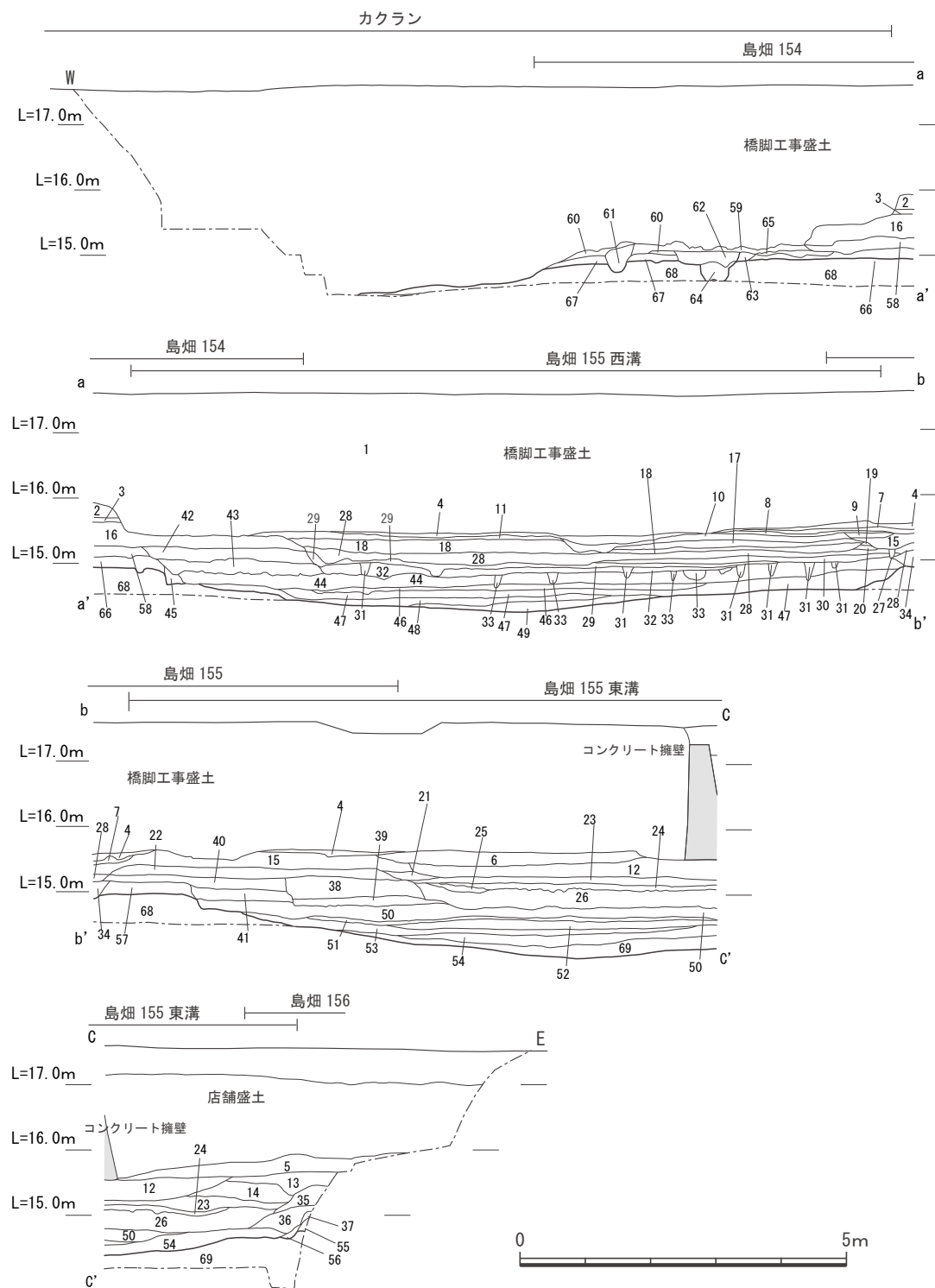
68・69層が島畑の基盤層である明黄褐色土で、この土壌を切り盛りして最初期の島畑3基が造成されている(島畑154～156)。これらの基盤層における島畑の上面はほぼ標高15.0～14.8mにあり、掘削深度内で島畑の範囲をほぼ検出することができた。島畑の基盤層と判断する69層中からは明褐色～茶褐色を呈する土器片がわずかに出土しており、島畑以前の遺物と判断され、周辺地より堆積したものと推測される。

島畑154は第68層を0.65mの深さで掘り込み形成された島畑で、58～66層は島畑上に盛り上げられた盛土および島畑上の溝である。61層がS D03、62～64層がS D04の埋土となる。また、s島畑154の西溝内に44～49層が堆積した後に、42・43層が盛られ、島畑が東側に拡張されたものと判断される。この島畑上には16層が盛られ、島畑が上方に嵩上げされる。32層、44層が島畑155西溝内に堆積した段階で、31層、33層の植物の根痕と判断される小ピット状の穴が多数穿たれており、島畑の外側でも作物を栽培したものと判断される。

島畑155も東側に拡張したと判断される土層がみられる。15・21・22・34・38・39・40・41・57層が島畑155の盛土と判断されるが、島畑155東溝内に50層が堆積した段階で40・41層、38・39層が島畑の東側に拡張して盛土されている。

島畑156はそのほとんどが調査地外にあるが、13・14層、35～37層、55・56層が島畑の盛土と判断される。東壁土層は島畑156直上の土層となる(第211図)。基本的に島畑上の盛土が水平に堆積しているのが観察され、10層が島畑基盤層であり、9層よりも上が島畑の盛土および耕作土となる。

(3)検出遺構(第209図)

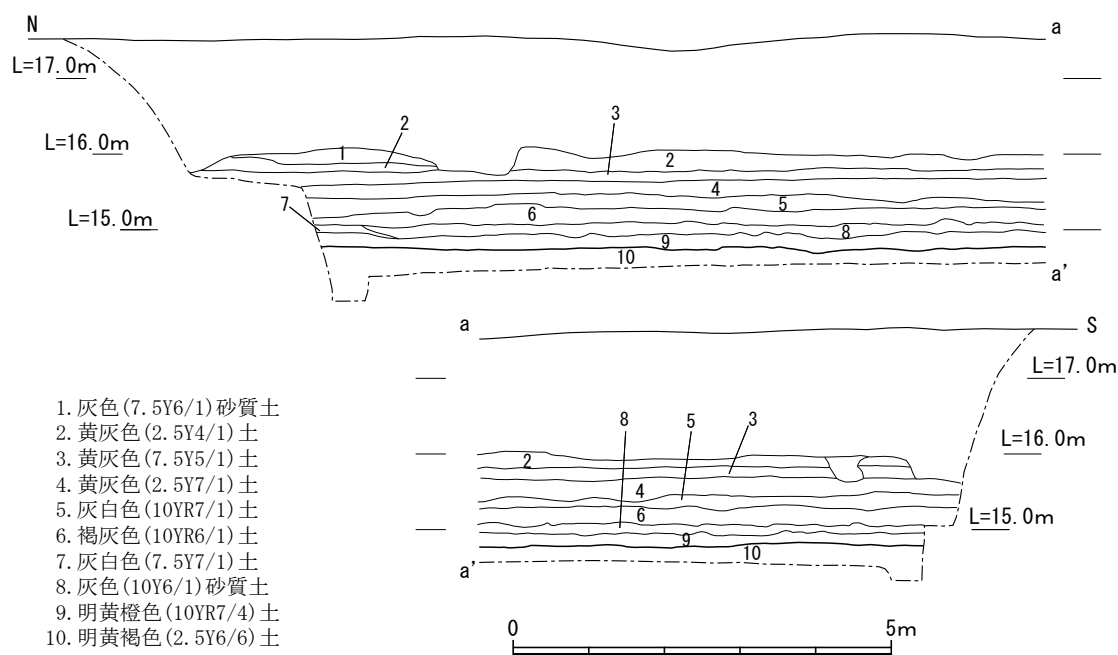


1. 明青灰色(10BG7/1)・灰白色(5Y7/2)・淡黄色(7.5Y8/3)がマーブル状(φ1~15cm)に混じる褐灰色(10YR4/1)~灰黄色(2.5Y6/2)土
2. 黒褐色(2.5Y3/1)土; 耕作土
3. 黄灰色(2.5Y5/1)土; 床土
4. 暗灰色(N7/0)土
5. 黄灰色(2.5Y5/1)土
6. 褐灰色(10YR6/1~7.5YR6/1)土
7. 灰色(N5/0)シルト 13に同じか
8. 褐灰色(5YR6/1)土; φ5mm橙褐色(5Y6/6)斑が混じる
9. 灰色(N5/0)シルト
10. 灰色(N5/0)砂質土; 耕作土
11. 褐灰色(5YR6/1)土; φ5mm橙灰色(5YR6/6)斑が混じる
12. 褐灰色(10YR6/1)土
13. 黄灰色(2.5Y7/1)土
14. 明黄褐色(2.5Y7/6)斑混灰白色(7.5Y7/1)土; イネ科φ5mm多数
15. にぶい黄橙色(10YR7/4)土; 島畑盛土
16. 灰黄色(2.5Y7/2)土; 耕作土、φ5mmの明赤褐色(2.5YR5/6)斑多数混じる
17. 灰色(N6/0~N7/0)砂質土

第210図 G18区北壁土層図(1/100)

第210図土層名のつづき

- | | |
|---|--|
| 18. 灰色(N6/0)シルト | 43. オリーブ灰色(2. 5GY5/1)粘質土；灰黄色(2. 5Y6/2)細砂がブロック状に混じる |
| 19. 明緑灰色(10G7/1)土 | 44. 灰白色(2. 5Y7/1)～明青灰色(5B7/1)シルト |
| 20. 明青灰色(10BG7/1)砂質土 | 45. 暗緑灰色(6G7/1)シルト |
| 21. 明褐色(10YR7/6)斑(φ5mm)混灰白色(10Y6/1)砂質土 | 46. オリーブ黒色(10Y3/1)シルト |
| 22. 灰黄色(2. 5Y7/2)土；耕作土φ5mm明黄褐色(2. 5YR5/6)斑多数；イネ科茎 | 47. 灰白色(N7/0)シルト |
| 23. 明褐色(10YR7/6)斑(φ5mm)混灰白色(7. 5Y7/1)砂質土 | 48. 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト |
| 24. 灰色(10Y6/1)砂質土 | 49. 灰黄色(2. 5Y6/2)シルト |
| 25. 灰白色(7. 5Y7/1)シルト | 50. 灰白色(5B7/0)土 |
| 26. 灰色(7. 5Y6/1)砂質土 | 51. オリーブ黒色(5Y6/2)細砂混じり灰色(N6/0)シルト |
| 27. 青灰色(5B6/1)シルト | 52. 灰色(5Y6/1)砂質土 |
| 28. 灰白色(2. 5Y7/1)砂質土 | 53. 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト |
| 29. 淡黄色(2. 5Y7/4)細砂多く混じる灰白色(2. 5Y7/1)土 | 54. 灰黄色(2. 5Y6/2)シルト |
| 30. 灰色(N6/0)シルト | 55. 明黄橙色(10YR7/4)土；島畑盛土 |
| 31. 淡黄色(2. 5Y7/9)細砂多く混じる明青灰色(5B7/1)シルト；根 | 56. 灰白色(2. 5Y7/1)土 |
| 32. 灰白色(2. 5Y7/1)～明青灰色(5B7/1)シルト | 57. にぶい黄橙色(10YR7/2)～灰白色(10Y7/1)土；島畑整地土、部分的に還元状態 |
| 33. 淡黄色(2. 5Y7/9)細砂混じり青灰色(5B6/1)シルト；根 | 58. 明青灰色(10BG7/1)土 |
| 34. 緑灰色(5G5/1)土；溝 | 59. 灰色(10Y5/1)粘質土 |
| 35. 灰白色(10YR4/1)土 | 60. 灰オリーブ色(5Y6/2)土 |
| 36. 褐色(10YR6/1)土 | 61. 灰黄色(2. 5Y6/2)粘質土 |
| 37. 灰白色(7. 5Y7/1)土 | 62. 灰黄色(2. 5Y6/2)土 |
| 38. 灰黄色(2. 5Y6/2)細砂 | 63. 青灰色(5B6/1)粘質土 |
| 39. 暗灰黄色(2. 5Y5/2)細砂がブロック状に混じる灰白色(N7/0)シルト | 64. 暗灰黄色(2. 5Y5/2)土 |
| 40. 灰白色(N7/0)シルト | 65. 灰オリーブ色(5Y6/2)土 |
| 41. 明青灰色(5B7/1)シルト | 66. 灰黄色(2. 5Y6/2)～明青灰色(5G7/1)土 |
| 42. 緑灰色(7. 5GY6/1)粘質土 | 67. 明黄褐色(10YR6/6)土；盛土 |
| | 68. 明黄褐色(10YR7/6)土 |
| | 69. 明黄褐色(2. 5Y6/6)土；島畑ベース；土器小片混じる |



第211図 G18区東壁土層図(1/100)

島畑154 調査区西側で検出した島畑である。島畑の西側、調査区の西端はG10区の調査範囲にあたり、約4mにわたって改良剤による整地のため攪乱を受けていた。そのため、島畑154の西端は攪乱のため検出できず、幅5.8mにわたって島畑頂部の平坦面を検出した。G10区との調査成果から、上幅が6.5mの島畑に復原できる。島畑上面は標高14.95mである。島畑上では南北方向の溝SD03・04の2条を検出した。北辺と南辺にサブトレンチを入れて下層を確認したとこ

ろ、島畑本体内では標高15mではほぼ島畑の基盤層にあたっており、最大で0.65mの掘削を行って最初期の島畑を造成していることが判明した。

島畑155 中央部やや東側で検出した島畑で、標高15.0mではほぼ水平な基盤層を掘り残した島畑頂部の平坦面を検出した。島畑の幅は約2.1mである。最大で0.95mの深さで掘削を行っている。

島畑156 調査区東端で検出した島畑で、標高14.8mで島畑基盤層を確認し、検出幅は最大で0.5mである。0.7mの深さで掘削が行われている。

溝S D03 島畑154の上で検出した。調査面で平面的に確認したが、調整池造成に伴う掘削面よりも下位に位置し、工事後も完存するため、調査区の北辺と南辺だけを掘削し規模を確認した。土層観察により、盛土の上位より掘り込まれており、本来の規模は幅0.5m、深さ0.4mである。南から北に向けて下る傾斜をもつ。

溝S D04 島畑154の上で検出した。S D03と同じく、調査区の北辺と南辺のみを掘削した。断面の観察により、盛土の上位より掘り込まれており、2段掘りの形状となる。幅1.2m、深さ0.45mである。南から北に向けて下る傾斜をもつ。

島畑155東溝 島畑155と156の間の溝で、9.6mの幅で確認した。土層の観察により、島畑153が時期が下るとともに東側に拡張されていくのが確認できた。また、島畑間の溝内でも耕作が行われていることを示唆する小ピットを土層の観察で確認した。

島畑155西溝 島畑154と155の間の溝で、11.3mの幅で確認した。土層の観察により、島畑154は東側に拡張されていくのが確認できた。

(4)小結

島畑を3基検出した。建造物の建設に伴う掘削高の関係から、標高15mまでの調査であるため、基盤層において島畑の上面を確認しただけである。島畑の周囲の溝は断ち割り内での土層の観察にとどまったが、島畑を拡張していること、島畑間の窪地内で耕作を行ったと推定できる小ピットを観察できた。

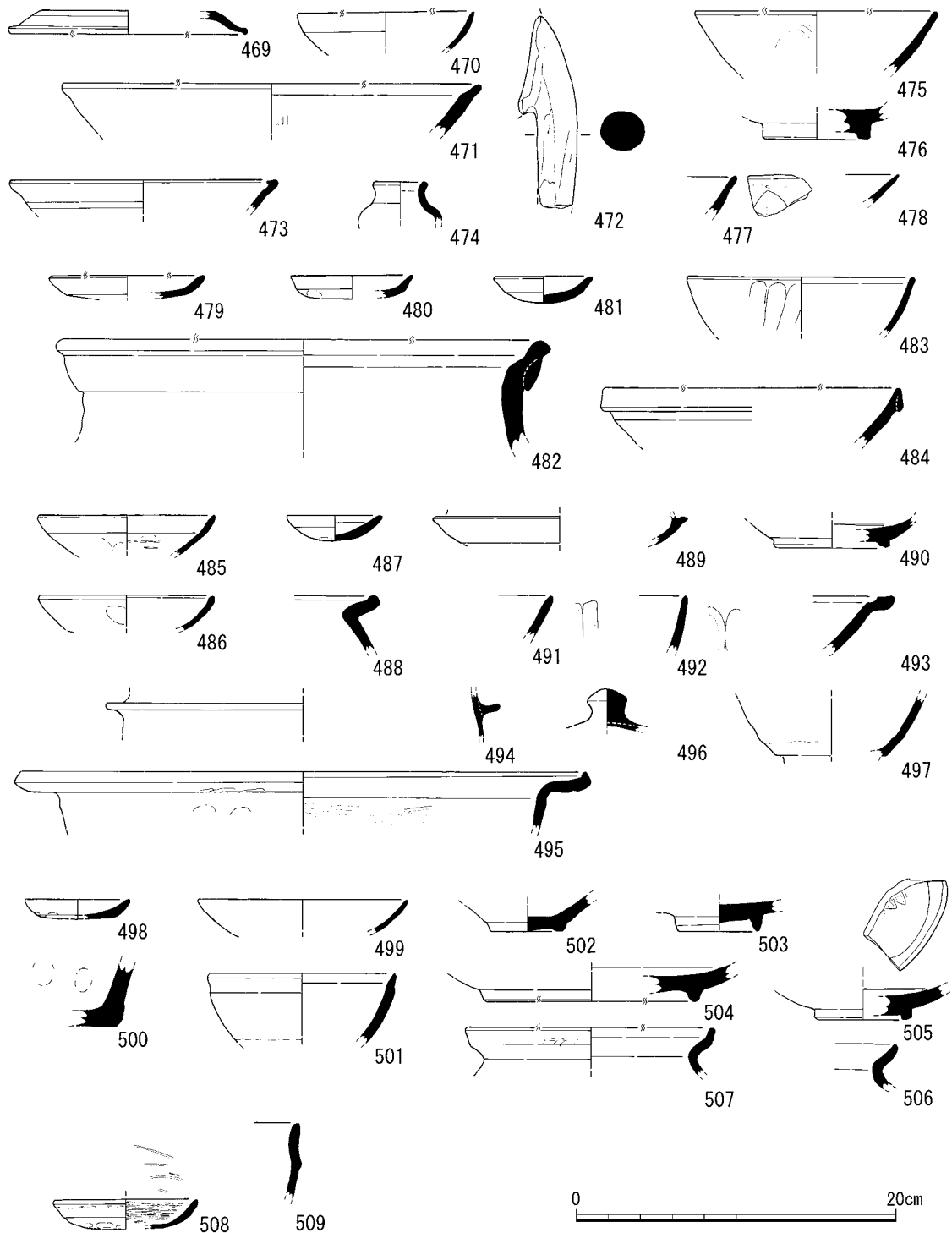
13)出土遺物

(1)G1区(第212図469～478)

須恵器や土師器、瓦器、磁器などの遺物が出土しているが、小片のものが多く、図化できるものは少ない。469は須恵器蓋、471は瓦質土器のすり鉢、472は瓦質土器鍋の脚部、478は白磁碗でS D02内の11層から出土した。476は青磁碗でS D02内から出土した。470は瓦器碗、477は青磁碗とともに南壁清掃時に出土した。473は瀬戸灰釉陶器の皿で島畑142上面精査時の6層、474は陶器壺で島畑142の上面溝S D00から出土した。

(2)G2区(第212図479～484、第214図531・536・537)

479・480は土師器皿、482は陶器甕、484は白磁碗で島畑西溝のS D04から出土した。481は土師器皿で西壁中、483は青磁碗で16・18層下面の精査時に出土した。531は北宋銭の咸平元寶(998年～1003年铸造)でS D04の18層から出土した。536・537は石鏃で、536はS D04の17層、537は島畑東溝のS D05から出土した。



第212図 G 1～5区出土土器

G 1区：469～478、G 2区：479～484、G 3区：485～497、G 4区：498～507、G 5区：508・509

(3) G 3区(第212図485～497、第214図534・535)

485は瓦器碗、486は土師器皿でS D 07から出土した。485は、暗文は外面になく内面にわずかに観察できる。486は口縁部端外面に面をもつ。489は須恵器杯身、492は青磁碗で、493は瀬戸灰釉陶器の鉢、496は土師器の蓋つまみ、497は天目茶碗で島畑西溝S D 07から出土した。487は土師器皿、490は緑釉陶器碗底部で島畑136から出土。488は土師器甕、491は青磁碗で、蓮弁が施されている。494は土師器羽釜、495は土師器鍋で16・17層精査時に出土した。534は農耕具の刃先で、

S D07の15層から出土した。535は釘の残欠で、S D07から出土した。

(4) G 4区(第212図498～507、第214図532・533)

498は土師器皿、501は天目茶碗、502は瀬戸灰釉陶器碗、504は陶器皿、505は白磁碗、506は弥生土器甕、507は近江系の弥生土器甕である。これらは24・25層の精査時に出土した。503は島畑164北溝S D01内から出土した青磁碗である。532・533は銭貨で、元祐通寶(初鑄1086年)、聖宋元寶(初鑄1101年)である。ともに島畑164北溝S D01から出土した。

499は土師器皿で重機掘削時、500は瓦質土器底部で北壁中より出土した。

(5) G 5区(第212図508・509)

508はS D02から出土した瓦器皿で、内面は横方向の暗文が密に施され、見込みにはジグザグの暗文が施されている。509は断ち割り内から出土した縄文土器深鉢である。

(6) G 6区(第213図510～515)

510は布留式の土師器甕で口縁端部が内側に肥厚するもので、外面に煤が付着している。氾濫流路のN R01から出土した。511は須恵器杯蓋、513は瓦質土器鍋、514は須恵器甕で、13層の灰色シルトから出土した。512は土師器甕、515は青磁碗で、重機掘削時に出土した。

(7) G 7区(第213図516)

細片がわずかに出土しただけで、実測しうるものは516のみである。516は島畑134西溝内の基盤面直上44層中から出土した須恵器鉢である。

(8) G 8区

土師器・須恵器・瓦器・磁器などの小片がわずかに出土しただけで、実測しうるものはない。

(9) G 9区(第213図538)

土師器・須恵器・瓦器・磁器などの小片がわずかに出土した。538は粘板岩の石包丁で、島畑基盤層直上の18層から出土した。

(10) G 10区(第213図517)

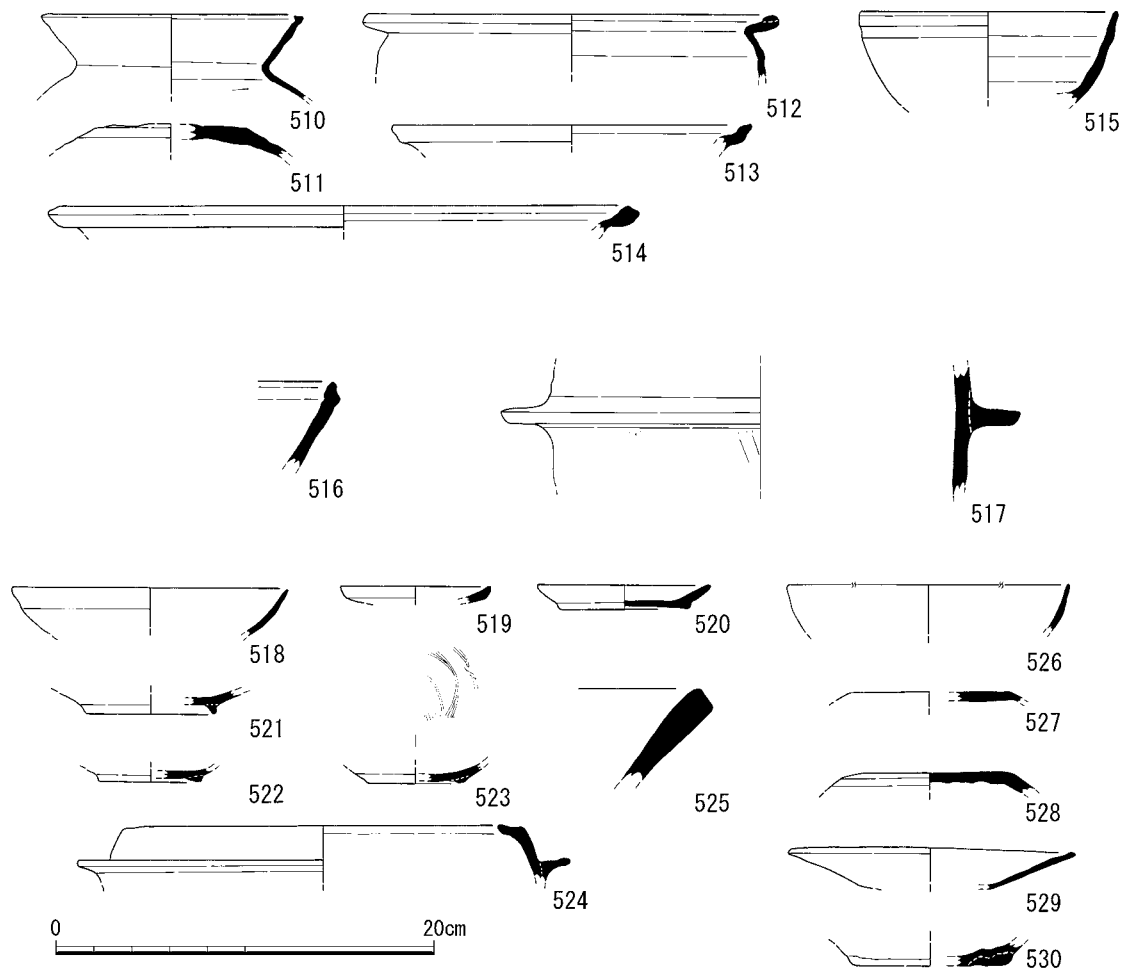
遺物の出土はほとんどなく、517は廃土中で採取した瓦質土器の羽釜である。

(11) G 18区(第214図518～530)

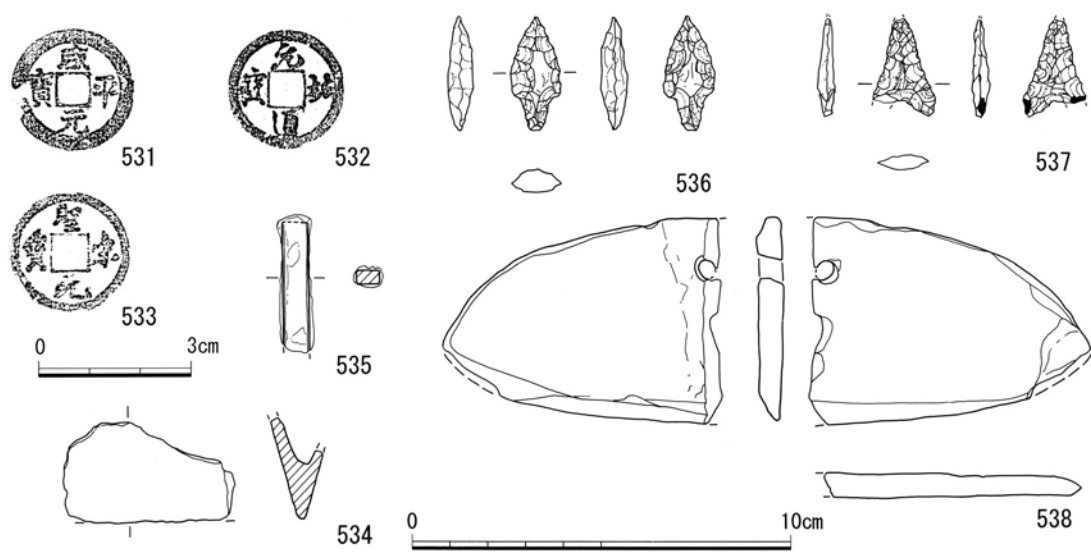
平面掘削・精査時にも土師器・須恵器・瓦器・磁器などの小片が出土したが、実測可能なものは北辺・南辺の断ち割り内から出土したものである。島畑155の西溝からは、519の瓦器皿、520の土師器皿、521の瓦器碗、524の土師器羽釜、525の瓦質の鉢、529の土師器高杯が出土している。島畑155の東溝からは、518・523の瓦器碗、530の縄文土器深鉢が出土している。

13) G 地区のまとめ

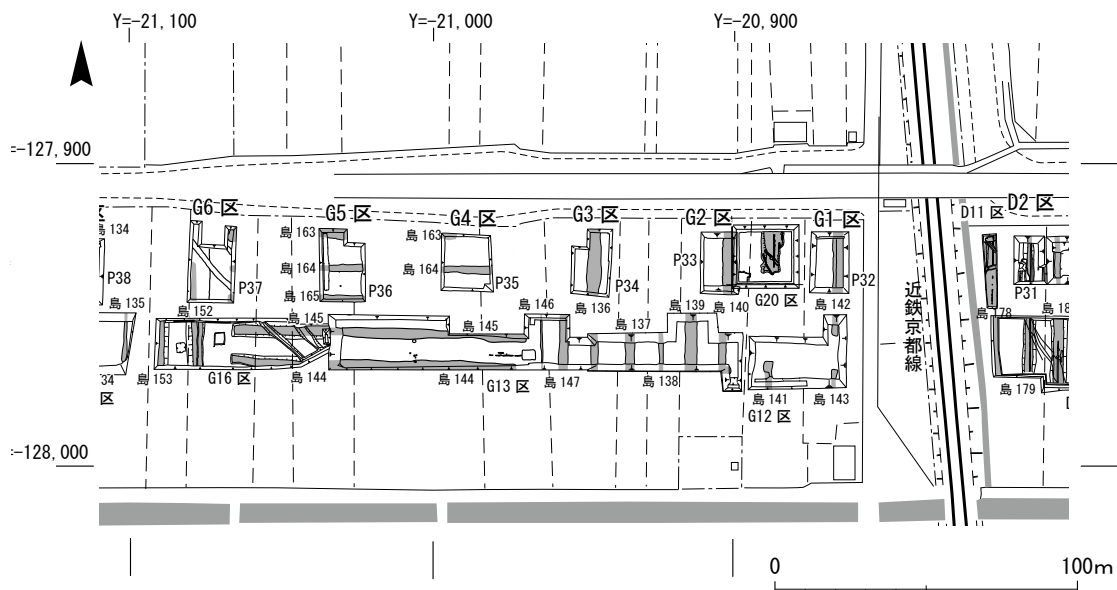
G 地区では島畑を中心とした遺構を検出した。島畑は東西・南北方向に造られているが、新名神関連調査のG 1～10・18区の11調査区では、南北方向が13基、東西方向3基の島畑を確認した。国道24号関連調査を含めると、南北方向の島畑が26基、東西方向のものが5基である。注目されるのは、G 4区～G 6・13・16区で検出した東西方向の島畑163～165・144・145の5基である。島畑144・145は97mにわたって一続きに造られていることが確認できており、この東側、西側と



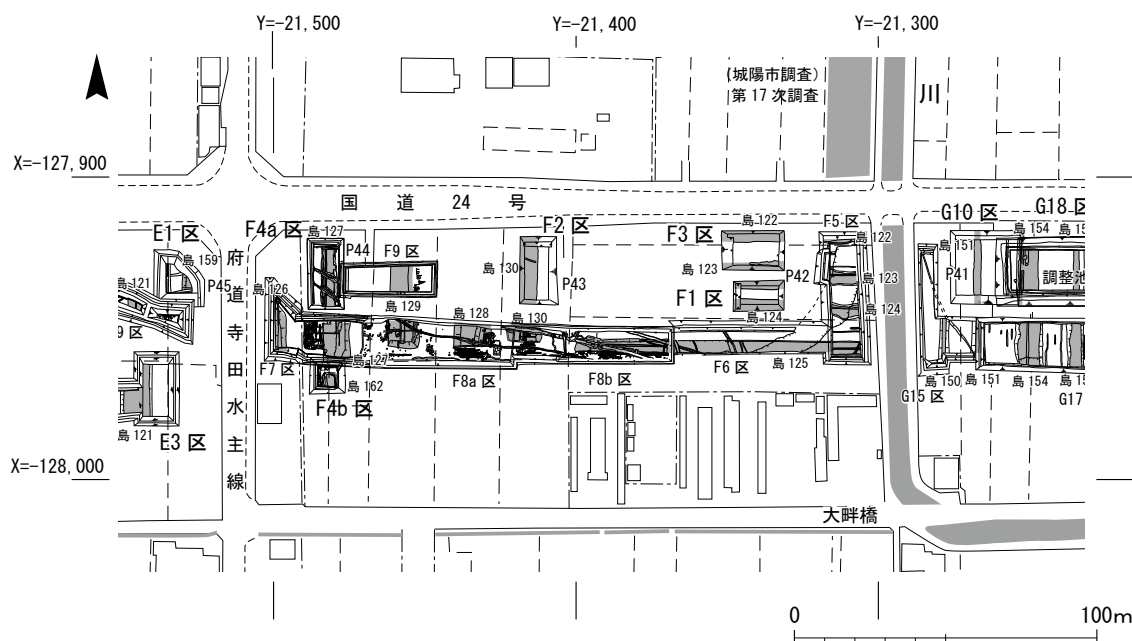
第213図 G 6・7・10・18区出土土器
G 6区：510～515、G 7区：516、G 10区：517、G 18区：518～530



第214図 G地区出土遺物
G 2区：531・536・537、G 3区：534・535、G 4区：532・533、G 9区：538



第215図 水主神社東遺跡G地区の調査 東(1/2,500)



第216図 水主神社東遺跡G地区の調査 西(1/2,500)

もに空地を隔てて南北方向の島畑が造られている。北側の島畑163～165も部分的にしか確認していないが、同様の島畑であると推測される。これらについては、「12. まとめ」で検討したい。

G地区では、中世初頭より島畑が造成され稠密に分布している。中世末から近世初頭においても島畑上での耕作が行われており、B地区やC地区の一部では池沼といった環境下にあったこととは異なるところである。

中世以前の遺物はわずかに出土するものの、G6区、G10区で確認した自然流路以外の遺構は確認できていない。各調査区で島畑調査後に断ち割りを行ったところ、いずれの調査区でもシルト・粘土層が厚く堆積しており、中世以前は池沼といった環境下にあったものと復原できる。

(岩松 保)

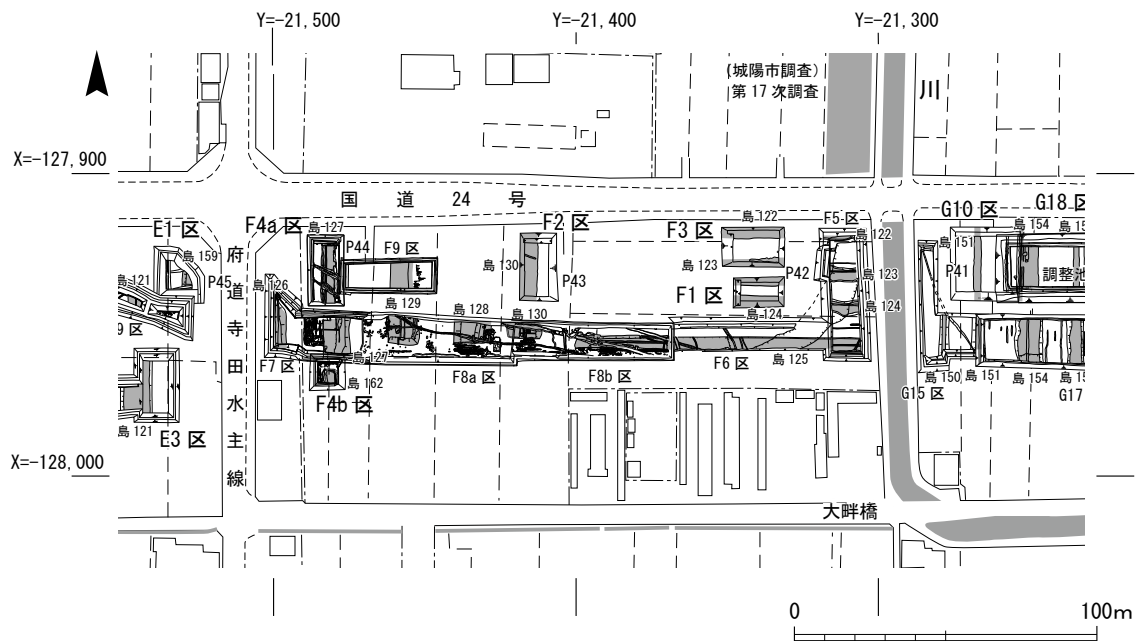
12. 調査のまとめ

1) 島畑の分布から見た地割りの復原

城陽市の低地部分においては、城陽JCT・ICの建設に伴う調査を実施して以来、多くの島畑を確認し、その分布状況がわかってきた。国道24号関係の調査に伴って実施された小樋尻遺跡の調査成果が、現時点では未報告であるため、ここでは水主神社東遺跡に限って、島畑の分布から地割りを検討したい。

第217図は府道寺田水主線と今池川の間でF地区において検出した島畑の配置図である。注目されるのは、F8b・6区で、東西方向の島畑125を検出しており、約95mの長さにわたって確認できた点である。この島畑の東端は調査地内では確認できておらず、さらに東に延びていることから、ほぼ1町分の長さで造られた島畑と言える。その北側ではF1・3・5区で東西方向の島畑122～124を検出しており、未調査部分が多くあるものの、東西方向の1町分の長さの島畑が平行して分布しているようである。これらはほぼ1町分の長さで東西に造られた島畑であることから、これらの島畑群の東端・西端が1町の区切りと推定される。東側を見ると、今池川が南北に流れており、その東側のG10・15区では南北方向の島畑が検出されている。今池川を境に島畑の造られる方向が異なり、今池川が1町の区切りをなしていると言えよう。島畑122～125の西側を見ると、F2・F8a区で南北方向の島畑130を検出していることから、島畑125西端の空閑地が1町の区切りと捉えられる。

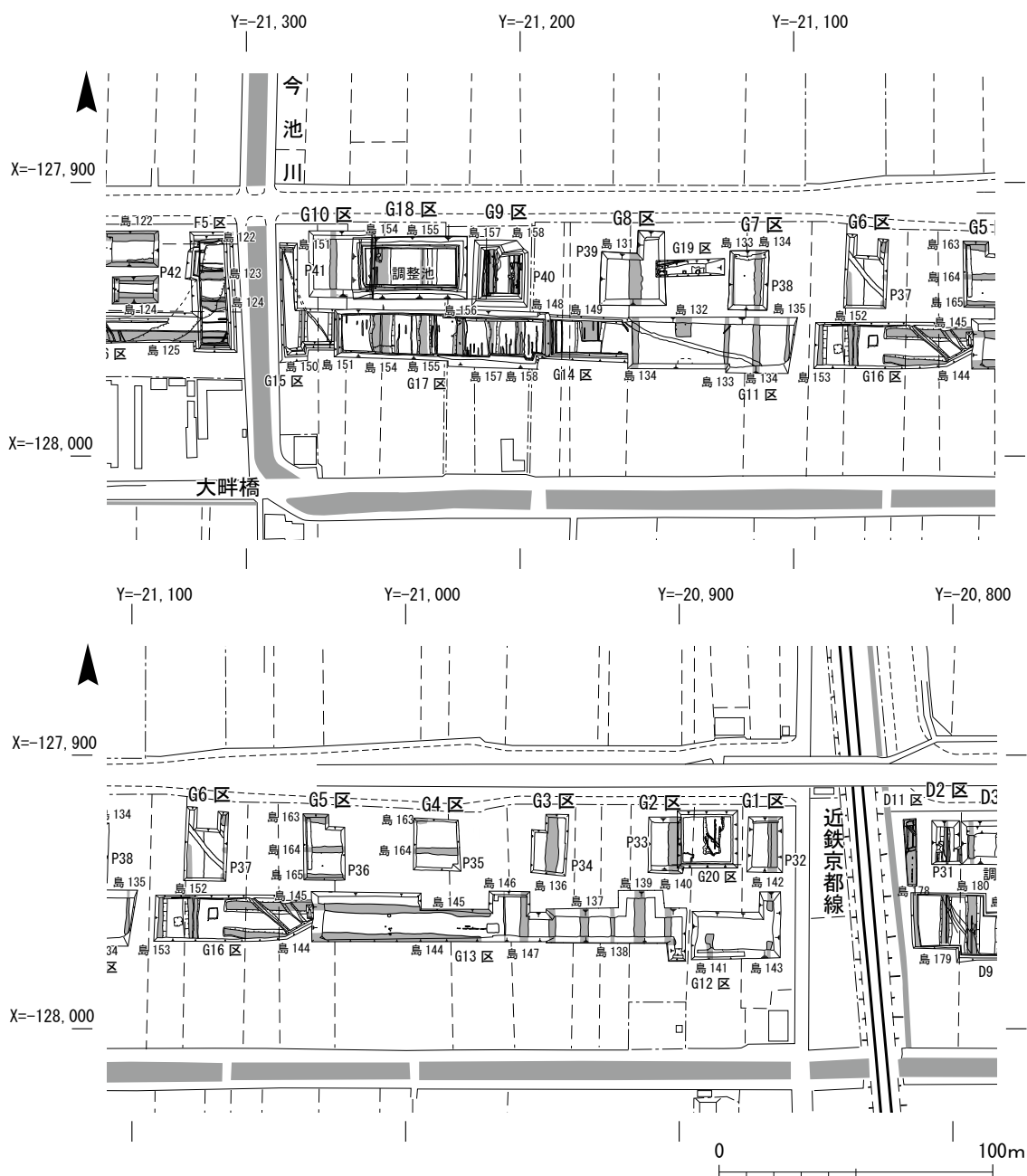
G地区においても東西方向の島畑を検出している。G13・16区で一続きで島畑144・145を検出しており、長さ97mを測る。この北側のG4～6区の調査であるが、東西方向の島畑163～165を検出している。南北約50mの範囲に少なくとも5基の島畑が東西方向に造られていることがうかがえる。この東側、西側の調査区では、ともに南北方向の島畑が造られており、島畑163～165の



第217図 水主神社東遺跡F地区の調査(1/2,500)

東西方向の島畑の長さがほぼ100mあることから、一町幅の島畑と捉えることができる。

F・G地区を区切る今池川の流路を見ると、G地区以東は東西方向に流れており、G地区とF地区の間で90°に屈曲し南北方向に流れを変えている。このような不自然な流路のあり方から、人工的に手が加えられた川であると判断できるであろう。今池川が開削もしくは改修された時期については、今までの発掘調査で関連した遺構を確認できておらず不明である。しかし、先に見たように、南北方向の今池川が1町の区切りとなっていることから、少なくとも今池川の現在の流路は、島畑を造営した際の地割りに基づいて設定されたと考えられる。F・G地区で認められた東西幅1町を測る島畑の配置を南北方向の今池川を基準に見ると、F地区の島畑125は西1町、

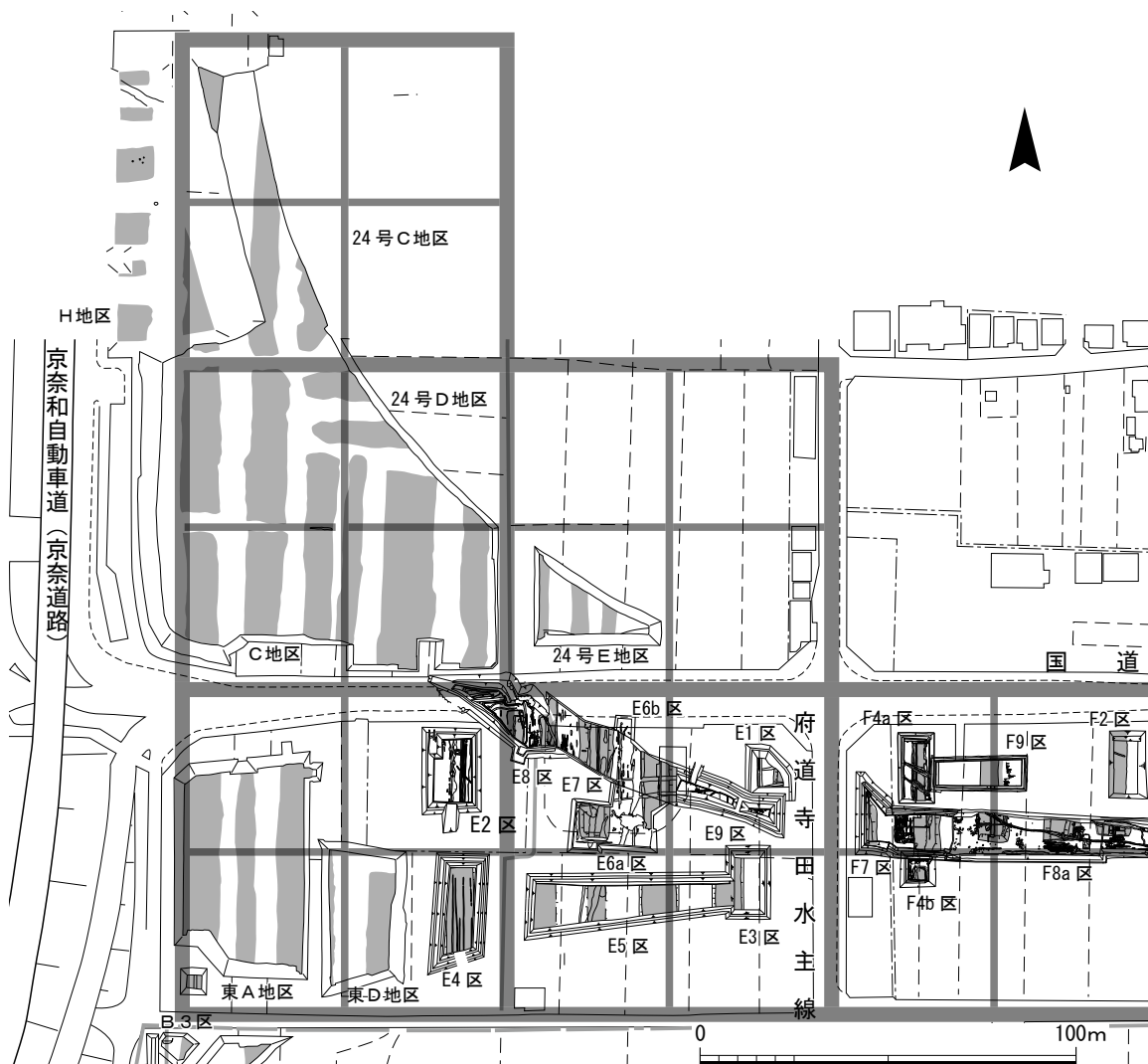


第218図 水主神社東遺跡G地区の調査(1/2,500)

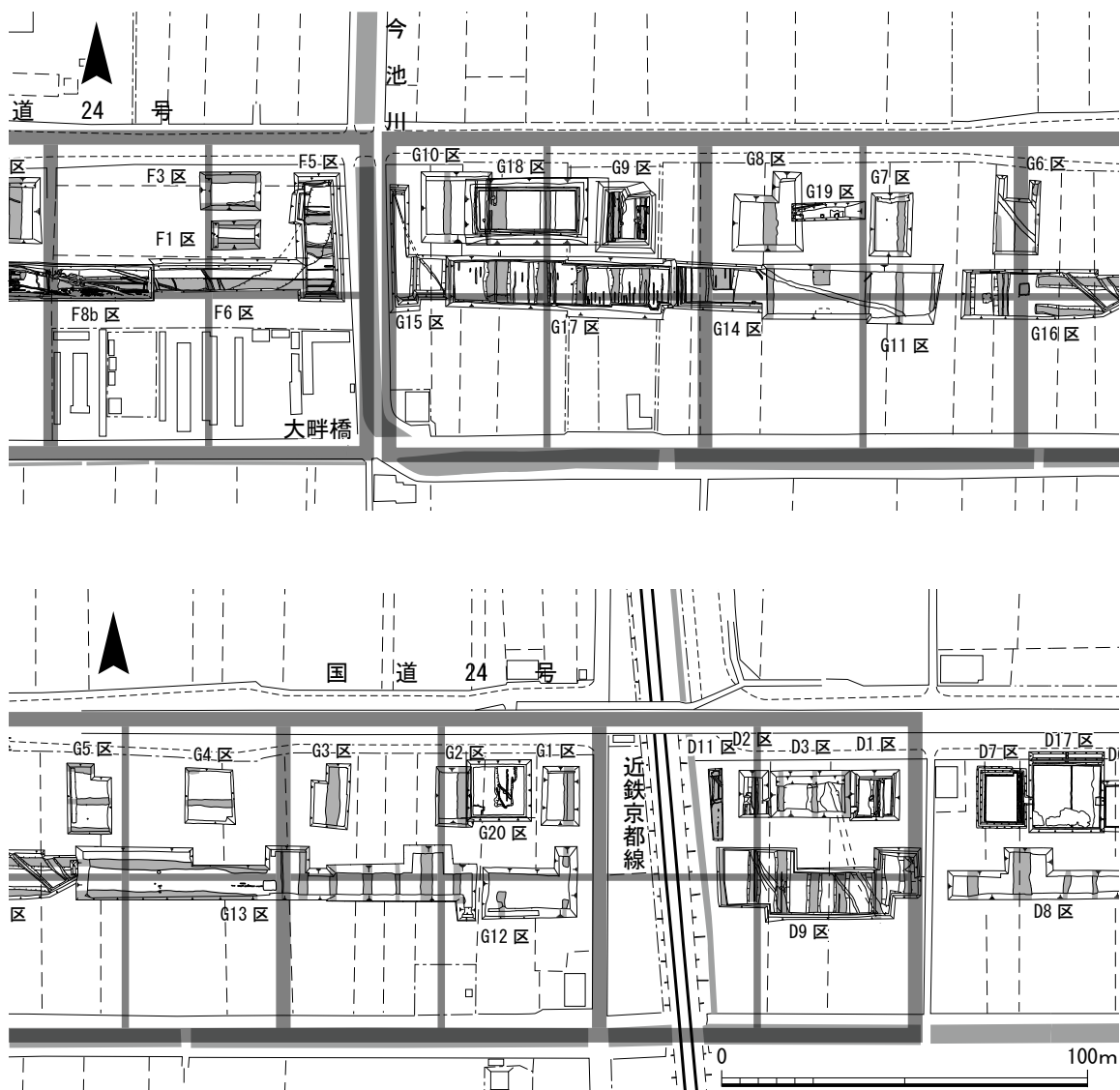
G地区の島畑144・145は東3町にあたり、今池川が条里の地割りに則っているという想定に当てはまりが良いと言える。

次いで、南北方向の区割りについて検討したい。調査区の中で、南北方向の島畑のうち、南辺・北辺を確認しているものに着目する。G地区では、G12区の島畑141・143の北辺、142の南辺、G11・14区の島畑132・149の南辺があり、それぞれの島畑の端部の外側には空閑地がある。これらの空閑地はほぼ東西方向に筋状に分布している。F地区では、F8a区で島畑128～130の南辺、F7区の島畑127の南辺、F4b区で島畑162の北辺を確認している。これら島畑の外側にある空閑地もほぼ東西方向に一直線に並んでいる。E地区ではE6a区で島畑116の南辺を検出している。

これらE・F・G地区で認められた島畑の辺と空閑地は、それぞれの地区のみならずそれらを越えてほぼ東西に連なって分布していることから、個々の特殊な事情ではなく、広範囲に設けられた地割りに規制され、それを反映しているものと推定される。一方で、この空閑地の並びに島畑が造られているものも認められることから、1町単位に区切られた地割りではなく、1町内を



第219図 水主神社東遺跡E・F地区の地割(1/2,000)



第220図 水主神社東遺跡F・G地区の地割(1/2,000)

細分する地割りと判断される。

先に見たように、今池川の南北の流れが南北の地割りを踏襲していると考えられるので、今池川の東西方向の流路もまた、地割りに一致していると考えられる。そこで南北方向の今池川から、東西方向に島畑の辺および空閑地、島畑128～130の南辺、島畑132・149南辺、島畑141・143北辺までの距離を見ると、ほぼ50m北側に位置しており、ほぼ半町にあたる長さとなる。

以上のことを踏まえ、今池川の屈曲部を基準として、一町を108m(太線)と半町54m(細線)とし、方形の区画で地割りを示したのが、第219・220図である。新名神・国道24号関係調査の島畑の配置は言うに及ばず、城陽ジャンクションのH地区や24号D地区、東A・D地区の島畑の配置もこの区割りに比較的まとまっているものとする。また、国道24号や府道寺田水主線、細かな里道も合致しているかと思う。ただし、今池川の東と西でやや不整合であり、今池川上で10m弱の空閑地が必要である。今池川の改修が島畑と同時であり、川幅分を地割りの中に組み入れたと想定すると、この不整合は解消する。図上では上述のようになるが、実際には、今池川またはその祖

型となるものが島畑造営時に存在したのか、発掘調査では確認できていない。今後の課題とした。

2) 島畑の造営と土地利用

今回の新名神高速道路整備事業に伴い橋脚・調整池建設予定地の調査を48か所51地点で実施した。一つ一つの調査区は400㎡足らずのものが多く、顕著な遺構を確認したのは数か所にとどまる。しかし、見方を変えると、城陽市の低地、城陽ジャンクションからJR奈良線にいたるまでの約2kmの間にわたってグリッド調査を行ったこととなる。ここでは、島畑の造営と分布を中心に、検出した遺構の時期と遺構面の高さから土地利用の変遷を検討したい。

付表11は島畑およびその他の遺構の検出の有無と遺構面の高さを一覧にしたものである。東から西に向けて調査区を並べており、ほぼ重複する地点での調査区は省いている。

一覧を見ると、新名神関係での発掘調査において、島畑造営の基盤層の高さは16.2m～14.0mまで分布している。おおまかな傾向として、東から西に向けて基盤層が下る地形となっているが、これは、城陽市の東には丘陵が分布し、西側には木津川が流れているためである。そして、島畑はおおよそ、標高16mより下の地区で造られていることがわかる。この場合の島畑とは、中世初頭に造られた基盤層を掘り込んで周りの土を盛り上げて造るものをいう。一方、B地区からC地区東辺にかけては遺構面が標高16.0mをかるうじて上回っており、ここでは島畑が造られておらず、平坦地で耕作溝を確認しており、通有の農地として利用されていたようである。島畑の成立の要因が、「湿地における可耕地を可能な限り増やすために土を盛り上げた」とするならば、標高16.0mよりも下か上かが、この地域での中世段階における湿潤地と乾燥地とを分ける標高であったと言える。同様のことは、古墳時代においても認められ、標高16mよりも上か下かで、遺構の有無、人間による土地利用の可否が分かれたと推測される。

集落の分布を見ると、C1区とD13区で中世の集落が確認されており、B10区では古墳時代と推測される掘立柱建物跡などが検出されている。これらは標高16m以上の場所で、16mより低い位置には分布していない。そして、D13区に見られるように、集落の立地は、16m以上の中でも周囲と比べてほんのわずかでも高い位置に分布しているようである。

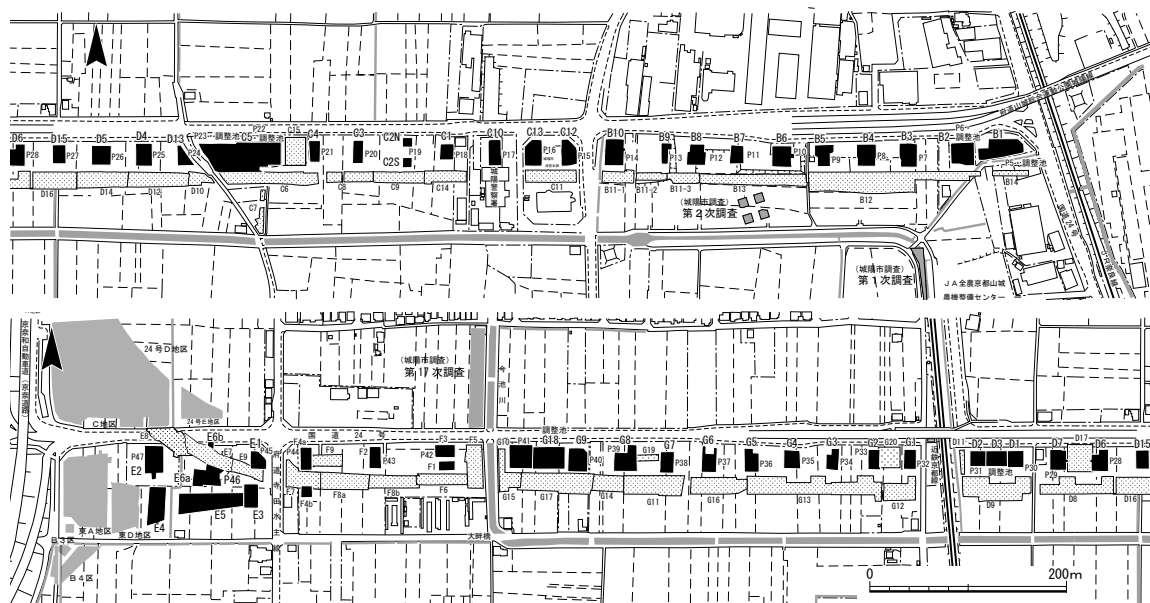
以上のことと、各地区のまとめでも触れたことを踏まえ、新名神高速道路の路線における全体的な土地利用の変遷をまとめたい。

小樋尻遺跡、水主神社東遺跡では、それぞれの調査区で基盤層を断ち割って下層を確認すると、シルト・粘土層が厚く堆積しており、長期間にわたって広範囲に池沼といった環境下にあったものと推定される。そして各地で、弥生時代～古墳時代初頭の土器を含む自然流路(その多くは氾濫流路と想定できる)が多数確認されていることから、少なくとも湿潤な状態は弥生～古墳時代初頭まで続いていたと判断される。

古墳時代後期以降には、B3～10区にかけて、標高16m以上の地点が陸地化し、集落や農地が営まれる。標高16m以下の土地は低湿地であり、土地利用に向かなかったものと判断される。この環境は12世紀後半まで続き、集落や農地は標高16m以上の場所でのみ営まれている。13世紀代

付表11 各調査区の遺構面・検出遺構の時代一覧

遺跡名	調査地区	調査区	橋脚 番号等	基盤層 標高	島畑	古墳？	地震 痕跡	中世		自然 流路	備考
								島畑以外 の耕作溝	集落遺構		
小樋尻遺跡	B地区	B 1	P 5 調整池	—	—	—	—	—	—	○	
		B 2	P 6 調整池	—	—	—	○	—	—	○	
		B 3	P7	16.2	—	○	○		—		
		B 4	P8	16.2	—	○	○	○	—		
		B 5	P9	16.2	—	○	○	○	—		
		B 6	P10	16.1	—	○	○	○	—		
		B 7	P11	15.8	—	○	○	○	—		
		B 8	P12	16.1	—	○	○	○	—		
		B 9	P13	16.2	—	○	○	○	—		
		B10	P14	16.2	—	○	○	○	—	○	掘立柱建物・柵列
	C地区	C12	P15	16.0	—	—	—	○	—		
		C13	P16	15.9	—	—	—	○	—		
		C10	P17	16.1	—	—	—	○	—		
		C 1	P18	16.0	○	—	—	—	○	○	掘立柱建物・柵列
		C 2	P19	15.8	○	—	—	—	—	○	
		C 3	P20	15.8	○	—	—	—	—	○	
		C 4	P21	15.5	○	—	○	—	○	○	土坑1基
		C 5	P22 調整池	—	—	—	○	—	—	○	流路
	D地区	D13	P24	16.1	○	—	—	—	○		ピット多数
		D 4	P25	15.4	—	—	—	—	—	○	近世以降の島畑
		D 5	P26	15.6	○	—	—	—	—	○	
		D15	P27	16.0	○	—	—	—	—	○	
		D 6	P28	15.6	○	—	—	—	—		
		D 7	P29	15.4	○	—	—	—	—		
		D 1	P30	15.2	○	—	—	—	—		
		D 3	調整池	15.2	○	—	—	—	—	○	
		D 2	P31	15.3	○	—	—	—	—		
水主神社東遺跡	G地区	G 1	P32	15.5	○	—	—	—	—	○	
		G 2	P33	15.3	○	—	—	—	—		
		G 3	P34	15.0	○	—	—	—	—		
		G 4	P35	15.1	○	—	—	—	—		
		G 5	P36	15.1	○	—	—	—	—		
		G 6	P37	14.8	○	—	—	—	—	○	
		G 7	P38	15.1	○	—	—	—	—	○	
		G 8	P39	15.1	○	—	—	—	—		
		G 9	P40	14.9	○	—	—	—	—		
		G18	調整池	15.0	○	—	—	—	—		
		G10	P41	15.0	○	—	—	—	—	○	
	F地区	F 3	P42	14.9	○	—	—	—	—		F1 14.5
		F 2	P43	14.8	○	—	—	—	—	○	
		F 4	P44	15.0	○	—	—	—	—	○	
	E地区	E 1	P45	14.6	○	—	—	—	—		
		E 5	盛土	14.2	○	—	—	—	—	○	
		E 2	P47	14.7	○	—	—	—	—		



第221図 小樋尻遺跡・水主神社東遺跡の調査区配置図(1/7,500)

になると、農地拡大の社会的な要求のためか、標高16m以下の湿地にあっては島畑が造られて、湿地内の耕地化が推し進められた。

丘陵裾のB1・2区では、池沼があったためか、中世段階でも土地利用がなされず、近代に至ってはじめて土地利用がなされている。また、C5区では、縄文時代から古代にいたるまで流路が存在したことがわかっており、中世に至っても耕地や集落としての土地利用はなされていない。近世初頭段階では、B2～10区、C5区で地震による地層の変形が認められる。地層変形の生成過程から類推すると、これらの地区は近世初頭には湿地もしくは池沼であったものと推定される。C5区は前代の流路の影響か、その後も湿地であったものと判断される。

近世以降にも低湿地を中心に島畑として土地利用がなされているが、近代になると多くの島畑は埋められて、平地の田畑へと作り変えられたようである。(岩松 保)

注1 平成20年度以降に調査に着手した新名神高速道路整備事業に伴い刊行した発掘調査報告書は以下のとおりである

村田和弘・松尾史子2010「女谷横穴群第10・11次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

引原茂治・松尾史子2011「女谷横穴群 第11・12次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第142冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

古川 匠2012「美濃山廃寺下層遺跡第8次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第148冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

石井清司・伊野近富・筒井崇史・村田和弘・関廣尚世・大高義寛2013「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡 第9次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第154冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

奈良康正・筒井崇史・村田和弘・山崎美輪2014「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23・24年度

発掘調査報告 (1)女谷・荒坂横穴群第13次調査 (2)荒坂遺跡第5次『京都府遺跡調査報告集』第157冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富・筒井崇史・村田和弘・大高義寛ほか2015「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 (1)門田遺跡第3～5次 (2)西村遺跡第2・3次 (3)向谷遺跡第3・4次」『京都府遺跡調査報告集』第161冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

加藤雅士・村田和弘・酒井健司・山崎美輪ほか2018「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～26年度発掘調査報告 (1)松井横穴群第1～4次 (2)向山遺跡第2次」『京都府遺跡調査報告集』第171冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注2 以下の報告書として刊行されている

戸原和人・岡崎研一・筒井崇史・村田和弘ほか2016「新名神高速道路整備事業関係遺跡 平成23～25年度発掘調査報告 (1)水主神社東遺跡第1・2・5次 (2)下水主遺跡第1・4次」『京都府遺跡調査報告集』第167冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

筒井崇史・高野陽子・岡田健吾ほか2017「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成25・27・28年度発掘調査報告 下水主遺跡第4次(F地区)」『京都府遺跡調査報告集』第168冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

高野陽子・筒井崇史・福山博章・関廣尚世ほか2018「新名神高速道路整備事業関係遺跡 平成24～26年度発掘調査報告 下水主遺跡第1・4・6次」『京都府遺跡調査報告集』第173冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

岡崎研一・筒井崇史・山崎美輪・渡邊拓也・桐井理揮2018「新名神高速道路整備事業関係遺跡 平成26・27年度発掘調査報告 下水主遺跡第6・9次 水主神社東遺跡第6・7次」『京都府遺跡調査報告集』第174冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

加藤雅士2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第10～12次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第192冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注3 加藤雅士・橋本稔・内藤京2021「新名神高速道路整備事業関係遺跡 平成27～29・令和元年度発掘調査報告 保安塚、長井野塚、唄田遺跡第1・2次、砂川古墳、奥城土遺跡、禪定寺城跡第3次」『京都府遺跡調査報告集』第181冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注4 高野陽子・筒井崇史・加藤雅士・菅博絵・桐井理揮ほか2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成27～令和2年度発掘調査報告 芝山遺跡・芝山古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第189冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注5 国道24号金尾交差点改良事業に伴う発掘調査は以下の報告書である

増田孝彦・岡崎研一・黒坪一樹・引原茂治・酒井健治2015「一般国道24号金尾交差点改良関係遺跡平成24・25年度発掘調査報告 下水主遺跡第2・3次 水主神社東遺跡第3・4次」『京都府遺跡調査報告集』第163冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

石井清司・筒井崇史・渡邊拓也・橋本稔・田原葉月ほか2017「一般国道24号城陽 I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡 下水主遺跡第6・8次」『京都府遺跡調査報告集』第170冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注6 小泉裕司・岩松保・福山博章・鈴木郁哉ほか2024「水主神社東遺跡 第9・10・12・14・16次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第195冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注7 城陽市教育委員会の小樋尻遺跡に関する調査報告書は以下のとおりである。

小樋尻遺跡第1次 城陽市教育委員会2003『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第43集

- 小樋尻遺跡第2次 城陽市教育委員会2016『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第71集
小樋尻遺跡第4次 城陽市教育委員会 2018『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第73集
- 注8 国道24号関係調査にかかわる小樋尻遺跡の調査略報は以下のとおりである
岡崎研一2019「小樋尻遺跡第7次」『京都府埋蔵文化財情報』第135号
岩松 保2020「小樋尻遺跡第9次」『京都府埋蔵文化財情報』第138号
小泉裕司・中尾真琴2021「小樋尻遺跡第10次」『京都府埋蔵文化財情報』第140号
福山博章2021「小樋尻遺跡第10次(C5区)・第11次(C6区)」『京都府埋蔵文化財情報』第140号
小泉裕司2022「小樋尻遺跡第12・13次」『京都府埋蔵文化財情報』第143号
小泉裕司2023「小樋尻遺跡第14次」『京都府埋蔵文化財情報』第144号
- 注9 小泉裕司2023「小樋尻遺跡第13次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第192冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注10 城陽市教育委員会の水主神社東遺跡第17次調査報告書は次のとおりである
城陽市教育委員会2023『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第82冊
- 注11 以下の記述の中で、氾濫流路・地震痕跡については、当調査研究センター増田富士雄理事(京都大学名誉教授)よりご教示いただいた
- 注12 三好孝一2024『北野廃寺・北野遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2023-6 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- 注13 以下の縄文土器の記述については下記の文献を参考にした-
- 家根祥多1981「晩期の土器－近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第4巻(縄文土器Ⅱ)雄山閣
泉 拓良1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科
小泉裕司・喜多貞裕・岡田憲一・新里遥・西山集2018『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第76集 城陽市教育委員会
桐井理揮2018「5. 下水主遺跡第6次調査 5) L地区の調査(3)出土遺物 ④下層・最下層出土遺物」『京都府遺跡調査報告集』第174冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
岡田憲一2014「瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』(第25回中四国縄文研究会徳島大会)中四国縄文研究会
佐原 真1967「山城における弥生文化の成立－畿内第Ⅰ様式の細分と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』第50巻第5号 史学研究会
田畑直彦1997「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集』Ⅰ立命館大学考古学論集刊行会

付表12 B1～C4出土土器観察表

口径・底径欄：() 復元径 器高欄：() 残存高 - 測定不能														
番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	B1	南半	20層	瓦質土器	鉢	(11.8)	(4.5)	—	口縁1/12	密	良好	暗灰 (N3/0)	指オサエ、ナデ	
2	B1	南半	22層	須恵器	杯B	—	(3.5)	(11.2)	底部2/12	やや粗	堅緻	灰白 (N7/0)	回転ナデ 回転ヘラ切り	
3	B1	南半	22層	須恵器	甕	(19.2)	(4.6)	—	口縁小片	密	堅緻	灰色 (N6/0)	回転ナデ	
4	B1	南半	22層	白磁	椀	(17.6)	(2.7)	—	口縁2/12	密	堅緻	灰白 (7.5Y8/1)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	
5	B1	グリッド4	22層	須恵器	甕	—	(7.2)	—	—	密	堅緻	灰白 (2.5Y7/1)	内) ナデ、タタキ 外) ナデ、タタキ	内) 自然釉
6	B2			須恵器	杯身	(10.6)	(1.5)	—	口縁1/12	密	良好	灰白 (N7/0)	回転ナデ	
7	B2			須恵器	杯蓋	(13.0)	(2.7)	—	口縁1/12	密	堅緻	灰白 (N8/0)	回転ナデ	外) 自然釉
8	B2			須恵器	蓋	(13.8)	(1.2)	—	口縁小片	やや粗	堅緻	灰白 (N7/0)	回転ナデ	
9	B2			須恵器	杯B	—	(1.15)	(10.4)	底部1/8	密	堅緻	灰白 (N7/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ヘラ切りのちナデ	
10	B2			須恵器	杯A	—	(1.3)	(8.4)	底部2/12	密	堅緻	灰白 (N8/0)	回転ナデ	
11	B2			須恵器	杯	(13.0)	3.0	(7.4)	底部2/12	密	堅緻	灰白 (7.5Y7/1)	回転ナデ、ナデ	
12	B2			須恵器	鉢	(28.8)	(5.1)	—	小片	密	やや軟	灰白 (N8/0)	ナデ	
13	B2			須恵器	壺	—	(4.2)	(11.6)	底部2/12	やや粗	良好	灰白 (N7/0)	回転ナデ	
14	B2			須恵器	甕	(16.0)	(4.7)	—	口縁4/12	やや密	堅緻	灰 (N6/0)	回転ナデ	
15	B2			須恵器	甕	(24.0)	(14.5)	—	口縁6/12	やや粗	堅緻	青灰 (5PB)	内・外) 回転ナデ、 タタキ	
16	B2			須恵器	杯	(18.6)	(3.0)	—	口縁1/12	密	堅緻	灰白 (N7/0)	回転ナデ	
17	B2	精査	32・33層	瓦質土器	壺	—	(3.0)	—	口縁小片	密	やや軟	内) 灰白 (7.5Y7/1) 外) 暗灰 (N3/) 灰 (N6/)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ摩滅	
18	B2	精査	32・33層	白磁	椀	—	(1.6)	(5.7)	底部5.5/12	密	堅緻	内・外) 灰白 (7.5Y8/1)	内・外) 施釉	
19	B4	精査	7層	磁器	椀	(9.8)	(1.8)	—	口縁小片	密	堅緻	内・外) 露胎部灰白 (2.5Y7/1) 施釉灰白 (5GY8/1)	内・外) 施釉 口縁部露胎	近世
20	B4	精査	7層	青磁	椀	(11.8)	(2.0)	—	口縁小片	密	堅緻	内・外) オリーブ灰 (2.5GY6/1)	内・外) 施釉	内・外) 貫入あり
21	B4	SD03		須恵器	杯蓋	(13.0)	(2.8)	—	口縁小片	密	堅緻	内) 灰 (N6/) 外) 灰 (N5/)	内・外) 回転ナデ	外) 自然釉
22	B4	SD03		須恵器	杯身	(10.2)	(2.7)	—	口縁小片	密	堅緻	内・外) 灰 (N6/)	内・外) 回転ナデ	
23	B4	SD03		須恵器	杯身	(9.0)	(3.0)	—	口縁2/12強	密 白色粒混ざる	堅緻	内・外) 灰 (N6/)	内・外) 回転ナデ	
24	B4	SD03		土師器	鉢	(23.4)	(10.8)	—	口縁3/12	粗	軟	内) 灰白 (10YR8/2) 外) 灰白 (10YR8/2) 褐灰 (10YR8/2)	内) 一部ハケ 外) 粘土継目痕	片口縁

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
25	B4	SD03		須恵器	甕	頸部 (22.1)	(7.4)	—	頸部 小片	密	良好	青灰 (5PB6/1)	外) カキメ、平行 タタキ 内) 同心円タタキ	
26	B4	SD03		須恵器	甕	—	(13.0)	—	—	やや粗	良好	青灰 (6PB6/1)	外) タタキ 内) 同心円タタキ	
27	B5	北側断 ち割り	6・8 層	白磁	皿	—	(1.4)	(4.1)	底部 1/3	精良	堅緻	灰白 (5Y8/1)	内) 炭化材付着 外) 施釉露胎 炭化材付着	
28	B5	北側断 ち割り	6・8 層	白磁	碗	—	(2.8)	(6.8)	底部 4/12	精良	堅緻	灰白 (10Y8/1)	内) 施釉 外) 露胎	
29	B5	南半	8層	土師器	皿	(12.6)	(3.2)	—	口縁 1/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3 ~ 10YR7/2)	内) ナデ 外) ナデ口縁縁部 強いナデ	
30	B5		8層	須恵器	杯蓋	残存長 (4.2)	(1.0)	—	1/12 弱	密	良好	内) 灰白 (N7/0) 外) 灰 (N6/0)	内・外) 回転ナデ	
31	B5		8層	須恵器	杯蓋	(19.2)	(1.5)	—	口縁 1/12 弱	密	良好	内) 灰白 (N7/0) 外) 灰 (N6/1)	内・外) 回転ナデ	
32	B5	攪乱		土師器	壺	(9.2)	(5.2)	—	口縁 1/12	密	良好	橙 (5YR7/6 ~ 5YR6/6)	内・外) ヨコナデ	内) 沈線
33	B5	SD34		土師器	鉢	15.4	7.8	—	ほぼ 完形	やや粗	良好	灰白 (10YR8/2)	内) ハケメ 外) ハケメ、ケズ リ、ユビオサエ	粘土痕あ り 外) 沈線
34	B5	排水溝	6・8 層	土師器	甌	タテ (5.2)	ヨコ (6.7)	厚さ (2.1)	—	密	良好	灰白 (2.5Y8/2)	ハケメユビオサエ	把手
35	B6	重機 掘削		染付	碗	—	(2.8)	(6.6)	底部 1/12	密	堅緻	内・外) 灰白 (2.5GY8/) 模様) 明るい 藍色	内・外) 施釉 高台) 露胎	外) 貫入 あり
36	B6	精査	10・11 層	瓦器	碗	(11.8)	(2.5)	—	口縁 2/12 弱	粗	良	内・外) 灰 (N4/)	内) ミガキ 外) 回転ナデユビ オサエ	楠葉型
37	B6	精査	10・11 層	瓦器	碗	(12.8)	(2.5)	—	口縁 小片	密	やや軟	内) 灰白 (N7/) 外) 灰 (N6/)	内・外) 回転ナデ	楠葉型
38	B6	精査	11層	須恵器	蓋	(10.0)	(1.7)	つまみ 径 (2.2)	口縁 1/8	やや密	堅緻	内・外) 灰白 (N7/)	内・外) 回転ナデ つまみ貼り付け痕	
39	B6	精査	10・11 層	須恵器	杯	—	(0.9)	(8.0)	底部 1/8	密	良	内・外) 灰白 (N7/)	内・外) 回転ナデ	
40	B6	北壁 断割	10・11 層	須恵器	鉢	—	(3.0)	—	口縁 小片	やや粗	軟	内) 灰白 (5Y8/2) 灰 (5Y6/1) 外) 灰白 (5Y7/1)	内・外) ナデ	
41	B6	南壁 断割	10・11 層	瓦質 土器	鉢	(27.8)	(5.5)	—	口縁 1/12	やや密	良	内) 褐灰 (10YR4/1) 外) 黒 (N1.5/)	内・外) ナデ	外) 煤付 着
42	B6	精査	11層	土師器	高杯	—	(5.0)	—	—	粗	やや軟	内) にぶい橙 (7.5YR7/4) 外) にぶい橙 (5YR7/4)	内) ナデしほり痕 外) 摩滅	
43	B6	精査	11層	土師器	甕	(12.8)	(3.3)	—	口縁 1/12	粗	良好	淡橙色 (5YR8/3)	内・外) 摩滅不明 瞭	
44	B6	SD01		土師器	甕	(14.0)	(4.2)	—	口縁 5/12	粗	良好	内・外) にぶ い橙 (5YR7/3)	内・外) ナデ 内) ハケメ痕 粘土継目痕	46 と同 一物体?
45	B6	精査	11層	土師器	甕	頸部径 (5.2)	(2.1)	—	頸部 1/12	密	良好	内) 明褐灰 (5YR7/2) 外) にぶい橙 (5YR7/4)	内・外) 摩滅不明 瞭	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
46	B6	SD01		土師器	甕	—	(6.2)	(3.2)	底部 6/12	粗	良好	内・外) にお い橙 (5YR8/4)	内) ハケメ 外) 摩滅、底部付 近ユビオサエ	44 と同 一団体の 可能性
47	B7	精査	13 層	白磁	壺	—	(1.9)	6.4	底部 10/12	密	堅緻	灰白 (10Y8/1)	内) 施釉 外) 回転ナデ	
48	B7	東側側 溝掘削		瀬戸 灰釉	椀	(16.2)	(3.9)	—	口縁小 片	密	堅緻	内・外) オリーブ黄 (5Y6/3)	施釉	内・外) 貫入
49	B7	精査	13 層	白磁	椀	—	(1.8)	—	口縁小 片	密	堅緻	灰白 (5Y8/2)	施釉	
50	B7	精査	13 層	瓦器	椀	—	(3.0)	—	口縁 1.5/12	密	良好	暗灰 (N3/0)	内) ミガキ 外) ミガキ	楠葉型
51	B7	精査	13 層	瓦質 土器	播鉢	—	(3.5)	(9.8)	底部 1/8	やや密	やや軟	内・外) 暗灰 (N4/)	ユビオサエのちハ ケ	
52	B7	精査	13 層	土師器	羽釜	つば径 (26.8)	(3.6)	—	小片	密	良好	内) にぶい褐) 7.5YR6/3) 外) 明褐灰 (7.5YR7/2)	内・外) ナデ	
53	B8	精査	6・8 層	土師器	皿	(7.4)	1.0	(5.4)	口縁 1/8	密	良好	灰白 (2.5Y8/1)	内) ナデ 外) ナデ	コースタ ー
54	B8	精査	6・8 層	瓦器	椀	(12.0)	(1.8)	—	口縁 小片	密	良好	灰 (N4/0)	内) ミガキ 外) ナデ	内) 口縁 縁部沈線
55	B8	精査	6・8 層	瓦器	椀	(14.0)	(4.2)	—	口縁 1/12	密	やや軟	灰白 (2.5Y8/1)	内) ナデ 外) ユビオサエの ちナデ	内) 口縁 縁部沈線
56	B8	精査	6・8 層	瓦質土 器	羽釜	—	(2.7)	—	口縁 小片	密	良好	暗灰 (N3/0)	内・外) ナデ	
57	B8	精査	6・8 層	青磁	椀	(15.0)	(2.7)	—	口縁 1/8	密	堅緻	灰オリーブ (7.5Y6/2)	内・外) 施釉	内・外) 貫入
58	B8	精査	6・8 層	白磁	椀	(15.6)	(3.9)	—	口縁 2/12	密	堅緻	灰白 (5Y7/1)	内・外) 施釉	外) 漆? 付着
59	B8	精査	6・8 層	白磁	皿	(11.0)	2.3	5.4	口縁 小片	密	堅緻	灰白 (10Y8/1)	内・外) 施釉	内) 漆付 着
60	B8	SD01		土師器	小型 甕	残存 胴径 14.9	(6.8)	—	—	やや粗	良好	内) 明褐灰 (7.5YR7/1) 外) 灰褐 (7.5YR6/2)	内) ハケこげ付着 外) ハケ摩滅煤付 着	外) 十字 状のヘラ ガキ
61	B8	精査	8 層	須恵器	鉢	—	(3.2)	—	口縁 小片	密	堅緻	灰 (N6/0)	内・外) 回転ナデ	内) 自然 釉
62	B9	精査	19 層	瓦器	椀	—	(2.4)	—	口縁 小片	密	良好	暗灰 (N3/0)	内・外) ナデ、ミ ガキ	大和型
63	B9	精査	19 層	瓦器	椀	—	(1.0)	(7.4)	底部 1/12	密	良好	暗灰 (N3/0)	内・外) 摩滅のため 不明	楠葉型
64	B9	精査	19 層	瓦器	椀	—	(1.3)	(4.8)	底部 2/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) ナデ、ミガキ 外) 摩滅のため 不明	大和型か
65	B9	重機 掘削		染付	椀	(10.4)	(3.4)	—	口縁 2/12	精良	堅緻	灰白 (2.5GY8/1)	内・外) 施釉	
66	B9	精査	19 層	須恵器	杯身	(13.4)	(3.8)	—	口縁 小片	やや粗	堅緻	灰白 (N7/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、ヘ ラケズリ	
67	B9	SD01		須恵器	杯身	13.4	4.4	—	口縁 8/12	やや密	堅緻	灰 (N6/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、ヘ ラケズリ	外) 一部、 自然釉
68	B9	SK07		土師器	杯	(15.0)	(5.2)	—	口縁 1/12	やや密	良好	橙 (5YR7/6)	内・外) ミガキ	
69	B9	北壁中		白磁	椀	(15.5)	(2.7)	—	口縁 小片	密	堅緻	灰白 (5Y/7/2)	内・外) 施釉	
70	B9	SD03		土師器	長胴 甕	20.8	41.5	—	口縁 9/12	密	良好	表面) 灰白 (10YR8/2) 内面) 浅黄橙 (10YR8/3)	内・外) ハケメ、 指オサエ	黒斑 煤付着

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
71	B10		13層	須恵器	片口縁鉢	—	(3.8)	—	—	密	堅緻	内) 灰 (N6/1) 外) 灰 (N5/0)	内・外) ナデ	
72	B10	18i	13層	瓦質土器	鉢	—	(5.0)	—	口縁小片	密	良好	暗灰 (N3/0)	内・外) ナデ 外) 沈線 3ヶ所	
73	B10	18i	13層	灰釉陶器	椀	—	(1.4)	(7.8)	底部 4/12	密	堅緻	淡黄 (2.5Y8/3)	内・外) 回転ナデ	
74	B10		13層	土師器	皿	(15.6)	(2.1)	—	口縁 1/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内・外) ユビオサエのちナデ	
75	B10	17h・i	13層	瓦器	椀	—	(2.9)	—	口縁小片	密	堅緻	灰 (N4/0)	内) ミガキ 外) ナデ、ユビオサエ	
76	B10	19g・h	13層	白磁	椀	—	(4.5)	—	口縁小片	密	堅緻	灰白 (7.5Y8/1)	内・外) 施釉	
83	C1	SX33		土師器	皿	(11.8)	1.4	—	口縁 3/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	ヨコナデ、ナデ	
84	C1	SX33		土師器	皿	(9.5)	1.3	—	口縁 2/12	密	良好	灰白 (7.5YR8/2)	ヨコナデ、ナデ	
85	C1	SX33		土師器	皿	(9.6)	1.15	—	口縁 4/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内・外) ヨコナデ、ナデ	
86	C1	SX33		土師器	皿	(6.6)	0.8	—	口縁 1/8	密	良好	灰白 (7.5YR8/2)	内) ナデ 外) ヨコナデ、ナデ	コースター形
87	C1	SX33		土師器	皿	(9.7)	(1.2)	—	口縁 2/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	ヨコナデ、ナデ	
88	C1	SX33		土師器	皿	(11.8)	(1.6)	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	内・外) ヨコナデ、ナデ	
89	C1	SX33		土師器	甕	—	(2.3)	—	口縁小片	密	良好	内) 灰白 (10YR8/2) 外) 灰褐 (7.5YR5/2)	内) ヨコナデ、ナデ 外) ハケメ? ヨコナデ、ナデ	
90	C1	SX33		土師器	甕	(13.8)	(2.3)	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (7.5YR8/2)	ヨコナデ、ナデ	
91	C1	SX33		土師器	甕	(17.4)	(2.2)	—	底部 1/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、ナデ	
92	C1	SX33		瓦器	椀	(13.9)	(2.9)	—	口縁小片	密	良好	灰 (N4/0)	内) 沈線、ミガキ 外) ナデ、ミガキ	大和型
93	C1	SX33		瓦器	椀	—	(2.1)	(5.6)	底部 3/12	密	良好	灰白 (5Y8/1) 灰 (N5/0)	内) 暗文、ミガキ 外) ナデ	楠葉型
94	C1	SX33		瓦器	椀	(13.8)	(2.8)	—	口縁 1/12	密	良好	内) 沈線、ミガキ 外) 暗灰 (N3/0) ヨコナデ	大和型	
95	C1	SX33		瓦器	椀	(16.0)	(3.4)	—	口縁 1/12 強	密	良好	灰 (N4/0)	内) ミガキ 外) 横ナデ、ミガキ	大和型
96	C1	SX33		瓦器	椀	(15.8)	(3.4)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) ミガキ 外) 横ナデ、ナデ	大和型
97	C1	SX33		瓦器	椀	(13.4)	(3.7)	—	口縁小片	密	良好	灰 (N5/0)	内) ヨコナデ、ミガキ 外) ヨコナデ、ミガキ、ユビオサエ	楠葉型
98	C1	SX33		瓦器	椀	(13.8)	(5.1)	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (7.5YR8/1)	内・外) ヨコナデ、ミガキ	和泉型
99	C1	SX33		白磁	椀	—	(1.8)	—	—	精良	堅緻	灰白 (5Y8/1)	内・外) 施釉	玉縁
100	C1	SX33		白磁	椀	(10.8)	(1.6)	—	口縁 1.5/12	精良	堅緻	胎土) 白 (N9/0) 釉) 透明	内・外) 施釉	
101	C1	SX33		白磁	椀	(15.6)	(2.2)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	灰白 (2.5Y8/1)	内・外) 施釉	玉縁
102	C1	SX33		灰釉陶器	椀	—	(1.9)	(7.0)	底部 3/12	密	良好	灰白 (2.5Y7/1)	内) 釉 外) 釉、露胎	
103	C1	SX33		土師器	皿	—	(1.0)	(5.4)	底部 6/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	内・外) 回転ナデ	糸切り痕

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
104	C1	SX33		須恵器	甕	(27.6)	(7.8)	—	口縁 2/12	密	良好	灰 (N6/0)	内) ヨコナデ、指ナデ、あて具痕 外) ヨコナデ、タタキ	
105	C1	SX34		瓦器	椀	(13.7)	(3.0)	—	口縁 1.5/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) ミガキ、 外) 横ナデ、ナデ	沈線
106	C1	SX34		瓦器	椀	(15.7)	(3.3)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N5/0)	内) ミガキ、ヨコナデ、 外) 横ナデ、ミガキ	沈線
107	C1	SX34		白磁	椀	—	(2.8)	(7.2)	底部 3/12	精良	堅緻	灰白 (2.5Y8/1)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	
108	C1	SX126		土師器	皿	9.7	2.0	—	口縁 10/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ	口縁縁大きく歪む
109	C1	SX126		土師器	皿	9.8	2.2	—	口縁 11/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユビオサエ	体に鉄分付着
110	C1	SX126		土師器	皿	9.6	2.1	—	口縁 10/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ	全体鉄分付着
111	C1	SX126		土師器	皿	9.7	2.0	—	口縁 11/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	内側鉄分付着
112	C1	SX126		土師器	皿	9.5	1.9	—	口縁 10/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
113	C1	SX126		土師器	皿	9.8	1.9	—	口縁 11/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
114	C1	SX126		土師器	皿	9.4	2.2	—	口縁 11/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	口縁に歪み
115	C1	SX126		土師器	皿	(11.8)	(1.8)	—	口縁 3/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
116	C1	SX126		土師器	皿	9.7	2.1	—	口縁 9/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
117	C1	SX126		土師器	皿	9.6	1.8	—	口縁 11/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、摩滅	全体に鉄分付着
118	C1	SX126		土師器	皿	9.0	1.4	—	口縁 7/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	口縁縁やや楕円か
119	C1	SX126		土師器	皿	9.9	2.0	—	口縁 11/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	内・外) 鉄分付着
120	C1	SX126		土師器	皿	9.5	2.1	—	口縁完 存	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
121	C1	SX126		土師器	皿	9.4	1.8	—	口縁 7/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	鉄分付着、口縁縁に煤付着
122	C1	SX126		土師器	皿	9.7	2.1	—	口縁 10/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3) ~ にぶい橙 (7.5YR7/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	一部鉄分付着
123	C1	SX126		土師器	皿	9.8	2.1	—	口縁 9/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
124	C1	SX126		土師器	皿	9.6	2.0	—	口縁 10/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	鉄分付着
125	C1	SD127		須恵器	杯身	最大径 (14.0)	(2.5)	—	最大径 部 1.5/12	精良	堅緻	灰 (N6/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、回 転ケズリ	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
126	C1	SD127		須恵器	杯蓋	(13.9)	(2.3)	—	口縁 1/12 弱	密	良好	青灰 (5PB5/1)	回転ナデ	
127	C1	SD127		土師器	高杯	—	(5.6)	—	—	やや粗	良好	橙 (5YR6/6)	内) しぼり痕、ナデ 外) ケズリのちナデ	
128	C1	SP42		土師器	皿	(10.3)	1.6	—	口縁 4/12	密	良好	にぶい橙 (5YR7/3)	ヨコナデ、ナデ ユビオサエ	
129	C1	SP07		土師器	皿	—	(1.7)	—	不明	密	良好	灰白 (7.5YR8/2)	ヨコナデ、ナデ	口縁部欠損
130	C1	SP09		土師器	皿	(9.8)	1.5	—	口縁 1/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/2)	ヨコナデ、ナデ	
131	C1	SP19		土師器	皿	(11.9)	(1.9)	—	口縁 2/12	密	良好	灰白 (10YR8/1)	ヨコナデ、ナデ	内) 煤付着
132	C1	SP50		土師器	皿	(9.8)	1.3	—	口縁 3/12 強	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	ヨコナデ、ナデ	
133	C1	SP07		土師器	皿	9.7	1.5	—	完存	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内) ナデ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユビ オサエ	外) 煤付着
134	C1	SP09		土師器	皿	(8.5)	(1.9)	—	口縁 2/12	密	良好	黒褐 (5YR2/1)	ヨコナデ、ナデ	
135	C1	SP04		土師器	皿	(8.8)	(1.6)	—	口縁 6/12	密	良好	橙 (5YR7/6)	ヨコナデ、ナデ	剥離多い
136	C1	SP07		土師器	皿	(9.6)	(1.7)	—	口縁 1/12	密	良好	にぶい橙 (5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ	
137	C1	SP07		土師器	皿	(10.3)	1.6	—	口縁 6/12	密	良好	橙 (7.5YR7/6)	内) 黒斑、マメツ、 ヨコナデ 外) ヨコナデ、ナデ	
138	C1	SP70		土師器	皿	(10.4)	(1.4)	—	口縁 2/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、ナデ	
139	C1	SP08		土師器	皿	(11.7)	(2.2)	—	口縁 1.5/12	密	良好	灰白 (7.5YR8/2)	ヨコナデ、ナデ	
140	C1	SP07		土師器	皿	(14.6)	(2.3)	—	口縁 2/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3)	ヨコナデ、ナデ	
141	C1	SP19		土師器	杯	(14.8)	(3.3)	—	口縁 1/12	密	良好	灰黄褐 (10YR6/2)	ヨコナデ、ナデ	
142	C1	SP73		土師器	杯	(15.8)	(3.6)	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	内・外) ヨコナデ、 ナデ	
143	C1	SP52		瓦器	椀	(13.9)	(3.0)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N4/0)	沈線、ヨコナデ	楠葉型
144	C1	SP77		瓦器	椀	—	(1.9)	(7.5)	底部 小片	密	良好	暗灰 (N3/0)	内) ミガキ、ナデ 外) ナデ	楠葉型
145	C1	SP09		灰釉 陶器	椀	(15.8)	(1.9)	—	口縁 小片	精良	堅緻	灰白 (2.5Y8/1)	内) 自然釉 外) 無釉	
146	C1	SP69		土師器	皿	—	(1.0)	—	—	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ナデ	コースター形
147	C1	SP19		土師器	皿	—	(1.0)	—	口縁 小片	密	良好	内) 灰 (N6/0) 外) 灰白 (2.5Y8/1)	ヨコナデ、ナデ	
148	C1	SP19		瓦器	皿	—	(1.4)	—	口縁 小片	密	やや軟	灰白 (N7/0)	ヨコナデ、ナデ	摩滅
149	C1		18 層	土師器	皿	(11.8)	1.2	—	口縁 1/8	密	良好	明褐灰 (7.5YR7/2)	ヨコナデ、ナデ	
150	C1		18 層	土師器	皿	(13.6)	2.5	—	口縁 2/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ	
151	C1		18 層	土師器	皿	(15.7)	(2.9)	—	口縁 2/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ	
152	C1		18 層	瓦器	椀	(13.8)	(3.8)	—	口縁 小片	密	良好	暗灰 (N3/0)	内) 沈線、ミガキ 外) ナデ、ヨコナデ	
153	C1		18 層	瓦器	椀	—	(1.1)	(5.2)	底部 2/12	密	良好	灰 (N5/0)	内) 暗文 外) ナデ	大和型

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
154	C1		18層	瓦器	椀	(15.6)	(4.5)	—	口縁 2/12	密	良好	暗灰 (N3/0)	内) 沈線、ミガキ外) ミガキ、ユビオサエ	大和型
155	C1		18層	瓦器	椀	—	(1.3)	(5.5)	底部 3/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) 暗文、ミガキ外) ナデ	楠葉型
156	C1		18層	土師器	羽釜	(20.0)	(2.3)	—	口縁 1/12	密	良好	灰黄褐 (10YR5/2) ~ 褐灰 (10YR5/2)	内・外) ヨコナデ、ナデ	内) 煤付着
157	C1		18層	白磁	椀	(17.6)	(3.2)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	灰白 (5Y7/2)	内・外) 施釉	玉縁
158	C1		18層	白磁	椀	(16.7)	(1.8)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	灰白 (5Y7/2)	内・外) 施釉	玉縁
159	C1		18層	白磁	椀	—	(2.6)	(6.0)	底部 3/12	密	良好	胎土) 灰白 (5Y8/1) 釉) 灰白 (5Y7/2)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	底部ケズリ
160	C1		18層	須恵器	高杯	—	(3.3)	(6.0)	底部 3/12	密	良好	灰 (N6/0)	内) 回転ナデ 底部カキメ、回転ナデ	
161	C2n	SP06		弥生	甕	(17.8)	(2.85)	—	口縁 1/12	粗	良好	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内) ヨコナデ、ナデ、ケズリ、ハケ? 外) ヨコナデ、ハケメ痕?	
162	C2s	島畑 170 盛土	14・15 層	白磁	皿	—	(1.5)	(4.2)	底部 5/12	密	良好	胎土) 灰白 (5Y8/1) 釉) 灰白 (5Y8/2)	内) 施釉 外) 施釉、露胎部	
163	C3	SK01		土師器	皿	(9.8)	(1.6)	—	口縁 2/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	ヨコナデ、ナデ	
164	C3	SK01		土師器	皿	(9.8)	1.35	—	口縁 4/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内) ヨコナデ、ナデ 外) ヨコナデ、ユビオサエ	内) 摩滅
165	C3	SK01		土師器	皿	(10.2)	1.5	—	口縁 3/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	内・外) 磨滅気味
166	C3	SK01		土師器	皿	(11.0)	1.75	—	口縁 3/12	密	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ、マメツ	切り込み 円盤技法の粘土痕
167	C3	SK01		土師器	皿	(11.8)	(2.3)	—	口縁 3/12	密	良好	褐灰 (10YR4/1)	内) ヨコナデ、ナデ 外) ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	鉄分付着
168	C3	SK01		土師器	皿	(11.8)	1.6	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (2.5Y8/2)	ヨコナデ、ナデ	外) 煤付着
169	C3	SK01		土師器	皿	(12.6)	(2.8)	—	口縁 2/12	密	良好	浅黄 (2.5Y7/3)	内) ヨコナデ、ナデ 外) ヨコナデ、ユビオサエ	
170	C3	SK01		土師器	皿	(13.7)	(2.2)	—	口縁 1.5/12	密	良好	浅黄 (2.5Y7/3)	ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	
171	C3	SK01		土師器	皿	(14.4)	3.05	—	口縁 2/12	密	良好	灰黄 (2.5Y7/2)	内) ヨコナデ、ナデ 外) ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	内) 工具痕か
172	C3	SK01		土師器	皿	(14.0)	2.0 ~ 2.7	—	口縁 4/12	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	口縁歪み大、部分的に黒斑
173	C3	SK01		土師器	皿	(14.0)	(3.3)	—	口縁 2/12	密	良好	褐灰 (7.5YR6/1)	内) ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ 外) ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	
174	C3	SK01		土師器	皿	(15.2)	(2.4)	—	口縁 3/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/2)	ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	
175	C3	SK01		土師器	皿	(19.0)	(2.8)	—	口縁 1/12	密	良好	褐灰 (10YR6/1)	ヨコナデ、ナデ	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
176	C3	SK01		白磁	碗	(18.0)	(3.3)	—	口縁 1/12	精良	良好	露胎部灰白 (2.5Y8/1) 釉) 透明	内・外) 施釉	輪花 鉄分付着
177	C3	SK01		瓦器	碗	—	(4.1)	—	口縁 3/12	密	良好	灰 (N4/0)	ミガキ、摩滅	楠葉型
178	C3	SK01		瓦器	碗	(15.1)	(5.4)	(4.3)	口縁 3/12	密	良好	灰 (N5/0)	内) 沈線、圈線ミ ガキ 外) ミガキ	楠葉型
179	C3	SK01		瓦器	碗	—	(4.5)	—	口縁小 片	密	良好	灰 (N4/0)	内) 沈線、ミガキ、 外) ミガキ、ユビ オサエ、マメツ	楠葉型
180	C3	SK01		瓦器	碗	—	(1.8)	(5.4)	底部 7/12	密	良好	灰 (N5/0)	内) ミガキ、暗文 外) ミガキ	楠葉型
181	C3	SK01		瓦器	碗	(14.2)	6.2	(5.6)	口縁 5/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) 沈線、密なミ ガキ、暗文 外) ミガキ、ユビ オサエ	口縁縁部 歪みあり 外) 欠損 多い 大 和型
182	C3	SK01		瓦器	碗	16.4	7.2	5.2	ほぼ完 存	密	良好	灰 (N4/0)	内) 沈線、ミガキ、 暗文 外) ミガキ	口縁縁ラ イン大き く傾く 大和型
183	C3	精査	29・31・34 層	須恵器	杯	—	(1.9)	(9.4)	底部 3/12	密	良好	明青灰 (5PB7/1)	回転ナデ、ナデ	
184	C4	精査	20・22・23 層	陶器	すり鉢	—	(4.1)	—	—	やや粗	良好	橙 (2.5YR6/6)	内・外) 回転ナデ	信楽
185	C4	精査	20・22・23 層	青磁	皿	(11.8)	(1.8)	—	口縁小 片	精良	堅緻	灰白 (5Y7/1)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	見込みに 文様あり、龍泉 窯
186	C4	17・18 j	旧谷地 形埋土	弥生	高杯 脚部	頸部径 4.1	(5.4)	—	頸部ほ ぼ完存	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/2) ～ 褐灰 (10YR5/1)	内) しほり痕 外) ナデ、ミガキ、 ケズリ	
187	C4	南壁断 ち割り	旧谷地 形埋土	弥生	壺	—	(3.1)	—	—	やや粗	良好	灰白 (10YR8/2)	内) ヨコナデ、ナ デ 外) ヨコナデ、櫛 描刺突文、ハケメ、 沈線、ヘラ描き刺 突文	口縁縁部 欠損
188	C4	南壁断 ち割り	旧谷地 形埋土	弥生	壺	—	(2.5)	—	—	密	良好	灰黄褐 (10YR6/2)	内) ハケメ 外) 沈線、波状文、	

付表13 B地区出土石製品、金属製品

番号	調査区	出土地	層位等	種類	名称等	たて (cm)	よこ (cm)	高さ・厚さ (cm)	備 考
77	B4		6層	銭貨	天禧通寶	径) 2.5		0.1	
78	B7		13層	銭貨	天聖元寶	径) 2.6			
79	B7		13層	銭貨	元祐通寶	径) 2.2			
80	B10		11層	銭貨	元豊通寶	径) 2.4			
81	B6	断ち割り	11～13層	砥石	—	残存長) 5.9	残存幅) 2.8	0.8	
82	B7		13層	金属製品	不明	長さ) 16.2	幅) 0.8～ 1.2	0.1～0.3	糸巻き痕 鉄鏃残欠か

付表14 C4区旧谷地形出土縄文土器観察表

口径・底径欄：() 復元径 器高欄：() 残存高 - 測定不能

番号	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎 土	焼成	色 調	調 整	備 考
189	壺	(8.4)	(10.6)	6.4	口5/12 底6/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内・外) 橙色 (5YR7/8)	内) ナデ 外) ミガキ	
190	壺	—	(6.0)	—	小片	径1mm大のクサリ礫をごく少量含む、微細な角閃石を非常に多く含む	良好	内・外) 黒色 (10YR2/1)	内・外) ミガキに近いナデ	
191	壺	(11.8)	(6.6)	—	4/12	径0.5～5mm大のクサリ礫を少量含む。微細～1mm大の角閃石を多く含む	良好	内・外) にぶい黄色 (25Y6/3)	内・外) ナデ	河内の胎土
192	壺	—	(16.1)	7.6	底6/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む。径0.5～1mm大の雲母を多く含む	良好	内) 灰白色 (10YR8/2) 外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ	
193	壺体部	—	(13.9)	—	同5/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内) ナデ 外) ミガキ	
194	鉢	(21.6)	jyoum	—	3/12	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) 灰白色 (25Y8/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
195	小型鉢	(10.8)	(4.8)	—	2/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫・赤色粒を少量含む	良好	内) 淡黄色 (25Y8/3) 外) 灰黄色 (25Y6/2)	内・外) ナデ	胎土精良
196	小型鉢	—	(3.9)	—	1/12	径0.5～5mm大の長石・クサリ礫を少量含む。微細な雲母を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	胎土精良
197	小型鉢	—	(2.6)	—	2/12	径0.5～5mm大の長石・クサリ礫を少量含む。微細な雲母を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	胎土精良
198	深鉢	(25.8)	(17.6)	—	5/12	長石・クサリ礫を非常に多く含む。微細～1mm大の雲母を少量含む	良好	内) 浅黄橙色 (10YR8/3) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
199	深鉢	(19.0)	(13.5)	—	口3/12	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫を多く含む	やや軟		内・外) ナデ	
200	深鉢	—	(6.0)	—	1/12	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を多く含む	やや軟	内) 浅黄橙色 (10YR8/3) 外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
201	深鉢	—	(6.3)	—	小片	径1～3mm大の長石を多く含む	やや軟	内・外) 灰白色 (10YR8/1)	内・外) ナデ	
202	深鉢	—	(3.0)	—	小片	径0.5～5mm大の有色粒を少量含む	やや軟	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) ナデ	
203	深鉢	—	(5.4)	(7.3)	底4/12	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を多く含む	やや軟	内) 浅黄橙色 (10YR8/3) 外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
204	深鉢	(19.2)	(13.8)	—	1/12	径1～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/4)	内・外) ナデ	
205	深鉢	(19.2)	(13.2)	—	1/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む。微細な雲母を少量含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR6/3) 外) 褐灰色 (10YR6/3)	内・外) ナデ	
206	深鉢	—	(4.8)	—	小片	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む。微細な雲母を多く含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR6/3) 外) 褐灰色 (10YR5/1)	内・外) ナデ	
207	深鉢	(13.0)	(10.4)	—	1/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を非常に多く含む。微細な雲母を非常に多く含む。微細な角閃石を多く含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外) 灰黄色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	
208	深鉢	(21.4)	(7.1)	—	小片	径1～3mm大の長石を多く含む。微細な雲母を多く含む	良好	内) 淡黄色 (25Y8/3) 外) 灰黄色 (25Y7/2)	内・外) ナデ	
209	深鉢	—	(9.4)	—	小片	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む。微細な雲母を多く含む	良好	内・外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	
210	深鉢	—	(5.4)	—	小片	径0.5～2mm大の長石・有色粒を少量含む。微細な雲母を多く含む	やや軟	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
211	深鉢	—	(3.7)	—	小片	径0.5～5mm大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	やや軟	内・外) 浅黄色 (25Y7/3)	内・外) ナデ	
212	深鉢	—	(3.7)	—	小片	径0.5～2mm大のクサリ礫・有色粒を少量含む	良好	内・外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
213	深鉢	—	(2.7)	—	小片	径0.5～3mm大のクサリ礫・有色粒・長石を少量含む	良好	内・外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	

番号	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎 土	焼成	色 調	調 整	備 考
214	深鉢	—	(4.0)	—	小片	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む、微細な雲母を多く含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR6/3) 外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
215	深鉢	—	(5.6)	—	小片	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内) 灰黄褐色 (10YR6/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/1)	内・外) ナデ	
216	深鉢	(29.4)	(12.0)	—	1/12	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) 灰白色 (10YR8/2) 外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ	外面コゲ付着
217	深鉢	—	(6.3)	—	1/12	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫、微細な雲母を多く含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外) 灰黄褐色 (10YR5/2)	内・外) ナデ	
218	深鉢	(33.4)	(13.5)	—	小片	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	やや軟	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
219	深鉢	—	(5.7)	—	2/12	径0.5～4mm大のクサリ礫・長石を非常に多く含む	やや軟	内) 灰白色 (10YR8/1) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ	
220	深鉢	—	(3.4)	—	—	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	良好	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ	
221	深鉢	—	(8.3)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	やや軟	内) にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外) 淡黄色 (25YR8/3)	内・外) ナデ	
222	深鉢	—	(5.9)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内) にぶい橙色 (5YR6/4) 外) にぶい黄褐色 (10YR5/3)	内・外) ナデ	
223	深鉢	—	(4.0)	—	—	径0.5～3mm大のクサリ礫・長石、微細な雲母を多く含む	良好	内) にぶい赤褐色 (5YR5/4) 外) にぶい黄褐色 (10YR5/3)	内・外) ナデ	
224	深鉢	—	(5.9)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内) にぶい橙色 (5YR6/4) 外) にぶい黄褐色 (10YR5/3)	内・外) ナデ	
225	深鉢	—	(4.9)	—	—	径0.5～3mm大の長石・赤色粒を多く含む	良好	内・外) 浅黄橙色 (75YR8/3)	内・外) ナデ	
226	深鉢	—	(3.7)	—	—	径0.5～3mm大の長石を少量含む	良好	内・外) 黄灰色 (25Y4/1)	内・外) ナデ	
227	深鉢	—	(1.9)	—	—	径2mm大の長石を少量含む	良好	内・外) 暗灰黄色 (25Y5/1)	内・外) ナデ	
228	深鉢	—	(3.4)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR6/3)	内) ナデ 外) 工具ナデ	
229	深鉢	—	(2.0)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内) 橙色 (5YR6/6) 外) にぶい褐色 (75YR6/3)	内・外) ナデ	
230	深鉢	—	(3.5)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内) 灰黄褐色 (10YR6/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR6/3)	内・外) ナデ	
231	深鉢	—	(1.9)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 褐灰色 (10YR6/1)	内・外) ナデ	
232	深鉢	—	(2.6)	—	—	径0.5～3mm大の長石を少量含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/4)	内・外) ナデ	
233	深鉢	—	(4.0)	—	—	径0.5～1mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内・外) 橙色 (75YR6/6)	内・外) ナデ	
234	深鉢	—	(3.4)	—	—	径1～3mm大の有色粒を少量含む	やや軟	内) 浅黄橙色 (10YR8/3) 外) 灰白色 (10YR8/1)	内・外) ナデ	
235	深鉢	—	(2.6)	—	—	径0.5～1mm大の長石・クサリ礫・有色粒を少量含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外) 灰黄褐色 (10YR5/2)	内・外) ナデ	
236	深鉢	—	(2.1)	—	—	径0.5～4mm大の長石をごく少量含む。微細な雲母ないし角閃石を少量含む	良好	内・外) 暗灰黄色	内・外) ナデ	
237	深鉢	—	(4.4)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む	やや軟	内・外) 灰 白 色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
238	深鉢	—	(3.1)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫をごく少量含む	やや軟	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	

番号	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎 土	焼成	色 調	調整	備考
239	深鉢	—	(2.7)	—	—	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫を多く含む	やや軟	内) 浅黄橙色 (10YR8/3) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
240	深鉢	—	(4.0)	—	—	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫・赤色粒を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) ナデ	
241	深鉢	—	(3.2)	—	—	径2mm大の長石・クサリ礫をごく少量含む	良好	内) 淡黄色 (25Y8/3) 外) 灰黄色 (25Y7/2)	内・外) ナデ	
242	深鉢	—	(5.4)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR7/2) 外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
243	深鉢	—	(4.2)	—	—	径0.5～4mm大の長石・有色粒を多く含む	良好	内) 褐灰色 (10YR4/1) 外) 灰黄色 (25Y6/2)	内・外) ナデ	
244	深鉢	—	(3.0)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内・外) 灰白色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
245	深鉢	—	(4.8)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) 灰白 (25Y8/2) 外) にぶい黄色 (25Y6/3)	内・外) ナデ	
246	深鉢	—	(3.9)	—	—	径0.5～4mm大の長石・赤色粒を多く含む	やや軟	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/6)	内・外) ナデ	
247	深鉢	—	(6.7)	—	—	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫を多く含む	やや軟	内) にぶい橙色 (75YR6/3) 外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
248	深鉢	—	(3.7)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR7/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR6/3)	内・外) ナデ	
249	深鉢	—	(4.6)	—	—	径0.5～2mm大のクサリ礫・有色粒を少量含む	良好	内・外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
250	深鉢	—	(4.8)	—	—	径0.5～3mm大のクサリ礫・長石を多く含む	やや軟	内・外) 浅黄橙色 (75YR8/4)	内・外) 摩滅	
251	深鉢	—	(4.7)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内・外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
252	深鉢	—	(3.2)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫・有色粒をごく少量含む	良好	内・外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
253	深鉢	—	(3.2)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) ナデ	
254	深鉢	—	(2.2)	—	—	径0.5～1mm大の長石・クサリ礫をごく少量含む	良好	内・外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
255	深鉢	—	(2.7)	—	—	径0.5～2mm大のクサリ礫・長石を少量含む	やや軟	内) 灰黄色 (25Y7/2) 外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ	
256	深鉢	—	(2.6)	—	—	径0.5～4mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) ナデ	
257	深鉢	—	(2.8)	—	—	微細なクサリ礫を少量含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内) ナデ 外) 丁寧なナデ	壺の可能性も
258	深鉢	—	(2.2)	—	—	径0.5mm大のクサリ礫をごく少量含む	良好	内・外) 褐灰色 (10YR4/1)	内・外) ナデ	
259	深鉢	—	(3.1)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
260	深鉢	—	(2.9)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
261	深鉢	—	(2.9)	—	—	径0.5～1mm大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内) 灰白色 (10YR8/1) 外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
262	深鉢	—	(3.8)	—	—	径0.5～2mm大のクサリ礫を少量含む	良好	内) にぶい褐色 (75YR6/3) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ	
263	深鉢	—	(4.0)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
264	深鉢	—	(2.9)	—	—	径0.5～1mm大の長石・クサリ礫をごく少量含む	良好	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) 丁寧なナデ	胎土精良
265	深鉢	—	(3.8)	—	—	径0.5～2mm大のクサリ礫を多く含む	やや軟	内・外) 灰黄色 (25Y7/2)	内・外) ナデ	
266	深鉢	—	(3.2)	—	—	径0.5～3mm大のクサリ礫・長石・有色粒を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ	

番号	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎 土	焼成	色 調	調整	備考
267	深鉢	—	(1.6)	—	—	径 05 ～ 3mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	
268	深鉢	—	(4.4)	—	—	径 05 ～ 4mm 大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	良好	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
269	深鉢	—	(3.9)	—	—	径 05 ～ 3mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ	
270	深鉢	—	(4.0)	—	—	径 05 ～ 3mm 大の有色粒・クサリ礫・長石を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
271	浅鉢か	—	(5.4)	—	—	径 05 ～ 1mm 大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	良好	内・外) 淡黄色 (25Y8/3)	内・外) ナデ	
272	浅鉢か	—	(2.0)	—	—	径 3mm 大の長石・赤色粒をごく少量含む	良好	内・外) 灰黄色 (25Y6/2)	内・外) ナデ	
273	深鉢	—	(4.8)	—	—	径 05 ～ 3mm 大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	やや軟	内) にぶい橙色 (75YR7/4) 外) 橙色 (75YR7/6)	内・外) ナデ	
274	深鉢	—	(4.0)	—	—	径 05 ～ 3mm 大の長石・有色粒を多く含む	良好	内) 浅黄橙色 (75YR8/3) 外) 灰黄色 (25Y6/2)	内・外) ナデ	
275	深鉢	—	(3.7)	—	—	径 05 ～ 4mm 大の長石・クサリ礫を多く含むごく少量含む	良好	内・外) 灰黄色 (25Y7/2)	内・外) 丁寧なナデ	
276	深鉢	—	(4.4)	—	—	径 05 ～ 6mm 大のクサリ礫・長石を多く含む	良好	内) 灰白色 (5Y8/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内・外) ナデ	
277	深鉢	—	(6.0)	—	—	径 05 ～ 4mm 大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	やや軟	内) 灰白色 (10YR8/2) 外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) ナデ	
278	深鉢	—	(2.3)	—	—	径 05 ～ 2mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) 灰黄褐色 (10YR6/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ	
279	深鉢	—	(2.5)	—	—	径 05 ～ 2mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	
280	深鉢	—	(12.7)	—	—	径 05 ～ 1mm 大の長石・クサリ礫・微細な雲母を多く含む	良好	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)		
281	深鉢	—	(3.8)	—	—	径 05 ～ 4mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	
282	深鉢	—	(4.2)	—	—	径 1mm 大の長石を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
283	深鉢	—	(3.9)	—	—	径 05 ～ 3mm 大の角閃石を非常に多く含む。径 05 ～ 4mm 大のクサリ礫を多く含む	やや軟	内・外) にぶい黄褐色 (10YR4/3)	内・外) ナデ	河内の胎土
284	深鉢	—	(3.4)	—	—	径 05 ～ 4mm 大の長石・有色粒を多く含む	やや軟	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
285	深鉢	—	(3.4)	—	—	径 1mm 大の長石・クサリ礫をごく少量含む	良好	内・外) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	内・外) ナデ	
286	深鉢	—	(6.0)	—	—	径 05 ～ 2mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (25Y8/2)	内・外) ナデ	
287	深鉢	—	(3.7)	—	—	径 05 ～ 2mm 大の長石・クサリ礫・有色粒・微細な雲母を少量含む	良好	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	垂下突帯
288	深鉢か	—	(5.0)	—	6/12	径 05 ～ 2mm 大のクサリ礫を少量含む	良好	内・外) 灰黄褐色 (10YR5/2)	内・外) ナデ	
289	深鉢か	—	(4.1)	—	2/12	径 05 ～ 1mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) 褐色 (75YR4/1) 外) にぶい橙色 (75YR7/3)	内・外) ナデ	
290	深鉢か	—	(3.7)	(6.6)	1/8	径 05 ～ 4mm 大の長石・クサリ礫を多く含む	良好	内) にぶい橙色 (75YR6/3) 外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
291	深鉢か	—	(3.2)	—	12/12	径 05 ～ 5mm 大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	良好	内・外) 灰褐色 (75YR6/2)	内・外) ナデ	
292	深鉢か	—	(2.1)	—	9/12	径 05 ～ 1mm 大の長石・クサリ礫を少量含む	やや軟	内・外) 灰褐色 (75YR6/2)	内・外) ナデ	
293	深鉢か	—	(2.1)	—	9/12	径 05 ～ 3mm 大の長石・クサリ礫・有色粒を多く含む	良好	内・外) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	内・外) ナデ	

番号	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
294	甕	—	(3.1)	—	—	径0.5～3mm大の長石・有色粒を少量含む	良好	内) 灰白色 (10YR8/2) 外) にぶい黄橙色 (10YR6/3)	内・外) ナデ	
295	甕	—	(2.7)	—	—	径0.5～2mm大の長石・クサリ礫を少量含む	良好	内) 灰白色 (5Y8/2) 外) 灰褐色 (7.5YR4/2)	内・外) ナデ	
296	甕	—	(1.5)	—	—	径0.5～3mm大の長石・クサリ礫・有色粒を少量含む	良好	内) 灰黄色 (2.5Y7/2) 外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ナデ	
297	甕	—	(1.7)	—	—	径0.5～4mm大の長石・赤色粒を少量含む	良好	内) 灰白色 (10YR8/2) 外) 灰褐色 (7.5YR6/2)	内・外) ナデ	

付表15 C4区旧谷地形出土石器・石製品観察表

番号	種類	石 材	たて (cm)	よこ (cm)	高さ・厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
298	玉		1.5	1.2	1.1	5.0	
299	石鏃	サヌカイト (二上山系)	2.1	1.65	0.35	0.9	
300	石鏃	サヌカイト (二上山系)	2.65	3.5	0.35	1.5	
301	石鏃	サヌカイト (二上山系)	2.8	2.0	0.5	3.4	
302	打製石斧	ホルンフェルス	8.8	4.3	1.3	76.0	未製品か
303	凹石	砂岩	8.8	5.9	4.7	350.0	

付表16 C10～14区・D区・E区・F区・G区出土土器観察表

口径・底径欄：() 復元径 器高欄：() 残存高 — 測定不能

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
304	C10		淡青 灰色 シルト下	土師器	皿	(9.4)	1.5	—	口縁 5/12	密	良好	灰白 (10YR8/2) ～ 浅黄橙 (7.5YR8/3)	ナデ、ユビオサエ	
305	C10	北半	19層	白磁	椀	(14.0)	(2.2)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	断面) 白 (N9/0) 釉) 灰白 (5Y8/2)	内・外) 施釉	IV類
306	C10	北半	20層	土師器	羽釜	(24.0)	(5.5)	—	口縁 1/12	やや 密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内・外) ヨコナデ、 ナデ	
307	C10		21層	灰釉 陶器	椀	—	(1.5)	(8.0)	底部 3/8	密	堅緻	灰白 (2.5Y8/1)	内) 自然釉、回転ヘ ラケズリ 外) 糸切り	
308	C12	SD07		土師器	皿	(10.0)	1.5	—	体部) 1/8	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/4)	ヨコナデ、ナデ	
309	C12	重機 掘削		青化	椀	—	(2.0)	—	—	精良	堅緻	釉) 白 (N9/0) 染付) 青灰 (5B6/1～5/1)	施釉 外) 染付	
310	C12	重機 掘削		白磁	椀	—	(2.8)	—	口縁 小片	密	堅緻	淡黄 (2.5Y8/3)	施釉	IV類
311	C12		9層	土師器	甗	高さ 5.4	幅 5.0	厚さ 1.5	—	密	良好	灰白 (2.5Y8/2)	内) ケズリのちナデ 外) 指ナデ	把手
312	C13	重機 掘削		白磁	椀	—	(1.9)	—	口縁 小片	精良	良好	断面) 白 (N9/0) 釉) 灰白 (10Y8/1)	施釉	
313	C13	SD10		土師器	鍋	(37.0)	(15.2)	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (10YR8/2) ～ 橙 (2.5YR7/6)	内・外) ヨコナデ、 ハケのちナデ	口縁部沈 線
316	D1	SD01		瓦器	椀	(12.3)	(3.15)	—	口縁 1/12	密	やや 軟	灰白 (5Y8/1)	内) ミガキ 外) ヨコナデ、摩減	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
317	D1	重機掘削		青磁	菊皿	(14.4)	(2.4)	—	口縁 1/12	密	良好	明オリーブ灰 (25GY7/1)	施釉	内・外) 貫入あり
318	D2		9 層	土師器	皿	(5.4)	1.2	—	口縁 5/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3)	ナデ、ユビオサエ	
319	D2	鳥畑東溝	10 層	土師器	皿	(7.5)	(1.3)	—	口縁 1/8	密	良好	浅黄 (75YR8/3)	摩滅のため不明瞭	
320	D2	鳥畑東溝	10 層	土師器	甕	(25.2)	(2.9)	—	口縁 1/12	やや密	良好	灰白 (10YR7/2) 断面黒 (10Y2/1)	ナデ	
321	D2	鳥畑東溝	10 層	瓦器	椀	(17.0)	(3.65)	—	口縁 1/12	密	良好	内) 灰白 (N8/0) 外) 灰 (N4/0)	内) 沈線、ミガキ 外) ナデ、摩滅	楠葉型
323	D4	NR02	2 区	土師器	高杯	—	(7.1)	(12.3)	5/12	—	—	内・外) 浅黄 橙色 (75YR8/3)	内) ケズリ 外) ナデ	
324	D4	NR03	4 区	土師器	二重口縁壺	(11.6)	(8.4)	—	1/12	—	—	内・外) 橙色 (25YR6/6)	内・外) 摩滅	
325	D4	NR03	3 区	土師器	小型丸底壺	10.1	(8.0)	—	口縁 10/12	—	—	内・外) 黒褐色 (75YR3/1)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ	
326	D4	NR03	2 区	土師器	小型丸底壺	6.0	7.5	—	11/12	—	—	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ	
327	D4	NR03	5 区	土師器	小型丸底壺	(10.0)	(7.4)	—	2/12	—	—	内・外) に ぶい橙色 (75YR7/4)	内・外) ナデ	
328	D4	NR03	4 区	土師器	小型丸底壺	9.6	8	—	10/12	—	—	内・外) 橙色 (5YR6/8)	内・外) ナデ	
329	D4	NR03	3 区	土師器	小型丸底壺	—	(6.9)	—	—	—	—	内・外) 灰白色 (5YR8/2)	内) 工具ナデ 外) ハケメ・ケズリ	
330	D4	NR03	2 区	土師器	高杯	(19.6)	(9.4)	—	3/12	—	—	内) にぶい黄 橙色 (10YR7/2) 外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内) ミガキ 外) ミガキ	
331	D4	NR03	2 区	土師器	高杯	—	(2.39)	—	2/12	—	—	内・外) 浅黄 橙色 (75YR8/3)	内・外) 摩滅	
332	D4	NR03	2 区	土師器	高杯	(19.8)	(5.5)	—	小片	—	—	内) にぶい黄 橙色 (10YR7/2) 外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) ミガキ	
333	D4	NR03	3 区	土師器	高杯	(15.8)	(5.5)	—	3/12	—	—	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
334	D4	NR03	5 区	土師器	高杯	16.6	12.35	11.5	口縁 7/12 底部 9/12	—	—	内・外) 橙色 (5YR6/8)	内・外) ナデ	
335	D4	NR03	2 区	土師器	高杯	(16.5)	10.0	10.8	7/12	—	—	内・外) 橙色 (25YR7/6)	内・外) 摩滅	
336	D4	NR03	3 区	土師器	高杯	(18.8)	(3.9)	—	4/12	—	—	内・外) 明赤 褐色 (25YR5/8)	内) 摩滅 外) ナデ	
337	D4	NR03	4 区	土師器	高杯	(17.0)	(5.5)	—	2/12	—	—	内) 灰白色 (10YR8/1) 外) 灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外) 摩滅	
338	D4	NR03	3 区	土師器	高杯	—	(9.0)	14.6	底部 6/12	—	—	内・外) に ぶい橙色 (75YR7/2)	内) ケズリ・ハケメ 外) ケズリ・ハケメ	
339	D4	NR03	4 区	土師器	高杯	—	(10.0)	10.7	底部 7/12	—	—	内・外) 橙色 (5YR6/6)	内) ナデ 外) ナデ	
340	D4	NR03	5 区	土師器	高杯	—	(8.1)	(12.0)	底部 2/12	—	—	内・外) 浅黄 橙色 (75YR8/3)	内) ケズリ・ナデ 外) ナデ	
341	D4	NR03	2 区	土師器	高杯	—	(8.4)	(9.7)	底部 4/12	—	—	内・外) 橙色 (5YR6/6)	内・外) 摩滅	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
342	D4	NR03	2区	土師器	高杯	—	(9.0)	9.0	底部 7/12	—	—	内・外) 浅黄 橙色(75YR8/3)	内) ナデ・ハケメ 外) ナデ・ハケメ	
343	D4	NR03	2区	土師器	高杯	—	(8.0)	11.4	底部 6/12	—	—	内・外) 灰白 色(75YR8/2)	内・外) 摩滅	
344	D4	NR03	4区	土師器	高杯	—	(7.3)	11.3	底部 12/12	—	—	内・外) 浅黄 橙色(75YR8/3)	内・外) ナデ	
345	D4	NR03	4区	土師器	高杯	—	(6.4)	(12.5)	底部 3/8	—	—	内・外) 灰色 (75YR8/2)	内) ケズリ・ハケメ 外) ナデ	
346	D4	NR03	5区	土師器	甕	(12.8)	(4.1)	—	口縁 2/12	—	—	内・外) 灰白 色(25Y8/1)	内) ナデ 外) ハケメ	
347	D4	NR03	2区	土師器	甕	(20.8)	(2.8)	—	1/12	—	—	内) 浅黄橙色 (10YR8/3) 外) にぶい橙 色(75YR7/4)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ	
348	D4	NR03	4区	土師器	甕	(19.9)	(7.0)	—	口縁 2/12	—	—	内・外) 灰白 色(75YR8/2)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ	
349	D4	NR03	2区	土師器	甕	(15.0)	(5.1)	—	1/12	—	—	内) 黒色(N2/0) 外) 灰白色 (10YR7/1)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ・ハケメ	
350	D4	NR03	2区	土師器	甕	(18.0)	(14.5)	—	4/12	—	—	内) 橙色 (5YR7/6) 外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ・ハケメ	
351	D4	NR03	2区	土師器	甕	(13.8)	(6.8)	—	2/12	—	—	内・外) 橙色 (25YR6/6)	内) ナデ・ケズリ	
352	D4	NR03	5区	土師器	甕	(18.0)	(8.0)	—	5/12	—	—	内・外) 灰白 色(75YR8/2)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ・ハケメ	
353	D4	NR03	4区	土師器	甕	(15.7)	(9.0)	—	3/12	—	—	内・外) に ぶい黄橙色 (10YR7/3)	内) ハケメ・ケズリ 外) ナデ・ハケメ	
354	D4	NR03	3区	土師器	甕	(15.6)	(6.3)	—	3/12	—	—	内・外) 灰白 色(10YR8/2)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ	
355	D4	NR03	2区	土師器	甕	(16.0)	(5.0)	—	1/12	—	—	内) 灰色 (5Y4/1) 外) 褐灰色 (10YR4/1)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ	
356	D4	NR03	4区	土師器	甕	12.8	(9.4)	—	口縁 12/12	—	—	内・外) に ぶい褐色 (75YR6/3)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ・ハケメ	
357	D4	NR03	4区	土師器	甕	(13.8)	(7.1)	—	3/12	—	—	内・外) 灰白 色(75YR8/2)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ・タタキ	
358	D4	NR03	5区	土師器	甕	(15.9)	(6.7)	—	2/12	—	—	内・外) 明褐 灰色(75YR7/2)	内) ナデ・ケズリ 外) ナデ	
359	D4	NR03	4区	土師器	甕	(12.6)	(6.6)	—	3/12	—	—	内・外) 灰白 色(75YR8/2)	内) ナデ・ケズリ	
360	D4	NR03	4区	縄文	深鉢	—	(3.6)	—	小片	—	—	内・外) 黒褐 色(25Y3/1)	内・外) ナデ	
361	D4	NR03	4区	韓式系 土器	甕	—	(5.4)	—	小片	—	—	内) にぶい黄 橙色(10YR7/2) 外) 黒色(N2/0)	内) ケズリ 外) タタキ	
366	D5	SD01		瓦器	椀	—	(4.4)	—	2/12	—	—	内・外) 褐灰 色(10YR4/1)	内) 暗文 外) ナデ	
367	D5	鳥畑 精査		瓦器	椀	—	(3.4)	—	1/12	—	—	内・外) 褐灰 色(10YR4/1)	内) 暗文 外) ナデ	
368	D5	NR02		瓦器	椀	—	(2.9)	—	2/12	—	—	内・外) 明褐 色(75YR7/1)		
369	D5	鳥畑 精査		土師器	皿	(9.4)	1.5	—	1/12	—	—	内・外) 浅黄 橙色(75YR8/6)	内・外) ナデ	
370	D5	SD01		陶器	搦鉢	—	(4.9)	—	小片	—	—	内・外) に ぶい赤褐色 (25YR5/4)	内・外) ロクロナデ	信楽

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
371	D5	島畑精査		陶器	壺	—	(4.2)	(7.8)	6/12	—	—	内) 灰オリーブ色 (5Y6/2) 外) 灰白色 (5Y7/1)	内・外) ロクロナデ	越磁
373	D6	SD01		陶器	鉢	—	(6.6)	—	小片	—	—	内・外) 赤橙色 (10R6/8)	内・外) ロクロナデ	信楽
374	D6	NR03		土師器	皿	—	(0.9)	—	小片	—	—	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ	
375	D6	NR03		土師器	皿	(6.8)	(0.9)	—	2/12	—	—	内・外) に ふい橙色 (5YR7/4)	内・外) ナデ	
376	D6	NR03		土師器	皿	—	(1.5)	—	1/12	—	—	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ	
377	D6	NR03		土師器	椀	—	(2.6)	—	1/8	—	—	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ	
378	D6	NR03		土師器	椀	—	(3.0)	—	小片	—	—	内・外) 淡橙色 (5YR8/4)	内・外) ナデ	
379	D6	NR03		土師器	羽釜	—	(1.5)	—	小片	—	—	内・外) 赤黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ	
380	D6	NR03		瓦器	椀	—	(2.3)	—	1/8	—	—	内・外) 褐灰色 (7.5YR5/1)	内・外) 暗文	
381	D6	NR03		瓦器	椀	—	(2.5)	—	1/12	—	—	内・外) 黄灰色 (2.5Y5/1)	内) 暗文 外) ナデ	
382	D6	NR03		瓦器	椀	—	(2.6)	—	小片	—	—	内・外) 褐灰色 (7.5YR6/1)	内・外) 摩滅	
383	D6	NR03		瓦器	椀	—	(2.6)	—	小片	—	—	内・外) 褐灰色 (10YR4/1)	内) 暗文 外) ナデ	
384	D6	NR03		瓦器	皿か	—	(1.6)	—	1/12	—	—	内・外) 褐灰色 (5YR5/1)	内) 暗文 外) ナデ	
385	D6	NR03		瓦器	椀	—	(1.2)	(4.8)	2/12	—	—	内・外) 黄灰色 (2.5Y5/1)	内・外) ナデ	
386	D7	5h	島畑 173 西溝	瓦器	椀	(15.0)	(2.5)	—	口縁 1/12	密	良好	灰白 (N4/0)	内) ミガキ 外) ナデ	楠葉型
387	D13	P42		瓦器	椀	(15.4)	(4.2)	—	口縁 3/12	密	堅緻	内) 灰 (N5/0) 外) 灰 (N4/0 ～ 5/0)	内) ナデ後ミガキ 外) ナデ、ユビオサ エ後ミガキ	楠葉型
388	D13	P42		瓦器	椀	(15.0)	(4.0)	—	口縁 1/12	密	堅緻	灰 (N5/0)	内) ナデ、ミガキ 外) ナデ、ユビオサ エ後ミガキ	楠葉型
389	D13	SP07		瓦器	椀	(13.6)	(4.1)	—	口縁 1/8	密	良好	灰色 (N5/0)	内) ミガキ 外) ユビオサエ後ミ ガキ	大和型
390	D13	SP07		瓦器	椀	(14.0)	(4.1)	—	口縁 2/12	密	良好	灰白 (N4/0)	内) ナデ後ミガキ 外) ナデ、ユビオサ エ	楠葉型
391	D13	P53		土師器	台付 大皿	—	(4.5)	(9.0)	底部 3/12	やや 粗	良好	にふい黄橙 (10YR7/2)	磨滅、調整不明	
392	D13	SP07		白磁	椀	—	(1.8)	(4.8)	底部 4/12	密	堅緻	灰黄 (2.5Y7/2) 釉) 灰白 (2.5Y7/1)	施釉、露胎	ハケ状の 工具痕
393	D13	SD02		土師器	皿	(15.0)	2.0	—	口縁 1/8	密	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	磨滅、ユビオサエ	
394	D13	SD02		瓦器	椀	(13.0)	(3.4)	—	口縁 1/8	密	良好	灰 (N5/0)	内) ナデ後ミガキ 外) ヨコナデ、ミガ キ、ユビオサエのち ナデ	楠葉型
395	D13	SD02		瓦器	椀	(14.0)	(2.8)	—	口縁 1/8	密	良好	灰 (N5/0)	ナデ、ユビオサエ	
396	D13	SD02		瓦器	椀	(15.0)	(2.8)	—	口縁 小片	密	良好	灰 (N5/0)	内) ミガキ 外) ナデ	大和型
397	D13	SD02		瓦器	椀	(15.4)	(2.9)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N5/0)	ナデ後ミガキ	楠葉型

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
398	D13	SD02		白磁	椀	(13.0)	(2.7)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	灰白 (75Y8/1)	施釉	外) 沈線
399	D13	SD02		白磁	椀	—	(2.1)	3.6	底部 9/12	精良	堅緻	灰白 (5Y8/2)	施釉	内) 貫入
400	D13	SD02		瓦器	椀	—	(1.4)	(5.6)	底部 4/12	密	やや軟	灰 (N4/0) 灰白 (5Y7/1)	摩滅、調整不明	
401	D13	SD02		瓦器	椀	—	(1.3)	(6.0)	底部 4/12	密	良好	暗青灰 (5B4/1)	磨滅のため調整不明	
402	D13	SD02		瓦器	椀	—	(3.2)	(6.2)	底部 3/12 弱	密	良好	内) 灰 (N5/0) 外) 灰 (N6/0)	内) ナデ後ミガキ、 外) 磨滅	楠葉型
403	D13	SD02a		土師器	皿	(9.6)	1.1	—	口縁 4.5/12	密	良好	灰黄褐 (10YR5/2)	内) ナデ 外) ユビオサエナデ	粘土の継ぎ目 口縁部巻き込み
404	D13	SD02a		土師器	皿	(9.0)	2.2	—	口縁 4/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	調整不明 ユビオサエ	
405	D13	SE01		瓦器	椀	(14.6)	(2.9)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N5/0)	内) ミガキ 外) ヨコナデ、ユビ オサエのちナデ	沈線
406	D13	南半	包含層	瓦器	底部	—	(1.1)	(5.6)	底部 4/12	密	良好	灰 (N6/0)	内) ナデ後ミガキ 外) 磨滅	楠葉型
407	D13	重機掘削		瓦器	椀	—	(1.6)	(7.2)	底部 2/12	密	良好	灰 (N5/0)	内) 暗文、ミガキ 外) ナデ	楠葉型
408	D15	SD08		瓦質土器	羽釜	—	—	—	—	やや粗	良好	内) 灰白 (10YR8/1) 外) 灰黄褐 (10YR4/2)	内) 斜め横方向ハケ メ 外) ヨコナデ	煤付着
409	D15	島畑西溝上面精査		縄文	深鉢	—	—	—	—	粗	良好	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ナデ	突帯文土器
410	E1	SD01		白磁	椀	—	(2.4)	—	1/12	—	—	灰白 (75Y8/1)	内) 施釉 外) 施釉	
411	E1	南壁	26層	土師器	羽釜	—	(3.9)	—	小片	—	—	内) 灰白色 (25Y8/2) 外) 灰色 (N5/0)	内) ナデ 外) ナデ	
412	E1	南壁	5・6層	染付	皿	—	(1.3)	4.8	底部 3/12	—	—	灰白色 (N8/0)	内) 施釉 外) 施釉	
413	E2	SD02		瓦器	椀	—	(1.9)	—	底部 小片	—	—	内・外) 灰白色 (10YR8/1)	内・外) 磨滅	楠葉型か
414	E2	SD03		土師器	皿	(9.5)	1.25	—	口縁 3/12	—	—	内・外) に ぶい黄橙色 (10YR7/2)		
415	E2	SD03		土師器	皿	(8.7)	1.0	—	2/12	—	—	内・外) 赤橙色 (10R6/6)		
416	E2		10層	白磁	椀		(3.3)		2/12	—	—	灰白色 (5Y8/1)		
417	E3	SD01		土師器	皿	—	(2.3)	—	小片	—	—	内・外) 灰白色 (75YR8/2)	内・外) ナデ	
418	E3	SD01		土師器	皿	—	(2.2)	—	2/12	—	—	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	
419	E3	SD01		土師器	皿	—	(2.0)	—	1/12	—	—	内・外) 10YR8/1	内・外) ナデ	
420	E3	SD01		土師器	皿	—	(0.9)	—	2/12	—	—	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ	
421	E3	SD01		瓦器	椀	—	—	(2.0)	2/12	—	—	内・外) 灰色 (6/1)	内・外) ミガキ	楠葉型
422	E3	SD01		磁器	椀	—	(8.4)	(2.4)	口縁 3/12	—	—	内・外) 灰白色 (75Y7/1)	内・外) 釉薬	
423	E3	SD01		陶器	椀	—	(1.5)	3.7	底部 完存	—	—	内) 灰白色 (5Y8/1) 外) 灰白色 (25Y8/1)	内) 施釉 外) 外底部露体	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
424	E3	北壁	第4層	陶器	椀	—	(1.3)	(4.0)	底部 3/12	—	—	内) 淡黄色 (5Y8/2) 外) 灰白色 (5Y8/1)	内) 施釉 外) 露体外底部糸切り	
426	E4	SD02		土師器	皿	—	(2.3)	—	1/12	—	—	内・外) 灰白色 (N8/7)	内・外) ナデ	
427	E4	SD03		瓦器	椀	—	(3.4)	—	1/12	—	—	内) 灰色 (N4/0) 外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) 暗文	
428	E4	島畑 161 精査		瓦器	椀	—	(0.9)	(4.2)	底部 2/12	—	—	内・外) 灰色 (N5/0)	内・外) ナデ	大和型
429	E4	島畑 161 精査		瓦器	椀	—	(1.2)	(4.4)	底部 2/12	—	—	内・外) 灰色 (N5/0)	内・外) ナデ	大和型か
430	E4	北壁	東壁 第2層相当層	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12	—	—	内) 灰白色 (7.5YR8/2) 外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ	
431	E5	SD01		瓦器	椀	—	(2.8)	—	1/12	—	—	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内) 暗文 外) ナデ・オサエ	楠葉型
432	E5	SD01		瓦器	椀	—	(2.5)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N5/0)	内) 暗文 外) ナデ・オサエ	楠葉型
433	E5	SD01		瓦器	椀	—	(2.6)	—	1/12	—	—	内・外) 灰白色 (N7/0)	内) 暗文 外) ナデ・オサエ	楠葉型
434	E5	SD01		瓦器	椀	—	(0.9)	4.7	9/12	—	—	内・外) 灰色 (N4/0)	内) 暗文 外) ナデ	楠葉型
435	E5	SD01		須恵器	壺	—	(3.5)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N6/0)	内・外) ロクロナデ	
436	E5	SD01		須恵器	鉢	—	(4.7)	—	小片	—	—	内・外) 淡赤 橙色 (2.5YR7/4)	内・外) ロクロナデ	
437	E5	SD01		磁器	椀	—	(3.9)	—	1/12	—	—	内・外) 灰白色 (N8/0)	内・外) 釉薬	
438	E5	SD02		瓦器	椀	—	(2.6)	—	1/12	—	—	内・外) 灰白色 (N7/0)	内) 暗文 外) ナデ・オサエ	楠葉型
439	E5	SD02		瓦器	椀	—	(2.0)	—	1/12	—	—	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内) 暗文 外) ナデ・オサエ	楠葉型
440	E5	SD02		瓦器	椀	—	(1.2)	(4.4)	3/12	—	—	内・外) 灰色 (N4/0)	内) 暗文 外) ナデ	大和型か
441	E5	SD02		土師器	皿	—	(1.3)	—	1/12	—	—	内・外) に ぶい橙色 (5YR7/4)	内・外) ナデ	
442	E5	SD02		須恵器	鉢	—	(4.0)	—	小片	—	—	内) 灰色 (N4/0) 外) 灰白色 (N5/0)	内・外) ロクロナデ	
443	E5	SD02		須恵器	鉢	—	(2.35)	—	小片	—	—	内・外) 灰白色 (N7/0)	内・外) ロクロナデ	
444	E5	SD02		須恵器	甕	—	(3.7)	—	小片	—	—	内) 灰白色 (N3/0) 外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ロクロナデ	
445	E5	SD02		須恵器	甕	—	(4.6)	—	小片	—	—	内) 明褐色 (7.5YR7/1) 外) 明赤灰色 (2.5YR7/2)	内・外) ロクロナデ	
446	E5	SD02		須恵器	甕	—	(5.1)	—	1/8	—	—	内・外) 浅黄 橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ロクロナデ	
447	E5	SD02		須恵器	甕	—	(5.5)	—	小片	—	—	内) にぶい橙 色 (5YR5/3) 外) 黒褐色 (10YR2/2)	内・外) ロクロナデ	
448	E5	NR05		弥生	壺	20.1	(5.8)	—	6/12	—	—	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ	

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
449	E5	鳥畑 118 精査		瓦器	椀	—	(3.5)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N5/0)	内) ミガキ 外) ナデ	
450	E5	鳥畑 120 精査		瓦器	椀	—	(2.0)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N6/0)	内・外) ナデ	大和型か
451	E5	鳥畑 117 精査		瓦器	椀	—	(3.9)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N6/0)	内・外) ナデ	楠葉型
452	E5	鳥畑 120 精査		土師器	皿	5.0	1.0	—	12/12	—	—	内・外) 灰白 色 (5YR8/2)	内・外) ナデ・オサ エ	
453	E5	鳥畑 120 精査		陶器	椀	—	(4.0)	—	3/12	—	—	内・外) 灰白 色 (N7/0)	内・外) 施釉	
454	E5	鳥畑 117 精査		須恵器	壺	—	(5.1)	—	2/12			内・外) 灰色 (N5/0)	内・外) ナデ	
455	E6	SD06		弥生	甕	—	(4.9)	3.2	底部 9/12	—	—	内) 灰白色 (10YR8/2) 外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ	
456	E6	SD12		瓦器	椀	—	(3.1)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) 暗文	楠葉型
457	E6	SD12		瓦器	椀	—	(3.8)	—	1/12	—	—	内・外) 灰色 (N4/0)	内) 暗文 外) ナデ	楠葉型
458	E6	SD14		土師器	椀	—	(4.2)	—	1/12	—	—	内・外) 橙色 (5YR6/6)	内・外) ナデ	
459	E6	SD23		土師器	皿	—	(1.8)	—	1/12	—	—	内) 暗灰色 (N3/0) 外) 灰白色 (25Y7/1)	内・外) ナデ	
460	F2	SD01		瓦器	椀	—	(4.65)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) ミガキ、 外) 横ナデ、ユビオ サエ	楠葉型
461	F2	重機 掘削		陶器	椀	—	(2.4)	4.0	底部 8/12	精良	良好	胎土) 灰白 (10Y8/1) 釉) 灰白 (25Y8/1)	施釉	外) グレ ーの釉薬 で線描
462	F2	西壁断 ち割り		陶器	播鉢	—	(5.6)	(15.4)	底部 2/12	やや 粗	良好	淡黄 (25Y8/3) 灰褐 (75YR4/2)	内) すり目、摩滅 外) 鬼板	
463	F3	廃土中		陶器	鉢	(33.7)	(2.5)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	灰白 (5Y7/3)	施釉	瀬戸灰釉
464	F3	精査		土師器	甕	(23.4)	(3.4)	—	口縁 2/12	やや 粗	良好	灰白 (75YR8/2)	ヨコナデ 頸部) 強いヨコナデ	
465	F4b	鳥畑 162 西溝		瓦質 土器	鉢	—	(4.6)	—	口縁 小片	粗	軟	灰 (N6/0)	全体的に摩滅	
466	F4b	精査	19 層	須恵器	杯蓋	(10.2)	(2.8)	—	口縁 1/8	やや 密	堅緻	内) 灰白 (N7/0) 外) 灰 (N6/0)	回転ナデ	
469	G1	SD02	11 層	須恵器	蓋	—	(1.5)	—	口縁 小片	密	堅緻	灰白 (N7/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ケズリ、回 転ナデ	
470	G1	南壁中		瓦器	椀	—	(2.5)	—	口縁 1/12	密	良好	灰 (N4/0)	内) ミガキ 外) ヨコナデ、ユビ オサエ	楠葉型
471	G1	SD02	11 層	瓦質 土器	鉢	—	(3.2)	—	口縁 小片	密	良好	灰 (10Y4/1)	ヨコナデ、ユビオサ エ	内) すり 目、大和
472	G1	SD02	11 層	瓦質 土器	鍋脚 部	残存長 (12.0)	幅 3.3	脚断面 2.8 × 2.5	—	やや 密	良好	灰白 (10YR8/1)	ケズリ	
473	G1	鳥畑 142 精 査	6 層	陶器	皿	(16.6)	(2.2)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (10Y8/1) 釉) オリーブ 黄 (5Y6/4)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	瀬戸灰釉

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
474	G1	SD00		陶器	壺	(3.0)	(2.5)	—	口縁 6/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (75Y7/1) 釉) にぶい赤褐 (5YR4/3)	施釉	
475	G1	西側排水溝掘削	10・11層	青磁	椀	—	(3.9)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (N8/0) 釉) オリーブ灰 (25GY6/1)	施釉	外) 連弁文
476	G1	SD02		青磁	椀	—	(2.1)	(6.2)	底部 1/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (75Y8/1) 釉) 灰白 (10Y4/4)	施釉、露胎	
477	G1	南壁中		青磁	椀	—	(2.5)	—	口縁小片	精良	堅緻	胎土) 灰白 (N7/0) 釉) 灰オリーブ (75Y5/2)	施釉	連弁文
478	G1	SD02	11層	白磁	椀	—	(1.9)	—	—	精良	堅緻	胎土) 灰白 (N8/0) 釉) 灰白 (75Y7/2)	施釉	
479	G2	SD04	18層	土師器	皿	—	1.5	—	口縁 1/12	密	良好	淡橙 (5YR8/3)	全体摩滅	
480	G2	SD04	17層	土師器	皿	(7.6)	(1.45)	—	口縁 2/12	密	良好	灰白 (10YR8/2)	ヨコナデ、ユビオサエ、不調整	
481	G2	f3	西壁	土師器	皿	(6.0)	1.7	—	口縁 2/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内) ヨコナデ、ナデ、ハケ 外) ヨコナデ、不調整	灯明皿 内面煤付着
482	G2	SD04	17層	陶器	甕	—	(6.9)	—	口縁 1/12	やや粗	堅緻	灰白 (10YR8/2)	回転ナデ	
483	G2	精査	16・18層	青磁	椀	(14.0)	(3.7)	—	口縁 1/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (N8/0) 釉) オリーブ灰 (25GY6/1)	施釉	Ⅱ a類 13c 前半 龍泉窯 連弁文
484	G2	SD04		白磁	椀	—	(3.6)	—	口縁小片	精良	堅緻	胎土) 灰白 (5Y8/1) 釉) 灰白 (5Y8/2)	施釉	Ⅳ類 11c 後半 ～ 12c 前半 福建省系
485	G3	SD07		瓦器	椀	(11.0)	(2.5)	—	—	密	良好	暗灰 (N3/0)	内) ミガキ、ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユビオサエ	楠葉型
486	G3	SD07		土師器	皿	(11.0)	(2.6)	—	口縁 1/8	密	良好	にぶい橙 (75YR7/4)	ナデ、ユビオサエ	
487	G3	島畑 136 精査	16層	土師器	皿	(5.8)	1.6	—	口縁 3/12	密	良好	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内) ヨコナデ、ナデ 外) ヨコナデ、ユビオサエ	
488	G3	南半精査	16・17層	土師器	甕	—	(3.6)	—	口縁小片	密	やや軟	灰白 (10YR8/2)	全体摩滅	
489	G3	j13・SD07		須恵器	杯身	最大径 (16.0)	(2.3)	—	—	密	堅緻	灰白 (N7/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、回転ケズリ	
490	G3	島畑 136	16層	緑釉陶器	椀	—	(1.9)	(7.8)	底部 2/12	密	やや軟	胎土) 浅黄橙 (10YR8/3) 釉) 灰オリーブ (75Y4/2)	緑釉	全体剥離
491	G3	精査	16・17層	青磁	椀	—	(2.8)	—	—	精良	堅緻	胎土) 灰白 (75Y8/1) 釉) 灰黄 (25Y6/2)	施釉	連弁文
492	G3	SD07		青磁	椀	—	(3.5)	—	—	密	堅緻	明オリーブ灰 (5GY7/1)	施釉	連弁文

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
493	G3	j13・SD07		陶器	鉢	—	(3.5)	—	—	密	良好	胎土) 灰白 (10Y7/1) 釉 (75Y7/2)	施釉	瀬戸灰釉
494	G3	南半 精査	16・ 17層	土師器	羽釜	—	(2.8)	—	—	密	良好	淡黄 (25Y8/3)	内) ユビオサエ、ナ デ 外) ヨコナデ	外) 煤付 着
495	G3	j 11	16・ 17層	土師器	鍋	(35.2)	(3.7)	—	口縁 1.5/12	密	良好	灰白 (10YR8/3)	内) ヨコナデ、横方 向ハケ 外) 工具痕、回転ナ デ、ユビオサエ	口縁部煤 付着
496	G3	SD07		土師器	蓋	—	(2.6)	—	—	密	良好	灰 (75Y5/1)	ナデ	
497	G3	SD07		陶器	椀	—	(3.8)	—	—	密	良好	胎土) 灰白 (N8/0) 釉) 黒褐 (5YR2/2)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	天目椀
498	G4	精査	24・ 25層	土師器	皿	(6.4)	1.3	—	口縁 2/12	密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	ナデ、ユビオサエ	口縁やや 歪みあり
499	G4	重機 掘削		土師器	皿	(13.0)	(2.3)	—	口縁 1/12	やや 粗	良好	灰白 (25Y8/1)	ヨコナデ、ナデ、ユ ビオサエ	
500	G4	北壁中		瓦質土 器	鉢	—	(3.6)	—	—	密	良好	灰色 (N5/0)	内) ユビオサエ、な で 外) 工具による面取 り、ナデ	火鉢か
501	G4	精査	24・ 25層	陶器	椀	(11.6)	(4.4)	—	口縁 1/12	密	良好	胎土) 灰白 (75Y8/1) 釉) 褐 (75YR4/3) 黒 (75YR17/1)	施釉、露胎	天目椀
502	G4	精査	24・ 25層	陶器	椀	—	(2.3)	4.4	底部 6/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (5Y7/1) 釉) オリーブ 灰 (10Y6/2)	内) 施釉 外) 露胎	瀬戸灰釉
503	G4	島畑 164 北溝 SD01		青磁	椀	—	(2.0)	4.7	底部 7/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (N8/0) 釉) オリーブ 灰白 (25GY6/1)	内) 施釉 外) 施釉、露胎	
504	G4	精査	24・ 25層	陶器	皿	—	(2.4)	(13.0)	底部 小片	精良	堅緻	胎土) 灰白 (25GY8/1) 釉) 明オリーブ 灰 (25GY7/1)	内) 施釉 外) 露胎、施釉	
505	G4	精査	24・ 25層	白磁	椀	—	(2.2)	(5.4)	底部 3/12	精良	堅緻	胎土) 灰白 (5Y8/1) 透明釉	内) 沈線、施釉 外) 施釉、露胎	内面文様 あり
506	G4	精査	24・ 25層	弥生	甕	—	(2.9)	—	—	やや 密	良好	浅黄橙 (10YR8/3)	ナデ	
507	G4	精査	24・ 25層	弥生	甕	—	(3.1)	—	口縁 小片	やや 密	良好	灰白 (10YR8/2)	ナデ 外) 横線、刻み目文	口縁部煤 か
508	G5	島畑 164 南溝 SD02		瓦器	皿	(9.0)	1.9	—	口縁 2.5/12	密	良好	暗灰 (N3/0)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユビ オサエ	楠葉型
509	G5	排水溝 掘削		縄文	深鉢	(33.6)	(4.4)	—	口縁 小片	粗	良好	内) 灰白 (10YR7/1) 外) 浅黄橙 (75YR8/3) 褐灰 (75YR4/1)	内) 摩滅 外) ヨコナデ、調整 不明	
510	G6	NR01		土師器	甕	(14.0)	(5.0)	—	口縁 1/12	粗	良好	にぶい橙 (75YR7/3)	内) ナデ、ケズリ 外) ナデ	布留式 煤付着
511	G6	島畑 152 東溝	13層	須恵器	杯蓋	—	(1.8)	—	—	やや 密	堅緻	灰 (N5/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、ヘラ ケズリ、未調整	
512	G6	重機 掘削		土師器	甕	(21.6)	(3.3)	—	口縁 1/12	粗	良	にぶい橙 (75YR7/3)	ナデ	煤付着

番号	調査区	出土地	層位等	器種	器形	口縁径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
513	G6	島畑152東溝	13層	瓦質土器	鍋	(19.0)	(1.4)	—	口縁1/12	やや密	やや軟	内) 灰白 (5Y7/1) 外) 暗灰黄 (25Y4/2) 口縁黒 (10Y2/1)	ナデ	煤付着
514	G6	島畑152東溝	13層	須恵器	甕	(30.0)	(1.45)	—	口縁1/12	密	堅緻	黄灰 (25Y6/1)	回転ナデ	自然釉
515	G6	東部重機掘削		青磁	碗	(13.6)	(5.0)	—	口縁1/12	精良	堅緻	明緑灰 (10GY7/1)	施釉	
516	G7	島畑134西溝	44層	須恵器	鉢	—	(4.5)	—	—	やや粗	堅緻	灰白 (N7/0) 口縁) 灰 (N5/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、縦方向のナデ	
517	G10	排土中		瓦質土器	羽釜	—	(7.3)	—	内側) 2/12	やや密	良好	灰色 (N4/0)	内) ナデ 外) ナデ、ハケのちナデ	
518	G18	島畑155東溝	49層	瓦器	碗	(14.6)	(2.5)	—	口縁1/12	密	やや軟	灰白 (N8/0)	磨減	
519	G18	島畑155西溝	47層	瓦器	皿	(8.0)	(0.9)	—	口縁小片	やや密	良好	内) 明褐灰 (75YR) 外) 灰褐	ナデ	
520	G18	島畑155西溝	32層	土師器	皿	(9.2)	1.3	(8.9)	口縁小片	やや粗	良好	内) 淡赤橙 (25YR7/3・7/4) にぶい褐 (75YR6/3) 外) 赤灰 (25YR5/1) にぶい橙 (25YR6/4)	磨減底にユビオサエ	
521	G18	島畑155西溝	44層	瓦器	碗	—	(1.25)	(7.0)	底部3/12	やや密	やや軟	灰白 (10YR8/2)	磨減	
522	G18	東壁		瓦器	碗	—	(0.7)	(5.5)	底部2/12	やや密	やや軟	内) 灰 (N4/0) 外) 灰 (N5/0)	磨減	
523	G18	島畑155東溝	52層	瓦器	碗	—	(1.1)	(5.6)	底部4/12	やや密	やや軟	灰白 (N8/0)	磨減	暗文
524	G18	島畑155西溝	44層	土師器	羽釜	(18.6)	(2.9)	—	口縁1/12	やや密	良好	浅黄橙 (75YR8/4)	ナデ	外) 煤付着
525	G18	島畑155西溝	32層	瓦質土器	鉢	—	—	—	小片	やや粗	良好	灰色 (N4/0)	ナデ	
526	G18	北東部	壁面崩落土	白磁	碗	—	(2.6)	—	口縁小片	密	堅緻	灰白 (25Y8/1)	施釉	
527	G18	南辺排水溝東半		須恵器	杯蓋	肩部径 (8.3)	(0.6)	—	小片	密	堅緻	灰白 (N7/0)	内) 回転ナデ、不定方向ナデ 外) 回転ナデ	
528	G18	—	—	須恵器	杯蓋	肩部径 (7.5)	(1.0)	—	小片	やや粗	良好	灰白 (N8/0)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、ヘラ削り後回転ナデ	
529	G18	島畑155西溝	44層	土師器	高杯	—	(2.3)	(15.0)	底部2/12	密	良好	明褐灰 (75YR7/2)	内) ナデ 外) 磨減、ナデ	
530	G18	島畑155東溝	49層	縄文	深鉢	—	(1.25)	(7.6)	底部2/12	粗	やや軟	内) 灰白 (10YR7/1・7/2) にぶい黄橙 外) 灰白 (10YR8/1)	磨減	粘土痕あり

付表17 C～G地区出土石製品、金属製品観察表

() 現存長

番号	調査区	出土地	層位等	種類	名称等	たて (cm)	よこ (cm)	厚さ・高さ (cm)	備 考
314	C10	西壁	26 層	石製品	剥片	2.9	3.5	0.45	3.29 g 金山産サヌカイト
315	C13	SP06		石製品	砥石	9.25	8.8	4.6	540g
322	D1	SD01		銭貨	開元通寶	径) 2.6		0.1	
362	D4	NR02	4 区	石製品	有孔円盤	径) 2.5		0.2	2g、滑石
363	D4	NR02	2 区	石器	石鏃	4.7	1.8	0.4	3.6g サヌカイト
364	D4	NR03	1 区	石器	石鏃	4.1	1.8	0.5	3.1g サヌカイト
365	D4	NR03		石器	たたき石	19.4	5.6	5.6	1205g
372	D5	NR02 東壁		銭貨	政和通寶	径) 2.3		0.15	
425	E3	SD01		石器	石鏃	2.5	1.7	0.3	1.2 g サヌカイト
467	F2	SD05		金属製品	キセル 吸い口	長さ) 5.6	最大幅 0.8		
468	F4b	北壁		金属製品	キセル 吸い口	長さ) 5.2	最大幅 1.0		
531	G2	SD04	18 層	銭貨	咸平元寶	径) 2.4			
532	G4	島畑 164 北 溝 SD01		銭貨	元祐通寶	径) 2.4			
533	G4	島畑 164 北 溝 SD01		銭貨	聖宋元寶	径) 2.4			
534	G3	SD07	15 層	金属製品	刃先	(4.3)	(2.6)	(1.4)	農耕具の刃先
535	G3	SD07		金属製品	釘	3.7	0.9		
536	G2	SD04	17 層	石器	石鏃	3.0	1.3	0.7	2.1 g サヌカイト
537	G2	SD05		石器	石鏃	2.6	1.7	0.5	1.1 g サヌカイト
538	G9	精査	18 層	石器	石包丁	7.3	5.4	穴径 0.6	粘板岩

付表18 C 4 区旧谷地形出土石器観察表(写真図版183～186掲載分)

番号	器種	たて (cm)	よこ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
S 1	二次加工剥片	5.9	5.8	0.8	39.9	ホルンフェルス	打製石斧刃部の可能性
S 2	二次加工剥片	4.9	1.5	0.6	5.1	サヌカイト (二上山系)	風化面あり
S 3	二次加工剥片	3.1	2.4	0.5	3.5	サヌカイト (二上山系)	石鏃未製品か
S 4	石核	3.8	2.0	0.9	7.6	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 5	石核	3.0	3	0.8	6.2	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 6	石核	3.3	1.9	0.7	4.2	サヌカイト (二上山系)	両極打法、原面あり
S 7	石核	3.0	2.9	0.7	5.7	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 8	石核	4.2	1.7	0.5	3.6	サヌカイト (二上山系)	
S 9	石核か	2.6	2.3	0.6	3.2	サヌカイト (二上山系)	両極打法

番号	器種	たて (cm)	よこ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
S 10	石核	3.7	1.8	0.6	3.1	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 11	石核	2.6	2.3	0.6	3.1	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 12	石核か	3.0	2.1	0.5	2.8	サヌカイト (二上山系)	両極打法か
S 13	石核	2.7	1.1	0.7	2.4	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 14	石核	22.7	18.9	0.5	2.2	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 15	石核	1.4	2.5	0.5	1.4	サヌカイト (二上山系)	両極打法
S 16	剥片	5	3.35	0.7	11.1	サヌカイト (二上山系)	原面あり
S 17	剥片	3.6	2.7	1.0	10.2	サヌカイト (二上山系)	原面あり
S 18	剥片	5.3	1.7	1.2	8.8	ホルンフェルス	風化面あり
S 19	剥片	4.6	1.6	0.6	5.2	サヌカイト (二上山系)	風化面あり
S 20	剥片	4.5	2.1	0.7	5	サヌカイト (二上山系)	風化面あり
S 21	剥片	2.3	3	0.6	3.5	サヌカイト (二上山系)	両極打法か
S 22	剥片	2.3	3.2	0.5	3.3	サヌカイト (二上山系)	
S 23	剥片	3.9	1.7	0.6	3	サヌカイト (二上山系)	両極打法か
S 24	剥片	1.9	2.9	0.5	2.8	サヌカイト (二上山系)	原面あり
S 25	剥片	1.9	1.4	1.0	2.7	チャート	原面あり
S 26	剥片	2.4	2.1	0.4	2.4	サヌカイト (二上山系)	原面あり
S 27	剥片	3.5	2.1	0.3	2.4	サヌカイト (二上山系)	
S 28	剥片	2.6	1.9	0.4	2.4	サヌカイト (二上山系)	風化面あり
S 29	剥片	2.6	1.5	0.5	1.9	サヌカイト (二上山系)	
S 30	剥片	2.75	2.4	0.3	1.7	サヌカイト (二上山系)	
S 31	剥片	2.1	2	0.4	1.5	サヌカイト (二上山系)	
S 32	剥片	3	1.6	0.3	1.5	サヌカイト (二上山系)	
S 33	剥片	2.05	1.8	0.4	1.3	サヌカイト (二上山系)	
S 34	剥片	3.1	(1.3)	0.2	1.2	サヌカイト (二上山系)	新しく割れる
S 35	剥片	1.5	2.7	0.3	1.1	サヌカイト (二上山系)	
S 36	剥片	1.7	2.4	0.3	1	サヌカイト (二上山系)	
S 37	剥片	2.1	2.5	0.2	1	サヌカイト (二上山系)	
S 38	剥片	2.45	1.7	0.2	0.8	ホルンフェルス	
S 39	剥片	1.5	1.6	0.3	0.8	サヌカイト (二上山系)	原面あり
S 40	剥片	2.4	2.3	0.2	0.7	サヌカイト (二上山系)	
S 41	剥片	1.85	1.4	0.3	0.7	サヌカイト (二上山系)	
S 42	剥片	1.65	1.4	0.3	0.5	サヌカイト (二上山系)	
S 43	剥片	2.5	1.0	0.2	0.4	サヌカイト (二上山系)	
S 44	剥片	1.2	1.1	0.2	0.3	ホルンフェルス	

版 圖

小樋尻遺跡



(1) B 1 区 調査区第 1 面全景(西南から)



(2) B 1 区 調査区第 1 面全景(北から)

小樋尻遺跡



(1) B 1 区 土坑群検出状況
(東から)



(2) B 1 区 土坑群検出状況
(北から)



(3) B 1 区 土坑SK05土層
(東から)

小樋尻遺跡



(1) B 1 区 土坑 S K05
完掘状況(東から)



(2) B 1 区 溝 S D08・09・12検
出状況(北から)



(3) B 1 区 溝 S D03
完掘状況(北から)

小樋尻遺跡



(1) B 1 区 20層上面全景
(東から)



(2) B 1 区 第2面全景
(東から)



(3) B 1 区 26層上面全景
(東から)

小樋尻遺跡

(1) B 1 区 第 3 面全景
(東から)



(2) B 1 区 第 3 面 NR15
検出状況(北から)



(3) B 1 区 第 3 面 NR15・
S P16完掘状況(東から)



小樋尻遺跡



(1) B 2 区 調査区全景(東から)



(2) B 2 区 北壁土層(南東から)

小樋尻遺跡



(1) B 2 区 北東部窪地跡検出状況(北東から)



(2) B 2 区 北壁畝状土層
(南から)



(3) B 2 区 南壁畝状土層
(北から)

小樋尻遺跡



(1) B 3 区 調査区全景(北西から)



(2) B 3 区 溝 S D07・22検出状況(南西から)

小樋尻遺跡



(1) B 3 区 北壁土層(南から)



(2) B 3 区 南壁土層(北から)



(3) B 3 区 東壁土層(西から)

小樋尻遺跡



(1) B 3 区 断ち割り状況
(南東から)



(2) B 3 区 噴砂脈断ち割り内
土層(南東から)



(3) B 3 区 噴砂脈断ち割り内
土層(南東から)

小樋尻遺跡



(1) B 4 区 調査区第 1 面全景(南東から)



(2) B 4 区 調査区第 2 面全景(南東から)

小樋尻遺跡



(1) B 4 区 第 1 面足跡・鋤
痕跡検出状況(南東から)



(2) B 4 区 第 1 面足跡・鋤
痕跡検出状況(西から)



(3) B 4 区 第 2 面溝 S D03
検出状況(北西から)

小樋尻遺跡

(1) B 4 区 第 2 面溝 S D03-3
検出状況(南東から)



(2) B 4 区 第 2 面溝 S D03-5内
遺物出土状況(南東から)



(3) B 4 区 第 2 面溝 S D03-5内
遺物出土状況(東から)



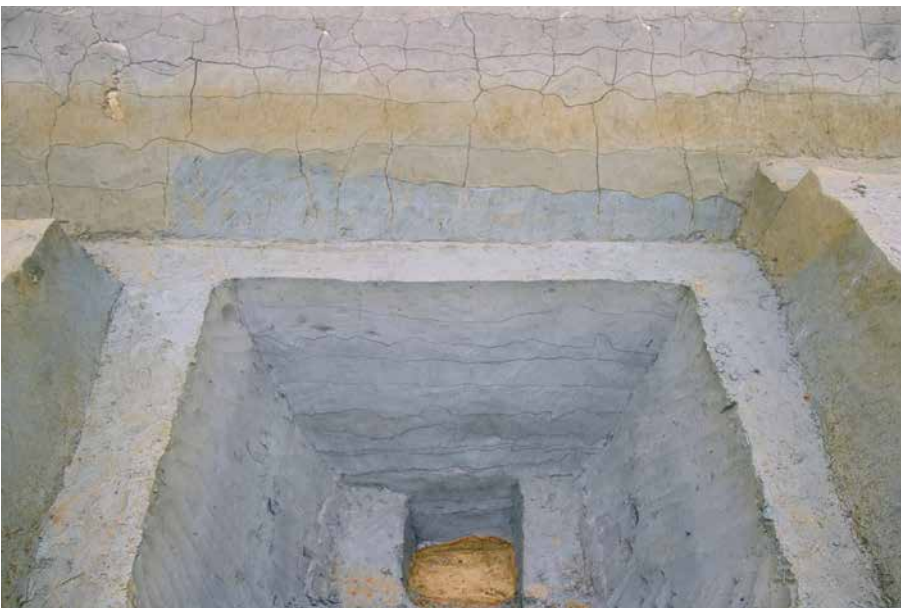
小樋尻遺跡



(1) B 4 区 北壁土層
(南東から)

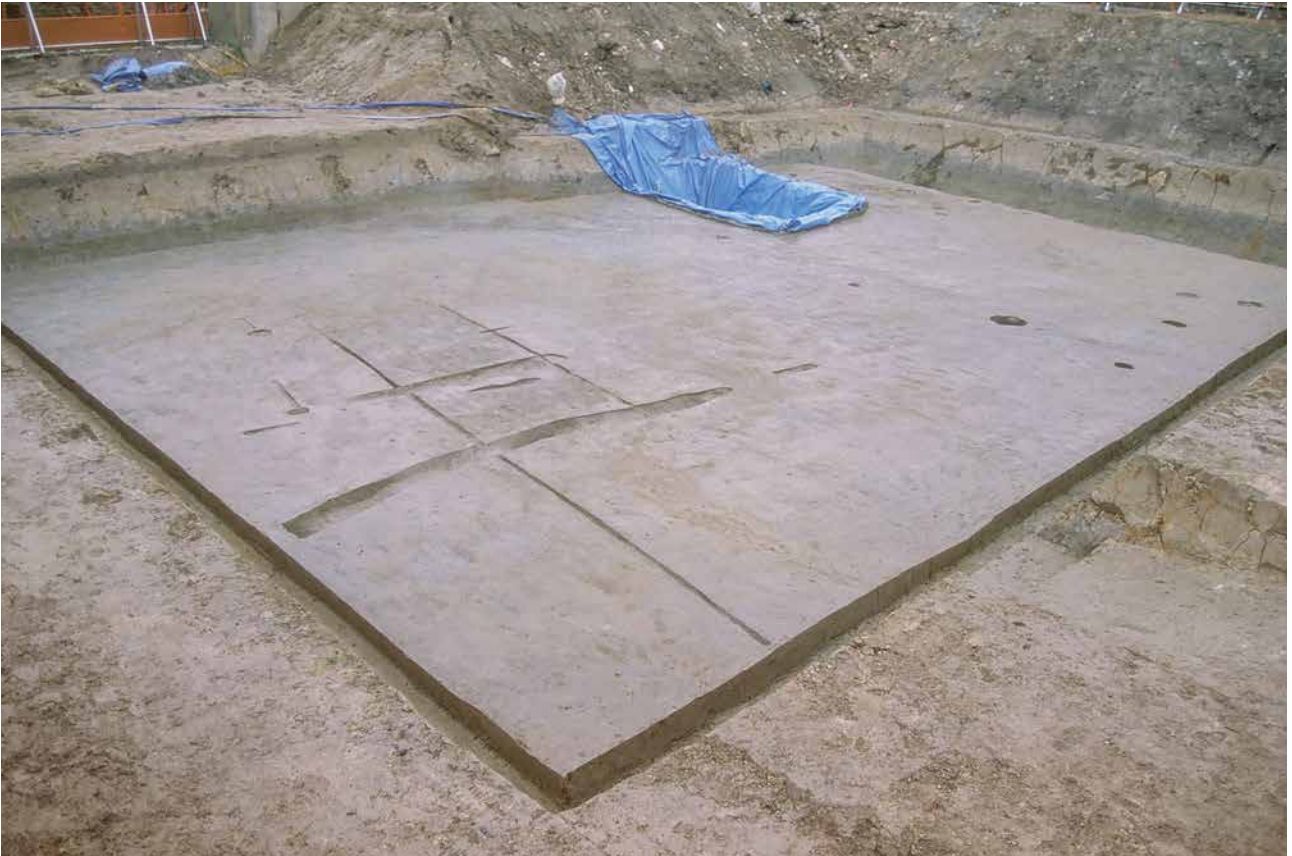


(2) B 4 区 北壁土層
(南から)



(3) B 4 区 北壁断ち割り内
土層(南から)

小樋尻遺跡



(1) B 5 区 調査区第 1 面全景(南東から)



(2) B 5 区 調査区第 2 面全景(南東から)

小樋尻遺跡



(1) B 5 区 第 1 面柱穴群
検出状況(南東から)



(2) B 5 区 第 2 面溝 S D 34
検出状況(南西から)

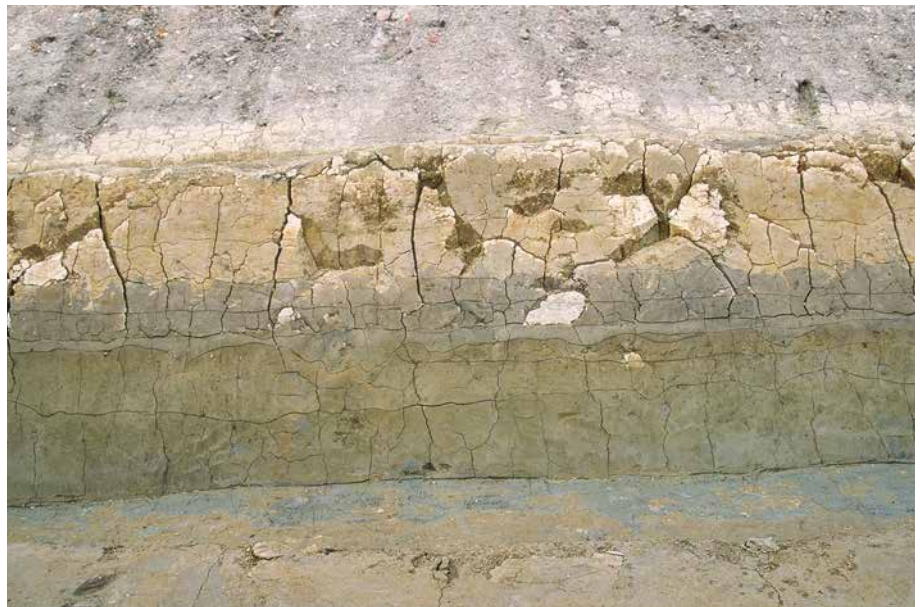


(3) B 5 区 第 2 面溝 S D 34
土層(北から)

小樋尻遺跡



(1) B 5 区 第 2 面溝 S D 34 内
遺物出土状況(南東から)



(2) B 5 区 北壁土層(南から)



(3) B 5 区 北壁断ち割り内土層
(南から)

小樋尻遺跡



(1) B 6 区 調査区全景(南から)



(2) B 6 区 調査区全景(南東から)

小樋尻遺跡



(1) B 6 区 溝 S D01 検出状況
(北から)



(2) B 6 区 西壁土層(東から)



(3) B 6 区 南壁土層(北から)

小樋尻遺跡



(1) B 7 区 調査区全景(南から)



(2) B 7 区 調査区全景(北東から)

小樋尻遺跡

(1) B 7 区 溝 S D01内土層
(南から)



(2) B 7 区 北壁土層(南西から)



(3) B 7 区 北壁土層(南から)



小樋尻遺跡



(1) B 8 区 調査区全景(南東から)



(2) B 8 区 調査区全景(南西から)

小樋尻遺跡

(1) B 8 区 溝 S D01検出状況
(北西から)



(2) B 8 区 溝 S D02検出状況
(北東から)



(3) B 8 区 南壁土層(北から)



小樋尻遺跡



(1) B 8 区 溝 S D01内土層
(西から)



(2) B 8 区 溝 S D02内土層
(東から)



(3) B 8 区 小溝群土層(南から)

小樋尻遺跡



(1) B 9 区 調査区全景(南から)



(2) B 9 区 調査区全景(南西から)

小樋尻遺跡



(1) B 9 区 溝 S D01内
遺物出土状況(北から)



(2) B 9 区 溝 S D02内土層
(東から)



(3) B 9 区 溝 S D03内
遺物出土状況(南から)

小樋尻遺跡



(1) B 9 区 溝 S D03内土層
(西から)



(2) B 9 区 北壁土層(南から)



(3) B 9 区 北壁断ち割り内土層
(南から)

小樋尻遺跡



(1) B10区 調査区全景(南東から)



(2) B10区 調査区全景(北から)

小樋尻遺跡



(1) B10区 掘立柱建物跡 S B10・柵列 S A15検出状況(南西から)



(2) B10区 北壁土層(南東から)

小樋尻遺跡



(1) B10区 地震による地層の変形(北壁；南から)



(2) B10区 地震土坑 1 検出状況
(南東から)



(3) B10区 溝 S D04検出状況
(北から)

小樋尻遺跡



(1) B10区 不明遺構 S X09
検出状況(南東から)



(2) B10区 不明遺構 S X09・
溝 S D14検出状況(北から)



(3) B10区 不明遺構 S X08
検出状況(北西から)

小樋尻遺跡



(1) C 1 区 調査区第 1 面全景(南から)



(2) C 1 区 調査区第 2 面全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) C 1 区 調査区第 3 面全景(南から)



(2) C 1 区 第 2 面掘立柱建物跡 S B41 全景(南西から)

小樋尻遺跡



(1) C 1 区 第 1 面土坑 S X33 検出状況(西から)



(2) C 1 区 第 2 面耕作溝畔土層(南から)



(3) C 1 区 第 3 面溝 S D127 土層(南から)

小樋尻遺跡



(1) C 1 区 第 1 面柵列 S A02
S P06断面土層(東から)



(2) C 1 区 第 1 面柵列 S A02
S P07断面土層(東から)



(3) C 1 区 第 2 面土坑 S X126
遺物出土状況(南から)

小樋尻遺跡



(1) C 2 n 区 調査区全景(南から)



(2) C 2 n 区 調査区下層断ち割り全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) C 2 s 区 調査区第 1 面全景(北から)



(2) C 1 区 調査区下層断ち割り全景(北から)

小樋尻遺跡



(1) C 2 n 区 北壁土層(南から)



(2) C 2 s 区 南壁土層(北から)

小樋尻遺跡

(1) C 2 n 区 溝 S D02内土層
(南東から)



(2) C 2 n 区 溝 S D02内土層
(南東から)



(3) C 2 n 区 ピット S P06内
遺物出土状況(西から)



小樋尻遺跡



(1) C 2 s 区 溝 S D01内土層
(北東から)



(2) C 2 n 区 北壁土層
(南西から)



(3) C 2 s 区 南壁土層
(北西から)

小樋尻遺跡



(1) C 3 区 調査区全景(南西から)



(2) C 3 区 調査区全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) C 3 区 溝 S D02
北畔土層(南西から)



(2) C 3 区 溝 S D02
南畔土層(南西から)



(3) C 3 区 溝 S D03
南畔土層(西から)

小樋尻遺跡



(1) C 3 区 北壁土層(南から)



(2) C 3 区 北壁土層(南東から)



(3) C 3 区 南壁土層(北から)

小樋尻遺跡



(1) C 4 区 調査区全景(南東から)



(2) C 4 区 西壁土層(南東から)

小樋尻遺跡



(1) C 4 区 北壁土層(南から)



(2) C 4 区 南壁土層(北から)

小樋尻遺跡



(1) C 4 区 北壁土層
(南東から)



(2) C 4 区 攪乱土坑内噴砂
検出状況(北東から)



(3) C 4 区 旧谷地形内縄文土器
出土状況(南東から)

小樋尻遺跡

(1) C10区 調査区第1面全景
(北から)



(2) C10区 調査区第1面全景
(南から)



(3) C10区 調査区完掘状況全景
(南から)



小樋尻遺跡



(1) C10区 第1面東壁土層
中央部(西から)



(2) C10区 西壁土層北半部
(東から)



(3) C10区 西壁土層(北東から)

小樋尻遺跡

(1) C10区 北壁土層北張り出し部(南から)



(2) C10区 北端断ち割り内
東壁土層(西から)



(3) C10区 中央断ち割り内
東壁土層(西から)



小樋尻遺跡



(1) C12区 調査区全景(北から)



(2) C12区 調査区全景(南から)



(3) C12区 下層断ち割り状況
(北から)

小樋尻遺跡



(1) C12区 調査区南半部
(東から)



(2) C12区 調査区北半部
(東から)



(3) C12区 西壁土層北半部
(東から)

小樋尻遺跡



(1) C12区 西壁土層中央部
(東から)



(2) C12区 南壁土層(北から)



(3) C12区 断ち割り内東壁土層
(西から)

小樋尻遺跡



(1) C13区 調査区全景(北から)



(2) C13区 調査区全景(南から)



(3) C13区 調査区断ち割り後
全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) C13区 溝S D10内遺物
出土状況(東から)



(2) C13区 溝S D10検出状況
(西から)



(3) C13区 溝S D10内土層
(東から)

小樋尻遺跡

(1) C13区 完掘状況北半部
(東から)



(2) C13区 完掘状況北半部
(西から)



(3) C13区 南壁土層(北から)



小樋尻遺跡



(1) C13区 南壁土層東半部
(北から)



(2) C13区 西壁土層中央部
(東から)



(3) C13区 東壁土層北半部
(西から)

小樋尻遺跡



(1) D 1 区 調査区第 1 面全景(北から)



(2) D 1 区 調査区第 1 面全景(東から)

小樋尻遺跡



(1) D 1 区 島畑183 a 全景(南から)



(2) D 1 区 島畑183 b 全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 1 区 調査区第 2 面全景(北から)



(2) D 1 区 調査区第 2 面全景(東から)

小樋尻遺跡



(1) D 2 区 調査区全景(北から)



(2) D 2 区 調査区全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 2 区 溝 S D03 内土層
(北から)



(2) D 2 区 井戸 S E05 検出状況
(東から)



(3) D 2 区 井戸 SE05 完掘状況
(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 2 区 北壁土層(南から)



(2) D 2 区 島畑179北壁土層
(南から)



(3) D 2 区 北西隅断ち割り内
土層(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 3 区 調査区全景(北東から)



(2) D 3 区 調査区全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 3 区 島畑181検出状況
(北から)



(2) D 3 区 島畑180検出状況
(北東から)



(3) D 3 区 島畑181北壁土層断面
(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 3 区 溝 S D09検出状況
(北から)



(2) D 3 区 溝 S D09完掘状況
(北西から)



(3) D 3 区 溝 S D09内土層
(南から)

小樋尻遺跡



(1) D 3 区 溝 S D09北壁土層
(南から)



(2) D 3 区 断ち割り状況
(東から)



(3) D 3 区 断ち割り内北壁土層
(南東から)

小樋尻遺跡



(1) D 4 区 調査区遺構検出状況全景(北から)



(2) D 4 区 調査区遺構完掘状況全景(北から)

小樋尻遺跡



(1) D 4 区 南壁土層(北西から)



(2) D 4 区 北壁土層(南西から)

小樋尻遺跡



(1) D 4 区 自然流路NR03
遺物出土状況(北西から)



(2) D 4 区 自然流路NR03
遺物出土状況(北から)



(3) D 4 区 自然流路NR03
遺物出土状況(南東から)

小樋尻遺跡



(1) D 4 区 自然流路N R03畔 1
土層(北西から)



(2) D 4 区 自然流路N R03畔 2
土層(北から)



(3) D 4 区 自然流路N R03畔 4
土層(北から)

小樋尻遺跡



(1) D 5 区 調査区全景(南東から)



(2) D 5 区 島畑190上検出溝群(北から)

小樋尻遺跡



(1) D 5 区 調査区下層全景(南東から)



(2) D 5 区 自然流路NR03完掘状況(北東から)

小樋尻遺跡



(1) D 5 区 東壁土層(南西から)



(2) D 5 区 南壁土層(北東から)



(3) D 5 区 南壁断ち割り内土層
(北から)

小樋尻遺跡



(1) D 5 区 植物痕跡検出状況
(北から)



(2) D 5 区 植物痕跡断ち割り状況
(北から)



(3) D 5 区 断ち割りB植物痕跡
(西から)

小樋尻遺跡



(1) D 6 区 調査区全景(南東から)



(2) D 6 区 調査区全景(北東から)

小樋尻遺跡



(1) D 6 区 溝 S D03完掘状況
(北から)



(2) D 6 区 南壁土層(北東から)



(3) D 6 区 南壁断ち割り内土層
(北から)

小樋尻遺跡



(1) D 7 区 調査区全景(南東から)



(2) D 7 区 調査区全景(北西から)

小樋尻遺跡



(1) D 7 区 島畑173・耕作溝 S D
01・02検出状況(北から)



(2) D 7 区 島畑173・耕作溝 S D
01・02検出状況(南西から)



(3) D 7 区 耕作溝 S D 01・02
掘削状況(南東から)

小樋尻遺跡

(1) D 7 区 耕作溝 S D02
断面状況(南から)



(2) D 7 区 南壁土層(北西から)



(3) D 7 区 北壁断ち割り内土層
(南西から)



小樋尻遺跡



(1) D13区 調査区全景(南から)



(2) D13区 調査区全景(南西から)

小樋尻遺跡

(1) D13区 島畑188・185
検出状況(南東から)



(2) D13区 島畑185検出状況
(南東から)



(3) D13区 溝S D02内耕作溝・
ピット検出状況(南から)



小樋尻遺跡



(1) D13区 溝 S D02内耕作溝・
ピット検出状況(北西から)



(2) D13区 溝 S D04・05
検出状況(南東から)



(3) D13区 溝 S D04・05
検出状況(南西から)

小樋尻遺跡

(1) D13区 溝 S D05内
獣骨出土状況(南西から)



(2) D13区 溝 S D05東側畦断面
(西から)



(3) D13区 ピット S P38内石礫
検出状況(北から)



小樋尻遺跡



(1) D13区 焼土 S X100検出状況
(南から)



(2) D13区 焼土 S X100断ち割り
状況(南東から)



(3) D13区 南壁断ち割り内南壁
土層(北東から)

小樋尻遺跡



(1) D15区 調査区全景(南から)



(2) D15区 調査区完掘後全景(南から)

小樋尻遺跡



(1) D15区 島畑194検出状況
(西から)



(2) D15区 溝 S D09検出状況
(東から)



(3) D15区 溝 S D09内土層
(南東から)

水主神社東遺跡



(1) E 1 区 調査区全景(北西から)



(2) E 1 区 調査区全景(南西から)

水主神社東遺跡



(1) E 1 区 南壁土層(北から)



(2) E 1 区 溝 S D07 東壁土層
(西から)



(3) E 1 区 溝 S D07 土層
(西から)

水主神社東遺跡



(1) E 2 区 調査区全景(北東から)



(2) E 2 区 調査区全景(南東から)

水主神社東遺跡



(1) E 2 区 北壁土層(南から)



(2) E 2 区 北壁土層(南西から)



(3) E 2 区 北壁断ち割り内土層
(南西から)

水主神社東遺跡



(1) E 3 区 調査区全景(北東から)



(2) E 3 区 調査区完掘後全景(南東から)

水主神社東遺跡



(1) E 3 区 島畑121検出状況
(北から)



(2) E 3 区 北壁土層(南から)



(3) E 3 区 南壁土層(北から)

水主神社東遺跡



(1) E 4 区 調査区全景(北から)



(2) E 4 区 調査区全景(北東から)

水主神社東遺跡



(1) E 4 区 東壁土層(南西から)



(2) E 4 区 溝 S D02内土層
(北から)



(3) E 4 区 北壁断ち割り内土層
(南から)

水主神社東遺跡



(1) E 5 区 調査区全景(西から)



(2) E 5 区 調査区全景(東から)

水主神社東遺跡



(1) E 5 区 東半部全景
(南西から)



(2) E 5 区 西半部全景
(南東から)



(3) E 5 区 島畑121上面耕作溝
検出状況(北から)

水主神社東遺跡



(1) E 5 区 島畑121・低位部 S D
01検出状況(南西から)



(2) E 5 区 島畑120、自然流路
NR05・06、落ち込み S X04
検出状況(南西から)



(3) E 5 区 島畑117・低位部 S D
03・島畑120検出状況(南西から)

水主神社東遺跡



(1) E 5 区 流路NR05内遺物
出土状況(南から)



(2) E 5 区 落込みS X04内土層
(南から)



(3) E 5 区 北壁断ち割り内土層
(南から)

水主神社東遺跡



(1) E 6 a区 調査区全景(西から)



(2) E 6 a区 北壁土層(南から)

水主神社東遺跡



(1) E 6 b区 島畑116全景(南東から)



(2) E 6 b区 調査区下層全景(北東から)

水主神社東遺跡

(1) E 6 b区 島畑116全景
(北東から)



(2) E 6 b区 調査区西半部全景
(北から)



(3) E 6 b区 溝 S D06全景
(北西から)



水主神社東遺跡



(1) E 6b区 溝 S D14・S D05
検出状況(北東から)



(2) E 6b区 溝 S D05全景
(南から)



(3) E 6b区 北壁土層西半
(南から)

水主神社東遺跡



(1) E 6 b区 南壁土層(北西から)



(2) E 6 b区 南壁土層東半
(北西から)



(3) E 6 b区 南壁断ち割り内土層
(北から)

水主神社東遺跡



(1) F 1 区 調査区第 2 面全景(西から)



(2) F 1 区 調査区第 2 面全景(北西から)

水主神社東遺跡



(1) F 1 区 調査区第 1 面全景
(東から)



(2) F 1 区 調査区第 1 面全景
(北西から)



(3) F 1 区 第 1 面島畑124・
溝 S D01検出状況(東から)

水主神社東遺跡



(1) F 1 区 第 2 面島畑124
検出状況(東から)



(2) F 1 区 第 2 面島畑123
検出状況(東から)



(3) F 1 区 溝 S D02西壁土層
(東から)

水主神社東遺跡



(1) F 2 区 調査区第 3 面全景(北から)



(2) F 2 区 調査区第 3 面全景(北東から)

水主神社東遺跡



(1) F 2 区 調査区第 2 面全景(北から)



(2) F 2 区 調査区第 4 面全景(北東から)

水主神社東遺跡

(1) F 2 区 土坑 S K 30 検出状況
(北西から)



(2) F 2 区 東壁土層(西から)



(3) F 2 区 断ち割り内北壁土層
(南から)



水主神社東遺跡



(1) F 3 区 調査区全景(北西から)



(2) F 3 区 調査区全景(東から)

水主神社東遺跡

(1) F 3 区 東壁土層(南西から)



(2) F 3 区 島畑122東壁土層
(西から)



(3) F 3 区 東壁断ち割り内土層
(西から)



水主神社東遺跡



(1) F 4 a 区 調査区全景(南東から)



(2) F 4 a 区 島畑127上耕作溝 S D01検出状況(南から)

水主神社東遺跡



(1) F 4 a 区 流路N R 04・05完掘状況(南東から)



(2) F 4 a 区 流路N R 04・05完掘状況(南から)

水主神社東遺跡



(1) F 4 b 区 調査区全景(北西から)



(2) F 4 b 区 溝 S D07内耕作跡検出状況(東から)

水主神社東遺跡



(1) F 4 a 区 島畑127・洪水砂
整理土坑検出状況(南から)



(2) F 4 a 区 流路NR04
完掘状況(南東から)



(3) F 4 a 区 流路NR05
完掘状況(南東から)

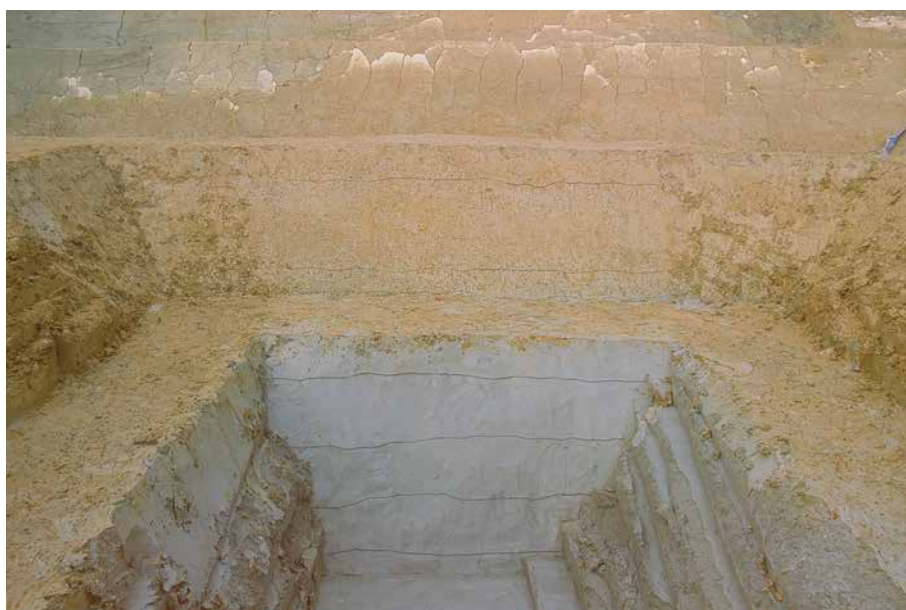
水主神社東遺跡



(1) F 4 a 区 流路N R04内土層
(南東から)



(2) F 4 a 区 流路N R05内土層
(南東から)



(3) F 4 a 区 北壁断ち割り内
土層(南から)

水主神社東遺跡



(1) G 1 区 調査区第 1 面全景(南西から)



(2) G 1 区 調査区第 2 面全景(北から)

水主神社東遺跡



(1) G 1 区 第 2 面島畑142
検出状況(北から)



(2) G 1 区 溝 S D07内土層断面
(南から)



(3) G 1 区 北壁土層断面
(南西から)

水主神社東遺跡



(1) G 1 区 西壁土層(東から)



(2) G 1 区 西壁洪水堆積層
(東から)



(3) G 1 区 西壁断ち割り内
自然流路土層(東から)

水主神社東遺跡



(1) G 2 区 調査区第 1 面全景(南から)



(2) G 2 区 調査区第 2 面全景(北西から)

水主神社東遺跡

(1) G 2 区 北壁土層
(南東から)



(2) G 2 区 西壁土層
(南東から)



(3) G 2 区 断ち割り内北壁土層
(南東から)



水主神社東遺跡



(1) G 3 区 調査区全景(南から)



(2) G 3 区 調査区全景(南東から)

水主神社東遺跡

(1) G 3 区 不明土坑 S X14
検出状況(南西から)



(2) G 3 区 北壁土層
(南東から)



(3) G 3 区 断ち割り内北壁土層
(南西から)



水主神社東遺跡



(1) G 4 区 島畑164全景(北西から)



(2) G 4 区 島畑164全景(南西から)

水主神社東遺跡



(1) G 4 区 島畑164検出状況
(東から)



(2) G 4 区 島畑163検出状況
(南東から)



(3) G 4 区 島畑164西壁土層
(東から)

水主神社東遺跡



(1) G 4 区 溝 S D01西壁土層
(東から)



(2) G 4 区 島畑163西壁土層
(東から)



(3) G 4 区 断ち割り内北壁土層
(南から)

水主神社東遺跡



(1) G 5 区 調査区全景(南東から)



(2) G 5 区 調査区全景(北西から)

水主神社東遺跡



(1) G 5 区 島畑165西壁土層
(東から)



(2) G 5 区 溝 S D02西壁土層
(東から)



(3) G 5 区 溝 S D01西壁土層
(東から)

水主神社東遺跡

(1) G 5 区 溝 S D01北半
西壁土層(東から)



(2) G 5 区 島畑163西壁土層
(東から)



(3) G 5 区 断ち割り内西壁土層
(東から)



水主神社東遺跡



(1) G 6 区 調査区全景(南から)



(2) G 6 区 調査区全景(南東から)

水主神社東遺跡



(1) G 6 区 流路N R02内畔土層
(南東から)



(2) G 6 区 流路N R02内畔土層
(南東から)



(3) G 6 区 流路N R02内遺物
出土状況(西から)

水主神社東遺跡



(1) G 6 区 流路 N R01 検出状況
(南東から)



(2) G 6 区 南壁土層(北西から)



(3) G 6 区 南壁断ち割り内土層
(北から)

水主神社東遺跡



(1) G 7 区 調査区全景(南から)



(2) G 7 区 調査区全景(南東から)

水主神社東遺跡



(1) G 7 区 南壁土層(北西から)



(2) G 7 区 島畑134南壁土層
(北から)



(3) G 7 区 流路N R05検出状況
(南東から)

水主神社東遺跡

(1) G 7 区 焼土 S X03 検出状況
(南西から)



(2) G 7 区 断ち割り内北壁土層
(南から)



(3) G 7 区 流路 N R05 内有機物
検出状況(南から)



水主神社東遺跡



(1) G 8 区 調査区全景(南東から)



(2) G 8 区 調査区全景(北東から)

水主神社東遺跡



(1) G 8 区 南壁土層(北から)



(2) G 8 区 島畑131東溝南壁土層
(北から)



(3) G 8 区 島畑131西溝南壁土層
(北から)

水主神社東遺跡



(1) G 8 区 縄文土器検出状況
(南東から)



(2) G 8 区 自然木検出状況
(南東から)



(3) G 8 区 南壁断ち割り内土層
(北から)

水主神社東遺跡



(1) G 9 区 調査区全景(南東から)



(2) G 9 区 調査区全景(北西から)

水主神社東遺跡



(1) G 9 区 拡張調査区全景(北西から)



(2) G 9 区 調査区全景(南西から)

水主神社東遺跡

(1) G 9 区 不明土坑 S X07内
土層(北から)



(2) G 9 区 南壁土層(北西から)



(3) G 9 区 南壁断ち割り内土層
(北から)



水主神社東遺跡



(1) G10区 調査区全景(南東から)



(2) G10区 島畑151北壁土層(南から)

水主神社東遺跡

(1) G10区 断ち割り 1 内
北壁土層(南から)



(2) G10区 流路NR11検出状況
(東から)



(3) G10区 流路NR11検出状況
(南東から)



水主神社東遺跡



(1) G 10区 流路N R 11南壁土層
(北から)



(2) G 10区 流路N R 11南壁土層
(北東から)



(3) G 10区 流路N R 11南壁土層
(北東から)

水主神社東遺跡



(1) G18区 調査区全景(北東から)



(2) G18区 調査区全景(北西から)

水主神社東遺跡



(1) G18区 調査区全景(西から)



(2) G18区 調査区全景(東から)

水主神社東遺跡



(1) G18区 島畑154上耕作溝
S D03・04検出状況(北から)



(2) G18区 島畑155検出状況
(北から)



(3) G18区 島畑155東溝盛土
検出状況(南から)

水主神社東遺跡



(1) G18区 南辺断割り内
島畑154検出状況(南東から)



(2) G18区 南辺断割り内
島畑155検出状況(南西から)



(3) G18区 島畑154北壁土層
(南から)





113



123



114



124



116



133



117



137



118



172



119



181



120



121



182



122



323



329



331



325



333



326



334



328



335



330



340



337



341



338



342



339



343



344



350



345



356



348



352



448



(1) 出土遺物 6



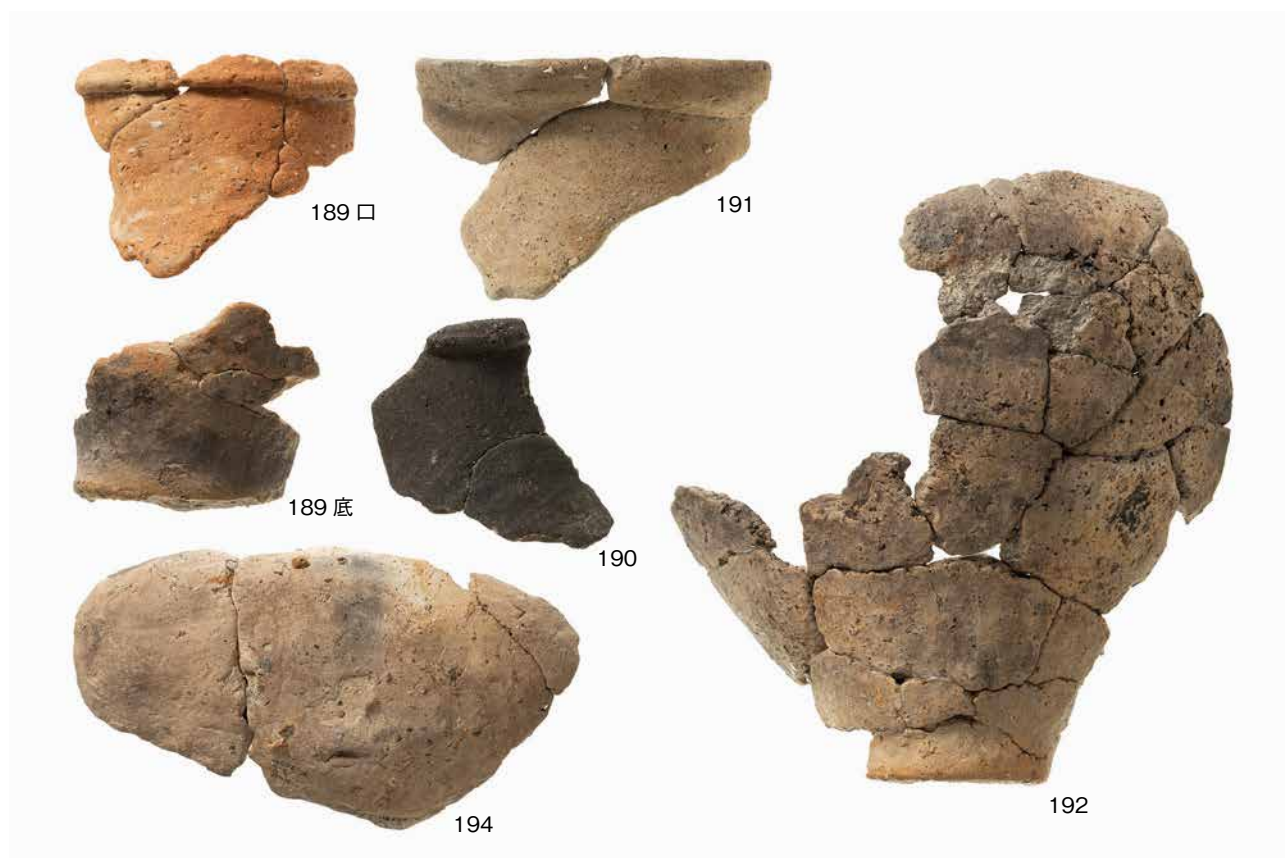
(2) 出土遺物 7



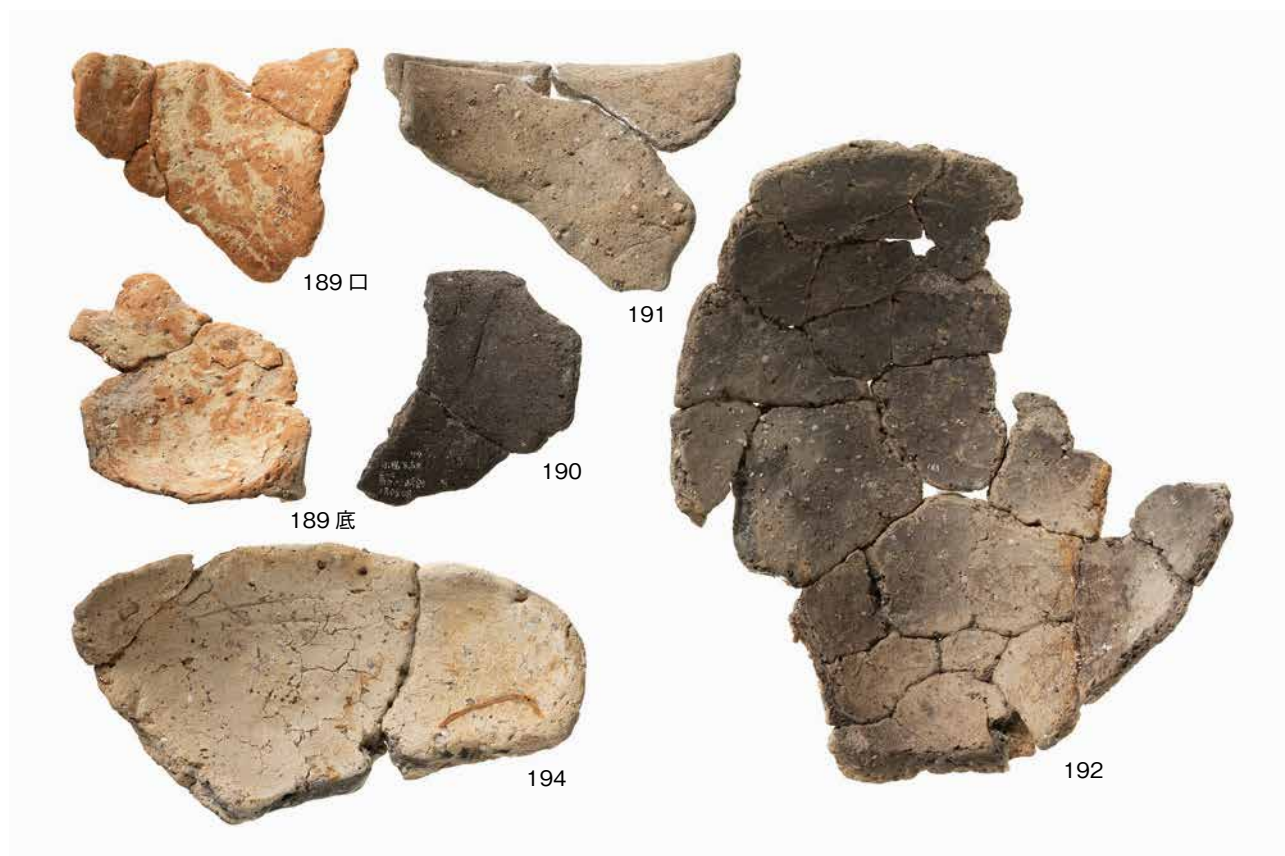
(1) 出土遺物 8



(2) 出土遺物 9



(1) 出土遺物10



(2) 出土遺物11



193

(1) 出土遺物12

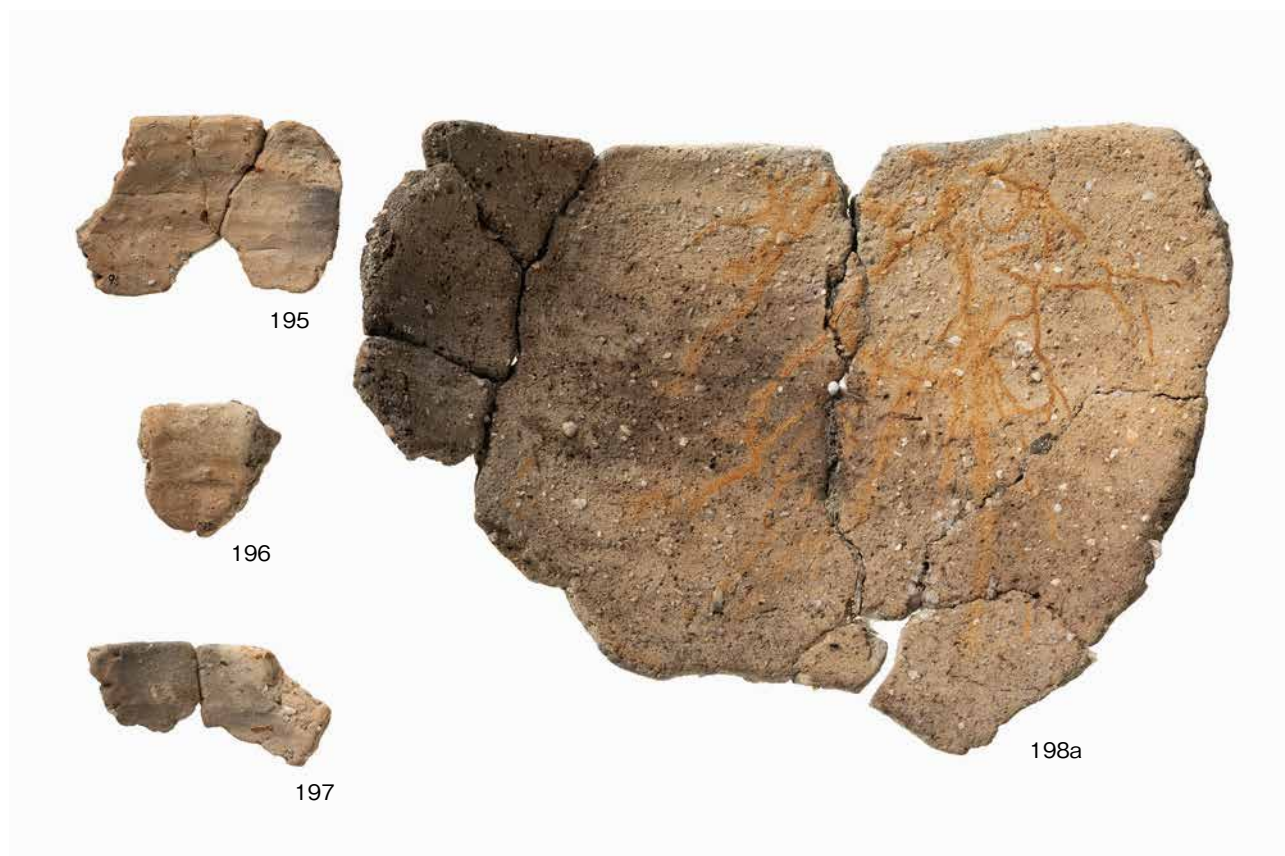


193

(2) 出土遺物13



(1) 出土遺物14



(2) 出土遺物15



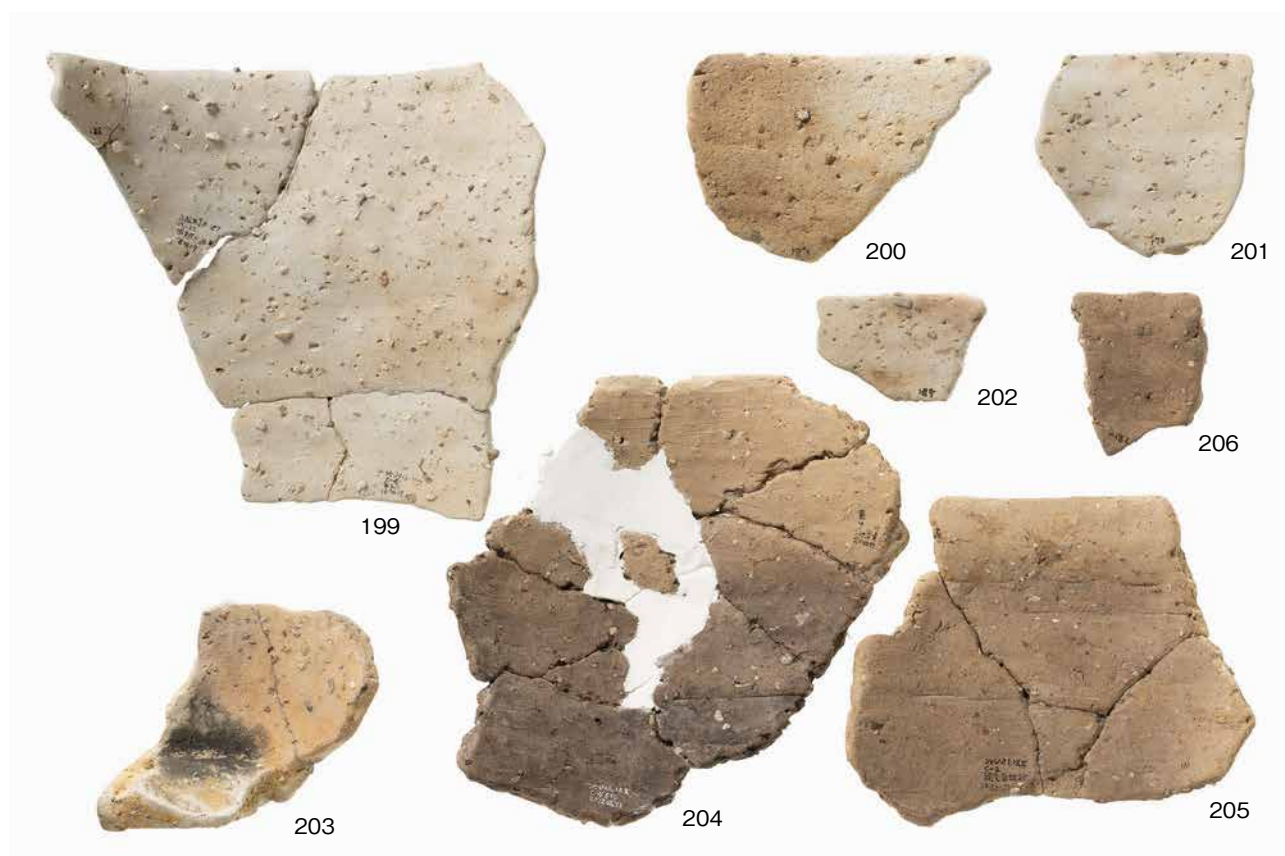
(1) 出土遺物16



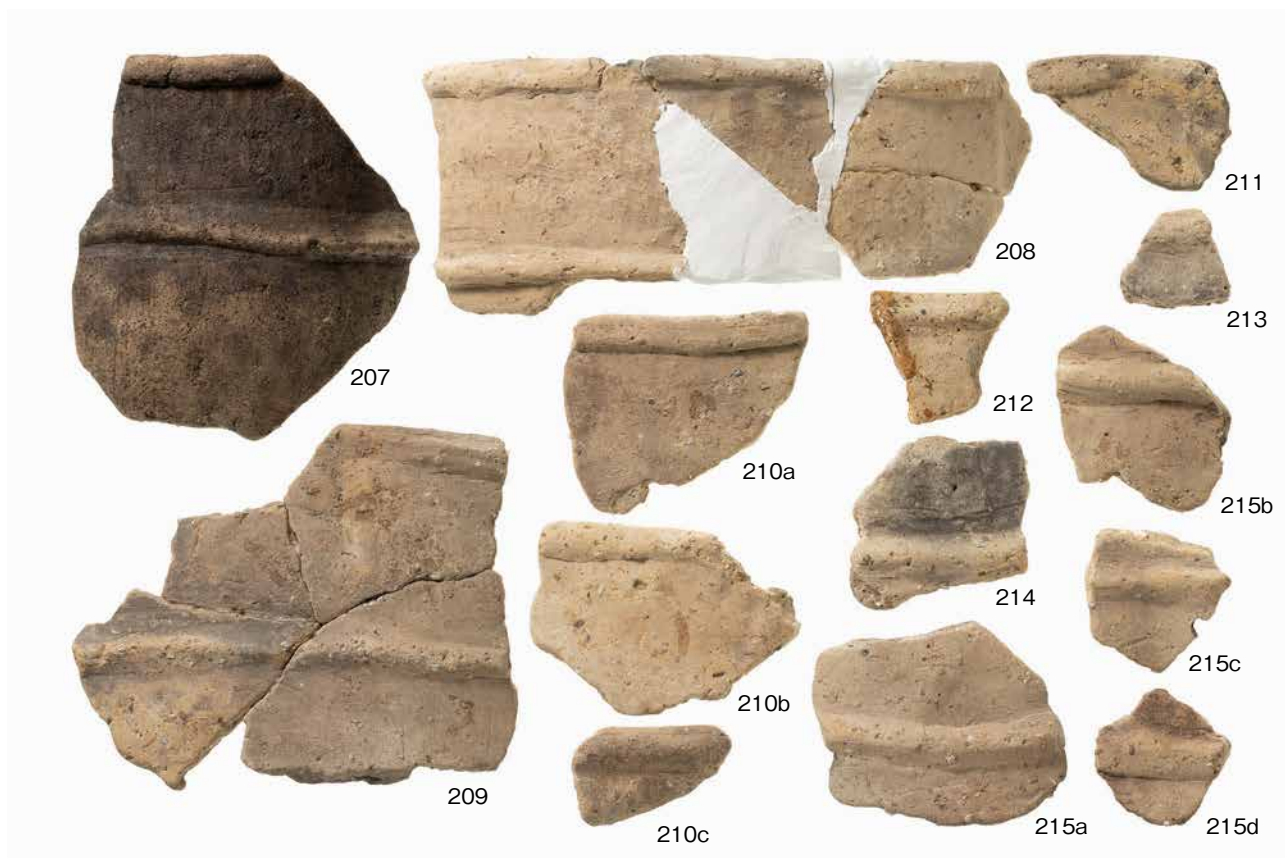
(2) 出土遺物17



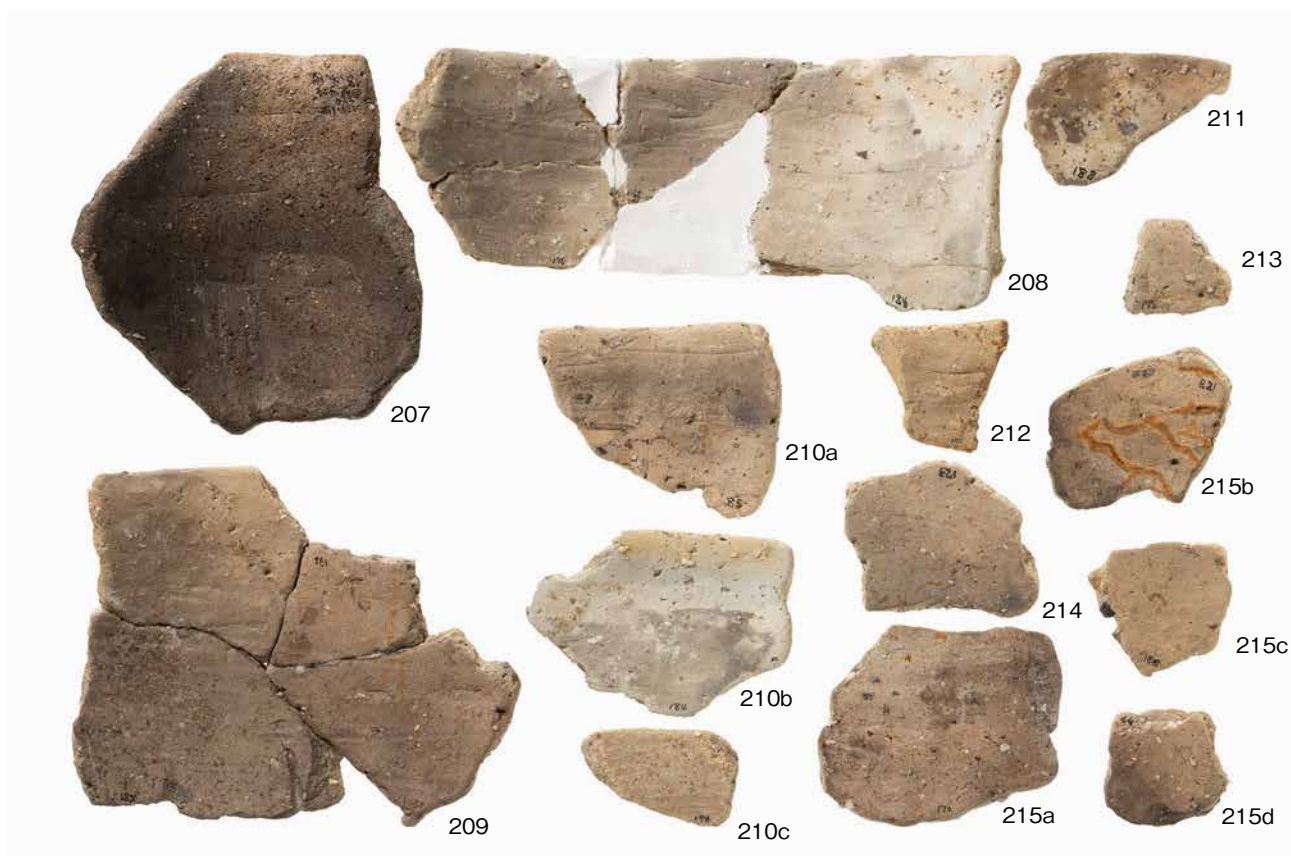
(1) 出土遺物18



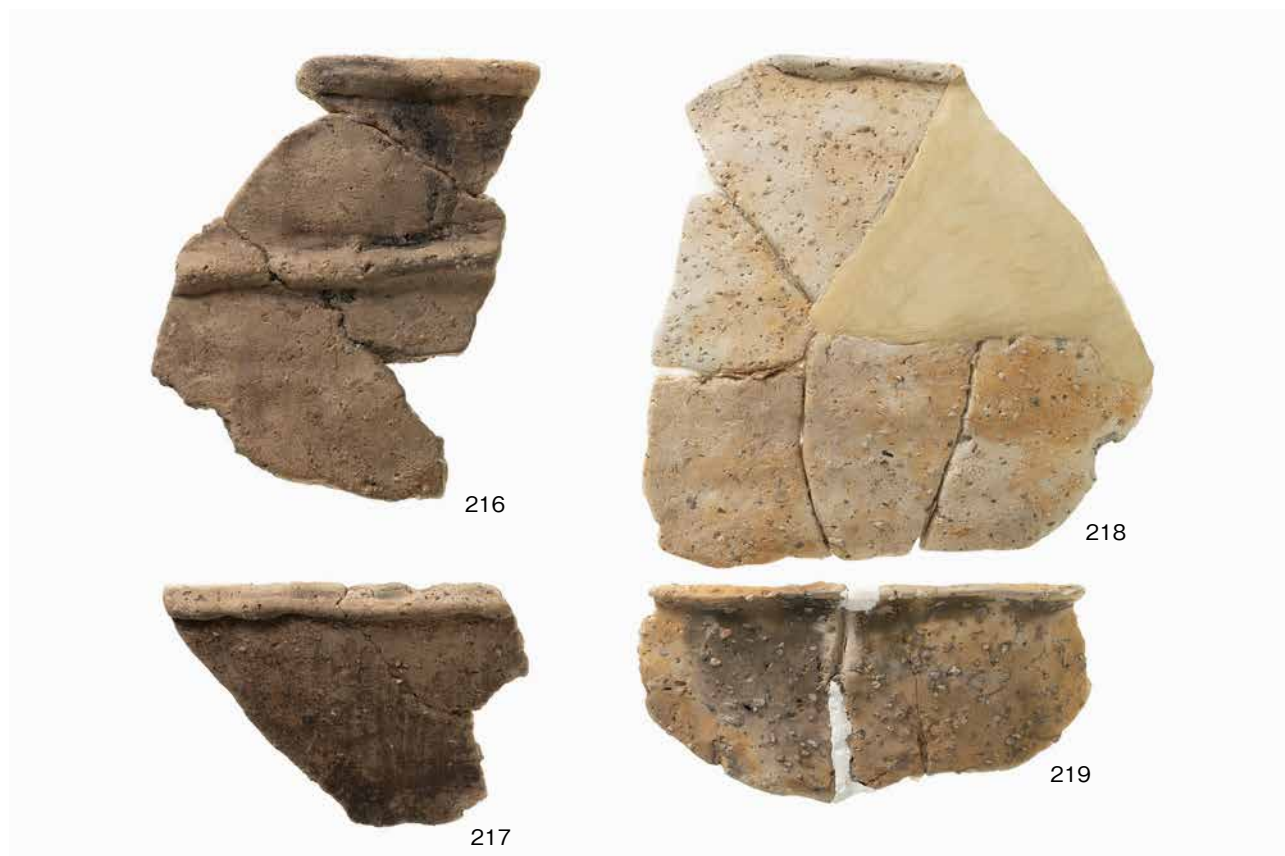
(2) 出土遺物19



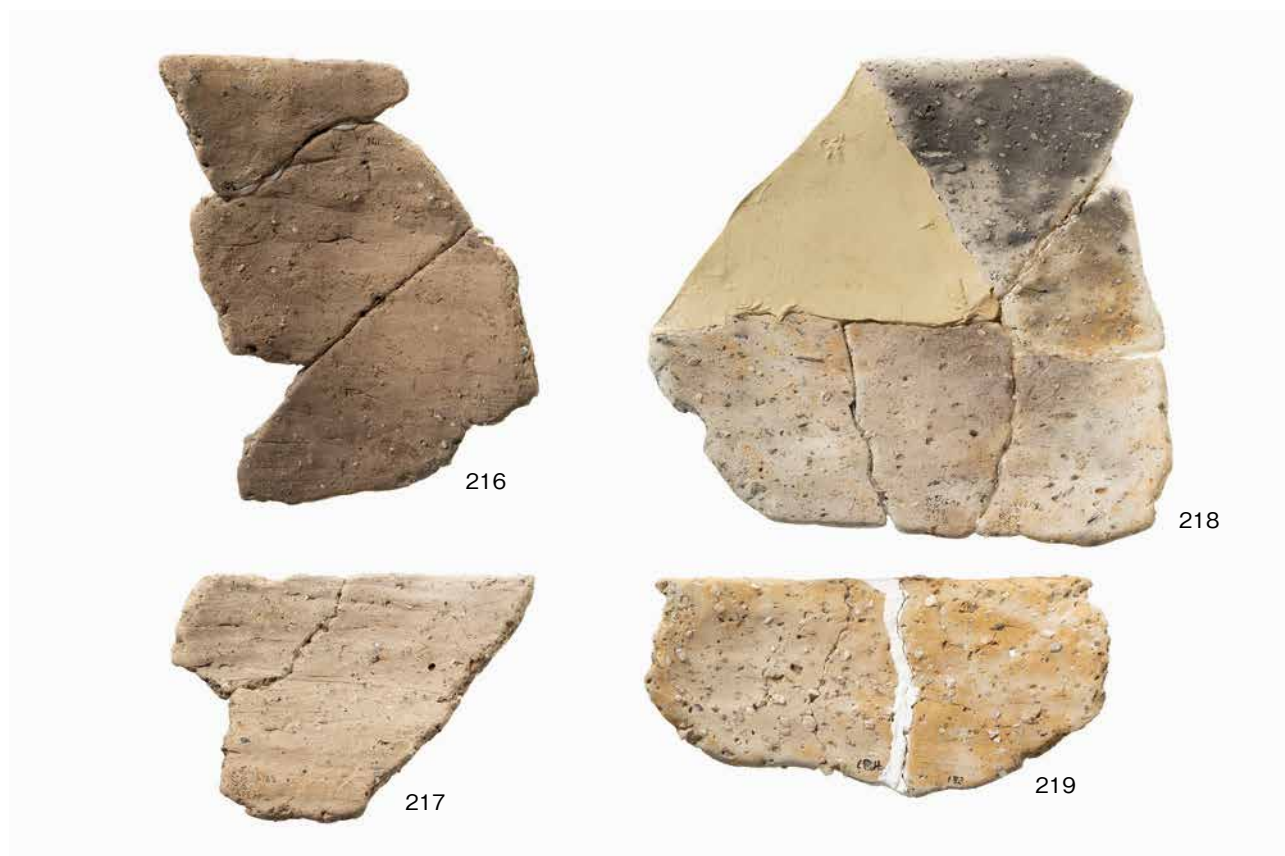
(1) 出土遺物20



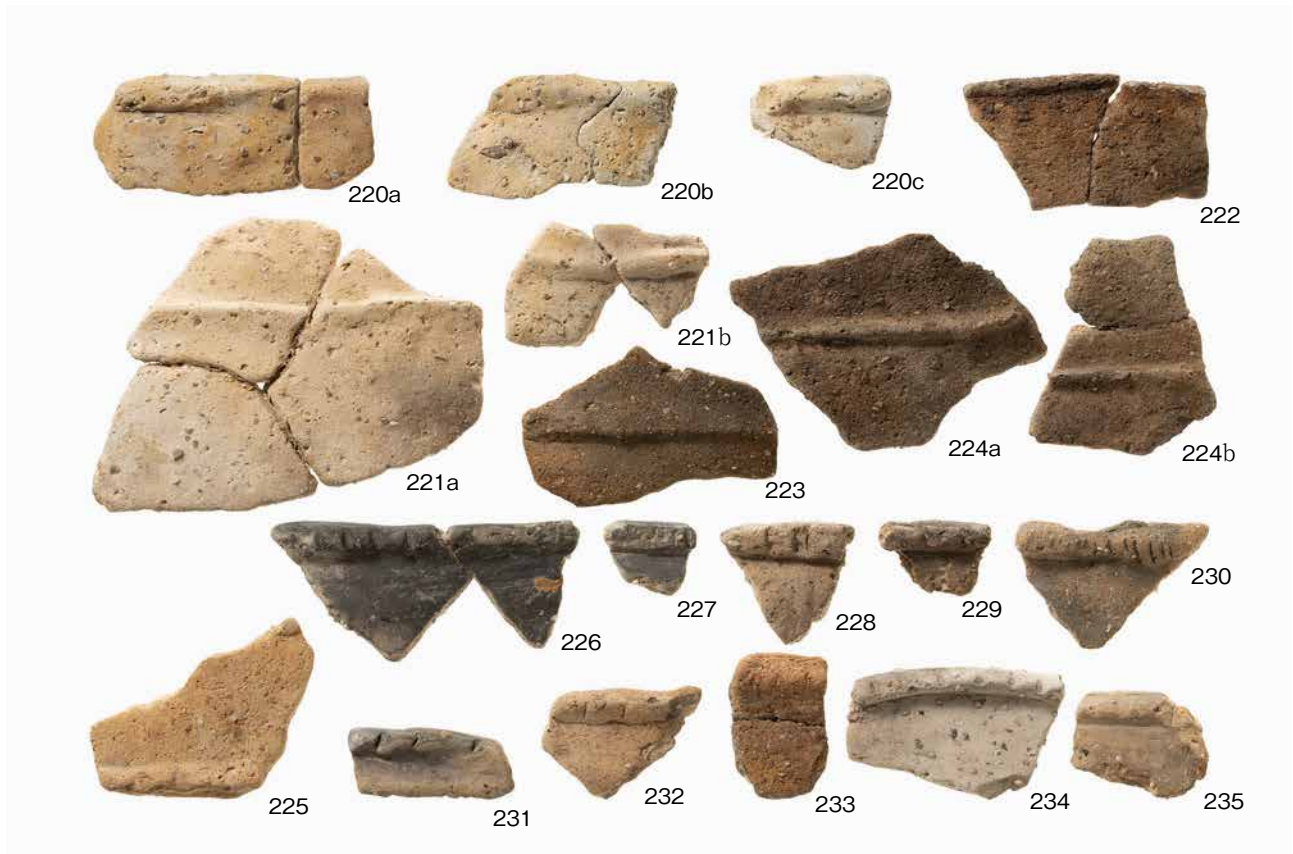
(2) 出土遺物21



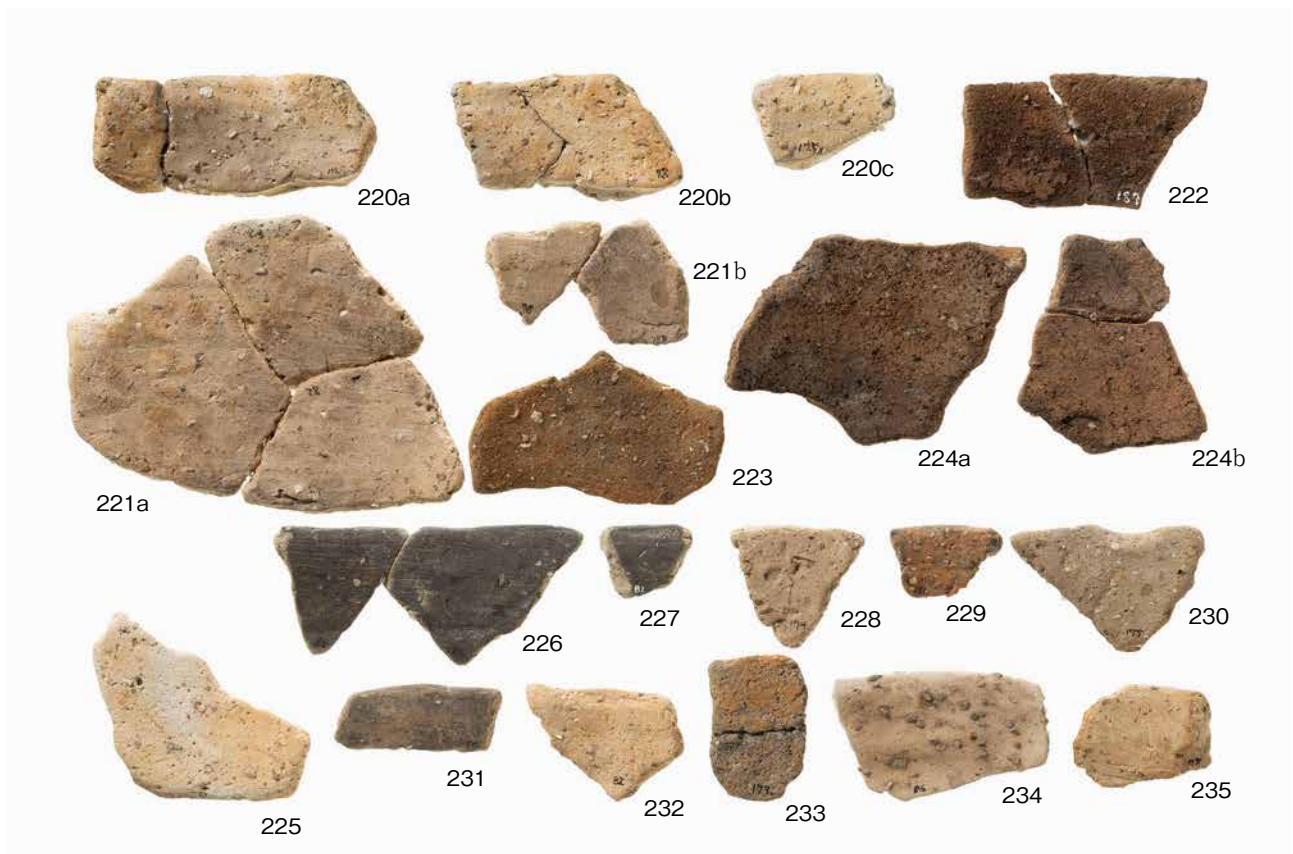
(1) 出土遺物22



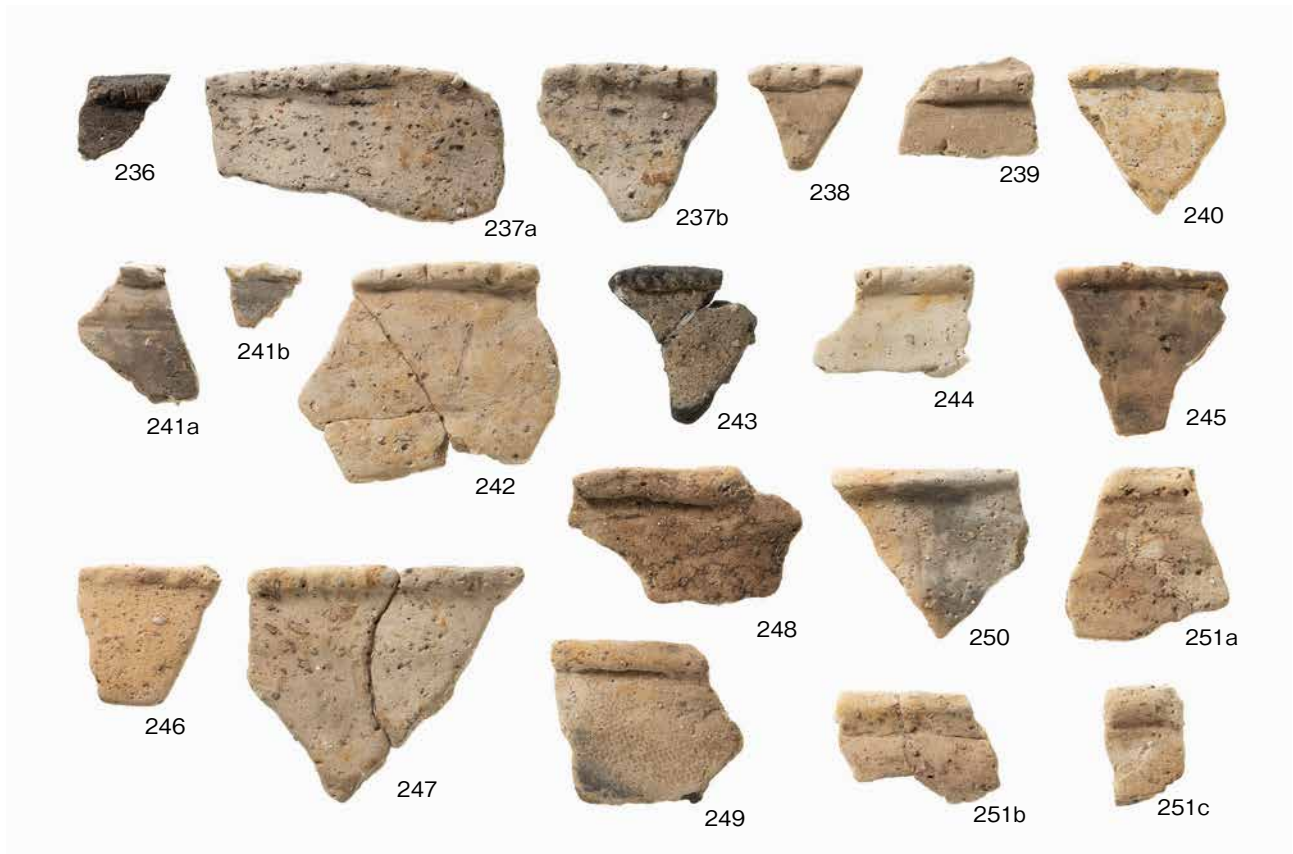
(2) 出土遺物23



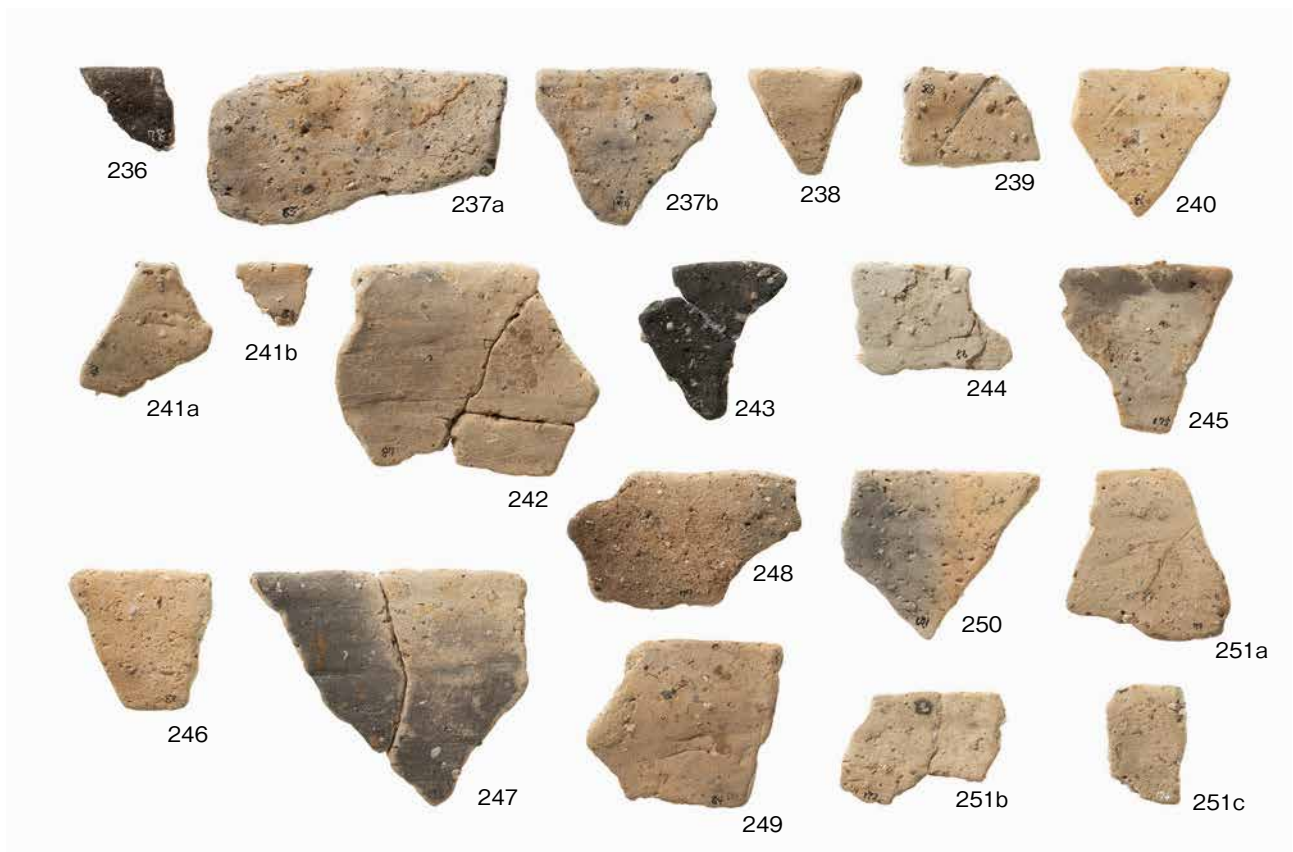
(1) 出土遺物24



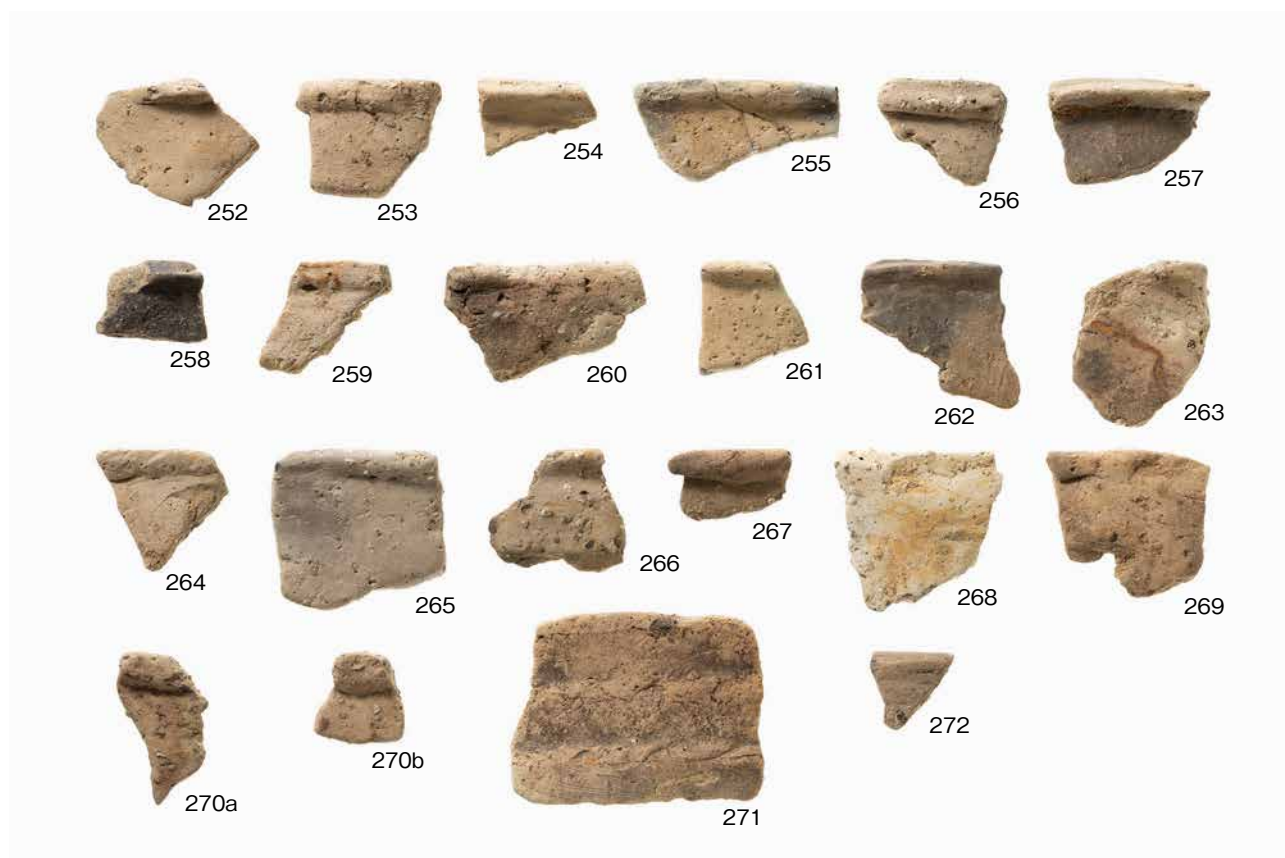
(2) 出土遺物25



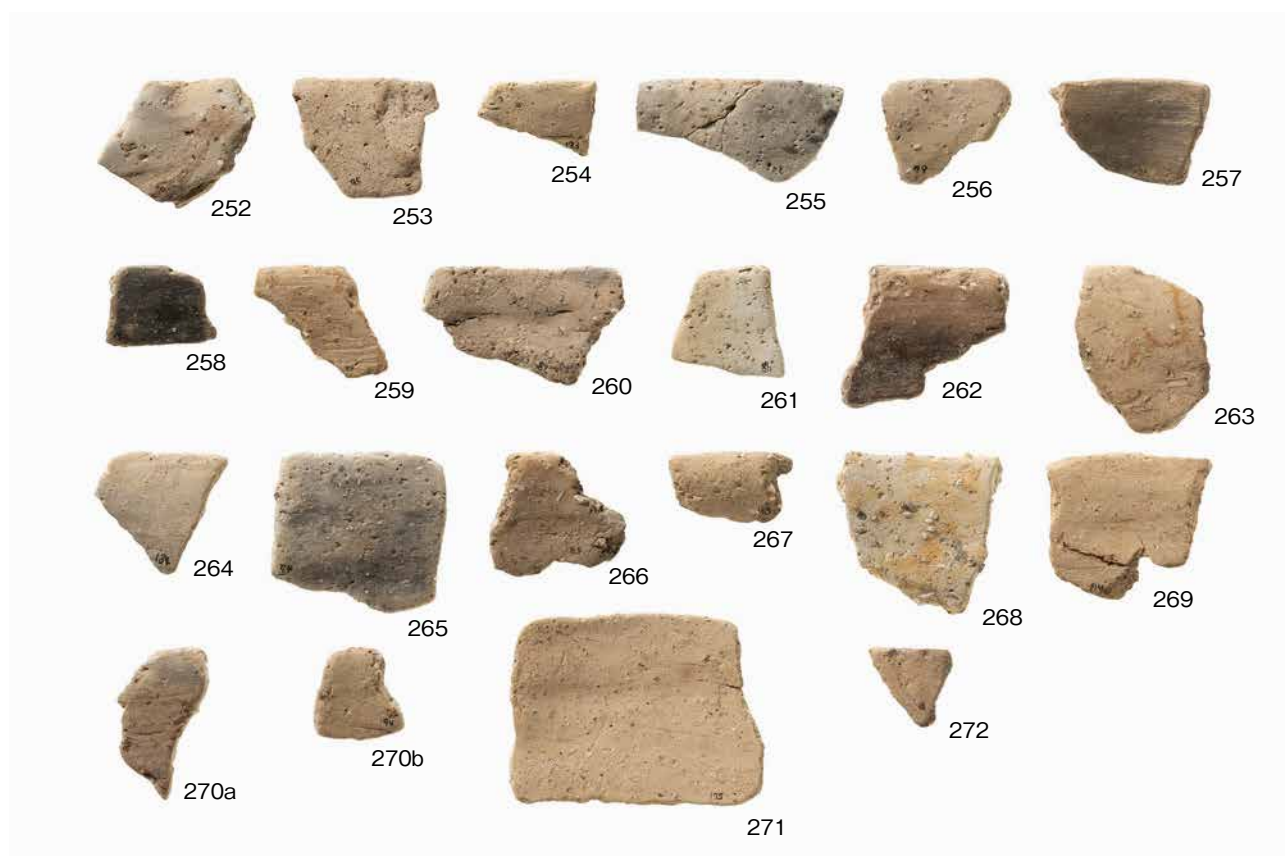
(1) 出土遺物26



(2) 出土遺物27



(1) 出土遺物28



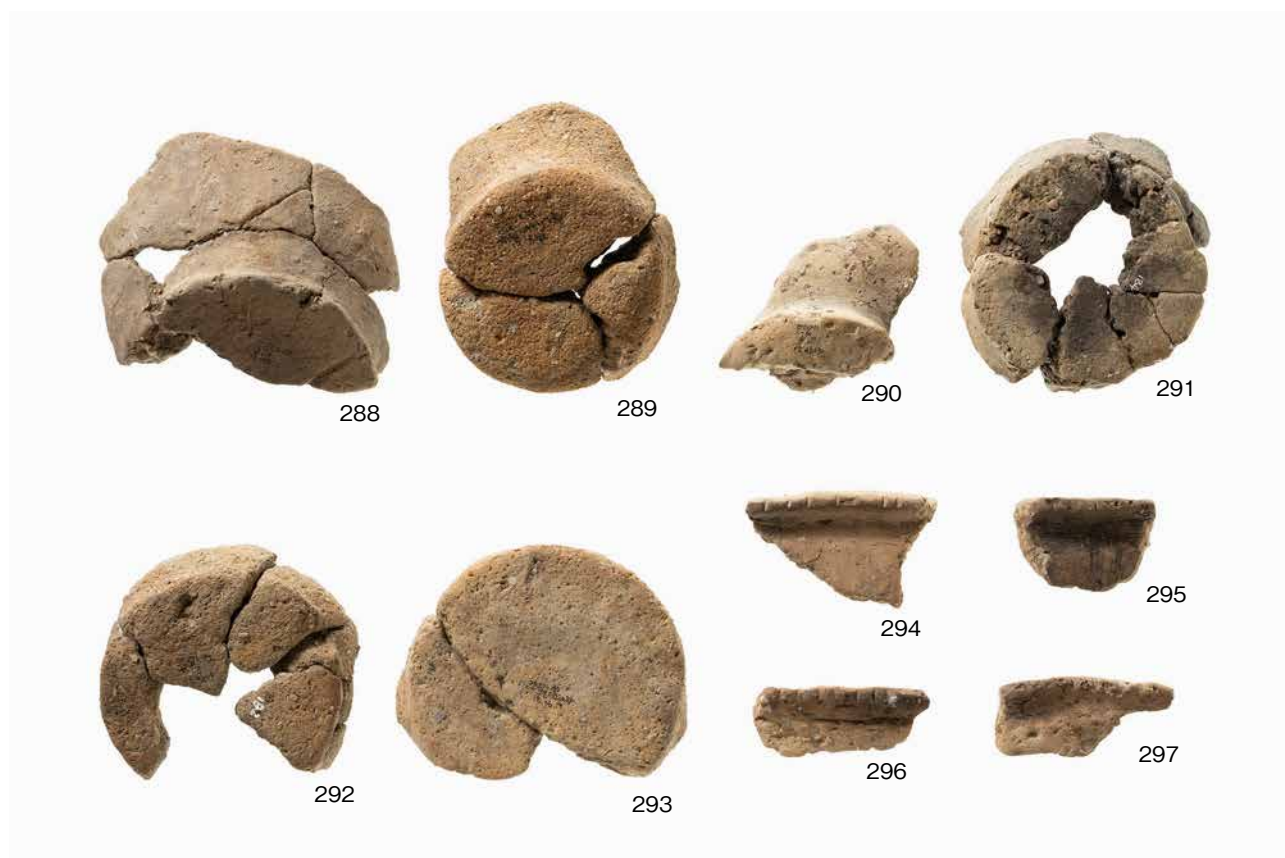
(2) 出土遺物29



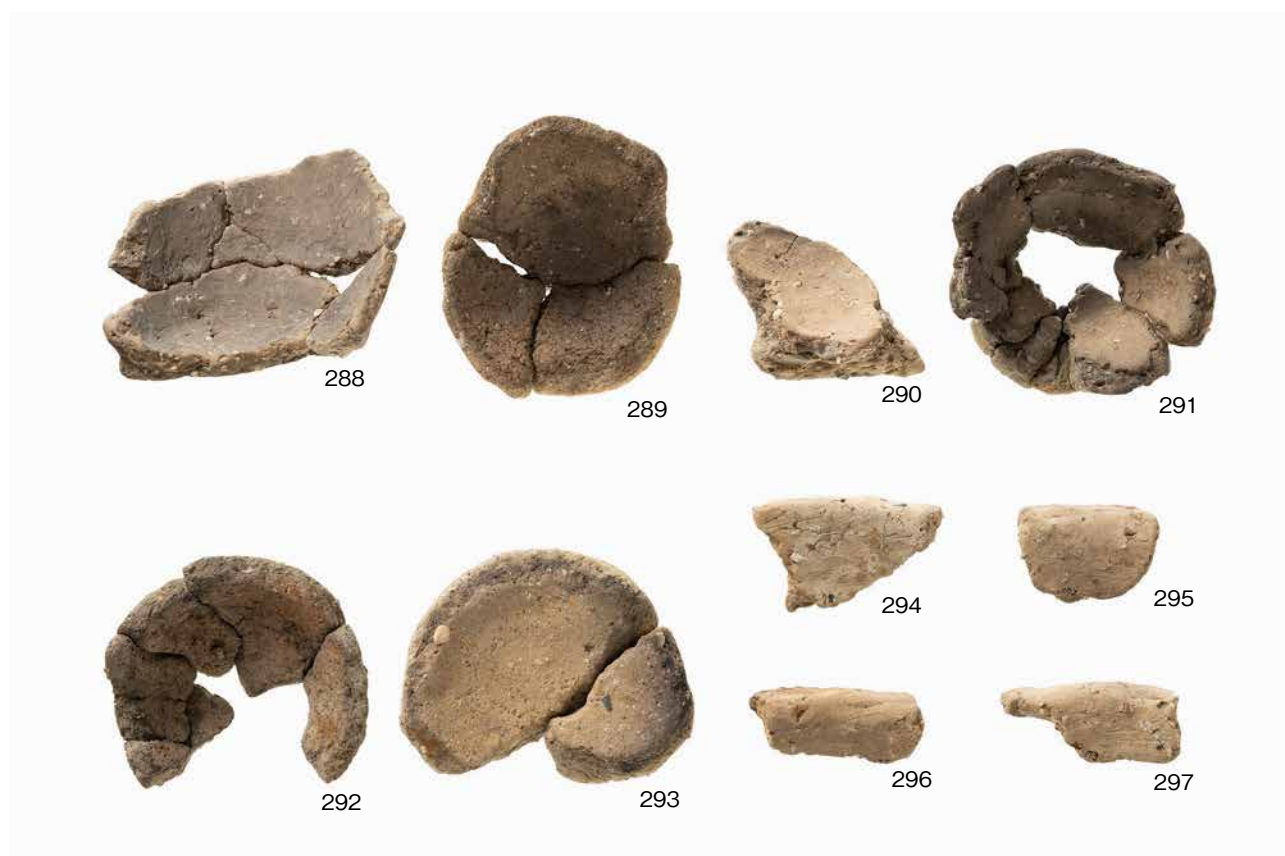
(1) 出土遺物30



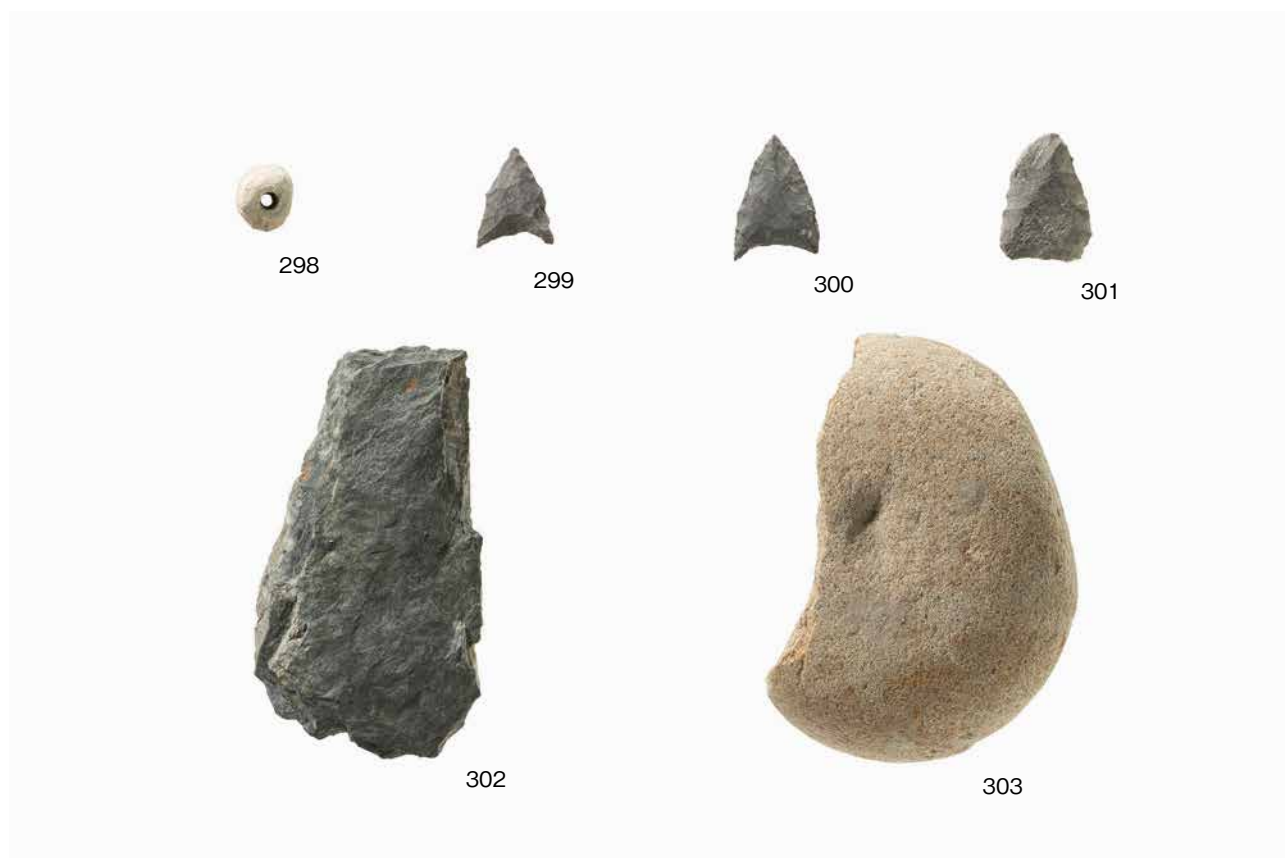
(2) 出土遺物31



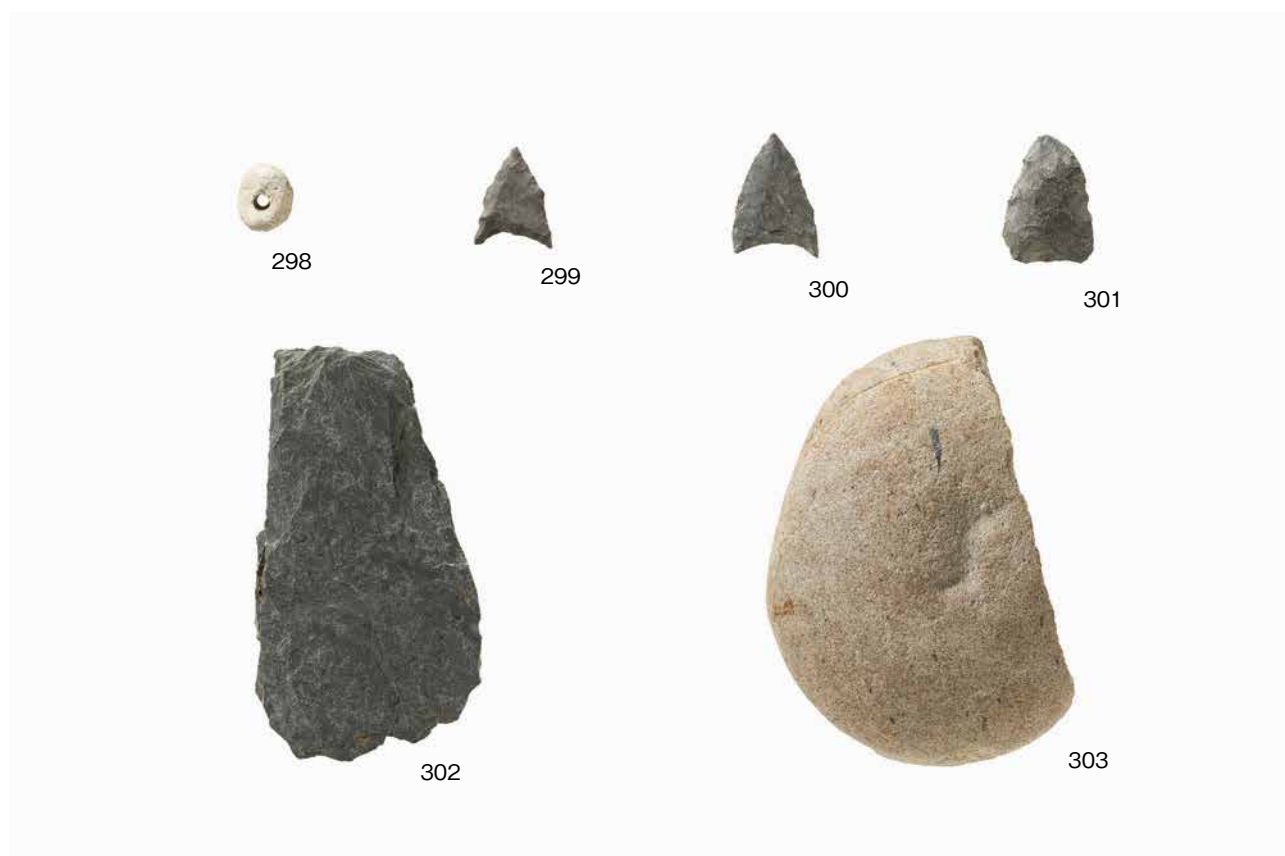
(1) 出土遺物32



(2) 出土遺物33



(1) 出土遺物34



(2) 出土遺物35



(1) 出土遺物36



(2) 出土遺物37



(1) 出土遺物38



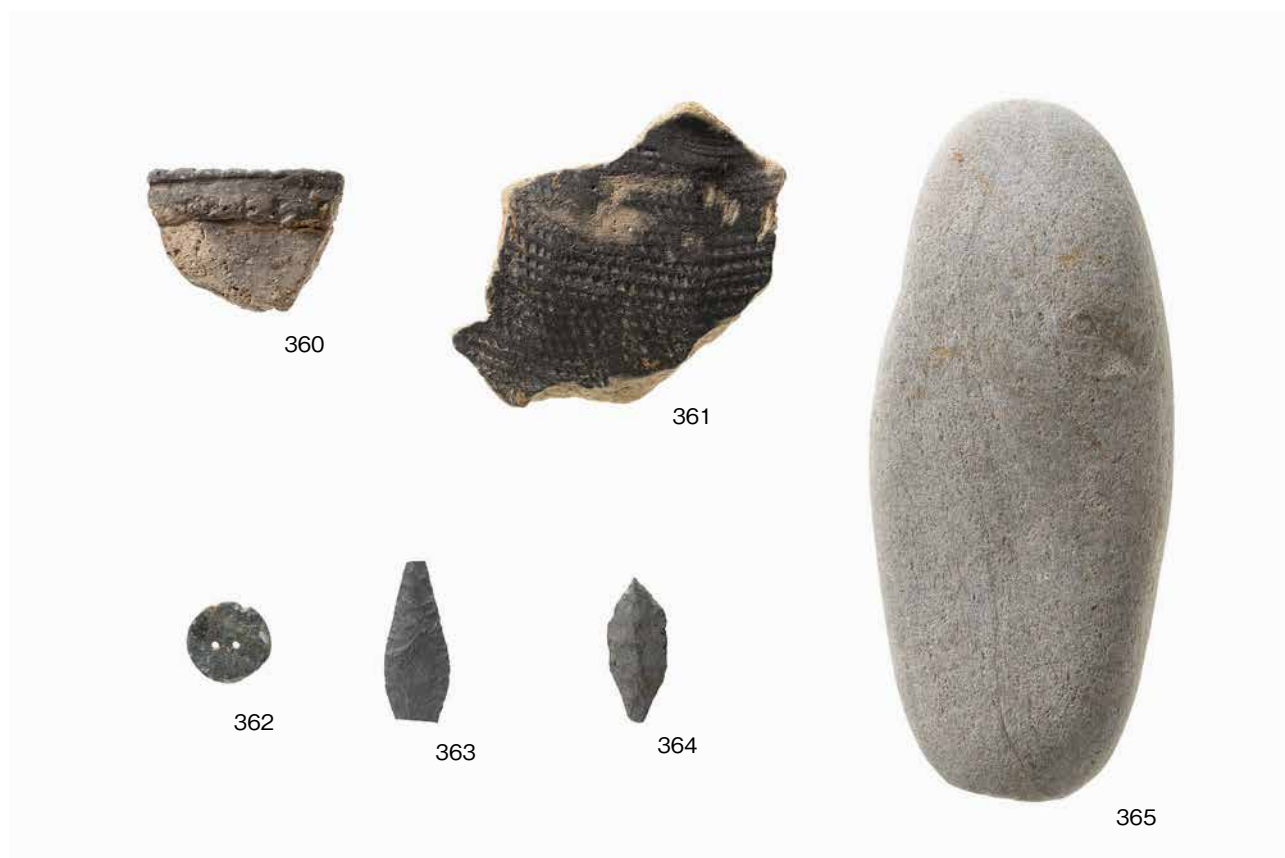
(2) 出土遺物39



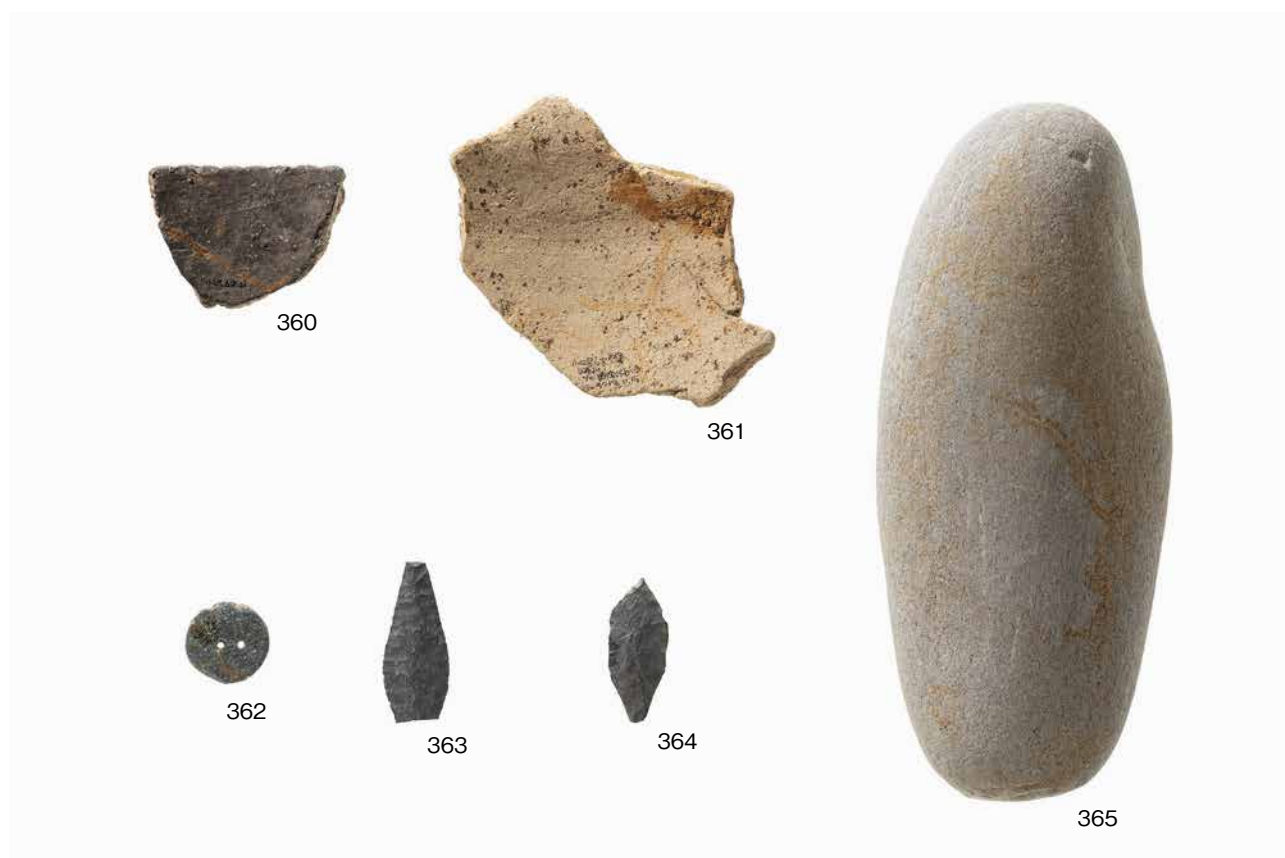
(1) 出土遺物40



(2) 出土遺物41



(1) 出土遺物42



(2) 出土遺物43



(1) 出土遺物44



(2) 出土遺物45



(1) 出土遺物46



(2) 出土遺物47



(1) 出土遺物48



(2) 出土遺物49



(1) 出土遺物50



(2) 出土遺物51



(1) 出土遺物52



(2) 出土遺物53



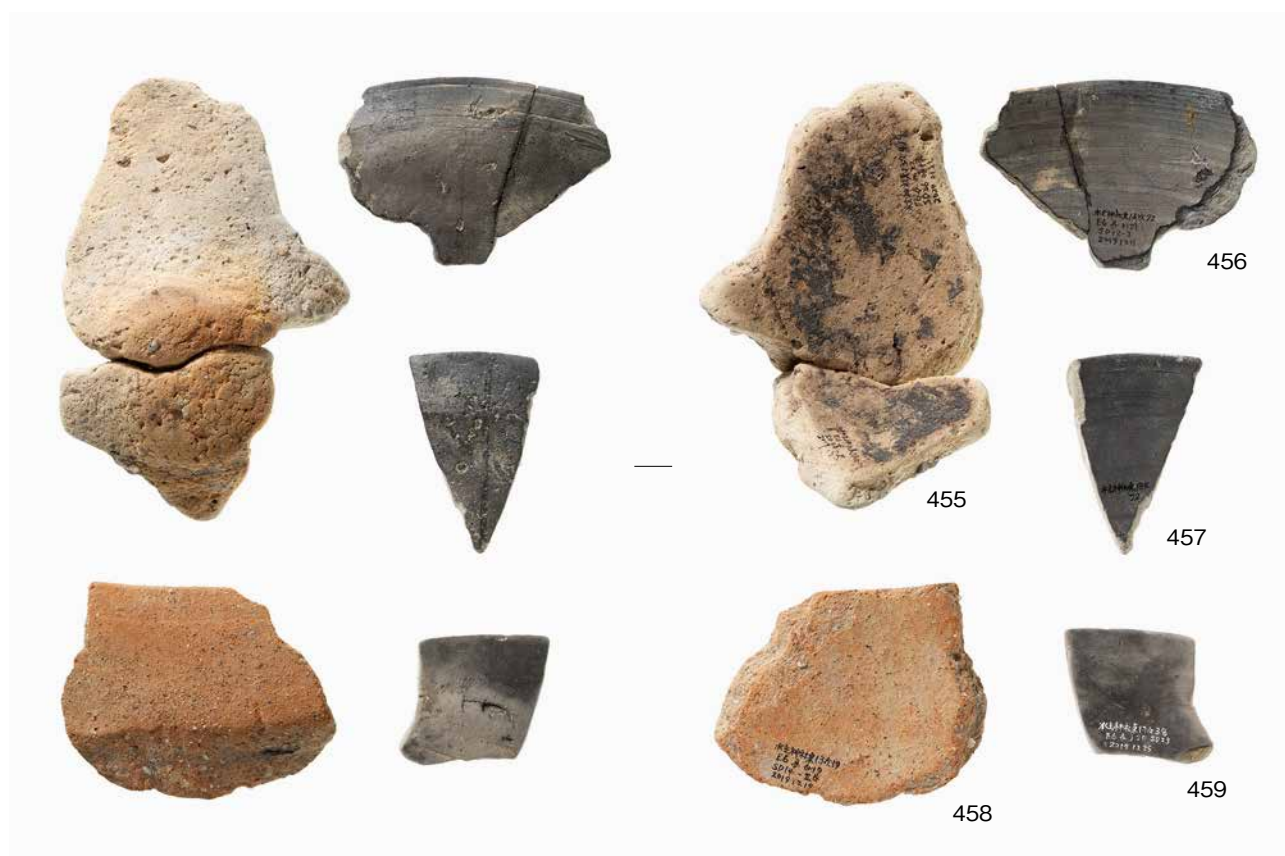
(1) 出土遺物54



(2) 出土遺物55



(1) 出土遺物56



(2) 出土遺物57



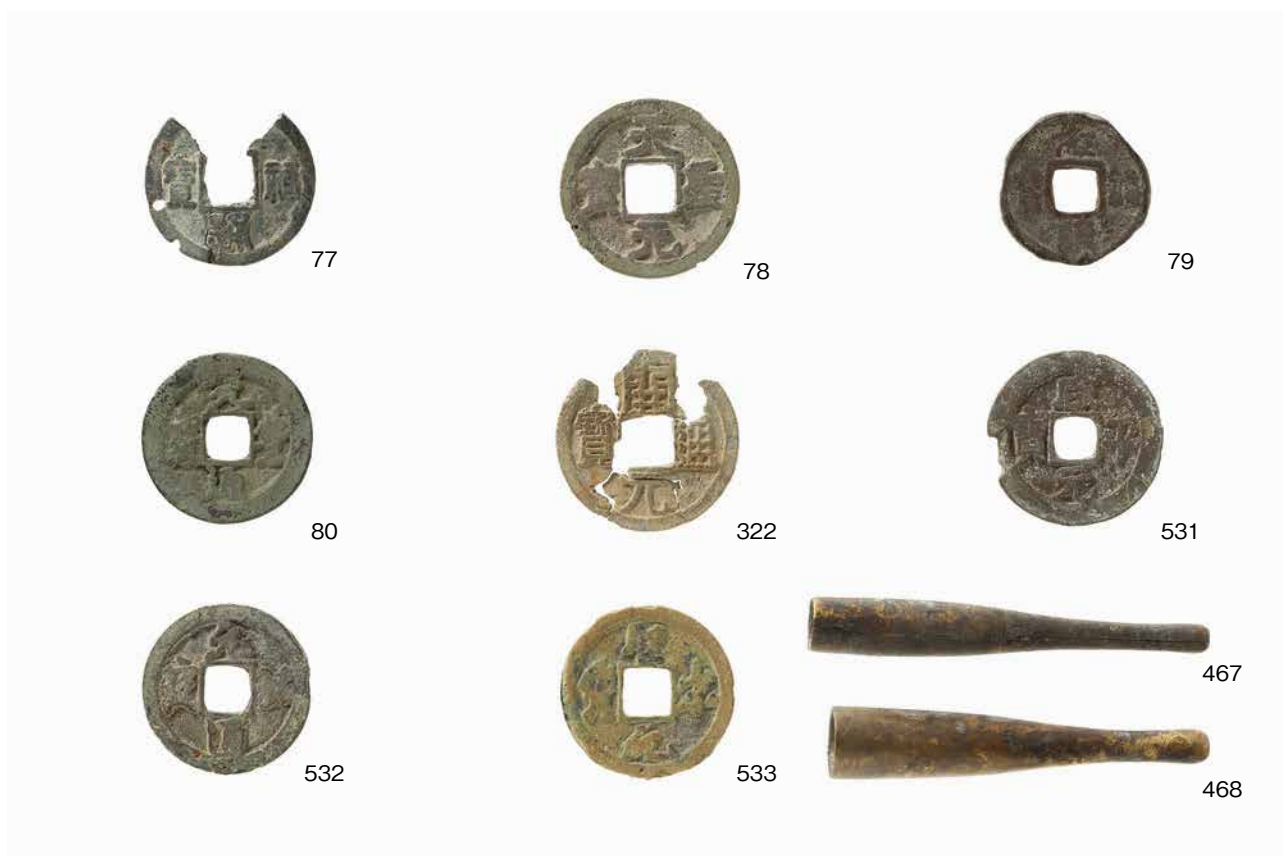
(1) 出土遺物58



(2) 出土遺物59



(1) 出土遺物60



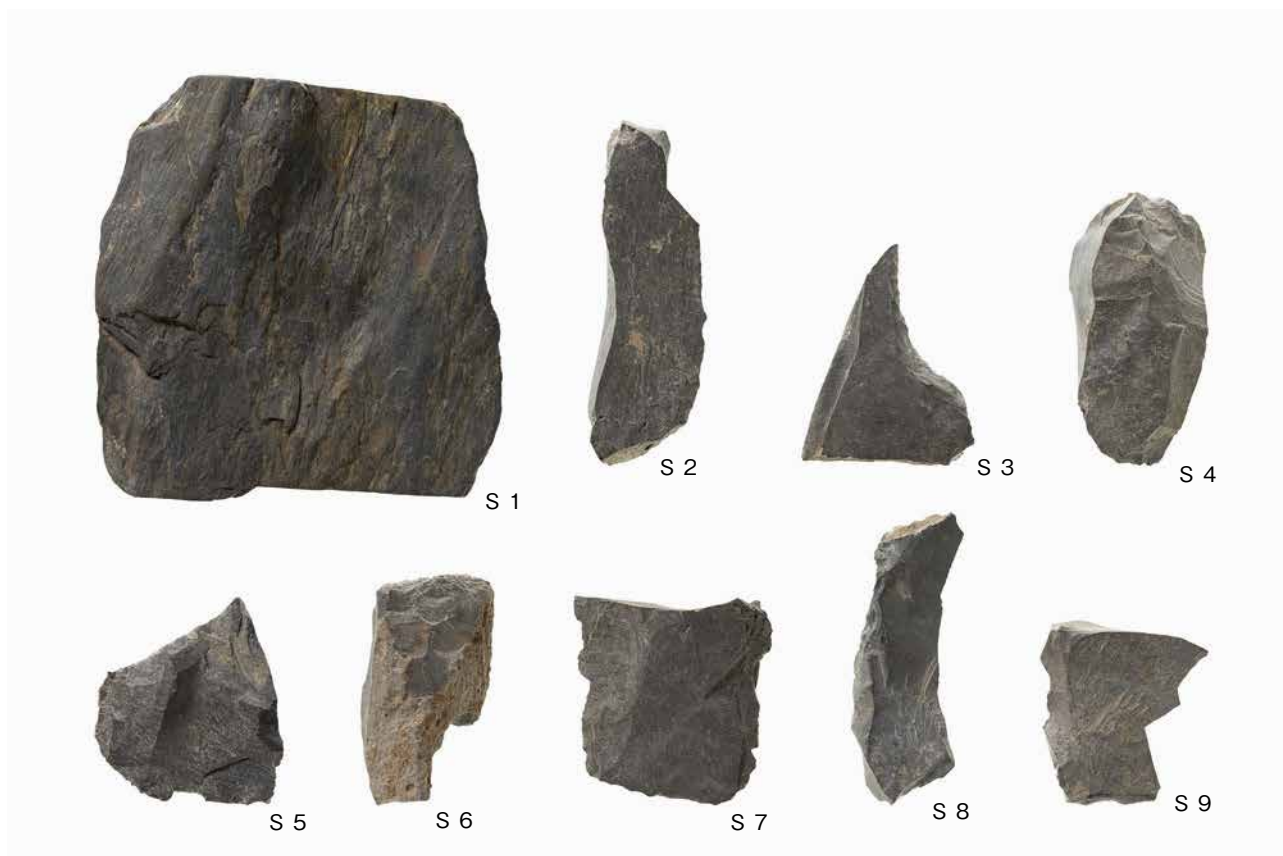
(2) 出土遺物61



(1) 出土遺物62



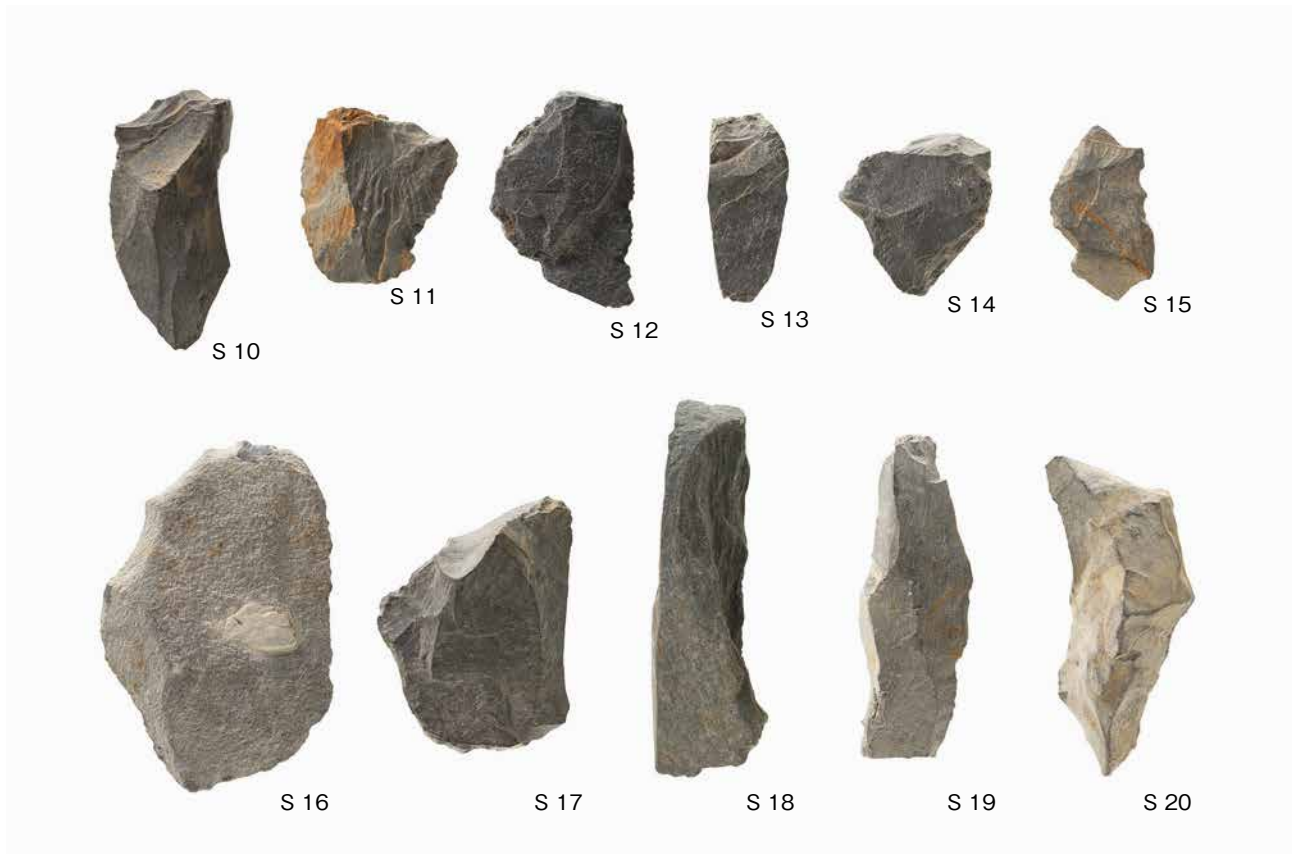
(2) 出土遺物63



(1) 出土遺物64



(2) 出土遺物65



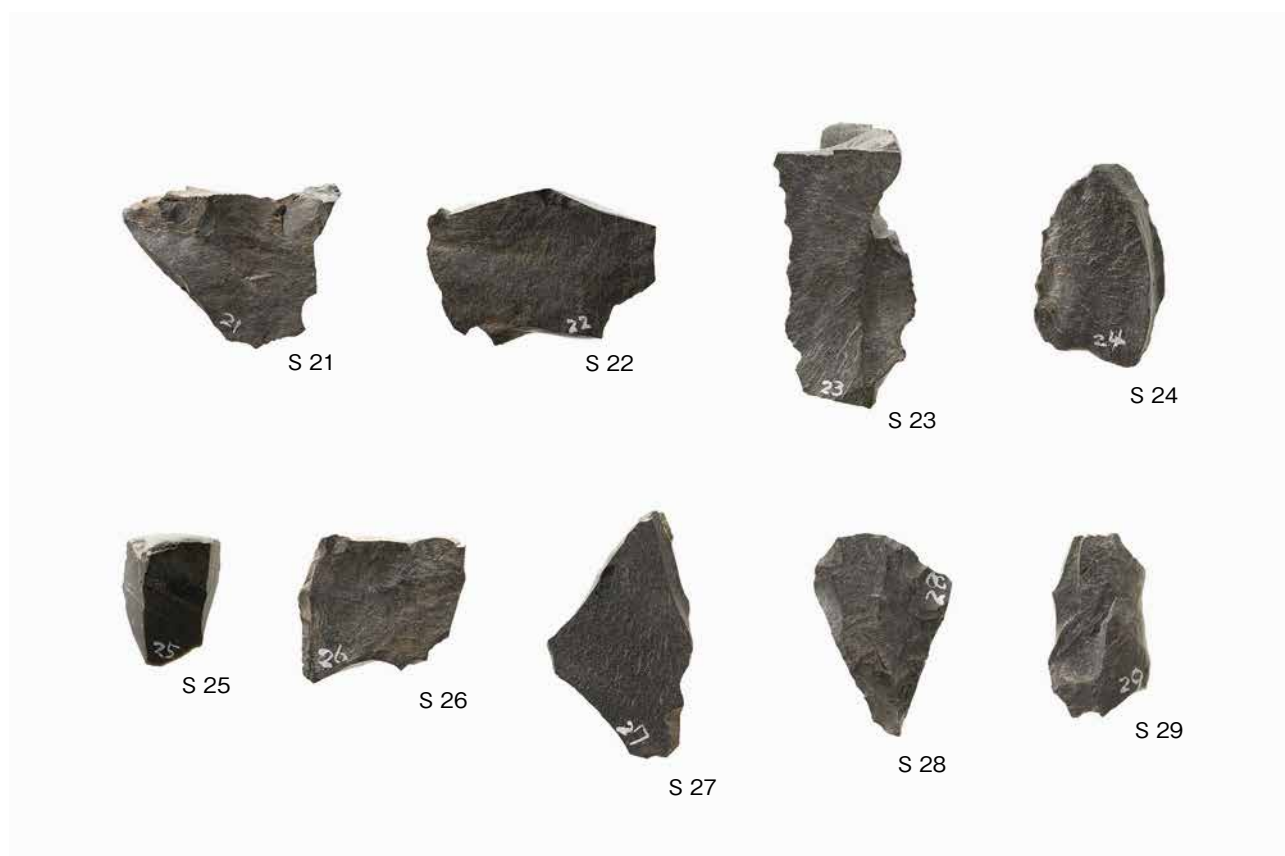
(1) 出土遺物66



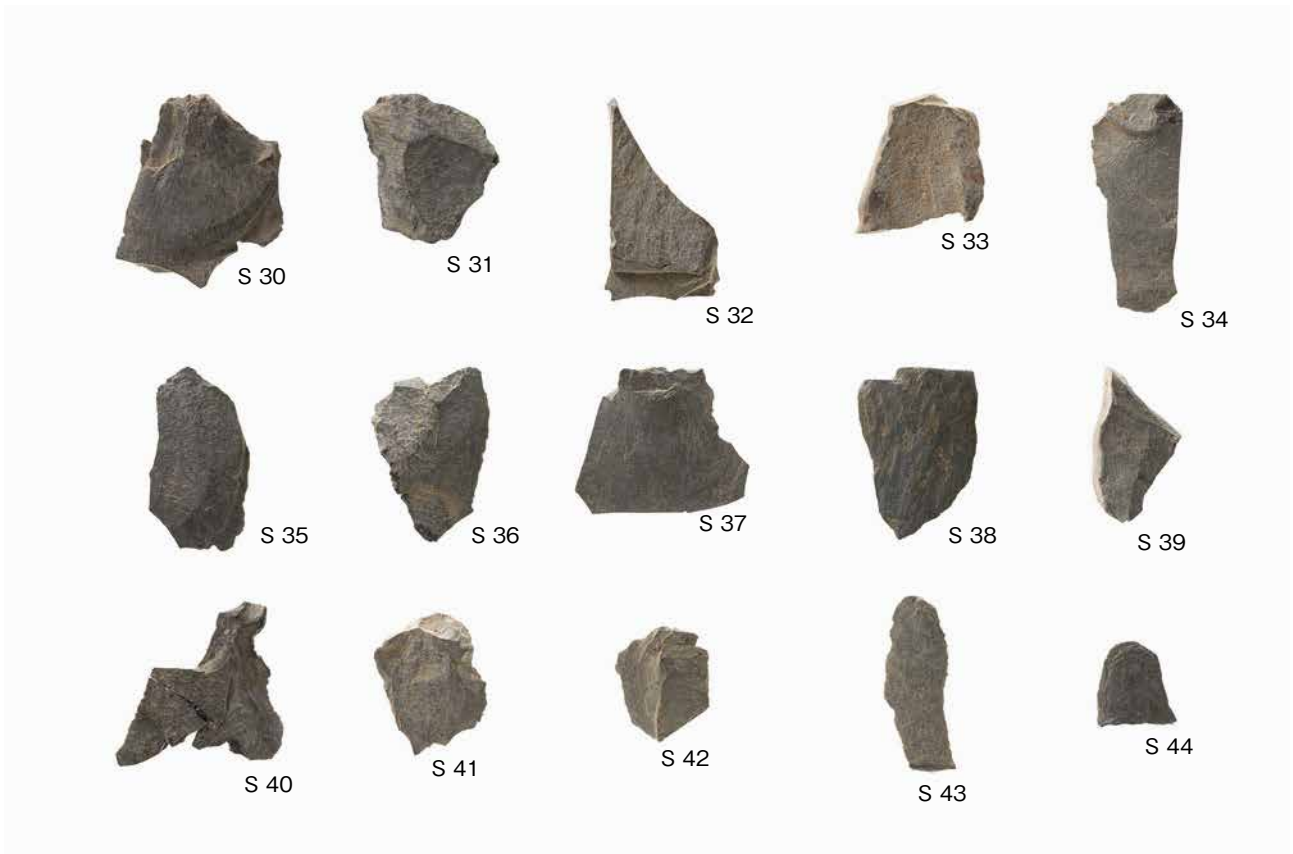
(2) 出土遺物67



(1) 出土遺物68



(2) 出土遺物69



(1) 出土遺物70



(2) 出土遺物71

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第201冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第201冊
編著者名	岩松 保、岡村美智子、面 将道、加藤雅士、加藤雄太、小泉裕司、竹原一彦、竹村亮仁、三好博喜
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel.075(933)3877
発行年月日	西暦2026年7月29日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
小樋尻遺跡 第3・5・6・ 8・11次	城陽市富野 小樋尻・久保田 寺田島垣内・新池	262072	91	34° 50' 50"	135° 46' 20" ～ 135° 47' 0"	20170502 ～ 20170726	803	道路建設
						20171225 ～ 20180228	462	
						20180423 ～ 20190227	4,963	
						20190422 ～ 20191213	2,310	
						20200420 ～ 20210302	2,777	
水主神社東遺跡 第8・11・ 13・18次	城陽市寺田 大畔・金尾		30	34° 50' 50"	135° 46' 19" ～ 135° 45' 52"	20170821 ～ 20180227	2,464	
						20180419 ～ 20181129	5,877	
						20191118 ～ 20200214	520	
						20250512 ～ 20250715	900	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小樋尻遺跡	集落	縄文時代 ～中世	縄文：谷地形 古墳：流路・溝 中世：掘立柱建物・柵列・耕作溝・島畑 時期不明：掘立柱建物・柵列・耕作溝 近世初頭：地震痕跡	縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、青磁、白磁、石器、銅銭	
水主神社東遺跡	散布地	弥生時代 ～中世	弥生：流路 中世：島畑・耕作溝 時期不明：氾濫流路	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、青磁、白磁、石器、銅銭	

所収遺跡名	要 約
小樋尻遺跡	C 4 区では縄文時代晩期の土器片や石器剥片が多量に廃棄された谷地形を検出し、縄文人が低地の中の微高地を選んで生活を営んでいたことを示す知見を得た。D 4 区では自然流路の中から古墳時代前期の土器がまとまって出土し、周辺に同時期の集落が存在する可能性が認められた。B 地区では古墳時代～中世に至るまでの間で、掘立柱建物や柵列、耕作溝などを検出していることから、集落の一部として利用されていたようである。時期の詳細は不明であるが、包含層や流路の出土遺物から、古墳時代後期の可能性がある。C 1～4 区、D 13 区では中世の掘立柱建物や柵列、柱穴、土坑、耕作溝を検出し、この時期における低地における集落の存在が確認できた。これらの集落は、その後の島畑の造営により、場所を移動したようである。島畑は13世紀頃からC 地区以西で造られており、基本的に生産地としての土地利用がなされた。近世初頭(1596)の伏見地震に伴う地震痕をB 地区を中心に確認した。
水主神社東遺跡	E 5 区では自然流路内から弥生時代の土器片が出土した。同遺跡では基本的に中世の島畑以前の遺構・遺物の検出はわずかであり、中世以前の土地利用は限定的にしかなされなかったようである。しかし中世になると遺跡の全域で、島畑が造られた。これらは、下水主遺跡の島畑も含め、条里地割に則って広範囲に配置されたものと推定される。

京都府遺跡調査報告集 第201冊

令和8年7月29日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152

